
マスケットガールズ！ ～転生参謀と戦列乙女たち～

漂月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<https://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

マスケットガールズ！ ～転生参謀と戦列乙女たち～

【Nコード】

N2112GV

【作者名】

漂月

【あらすじ】

【PASH!ブックス様から書籍1～2巻&コミカライズ1巻発売中】俺が転生したのは戦列歩兵が撃ち合う近世風の戦争世界だった。平民少尉の俺は「死神」と疎まれ、女性しかない第6特務旅団に参謀として配属される。何か企んでいる旅団長もお気楽な下士官も女性、歩兵は素人同然の女の子ばかりだ。このままだとみんな戦死しかねない。俺がどうかしないと……だがどうやって!?(連載開始：21年4月11日)

第1話「死神の大鎌」(地図あり)(前書き)

本作品は15〜18世紀のヨーロッパ・オリエントを参考にしていますが、あくまでも異世界です。現実世界とは多くの点で異なります。

本作品は「シュワイデル語の和訳」という体裁で記述されています。

第1話「死神の大鎌」(地図あり)

【第1話 死神の大鎌】

前世であっけなく死んで異世界に転生した俺は、今また死にそう
な目に遭っていた。

「撃て！」

小隊長である俺の命令で、配下の戦列歩兵五十人が一斉にマスケ
ット銃を撃つ。

「次弾装填！」

元の世界で言えば十七世紀頃の戦争風景だ。大航海時代が終わり
に近づき、植民地が各地に築かれ、絶対王政が頂点を極める時代。

それはこのシュワイデル帝国でも同じだった。

「帝国」というとなんとなく大国のイメージがあるが、百年以上続
いた戦争で領土を切り取られまくり、今では近隣の国と大差ない。
それでも過去の栄光が忘れられず、帝国領の回復を掲げて争って
いる。

何から何までクソみたいな第二の祖国だが、一番クソなのは周り
の国がほとんど異教徒で建国以来の宿敵ということだ。実際には同
じ宗教の宗派違いなのだが、それが逆に敵意を高めているらしい。

だから戦争が百年以上も続く。

敵弾がヒュンヒュン飛んでくる。隣国アガン王国の戦列歩兵たちだ。

突撃して一気にケリをつけたいが、敵の弾幕は苛烈だ。今突撃しても勝ち目はないだろう。

俺は指揮刀を掲げて怒鳴る。

「目じゃなくて手を動かせ！ 撃て！」

敵の攻撃で三々四人ほど地面にひっくり返っていたが、残りの兵は命令通り一斉射撃を行う。戦場は黒色火薬が起こす白煙でぼやけていて、何がなんだかわからない。

何がなんだかわからない状況だが、俺は小隊長としての使命を果たす。前方の敵を蹴散らさないと、俺の軍籍が査問委員会で蹴散らされかねない。

俺は再び命じる。

「撃て！」

マスケット銃兵はだいたい二十秒ごとに一発ずつ射撃ができる。

時計はないが、タイミングは体が覚えた。間に合わない兵には弾を温存させ、次の射撃に参加させる。

「くそつ、敵が減りません！ まだ四十人以上います！」

俺の補佐を務める下士官が望遠鏡を覗き、白煙の向こうに微かに見える敵兵を見ている。

別の下士官が叫ぶ。

「隊長、六人やられました！」
また二人ほど撃たれたらしい。

配下の小隊五十人のうち、「もう一割以上やられている」計算になる。

現代戦ならそろそろ逃げたくなる頃合いだが、ここは異世界の近世。「まだ九割近く残っている」のに後退などさせられない。そういう時代だ。

「た、隊長殿！ もう無理です！」

ビクついた兵士が叫ぶが、俺は無理矢理笑顔を作って笑い飛ばす。

「ははは！ 今逃げたら俺たち全員懲罰部隊だぞ！ 貴様、最前列で長槍を持って突撃したいのか！？」

「ひいひい！？ もう嫌だあ！」

情けない悲鳴をあげながら弾の装填をしている兵士。口では喚いていても、手は止まらないのが訓練の成果だ。

俺は彼の肩をポンポンと叩き、みんなに聞こえるように怒鳴る。

「あいつらをブツ殺せば俺たちの仕事は終わりだ！ 夕飯までに片付けるぞ！ この先の街を攻め落とせば酒も女も買い放題だ！」

ああ、嫌だ嫌だ。本当に品がない。士官学校では後方勤務志望だったのに、なんで俺こんなところで戦ってるんだろう。

ぶっちゃけて言えば俺は戦争なんか大嫌いだし、この世界も大嫌

いだ。帝国がどうなるのが俺の知ったこつちやない。
しかし戦わないと殺されるので、俺は殺されないうちに殺し続ける。敵も味方もだ。

「おら撃て！ 貴様らの銃は疲れ知らずの絶倫だろ！ タマ無しじやないってことをアガン人どもに見せてやれ！」

適度に下ネタジョークを交えると士気が高まるので、事前に考えていたネタで鼓舞する。命がけて戦っているときにバカみたいだが、バカじゃないと生き残れない。

敵の抵抗はしぶとい。たった一個小隊で街道の切り通しを守っている。こつちは後続に何個か小隊が来ているので、それさえ到着すれば迂回して敵を皆殺しにできる。

要するに敵の抵抗は無意味だ。時間稼ぎでしかない。

ん？ 時間稼ぎ……？

そのとき不意に、俺の首筋にゾワリと冷たい感覚が走った。

「やばい！」

俺はとっさに下士官の襟をつかみ、むりやりしゃがませた。

ほとんど同時に眼前の白煙がぶち抜かれ、何かが隊列に飛び込んでくる。砲弾だ。

「ぎゃあっ！」

「うわああっ！」

「あひいいいいっ！？」

盛大な悲鳴が聞こえる。こりゃ十人ぐらいやられたな。

俺はすぐに立ち上がると、損害状況を確認した。即死した連中は原型を留めておらず、何人やられたのかわからない。血まみれで呻いているヤツもいる。

戦えないヤツのことは後で考えることにして、生き残って銃を構えているヤツだけ数える。

三十人ちよつとか。

「た、助かりました、隊長……。よく今のを避けられましたね？」
下士官が真っ青な顔をして立ち上がってきたので、俺は彼に手を貸す。避けるのが一瞬でも遅ければ、俺も彼も上半身がどこかに消えていたはずだ。

「死神とは長い付き合いだな」

一度死んだせいか、俺は死の予兆を感じ取ることができる。首筋に冷たい刃のような感触が走るのだ。

どうしてこんな予知ができるのか全くわからないが、とりあえず『死神の大鎌』と呼んでいる。

この力がなければ、現代人の俺がこんな時代を生き延びることはできなかっただろう。

それはともかく、これ以上砲弾をぶち込まれたら小隊は全滅だ。どうせ小口径の野戦砲だろうが、マスケット銃で撃ち合いをする数十メートルの距離だと威力がありすぎる。

もつぐずししてる場合じゃないな。

だが俺はまるでこれを待っていたかのような顔をして、指揮刀を構えて走り出す。

「よし、ヤツらは切り札を使い切ったぞ！ この勝負もらった！ 総員突撃だ！」

俺の背後で下士官たちが叫んでいる。

「ああっ！？ 隊長殿！？」

「隊長を死なせるな！」

「そっ、総員突撃！ 総員突撃だ！」

歩兵にとって突撃命令は絶対だ。

「うわああああーっ！」

マスケット銃を構えた歩兵たちが白煙の中に飛び込んでいく。銃の先端には申し訳程度の銃剣……というか尖った鉄杭がついており、これで敵を刺し殺すのだ。

もちろん俺も先陣を切って白煙に飛び込んでいる。こういう状況だと、小隊長が動かないと小隊はついてこない。

我ながらメチャクチャだと思うが、俺には『死神の大鎌』がある。

白煙の中を駆けながら、とっさに右にステップ。チュンという物騒な音がして、俺の耳元を銃弾が飛んでいった。

白煙の切れ目から飛び出すと、そこは敵の戦列歩兵が待ち構えていた。

「撃て！」

敵の指揮官の号令でパパパパッと銃声が轟き、炎と白煙が視界を遮る。

だが「死神」は何も言わない。俺も倒れない。

マスケット銃の命中率は高くない。強力なバネで火打石をガンガンぶつけるせいだ。

銃身内部にライフリングを切つてないからただでさえ弾道が不安定なのに、さらに衝撃で銃身がブレまくる。だから回避など考えるだけ無駄だ。

「うおらあああっ！」

俺が指揮刀で斬り掛かる頃には、配下の小隊も敵に肉薄していた。

「死ねええええ！」

「クソ野郎があああ！」

敵もこちらの突撃は予想していただろうが、白煙のせいで射撃がまともに当たっていない。そして一発撃ってしまったら、後はもう銃剣の突き合いだ。

「殺せ殺せ！」

身も心も完全に野蛮人になって、俺は敵の下士官をぶつた斬る。下士官は兵の逃亡を阻止するのが仕事だから、こいつらを片付けると敵兵は逃げ出す。ほら逃げる逃げる。

散発的にパンパンと銃声が轟くが、あれはおそらく味方の射撃だ。弾を装填したまま走ってきて、至近距離で発砲したんだろう。いい仕事をする。

ふと気がつくと、動く敵の姿はなくなっていた。敵の死体が二十人ぐらい転がっている。残りは逃げたようだ。味方も十人ほど死んでいた。

「隊長、敵は逃亡しました。我が小隊の残存兵力は二十人ほどです」
さつき助けた下士官が報告する。

「派手にやられたな……」

実際にはもう少し生存者がいたが、彼らは腹を押さえてうずくまっていた。下士官たちが生存者にカウントしなかつた連中だ。

この世界にはまともな医療がないから、腹を撃たれたらほぼ確実に死ぬ。

せめて彼らの最期は勝利で飾ってやりたい。

俺は指揮刀を掲げ、ありつたけの大声で叫ぶ。

「我が小隊は敵小隊を駆逐し、この軍事地点を奪回した！ 俺たちの勝利だ！ 皆、よく戦った！ 敵の野戦砲を鹵獲しろ！ 後続の到着までここを守れ！」

「おおーっ！」

腹を押さえて死にかけている兵士たちも、銃を掲げて叫ぶ。

俺は彼らの一人一人の手を握り、労いの言葉をかけた。

「よく勇敢に戦った。お前は帝国軍の勇者、祖国の誇りだ」

「へへ……やって、やりま……したぜ……」

こういうのは軍国主義的で嫌なんだが、軍国主義の時代だから仕方がない。死んでいく兵士たちの尊厳を守らなければ、生き残った

兵士たちが戦わなくなる。

それに何より、彼らは本当に勇敢に戦ったのだ。隊長の俺が讃えなければ誰が讃えるんだ。

だんだん生気を失っていく兵士たちを尻目に、後続の小隊が急ぎ足で切り通しを通過していく。同じ中隊の仲間たちだ。

同僚の小隊長が騎乗したまま軽く敬礼して通り過ぎる。俺も敬礼で応じた。

さらに同じ大隊に所属する他の中隊もどんどんやってくる。切り通しを迂回できない騎兵や輜重隊の馬車も来た。次の戦いは彼らが何とかするだろう。

俺は動かなくなった兵士たちにも敬礼すると、生き残った二十人ほどの部下に命じた。

「負傷者の手当と並行して、戦死者の埋葬をする。敵も埋めてやれよ、近隣住民から苦情が来る」

俺は制帽を被り直すと、ニヤリと笑う。

「それが終わったら酒と女だ」

ああ下品だ。

【第1話交戦地点】

< i 5 3 4 3 3 5 | 3 5 6 7 8 >

第2話「死神参謀」

【第2話 死神参謀】

切り通しの攻防からしばらくして、俺は後方の第五師団司令部で師団のお偉いさんと向き合っていた。

相手は雲の上みたいな存在なので、俺は緊張しつつ敬礼する。

「ユイナー・クロムベルツ歩兵少尉、招集命令により参上しました」

元の世界とは階級の価値が少し違うが、少尉が士官のスタートラインであることは変わらない。下っ端指揮官として小隊長をやらされるのも同じだ。

士官学校の同期にはもう中尉になっている連中もいるが、俺は平民出だから全然昇進しない。退役までに大尉になれば大成功だなと思っっている。

そう思っていたが、お偉いさんの話はその辺りに絡んできそうな心配だった。

「先日のアガン軍との交戦で、君の小隊は壊滅的な損害を受けたぞうだな」

「はっ、任務を全うした結果であります」
嘘じゃない。

狭い場所だからといって一個小隊で攻略させた大隊長が悪い。迂回挟撃用にもう一個小隊派遣していれば、あんなことにはならなかった。

大隊長は敵主力を防ぐために本隊を厚くしたが、そのために分遣隊をケチった。

兵力をケチると大勢死ぬのは士官学校で習ったはずで、大隊長の采配がまずかったことに変わりはない。

「報告書は受け取っている。困難な任務を全うしたと、大隊長も激賞している」

「そりゃどうも。三十人も死んだのはあいつのせいだよ。無能貴族め。」

お偉いさんは俺の内心を察したのか、微かに溜息をつく。

「君の第三小隊は解散し、第一・第二小隊の欠員補充に回すことになった。君は小隊長の任を解かれる。君の戦功は明らかだが、口さがない者たちは君を『死神』と呼んでいるな」

「よく存じております」

だから俺のせいじゃないんだってば。

お偉いさんはもっともらしい顔をして、同情するような口調で言う。

「戦功があるのに任を解かれるのは君も不本意だろう。せめて昇進させてやりたいが、いきなり中尉という訳にもいかん」

「子供の戦争ごっこじゃないから、こっちも昇進なんて期待してない。」

軍の階級はそんなに数がないので、一回の小競り合い程度で昇進

していたらあつと言う間に大将になってしまふ。あ、いや、シユワイデル帝国には将官の階級がないから准将から大将まで全部まとめて「將軍」だな。

だから普通に考えたら勲章のひとつでももらっておしまいというところだが、それなら俺を師団司令部まで呼びつけたりしないだろう。

そう思っていると、やはり妙な雲行きになってくる。

「ところで君は作戦立案能力が高そうだな」

何言ってるの？ 俺は突撃しか能のない前線指揮官だよ？

とは思つが、こういうときには肯定するしかないことを俺は前世で知っている。要するにこのおっさんは「そういうこと」にしたいのだ。

「はっ！ 作戦立案には自信があります！」

「よろしい。それに実戦経験、統率力も十分だ。部下の教育にも長けている。そうだな？」

「はい、その通りであります！」

ああ、軍隊ってこれだから嫌いだ。

俺がクソ貧民の家に転生してなけりゃ、こんな野蛮なところから給料もらわなくても良かったのに。

近世の軍隊などという陰惨極まりない組織について考えていると、

お偉いさんはうむむととなずく。

「では君を参謀にしてやろう。どうかね？」

どうかねって言われても、それ命令なんでしょう？ 知ってるよ、それぐらい。

「はっ！ 謹んで拝命いたします！」

「よろしい。では本日付で、えー……クロムベルツ歩兵少尉を参謀に任じる。参謀肩章を授与する」

「はっ！ より一層、軍務に精励いたします！」

やったー。参謀だ。嬉しいな。

……あんまり嬉しくはないが、これで指揮刀で敵の頭を力手割る仕事からはおさらばできそうだ。

ただ問題なのは、参謀は独立した職位ではないということだ。

シュワイデル帝国軍の上級将校はほとんど貴族出身だ。教育水準は高いが、指揮官としての適性を持っている者ばかりではない。

そこで軍務のアドバイザーとして参謀がつく。上から降りてきた無茶な命令を、どうやって実行するのか提案する仕事だ。あくまでも「提案」なのであまり偉くない。

で、俺は誰の参謀になるんだ？

うちの第五師団は参謀などの幕僚ポストをリトレイユ公の派閥がガッチリ囲い込んでいる。平民出身の俺なんかお呼びじゃない。

他の師団に飛ばされるんだろうか。でもどの師団司令部も門閥貴族の巣窟だぞ？

するとお偉いさんは用件は終わりだと言わんばかりに告げる。

「君は第六特務旅団に転属になる。旅団長直属の参謀だ。まぎれもない栄転だぞ」

栄転かなあ？

我が帝国の旅団は師団より小規模で、臨時編成されたものが多い。もともと変則的な編成が多いのだが、「特務」つてのが気になるな。響きはいいが、正規の旅団ではないということだ。

どうも不穏な気配がするぞ。

だがお偉いさんは何も説明してくれず、書類の束を俺に突き出した。

「行けばわかる」

なんだかわからないけど、旅団付の参謀なら立派なもんだ。

まあいいか。着任命令書を見せて輸送隊の荷馬車にでも同乗させてもらおう。

そう思って官舎の一室で荷造りを始めた俺だったが、当番兵が慌てて駆け込んできた。

「少尉殿、お迎えの馬車です」

「お迎えの馬車？」

頼んでないぞ、そんなもん。

第3話「軍服の令嬢」

【第3話 軍服の令嬢】

俺は馬車に乗り、陸軍第五師団の正門を出ていく。もう戻ることもないだろう。

別に愛着もないし、それは別にいい。待遇も居心地もあんまり良くなかったし、何より飯が不味かった。軍隊では深刻な問題だ。それより問題なのが、この馬車だ。

俺が乗っているのは荷馬車ではない。というか、軍の馬車ではない。

立派な内装、快適な革張りのシート。悪路を走っている割に振動も小さいし、防音性も高い。明らかに金持ち貴族が私有している馬車だ。

俺の対面に座っているのは、軍装の美女。

ただし本物の軍人ではない。羽織っている上級将校用のコートには、階級章の代わりに紋章があしらわれている。

あれは国内屈指の大貴族、リトレイユ家の紋章だ。第五師団を牛耳る門閥貴族のトップでもある。

そして彼女が履いているのは将校用の乗馬ズボンではなくロングスカートだ。もちろん制服ではない。

早い話が、ミリタリー風のコスプレをした変な美女ということになる。

そして俺は今、この変なコスプレ美女と二人きりだった。

「クロムベルツ少尉殿、ですね？」

「はっ、ユイナー・クロムベルツ少尉であります」

「お会いできて光栄です」

微笑みながら美女が軽く会釈する。

聞き取りやすい、ゆったりとしたしゃべり方だ。典型的な貴族のしゃべり方だな。

年齢は二十ぐらいか。俺と同年代だ。

穏やかな雰囲気顔立ちで、細いたれ目が印象的だ。漫画にしたら糸目キャラになるだろうな。

馬車の外には護衛の胸甲騎兵たちがいる。かなりの重武装だったが、軍人ではなく貴族の私兵だ。制服が違う。

どうにもヤバそうな雰囲気なので、口の利き方には気をつけることにしよう。

俺は無言で軽く敬礼。下級将校の悲しい習性で俺はシートの端に詰めており、肘を張った敬礼はできない。

そういえばこの美女、シートの真ん中にゆったり座っているな。物腰ひとつ取っても軍人らしさがない。

すると美女は窓の外を眺めながら尋ねてくる。

「馬車の乗り心地はいかがですか？」

「大変快適であります。感謝いたします」

頼んでもいないのに、こんな豪華な馬車が官舎の前で待っていたからびつくりしたぞ。銃で武装した胸甲騎兵が随伴してたし、何かの手違いとしか思えなかった。平民上がりの少尉とは無縁の待遇だ。どうも嫌な予感がするな。理由もなく待遇が良いときは用心した方がいい。これは前世も今世も変わらない。

「少尉風情が民間の馬車に御厚意で乗せていただけるとは。帝国軍人に対する親愛の証と感激いたしました」
すると美女はにっこり微笑む。

「当家はシュワイデル帝国の発展と領土回復のため、将校の皆様には惜しみない尊敬と支援をいたしますわ」
おおっと。皮肉だったのに軽く流されたぞ。なんかヤバそうな人だな。

美女は続けてこう言う。

「中でも将来有望な若手の将校様には、より手厚い支援をいたしますよ」

なんだなんだ、俺を懐柔して何かさせるつもりか？ お断りだ。
「それは羨ましいですね。小官もそう思われるように精励いたします」

うまいことはぐらかしたつもりだったが、コスプレ美女は粘つくまわりついてきた。

「私はクロムベルツ殿こそ、帝国の未来を担う真の軍人であると認識しております」

「大変畏れ多いことですが、小官はそのような人材ではありません」

やべえ。早く逃げたい。貴族様が少尉風情にこんな接触をしてくるってことは、ほぼ確実にろくでもない用件だ。

しかし馬車の外に逃げ出すのは無理だろうし、騎兵たちが前後左右を固めている。

「クロムベルツ少尉殿は、『死神』の異名を持つ猛将だと聞き及んでおりますよ？」

「確かに『死神クロムベルツ』と呼ばれることはありますが、それは単に部下の戦死が多いだけです」

美女は興味深げに俺を見つめる。

「それはクロムベルツ殿の勇猛さゆえ、でしょうか？」

「小官はそのようには考えておりません」

俺みたいな平民上がりの将校は損な役回りを押しつけられることが多い。

俺は陸軍士官学校でもうまく馴染めず、どこの派閥にも入れなかったからおさらだ。要するに俺は前世同様にぼっちで、政治力ゼロの将校だった。

さすがにそれを認めるのは情けなかったので適当にごまかしたが、美女はまだ俺を見つめている。

「いずれにせよ、クロムベルツ殿の軍功は第五師団でも有名です。先日もアガン王国の野戦砲陣地に突撃し、敵を蹴散らして野戦砲を鹵獲したとか」

それから彼女は指を折りながら、俺の過去を暴き始めた。

「過去の戦いでも皆の防衛に成功しておられますよね。敵の大軍を三日間足止めし、救援まで持ちこたえたと聞いております」

あれは立てこもってるだけで良かったから楽だったが、弱気になる部下たちを励ましたり脅したり忙しかったのを覚えている。あのときも部下がだいぶ死んだな。

「それにクロムベルツ殿は、士官学校時代から盤上演習では無敗だったとか」

「あんなものはお遊戯です」

士官学校の盤上演習は設定がガバガバだったからな。

高低差を利用した崖撃ちでは無茶苦茶な損害を与えられたし、士気崩壊判定がなかなか起きないので自軍を捨て駒にできた。前世のウォーゲームの方がよっぽどリアルだ。

「あと剣術の試合でも常に上位だったそうですね」

「試合は実戦とは違います」

実は俺、前世では強豪剣道部の補欠だった。個人戦はいつも三回戦負け、団体戦の戦績はゼロという栄光の補欠だ。あまり強くないのは俺自身がよく承知している。

だが美女は俺の言葉に納得していないようで、俺の腰の指揮刀をじっと見ている。

貧乏少尉の俺だが、指揮刀の柄だけは少し金をかけている。両手で握れるように長い柄を特注していた。

刀身は消耗品と割り切り、手頃な物で我慢している。折れたり曲がったりしなければそれでいい。

美女はなおも言う。

「実戦でも多くの武勲がおりでしょう？ 珍しい剣術をお使いになると聞いています」

「平民上がりの汚い喧嘩剣術です。お見せするほどのものではありません」

しょせん部活レベルの剣道だから大したことないが、両手剣の打ち込みは意外と鋭くて重い。てこの原理まで利用しているのだから当たり前だ。

だが戦場で両手剣が使われなくなって久しいので、両手剣との戦い方を知っている者は少ない。

だから有利に戦える。それだけだ。

それにしても居心地悪いな。

目の前の軍服コスプレ美女は間違いなくリトレイユ家の一員だ。それもただの貴族令嬢ではない。おそらくは当主に近い権限を持つ人物だろう。馬車と騎兵を見れば想像はつく。

貴族将校は実家とつながりが深く、門閥を作って同じ師団に集まる傾向がある。第五師団はリトレイユ公を筆頭とするグループが要職を独占しているから、おそらく裏で何かあったんだろう。

だから俺は少しきわどい質問をぶつけてみることにした。

「この馬車、本当に第六特務旅団の本部に向かってますか？」

第4話「第6特務旅団」(地図あり)

【第4話 第六特務旅団】

俺の冗談に、美女はあくまでも真面目に返してきた。

「それは保証します。私も同じ方向に用がありますから、クロムベルツ殿をお送りするのは、あくまでも『ついで』ですよ。含むところはございません」

そう言われたら信用するしかない。

考えてみれば、彼女が俺を殺すつもりなら俺の反撃も警戒するだろう。現役軍人の俺と二人きりになるはずがない。

むしろ俺を安心させるために、敢えて二人きりの空間を作ったとみるべきか。

すると美女は不意に話題を変えた。

「クロムベルツ殿は第六特務旅団について、どれぐらいご存じですか？」

「何も存じておりません」

「旅団長のことも？」

「はい、何も」

「そうですか」

おい、そこで黙るな。それは気になってるんだよ。

すると美女は俺の内心を見透かしたかのように笑う。

「第六特務旅団は今後、帝国軍の中核を担うと私は信じております」
そりゃ信じるのは自由でしょうけど、そもそもあんたは誰なんだ？

しかしそのとき、馬車が静かに止まった。まだ目的地には着いていないが、美女が立ち上がる。

「私はここで失礼します。いずれまた、お目にかかりましょう」
その言葉が何を意味するのか俺にはわからなかったが、俺はわかつたような顔をしてとりあえずうなずいておいた。
でも名前ぐらい言ってから行けよ。

* * *

その後、馬車は約束通り第六特務旅団の司令部に到着する。

「やっと着いたか……」
馬車から降りた俺は、あまり立派ではない城門の前に立っていた。
周囲は深い森と山々だ。他には何にもない。

< i 5 3 4 3 6 5 — 3 5 6 7 8 >

軍の地図でもこの辺りには何にもない。帝国南部を東西に横断する山脈のど真ん中で、守るべきものが乏しいのだ。こんな険しい山奥ではおちおち戦争もできやしない。

ここに帝国軍の旅団が駐屯しているとは知らなかったが、こんな場所に旅団を置いて何がしたいんだろう。

それにこの城、見た目は奇麗だが実戦には耐えられそうにない。

高い城壁と尖塔。日本人だった俺が思い描く「西洋のお城」のイメージそのまんまだ。

あれは投石器や攻城梯子で戦争していた中世の城だ。火砲による攻撃を想定していないから、攻城砲を並べられたら半日で陥落するだろう。

そして正門には「陸軍第六特務旅団本部」の看板。

軍隊、それもシュワイデル軍で「特別」とか「特務」とかを見た場合、ちよつと用心しなければならぬ。要するに普通ではないからだ。俺は「普通」や「標準」の方が好きだな。

俺がぼんやりしていると、城門が開いて大柄な下士官が飛び出してきた。

「こらーっ！　そこで何をしているんですか！」

若い女性の声だ。女性の下士官は初めて見た。

それにしてもずいぶんとデカいな。俺より背が高い気がするぞ。

肩幅も広くて逆三角形のアスリート体形が実に美しい。

大柄な女性下士官はのしのしと歩み寄ってくる。

「その民間人丸出しのあなた！　ここは民間人の立ち入りは禁止なんです！　観光地じゃないんですよ！　すみませんが退去してください！　ていうか、さっきの馬車はどこです？」

俺、民間人でも観光客でもないんだけど。

ああそうか、私物のコートを着ているのでそう見えるのか。いやでも一応、下は軍服だし指揮刀も吊ってるぞ。

目の前に迫ってきたデカ女……失礼、長身の女性下士官に、俺は襟章を見せた。

「参謀少尉のクロムベルツだ。ここの配属になった。既に連絡が来ていると思うが」

「えっ!? えええっ!? これはっ、しっ、しっつれいいたしました!」

慌てて直立不動で敬礼する女性下士官。

「わた、いえ自分はハンナ・ハイデン下士長でありますっ!」

『下士長』はこの世界独自の階級だが、だいたい曹長ぐらいの地位だ。下士官たちのまとめ役になるベテランで、少尉の代わりに小隊長を務めることもある。

こんな若い女の子が?

……やばい。ここやっぱり普通じゃないぞ。

俺は内心の不安を悟られないよう、指二本で軽く答礼した。

「私物のコートのせいで紛らわしかったな。済まない」

「いえっ、いえいえっ! もも、申し訳ありません、クロムベルツ少尉殿!」

いいリアクションするなあ。俺よりデカいけど、なんか可愛い。

俺は師団司令部で預かった封筒を取り出す。

「これが命令書だ。旅団長閣下に着任の報告をしたい。悪いが案内してもらえるか、ハイデン下士長?」

「はい、今すぐ! あっ、お荷物お持ちします!」

「いや、女性に荷物を持たせる訳には」

「いえいえ、上官のお荷物を持たない訳には」

しばらく不毛なやりとりをした後、彼女の迫力に負けてトランクを預けることにする。シュワイデル軍の慣習としてはハンナが正しいのだが、女性兵士なんて見たことがなかったからどうにも慣れない。

「では御案内します！」

紅潮した顔で鼻息荒くハンナが言い、ずっしりと重いトランクを軽々と肩に担いだ。見た目通りの力持ちだ。負けそう。

「参謀少尉殿の着任です！ 城門を開けなさい！」

ハンナの命令で衛兵たちが慌てて城門を開く。みんな若い女の子だ。

やっぱりここヤバくないか？

第5話「アルツァー大佐」

【第5話 アルツァー大佐】

城内には女の子しかいなかった。みんな若い。十代や二十代の子ばかりだ。

もしかしてこの旅団長は、女好きのゲスい貴族将校か何かなんだろうか。女性兵士ばかり集めてハーレムを作っているとか……？想像するだけで気持ち悪い。

嫌だなあ。参謀は補佐する指揮官との距離が近いから、性格が合わないときは地獄だぞ。

「こちらですよ、少尉殿」

「あ、ああ。ありがとう」

寒々とした長い廊下の奥に旅団長室があった。
ハンナがドアをノックする。

「旅団長閣下！ ハンナです！」

「聞けばわかる」

あれ、若い女の子の声だ。まさか旅団長まで女の子か？

俺の動揺をよそに、ハンナが告げる。

「クロムベルツ少尉をお連れしました」

「ああ、もう来たのか。入ってくれ」

旅団長室に通された俺を待っていたのは、長い黒髪の若い女性だ。

ハンナより少し年上だが、それでも二十代なのは間違いないだろう。こんな子が旅団長とは。

おっと、敬礼しなきゃ。

「失礼いたします。ユイナー・クロムベルツ参謀少尉であります。転属命令により着任いたしました」

美しい黒髪の旅団長閣下は立ち上がり、軽く敬礼する。

「この第六特務旅団を預かるアルツァー・メディレン大佐だ。軍の慣習上、正式な名乗りは省略させてもらう。聞きたいかな？」
「遠慮しておきます」

シュワイデル帝国貴族のフルネームは長いから覚えきれない。両親の家系とか一族での地位とかが全部わかるようになっていて、とにかく長い。

「そうそう、姓はあまり呼ばないように頼む。『家庭の事情』というヤツなんだ」

「承知いたしました、アルツァー大佐殿」

「はあ、『家庭の事情』か。メディレン家というと、リトレイユ家に並ぶ帝国屈指の名門だな。どうせ分家筋のお嬢様だろうけど色々あるんだろう。」

「ありがとう。ようこそ、クロムベルツ少尉。貴官を歓迎する」
それから彼女は黒髪を揺らし、俺に問う。

「旅団長が女で驚いたか？」

「いえ」

言われてみればシュワイデル軍で女性士官は初めて見たが、前世の感覚だと女性の上司ぐらい驚くことじゃないからな。

「こちらが転属命令書と小官の軍務経歴書です」

俺が全く驚いていないのが、アルツァー大佐には少し珍しかったようだ。不思議そうな顔をしている。ちょっと可愛い。

「ええと……御苦労だったな。長旅で疲れただろう？」

「いえ、念願の参謀職ですから張り切っております」

あまり堅苦しくするのも良くないかと思い、そう言って笑ってみせる。

アルツァー大佐はうんうんとうなずいた。

「それなら良かった。貴官には専用の執務室と寝室を用意している。当番兵に貴官の身の回りの世話をさせたいが、風紀上の観点から少し悩んでいてな」

「それは自分でします。お気遣いありがとうございます」

ここにいるのは女の子ばかりのようだから、変な誤解があると俺も困る。

俺の答えにアルツァー大佐は満足そうに笑った。

「貴官は紳士だな。ところで、こちらに来る途中で変な女に会わな

「かったか？」

「会いました」

「迷わず即答する。」

するとアルツァー大佐は軽く溜息をついた。

「やはりあの女か……。当ててみせようか、リトレイユ公だろう？」

「はい、リトレイユ……。リトレイユ公ですか!？」

あのコスプレ女、リトレイユ家の当主なの？ あんな若い女性が？

確認しておこう。

「リトレイユ家の家紋入りの軍服を着た二十ぐらいの美人で、ちょっと糸目っぽい感じでした」

「そう、そいつだ。彼女は軍人ではなく政治家だが、黒い噂の絶えない要注意人物だ。よく正直に教えてくれたな」

そりゃ俺の給料はリトレイユ家じゃなくて帝国軍から出てるんだから当然だよ。

「小官は軍人ですので」

「大変結構だ。うん、だんだん貴官が気に入ってきた」

フツと笑うアルツァー大佐。リトレイユ公と違って、アルツァー

大佐の笑みは悪い気がしない。

彼女たちの関係はわからないが、俺はアルツァー派でいこう。

大佐は俺の経歴書をパラパラとめくり、ふむふむとうなずく。

「ユイナー・クロムベルツ……。クロムベルツは聖名か。非礼を承知で聞くが、姓を記載しない事情は？」

「幼い頃に親に捨てられましたので姓がわかりません」

「ああ、なるほど。すまない」

「いえ、お気になさらずに」

聖名というのは帝国国教団から与えられた名で、出身地と聖名がわかれば教区台帳で身元を証明できる。普通は省略するが、俺みたいに姓がない者は便宜上これを名乗る。

「弱冠十五歳で士官学校の入学試験に一発合格か。……その割には卒業時の成績は今ひとつだな」

「平民出身ですと色々ありますから」

貴族の子弟たちと競えば陰湿な嫌がらせを受ける。彼らは平民と貴族は別種の生き物だと本気で思っているのだ。競争そのものが許されない。殺されなかっただけでもマシだ。

「卒業後は歩兵少尉に任官し、以降ずっと戦列歩兵の小隊長か」

「はい。本当は主計科を希望したんですが、通りませんでした」

主計科の士官は経理が主な仕事だが、シュワイデル軍では兵站や統計など雑多な業務を幅広く受け持つ。事務系の技術士官だ。

俺は前世では数学が今ひとつだったが、さすがにシュワイデル帝国の平民としては相当にできる方に入る。秀才が集まる士官学校でも平均以上にはできた。

問題だったのは俺の生まれだ。

「平民出身の将校は何を勉強しようがだいたい歩兵科に配属される
そつです。後方勤務の主計科は貴族の跡取りだらけでした」

「そつだろうな。不服か？」

ちらつとアルツァー大佐が俺を見てきたので、俺は渋い顔をしながらも答える。

「いえ、優秀な頭脳を平民同様に戦死させる訳にはいきません。彼らの脳味噌には金がかかっていますから」

あいつら大金を積んで、超一流の学者に個人授業をしてもらっただぞ。ニュートンやケプラーみたいな連中が家まで教えに来る……らしい。

そのときに支払われる莫大な授業費のおかげで、学者たちは存分に研究に打ち込める。だから「貴族はズルい！」と憤慨するのも少し躊躇われた。

アルツァー大佐は苦笑してみせた。

「貴官は物わかりがいいな」

「合理的であろうとしているまでです」

「大変結構だ。ますます気に入ったぞ」

嫌味だろうか？ 初対面だからわからん。

しかしこの人、苦笑してても可愛いな……。いい上司を手に入れ
たかもしれない。

第6話「五王家」

【第6話 五王家】

アルツァー大佐はさらに書類をめくる。

「しかし毎度毎度、派手に戦功を立てているな。なんでまだ少尉なんだ？」

「平民ですから……」

もう説明するのが面倒になってきた。

しかしアルツァー大佐は薄く笑う。

「確かに平民出身の貴官は『五王家』のいずれにも属していない。栄えある我が帝国軍において、五王家の後ろ盾がないことは出世の妨げになる」

『五王家』はシュワイデル帝国建国時から続く名門だ。この地を征服した五人の騎士の末裔ということになっている。

メディレン家やリトレイユ家は五王家のひとつであり、宗家の当主は帝位継承権を持つ。ただしあくまでも名譽的なもので、実際に即位したことは一度もない。

この五王家の権威は絶大だ。どれだけ金や土地を持っていても、五王家との血縁を証明できなければ貴族とは認められない。

だから貴族たちは五王家との関係を重視し、五つの門閥を形成していた。

もつとも、平民でも結婚や養子縁組を使えば貴族になれる。同期の平民将校の中には貴族出身の嫁さんをもらったヤツもいた。それなりに幸せそうだ。昇進も早く、みんな中尉になっている。

「そついえば貴官、結婚はしていないのか？」
「独身です」

実を言えば俺にも縁談は多少来ていたのだが、全部断つた。

結婚すれば、嫁さんの実家の利益のために働くことになる。嫁さんの実家には頭が上がらないし、一族の中では「あの平民」ぐらいの扱いだという。

ギスギスした身内付き合いはもう懲り懲りだ。

だから俺は正直に答える。

「そついう面倒は苦手です」

「なるほどな。まあ今後は第六特務旅団が貴官の面倒を見る。政争からは遠い旅団だから安心してくれ」

「それは助かります」

するとハンナがそつと寄ってきて、身を屈めながら耳元でぼそぼそささやく。

「旅団長殿の御実家は『薬指』、つまりメディレン宗家ですよ」

「宗家！？ 同名の分家じゃなくて!？」

俺が思わず叫ぶと、アルツァー大佐が苦笑する。

「そうだ。困ったことに家督の継承権も持っている。序列は低いが」
「それはさすがに驚きました」

五王家の中にも儀礼的な序列があり、五指に例えられることがあった。

メデイレン宗家は序列第四位の『薬指』だ。第四位とはいえ、分家筋や旧家臣団など何十という門閥貴族の家を従えており、途方もない影響力を持っている……らしい。

「私は先々代の後妻の子でな。現当主は私の甥になるが、四十四歳だ。ちなみに私は二十二歳なので誤解はしてくれるなよ？」

「……なるほど」

二十二歳年下の叔母か。現当主もやりづらিদらうな。

しかし先々代の当主、頑張ったなあ……。

俺が失礼なことを考えていると、アルツァー大佐は溜息をつく。

「私になるべく姓を伏せるようにしているのは、当主殿に迷惑をかけたくないからだ。貴官のように聖名を名乗った方が良いかもしれない。いや、しかしな……」

なんか悩んでる様子だったので、思わず質問してしまつ。

「大佐殿の聖名は何ですか？」

すると大佐は少し恨めしげな顔をして俺を見た。
「笑うなよ？ 『ナイツアー』だ」

アルツアー・ナイツアー。

「ふふっ」

思わず笑ったのは俺ではなくハンナだ。

アルツアー大佐は露骨に不機嫌な顔をする。

「笑うなと言っただろう。名前が『アルツアー』なのに、わざわざ韻を踏んで『ナイツアー』にしなくてもいいだろうに。私の名前は詩ではないのだぞ。忌まわしい教区大神官め」

俺も危うく笑いかけたが、どうしても日本語で読んでしまうのでそれは許してもらいたい。転生者の悲しい宿命だ。
それにしても、あるのかないのかどっちなんだよ。

『五王家』周辺は巨大な権力と富を持っているので、ちょっとした言動が命取りになる。帝国貴族名鑑は「変死」した貴族だらけだ。
アルツアー大佐はそれを警戒し、敢えて権力から遠ざかることで保身を図っているのだろう。

そんな大佐は不機嫌そうだ。

「ハンナ、貴官は私の聖名を知っているだろうか？ なんて毎回笑う

んだ」

「し、失礼しました！ ふっ、ふふっ……」
ハンナが敬礼しながらプルプル震えている。

アルツァー大佐は溜息をつきながら立ち上がる。あれ、意外とちっこいな？

シュワイデル人は身分によって体格がだいぶ違うが、五王家の間なら体格には恵まれているはずだ。でも見た感じでは百五十センチ足らずだろう。平民女性の水準だ。

俺は路上生活時代に危険を冒してタンパク質を摂っていたおかげか、身長はたぶん百八十センチぐらいある。ハンナは俺より数センチ高い。いずれも平民としては珍しい長身だ。平民は男性でも百六十ぐらいしかない。

大佐はじろりと俺たちを睨む。

「なんだ？」

「いえ……」

「私が小柄なのは母親譲りだ。父は小柄な女性が好みでな」
先々代のメディレン家当主、晩年にやりたいこと全部やった感がある。

ちっこい大佐はそれでも威風堂々と俺に歩み寄り、下から俺を見上げた。見上げているのに威圧感があるのは、さすが貴族というべきか。

そして彼女は真顔で言う。

「貴官、体よく厄介払いされたな。参謀だろうが少尉は少尉だ。そしてここでは戦功を立てようがない。そして私は貴官を手放すつもりはない」

「そのようですが、小官はそれで構いません」

「本当にいいのか？」

アルツアー大佐は少し意外そうな顔をした。

「この旅団は空っぽの箱だ。本来なら複数の連隊を指揮下に置くべき旅団が、戦列女子歩兵の一個中隊百五十人しか備えていない」

なるほど。『五王家』の直系が預かる部隊だから、形だけ旅団にしてあるんだな。

そういつの好きだよ。

俺が動じていないのが不思議なのか、アルツアー大佐は俺を試すように言う。

「貴官はこれから定年まで女軍人たちの世話をして過ごすことになる。男性士官にとっては屈辱だと思っただが……」

いいじゃん。

めっちゃくちゃいいじゃん。

最高の職場を手に入れたぞ。

興奮してきた俺はビシッと敬礼する。

「いえ、苦勞して戦ってきた甲斐がありました。任務に精励いたします」

露骨に困惑している大佐。

「本気で言ってるのか？」

「もちろん本気です」

やっぱり異世界転生は最高だな。

大佐はまじまじと俺の顔を見つめ、珍獣でも見つけたかのような表情になる。

だがすぐにフツと笑った。

「ようやく『当たり』を引いたようだ」

「はい？」

すると大佐は微笑んだまま、こう言った。

「貴官のような変わり者をずっと捜していた。改めて貴官に要請する。私の参謀になってくれ」

よくわからんが歓迎されてるようだ。

俺はすぐさま直立不動で敬礼した。

「はっ！ 誠心誠意お仕えます！」

「ありがとう、期待している。貴官の経験と知識を見込んで頼みたいことがある」

「なんなりと」

やっと俺にも運が向いてきたぞ。

第7話「最初の任務」

【第7話 最初の任務】

「まず最初に貴官に頼みたいのは兵の教導だ」

アルツァー大佐旅団長は窓の外を示す。

「麾下の女子中隊は基礎的な教練を終えているが実戦経験はない。戦わせるつもりで徴募した訳ではないから当然だが」

「では何のために？」

俺が問うと、アルツァー大佐は微笑む。

「クロムベルツ少尉、姓もわからぬ貴官は裕福な家の出ではないな？」

「ええまあ、父は酒浸りのクズでしたから。母は男を作って逃げて、気がついたら小官は路上暮らしでした」

アルツァー大佐は真顔でうなづく。

「よく生き延びられたな」

「路上暮らしをしていたときに、軍隊上がりの爺さんと意気投合しました。二人でいろいろやって稼ぎましたよ」

「で、その老人の勧めで士官学校に入ったんだな？」

「その通りです」

アルツァー大佐は少し気の毒そうな表情をして、小さく溜息をつく。

「軍隊時代が唯一の栄光だった元兵士は多い。特に貧民はそうだ。だから軍隊をやたらと理想化する。反対に目の敵にする者も多いが」

俺の「軍隊上がり」という言葉から、アルツァー大佐は全てを読み取ったらしい。

あの爺さん、二言目には「軍隊はいいぞ。お前ならいい将校になれる」と言っていたな。
元気だろうか。

で、これと女子中隊がどう関係してくるんだ？
するとアルツァー大佐は俺をチラリと見る。

「だが貴官がもし女だったら、どうだったかな？」
難しい質問だ。平民女性は帝国士官学校に入れない。

俺はシュワイデルの社会について考え、それからこう答える。
「選べる道は二つしかありません。教団の小作人にでもなつて自由を売り渡すか、娼館で体を売り渡すか。いや、もうひとつありますね」

「そうだな。女子戦列歩兵になつて命を売り渡すか」

アルツァー大佐は窓の外で行進訓練をしている女性兵士たちを眺め、俺を振り返った。

「私は彼女たちに三つ目の生き方、兵士としての道を提示したかった。これもロクな生き方ではないが、多少の自由はあるし他の二つよりは待遇がいい。病気や怪我をすれば軍医に診てもらえる」

もし俺が女だったら少尉にはなれなかっただろう。兵士になれたかどうかも怪しい。そもそもあの老人が俺をどう扱ったか甚だ疑問だ。彼は決して高潔な人物ではなかった。

そう考えると男に生まれたのはかなり幸運だったな。前世と同じ性別だったから特に幸運だとも思わなかったけど。

ハンナがまた、もしよもしよと耳打ちする。

「自分も旅団長殿に拾われていなければ、粉ひき車を一生回してる運命でした」

それは今言ってたどの生き方でもないだろ。まあいいや。

とにかくアルツァー大佐の考えはわかった。この人権も社会福祉もない世界で、女性の選択肢を増やしたかったんだな。

多くの帝国貴族は平民を「帝国にたかる虫けら」だの「賤しいゴロツキ」だのと呼ぶ。慈善活動に熱心な貴族も多いが、大抵は「慈悲深い貴族」という名声目当ての投資だ。

そういう意味では、アルツァー大佐はかなりまともな方の貴族だと言えるだろう。女性限定とはいえ、自分で平民の面倒を見ている。まだ肚の底は読めないが、現時点では彼女に逆らう理由は何もなさそうだ。

とりあえず褒めておこう。

「敬服いたしました」

「世辞はよしてくれ、クロムベルツ少尉」

そう言って黒髪を手櫛で梳くアルツアー大佐だったが、少し頬が赤い。色白なので顔色がすぐに出るようだ。

「とにかくだ。私は配下の兵を鍛えたい」

「しかし閣下、この中隊は戦場に出ない部隊なのでは？」

さっきあんたがそう言ってたよな？

するとアルツアー大佐は頭をぽりぽり搔く。

「政情が不穏なのだ。例のリトレイユ公の周辺がどうもきな臭い。今はまだそれ以上のことは言えないな。すまない」

「小官を信用なさっていないからですか？」

「それもある」

あるのか。

「だが本当にわからないことだらけでな。私の見込みでは半々といったところだ。そして良くない方の半分に備えるのが私の仕事だ。これで納得してくれ」

「はっ、御命令とあれば」

俺はアルツアー大佐を困らせたくなかったので真顔で敬礼する。

どのみち彼女を補佐するしかないのだ。

アルツアー大佐は俺を見つめた。

「では最初の任務を貴官に命じる。第六特務旅団麾下の第一女子歩兵中隊の練度を向上させる。貴官が中隊長として命を預けられるほどにな」

「はっ！ ……いえ、少々お待ちを」

中隊長？

するとアルツアー大佐はフフンと笑う。

「今は私が中隊長を兼ねているが、さすがに旅団長が中隊長を兼ねるのはおかしいだろう？　だがこの旅団には他に将校がない」

「将校がないって、小隊長はどうしてるんですか」

「下士長が三名いる。ハンナは第一小隊長だ」

バツと振り返る俺。この子が小隊長か。

戦死などで指揮官が足りなくなったとき、下士長は臨時で小隊長を務めることが許されている。あくまでも臨時だ。

女性の平民将校は存在しないので、この旅団ではそれでやりくりしているらしい。

「いやあ、小隊長ってガラじゃないんですけど」

照れながら小さくなるうとしていいるハンナ。身を縮めてもやっぱりデカイ。

俺はアルツアー大佐を振り返る。

「小官が中隊長ですか」

「他に将校が来ればそいつに中隊長をやらせるから、あまり期待はするなよ。来たがる将校がいればの話だが」

ぜひ誰か来てほしい。中隊が軍隊生活の基本単位となるので中隊長はかなりの激務だ。やりたくないぞ。

「小官は中隊長はやりたくありませんから、参謀としてお役に立つところをお見せします」

「よろしい。期待している。正規の士官教育を受けた人材は私と貴官だけだからな」

旅団なのに将校が二人しかいない。なかなか大変そうだな。「ではまず、中隊の練度を確認します」

* * *

こうして俺は女子中隊の教官みたいなことをやらされるハメになったが、これが一筋縄ではいかなかった。

「遅い、遅すぎるぞ」

ただつひろい練兵場で俺がつぶやくと隣で立っていたハンナが首を傾げる。

「どれがですか？」

「全部だ」

俺は溜息をつく。

「次弾斉射まで三十秒もかかっている。せめて二十五秒で撃て」

「銃身が長すぎて装弾に手間取るんですよ。男性より小柄ですから確かに男女の体格差は無視できないな。銃は男性兵士が使っているものと同じだから、女性兵士には少々長すぎる。」

マスケット銃は銃口から火薬と弾を詰め込んで棒で突き固めるが、このとき銃身が長すぎると手が届かず、作業がやりづらい。

「事情はわかるんだが、敵は待つてくれないからな」

どんな戦闘であれ、「敵より遅い」のは致命的だ。これを改善しなければ戦える兵士にはならない。

「とりあえず装備の更新は検討しよう」
「はい、ありがとうございます」

中隊全員分の銃を少し短く加工するには、かなり時間と費用がかかりそうだ。

いや待てよ、騎兵銃を調達すればいいか？ あれは馬上での取り回しを考えて短くしてある。アルツァー大佐に相談してみよう。

「あと行進が遅い」

「歩幅が小さいですから」

「隊列変更ももたもたしすぎだ」

「それは普通にダメですね。徹底させます」
申し訳なさそうなハンナ。

体格面での不利はどうしようもない。槍や弓で戦う時代ならもつと敵しかっただろう。今は銃で戦う時代だから、筋力の差はそれほど致命的ではなくっている。

とはいえ、銃剣突撃させたら敵しそうだな……。

俺は少し悩み、それからハンナに言った。

「中隊全員を食堂に集めてくれ。話がある」

「はい、少尉殿」

にっこり笑ってハンナが敬礼した。

第8話「死神参謀の講義」

【第8話 死神参謀の講義】

「全員集まったな。手短に済ませる。よく聞け！」

俺は食堂に整列した百五十人の女性兵士を前にして、少し大きめに声を張り上げる。

「俺はクロムベルツ参謀少尉だ！ 諸君を鍛え直せと旅团长閣下より命令を受けた！ そこでまず、諸君に言っておく！」

俺は士官学校で受けた講義を思い返しながら、ここで軍靴を「カッ」と鳴らす。

「今この中隊が戦場で撃ち合いになれば、ほぼ全員が殺される！ それも一方的にだ！」

敢えて「死ぬ」ではなく「殺される」を使う。衝撃を与えるためだ。

「俺はつい先日モアガン軍と交戦した。率いていた部下は一個小隊五十人、鍛えに鍛え上げた強者たちだ。だが敵を敗走させたときに生き残っていた部下は二十二人。残りの二十八人は戦死や廃兵、つまり戦えない体になった。全て俺の責任だが、あんな惨状は二度と見たくない」

あのときに率いていたのが第六特務旅団の兵士たちだったら、俺も今頃は生きていないだろう。

「諸君の練度はそのときの部下たちよりも遥かに低い。全ての動作が遅く、不正確だ。おまけに士気も低い。勝つことはおろか、逃げることも難しいだろう。旅団長閣下はそれを憂慮しておられる」
大佐の人望のせいか、みんな真面目に俺の話の話を聞いている……ように見える。たぶん。

「そこで俺が諸君を鍛え直す！ どれだけ鍛えようとも戦場に出れば死ぬことはある！ だが鍛えていなければ確実に死ぬ！」

訓練すれば生き残れるという保証はない。訓練した者同士で殺し合ってるんだから、訓練しようが死ぬときは死ぬ。

だがこのまま訓練しなければ初陣で凄まじい数の兵士が死ぬだろう。この世界は通信や兵站が未発達で、人権という概念もない。戦場にいる兵士の命を守ることができない。

「一年以内に諸君を一人前の戦士に鍛え上げる。残念ながら俺は男だ、女性である諸君の心身に十分な配慮ができるとは言いがたい。不満は好きなだけ言え！ それで処罰することは決してない！」

兵の不満はフィードバックし、より効果的な訓練に改良する。

その代わり訓練の改良に役立たないのなら、どれだけ不満が出ようが聞き入れるつもりはない。

俺は兵たちの御機嫌取りのためにここに呼ばれたのではない。

「俺は前の師団では『死神』などと呼ばれて嫌われていた。諸君も

遠慮なく嫌ってくれ。明日より本格的な訓練を開始する！ 以上だ！」

俺が締めくくると、ハンナ下士長がすぐさま叫んだ。

「少尉殿に敬礼！」

やばばらけてはいたが、百五十人の乙女たちが俺に敬礼する。俺も敬礼した。

ここにいる女性兵士はみんな、他に行き場がなくて大佐に救われた子たちだ。同じような境遇の女性は国内に何万人もいるだろう。そのうちのたった百五十人。

一人でも多く生き延びさせるために俺にできることをやろう。でも背後から撃たれないといいな……。

* * *

翌日、俺は小隊単位で講義を開始した。本当は中隊全部に一度に教えたいが、生徒の人数が多くなると教えるのが難しくなる。

人に物を教えた経験は学生時代の塾バイトぐらいなので、五十人学級でも厳しい。

「最初の教練は文字の読み書きと計算だ」

食堂の椅子に着席している第一小隊の女の子たちが、不思議そうな顔をしている。隊長のハンナまで首を傾げていた。

だから俺は制帽を整えながら苦笑した。

「意外だったか？ だがこれは今後の訓練に必要なだ」

俺は食堂を見回し、彼女たちに問う。

「この中で、食堂のメニュー表が全て読める者は拳手してくれ」

帝国軍の食堂は居酒屋を兼ねているが、食事と違ってこちらは有料だ。

やや自信なさげに、まばらに手が挙がる。二十人ちよつとだ。識字率は半分以下だが、まあそんなものだろう。シュワイデルでは自分の名前しか書けない平民も多い。

「ではワイン六杯とエール四杯で合計が幾らか、暗算で答えられる者は？」

拳手していた二十人ちよつとのうち、半数が手を引っ込めてしまった。

こつこつ「ちよつとややこしい計算」に慣れているのは商人や職人だ。人口の九割ほどを占める農民はこつこつ計算をあまりしない。

俺はうなずき、懐から士官学校時代の高価な教本を取り出す。平民の士官候補生は卒業したら売り払ってしまうことが多いが、俺は売らなかった。

「字が読めない者は銃の説明書が読めない。字が書けない者は休暇の申請書が書けない。計算ができない者は備品の管理ができない。いずれも致命的だ」

あくまでも一般論だが、教育水準の高い人間は新しいことをやらせるときにも適応が早い。

前世の日本人なら簡単にできることが、今世のシュワイデル人にはできなかつたりする。

特に問題となるのが識字力と計算力だ。

そんな問題があるので、とりあえず読み書きと計算は覚えてもらう。

「まさか兵隊が読み書き計算をやらされるとは思わなかったか？
だがこれをやっておけば、もし負傷除隊しても食っていける。代書屋をやってもいいし、商店で働いてもいいんだ。これからの人生で必ず役に立つ。まずここから始めよう」

俺が少し穏やかに言うと、女性兵士たちは静かにうなずいた。

* * *

一方、体を動かさず訓練もやる。

こちらはひたすら行進と隊列変更、それとランニングだ。

「少尉殿、訓練ってこれでいいんですか？」

ハンナが質問してくるので、俺も一緒に走りながらうなずく。

「とにかく戦場には早く着かないといけないんだ。敵に占領された陣地を奪い返すより、占領される前に守備隊と合流して陣地を守る方が被害が少ない」

戦場に到着するのがたった一日違うだけで、勝敗が変わることもある。これは士官学校の盤上演習で何度も経験したし、実戦でも二度ほどあった。

進軍速度を高めれば圧倒的に有利になるのは、前世の歴史でも証明されている。最初の実践者はたぶんナポレオンだ。

「女性兵士が銃剣で男の兵士と戦うのは不利だ。だとしたら銃剣突

撃をせずに敵を退散させたい。それには」

走りながらなので息が上がってきた。やっぱりランニング一緒にやるんじゃなかった。

ハンナがにつこり笑う。

「敵よりいい場所に先に陣取って、『お前たちに勝ち目はないぞ』って教えてやるんですね！」

「そ、そうだ」

ハンナの方が体力あるな。息も切らしてないぞ。それに理解力も高い。優秀な下士官だ。

次からはランニングの指揮を任せよう。

とりあえず最後まで付き合ってから、俺は旅団司令部に戻る。女子向けの軽い訓練メニューで助かった。

* * *

教練の合間に旅団長室に行き、アルツァー閣下に報告と相談をする。

「おおむね順調ですが、予定より時間がかかりそうです。資質は悪くはないのですが、基礎体力と闘争心が足りません」

窓の外の訓練風景を眺めながら、アルツァー大佐が軽くうなずく。「クロムベルツ少尉。この訓練で本当に精強な兵士になれるか？」
「少なくとも小官は他の方法を知りません。士官学校で学んだことをやっているだけです。閣下も学ばれたはずでは？」

すると大佐は首を横に振った。

「貴官のような本物の軍人と違って、私は士官学校であまり学んでいない。形式的に在籍していただけだ」

ああ、貴族将校によくあるタイプだ。特に身分の高い貴族に多い。

身分の高い貴族は階級も高くなるし、自領から徴募した兵だけで連隊規模の部隊を編成できる。連隊長はもちろん貴族本人だ。

しかし領地経営や政治の駆け引きに忙しい貴族は、近代的な軍事技術を学ぶ暇がない。

そこで俺たちみたいな平民将校が参謀や副官としてあてがわれる。俺も大佐の補佐役としてここに回された。

出世の行き止まりだが、手切れ金代わりに参謀の肩書をもらえたから不満はない。

それにここは安全な後方だ。

せいぜいアルツァー閣下に入られることにしよう。

そう思った俺は、大佐に説明する。

「文字も読めない兵隊では閣下のお役に立ちません。斥候にも出せませんし、申請書類をいちいち代筆してやらないといけませんから」

軍隊組織も装備品も戦術も、これからどんどん高度になって複雑化していく。口頭での情報伝達にはいずれ限界が来るだろう。少し回りくどいのは事実だが、これは必要な措置だ。

そんなことを大佐に説いた。

「そうだな、貴官の言う通りだ。それに……」

大佐は椅子の背もたれに体を預けると、フツと笑う。

「読み書きを覚えておけば、除隊後の人生でも役立つ。そうだな？」
おっと、見抜かれてるぞ。

俺は制帽を整えつつ、苦笑してみせる。

「はい。兵たちに命を懸けて戦えと命じる以上、除隊後の人生にまで責任を持つのは軍の義務ですから」

「そうだな。我が軍は退役兵に酷薄すぎる」

ちよつと渋い顔をしてみせた後、大佐はまた笑う。

「やはり私は良い参謀を引き当てたようだ。『実戦経験と体系的な知識があり、女性兵士にも教導ができそうな将校を回してくれ』と何度も申請した甲斐があつた」

「何度も、ですか？」

大佐は椅子にもたれたまま、頭の後ろで手を組む。

「貴官で四人目だよ。前の三人はすぐに再転属を願い出たから放流してやった」

「釣った魚みたいに言わないでもらえますか？」

「どうやら大佐も苦勞していたらしい。五王家の直系といつても軍隊内部では一人の大佐。上に掛け合つて参謀ガチャを回すのも楽しいのだから。」

大佐は窓の外の訓練風景を眺めながら、俺に笑いかける。

「私が兵たちに言い聞かせるから、しばらく貴官のやり方でやってみる。うまくいかないことがあるれば気にせず相談してくれ。責任は私が持つ」

「はっ！」

仕事がいやなのは助かる。いい上司と組めたかもしれない。

第9話「鉛の死神」

【第9話 鉛の死神】

戦列歩兵の女子中隊を鍛え上げるのは、やはりなかなかの難題だった。

シュワイデル軍も周辺国の軍隊も、戦っているのはほとんどが若い男だ。男女の体力差はどうしても出てしまう。

しかし戦場では男女の区別はない。

「方陣への隊列変更が遅い！」

俺は砂時計を片手に大声で怒鳴る。

「お前ら、隊列変更を何だと思ってるんだ！ 命がかかってるんだぞ！」

この中隊にいるのは、「偉大なる祖国のために戦います！」というタイプの子たちではない。むしろ逆だ。

幼い頃から世間に打ちのめされ、何も信用できない。戦うのも傷つくのも怖い。

そういう女の子たちだ。

だから訓練に身が入らないのはわかる。

でもそれじゃ困るんだよ。

俺はマスキット銃を手にすると、もたもたしている女子戦列歩兵たちの前に進み出た。

「いいか、銃は世間よりよっぽど公平だ。銃弾は平民と貴族を区別しない。善人と悪人も区別しない。もちろん男と女も区別しない。当たれば誰もが死ぬ」

実戦を知らない彼女たちに、俺は自分が見てきたものを正直に伝える。

「それでも頭にくらったヤツは運がいいんだ。何が起きたか気づく暇もなく死ぬ。首や胸に当たったヤツもまあ悪くはない。激しく苦しみはするが、少しの辛抱だ。すぐ死ぬる」

血まみれになって助けを求める負傷兵は、周囲の兵士の士気を著しく下げる。

どのみち救命する手段がないのだから、できれば頭や首に被弾してさっさとくたばってもらいたい。その方がお互いに楽だ。

……などと考えるようになった自分に気づき、ギョツとした経験がある。気をつけないと人間性は簡単に摩耗してしまう。俺みたいになっただらおしまいだ。

だからこそ、今のうちにいろいろ言っておく必要がある。

「腕に直撃したヤツは失血死するが、運が良ければ片腕と引き換えに年金をもらって除隊できる。ただ腕を切断する手術で死ぬヤツが多い。術後に傷が膿んで死ぬこともよくある」

麻酔も輸血も消毒もない世界だから、医療水準は前世と比較にも

ならない。軽傷でもバタバタ死んでいく。

「腹にくらったヤツは悲惨だ。腸をはらわたやられるともう助からないが、半日苦しみ悶えて死ぬ。殺してくれと頼まれることもあるし、貴官たち自身が戦友に頼むこともあるだろう」

今ひとつ頼りにならないマスケット銃だが、至近距離で誰かにとどめを刺すときには割と頼りになる。味方が死んでホツとする瞬間は何度経験しても嫌なものだ。

「だが一番悲惨なのは、脚にくらったヤツだ。戦場のだ真ん中で動けなくなる。勝ち戦なら生き延びられるかもしれないが、負ければ敵に囲まれて鬩り殺した。諸君は女性だから、もちろん『そういうこと』もあるだろう」

戦地での陵辱はほぼ確実に起きる。若い女性が戦場で倒れていれば、生きていようが死んでいようがお構いなしだろう。

そのためシュワイデル軍では「娼館の確保は将官の仕事」とまで言われている。無用のトラブルを起こさないためだ。

戦争をしていても人間には日々の営みがあり、性生活も例外ではない。

俺は制帽を脱ぎ、非礼を詫びる。

「気を悪くさせてすまない。だが戦場では実際に起きるんだ。そして脚を撃たれるヤツは必ず出てくる。人体の前方投影面積……要するに弾が一番当たりやすい場所のひとつが脚だ」

シュワイデル人は欧米人と同じような体型をしていて脚が長い。

「戦場で脚を撃たれたヤツが生き延びる可能性を残すために、絶対に必要な条件がひとつある。わかる者はいるか？」

俺は一同を見回したが、みんな無言でちらちらと目配せしている。やがて一人の女性兵士が拳手した。

「参謀殿」

「うん、言ってくれ」

その女性兵士はやや自信なさげにこう言う。

「味方が勝つこと、ですか？」

「そうだ。貴官はよくわかっていているな」

俺はうなずいてみせた。

「味方が勝てば敵はいなくなる。傷ついた諸君を戦友たちが守ってくれる。軍医のところまで連れていってくれる。運悪く戦死しても、人としての尊厳は守られる」

俺も撤退戦をしたことがあるが、負傷兵を置き去りにしないようにするのが本当に大変だった。負傷兵の搬送に手間取れば、死ななくていい兵士が何人も死ぬ。

本当に余裕がない状況なら負傷兵を置き去りにすることになるだろう。

「だから戦う以上、俺たちは絶対に勝たねばならない」

俺は制帽を被り直し、厳しい顔を試みせる。

「よく覚えておけ、隊列を乱せば死ぬ！ 隊列変更が遅れれば死ぬ！ 貴官が死ななくても戦友が死ぬ！ 戦友が死ねば貴官も死ぬ！」

このへんはだいたい論理の飛躍があるが、今は隊列の重要性をみんなに理解させることが何よりも重要だ。

「戦列歩兵が覚える隊列は、そのどれもが諸君を守ってくれる！ そのために考案され、実戦で証明された隊列だ！ 隊列を信じる！ 隊列を守れ！」

戦列歩兵は戦列を構成しなければ戦えない。マスケット銃は一発撃てばそれで終わりだからだ。

「俺も諸君も一人では狼一匹にも勝てない！ 一人で戦おうとするな！ 一人で逃げようとするな！ そんなことをすれば死ぬ！」

これは嘘ではない。恐怖に負けて逃げ出せば、脱走兵として厳しく処罰される。俺も将校として脱走兵は殺さなければならぬ。

軍隊の庇護を失った兵士に生き延びるすべはない。敵軍と友軍の両方に怯えなければならぬから、脱走兵の末路は悲惨だ。

「だが指揮官の命令で隊列を組んで戦えば、諸君に勝てるものなど存在しない！ 狼の群れも凶暴な熊も、騎兵を乗せた勇猛な軍馬も、諸君に近づく前に無残な骸を晒す！ 現時点において戦列歩兵は地上最強の存在だ！」

そして俺は少し声を和らげ、一番大事なことを言う。

「さつき俺は『銃は男女を区別しない』と言った。それは諸君の銃も同じだ。銃弾の威力は射手の腕力とは関係ない。相手がどんなに屈強な男でも諸君の放つ銃弾で倒せる」

心なしか女性兵士たちの表情が少し真剣になった気がする。俺の言葉は彼女たちの心に届いているだろうか。

わからないが、彼女たちの闘志に火が付くことを祈ろう。

「今やっている方陣への隊列変更は、緊急時の防御手段だ。身を隠すものが何もない場所では自分自身を城壁にするしかない。隊列の後方を突かれないう、四角形の陣形で互いの背後を守り合う」

そう言うと言えはいいが、できればあまりやりたくない陣形だ。俺もまだ方陣での戦闘経験はなかった。

「そのため、方陣への隊列変更は特に素早く行う必要がある。諸君がこれを習得できない場合、指揮官の選択肢から方陣は除外される。生き延びる手段がひとつ減る訳だ」

その場合は散り散りになって逃げるか、銃剣突撃で賭けに出るか……。どっちにしても大勢死ぬだろう。

俺は一同を見回し、手にした砂時計をみんなに見せた。

「これが落ちきる前に隊列変更を完了させる。そうすれば実戦で方陣を組める。諸君が生き延びられる確率が少し上がる。それは俺が保証する」

「何人かの女性兵士が無言でうなずく。

俺もうなずき返す。」

「他にも覚えてもらいたいことが山ほどある。その全てを習得してくれば、俺は参謀としてありとあらゆる作戦を立てて諸君を守る。単に勝つだけではなく、一人でも多く生きて帰れるような作戦をだ」

指揮官と兵士の利益が相反しては、部隊は戦うことができない。

だから俺は「勝利すれば犠牲は最小限になる」という論法で、指揮官と兵士の利益を一致させた。

だがもちろん一番いいのは、戦わないことだ。

俺はそれを正直に言う。

「まあ、一番いいのは戦わずに勝つことだな。そうすれば一人も死なずに済む」

ハンナが思わず横から口を挟む。

「少尉殿、そんなこと本当にできるんですか？」

「睨み合いのまま終わることも割とあるぞ。もしそれを諸君が望むのなら、行軍演習は真面目に取り組んでくれ。敵より先に布陣してガツチリ守っていれば、敵が戦わずに退却する可能性が出てくる」

戦わずして勝利する。

あくまでも理想だが、狙えるときは積極的に狙っていききたい。な

んせ楽だからな。

「さあ、わかっただらとつと方陣への隊列変更を覚える。味方がやられて隙間ができたときの練習もやるぞ。ちゃんと覚えたら閣下に頼んで砂糖の配給許可をもらってきてやる」

女性兵士たちが一瞬ざわめく。

「砂糖……？」

「ああそつだ。食堂の炊事係が何か作ってくれと思うぞ」

砂糖は高価だが、軍隊には豊富にある。砂糖は栄養があつて保存ができ、誰もが欲しがるから換金性も高い。立派な軍需物資だ。

たちまち中隊全員がはしゃぎ始める。

「私、べっこう飴を作ってもらう！」

「砂糖たっぷりの甘い白パンがいいって！」

「何言つてんの、紅茶にたっぷり入れて飲むのよ！」

「揚げパンに砂糖まぶしたーい！」

せつかく気分が引き締まっていたのに、すっかり緩みきってしまった。

まあいいや。

「おーい、お前たち！ 訓練を真面目にやらないと砂糖の配給は無しだからな！ 頼むから真面目にやってくれよ！」

「はーいー！」

「参謀殿、話せるう！」

調子に乗るな。ここは軍隊だぞ。

……と思ったのだが、俺も気が緩んでしまっついつい笑顔になる。

「では俺は旅団長閣下に頭を下げに行ってくる。旅団長室から訓練場は丸見えだから、しっかり訓練してくれ」

「はあい！」

「参謀殿、御武運を！」

「絶対に砂糖もらってきてくださいね！」

調子いいなあ……。

第10話「旅団長室にて」

【第10話 旅団長室にて】

* * *

下土長のハンナは、新任少尉の訓練風景をじっと見ていた。
「遅い！ 敵より遅い行動に意味などないぞ！ 歩度を上げる！」
クロムベルツ参謀少尉は砂時計を片手に、行軍演習中の小隊に怒鳴っている。

「敵より先に戦場に着け！ 有利な場所に陣取れば、後はほっといても勝てるんだ！ そのためにも行軍速度を上げる！」
クロムベルツ参謀の訓練は、とにかく速さを重視している。偏執狂じみてさえいた。

「撤退のときにも速さが必要だ！ 敵より遅ければ追撃を受けるぞ！」
それからクロムベルツはこちらに歩いてくる。
「みんな良い兵士だ。訓練にも身が入っている」

いい笑顔でそう言う。

(軍人にしてはよく笑う人だなあ……)
ハンナのような下層出身者にとって、軍の将校は雲の上の存在だ。それは彼女が下土長になった今でも変わらない。

前任の参謀たちはみんな怖い顔をしており、態度も横柄だった。些細な失敗でも殴られることがザラだった。

しかしクロムベルツ参謀は誰も殴らない。言葉は厳しいし怒鳴るとメチャクチャに怖いが、殴られた者はまだ一人もいなかった。

それに普段は言葉遣いがとても穏やかだ。

「どうした？ 体調が悪いか？」

ぼんやりしていたハンナに、クロムベルツ参謀が心配そうに声をかけてくる。本気で心配しているのがよくわかった。

「い、いえ、何でもないですよ参謀殿！ ちょっと考え事をしていました」

しまった、と思う。上官との会話中に他のことを考えていたなど、殴られるのが当たり前だ。

しかしやはりクロムベルツ参謀は気にした様子もなく、むしろ大ききくうなずいた。

「ハイデン下士長は真面目だからな。アルツァー閣下が総兵力の三分の一を預けておられるのも当然だ」

(ぼんやりしていると褒められる……)

これはこれで逆に困る。

ハンナの心中に気づいていないのか、クロムベルツ参謀はまじめな顔でさらに言う。

「しかしあまり無理をしないでくれよ。平時は六割か七割ぐらいの力で仕事を回すのが理想だ。余力を残しておかないと疲労が溜まり、仕事が次第に雑になる。有事にも無理がきかなくなる」

これも驚いた。目の前の参謀少尉は、全力で仕事をしなくてもいいと言っているのだ。

(びっくりです!?)

ハンナはまじまじとクロムベルツ参謀を見つめる。

こんな場所で楽しげに働いているだけあって、この人はかなり変わっているようだ。

するとクロムベルツ参謀は不意に表情を緩めた。

「そんなに難しい顔をするな。貴官の働きぶりはよくわかっている。ここは俺が見ておくから、食堂にでも行って一服してこい」

「えええええ!?!」

声が出てしまった。

クロムベルツ参謀は声を潜め、冗談っぽく笑う。

「これは俺の経験だが、戦場では真面目なヤツから死んでいく。だが俺は貴官に死んでほしくない。俺のために不真面目になれ、ハイデン下士長」

(今、胸がキュンってなった! キュンってなった!)

生まれてこのかた、ハンナは異性に優しくされたことがない。恵まれた体格のせいで珍獣や怪物のような扱いをされてきた。

そのせいでハンナは急速にクロムベルツ参謀に好感を抱く。

しかししゃっぱりクロムベルツ参謀は何も気づいていないようで、気楽そうに手をひらひら振った。

「ほら行け行け。これも下士長の役得だ。しっかり怠けて、これからも良い仕事をしてくれ」

「は、はいっ！」

思わずビシリと敬礼してしまうハンナだった。

その場を後にしたハンナだったが、食堂に行く前に旅団長室に立ち寄る。

「ずいぶん楽しそうに会話していたな」

大量の書類に埋もれていたアルツァー大佐がクスクス笑うので、ハンナは顔が熱くなるのを感じながら敬礼した。

70

「クロムベルツ参謀殿は気さくな方ですので」

「私もそう思う。どうだ、彼の人望は？」

「とても良好です。男性というだけで怖がる者もいますが、少尉殿は優しくて教え上手なので人気があります。清潔感もありますし」

それにとっても紳士的でカッコイイですからと、ハンナは言葉には出さずにつぶやく。

するとアルツァー大佐は分厚い書類に目を通しながら軽くうなずいた。

「なるほどな。ところでハンナは彼のしゃべり方には気づいたか？」

「しゃべり方ですか……？」

ハンナは「うーん」と唸った後、ポンと手を叩く。正確には「ポン」と叩けず、「バシン！」という力強い音になった。

「あ、そうだ！ 何となく下町っぽいですね！」

「そうだ。士官学校出にしては珍しいな」

大佐はそう言い、何かの書類にサインする。

「平民将校なら普通、言葉遣いは最も気をつけるところだ。訛りがあれば徹底的に矯正する。貴族将校と共に軍務を行う以上、平民特有の訛りは出世の妨げにしなければならない」

「あー、そうですね。貴族の方って言葉遣いが全然違いますから、すぐわかります」

「だろう？ 私もお前たちが『貴族訛り』と呼ぶ、伝統的な言葉遣いをしている。暗闇で会話していても、相手が貴族かどうかはすぐわかる。クロムベルツは言葉遣いは貴族風だが、発音には平民の訛りが残っているな」

そう苦笑した後で、大佐はペンを置いて表情を険しくする。

「軍務態度を見る限り、彼はかなり有能そうだ。前任者たちよりもよほど知的だし論理的だ。発音を改めるぐらい造作もないだろう。だが彼は『粗野な下町訛り』を使い続けている。あれでは貴族将校に疎まれるのも無理はない」

「言われてみれば変ですね」

ハンナには理由がわからない。

一方、大佐は椅子に深くもたれかけると、腕組みをした。

「クロムベルツ参謀は地方都市の下町生まれで、国外に出たことは一度もない。両親も生粋のシュワイデル人だ。だが彼の母語はシュワイデル語ではない。平民訛りだけでなく、助詞の使い方には異邦人特有の癖がある」

シュワイデル人なのに、母語がシュワイデル語ではない。

ハンナには意味がわからなかった。そんなことがありえるのだろうか？

大佐はクロムベルツ参謀の関連書類をトントンと指で叩く。

「何かがおかしい。つじつまが合わないんだ。彼には何か秘密がある」

「秘密ですか？」

「彼が異邦人なら、あの言葉遣いは理解できる。だがそうなると今度は彼の経歴と一致しない。彼の経歴は私の実家を使って洗い出した。彼の身の上話は全て事実だ」

大佐の実家といえば、もちろんメディレン宗家だ。シュワイデル貴族最高峰の『五王家』のひとつである。お抱えの密偵がいるだろうから、平民将校の素性を調べるぐらいは簡単だろう。……と、ハンナは思う。

大佐は苦笑する。

「だいぶ手間をかけて調べさせたが、結局彼が有能な正直者だという事実以外、何もわからなかった。リトレイユ公とも本当に無関係のようだ。逆に不気味だな」
「そうでしょうか？」

「私は臆病者でな」

大佐は立ち上がると、窓の外を眺める。

「とはいえ、今のところクロムベルツ参謀の働きぶりは文句のつけようがない。このまま頑張ってもらおう」

練兵場ではクロムベルツ参謀が制帽を振り回し、何か叫んでいた。

* * *

第11話「反逆者の銃」

【第11話 反逆者の銃】

俺は第六特務旅団唯一の戦力である女子中隊を鍛えつつ、上司に報告もする。

「訓練の成果は上々です。彼女たちは規律正しく、理解力があり、真面目です」

そう報告すると、アルツァー大佐は報告書を受け取ってふむふむとうなずく。

「それを聞いて一安心と言いたいところだが……何か言いたげだな、少尉？」

見抜かれている。彼女は軍事的な能力はそれほどでもないが、人を使う能力は高そうだな。

俺は正直に疑問をぶつける。

「いささか優秀すぎて不自然です」

「男性兵士よりもか？」

前の小隊で指揮していた兵士たちも十分に優秀だった。統制はしっかりとれていたし、ひとつの戦闘集団としてきちんと機能していた。

だがこの女子中隊にはそれ以上の素質を感じる。妙に教えやすい。

この感じ、前世の塾バイトで特別進学クラスを教えていたときに似ている。難関校志望者だけを集めたクラスだ。

だから俺はこう答える。

「今までに教導した兵たちの中では一番楽ですね。まるで大きな集団から上澄みだけすくい取ったように感じます」

するとアルツアー大佐は嬉しそうに笑った。メチャクチャいい笑顔だ。なんだあれ。

「なるほど、どうやら貴官は私の想像以上に優秀かつ勤勉なようだな。よく見抜いた。彼女たちは『選抜』された歩兵だよ」

「どつという意味ですか？」

俺の問いにアルツアー大佐はあっさり答える。

「私はメディレン領の困窮した女性たちを分け隔てなく保護したが、軍隊生活に向いていない者は去っていった。彼女たち自身の選択だ」

「なるほど、そういうことですか」

アルツアー大佐はおそらく、かなり多くの女性を旅団に迎え入れたのだろう。

だがもちろん兵士に向いていない者はいる。むしろそっちの方が多い。

「彼女たちは今どこに？」

「一部の者は旅団司令部の軍属として再雇用した。食堂や洗濯場、それに被服や銃の修理工房で働いている」
「なるほど」

言われてみれば兵士以外も女性しかいない。食堂も洗濯場も工房も、お婆ちゃんやおばちゃんだらけだ。あの人たちもみんな訳ありか。

「軍隊は巨大な消費者でもあるので、周辺に多くの雇用を生み出す。その雇用すらも女性への救済に充てているということですか」
「そうだ」

アルツアー大佐は静かにうなずく。
「貴官、なかなか物わかりがいいな」
「物わかりの悪い参謀など軍隊には不要です。そういうことでしたら」

俺はニヤリと笑ってみせた。

「旅団の規模が大きくなれば、そういった軍属の規模も大きくなりますね？」

「そうだな。できればもう少し拡充したい。どうせ彼女たちの給料は国が払う」

自分が払う訳ではないからアルツアー大佐は気楽な顔だ。
俺も気楽な顔だ。

「小官も賛成です。敬愛する我が祖国は弱者の救済にまるで金を使

いません。国庫がどうなるうがまるで心が痛みません」

「こちら、私は『五王家』の一員だぞ。不謹慎な発言は慎め」
そう言ってクスクス笑ってるアルツアー大佐。

これなら大丈夫だろう。俺は安心しつつ、用意しておいた書類を机上に置く。

「ではそのための一歩としてこちらを。第一女子歩兵中隊の改善案です」

「仕事が早いな」

「改善点が明瞭でしたので」

デキる参謀っぽい仕事で悦に入る俺。

実際、改善すべき点は単純明快だった。前任の参謀たちはやる気がなかったただけだと思う。

アルツアー大佐は改善案をあっという間に読み終え、納得したようにうなずく。

「なるほど、貴官が厄介払いされる訳だ」

もしかして何かミスした？

だがアルツアーはおかしそうに笑っている。

「ブーツとテントを新調してくれというのはわかる。行軍に必要な装備は最適にしておきたいからな。肌着の大量購入も承知した。傷の手当にも使えるし、何より清潔な衣類は病を遠ざける」

「御慧眼です。特にブーツは一人ずつ採寸して記録しておくべきです」

足の大きさや形は人それぞれなので、靴職人や足医に採寸してもらう方がいい。

貴族みたいにオーダーメイドの足型は作れないが、シュワイデル帝国の靴職人組合には規格化された木製の足型がある。それに合わせて作られた靴を購入すれば、もっと早く楽に歩けるはずだ。

しかしこれはシュワイデル軍ではほとんど行われていない。フリーサイズの靴しか配給されないので、兵士たちは自分で手を加えてフィットさせている。

どうせすぐダメになる安物なので、加工せずに我慢して履いている兵も多い。

「歩兵が歩けなくては仕事になりません」

「道理だ。行軍速度を重視する貴官としては譲れないところだな。いいだろう、この程度の出費なら上に掛け合う必要もない。私の財布から出そう」

上層部というか帝室が金を出し渋るので、アルツァー大佐はポケットマネーで装備を調達することにしたようだ。確かにその方が早い。どうせ上も黙認するだろう。

大佐はじろりと俺を見る。

「だがこの銃の小型化はどういうことだ？ 銃身の長さが射程距離に影響することぐらい、貴官なら承知しているはずだろう？ 射程

距離の重要性も」
「もちろんです」

俺はうなずき、上官に説明した。

「銃を短くすることにはメリットがほとんどありません。有効射程が敵より短くなると撃たれながら前進しなくてはいけませんし、着剣しての銃剣戦闘でも不利になります」

「そうだな。だとすれば、それを上回る何かがあるということだな？」

「はい、閣下」

この上司は理解が早くて助かるなあと思いつつ、俺はここぞとばかりに力説した。

「帝国の歩兵銃は我が中隊の兵士には大きすぎ、装填時の取り回しが不便です。重量もバカになりません。実際、連射速度にはつきりとした差が出ています」

シュワイデル軍のマスコット銃は、銃剣戦闘で有利になるよう不必要に長大に作られている。行軍時や射撃時には重すぎるし長すぎる。俺でも持て余す。

今の銃ではどうしても装填で二十秒を切れない。ほんの数秒の差だが、正面からの撃ち合いになれば次弾を先に撃たれる。

「どうせ撃ち合いで不利なら、軽い方がマシだと思いました」

「確かに装備は軽くするのが鉄則ではあるが……」

アルツァーは困ったような顔をしている。そりゃそうだろう。銃

は歩兵の命綱だ。

「この長さだと騎兵銃と同じぐらいだぞ？」

「はい、騎兵銃を流用する計画です」

予備も含めると二百挺ぐらいは欲しいので、あまり手間のかかる調達法はできない。そのへんで余っている騎兵銃を掻き集めてくることになるだろう。

「騎兵ほどの機動力もない歩兵が、騎兵銃でどうやって敵に勝つ？」

「反則技なので報告書には記載できませんでしたが、銃身と弾を少し工夫します」

本当は嫌だったんだが、他に解決方法がなかった。

「マスケット銃の弾はどれも球形ですが、これをドングリ型にします」

形状としては前世で「ミニエー弾」と呼ばれていた弾に近い。初期のライフル銃の弾だ。

「弾の後ろ側にくぼみをつけ、発射時の燃烧ガスを効率的に受け止めます。命中精度は向上し、有効射程も飛躍的に延びます」

アルツァーは少し疑わしそうな顔をした。

「本当か？ 細長い弾を筒先から撃ち出すと変な方向に飛びそうだが」

「その通りです。そこで銃身内部に螺旋状の溝を切り、弾に横方向の回転を加えて射出することで弾道を安定させます」

俺はポケットから銃弾の実物を取り出してみせた。

「銃弾は鋳物砂で作れます。銃身の加工はかなり面倒ですが、これによって飛距離と命中精度が劇的に向上します。かなり離れた場所からでも狙撃できるので密猟に便利でした。実証済みです」

転生後のストリートチルドレン時代、俺は兵隊上がりの老人とちよくちよく密猟をしていた。貴族の私有林に入って鳥や獣を撃っていたのだ。肉は栄養があつたし羽や毛皮は闇ルートで高く売れた。

大佐は呆れている。

「よく露見しなかつたな。猟番に見つかればリンチの末に森の養分にされるぞ」

「警戒網を迂回して目標を速やかに攻略していました。今やっっていることと同じです」

猟番は少人数で広大な森を管理しているので、完全な警備などできるはずがない。

おまけに彼らは獲物となる動物の飼育もしており、そちらに専念しているときに狙えば巡回に遭遇することはなかった。

俺の言葉に大佐は苦笑している。

「貴官を『勤勉で有能な男』だと思っていたが、『勤勉で有能で危険な男』に訂正させてもらっぞ」

「光荣です」

この国でストリートチルドレンが法を順守していたら確実に死ぬ

ので、「ちよつとした違法行為」には目をつぶってもらうしかない。冷酷な社会へのささやかな反逆だ。

「銃身の改造には当時のツテがありますので頼んでみます」

「悪党め」

アルツァーはフツと笑い、銃弾を受け取って確かめた。

「軍で使うには数が必要になる。間に合うか？」

「ひとまず小隊に数挺ずつあればそれなりの運用ができます。選抜した優秀な射手に持たせ、敵の士官や下士官、ラツパ手を狙い撃ちさせます」

中隊分のミニエー銃を調達するにはどう考えても一年以上かかりそうなので、最初は狙撃兵専用銃として使う。

大佐はしばらく考え込み、それからうなずいた。

「いいだろう。その費用も私が出す。それなら上に報告する義務もない」

新兵器を独り占めするつもりだ。どっちが悪党だかわかったもんじゃない。

彼女はさらに言う。

「優れた兵器を使えば、いずれ敵も使い始める。敵に知られないためには味方にも教えないことだ。違うか？」

「仰る通りです」

シュワイデル軍全軍に新型銃が配備されるようになれば、鹵獲や横流しによって必ず敵の手に渡る。そうなれば新型銃同士での撃ち合いだ。双方の死者がヤバいことになる。

だから同胞たちには悪いが、この技術はしばらく秘匿させてもらう。

アルツァー大佐は机の上で指を組み、俺を見上げる。

「さて、これで貴官の要求は全て通したぞ。まだあるか？」

「あります」

俺は次の書類を提出した。

第12話「昏き血の戦乙女」

【第12話 昏き血の戦乙女】

「うわあ、地味！」

「ほんとに地味だなあ」

戦列歩兵の女の子たちが、新しい軍服の試作品を着て好き勝手言っている。

「これって黒？ 赤？」

「黒じゃない？」

「あ、でもよく見るとちょっと赤紫っぽいかな」

第六特務旅団の戦列歩兵の制服は黒っぽい赤茶色になった。

ズボンも同じ色だが、これは帝国やその周辺国では珍しい。戦列歩兵のズボンはだいたい白だ。たぶん数が必要なのでいちいち染めたりしないんだろう。

実は以前から我が旅団は「女に男と同じ制服を着せるな」という圧力を受けていたそうで、だったら変えてやるよバーカバーカと思っただけ変更を具申したのだ。

こつこつ陰湿な嫌がらせは栄えある我が帝国の伝統だ。軍に限らず、職人組合や国教団も似たようなもんらしい。

俺がどう切り出そうか迷っている。とハンナが叫ぶ。

「こらーっ！ 地味とか言わない！ これで経血が目立たなくなるでしょ！」

今それを言うな。ここに男がいるんだぞ。

新しい制服は目立たない黒を基調としている。ただし完全な黒は戦場では逆に目立つので濃いめの赤茶色に寄せた。マルーンっていうんだっただかな、ああいう色。

たまたまあの色の染色液が調達しやすかったせいだが、俺にとっては前世の通勤電車の色に近い。うーん、あの色を見ると気が滅入るな……。

あれ？ でも路線名が出てこない。そういや自宅の最寄り駅はどこだった？

いつの間にか前世の記憶がだんだん薄れていることに気づく。科学知識のように理論で強固に支えられた知識は薄れていないが、日常の記憶はどんどんあやふやになっているようだ。

俺が背筋に冷たいものを感じていると、腰に手を当ててハンナが女の子たちに言う。

「白ズボンだと汚れが気になるってみんな言ってたでしょう？ だから参謀……」

「ハイデン下士長、それはもういいから」

このままだと俺が経血マニアにされてしまいそうだ。

「俺は貴官の意見を採用しただけだぞ。それに最大の狙いは視認性

の低下だ」

俺は中隊の女性兵士たちに説明する。

「黒っぽい色は『後退色』と言い、実際よりも小さく見せる効果がある。戦場で小さく見える兵士は、遠くにいと勘違いされる。敵は弾が届かないと思って撃たない」

もともと彼女たちは男性兵士よりも小柄なので、黒い制服によってさらに小さく見える。

「小さく見せるため、無駄に高い制帽も廃止した。あれは大きく見せるための装備だからな」

前世でシャコー帽と呼ばれていたヤツだ。見た目はいいけど意外と重い。

より近代的な制帽に変更したことで装備が軽くなり、首への負担を減らせる。なるべく疲れにくい装備で彼女たちの体力を温存する作戦だ。

「我が中隊は敵に距離を誤認させ、有利な距離で戦うことを意図している」

小さく見せるよう徹底したので、こちらが五十メートルまで近づいても敵にはまだ六十メートルぐらいに見えているはずだ。六十メートルだと「まだちょっと遠いかな……」と思う。ちょっと離れるとマスケット銃は全然当たらない。

こうしてできあがったのが、どっかの鉄道カラーの女子戦列歩兵中隊だった。

「地味だな」

アルツァー大佐までそんなことを言うので、俺は参謀として申し上げる。

「戦場で派手にしたところで、威嚇にしかありません。そしてその手の威嚇はもうお互いに慣れっこです」

「確かにそうだ。だがこれで勝てる軍隊になったか？」

俺は正直に答える。

「制服を新調したぐらいで戦争に勝てたら苦労はしません。訓練もまだ途中です」

だが装備の改革案は他にもある。

「新しい銃の調達がある程度完了すれば、先制攻撃によって敵中隊に半個小隊程度の損害を与えられます」

「ほっ」

ヤバすぎるので大佐にしか伝えていないが、ライフリングを入れてドングリ弾を撃つと射程と命中精度が三倍ぐらいになる。

敵が「まだ撃ち合う距離じゃないな」と思っただけで前進しているとき、こちらは彼らを好きなように撃てるのだ。戦争にならない。

マスケット銃みたいに五十メートルぐらいの距離で撃てば、ほぼ全弾命中する。二〜三回も斉射すれば敵の大半が死んでいるだろう。それぐらいヤバい銃だ。

何十年も続いてきた従来の戦争を一変させてしまっただけの力を持っている。

この銃の存在が露見すれば、あっという間に世界中に広まるだろう。目立つ軍服で整列して行進する戦列歩兵なんかいいのだ。ものの数十秒で死体の山ができる。

だがそれはまだ時代的に早すぎる。文明が成熟する前に兵器だけ急速に進化したら何が起きるか想像もつかない。まだ産業革命も起きてないんだぞ。

いろいろ考えていたらゾツとしてきたので、殺し方には気をつけることにした。

接敵前に敵を減らしたり、敵の指揮官やラッパ手を狙撃したり、あくまでも補助的な運用に留めることにする。

「三個小隊と二個半小隊が撃ち合えば、万が一敵が全滅するまで抵抗してもこちらは半数以上が無傷で残る計算です」

「本当か？」

「理論上はそうです」

前世に『ランチエスターの法則』というのがあり、銃で撃ち合いをするような戦闘だとわずかな兵力差が決定的な優位をもたらす。戦略ゲーム好きには割と知られている法則だ。

で、それで計算したらそうだった。

実際には敵は全滅する前に逃げ出すはずなので、そこまでの損害は出ないだろう。

「もし敵を二個小隊まで減らせていけば、こちらの損害は一個小隊未満です。撃ち合いになる前にどれだけ敵を減らせるかが重要になります」

「なるほど」

アルツァー大佐は考え込む。

「だとしても騎兵の相手は厳しいだろうな。砲兵にも気をつけねばならない」

「小官もそう思います」

「理論上は正面からの撃ち合いもできるとはいえ、できれば待ち伏せや救援任務でうまく戦いたいな。射程の長さを最大限に利用しよう。被害は友軍に押しつけない」

「良いお考えです」

友軍の被害を軽視するつもりはないが、俺にどうにかできることではない。それに俺だって自分の方に飛んでくる銃弾は少ない方がいい。

ただし、これも付け加えておく。

「どのみち中隊程度で戦況を一変させられるはずがありませんから、戦力が拮抗している局面で投入されるのがよろしいかと」

「皆まで言うな。使い方を考え、正しく運用するのは私の職責だ」

アルツァー大佐は制帽を脱ぎ、大きく溜息をつく。

「考えるべきことが増えたな。だがこれで戦える。クロムベルツ少尉、よくやってくれた」

「これが小官の仕事ですので」

俺の言葉に大佐は満足そうにうなづく。

それからふと思いついたように質問してきた。

「で、銃の調達はどうなっている？」

やっぱり気になる？

「素体となる騎兵銃をかき集めるのに手間取っています。歩兵銃ほ

ど数が出回っていないため、交渉先がそもそも少なく、最初の一挺が届くまで、まだだいぶかかりそうだ……」。

第13話「陰謀の小指」

【第13話 陰謀の小指】

「ごきげんよう、アルツアー様」

「私をその名で呼ぶな」

アルツアー大佐は嫌悪感を隠そうとしなかった。

旅団司令部のソファに腰かけているのは、上級将校用のコートを羽織った金髪の美女。

応接間に入った大佐は座ろうともせず、戸口で冷たく言い放つ。

「リトレイユ公、ここは民間人の立ち入りは禁止されている。お引き取り願おう」

しかしリトレイユは動じない。

「アルツアー様がさんざんおねだりしておられた『優秀な参謀』を手配して差し上げましたのに、つれないのですね」

「私が頼んだ相手は陸軍総司令部だ。貴公ではない」

「実際に動いたのは陸軍第五師団、つまり当家の部隊ですよ？」

これは事実だろうと、アルツアー大佐は思う。リトレイユ宗家が協力しなければ、あのような逸材は回ってこなかったはずだ。

「貴公の口添えには感謝しているが、それとこれとは話が別だ。退

去して頂く」

「相変わらずせっかちなお姫様ですね。でも、そんなところも好きですよ？」

ねっとり絡みつくような視線に、アルツァー大佐は嫌悪感をあらわにした。

「私は貴公が嫌いだ」

「ではちょうど釣り合いが取れていますね」

「訳のわからんことを言うな。帰ってくれ」

だがリトレイユは動じない。

「私の友情に応えてはくださらないの？」

「貴公との間に友情はない」

「では仕方ありません。協力を求めるのは諦めましょう」

そう言ってリトレイユが立ち上がったので、アルツァー大佐は不審に思う。

「待て、何を企んでいる？」

「協力しないのでしたら、知らない方がお互いのためでしょう」

アルツァー大佐は真正面から金髪の美女を見据えた。

「まさか貴公、弟君を實力で排除するつもりか」

「ええまあ……戦列歩兵など使わずとも、薬瓶の一滴で苦しみは取り除かれますから」

実弟を毒殺することも厭わないリトレイユに、アルツァー大佐は吐き捨てるように言う。

「毒婦め」

「協力してくれないあなたが悪いんですよ？ 嫡男が継承権を放棄すれば、誰も死なずに済むのですから。姉と弟が殺し合う哀しい物語など見たくないでしょう？」

わざとらしい物言い。しかし本気なのは間違いなかった。

「セリン殿は確かまだ四歳だったはずだが」

「ええ。可愛い盛りですよ。いずれ私から家督を奪う、とても可愛い弟……」

ねちっこく、それでいてひんやりとした声だった。

アルツァー大佐はしばらく黙り込み、それから押し殺した声で問う。

「要求を聞こう」

リトレイユが大佐に歩み寄ってくる。貴族にしてはかなり小柄な大佐は、リトレイユに見下ろされる形になった。

「第六特務旅団の実力を、そろそろ見せて頂きたいです。最近ブルージュ公国の兵が国境付近をうろついていますから、彼らを躱けて頂ければ、と」

「ブルージュの山岳猟兵か」

見下ろされてもアルツァー大佐は動じることなく、ぐいと睨み返す。

「第六特務旅団などといっても、我が旅団は歩兵一個中隊しかない。作戦遂行能力は限定的だ」

「ええ。もちろん国境警備の第三師団は動かします。ミルドール家への政治工作はお任せを」

「いいだろう」

アルツァー大佐はうなずき、それからこう言った。

「貴家の第五師団は動かさないのか？」

「第五師団はアガン王国との国境地帯に張り付いていますからそれは事実だが、アルツァー大佐は冷たく笑う。

「第五師団の將軍たちは、いずれ弟に追い落とされるであろう新米当主の命など聞かなくてもいいならいいな？」

「そう……ですね」

リトレイク公は少し視線を落とし、唇を噛む。

それを見たアルツァー大佐は頭を掻く。

「すまん、今のは私が言いすぎた。貴公のことは嫌いだ、非礼を働いて良い理由にはならない。許されよ、リトレイク公」

「謝罪よりも好きになってくれる方が嬉しいのですけれど」

「好かれる努力もせずに凶々しいことを言う」

小さく鼻を鳴らして腕組みをするアルツァー大佐。

「さあ、用件が済んだら帰ってくれ。私の貞操を狙っている不埒者と同室では落ち着いて仕事もできん」

「それはそうですね。そろそろお暇いそぎいたしましょう」

リトレイユ公はスツと引き下がり、軽く会釈する。

アルツァー大佐は不機嫌そうな表情のままハンナ下士長を呼ぶ。

「リトレイユ公をお送りしろ」

「はっ！」

ハンナは敬礼したが、リトレイユ公は彼女を振り向きもせずアルツァー大佐に言う。

「平民の見送りなど不要です」

「そうか」

アルツァー大佐はうなずき、こつ尋ねた。

「ではクロムベルツ少尉ならどうだ？」

「それは……まあ」

リトレイユ公は少し言い淀み、ちよつと苦笑した。

「さすがに将校を平民扱いするのは少々問題ですね。彼の見送りなら我慢しましょう」

「我慢か。やはり貴公とは仲良くできそうにもないな」

アルツァー大佐はリトレイユ公に背を向けると、ハンナに命じる。

「リトレイユ公の御希望だ、クロムベルツ少尉にエスコートさせる。ハンナはリトレイユ公がお帰りになった後、この部屋を徹底的に掃除してくれ。お高い香水の匂いが消えるまでな」

「え？ ええ……？」

相手は国内屈指の大貴族なので、さすがにハンナがうるたえている。敬礼しかけたまま、手がうるうるしていた。とうとう彼女は困惑の声をあげる。

「旅団長殿、あんまりであります」

「あらあら」

リトレイユ公は長身のハンナを見上げ、クスツと笑った。

「粗野な女戦士だと思っていたけれど……あなた、なかなか良い顔をするのね？」

「私の部下にまで手を出すな」

「冗談ですよ。では御機嫌よう」

リトレイユ公が去った後、しばらくアルツァー大佐はこれ以上ないくらい不機嫌な顔をしていた。白手袋をはめた拳をギュツと握りしめる。

だが最後には何かを諦めたように溜息をついた。

「乗るしかないか……」

そして時計をチラリと見てからハンナに命じる。

「クロムベルツ少尉を呼べ。まだ城門前にいるはずだ」

第14話「第6特務旅団、出陣」

【第14話 第6特務旅団、出陣】

アルツァー大佐の呼び出しを受けて、俺はさっそく困り果てていた。

「我が旅団はまだ戦える状態ではありません、閣下。銃の調達ができてないんですよ」

しかし参謀が文句を言ったぐらいでどうにかなる世界ではない。

案の定、大佐は首を横に振った。

「出陣は避けられない状況だ。貴官が嫌いそうな『政治的な理由』でな」

政治的な理由か……。じゃあゴネても無駄だ。何とかしよう。

「わかりました。靴と衣類の調達だけは間に合えます」

靴は行軍速度に直結してくるし、ズボンと肌着は女性兵士たちの強い要望だ。命がけて戦うからこそ、誰もが納得できる格好でなければならぬ。

「相変わらず、やけに物わかりがいいな。ところで新型騎兵銃も試作品だけは届いていると聞いたが」

「検品中ですが、さっそく初期不良が見つかりました。加工時に銃身へ負荷をかけますので、どうしても不良品が出ます」

裏稼業の工房とはいえ仕上げのばらつきがひどい。

旋盤もないのに大急ぎで作ってくれたのには感謝しているが、配
備計画は見直さないとダメだろう。

俺は大佐にリストを渡す。

「これまでの射撃訓練を参考にして、各小隊から射撃の名手を選抜
しました。まず彼女たちに撃たせる予定です」

「用意がいいな」

「必要なことですから」

各小隊に狙撃手がいると何かと都合がいい。うまく使えば敵を釘
付けにできる。

「ただし、あくまでも試験です。大きな戦果は期待しないでくださ
い。下手をすれば設計の見直しすらあります」

「さすがに準備不足は否めんか。だが常に万全の準備ができるのな
ら苦労はしない」

「確かに」

敵に十分な準備をさせないのが戦いの鉄則だから、戦いというの
はだいたい準備不足でやることになる。

アルツァー大佐は手を組み、じっと俺を見つめる。

「我が旅団の持つ三個小隊のうち、二個小隊を派遣する予定だ。一
個小隊は留守小隊として残す。その上で参謀として貴官の意見を聞
きたい」

彼女は一呼吸置いて、こう質問した。

「我々はブルージユ公国の山岳猟兵を国境の外に追い出すことになった。敵の兵力も意図も不明だ。それでも順調に作戦が完了したとして、味方の損害は最大でどれぐらいになる？」

難しい質問だ。

「小官のいた第五師団はアガン軍とやり合っていましたので、ブルージユ軍についてはあまり知りません。ただこちらが戦列歩兵である以上、かなりの損害は覚悟してください」

訓練も経験も不十分だ。装備も万全とは言いがたい。しかも戦う場所は山岳猟兵の縄張りも同然だ。

「初陣であることを考慮すると、まともに野戦を行えば壊滅する可能性すらあります。味方の損害を抑える有効な手段は存在しません」

「おいおい」

アルツアー大佐は呆れ顔になるが、俺は構わずに続けた。

「ただまあ、味方の損害は『味方の損害』でしかありませんから。損害を受けるのは別に第六特務旅団でなくても良いと思います」

「ん？」

アルツアー大佐はピクリと反応し、それから俺の顔をまじまじと見つめる。

「貴官、もしかして第三師団を……」

「ブルージュ方面の国境を守るのは第三師団の役目です。代価を払うべきは彼らかと」

「貴官は悪党だな」

正直に言えば、俺は第三師団の兵士にも同情している。もっと言えばブルージュ公国の兵士にも同情はしていた。

この世界では国境線を数百メートル動かすために、何百人も死ぬことがある。

そしてさらに何百人か追加で死なせて、国境線をまた元の位置に戻す。何のための戦争だかわからない。

だが一介の少尉がそんなことを嘆いても仕方がないので、俺は自分の責任の範囲だけ何とかすることにした。つまり第六特務旅団を守るために、その他の全てを犠牲にするのだ。

もちろんこの「犠牲」には味方である第三師団も含まれる。

前世ではお役所の縄張りだの縦割りだのにさんざん文句を言った俺だが、今世ではそれ以上に酷いことをしている。

「無論、多少は心が痛みます」

「……本当か？」

本当だよ。

ただ心の痛みがだんだん鈍くなっているし、そのうち何も感じなくなるのだろう。仕事とはいえ嫌な話だ。

「ですが小官の心の平穩のためにも、ここは潔く割り切りましょう」

「そんなことがよく平然と言えるな」

アルツアー大佐は頼杖について溜息をつく。しかし、すぐにフツと笑った。

「だがそれでこそ私の参謀だ。その調子で頼む」

「お任せください」

これじゃまるで悪役だよ。

* * *

俺は打ち合わせのため、第一小隊長のハンナ下士長、第二小隊長のミドナ下士長、第三小隊長のローゼル下士長を呼び出した。ミドナとローゼルはメディレン家の元使用人で、アルツアー大佐とは旧知の間柄だ。

俺は地図を示す。

「我々の任務は国境地帯にある要塞の援軍だ。要塞周辺には支城がいくつか設けられている。そのひとつ、ゼツフェル砦に向かう」
「支城とは何ですか？」

ミドナ下士長が申し訳なさそうに挙手したので、俺は笑顔で応じる。

「敵の包囲攻撃を阻止するための砦だ。敵がこうやって要塞を包囲してきたとき……」

俺は机上のコップを要塞に見立て、その周りを数枚の銅貨で囲んだ。

「敵の包囲網を外側から攻撃してくれる味方がいれば、敵は要塞攻略に専念できない。背後から攻撃されると事実上の挟み撃ちになるからな。その味方を駐留させておくのが支城だ」

俺は銅貨を左右に押しつけ、包囲網に隙間を作った。

「要塞と支城はこうして連携している。だから敵は要塞攻略の前に支城をいくつか落とさなければならぬ。もちろん支城同士も連携しているから、言うほどたやすくはない」

「なるほど……」

ハンナたちが感心したようにうなずく。

俺は説明を先に進めることにした。

「要塞防衛網の一翼を担うゼツフェル砦に援軍として駐留する。旅団長が話を通してくれたおかげで『ホテル』は確保できている」

さすがに五王家の当主に近い人物だけあって、アルツァー大佐には政治力がある。上司に政治力があるのはありがたい。俺にはないからな。

我が旅団の女の子たちが戦場での野営にどれぐらい耐えられるか未知数なので、屋根と壁のある場所を確保できたのは大きい。

「ただし、もたもたしていると支城に他の部隊が入ってしまう。どの支城にも収容人員には限りがある。迅速に動くぞ」

「はいっ！」

「承知いたしました」

小隊長たちが俺に敬礼した。
さあ百人で遠足だ。頑張って引率しないと。

* * *

翌々日、俺は第一・第二小隊の百名と共に旅団本部を出発した。
なお体調不良者は第三小隊から入れ替える形になったので、第三
小隊からも十名ほど参加している。

「これじゃ参謀じゃなくて何でも屋だな……」

俺は溜息をつきながら軍馬に揺られていたが、女の子を歩かせて
自分が騎乗というのも少々後ろめたい。

「聞こえているぞ、少尉」

アルツァー大佐が苦笑しながら振り返ったので、俺は馬を進めて
彼女と並ぶ。

「これは失礼しました。小官は並列処理が苦手です」

大佐は俺を咎めることなく、逆に申し訳なさそうな顔をしていた。
「将校の不足は痛感している。いずれ増やすのでそれまで死なな
いでくれ」

「善処します」

増えたら死んでもいいんだらうか……。

それより少し確認しておきたいことがある。

「閣下、今回の作戦は思っていたよりも大がかりではありませんか？」

大佐は俺をじっと見て、静かに問う。

「なぜそう思った？」

「我々が向かうゼツフェル砦は、要塞後方にある後詰め支城です。そこに兵力を追加することは、他の支城にも援軍が予定されていると考える方が自然でしょう」

普通、援軍が必要なのは要塞前方にある前線基地だ。後方の砦に援軍を送るのなら、前線の砦にも送っているだろう。だとすると結構大規模な軍事行動といえる。

ただ実際のところどうなのかは俺なんぞにはわからないので、旅団長閣下に聞いてみる訳だ。

アルツアー大佐は周囲を見てから、声を潜めて答えた。

「どうやらリトレイユ公が何か策謀しているようだが、私は何も聞いていない」

「そうですか……」

なんか重大な秘密でも教えてもらえるのかと思ったけど、大佐も知らないのか。

「ところで少尉、この歩度で問題はないか？」

俺は支給された懐中時計を見て答える。

「問題ありません。歩度は一定で皆にも疲労の色が見えません。行軍訓練の成果が出ています」

「貴官の訓練は正しかったという訳だ」

「今のところは、ですが」

戦場にたどり着くまでにガタガタになっていては困るのだが、着いた後にちゃんと戦えるかどうかはまだわからない。

俺は不安を感じていたが、今さらどうすることもできない。後は出たとこ勝負だ。

できることなら全員無事でこの道を帰りたい。

もっとも過去の経験から、それが難しいことはわかっていた。戦えば誰かが死ぬ。

第15話「国境の誓」（地図あり）

【第15話】

< i 5 3 5 6 3 5 — 3 5 6 7 8 >

第六特務旅団から派遣された約百名の戦列女子歩兵は、特に問題もなくブルージュ公国との国境地帯に到着した。

第一小隊長のハンナ下士長が晴れやかな笑顔で言う。

「女の子だからだから山賊に襲われないか心配でしたけど、案外安全なんですな」

「銃で武装した女の子だからだからな」

マスケット銃兵百人の隊列をわざわざ襲うヤツらがいるとは思えない。いたら逆に尊敬する。

俺は隊列の後方を指差した。

「逆に我々の行軍が街道筋に治安をもたらした側面もある。巡礼や行商人がぞろぞろついてきたからな」

おかげで道中、物資に困ることはなかった。アルツァー大佐のポケットマネーで何でも買ってもらえたし。五王家の財力ってやっぱり尋常じゃない。

まあそれはともかくとして、実は今ちょっと困ったことになっている。

「話が違つぞ、ダブル大尉」
アルツァー大佐がゼツフェル砦の正門前で、年配の守備隊長と押し問答をしていた。

「この砦への援軍は第六特務旅団が担当するはずだ」
「いえ、それが我が第三師団内で兵力を融通するとの通達がありまして……」

経験豊富そうな大尉だが、三階級も上の貴族将校が相手ではやりづらいだろつ。

だが彼が砦の実質的な司令官だし、ここは第三師団の管轄だ。こちらとしてもゴリ押しはしにくい。大佐もその辺りは配慮しているようだ。

しばらく押し問答をした末、大佐は俺を振り返ってニヤリと笑う。

「砦の外に野営するなら構わないそうだが、どうする？ 別の砦にでも行くか？」

「論外です」

俺は帝国軍がどういうものか多少わかっているつもりだ。

こういふときは無理矢理ねじこむのが正しい。

メディレン家の威光を振りかざしてもいいし、大佐の階級を利用してもいい。他の増援部隊はまだ到着していないから、リトレイク公からの要請をちらつかせてもいい。

だがそれでいいのなら、大佐はわざわざ俺に話を振ったりしないだろつ。

俺は守備隊長の目を意識しつつ、大佐に確認を取る。

「スマートで論理的なやり方を御所望ですか？」

「御所望ではないな。どちらかといえば命令だ」

「では御命令通りに」

こんなやり取りもダブル大尉へのアピールのうちだ。今で彼は俺を「旅団長の腹心」だと誤解しただろう。たかが少尉と侮れなくなる。

さて、どうするか。俺は前に進み出ながら、その一瞬で考えを巡らせる。

どうせ彼らは若い女性ばかりの第六特務旅団に偏見を抱いているのだろう。まともに戦えないお飾り部隊だと思っているに違いない。俺も彼の立場だったら、さすがにちよつと不安にはなる。

とりあえず誤解を解くところから始めてみよう。

まずは相手が上官であることと経験豊富なベテランであることに敬意を払う。

「失礼します。小官はユイナー・クロムベルツ参謀少尉であります。以前は第五師団で歩兵小隊長をしていました」

「うん？」

守備隊長は俺を見て怪訝そうな顔をしたが、俺の態度と参謀肩章を見て話を聞く気になったらしい。

「私に何か用かな、少尉？」

俺は小声でひそひそと問いかける。

「大尉殿は第六特務旅団の兵がお飾りではないかと危惧しておられるではありませんか？」

守備隊長はアルツァー大佐をチラリと見てから、やはり小声で応じた。

「私にも砦を預かる責任がある。役に立たない兵を入れる訳にはいかんからな。もちろん第六特務旅団は精鋭だと信じているが」

白々しい言い訳つきだが、とりあえず守備隊長の立場と本心はわかった。

そういうことなら説得のしようもある。

「我が旅団の兵は小官が鍛え上げました。そこらの新兵よりは遙かに使えます」

「本当か？」

精鋭だって信じてるんだろ？

「お疑いでしたら、彼女たちの練度を御覧に入れましょう。第一小隊、密集二列横隊！」

俺の号令で第一小隊が展開し、二列に並ぶ。前列は片膝をつき、後列は前の兵士の隙間に立つ。

「交戦演習を行う！ 第一小隊は攻撃担当、第二小隊は支援だ！」
俺の命令にハンナ下士長が敬礼する。

「復唱、交戦演習を行います！ 第一小隊、構え！」

第一小隊の五十人は歩兵銃を構え、射撃態勢を取る。

ゼツフェル砦の兵士たちが「なんだなんだ？」とばかりにあちこちから顔を覗かせるが、俺は構わずに隊列の背後に回った。

第一小隊の女の子たちは射撃姿勢を取り、銃を空撃ちしては弾込め動作をしている。

ここまではどこの部隊でもやっている普通の訓練だ。

俺は彼女たちに告げる。

「ミアン、左目に被弾だ。ジュディーナ、左肩負傷。レツカ、戦死」俺が指名した女の子は即座に被弾箇所を押さえ、その場にうずくまる。

すかさず第二小隊長のミドナ下士長が叫んだ。

「救護開始！」

第二小隊の女の子たちが、「被弾」した第一小隊の子を引きずって運んでいく。抜けた穴を第二小隊が埋め、五十人の射撃態勢を維持した。

俺はさらに「損害」を増やす。

「ユイレン、銃の故障。キュジル、右足負傷。サディレ、戦死。カ
ーラ、戦死」

「これ使って！」

銃が「故障」したユイレンに、隣の子が銃を渡す。「戦死」した子の銃だ。

もうそろそろいいかな。

「訓練を終了しろ」

「訓練終了！ 訓練終了！」

最終的に第一小隊は数人を残してほぼ全員が後送され、第二小隊が欠員を埋めた。後方は「死傷者」と数人の第二小隊員だけだ。俺はダンブル大尉に向き直る。

「御覧のように、我が旅団では死傷者が出た場合の訓練もさせています。隣の者が撃たれても動揺などしません。実戦経験のない女性ばかりの部隊ということで御不安はおありでしょうか……」

するとダンブル大尉は制帽を脱ぎ、頭を掻いた。

「わかった、わかった。そこまでの覚悟があるのなら、皆の銃眼を預ける価値はありそうだ。もう何も言わんよ。……ようこそ、クロムベルツ少尉。我々は今から戦友だ」

ダンブル大尉が握手を求めてきた。それから彼は俺に問う。

「上官の威光をちらつかせた方が簡単だろうに、なぜわざわざこんなデモンストレーションを？」

俺はその手を力強く握り返す。

「誤解を解けば済む話ですので」

「軍隊も人間の集団だから、地味な嫌がらせは日常茶飯事だ。特に

前線の場合、背後から撃たれて戦死することもある。安全な後方はだいたい雰囲気が違う。

アルツァー大佐もそれはわかっているんで、ここの流儀でやるように俺に振ったのだらう。たぶん。

とりあえず無事に話がまとまり、俺たち第六特務旅団の二個小隊は皆の中に駐留できることになった。

大佐は俺と一緒に歩き出しながら、小さな声で俺に言う。

「第三師団はミルドル家の軍隊だ。私の実家の威光は届かない。助かったよ」

「これぐらいは給料のうちです。お任せください」

俺は大佐に笑いかけ、ついでに言う。

「ご存じでしょうが、皆を預かる守備隊長には実際の階級以上に大きな権限が与えられています。皆の防衛に支障をきたすと判断されれば、紙切れの命令書など意味を持ちません」

アルツァー大佐は苦笑し、肩をすくめてみせる。

「将たる者、戦場に在っては例え王命といえども聞けず、という訳だな。教本通りだ」

「ええ。割とやりたい放題ですのお気をつけください。多少のトラブルは平気で揉み消してきます」

部隊全員で口裏を合わせれば、何が起きたかなど誰にもわからない

い。どんな「事実」も上官の指示ひとつだ。

さすがにダブル大尉も三階級も上の貴族相手に妙なことはないだろう。とはいえ、こちらが調子に乗ると痛い目に遭わされる。

古めかしい砦の城門を見上げつつ、大佐はつぶやく。

「我々は敵と相対する時間の何十倍もの間、味方と相対する。味方に注意を払わねばならんのは当然だ。そうだな、少尉？」

「はい、閣下」

俺たちは顔を見合わせ、苦笑し合いながら砦に入った。

第16話「戦地の乙女たち」(図あり)

【第16話 戦地の乙女たち】

< i 5 4 7 0 7 7 — 3 5 6 7 8 >

第六特務旅団の兵はゼツフェル砦の中庭にテントを張り、よつやく腰を落ち着けることができた。

「参謀殿、設営完了しました」

俺のテントにやってきたハンナ下士長が報告し、びしりと敬礼する。

それからこう言った。

「ところで砦の守備兵が男性ばかりなんです……」

「そりゃそうだろう」

帝国では若い男性が慢性的に不足しているが、さすがに女性兵士は滅多にいない。

「貴官たちは守備隊の兵士には少々刺激が強いかもしれん。危険を感じたり、嫌な目に遭ったりしたときは遠慮無く俺か旅団長に報告しろ」

「あ、ありがとうございます！」

ほっとした表情で再度敬礼するハンナ。

並みの男性兵士が見上げるほどの長身を誇るハンナでも、やはり

男性は怖いらしい。この世界の男は乱暴だから無理もないか。前世基準だと、ちょっと眉をひそめたくなるような野蛮さだ。

思わずつぶやく。

「世の男どもは妻や恋人を殴るのが男らしい振る舞いだと思っている。呆れて物も言えん」

「そう……ですよね？」

なんで不思議そうな顔なんだ。

もつとも前世でも何十年か昔はそんなものだったと聞く。「常識」はめまぐるしく変わるものだ。

「旅団長と俺が貴官たちを守る。無礼な真似をされたら遠慮無く言え。向こうの師団長に抗議してやる。この師団は助けに駆けつけた友軍に相応の礼節も保てないのか、とな」

「はい、参謀殿！」

にこにこ顔のハンナは、俺の机にもう半歩ほどにじり寄ってきた。「参謀殿はなんだか不思議な方ですね？ 平民っぽくないですし、貴族っぽくもないです」

「よく言われる。路上育ちだからかな」

適当にはぐらかしておいたが、俺は転生者だから価値観が全然違うのは当たり前だ。

ハンナはもつと何か言いたそうな顔をしていたが、そこにアルツアー大佐が入ってきた。

「ここにいたか、少尉」

「これは閣下」

俺は立ち上がったってハンナと共に敬礼する。

大佐はハンナを見て命令を下す。

「ハンナ、すまないが中隊員の食事を頼む。それと洗濯場を借りる手配をしたので、交代で洗濯を済ませるように。言うまでもないが肌着類は隠して干せ。ここは旅団本部とは違う」

俺も少し付け加えておこう。

「あと、どんな場合でも複数人での行動を徹底させてくれ。特に手洗いに行くときは着剣した銃を持った護衛を表に立たせた方がいい。テントの中以外では決して制服のボタンを外すなよ」

「りよ、了解しました。ええと……メモしますので少々お待ちを！」
俺たちの言葉をメモしてから、ビシツと敬礼して駆け出していくハンナ。下士長は兵士たちのお母さんだ。

それから大佐は俺に向き直ると、声を潜めてこう切り出した。

「砦の内部を見たか？」

「見ました。博物館でなければ骨董屋ですよ」
酷いものだ。

「外観からわかっただけはいいましたが、ここは弓と投石器でやりあった時代の砦です」

俺はテントの隙間から見える城壁を示す。

「高い城壁は歩兵や石弾の侵入を阻むためのもので、火砲を想定していません。横殴りに強烈な一撃をくればあっけなく崩壊します」

大佐は腕組みし、軽くうなずいた。

「ここはもともと地元領主の城館だったらしいからな。山賊退治と街道警備の拠点だったとか」

時代遅れの上に戦争用じゃないのか。こりゃ防御力は期待しない方がいいな。

「少尉。ここで起こりうる、あらゆる事態に対して作戦を立案できるか？」

大佐の問いに、俺はちょっと格好つけて答えてみせる。

「もちろんです。参謀肩章は飾りではありません」

こんなボロ砦でどうにかできることなんてたかが知れてるから、逃げる算段を整えておかないとな。逃げてしまえば安泰だ。司令部で留守番をしてる第三小隊に連絡を送っておこう。

そんなことを思いながらふと隣を見ると、大佐が微笑みながら俺を見ていた。

「まったく頼もしいな、貴官は」

「恐縮です」

「私たちは戦場を知らんからな。経験豊富な将校がいてくれるのは心強い」

美人の上司から褒められるのは悪くない気分だ。前世ではこんなこと一度もなかったし。

大佐の期待を裏切らないよう、これからも励むとしよう。と思っていたら、大佐がふと思いついたように言う。

「少尉、悪いが兵たちに戦況の説明と防衛戦の講義を頼む。自分の頭で考えられる兵に仕上げたい。内容は任せる」

「承知しました」

期待が大きいのはいいんだけど、結構いろいろ頼まれるな……。

* * *

俺はみんなを集め、大佐に命令された通りにレクチャーを始めた。「ゼツフェル砦は、あのゴドー要塞の支城にあたる。見えるか、あの要塞？」

砦の西側、山の頂上に黒々とそびえ立つ国境警備の拠点だ。ここからでも威圧感がある。

「ゼツフェル砦は要塞につながる街道を守る役割を担っている。この砦が健在なら、敵は要塞を完全には包囲できない。援軍や物資が街道を通行できるからな」

もし敵が砦ごと要塞を包囲すると、その包囲網は長大で薄いものになる。破るのは容易になるだろう。

要塞をどう攻めるとしても厄介になるのが、このゼツフェル砦だった。

すると兵士の一人が挙手する。

「参謀殿」

「なんだ？」

「敵がゴドー要塞より先にここを攻撃してきたら、どうなります？」
不安そうな顔をしているな。

俺は笑顔で応じる。

「その場合、ゴドー要塞からの猛烈な砲撃が敵を襲うだろう。さらに街道から援軍が到着すると、敵は要塞と援軍に逆包围されることになる」

「ということは要塞が陥落したらここもおしまいなのだが、そこは黙っておく。なんせこの講義、守備隊の連中もチラチラ見ている。やりづらいな。」

「このゼツフェル砦にいるのは第三師団の砲兵中隊だ。戦力は六門の小型砲と護衛の歩兵が三十人ほどで、残りは砲兵と軍属しかない。不足している歩兵を補うために我々が派遣された訳だ」

まあ、ここで撃ち合いになるとは思えんのだが……。

「ゴドー要塞には他にもいくつか支城があり、ゼツフェル砦が攻撃されるのは他の支城があらかた陥落した後になる。我々が必要とされる時は負けたら後がないと思え」

リトレイユ公がここに第六特務旅団をねじ込んだのは「政治的な理由」らしいから、まあ戦いにはならないだろう。

ならないと思う。……ならないといいな。
だんだん不安になってきた。まあ、ちよつと覚悟しておくか。
最悪の事態でも対処する猶予はあるはずだ。なかつたらもう知ら
ん。

「各自、装備の点検はしておけ。それと砦の構造を把握しておくよ
うに。それだけ済んだら待機任務だ。交代で休養しろ」
いつ戦闘が始まるかわからないので、今から殺気立っていたら体
がもたない。
俺は後のことを下士長たちに任せ、ゼツフェル砦の周辺を見て回
ることにした。

* * *

【戦列乙女たちのささやき】

「ようやく休める……」
「といつてもテントだけだね」
「野宿よりはマシよ。怖くて眠れないもん」
第六特務旅団の女の子たちは銃の点検をしながら、わいわいと雑
談する。雑談は数少ない娯楽だ。

「ねえねえ、ここって体洗うところあるのかな？」
「ないんじゃない？ 水汲んできて布で拭くぐらいがせいぜいでし
よ」
「うえー」

話題はやがて新任の参謀のことになる。

「そっぴゃさ、クロムベルツ参謀っていつも身綺麗だよな」

「うん、男臭さが全然ない。ていうか、体臭が何にもない」

シュワイデル人は滅多に入浴しないが、日本人は毎日入浴する習慣がある。

クロムベルツは入浴できない日も清拭しており、体臭の濃いシュワイデル人の中ではやや浮いた存在になっていた。

「身綺麗なのはいいんだけど、あたしはちょっと物足りないかなあ」

「私は男臭いのダメだから参謀好き」

「カツコいいしね。親切だし怒らないし」

「確かにここ守備隊の人たちと比べると破格の物件よね。狙っちゃおうかな？」

銃身のクリーニングをしていた兵士がそう言うと、隣の兵士が首を横に振った。

「ライバル多いからやめといた方がいいわよ。ハンナ隊長も狙ってるみたいだし」

「まじで!?! うあー、勝ち目ないじゃん」

若い女性兵士はクリーニングロッドを握りしめて天を仰いだ。

「参謀はハンナちゃんを見ても驚かなかったし、背が高いのをからかったりもしないんだよね」

「うん、今までの参謀とは全然違う」

しかし女性兵士は拳を握って力強く言う。

「でも誰を選ぶかは参謀が決めることだから！ 私にもチャンスは

ある！」

「あるといいねえ」

* * *

第17話「烽火の砲火」(前書き)

次回から週2回更新になります(火・金)

第17話「烽火の砲火」

【第17話 烽火の砲火】

ゼツフェル砦に駐留した翌日から、俺は砦の外をうろちよろしていた。単身で外に出るのは危険なので、ハンナ下士長と砦の守備兵についてきてもらう。

「砦の周囲は木が一本もないな」

「はい。守備隊長の命令で欠かさず伐採しております」
守備兵が即座に答えたので、俺は笑顔で応じておく。

「さすがは精鋭ぞろいの第三師団だな」

「きよ、恐縮です」

照れくさそうな顔だ。お世辞だから、そんなに喜ばれるとこちらが恥ずかしくなる。

ハンナが不思議そうに質問してきた。

「参謀殿、なんで木を伐っちゃうんですか？ 木があった方が砲弾避けになりそうですけど……？」

「もちろんそれはあるが、視界が通らないとこちらの砲撃も当たらないからな。知らないうちに歩兵が城壁下まで接近してたりするし、森に火を放たれると厄介だ」

ハンナは人望もあるし忍耐強いし統率力もあるので指揮官向きだ。アルツアー大佐が抜擢しただけのことはある。

いずれは幹部として上士官待遇にしたいというのが大佐の意向なので、こうしてあれこれ教えることになる。

「ゼツフェル砦に敵の砲撃が届くときは要塞が陥落してははずだから、どのみちもうダメだろう。あの砦はゴドー要塞の後方連絡線を守るための砦だ」
「なるほど」

ゴドー要塞の前方には砦がいくつもあり、そちらにも援軍が入っていると聞いている。彼らがブルージュ軍の山岳猟兵を蹴散らしてくれることを祈ろう。

* * *

「と想っていたのだが、戦況はどうも妙な方向に転がり始めていた。参謀殿、参謀殿！」
「うちの女の子たちが俺のテントに駆け込んできた。職員室にやってきた生徒のノリだ。」

俺は通知簿……ではなく中隊員たちの勤務態度を記録していたところだが、ペンを置いて立ち上がる。

「どうした？」

「遠くから大砲みたいな音が聞こえるんです！」

「本当か？」

耳を澄ますと、確かに花火大会みたいな音が聞こえてくる。もちろん花火大会ではなく、戦争をやっている音だ。集中してたから全然気づかなかった。

女の子たちはそわそわしながら、テントに置かれている俺の荷物を見ている。

「参謀殿の望遠鏡があれば見えますよね？」

「どうだろうな。とにかく俺も行く」

音の感じからして、山を隔てた向こう側のような気がする。

ゼツフェル砦の城壁からは、山頂にそびえるゴドー要塞が見える。官給品の望遠鏡で覗いてみたが、砲火は確認できない。

ただ、うつすらと砲煙のようなものが立ち上っているようだ。

「要塞から山の向こう側に撃ってるな」

「もしかして要塞が攻撃されてるんですか!？」

「えっ、戦争!？」

「参謀殿、怖いです!」

お前ら……。

とはいえ、初めての戦場だと誰でもこんなもんだ。俺も最初は怖くて仕方なかった。

「俺たちは戦争するのが仕事だぞ？ 給料分働いてもらっつからな」

「わかってますけど怖いんです！」
「参謀殿の鬼！ 悪魔！ 死神！」
どうせ俺は死神だよ。

でも泣いたり腰を抜かしたりしないだけ、下手な新兵より肝が据わってるな。きゃあきゃあ騒いでいるのも、ある意味では余裕の表れだ。思ったよりもストレス耐性は高いらしい。少し安心した。
俺は集まってきた女の子たちに説明する。

「要塞が砲撃をしているのはたぶん間違いないが、砲撃を受けている様子は確認できない。おそらく前線の支城が攻撃を受けているんだろう。要塞は支城を援護するために砲撃しているんだ」

俺はそれだけ言うと、一同に解散を命じた。
「後は俺と旅団長の仕事だ。お前らは普段通りにしてろ」
それにしても妙なことになってきたな……。

* * *

翌日、事態はますます妙なことになってきた。
「支城のひとつが落とされただど？」
守備隊長のダブル大尉の報告に、アルツァー大佐が眉をひそめる。

「第三師団は『ブルージュの連中を躡けるため』に動いていると聞いていたのだが」

「申し訳ありません。私も動揺しております」
「そうだろうな。いや、すまない」

大佐は軽く手を挙げて謝罪しつつ、こう続けた。

「攻撃する側が攻撃されているということは、予定が狂いつつあることを意味している。少尉、戦況の分析を」

この席で俺に振るのかよ。

しょうがないな。ダンブル大尉には悪いが、職務として言わせてもらおう。

「戦況は悪いと言わざるを得ません。要塞陥落を視野に入れるべきかと」

「なっ!?!」

ダンブル大尉が動揺する。

「少尉、口を慎んでくれ。ゴドー要塞は第三師団の重要拠点だ」
だが俺は即座に反論する。彼は二階級上だが、別に俺の直属上官ではない。

「お言葉ですが、重要拠点だからこそ攻め落とす価値があるのです。敵も対応の覚悟と準備が必要になりますが、彼らは支城攻略をやつてのけました」

もしゴドー要塞を奪われると、ここら一带はブルージュ公国の支配下に入る。ここは五王家のひとつ、ミルドル家の領地だ。ミルドル派の第三師団は面目丸潰れになる。

だからダンブル大尉は絶対に認めない。

「ありえませんが、ゴドー要塞は帝国屈指の堅城。地の利に加え、第三師団の精銳が駐留しています。ブルージユの山岳獵兵ごときに負けるはずがありません」

彼は決して無能な人物には見えないが、そんな彼でも冷静さを失うほどゴドー要塞は大事な拠点らしい。

アルツアー大佐が冷静に諭す。

「大尉、落ち着きたまえ。我々の世界では『負けるはずがない』は禁句だ。そうだな？」

「そ、そうでした。申し訳ありません、大佐殿」

よかった、冷静になってくれた。

ダブル大尉は額の汗を拭い、そわそわと落ち着きのない態度で俺たちを見た。

「要塞司令からはゼツフェル砦の防備を固めるよう、通達がありました」

大佐がびくりと眉を動かす。

「援軍要請ではなく、『防備を固める』と？」

「はい。どのみち第六特務旅団は要塞司令の指揮系統には入っていませんし」

「それはそうだが少々気がかりだな。そうは思わないか、少尉？」

だから何で俺に振る。漫才か。

「同感です、閣下。ブルージュ軍が要塞への包囲攻撃を企図しない限り、山の裏側にあるゼツフェル砦が攻撃を受けることはありません。こここの防備を固めるとしたら、他に考えられる理由は……」

すると大佐が前髪をもてあそびつつ、フツと笑う。

「『要塞の陥落』。そうだな？」

「はっ」

ちくしょう、一番おいしいところを取られた。ズルいぞあんだ。

大佐はダンブル大尉に向き直り、穏やかな口調で言う。

「こちらからは見えないが、山向こうにはさぞかし珍しい光景が広がっているのだろう。要塞の連中はそれが見えているが、我々には見せたくないらしい」

「む、むむ……」

ダンブル大尉の顔色が悪い。お手伝いに来ている俺たちと違って、彼はここから逃げられないからな。逃げたら銃殺刑だ。

彼はとうとう覚悟を決めたように背筋を伸ばす。

「やむを得ません。小官は命令を全うするまでです」

叩き上げの大尉だけあって、いざとなれば肚が据わる。やはり守備隊長を任されるだけのことはあった。

大佐は穏やかにうなずく。

「安心しろ、我が旅団は貴官の部下たちを見捨てない。たとえ『見

「ただだけは綺麗』だの『お飾りの旅団』だの言われようともな」
「どうやら兵たちから陰口を叩かれていたらしい。」

青くなったり白くなったりしているダブル大尉を見て、大佐はクスクス笑った。

「貴官の部下たちに我々が役に立つところを見せねばな。期待して
いてくれ」

「はっ、はいっ！」

気の毒な人だ。

要塞の火砲が不吉な音を轟かせ始めたのは、そんなやり取りのすぐ後だった。

まずいな……。

第18話「死神の追憶」

【第18話】

ゴドー要塞から、前とは比較にならないほどの砲声が聞こえてくる。大型の要塞砲をぶっぱなしている音だ。それと前後して要塞から旗信号で通達がある。

「『ワレ、多数ノ敵ヨリ包囲攻撃ヲ受ケツツアリ。警戒サレタシ』
……か」

望遠鏡を覗いて確認しつつ、俺は渋い顔にならざるを得ない。

ハンナ下士長が不安そうな顔をしている。

「包囲攻撃を受けてるって、要するに本格的な城攻めになってるってことですか？」

「そうだ。支城のひとつが陥落したから防衛網に穴ができています。たぶん敵はそこを足掛かりにして攻撃してるんだ」

このゼッフェル砦もゴドー要塞を守る支城のひとつではあるが、山向こうの敵にはどうやっても攻撃できない。ここは後方との連絡線を守るための砦だ。

「ダンブル大尉からは守備を固めるよう要請があった。第六特務旅団は歩哨に立つ。砦内部の巡回も行うぞ。二人一組^{ツーマンセル}を徹底しろ」

「でも今攻められてるのは要塞ですよな？」

「俺が敵の司令官なら、要塞後方に斥候や遊撃隊を展開して支城との連携を断つ。すぐに砦の周辺に敵がちらつき始めるぞ」

要塞や街などの攻防戦は職業軍人の専門技術だから、士官学校では当然のように叩き込まれる。補給路を断って孤立させるのは基本中の基本だ。

みんなが緊張しているようなので、俺は笑顔で冗談を言う。

「さあ新兵諸君、敵が砦の守り方を教えてくれるぞ。授業料は鉛玉だ。忘れず払え」

シュワイデル兵はこういうジョークが大好きだ。俺も割と好きではある。

……ただ、うちの中隊の女の子たちはあんまり食いついてこなかった。

「はあ」

「わかりました……」

メチャクチャ滑ったぞ、おい。なんか勝手が違うな。

隣にいるハンナもなんだかぼんやりしていたが、やがてハツとしたように慌てて叫んだ。

「こら、見とれてないで敬礼！」

「はっ、はいい！」

こんな状況で何に見とれてたんだ。逆にすげえよ。

だが恐怖で萎縮していないのならそれでいい。俺は笑いながら答礼する。

「何も心配することはない。どう動くかは俺と大佐が考える。諸君は訓練通りにやれ」

みんな敬礼したままコクコクとうなずいている。いいガッツだ。

とりあえず俺は俺の仕事をしよう。安請け合いた以上、士官らしい働きは見せないとな。

俺が大佐のところに戻ると、彼女は手紙を読んでいるところだった。軍の指令書ではない。貴族が好むおしゃれな封書だ。

「少尉、状況は？」

「良くありません。ゴドー要塞から大型の要塞砲で撃ちまくっていますが、勝っているときの音ではないです」

「砲声でわかるものなのか？」

「ある程度は」

砲術は熟練の職人芸であり、緻密な数学でもある。どの一発にも意味があるのだ。

だから詰め将棋のように「攻め」の砲撃をしているときと、追い詰められてメチャクチャに撃ちまくっているときとは砲声の間隔とか揃い方がちょっと違う気がする。なんとなく。

「あの音はヤケクソで撃ちまくっている感じですね。敵の侵攻を食い止めるために撃てるだけ撃っている印象です」

「なるほど」

大佐はじつと考え込む。

「砦の対応は？」

「うちの中隊で歩哨を厚くしました。ダンプル大尉は砦の砲を要塞側に集めるそうです」

砦に置いてあるのは移動が容易な小型の野戦砲だ。射程も威力も控えめだが、軽くて動かしやすい。

「少尉。貴官の考えを聞きたい」

「我が中隊のことだけ考えるのなら、さっさと逃げたいところですが……」

「そもいかないよな。俺は頭を搔く。」

「要塞陥落までは敵の本格的な侵攻はないでしょう。ただ要塞との連絡路は既に危険です。遮断されている可能性は高いかと」

「そうだな。連携を断っておけば、要塞から兵が撤退することも、こちらから援軍を送ることもできなくなる」

大佐は実戦こそ未経験だが、貴族だけあって基本的な軍学は修めている。理解が早い。

彼女は俺に手紙を見せた。

「リトレイユ公からの密書だ。ゼツフェル砦を死守するようしくしく言ってきている」

「お言葉ですが、彼女は軍人でも何でもないのでは？」

「だが政治家だ。それも帝国で『五指』に入るほどのな」

大佐の渋い顔で俺は全てを察した。裏で手を回されているらしい。

大佐は制帽を被り直しながら溜息をつく。

「軍人が政治に口を挟むのと同じくらい、政治家が軍務に口を挟むのは不健全だろう。だがこれが我が帝国の実情だよ」

文民統制なんて概念はまだない世界だが、どちらにせよリトレイユ公には軍に干渉する権限なんか持ってない。建前上、シユワイデル軍は皇帝の軍隊だ。

「もともと実態は全然違うのでこういう暴挙がまかり通る。まあしょうがない。」

「では実情に即して対応しましょう」

「すまん。貴官には苦勞をかける」

やめてくれ。そんな顔をされると俺も頑張っちゃうじゃないか。

「この砦を死守する意味があるとすれば、要塞に援軍を送るためでしょう。リトレイユ公は門閥の將軍たちを通じて第五師団を動かします。今ひとつ信用できませんが」

「確かに信用はできないが、どのみち撤退するにはもう遅い。遅滞戦闘の作戦計画を立案しろ」

「はっ」

遅滞戦闘かあ……。敵の規模や企図、それとどれくらい引き延ばすかで選択肢は変わってくる。今回は選択肢がほとんどない。

それに俺も大した将校じゃないから、寡兵で大軍を撃破するような鮮やかな作戦なんて考えつかない。帝国軍の教本通りにやるだけだ。

俺は遠くに聞こえる砲声をBGMにしながら、自分のテントに籠もって考える。

この砦は構造的に砲撃に弱い。砲兵が来たらアウトだ。こちらの砲は軽量の野戦砲だから、砲撃戦での撃ち合いに優位性はない。

それなら歩兵が相手なら勝てるか？ 野戦砲は対歩兵を想定しているし、うちの中隊がいるから砦の銃眼を埋めるぐらいはできるだろう。何とかなる、かな？

もっとも敵だってそんなことはわかっているだろうから、歩兵がここに押し寄せてくるときには砲兵の支援があるはずだ。

「砲兵……」

俺はふと、物凄く嫌なことに気づいてしまった。

慌てて外に飛び出すと、要塞を望遠鏡で確認する。

「クソッ！ やっぱりか！」

要塞の城壁には、こちら側にも多数の砲門があった。今は全て閉じられているが、砲を移動させればこちら側に砲撃できるはずだ。

「どうしたんですか、参謀殿？」

ハンナが不思議そうにしているので、俺は声をひそめて答える。

「ゴドー要塞が陥落したら、俺たちは要塞からの砲撃を受けるぞ」
「えっ!?!」

わたわたと要塞を振り返るハンナ。

「敵に砲を乗っ取られるってことですか!?!」

「そうだ。あの高さから要塞砲を撃てば余裕でここまで届く。本来はそれでゼツフェル砦を支援するんだが、敵が使つのなら目標はこ
こだ」

通常、要塞が陥落すれば支城を守る意味も防御力もなくなる。だから要塞が陥落したら支城の守備隊は撤退する。

しかし今回は要塞陥落後もここを守れとリトレイユ公が言っている。

無理だ。守れない。こんなもん全員戦死するに決まってる。

……と思つたが、俺は内心で首を傾げる。

この状況になつてもまだ、『死神の大鎌』の感触が全くない。今の俺には生命の危機が及んでいないらしい。

俺が『死神の大鎌』と呼ぶ一種の予知能力は、少し先の死も予知することができる。ここに留まることが俺の死を意味するのなら、すでに警告を発しているはずだ。

たとえばストリートチルドレン時代、こんなことがあった。

あるとき、路上に白パンの入ったバスケットが落ちていた。 雑穀

入りの酸っぱい黒パンが庶民の主食だから、白パンといえはお菓子も同然。

幸い、落とし主らしい人物は見当たらない。

せっかくなのでこいつを今日の夕飯にしよう。

だがそう思ったとき、例の『死神の大鎌』が喉元をゾクリと撫でた。

よくわからないが、これを食べると死ぬ。

落ち着いて考えてみると、こんな下町の路地裏に白パンが落ちているはずがない。こういうのを買う連中は、治安の悪い裏通りを決して歩かないからだ。

残念だけど、パンは捨ててバスケットだけもらっておくか。

などと考えていたら、他のストリートチルドレンたちに襲われてバスケットごと強奪された。下手に抵抗しなかったおかげで死なずに済んだ。

そして翌日、そいつらの大半は変死体になっていた。みんな指が血だらけで、爪が全部剥がれていた。相当激しく苦しんで石畳を引っ掻いたらしい。

傍らには空っぽのバスケットが落ちていた。

たった一人、パンを一切れしかもらえなかったというちびっ子がかるうじて生きていた。だが俺の手当の甲斐もなく、その日の夜に

息を引き取った。

そいつは何度も俺に「ユイナーごめんよ……俺たちバチがあたっ
たんだ……」と謝っていた。

最期の言葉が「母ちゃんにもう一回会いたい……」だったのを今
でも覚えていいる。

たぶんどこかの貴族が毒薬の効果を試すために、あるいは面白半
分に毒パンを放置したんだろう。害獣や政敵の駆除などで貴族と毒
薬は縁が深い。

こんなことは日常茶飯事だ。

だから『死神の大鎌』は路上生活に不可欠の力だった。この力は
数日先の死でも見破る。死を回避する方法は教えてくれないが、俺
の前途に死が横たわっていることを教えてくれる。

その『死神の大鎌』が今は沈黙している。

もちろん、味方が全滅して俺一人が捕虜になるような結末でも『
死神の大鎌』は何も言わないだろうから過信は禁物だ。

とはいえ、どのみち逃げるにはもう少々遅すぎる。退却中に追撃
を受けるとマスケット銃兵は脆い。将校でも降伏する暇もなく殺さ
れる可能性がある。

それなら籠城戦で降伏したほうがマシだ。

脆弱な砦、軽量小型の大砲、新兵だらけの部下、不確実な援軍、
参謀少尉の権限、『死神の大鎌』。

与えられた手札を俺はどう使うべきだ？ どこに突破口がある？

俺は望遠鏡を下ろして考え込まざるをえなかった。

第19話「貴女の命で賭けがしたい」

【第19話】

「要塞が敵に奪われれば我々は猛烈な砲撃に晒される可能性がある。だがそれでもここを守るべきだというのが」

アルツアー大佐はそう言っ腕組みし、腰掛けたまま俺を見上げた。

「貴官の提案はときどき難解だな。説明してくれ」

「はっ」

まさか「いやあ、転生したおかげで予知能力に目覚めちゃいましたね」などは口が裂けても言えない。

俺はあの後、椅子を抱えて砦のあちこちをうろつきまわった。そして椅子に腰かけ、本気で考える。「今日からここで仕事しようかな?」と。

もしその地点が砲撃で死ぬような場所なら、さすがに『死神の大鎌』も何か言ってくるだろう。

……まあこんな使い方がないので正確に予知できたかどうかなんてわからないのだが、とにかく『死神の大鎌』は無反応だった。

俺が砦のどこにいようと、それだけが原因で死ぬことはないらしい。本当かな?

ともあれ、俺は「たぶん大丈夫だろう」という物凄くあやふやな確信を得るに至った。

あまりにもいい加減すぎて自分でも笑っちゃうが、少なくともこの砦が要塞砲で木っ端みじんになる未来はなさそうだ。

俺は『死神の大鎌』の結果から導き出されたこの結論を、適当に理屈をつけて説明した。

「敵は山岳猟兵です。ご存じでしょうが、猟兵は猟師たちを集めたもので、歩兵としては手強いですが砲術は素人です」

大佐は帝国貴族として軍学を修めている。下手な嘘はつけない。「ブルージュ軍には専門の砲兵科がなく、砲の運用は歩兵隊の中でやっています。シュワイデル砲兵のような専門教育を受けていないはずですから、まず当たりません」

大佐はじつと俺を見て、それからこう言う。

「我々の世界では『負けるはずがない』は禁句だ。『当たるはずがない』もそうだな？」

「仰る通りです」

やばいぞ、論理的に切り崩されかけている。

だがこちららも詭弁はお手の物だ。俺はにこやかに微笑み、悪徳セールスマンみたいな口調で丸め込みにかかる。

「要はどちらのリスクを受け入れるかです。リトレイユ公やダンブ

ル大尉の反感を承知で撤退するか、踏み止まって砲撃に怯えるか」

俺はさらに大佐に言う。

「撤退するにしても、近隣には第三師団の駐屯地しかありません。ゼツフェル砦の守備を放棄した第六特務旅団を助けてくれるとは思えません」

旧時代の遺物とはいえ、ゼツフェル砦にも歩兵の攻撃を防ぐ力はある。マスケット銃兵は遮蔽物に守られてこそ真価を発揮する。追撃を受けて野戦になれば被害は遙かに大きくなるだろう。

大佐は頬杖をついてしばらく無言で考えていたが、やがてこう言った。

「貴官はつまり、下手に逃げるぐらいならここで砲撃の標的になっていた方がマシだと言いたいのか？」

怖い顔しないでください。美人だから余計に迫力がある。

俺は動揺を押し隠し、当然のような顔をして答える。

「検討するまでもありません。ここで逃げても命以外に得るものはありませんが、その命とて保証の限りではありません。待ち伏せや騎兵の追撃でもあれば、新兵同然の我が旅団など簡単に壊滅します」
「確かにな」

「一方、援軍到着まで持ちこたえれば第六特務旅団は英雄です。馬鹿にする者はおりますまい」

援軍が間に合えばの話なんだけど。
でも『死神の大鎌』がその可能性があることを指し示している。

大佐はまじまじと俺の顔を見つめた。

「直属上官と自分の命を賭け金として積んでいるのに、何とも落ち着いた態度だ。貴官は無類のギャンブル好きか、命知らずの愚か者か、それとも……」

それから彼女はフツと笑う。

「希代の名参謀か」

たぶん全部違つぞ。ちょっとだけ予知ができるただの転生者だ。

大佐は勝手に納得したようで、うんうんとうなずく。

「いいだろう。平民出身の貴官にそこまでの度胸を見せつけられては仕方がない。私の命を賭け金に使っていいぞ」

「では遠慮無く」

なんかこの会話、悪役っぽくない？俺のキャラが変な方向にねじ曲がってない？

戦いの結果よりも今後の人間関係が心配になってきた。

ゼツフェル砦に残ることに關しては、未だに『死神の大鎌』は何も警告を發していない。俺が砦のどこに移動しても同じだ。

今のところゼツフェル砦の全域が安全地帯のようだ。

もつとも後から急に「ヤバいぞ逃げろ」と警告してくる可能性もある。これは俺自身にとっても賭けではある。

だが戦場に完全な安全地帯などないし、人生にも絶対安全な選択肢はない。

俺は自分自身に言い聞かせるつもりで笑ってみせた。

「将来のための割のいい投資です。今回は行軍も突撃も必要ありません。座っているだけで勝てます」

これじゃ詐欺師だよ。

こんなやり取りの後、俺は女子歩兵たちからヒソヒソ声でささやかれることになる。

「参謀殿、アルツァー様に『私の命を使っていいぞ』って言わせたいんですって」

「さすが『死神参謀』……」

なんか俺のキャラ付け、変なことになってませんか？

その間も要塞からの砲声はひっきりなしに轟いていたが、やがて急に途絶えてしまった。

「敵に占拠されたか」

大佐がそう言うので、俺は望遠鏡片手に答える。

「ですが帝国の軍旗はまだ掲げられていますし、微かに銃声も聞こえます。こちらは極力静かにして、無人の砦を装いましょう」

「なぜだ？」

「要塞陥落がほぼ確実になれば、敵は次の行動のために斥候を放ちます。ここにも来るでしょう。静かにしていれば大胆に接近してくるかもしれない」

俺はそう言つて、傍らに置かれた細長い包みを見た。

「あれの試射にはちょうどいいかと」

「なるほど。貴官のやることには無駄がないな」

なんか自分でも「こうなることは最初から全部お見通しだよ」みたいになつてゐるんだけど、全然そんなことないからな？ 臨機応変というか、出たところ勝負だ。

そのとき、うちの歩哨から報告があつた。砦の周囲にチラチラ動いてゐるものがあるらしい。

俺はすぐに手近な銃眼に取りついた。

「参謀殿、あれです」

彼女が指差したのは、ゼツフェル砦からゴドー要塞に続く山道だ。

「一瞬ですが、あの茂みで何かが光りました。望遠鏡のレンズかと」

おお、なかなかいい判断だな。望遠鏡で確認すると、確かに茂みの中にブルージュ軍の青い制服が見えた。この時代の軍服はとにかく目立つ。

「よくやつた。お手柄だ」

すると女性兵士は無表情かつ、そっけなく応じる。

「恐縮です。どうしますか？」
「そうだな……」

この全く笑わない女性兵士は第一小隊の選抜狙撃手で、ライラ・ナツシユという。確か獵師の娘だと聞いている。そのせいか射撃は旅団屈指の腕前だ。

だが射撃の腕だけでなく、判断力も優れているらしい。

俺は用意していたライフル騎兵銃を差し出す。

「撃つてみるか？」

しかしライラは首を横に振る。

「慣れてないので」

俺が発注していたライフル騎兵銃は到着が遅かったため、検品を終えた時点で出陣になってしまった。動作確認だけでまだ誰も射的を行っていない。

当然、習熟訓練もまだだった。

さすがに狩猟で銃を扱っていただけあって、銃に関しては慎重だな。

「じゃあ俺が撃つか……」

ぐずぐずしてたら逃げられそうなので、俺は火蓋に点火用の火薬を入れる。残りの火薬は銃身に流し込み、弾丸と一緒に槊杖で突き固めた。

「お上手ですね、参謀殿」

「おだてないでくれ、軍人なら当たり前だ」

路上生活時代に貴族の私有林で密猟してたことは秘密だ。音を立
てずに素早く装填するのは慣れている。

スコープなんてものはまだ存在しない世界だし、距離は百メートル近くある。標的はこちらに気づいていないが、見えているのは上半身だけだ。

おまけに俺は転生者だが、ライフリングの入った銃を撃った経験は転生後に数年間しかない。
でもまあやってみよう。

どうせこの銃の癖も把握していないし、二発目のチャンスはない。当たるとは思わない方がいい。銃身を銃眼に預け、肩でしっかり固定する。

後はもう運任せだ。軽い気持ちで引き金を絞る。
バネ仕掛けで火打石が火花を散らし、一瞬遅れて銃が火を噴いた。

あ、外した。弾は敵兵をかすめて茂みを揺らしたただけだ。もちろんブルージュ兵はサツと伏せてしまう。やっぱりなあ。

ライラの手前、俺は苦笑いするしかない。

「俺の腕だとこんなもんだ」

……と思っていたら、茂みから別のブルージュ兵が血まみれになって転がり出てきた。もう一人いたのか。

撃たれた敵兵はうつぶせに倒れ、そのまま動かなくなった。

俺が狙ったのは隣のヤツだったんだけどな……。なんだか申し訳ない気持ちになる。

「へえ……」

ライラが驚いたような声をあげた。

違うんだ。今何か誤解しただろ。絶対に誤解してるだろ。その顔を見ればわかる。

気まぎれになつた俺は動揺を押し隠し、望遠鏡を取り出した。

うん、間違いなくブルージュ兵だな。

血に染まった制服を確認し、俺は胸を撫で下ろす。民間人とかじやなくて本当に良かった。すまん、ブルージュ兵。恨みっこなしで頼む。

ふと気がつくと、ライラが俺をじつと見ていた。相変わらず無表情なのに目だけキラキラしている。

「参謀殿、やりますね」

違うんだってば。やめろ、キラキラした目で見るな。

「死神の気まぐれだ。二度やる自信はないな」

俺は騎兵銃をライラに渡すと、制帽を深めに被り直す。

ライラの熱い視線が痛い。

「俺より貴官の方がうまくやれるだろう。他の選抜射手たちと一緒に使ってみる」

「はい、参謀殿」

ライラの尊敬のまなざしを眩しく感じつつ、俺は足早にその場を後にした。

だから本当にまぐれ当たりなんだってば。

第20話「命知らずたち」

【第20話】

* * *

やがてクロムベルツ参謀少尉の言葉通り、要塞からの砲撃が始まった。

アルツァー大佐は眉をしかめる。

「味方に撃たれているようで気分が悪いな。ところで少尉はどこだ？」

ハンナ下士長は困惑しきった表情で西側の城壁を指差した。

「それが……あそこにいらっしやいます」

「なに？」

そこは要塞からの砲撃に最も近い場所。要塞を占拠したブルージョ兵から丸見えになっている場所でもある。

「あいつは何をしている？」

「紅茶を運んでくれと頼まれましたので、お持ちしました。そのときは椅子に座って読書してらっしやいました」

「えっ!?! ……どういうことだ? 何だそれは?」

冷静沈着なアルツァー大佐が困惑している。極めて珍しいことだ。ハンナが冷静さを失った大佐を見るのは二度目だ。一度目は粉ひ

き小屋に繋がれているハンナを初めて見たとき。
そして二度目が今だ。

ハンナは大佐に説明する。

「危険な策を具申した以上、最も危険な場所にいるのが自分のやり方だと仰られました」

「見上げた根性だが、彼に死なれると私が困る。呼び戻せ」

そう言われてハンナは大柄な体を縮こまらせた。

「今ちようど、守備隊のダブル大尉殿が説得中です」

* * *

「君は何を考えてるんだ!？」

轟音にかき消されそうになり、ダブル大尉が大声を張り上げる。

「要塞砲の威力は知っているだろう!？ 直撃せずとも人を殺傷する力があるんだぞ!？」

俺はティーカップをサイドボードに置いた。水面が波立っているのは着弾の衝撃のせいだ。結構近くに落ちたな。

それから立ち上がって、俺は笑顔を見せる。

「御心配には及びません、大尉殿」

俺は要塞に向かって手を振ってみせる。どうせ見えてはいないだろう。

「この砲撃は素人のそれです。夾きょう叉しやを取りに来ていません」

その瞬間、砲兵大尉であるダンブル隊長はハツとした顔をした。
「……確かに」

ダンブル大尉は胸壁越しに周囲を見回す。

「修正射ができていない。かといって攻撃準備の砲撃でもない。教本にない砲撃だ」

「はい。歩兵か工兵が見よう見まねで砲撃しているのか、要塞守備隊の迎撃が激しくて砲撃に専念できないのか。いずれにせよ、この砲撃の脅威度は落雷と大差ありません」

あまり怖がる必要はない。むしろ今はじつと耐えるのが戦いだ。だから体を張って、こんなパフォーマンスをしている。

ダンブル大尉は少し落ち着いた様子で、まじまじと俺を見つめた。

「それにしても君が夾叉を知っているとは驚いた。歩兵科だろうか？」
「歩兵は砲兵の支援を受けねば戦えません。砲術の基礎は多少勉強しております」
「見上げた心がけた。うちの師団の歩兵将校たちに聞かせてやりたい」

「夾叉」というのは砲撃の誤差修正の方法で、統計学の実践でもある。少しずつ照準をずらして砲撃し、着弾点が標的をまたいだら、そのまま照準を固定して撃ち続けるのだ。

素人感覚では照準を少しいじりたくなるが、これが一番合理的な方法らしい。

要塞砲を奪取した敵は、この夾叉を取ることを意識していない。つまり要塞砲は本来の命中率を発揮できないことになる。

この世界の火砲はもともと命中率が高くないので、こんな砲撃にビビるだけ損だ。

とはいえ、皆の近くに着弾するたびに物凄い音がする。うちの女子歩兵たちなんか、さつきからキヤーキヤー悲鳴をあげっぱなしだ。ダンブル大尉も顔色が悪いが、さすがに砲兵将校だけあって俺の言葉は理解していた。

「それで君はこんなことをしているのかね？」

「そんなところです。素人のデタラメな砲撃なら、どこにいても被弾率は同じです。逃げ隠れする数学的な意味がありません」

「歩兵科出身の少尉から、まさか砲術の心得を聞かされるとはな
ダンブル大尉は頭を掻いたが、改めて俺をじろじろ見る。

「しかし何と言うか……君ほどの命知らずは見たことがない」
「光栄です」

砲撃を受けている皆のてっぺんで椅子に座って紅茶を飲んでいれば、まあそつとも思われるだろう。

だが俺には『死神の大鎌』があるので、死にそうになれば事前にかかる。今のところは安全だ。それにしてもなんでこんな予知能力が備わってるんだらうな、俺。

俺は大尉に椅子を勧めてから言った。

「砲撃が続く限り敵は歩兵を出してこないでしょう。歩兵は来ず、砲撃も当たらないとなれば、のんびり救援を待つだけでいいんですよ」

「当たらなければな……」

ダンブル大尉の顔色が悪いが、そりゃそうだろう。彼には俺のような予知能力がない。

「貴官はこの砲撃を恐れていないのか？」

「もちろん恐怖はしております。しかし将校が怯えていては兵が安心して戦えません。内心ではガタガタ震えながら『命知らずのふり』をしているに過ぎません」

『死神の大鎌』が本当にいつも正確かどうか、俺にはわからない。今のところ俺の信頼を裏切ったことは一度もないが、次はどうかわからない。

だがダンブル大尉は苦笑してみせた。

「君は嘘が下手だな。まるで戦場を楽しんでいるようだぞ。……ああ、そうか。君がああ『死神クロムベルツ』か。第五師団にいると聞いていたが」

第三師団の人がなんで知ってるの？

ダンブル大尉は頭を掻く。

「うちの師団には君の同期がいてね。はは、なるほど。噂以上だ」

どんな噂なんだろう……。

なんだか砲撃以上にそっちの方が気になったが、ダンブル大尉は勝手に納得したようです。いぶんすつきりした表情になる。

「君がただ者ではないことはわかった。好きにしてくれたまえ」

「ありがとうございます」

敬礼しつつ、俺は第三師団にいる同期のことが気になっていた。誰だ？

* * *

「誰なんだ、あいつは！」

ゴドー要塞の砲台でブルージュ歩兵が叫んでいた。

「見る！ あのシュワイデル将校、城壁の上でティータイムだぞ！」

「まじかよ！？ どういう神経してやがるんだ！」

158

要塞内部では激しい銃声が轟いている。要塞の中庭にはシュワイデル兵とブルージュ兵の死体が折り重なり、今も増えつつあった。

「なんだおい、こっちに手を振ってるぞ！」

「くそ、ふざけやがって！ ぶっ殺せ！」

要塞砲が轟音をあげる。砲弾は眼下の砦を大きく外れ、後方の荒れ地に土煙を立てた。

「右、右！ もっと右だ！」

「さっき右に修正しただろ！？」

大砲の弾道は火薬量や風向き、砲身の温度などでめまぐるしく変わる。全く同じ条件で撃つても弾道は微妙に違うのだ。照準器通りに撃つても当たらないものではない。

だが頭に血が昇っているブルーージュ歩兵たちは、「ナメた真似をしているシュワイデル将校」を吹き飛ばすことしか考えられない。

「なんで当たらないんだよ！」

「知るかよ、シュワイデル人がまともな大砲を作れねえだけだろ！」

次弾はさつきよりも少し右に寄せられたが、今度は遙か後方に飛んでしまった。さつきより遠い。

「もういい、俺にやら」

その声が途中で途切れ、喚いていたブルーージュ歩兵がどさりと倒れる。頭から血を流していた。

「なんだ!？」

ブルーージュ歩兵が振り向いたとき、彼らは目の前にシュワイデル砲兵が立っていることに気づく。深手を負って血まみれだ。

どこかに隠れていたのか、それとも死体と一緒に倒れていたのか。

「こつ、この野郎！」

全員が銃を構えたとき、誰かが気づく。

「待て、こいつ爆薬を抱えてやがる！ 撃つな！」

シュワイデル砲兵の生き残りは、小型の火薬樽を胸や腰にくくりつけていた。

その全てに導火線がついており、今まさに燃え尽きようとしている。

この周囲は火薬樽だらけだ。

「まっ……！？」

凍り付いたブルージュ歩兵たちを前にして、血まみれのシュワイデル砲兵はニヤリと笑った。

「どつちが高く飛べるか競争しようぜ」

* * *

第21話「爆炎と紅茶」

【第21話】

俺は今、上司とお茶会をしている。

「香りだけはディリモの二級ぐらいだが、どうにも喉に引っかかる味だな」

茶葉の品評をしてくださっているのは、我らが旅団長のアルツァ

ー大佐だ。

俺は紅茶の味なんかぜんぜんわからん。転生してから嗅覚や味覚が鈍くなった気がするのだが、もしかすると帝国の食文化が貧困だからかもしれない。

まあいいや。それより砦の近くに着弾したぞ。なんかパラパラが飛んできた。

「湯を沸かせるだけでも御の字ですよ。戦場は故郷の路地裏よりよっぽど清潔で快適です」

これは嘘ではない。軍人というだけで最低限の待遇は受けられる。士官ならもっと待遇がいい。戦地であってもストリートチルドレンよりは遥かにマシだ。

大佐は苦笑する。

「貴官のたくましさには参るな。これだけの弾雨でもか？」

そう言っているそばから砦の周辺に着弾するが、『死神の大鎌』

は沈黙したままだ。

俺は安物の紅茶を飲み、笑ってみせる。

「まだ本降りではありませんし、傘がいるほどではありません」
「なるほど」

またどこかに着弾した。

「それよりも閣下、こんなところで大丈夫ですか？」

「大丈夫だと思っっているから貴官はこんなことをしているのだろう？」

まあそうなんだけど。

実際、俺の近くにいた方が安全だ。

大佐は俺をちよっぴり睨む。

「どこにいようが確率的には同じなら、兵を鼓舞するために最大限のパフォーマンスをする。ここで茶でも飲んでいれば豪胆そのものだからな。どんな兵でも一目置くだろう」

「そういうことです」

俺は利己的で計算高い人間だから、こういう場面ではちまちまとポイントを稼ぎに行く。これも凡人の処世術だ。

だが同席しているハンナはそう思っていないようで、大柄な体を震わせていた。

「お、お二方とも、もう少し安全な場所に移動されてはいかがでし

よるか？」

「安全な場所があれば俺もそうしたいんだが……」

要塞砲の大きな砲弾が当たれば、この砦の壁も天井もあっけなく崩れてしまう。屋内にいる方が危険かもしれない。

まだハンナが小刻みに震えているので、俺は彼女を励ますためにこう言った。

「まあ心配するな。戦場では何が起きるかわからない」

だから完璧な対策を立てようとすると疲れてしまう。多少の凶太さは必要だ。

……と、言いたかったのだが。

次の瞬間、ゴドー要塞から大爆発が起きた。轟音で紅茶の水面が激しく揺れる。

要塞の石組が一部崩壊し、砲門や窓から火が噴き出した。大惨事だ。

よくわからない破片がこの辺りまで飛んでくる。制帽になんか当たったぞ。

「うわああああ！？」

ハンナがのけぞっている。

「えっ、何ですかあれ！？」

こっちが聞きたい。何だあれ。

だが驚いていても仕方ないので、俺は紅茶を飲みながら事も無げに言ってみせた。

「な？」

「まさかあれ、少尉殿の仕業ですか!？」
そんな訳あるか。

俺は首を横に振り、それから望遠鏡でゴドー要塞を観察する。

「砲台付近が派手に吹き飛んでいるな。砲撃じゃない。おそらく弾薬が誘爆したんだ」

大砲は火種で点火するので、火薬の管理が雑だとかういうことも起きる。実際はどうだか知らんけど。

見た感じ、こちら側に向いている砲台はどれも沈黙してしまつたようだ。外からはわかりにくいのが、中は黒焦げの死体だらけだろう。まともに稼働できる砲はもうないかもしれない。

俺にとつても完全に予想外の展開だったが、これで『死神の大鎌』が何も言わなかつた理由はわかつた。

俺は立ち上がり、制帽を被り直す。

「休憩は終わりだ。仕事をしよう」

「はっ、はいっ！ でも、どういうことですか？」

敬礼したハンナが困惑しまくっている。

すると大佐が代わりに口を開いた。

「要塞からの砲撃に巻き込まれる心配がなくなつた今、敵は歩兵を押し出してくる。他に砦を攻略する方法がないからな」

その通り。初陣でもさすがは貴族様だ。教本の内容はバツチリ暗記している。

俺はうなずき、大佐に伝えた。

「砦の被害状況を把握し、ただちに防衛態勢を整えるべきかと」
「わかっている。気をつけるべきことを教えてくれ」

転生前の知識で大活躍できりゃいいんだが、籠城の経験なんて転生後にしかないしな。

そっちの経験にしてもロクなもんじゃない。

「できるだけ頼もしげに振舞ってください。籠城側の士気が崩壊すると地獄絵図になります。逃げ場がありませんので」

「援軍の到着も定かではないのに士気を保てと言われてもな。まあいい、それぐらいはやるう」

事も無げに言ったぞ、この人。しかも笑顔だ。頼もしい。

大佐はコートを羽織り、制帽を少しずらしてラフな感じにする。それからニヤリと笑ってハンナに言った。

「第一小隊は防御塔の銃眼を守れ。第二小隊は城壁で索敵だ。我々がお飾りのお人形ではないことを教えてやれ」

「了解しました！」

俺は何をしようかな……。俺は旅団長のアドバイザーであって、歩兵たちの指揮官じゃない。戦闘が始まるとちよつと暇になってしまふ。

そう思っていたら、大佐が俺にスススと寄ってきた。

「貴官は私のそばにいる。必要な助言を頼む」

「はっ」

そりゃそうだ。ちよつとぼんやりしてたな。

大佐はさらにこう言う。

「私の拳動がおかしかったら、それも教えてくれ。今、かなり無理をしている」

ちよつと震えながら黒髪の軍服美人がそんなことを言うから、俺は思わず笑ってしまった。

「はははは！」

「笑うな」

アルツァー大佐に睨まれた。本気で怒っている訳ではなさそうだが、ちよつと恨めしそうだ。いくら度胸があっても生身の人間、やはり初陣への不安はあるらしい。

「失礼しました」

可愛いところあるな、この上司。

よし、精一杯補佐させてもらおう。

ゴドー要塞からの砲撃が沈黙すると、しばらくしてゼツフェル砦の前方に敵の気配がしてきた。木々の間からなんかチラチラ見えるし、茂みが不自然な揺れ方をしている。

予想通りだ。あの山道だと大砲は運べないだろうから、来るとし

ても軽い小手調べか。

俺は第一小隊と第二小隊の配置を確認し、それぞれに指示を飛ばす。

まずは第一小隊。

「この銃眼はもともとは矢狭間だ。縦に長いから絶対に立ち上がるな」

矢狭間は弓を効果的に使うため、縦長のスリットになっている。

銃眼とは似ているが違う。ちょっと怖いな。

それともうひとつ。

「装填手と射手の分業を忘れるなよ。射手が撃たれたら後送して第二小隊から射手を連れてこい」

彼女たちは射手一人と装填手二人のチームを組む。射手は三挺の銃をひたすら撃ちまくり、装填手たちは撃ち終わった銃にひたすら弾を込める。

フィクションで有名なあの「三段撃ち」に似ているが、こっちの方が洗練されている。チームの中で一番上手い射手が続けて三発撃てるからだ。

なお、元の世界でもこちらの世界でもごくありふれた運用法であり、そんな大層なものではない。マサケット銃で殺し合いをしていれば嫌でもたどりつく。

俺は階段を駆け上がり、第二小隊に指示する。

こっちは少し厳しめに言っておこう。

「全員、銃に着剣してるな。敵は隠れながら城壁をよじ登ってくる。銃剣で突き落とせ！絶対に慈悲をかけるな！侵入されたら容赦なく殺されるぞ！」

彼女たちの精神性はまだ普通の人と同じであり、殺し合いに慣れていない。銃剣で戦うような距離だとどうしても殺人を躊躇する。それが正常な人間の感覚だ。

こればかりはどうしようもないので、その備えもしておく。

「ミドナ隊長、戦えない兵が出たら下に下ろしてくれ。第一小隊の装填手をやらせる」

「了解しました」

アルツァー大佐の侍女をしていたというミドナ下士長は、緊張した表情で敬礼した。

やがてゴドー要塞がある山の麓、切り払われた森の端からチラチラと何かが見え隠れした。

さあ敵が来るぞ。

第22話「山岳獵兵の威力偵察」

【第22話】

ゴドー要塞のある山の麓から、威力偵察らしい小部隊が隠れながら接近してくる。

すかさずダンブル大尉がサーベルを振り上げた。

「制圧射撃だ！ 敵を森から出すな！ 砲撃開始！」

「制圧射撃！」

「制圧射撃！」

下士官たちが叫び、砲兵が大砲に点火する。放たれたのは大粒の散弾、通称「ブドウ弾」だ。散弾といってもマスキット銃の弾よりだいぶでかいし、破壊力も桁違いだ。

さすがに本職の砲撃は正確そのもので、木々の間から見え隠れしていた敵兵がみんな引っ込んだ。何人かは仕留めたかもしれない。

だが砲撃だけで決着がつくことはあまりない。

やがて数回の砲撃でおおよその感覚をつかんだらしく、敵は地面の起伏に隠れながら接近してきた。もちろん散開している。多数の散兵相手に少数の大砲では少々やりづらい。

となると銃で撃つしかないのだが、まだちょっと遠いな。

アルツアー大佐が叫んでいる。

「第一小隊はまだ撃つな！ 射程外だ！ 敵が撃ってくるまで隠れている！」

いい判断だ。初めてなのに頼りになるなあ。

一方、本職であるはずのゼツフェル砦守備隊のマスケット銃兵たちは動きが良くない。

「こら待て！ 撃つな！」

三十人ほどの歩兵を統率する下士官が叫んでいる。兵の一人が先走って撃つたのだ。

戦列歩兵は射撃のタイミングが極めて重要なので、勝手に撃たれると指揮官はとても困る。

この砦が最前線になったことは一度もないはずなので、やはり実戦経験と訓練が不足しているんだろう。こりやあまり期待できそうにないぞ。

「敵だ！ 敵が来てる！」

「そんなことはわかっとうる！ 黙って弾を込め直せ！」

いかついヒゲの中年下士官は渋い顔をしている。

第六特務旅団の兵はまだ誰も発砲していない。銃眼の陰に隠れて銃を抱え、射撃命令をじっと待っている。

大佐の人は選は的確だったようだ。みんな初陣にしては落ち着いている。

やがて散発的に銃声が聞こえてくるようになった。壁に銃弾が当

たる音がする。マスケット銃の弾は重くて威力があるので、当たる音もかなり派手だ。

「ひゃっ!?!」

「こわっ!?!」

第六特務旅団の女の子たちは首をすくめて小さくなっているが、逃げ出すような子は一人もない。みんな大佐を見ている。あと俺の方も見てる。

大佐も俺も平然としている……ように見えるので、みんな安心してようだ。

一方、ゼツフェル砦の守備兵たちは動きがぎこちない。お前たちの砦だろ、しっかり守れよ。

だが単に経験不足というには少々変だ。理由がわからん。すると大佐がつぶやく。

「少尉。砦守備隊の士気が崩壊寸前のように見えるが、問題ないか？」

まさか……?」

そう思っつてよく観察してみると、確かに兵が浮き足立っている。火薬をこぼしたり槊杖を置き忘れたりと、まるで落ち着きがない。まだ戦況は準備運動ぐらいなのにありえない話だ。

もつとも「ありえない」は禁句なので、俺は改めて考える。

ありえそうな要因を考えた俺は上官に進言した。

「ゴドー要塞の陥落で士気が著しく低下しているのかもしれない。

支城であるこの砦にとって、要塞陥落後に戦う理由はありませんから」

「なるほどな。よそ者である我々にはただの要塞でしかないが、彼らにとっては精神的な支えであり、戦う理由でもあった訳だ」

大佐はうなずき、俺を見てニヤリと笑った。

「彼らのために督戦隊を用意するべきだったかな？」

「閣下の優しさ、痛み入ります」

確かに督戦隊が背後で銃を持って見張っていれば、敵前逃亡する兵も激減するかもしれない。

よくそんな冗談がさらつと出てくるな。あんた初陣だろ？

しかしハンナが怯えている。

「大佐殿と少尉殿の会話が怖すぎるんですけど……」

「戦争とは怖いものだからな。私だって内心震えている」

大佐は微笑み、それからこう言った。

「だが最前線で戦う兵士たちを思えば、私などには怯える資格すらない。貴官もだぞ、ハンナ」

確かにそうだ。俺たち指揮官は兵に戦死しかねない行動を命令する権限を持っている。兵はそれに従う以外の選択肢がない。

「わ、わかりました！」

ハンナ下士長が慌てて敬礼する。

予想以上にアルツァー大佐が頼りになるので、ここはたぶん大丈夫だろう。彼女の統率力は俺なんかよりずっと高い。

となると、問題はゼツフェル砦の守備隊の方だな。

「閣下。小官はあちらの兵の様子を見ておきたいのですが」

「わかった。なるべく早く戻ってくれよ。一人では不安だ」

「いやあ、それだけ肝が据わってたら大したもんだよ。不安だとか言いながら笑ってるし。」

俺は大佐の豪胆さを少し羨ましく思いながら、守備隊の歩兵たちの方に向かう。

三十人ほどの歩兵が十箇所の銃眼を担当している。装填手も射手もみんな怯えた顔をしていた。

「こりゃダメだ。何かあれば、こいつらすぐに逃げ出すぞ。」

「諸君、調子はどうだ？」

俺が笑いかけると、守備隊の兵たちはびくついた顔をしてうなずいた。

「あ、あんたはさつき城壁で茶を飲んだ……」

「休憩時間は休憩するものだからな」

俺は落ち着き払ってうなずき、手近な銃眼をヒョイと覗き込んだ。

「いい天気だ。おっ、結構来てるな」

「き、危険ですよ、少尉殿！」

「距離が遠い。へろへろ弾だ」

当たりそうなら『死神の大鎌』が教えてくれるが、今のところ何の警告もないから気楽なものだ。どうせこんな世界だ、死んだら死んだで別に構わない。一回死んでるし。

敵の弾はパシパシンと壁を叩いているが、音が弱々しい。交戦距離でのマスケット銃弾は、もっと凄い音を立てる。

俺は振り返り、死にそんな顔をしている兵士たちに笑いかけた。

「敵は怖いか、諸君？」

兵たちは顔を見合わせ、何人かが無言でうなずいた。

俺もうなずく。

「敵を怖れるのは良い戦士の証拠だ。俺も怖い！」

「いや絶対怖がってないだろ……」

「どう見ても戦争フェチじゃねえか」

誰かと誰かがこそつとつぶやいたが、聞かなかったことにしてやる。

「だが俺たちから見れば怖い敵も、こちらを怖がっている！」

全員が「そうかなあ？」という顔をしている。いや、敵だって命がけだからな？

「考えてもみる。敵はゴドー要塞で壮絶な死闘を繰り広げ、疲れ切っている。やっと終わったと思っただら、今度は精強無比と名高いゼツフェル砦の守備隊が相手だ」

「な……名高いんですか？」

「いいや？」

「もちろんだ。俺は最近まで第五師団にいたが、あっちでも有名だったぞ」

「嘘です。名前すら聞いたことがない。」

すると兵たちの顔に、少しだけやる気が戻ってきた。ひそひそ会話する声が聞こえてくる。

「ここつてもしかして結構凄いのか？」

「言われてみると、そんな気がしてきたな……」

俺はここぞとばかりに畳みかける。

「当たり前だ。こうして第六特務旅団が援軍に駆けつけたぐらいだからな。ここは天下の堅城ゴドー要塞と帝都内部との街道を結ぶ要衝、何がなんでも死守しなきゃならん場所だ」

「適当におだてて彼らに戦う意義を与えてやる。彼らには戦う理由が必要だ。」

と、ここでスパイスを利かせておかないとな。

「もし他の旅団から兵を百人も借りて陥落するようなことがあれば全軍の笑いものになるぞ。『見かけ倒しのクソ雑魚フニヤチン野郎』とな」

シュワイデル語は俺の母語じゃないが、路上生活時代にスラングだけは豊富に覚えた。どういう言葉が効くのか、嫌になるぐらい熟知している。

シュワイデルの男たちは無駄にプライドが高いので、こういう煽

りがよく効く。

案の定、彼らの表情が引き締まる。いいぞいいぞ。

「少尉殿、俺らはそんな弱虫じゃありませんぜ！」

「そうとも！ 命知らずの猛者ぞろいでさあ！」

よく言うよ……。

俺はうんうんうなずいて、にんまり笑ってみせた。

「だよな？ 俺だって死にたくないから、どこの砦の援軍に行くかは考えたんだ。でまあ、ゼツフェル砦なら安心だと旅団長閣下に進言したんだよ」

完全に口からでまかせだが、兵たちが「ほう……」と感心した声をあげる。

「そりゃいい判断だ」

「いよつ、名参謀！」

俺は軽く手を挙げて応え、それから第六特務旅団の女の子たちを振り返った。

「うちの旅団の子たち、みんなかわいいだろ？ いろんな事情があつて兵隊になるしかなかった子たちだ。諸君の実力が噂通りなら、あの子たちを死なせたりはしないだろう」

俺の言葉に守備兵たちの鼻息が荒くなる。

「おう、任せてくださいえ！」

「ブルージュの山猿なんか、俺たちが皆殺しにしてやりますぜ！」
よしよし、これなら大丈夫だな。

俺はあっけにとられている下士官の肩をポンと叩き、ニッと笑ってみせる。

「敵の威力偵察は十分に引きつけてから撃つ。初撃で派手に損害を与えて怯ませるんだ。こちらの射撃命令に合わせてくれ」

「は、ははっ！」

下士官が敬礼し、俺は歩き出す。

さて、これで多少は戦えるかな？

第23話「第6特務旅団、戦闘開始」

【第23話】

「まだか？」

「まだです」

「……そろそろじゃないか？」

「いえ、まだです」

俺とアルツアー大佐は城壁の上で、そんな会話を繰り返していた。大佐は豪胆な性格をしているが、実戦は初めてだ。戦いのコツはまだ知らない。

俺は大佐に説明する。

「こちらとは違い、敵は上方に向かって撃ち上げねばなりません。通常の有効射程距離から撃つたのではダメで、もう少し近づく必要があります」

重力に逆らって弾を発射する訳だから、その分だけ運動エネルギーをロスする。単純な理屈だ。

「一方、こちらにも斜め上から撃ち下ろすことになりますので、弾は下に向かって飛びます。殺傷可能な間合いは水平射撃よりも狭くなります」

この銃眼はもともと矢狭間なので、放物線を描いて矢を放つことを想定している。矢と銃弾では放物線の反り方が違うから少々やり

づらい。

大佐はふむふむとうなずいている。

「なるほど。平坦な地形での戦闘とは勝手が違う訳か」

「はい」

マスケット銃は速射できないから最初の一発が重要だ。

「今、敵は威力偵察をしています。こちらの砲撃の正確さ、射撃の密度、砲兵と歩兵の連携。さまざまな情報を持ち帰ろうとしているのです」

大佐は少し考え、こう答えた。

「では、ゼツフェル砦への攻撃を躊躇するような情報を持ち帰らせるべきだな？」

「御明察です。そのため、威力偵察部隊には初撃でしっかりと損害を与えます」

敵兵には気の毒だが死んでもらうぞ。

俺は望遠鏡を覗き、目印の岩まで敵が接近していることを確かめた。事前に測っておいたが、距離は約五十メートル。

あと十メートルほど近づかれると敵の攻撃が始まると思うので、俺は大佐に告げる。

「今です」

「よかるう」

大佐はうなずき、兵たちに命じる。

「集中射撃用意！ 各隊、直近の目標を狙え！ 撃て！」
パパパパパツと綺麗に音が揃った。さすがは戦列歩兵、射撃の夕イミング合わせはしつかりできている。この点は守備隊の兵士もきちんとできていた。悪くない。

望遠鏡で覗くとブルージユ兵が三人倒れていた。うちの第一小隊と砦の守備隊が、それぞれ集中攻撃で仕留めたらしい。
何よりも必要だった「確実な損害」。生き延びるために必要な条件のひとつを満たしたぞ。

敵はすぐさま発砲してきたが、浮き足立っているので銃眼に命中した弾は一発もない。あちら側は有効射程外だから当然だ。

大佐がすかさず叫ぶ。

「次弾斉射するぞ！ 撃て！」
射手たちは次の銃を装填手から受け取っているのですぐさま二発目が放たれる。おお、また二人倒れた。

さらに第三射でもう一人倒す。合計六人を仕留めた。
マスケット銃は命中率が低いので、これだけ当たれば上出来だ。
負傷者も少し出ているようだが発砲による白煙でよく見えない。

まだ相当数の敵が散開していたが、さすがにこの状況で撃ち合うほど愚かではない。一目散に後退していく。

砦の周囲にある遮蔽物は全て撤去しているので、撃ち合いができる距離には隠れる場所がないのだ。

高めの練度と捨て駒っぽい用兵から察するに、さっきの連中は懲罰部隊か何かだろう。気の毒に。

俺が溜息をついていると、大佐が振り返った。

「どうした？ まだ撃つか？」

「いえ、弾薬を温存しましょう。今のうちに銃身の清掃を」

先込め式の黒色火薬銃は銃身内部にススやら何やらがこびりつくので、定期的な清掃が欠かせない。弾詰まりを起こして撃てなくなるし、放っておくと錆びる。

さて、銃の点検をさせてもらうか。

俺は第一小隊の射手たちがきちんと発砲したか、こっそりチェックする。

敵を前にするとどうしても撃てなくなってしまう人は案外多い。殺人を躊躇するのはごく自然な心理だ。むしろ平気でバンバン撃ちまくれる方が人として問題がある。

幸い、うちの小隊は人として問題がある方だったようで、綺麗に全て発砲できていた。大佐が選抜しただけのことはある。

砦の守備隊も意気盛んなようだから、あっちもたぶん大丈夫だろう。よその部隊にあんまり口出ししていると嫌われる。

敵を倒したことによる心理的なストレスについても、斉射で仕留めているので比較的少ないと思う。自分の弾が当たったかどうかなんてわからないからな。

ただまあ、これは長期的に観察していく必要がある。要注意だ。

おっとそうだ、ライフル騎兵銃の実戦テストも確認しておこう。

「ライラ、新型銃はどうだ？」

ライフル騎兵銃を渡しておいたライラに尋ねると、彼女は小さくうなずいた。

「良好です。皆とは違う目標を二回撃って一人仕留めました」

「倒した敵の一人は貴官の手柄か」

「はい」

嬉しそうだな……。

持ってきたライフル騎兵銃は二挺しかないので、さすがに三発は撃てなかったようだ。

旧式のマスケット銃は四十人の射手が三回斉射して百二十発ほど撃ち、五人倒している。

一方、ライフル騎兵銃は二発で一人。

試行回数が足りないから結論を出すのは早計だが、やはり強い気がする。

普段は無口なライラが珍しく自分から口を開く。

「この銃、弾がよく伸びます。落ちずにまっすぐ飛び、しかもブレません。吸い付くような手応えです」
「う、うん」

「練習すれば倍の間合いでも当てられそうです。本当に凄い銃ですよ参謀殿。これが家になれば父さんも死なずに済んだのに……」
この子、銃が絡むとメチャクチャ饒舌になるな。
あとサラツと重い話が出てきた。

「気に入ったか？」

するとライラはハツとした顔をして、それから照れくさそうな笑みを浮かべる。

「ええ……とても」

「では貴官に預ける。なくすなよ？」

俺はライラに笑いかけると、次の仕事に向かうことにした。

……さっきからライラが真剣そのものの表情で敬礼してるんだけど、なんだあれ？

俺が大佐のところに戻ると、大佐はみんなを叱咤激励している真っ最中だった。

「諸君、よくやった。初陣で熟練兵なみの動きができたことを誇りに思う。だがまだ油断するな、すぐに敵が来るぞ」

いや、どうだろう……。

俺は目線で「しばらくは来ないと思いますよ」というのをそれとなく伝える。伝わっただろうか？

すると大佐はハツとして、小さく咳払いをした。

「とはいえ休息も不可欠だ。銃と弾薬の点検整備を済ませたら、交代で休息を取れ」

それでいいと思います。まさか目線だけで伝わるとは思わなかった。

大佐は俺に近づいてきて、こそつと質問する。

「なぜすぐには来ないと言い切れる？」

「威力偵察部隊にかなりの打撃を与えました。敵は時間をかけ、十分な準備をしてから本格的な攻撃をしてくるでしょう。おそらくは火砲の類を持ち込むはずです」

こちらには大砲があるので、マスケット銃の射程外から一方的に撃ちまくれる。攻城側にも大砲がなければ戦いにならない。

十分な数の歩兵と大砲が揃うまで、ブルージュ軍はここを攻撃してこないだろう。たぶん。

というようなことを説明すると、大佐はふむふむとうなずいた。

「確かにそうだな。では次が本当の戦いということか」

「御明察です。おそらく次は損害は避けられないでしょう」

うちの旅団からも戦死者が出る可能性が高い。俺にはどうしようもない。

「敵がこの砦をどう攻めるかはわかりませんが、構造的に弱い部分
を突いてくると思われます」

「どこだ？」

「防御塔のない東側ですかね。攻城側は西を向いて攻撃すること
になりますので、攻撃開始はおそらく早朝。太陽を背にしての襲撃で
す」

「こちらは眩しくて撃てないが、向こうはこちらがはっきり見える。
攻撃側はタイミングを選ぶ権利があり、これがなかなか無視できな
い。」

「これから日が傾きますので、今日はもう攻めてこないでしょう。
とはいえ奇襲の可能性はありますので警戒は必要ですが」

「わかった。少尉も休息を取ってくれ。貴官は我が旅団の生命線だ」
「光栄です」

「なんか照れるな。大佐は人をその気にさせるのが上手い。困った
ものだ。」

「こんなにクソみたいな状況なのに張り切っちゃうじゃないか。」

第24話「払暁の敵襲」(図解あり/再掲)

【第24話】

威力偵察を行った敵の小部隊は、それっきり二度と戻ってこなかった。俺たちは夜間も歩哨を立て、襲撃を警戒する。
俺は今のうちに、砦の構造を再確認しておく。

< i 5 4 7 0 7 7 — 3 5 6 7 8 >

「なるほど……」

俺は防御塔の石材を石で擦り、ひとつの結論に達していた。

「何をしてるんですか？」

通りかかったハンナが不思議そうな顔をしたので説明する。

「この砦、防御塔とそれ以外の石材の色が違う。石の組み方も違うから、建てられた年代がだいぶ離れているはずだ」

ミルドール領は山間部だから石材には困らない。この程度の砦なら最寄りの石切場だけで足りるだろう。色が違うのは少々変だ。

「それに防御塔は独立した構造になっている。城壁に応力を分散しているようにも見えないし、中庭側にも外側と同じ間隔で矢狭間がある。たぶん最初期は防御塔単体で建てられたんだ」

「なる……ほど？」

よくわからなかつたらしく、ハンナが首を傾げている。

俺は苦笑して彼女に言った。

「考えるのは俺の仕事だから気にするな。ハイデン下士長は今のうちに休んでくれ。撃ち合いが始まったら小隊長は激務だぞ」

悪あがきだが一応保険をかけておくとするか。大佐たちに相談しよう。

* * *

夜明け前、俺は旅団の女の子に起こされる。

「参謀殿、参謀殿」

「ん？ んぎうっ？」

「何かわいい声で寝ぼけてらっしゃるんですか！？ 起きてください！ 敵です！」

「みよっ!?!」

俺は素早く跳ね起きると、ぼんやりした頭で敬礼する。

「じくりよー！」

「はっ、はい！」

思いつきり笑われたぞ。将校として示しがつかないな。

俺は寝癖を制帽で隠しつつ、上着を羽織る。だんだん頭がはつきりしてきた。

「状況を教えてくれ」

「砦の東側に敵らしいのが動いています。数はよくわかりませんが、結構多いです」

ぐるっと回り込んで東側から来たか。やっぱりそう来るよな。

東側には防御塔がない。西側と比べると格段に弱い。砲門もなく銃眼だけだ。

しかも楕円形の城壁の端にあたるので狭く、東側の敵を狙える銃眼は非常に少ない。

「東側以外に敵はいるか？」

「よく見えませんが、西側や北側でも微かに動くものを見た」と

断定はできないが、これは普通に包囲されてるっぽいな。敵は本気だ。

ここまで聞いたところで俺の身支度が完了する。俺はテントから出ると、背後に付き従う兵士に尋ねた。

「味方の動きは？」

「参謀殿の指示通りです」

「よし」

俺は城壁に上がると、東側から望遠鏡で確認した。少しずつ空が白み始めているので、敵の隊列がおぼろげながらに見える。見た感じ、三百人から六百人ぐらいかな？ 千人はいない……と思う。

距離は五百メートルぐらい。こちらの大砲を警戒しているようだ。

敵には大砲がないようなので少し安心する。あつたらちよつと敵しかった。

時間的にも一晩で大砲をここまで運ぶのは難しいだろうし、大砲があるなら城門側から攻めた方が早いだろう。

ただしブルージュ軍に砲兵科がないと言っても、大砲そのものは普通に持っている。山岳猟兵でも「抱え筒」と呼ばれる携行型の小型砲ぐらいは持ち込んでいるはずだ。あれを撃ち込まれると銃眼のある城壁が薄い箇所ぐらいは粉々になる。

「少尉も来ていたか」

その声に振り返ると、もこもこに着込んだ大佐が立っている。もともと小柄なので子供みたいだ。

もこもこ大佐が涼しげな笑みを浮かべる。

「おはよう、今朝は冷えるな」

子供みたいに見えても胆力はやはり尋常ではない。よくそんな挨拶が出てくるな。

俺も真似しておこう。

「確かに冷えますね。深夜に行軍した敵兵もだいぶ冷えているでしょう。暖めてやりませんと」

「ははは！」

大佐は豪快に笑うと、小さくぶるつと震えて小声になる。

「あのな、本当は怖いんだぞ？」

「小官もですよ？」

殺し合いが始まるのに怖くない訳がない。

俺と大佐が微妙な笑みを浮かべているところに、第二小隊長のミ

ドナ下士長がやってくる。

「お嬢様、麾下の各小隊は所定の位置に就きました。守備隊も問題ないとのことです」

「よろしい。だが大佐と呼べ」

「申し訳ございません」

ミドナはニヤニヤしている。彼女は大佐の子守女中だったらしいから、こんなときでもからかっているんだろう。大佐は無表情を装っているが、ちよつと頬が赤い。

「少尉、我々にできることは他にないか？」

「ありません。むしろここからは疲れが大敵です。気は休まらないにしても、せめて体は休ませてあげてください」

俺は籠城戦の経験があるが、周りが全部敵というのは物凄いストレスになる。じつとしてもほとんどん疲れてくるので、とにかく今は疲労を溜めさせないことだ。

俺は大佐たちが緊張しないよう、にっこり笑う。

「皆には言えませんが、最悪の場合は降伏してもいいですし、開城を交換条件にして退却を黙認してもらおうよう交渉しても構いません。思い詰める必要はないですよ」

中世と違って近世の戦争はルールが整備されている。皆殺し以外の結末だってあるのだ。……まあ皆殺しもよくあるが。

大佐はフツと笑う。

「ありがとう、少尉。では私は防御塔で指揮を執る。貴官は本当に

東側の城壁に行くのか？」

「司令であるダンブル大尉がおられるのに、うちの旅団から士官が誰も行かないという訳にもいかんでしょう」

ダンブル大尉は東側の城壁で敵主力を迎え撃つ予定だ。俺は指揮する部下がいないので、ダンブル大尉のお手伝いとして行くことにした。

おっと、アルツァー大佐には念を押ししておこう。

「接近してこない敵には威嚇射撃程度で十分です。無理に応戦して弾薬を消費しないよう気をつけてください。手持ちを使い果たしたら終わりですから」
敵も怖い弾切れも怖い。撃つ弾がなくなれば長引かせようがなくなる。

大佐が俺を真正面から見つめ、ニツと笑う。

「まだ死ぬなよ？」

「なるべく死なないようにやってみましょう」
保証はできないけどな。

* * *

俺は東側の城壁に行き、ダンブル大尉たちと合流する。

「おお来たか、クロムベルツ少尉」

「来ました」

「砲を一門、夜のうちに移動させておいた。直接照準射撃ができるのはこいつだけだ」

防御塔にも砲が五門あるが、建物と城壁が邪魔で間接射撃しかできないという。山なりの弾道を描くので、敵が城壁に接近したらそれも不可能になる。

設置したこの砲も、あまり頼りにはならないだろう。

砲門がなくて城壁の一番上に置いたので、俯角を取って射撃するのがだいぶきつそうだ。接近されたら撃てない。

「一門だけなのは厳しいですね。それにこの高さも」

「ああ。だが城壁の上に砲を置ける場所がなくてな。その代わりに、ここにいる砲兵たちは選りすぐりの勇者ぞろいだぞ」

ものは言いようだ。守備隊の砲兵で危険な任務を遂行できるのは、ここにいる連中ぐらいのことだ。

「護衛の歩兵たちはどうですか？」

「張り切っているよ。彼らの奮闘ぶりを見てくれたまえ」
「どうだか……。」

夜が明ける直前、敵が動き出した。

ブルージュ軍の鼓笛の音が鳴り響く。俺は知らないが、あれが彼らの行進曲なんだろう。アガン軍の行進曲より俺好みだ。

戦列歩兵の横隊が、打ち寄せる波のように城壁に接近してくる。

平原から昇る朝日を背にして、黒々とした隊列が影を伸ばす。

「き、来た……」

城壁の上の砲兵が小さくつぶやき、別の誰かがゴクリと喉を鳴らした。

俺は胸壁にもたれかかりつつ、制帽を目深に被る。

「ぼちぼち始めますか、大尉殿？」

「そうだな。諸君、ブルージユの田舎者たちに戦争のやり方を教えてやるう」

ダブル大尉がサーベルを抜き、落ち着いた口調で告げる。

「目標、敵陣左翼後列。砲撃開始」

大砲が火を噴いた。

第25話「潜む砲手」(図解あり)

【第25話】

ダブル大尉の指示と、選抜砲兵たちの砲撃は的確だった。

最初の砲弾は敵の鼓笛隊手前に着弾し、戦列歩兵を数名吹き飛ばす。相変わらずえぐい死に方だ。

「誤差修正、右三つ！ 上一つ！」

「右三つ！ 上一つ！」

大砲がわずかに向きを変え、すぐさま次の火薬と砲弾がセットされる。

「撃て！」

次の砲弾は鼓笛隊の後方に着弾した。当たってはいないが、俺は感心する。

「お見事です、大尉殿」

「世辞は結構。まだ当たつとらんよ」

当たってないけど二発で夾叉を取ったぞ。あの鼓笛隊は既に大砲の照準に収まっている。もう調整の必要はない。

「撃て！」

さすがに敵の鼓笛隊も、自分たちが狙われていることには気づい

たらしい。鼓笛隊が壊滅すれば全軍に指示が行き渡らず、統率が取れなくなる。狙うなら鼓笛隊だ。

だが鼓笛隊は演奏をやめることができないし、後方に退くこともできない。演奏が届かなくなれば、何のためにいるのかわからない。

つまり彼らは砲撃に晒され続ける。

「撃て！」

四発目で鼓笛隊に着弾した。ドラム手とラッパ手がバラバラになつて吹き飛ぶ。非武装の兵士だが、彼らは戦列歩兵より危険な存在だ。とはいえ気の毒ではある。

さすがに直撃弾をくらうと、鼓笛隊も列を乱して演奏が中断する。これで戦列歩兵の歩調が乱れるぞ。

……と思ったのだが、まだ行進曲が聞こえてくる。

ただ、さっきよりは音が小さいな。

「大尉、あれを」

俺は望遠鏡をダブル大尉に渡す。

「むっ……」

大尉が唸つたのも無理はない。

「後方にも鼓笛隊がいたか」

「おそらくあちらが本命でしょう。将校らしいのがいますし、野戦砲の射程外です」

「舐められたものだな。だが向こうが一枚上手だったようだ」

昨日の威力偵察で、敵はこちらの砲の威力や精度、射程を把握した。指揮官や砲兵の練度もだ。

その上でこちらが狙いそうな「的」を用意してきたんだろう。となると、今吹っ飛ばしたのは懲罰部隊か何かだろうか。

敵の統制に乱れない。既に敵歩兵は城壁に迫っている。

敵の最前列との距離を見て、ダブル大尉は渋い顔をした。

「俯角がきつすぎるな」

中世の城壁はとにかく高く作られていて、城壁の上から大砲を撃つと斜めに撃ち下ろす軌道になる。

近世の城壁は砲台を低い位置に作り、地を這うような弾道で砲弾を放ち、横殴りに敵の隊列を撃ち抜く。

一口に城壁といっても、時代によって求められるものが全く違うのだ。

ダブル大尉は即座に思考を切り替え、砲兵たちに命じる。

「引き続き敵後列を撃ち続ける。前線と司令部との連携を断て」

一門しかない砲では大した圧力をかけられないだろうが、まあ仕方ない。

そろそろマスケット銃での撃ち合いだ。俺とダブル大尉は城壁の最上部から降りて、下の銃眼の様子を見に行く。

ここは守備隊の歩兵たちがおっかなびっくりといった様子で銃眼を守っている。

「敵が思ったより多いな……」
「こっちの銃眼は十個もないのに、どうやって戦うんだよあれ……」
楕円形の城壁なんか作ったヤツが悪い。今の流行りは突出した砲台を持つ星形の城壁だ。完全に時代遅れなんだよな。

ダンブル大尉は歩兵たちの肩を叩いて激励する。

「案ずるな、諸君。敵を全滅させる必要はない。城壁の内側に入れなければそれでいいんだ。軽くあしらってやれ。それに……」

俺は大尉の言葉を聞きながら銃眼を覗いていたが、敵の戦列歩兵の様子がおかしいことに気づく。妙にずんぐりした銃を持つてるヤツがちらほらいる。着剣したマスケット銃とは明らかに違う。

そのとき不意に『死神の大鎌』が首筋をぞわりとなでた。

こんなもの、わざわざ死神に警告されなくてもわかりきっている。俺はとっさに銃眼から離れ、ダンブル大尉に叫んだ。

「大尉殿、歩兵の中に砲手がいます！」

「なにっ!？」

ダンブル大尉が銃眼に駆け寄ったとき、敵の砲手が得物を構えた。まだ百メートル近く離れている。

「伏せる！」

大尉が叫んだ瞬間、ぞっとするような破壊音が立て続けに響いた。

「うわあああっ!?!」

「ひいい!」

銃眼の縁が割れ、そこから朝日が降り注ぐ。逆光の中に石粉がもうもう舞い上がる。

「な、何が起きたんだ!?!」

誰かが叫ぶので、俺は伏せたまま叫ぶ。

「伏せてろ! 『抱え筒』だ!」

『抱え筒』は特大サイズのマスケット銃で、接近戦はできないが射程も威力も化け物じみている。対物破壊用の携行砲だ。

反動も重量も化け物じみているので、誰にでも扱えるというものではない。砲手は自ら転がって反動を逃がすくらいだ。

「敵は戦列歩兵の中に、抱え筒を持った砲手を混ぜてたんだ!」

敵の大砲は戦列歩兵と一緒に前進していた訳だ。

道理で大砲が見当たらないと思った。

「各部署は被害状況を報告しろ!」

ダブル大尉が叫び、歩兵の下士官が応じる。

「損失三名!」

生死は不明だが三名戦闘不能か。三十人しかいないから痛いな。

幸い、上の階の大砲は無事だった。すぐさま砲弾を散弾に換えて、

歩兵たちの列に向かって砲撃を開始する。敵の砲手に撃たせないためだ。

だが砲一門ではどうにもならない。

「仕方ない、歩兵も応戦しろ！ 砲手をこれ以上近づけるな！」

あちらと違ってこちらは有効射程外だが、このまま何もしなければ抱え筒で銃眼がボロボロにされてしまう。こちらの大砲だって危険だ。

ただ問題があった。

「くそ、撃ちにくいな！」

「ぎゃっ!？」

また一人やられた。銃眼が割れて穴が大きくなっているので、身を守るのも狙撃するのも難しくなっているようだ。

敵の砲手は八十メートルぐらいの距離から抱え筒で砲撃を続けているようだ。

戦列歩兵はそのまま前進し、五十メートルの距離に到達すると銃眼に向けて集中射撃してきた。

「うわっ!？」

「ちよっ、やべえ！」

こちらの歩兵たちが慌てて首を引っ込める。拡張された銃眼から弾がチュンチュン飛び込んできて俺も危ない。

「隊長、敵の攻撃が激しくて応戦できません！」

ヒゲの下士官が叫ぶと、ダブル大尉は負けずに叫び返した。

「狙わんでいい！ 隠れたまま銃だけ突き出して撃て！」

こりやまずいな。射撃の密度が全然違う。

銃眼は十個しかないの、斉射しても最大で十人しか倒せない。

実際には一人倒せたら大成功の部類だろう。まともに狙えないからそんなもんだ。

敵は……見た感じ数百人はいるな。ちまちま応戦している間にこちらの被害が増える。消耗戦になれば結果は明らかだ。

俺はしゃがんでダブル大尉に近づき、ひそひそと相談した。

「大尉殿、このままでは味方が磨り潰されます」

「しかし応戦しない訳にもいかんだろう」

ダブル大尉もしゃがんだままひそひそ返すが、俺は首を横に振った。

「敵の動きは城壁をよじ登ってくるときのそれではありません。あ

くまでも射撃のみです。しかし銃や抱え筒では城壁を崩せません」

「確かに君の言う通りだ。ではこれは圧をかけるための攻撃だな」

「はい」

東側の城壁は砲も銃眼も少ないから、ここに攻撃を仕掛けてもブルージュ軍の損害は少ない。

ただ、東側から侵入するのは面倒くさい。人が出入りできる開口部がないので城壁をよじ登るしかないのだ。

だが中世の城だから城壁は無駄に高いし、よじ登り対策の武者返しもある。かといって城壁に突破口を開ける大砲もない。

となると、ゼツフェル砦を占領するには違う場所から侵入した方が楽だろう。

ではどこか。

やっぱり城門かな？

真南、つまり真正面から城門を攻撃すると、西側の防御塔から猛烈な攻撃を受ける。

仮に夜襲を試みたとしても敵軍が接近すれば音で気づく。そして城門を狙ってくる以上、動きは手に取るようにわかる。砲撃で一網打尽だ。

だが東側の城壁沿いに侵入すれば、防御塔の攻撃は城壁に阻まれて通らない。こちらの銃兵の射撃密度はたかが知れているので、数で押せば城門に到達できる。

普通はこういうのを防ぐために堀を作っておくのだが、ゼツフェル砦には空堀すらない。

敵の火砲は抱え筒だけだが、抱え筒を持った砲手は歩兵に随伴して素早く動ける。抱え筒唯一の長所である機動力を生かして、城門に肉迫するつもりか。

至近距離なら抱え筒の火力でも城門を破壊できる。

なるほど、よく考えてる。彼我の戦力と与えられた条件の中で最善を尽くしたか。いい仕事をする将校がいるな。

俺はダブル大尉に進言する。

「大尉殿、敵は東側の銃眼を沈黙させて城壁沿いに城門を攻略するつもりでしょう。この城壁をよじ登るよりも楽ですし、防御塔は城壁が邪魔で撃てません」

「おお、なんとということだ」

大尉は嘆息し、それから俺を見てニツと笑った。

「何もかも君の予測通りか。君の献策を採用して良かったよ」

「ええ、これならまだ戦えます」

昨日の戦闘でしっかり損害を与えたので、敵は西側の防御塔を警戒しただろう。当然、迂回して攻撃してくる。東側から城壁にへばりつく戦術が有効であることは机上演習ですぐにわかった。

戦況はまだこちらの制御下にある。戦いの主導権は渡していないつもりだ。

だがここからが正念場だぞ……。

第26話「死神の歓迎」

【第26話】

「急げ急げ急げ！」

俺は負傷兵に肩を貸しながら叫ぶ。

「戦えるヤツは城門側の銃眼に行け！ 戦えないヤツは俺と一緒に
防御塔に撤収だ！」

さすがは俺だ。負傷兵の救護を装って、ちゃっかり逃げる算段を
整えている。

俺には兵の指揮権はないし、ここから先はダブル大尉に助言を
する必要はない。全て予定通りだ。

「胸壁から頭を出すなよ！ 撃たれるし、こちらの動きを悟られる
！ おい待て、中庭には降りるな！ 一階の入り口を塞いだのを忘
れたか！」

あれこれ口うるさく指図しながら、俺は数名の負傷兵を引率して
城壁を駆け抜けた。防御塔の二階へと駆け込む。

防御塔の中では、第六特務旅団の仲間たちがホッとした顔で出迎
えてくれた。

「参謀殿が帰ってきたよ！」

「御無事で何よりです！」

「それより血止めの布持ってきて！」

「えっ、参謀殿がケガしたの!?」
「そうじゃなくて、こっちの人!」

なんだが大騒ぎになっているが、ともあれ生きているヤツは回収できた。

明らかにもう助からない兵士もいるが、それでも見捨てる訳にはいかない。兵を見捨てる上官だと思われたら、もうみんな命懸けで戦わなくなる。

俺は負傷兵の手当を部下に任せ、城壁の様子をそっと覗いてみた。激しい銃声が聞こえてくる。城壁の下に取り付いた兵を攻撃しているんだろっ。

中世の城壁には真下に向かって攻撃するための狭間もある。石やら煮えた油やらを落としたり、槍で突いたりするための狭間だ。

ただ守備兵の数が少なすぎるので、撃ちまくっても敵の数はさほど減らない。敵は狭間を集中攻撃するから、こちらにも被害が出る。俺がダブル大尉を心配していると、アルツァー大佐がやってきた。

「御苦労。無事に戻ってきてくれたな」

「死ぬなら閣下のお側でと決めております」

半分は冗談だが、半分ぐらいは本気だ。どうせ戦死するなら、せめて理解ある上司の隣で戦死したい。

大佐はフツと微笑み、それから制帽で顔を隠した。

「よせ、照れる」

「照れますか」

ストリートな物言いをする人だな……。

大佐は頬をぱしばし叩いてから俺に向き直る。

「防御塔からも牽制程度に攻撃はしているが、まともな損害は与えられていない。ただ、撃たなければ大胆に動き回るからな」

「牽制で十分です。弾薬は温存しなければなりませんし」

大佐はうなずき、それからやや不安そうな表情をする。

「しかし防御塔以外の全てを放棄するとは、思い切った策だな」

そう。俺はアルツァー大佐とダブル大尉に対して、防御塔での籠城戦を提案した。

「もともと防御塔以外は後付けのオマケです。構造に無理があるので寡兵では皆全体を守りきれません。限られた兵力を集中させる以外、長期の籠城は不可能です」

俺は城といえば日本の城しか知らないが、城の大半が占領されても本丸だけで籠城できるようになっている。城門を破られても終わりではない。

幸い、ゼツフェル砦の防御塔は旧式ながらも強固にできている。

城門を守ることに固執して兵を減らすぐらいなら、さっさと防御塔

に集めて粘った方がいい。

というようなことを提案し、ダンブル大尉はだいぶ渋い顔をしたがアルツァー大佐の説得で了承を得た。

「この皆でまともに使えるのは防御塔ぐらいなものです。他は全部捨てて構いません」

「貴官がそれを守備隊長の前で言うとは思わなかったが」

「黙ってたら参謀の仕事が果たせませんし……」

彼が自分の皆に愛着があるのはわかるが、このクソ皆で仲良く戦死してやるほど我々は仲良しではない。

もっとも、俺の作戦計画が彼にとつて不愉快極まるものであることは認める。俺が彼の立場なら、やはり相当渋っただろう。

まあでもお互い仕事だから仕方ない。

「城門はどのみち長く持ちません。そろそろ『歓迎』の準備を」

「そうだな。鉛玉のひとつも馳走せねば、シュワイデル軍人の名がすたる」

初陣なのになんでそんなにギラギラした笑いができるんだよ。あんた怖いよ。

やがて城門の上で撃ちまくっていた歩兵たちが防御塔に撤収してくる。ダンブル大尉と下士官たちは全員無事だが、また少し兵が減ったな。

「大尉殿、御無事で何よりです」

「ああ、だが二人やられた」

弓やクロスボウ用の矢狭間は開口部が大きいので、銃での撃ち合
いだとこちらにも被害が出やすい。

結果的に守備隊に被害を押しつける形になってしまったが、撤収
前提の作戦だと砦の構造を熟知している兵を使うのは仕方ない。

とはいえ、我々も戦わないと。

ダブル大尉は守備隊の歩兵たちに休息を取るよう命じている。

ここから先の撃ち合いは第六特務旅団の担当だ。

城門からは、さつきから大きな破壊音がバキバキと連続して聞こ
えている。こちらの反撃が弱まったので、一気に攻撃を加速させて
いるんだろう。

堀も落とし格子もない城門なんか守る気にもなれない。好きにす
るがいい。

俺はアルツァー大佐とダブル大尉の隣で「そのとき」を待つ。

やがて城門が割れるように開き、青い制服のブルージュ兵たちが
どつと中庭になだれ込んできた。

だが彼らはすぐに勢いを失って立ち止まる。

俺たちが中庭に設営したテントが、入り口を取り囲むように張り
直されていたからだ。隙間なく張られた分厚い布が視界と移動を遮
る。

だが後続はそんなことには気づいていないので入り口付近に大混

雑が発生した。

「今です」

俺がささやいた瞬間、ダンブル大尉が叫ぶ。

「わかっている。ええい、砲撃せよ！ 撃て！」

防御塔から狙いをつけていた大砲が一斉に火を噴いた。

砲弾はテントの布など易々と撃ち抜く。ブルージュ軍の青い上着が赤く染まり、紫の破片となって飛び散る。一気に数十人が死んだが、地獄はここからだ。

次の瞬間、テント群が大爆発した。

そのまま城門も誘爆して崩落する。耳がバカになるかと思った。凄いい音だ。

「ああ……もつたいない」

ダンブル大尉が渋い顔をしているが、俺は知らん顔して口笛を吹いていた。

リトレイユ公からの手紙には、ある重大な秘密が記されていた。

ダンブル大尉は俺たちにも黙っていたが、ゼツフェル砦は弾薬の集積所だったらしい。ゴドー要塞に補給するための弾薬の一部を貯蔵していたのだ。

言われてみれば立地としては申し分ないし、ダンブル大尉が黙っていたのも仕方ないだろう。こういうのは味方であってもペらペら

喋るものじゃない。

ただ弾薬は多すぎて防御塔に集めるのがちょっと怖かったので、余った分で城門を爆破させてもらった。あの爆発を見ると使い捨てて正解だったと思う。

ダンブル大尉にしてみれば、管理を任された大量の弾薬と、守備を任された砦の城門を一度に失ったことになる。酷い話だ。

まあその酷い話を持ちかけたのは俺なんだが……。

ブルージュ軍にしても、まさか守備隊が自分の城門を爆破するとは思ってなかったはずだ。まだ攻城戦が始まって二時間も経っていない。

俺が敵の将校なら、ここの指揮官はどうかしていると思っただろう。

まあでもこれでいいんだ。俺はダンブル大尉を励ます。

「大尉殿、これで敵は城門から砲を搬入できなくなりました。邪魔な城門がなくなったので射線も通ります」

「百年以上の伝統を誇る城門を邪魔とか……」

大尉が溜息をつくが、あんな守りづらい城門は吹っ飛ばしてミルドール家の金でリフォームした方がいい。ここは歴史資料館じゃないんだ。

俺は一応、礼儀として謝罪する。

「失礼しました。ですが少なくとも敵に弾薬が渡ることはありません。大尉殿にとつては何よりも重要な任務でしょう?」

「まあそうなんだが……いやはや、君には感謝すればいいのか、恨み言を言えればいいのか……」

「どちらでも結構ですよ。では少し敵の出方をうかがいましょう。どうせ鎮火するまで攻めてきません」

火薬だけでなく油樽もプレゼントしておいたので、城門付近は火災が発生している。敵が消してくれるだろう。

こっちは城門が燃えても平気だが、向こうは鎮火させないと攻撃できない。

戦列歩兵は火に弱い。キャンデイの紙包みみたいな紙薬莢で弾薬を持ち運ぶからだ。密閉してないから誘爆こそしないものの、防水用の油紙で包んだ紙薬莢はたやすく引火する。

しばらく休憩させてもらおう。籠城戦は不自由の極みだから、くつろぎながらやらないと。

「やはり火計は楽でいいな……」

炎が新たな兵力となつて敵を迎え撃つてくれるからな。

ふんふんと鼻歌を歌いながら燃えさかる炎を眺めていると、大佐が溜息をつく。

「なぜ貴官が『死神』と呼ばれているか、よくわかったぞ」

「小官にはわかりません」

第27話「籠城戦」(図解あり)

【第27話】

こうしてゼツフェル砦の城門は崩落し、燃えさかる瓦礫の山が敵の侵入を阻んだ。鎮火すれば歩兵は入ってくるだろうが、馬車や大砲は入れない。

そして今一番大事なのは、城門が崩れて敵軍が丸見えになっていることだ。

ダブル大尉の砲兵中隊は城門外の敵を砲撃している。

敵の隊列が乱れてだいぶ混乱していたが、やがて統制を取り戻したらしい。まだ崩れていない城壁に隠れるようにして引っ込んでしまった。

だが彼らはこの砦のボロさを甘く見ている。

「大尉殿」

「わかっている。わかっているから」

ダブル大尉は情けない顔をして、それでもよく通る声で命じた。

「城壁を撃て！」

大砲で崩れる城壁だから、大砲で崩してやればいい。

守備隊の砲兵たちも、まさか自分の大砲で城壁を破壊することになるとは思わなかっただろう。

だが困惑していても砲弾はきっちり命中し、構造上弱い部分を破壊した。

「この城壁は中世に行われた増築で高さを増している。さらに「マチコレーション出し狭間」などの構造物でバランスが悪くなっており、外側に重心がずれていた。」

そのため外側からの攻撃には耐えられても、内側からの攻撃に耐える力が全くない。

設計が悪いのか施工が雑だったのか俺にはわからないが、せつかなので使わせてもらう。」

何発目かの砲撃で大きな石材が崩れ落ち、向こう側に無慈悲に降り注ぐ。やっぱり欠陥建築だろ、これ。

さらに数発の砲弾が命中すると、城壁はゆっくり倒れ始めた。壮観だが怖い。

崩落が収まったとき、ブルージュ軍は大損害を出していた。数えてみないとわからないが、あの様子だと数十人は下敷きになっただろう。」

アルツァー大佐が望遠鏡を下ろし、静かに溜息をつく。

「確かこれは籠城戦だったな？」

「籠城戦です」

「遅滞戦術の立案を命じたはずだが」

「遅滞戦術を立案しました」

しばし沈黙。

「やりすぎでは？」

「損害を与えた分だけ敵の攻撃は弱まります。守備側だからといって攻撃しない訳ではありません。むしろ攻撃側よりも苛烈に攻撃しないと守れません」

攻め込んだことを後悔させるぐらい徹底的に叩けと士官学校で教わったし、実際にそれが有効であることを俺は経験している。

アルツァー大佐は何度もうなずいていた。

「なるほど、勉強になる」

「恐縮です」

「これなら城壁にも爆薬を仕掛けても良かったのではないか？」

「そう……ですね」

俺以上に怖いこと考えてる。どこまで吹っ飛ばす気だ。

さすがにダブル大尉が許可しないぞ。

あ、でも城壁の内側に敵を全部入れてから、内側に崩せば……。内側に崩すのは技術的に難しそうだったが、ロマンは感じるな。大惨事だろうけど。

< i 5 5 2 3 9 6 — 3 5 6 7 8 >

見れば敵はだいぶ後方に退いており、荒地地のあちこちに青い点が見えた。死んだブルージュ兵だ。

大佐は俺を振り返る。

「敵の作戦計画はメチャクチャになったはずだ。そうだな？」

「御慧眼です」

大佐は俺をじっと見つめた。

「教えてくれ。次はどうなる？」

大佐の真剣な表情に、俺も気を引き締める。

「敵の指揮官は今、サンクコストをどうするか考えているでしょう」

「さんくコスト？」

「すみません。サンクコストに対応するシュワイデル語がまだないんです。」

「ええと……要するに引つ込みがなくなっているんですよ。こんなちつぽけな砦を攻略するのに、大損害を出してしまいましたから。指揮官にとっては責任問題です」

ゴドー要塞を攻め落としたブルージュ軍にとって、ゼツフェル砦の攻略は残務処理に過ぎない。まさかここまで頑強に抵抗されるとは思っただけでなかったら。俺だって思っただけでなかった。この地域の戦争のやり方じゃない。

さくつと勝って当たり前前の戦いで、どつという訳が大損害を出してしまつた。おまけに砦はメチャクチャ、物資の収奪もできそうにな

俺が指揮官だったら頭を抱えている。勝っても得られるものがない。

大佐は俺のそんな説明を聞き、楽しそうにうなずいている。

「なるほど。ここで退けば指揮官は無能扱い、だが攻め落としたところで功績にもならない。悩ましいところだな」

「ええ。敵としてもこれ以上の醜態は晒せないはずです。ただ、損害を抑えるために慎重に攻めるか、長引かせないために一気に攻めるかはわかりません」

「そうだな。城門を爆破するようなイカれた敵が相手では、教本通りのやり方が通用するか怪しい」

イカれてるだなんて照れる。

俺たちがそんな話をしている間も、第六特務旅団の女の子たちは銃眼から外に向けて発砲している。防御塔は散開した敵に包囲されており、何もしなければ敵がじわじわ接近してくるのだ。油断しているとよじ登られて侵入される。

俺は大佐に笑いかけた。

「ひとまずは安心です。ダブル大尉もお疲れでしょうから、しばらくは大佐が指揮を執られるのがよろしいかと」

「私は初陣だぞ？」

「大佐ならできます」

将棋で言えば、陣地の大半を捨てて金銀桂馬あたりでガチガチに固めた感じか。良い形に持ち込めたから、数手はしのげるだろう。こうなると大佐の胆力と人望が輝いてくる。俺みたいなのが指揮してもダメだ。将の器がないと。

ということ、俺はまたしても暇になってしまった。計画の実行段階だと役立たずだな、俺。

「小官は朝飯でも食っておきます」

「敵に包囲されたこの状態ですか？」

俺は初陣の大佐にニヤツと笑いかける。

「これからは敵に包囲されたまま食事して、敵に包囲されたまま寝ることになります。これが日常ですよ」

「それもそうか。私ものんびりやるとしよっ」

大佐も笑って軽く手を振った。

* * *

籠城戦は案の定、士気との戦いになった。

その日は結局、敵は攻めてこなかった。

厳密に言えば敵の斥候が何度か城門の瓦礫を乗り越えてきたが、そのたびに第六特務旅団の斉射を受けてバタバタ倒れていく。

何人かは奥の建物までたどり着いたが、防御塔に通じる通路は全て遮断されている。うろろろしているうちにライフル騎兵銃の狙撃

で全員始末された。

一番ガッツのあるやつは東側の城壁まで行って、遺棄された大砲の状態を確認した。

もちろん破壊してあるので無駄足だ。そいつは情報を持ち帰る前に、ライラの狙撃で排除される。

敵は大砲がないので、こちらの防御塔に戦列歩兵を接近させることができない。

防御塔の壁は数十cmもあって分厚く、抱え筒程度では銃眼すら破壊できない。安普請のペラペラ城壁とは訳が違う。

こうして戦局は予定通り膠着状態に入った。

実に理想的な流れだ。何もしなくても時間を稼ぎまくれる。美し
いまでに教本通りなので士官学校の教官たちは俺を賞賛すべきだろ
う。

もっとも兵の大半はそう思っていないようだ。

ゼツフェル砦の守備隊も、うちの第六特務旅団も、籠城戦の経験
者がほとんどいない。孤立して敵に包囲された状況というのは想像
を絶するストレスだ。

食事が喉を通らない。夜眠れない。トイレに行っても何も出ない。
そういう状態になる兵が初日から続出する。

籠城二日目にして、俺は自分の見通しが甘かったのではないかと

危惧し始めた。

「みんな酷い顔だな。ちゃんと寝たか？」

無言でふるふると首を横に振る女の子たち。

訓練で動作や知識は身に着けられても、度胸はなかなか鍛えられない。これは実戦経験を積むしかない。

「敵も攻めあぐねている。そのうち降伏勧告をしてくるだろうし、待っていれば味方の援軍も来る」

寝不足っぽいハンナが、一同を代表して質問してくる。

「……来ますか？」

「来ないのに籠城なんかしないぞ」

援軍の来ない籠城は緩慢な自殺に過ぎない。士官学校でもそう習っている。

「もし仮に援軍が遅れたとしても、ブルージュ軍は越境して山をひとつ越えている。補給や退路に問題を抱えているから俺たちほど粘れない。あいつら野宿してるからな」

生活の過酷さで言えば、包囲側の方がだいぶしんどい。こちらは曲がりなりにも屋根がある。

「近づく敵は砲兵が追い払ってくれる。俺たちは大砲を守ってりゃいいんだ。楽な戦いだよ」

たまに外の壁に何かゴンガンぶつかる音がするが、たぶん抱え筒の弾だろう。こちらの大砲を警戒して遠くから撃っているので、建物に被害を与えるほどではない。

銃眼から中に弾が飛び込むことを期待しているのだから、銃眼自体にかなりの奥行きがあるので可能性はほぼゼロだ。

とはいえ、やっぱりみんなビクツツとしている。俺もちょっと怖い。食料も弾薬も兵力も十分だが、士気が崩壊してしまうと戦えない。そして俺は士気を高める方法には長けていない。

すると大佐が笑いながら、冗談っぽく一同に言った。

「諸君、私を守ってくれよ？ 私はブルージュ公国などに降伏する気はさらさらないからな。第一、払う身代金がもつない」

なんだかんだでだいぶ使わせちゃったからな……。領地をほとんど持たないアルツァー大佐は、メディレン宗家からの仕送りが頼りだ。捨て扶持ともいう。

たちまち女の子たちが表情を引き締める。

「もちろんです！」

「命に代えてもお守りします！」

「アルツァー様がいなくなったら、私も母も今頃飢え死にしましたから！」

「お守りします！ 大佐ちっちゃくて可愛い！」

モテモテじゃないか。いいなあ。

ちょっと心配していたが、大佐の人望があれば士気は保てそうだ。そのとき、外を監視していた子が叫んだ。

「敵が動き始めました！ 戦闘隊形です！」
来たか。

第28話「本当の敵は」

【第28話】

ブルージュ軍の戦列歩兵が横隊を組み、幾重にも重なって前進してくる。

今回は砲手を隠す気はないらしく、戦列歩兵の後方に整列していた。その方が射撃管制がしやすいからだろう。

ダブル大尉が叫んでいる。

「三番砲と四番砲を敵に向ける！ 急げ！」

五門しかない大砲を全て敵主力に向けるつもりだ。確かにその方がいい。

俺はアルツァー大佐に耳打ちした。

「砲が手薄になる分、散兵が接近してきます」

「わかっている。第二小隊は後背の銃眼を警戒しろ！ 第一小隊、射撃用意！」

「一番砲、射撃用意！ 目標、敵戦列中央！」

マスケット銃より先に野戦砲が火を噴く。少しずつ間隔を置いて砲撃し、それに合わせて敵の戦列に着弾した。小口径の野戦砲ではあるが、敵が密集しているので敵は数人まとめて吹っ飛んでいる。

「修正射開始！ 手前に夾叉を取れ！ 敵前列の出足をくじく！」
前列の前進速度が鈍ると後列も鈍る。全軍が停滞し、その間にこ
ちらはさらに射撃できるといふ訳だ。
だが敵もそんなことはわかっている。

歩兵が走れる距離は短い。彼らはアスリートみたいに体を鍛えて
いないし、重い銃や背囊を持ち歩いている。

全力疾走して息切れすれば戦えなくなるので、敵の射撃に曝され
ても走ることはできない。

だから走るのは最後の最後。必殺の間合いに入ったときだけだ。

アルツァー大佐が俺に言う。

「敵の意図はわかるか？」

「防御塔に総攻撃をかけたつ、城門の瓦礫をよじ登って中庭に侵入
する可能性が最も高いです。防御塔に隣接する兵舎を橋頭保とし、
通路から塔内部に突入するつもりかと」

敵には防御塔を破壊する火力がないので、歩兵が突入するしかな
い。

防御塔一階の入口は塞いでいるが、工兵が頑張れば入口をこじ開
けることができるだろう。それに二階には南北の城壁に通じる扉が
ある。抱え筒で扉を破壊されたら長くは粘れない。

「こちらの優位性は大砲と壁だけです。塔に肉薄されて扉を突破さ
れたら守るすべがありません」

「ではどうする」

「扉を突破されないよう守るだけです。狭所なので攻め手も数で圧せませんから時間を稼ぎましょう」

敵がこんな早期に力攻めをしてくるとは予想外だった。

だが俺の予想が正しければ、これは俺たちにとって悪い話ではない。

「兵には言えませんが、案外早く終わるかもしれません。もちろん我々の勝利です」

「本当か？」

「時間をかけて大砲を運べば勝てるのに、歩兵だけでこんなに急いで力押しをする理由があるとすればどうでしょう」

すると大佐はハッと何かに気づいたようだ。

「味方の救援か？」

そのとき、ハンナ下士長が叫んだ。

「敵の攻撃が止まりました！ 逃げていきます！」

見れば敵が急いで防御塔から離れていく。退却命令らしいラッパが繰り返し吹き鳴らされていた。

俺と大佐は防御塔の監視台に上がり、街道方面を確認する。

「所屬不明ですが帝国騎兵が接近中ですね。後方に歩兵部隊も見えます」

「騎兵が側面から接近してくれば、そりゃ逃げるだろうな。やれやれ、助かった」

アルツアー大佐がホツとしたように言い、それから耳を澄ます。
「何か聞こえてきたな」

ああ、これは聞き覚えがあるぞ。俺は制帽で顔を隠してニヤリと笑う。

「第五師団の行進曲です」

「本当か、少尉？」

「間違いありません。この押しつけがましい勇壮さ、胸糞が悪くなる復古主義、実に懐かしいです」

攻城戦で警戒せねばならないのは守備側に援軍が来ることだ。特に騎兵が側面や後方から突撃してくると、戦列歩兵や砲兵は致命的な打撃を受ける。

もちろんブルージュ軍もそれは警戒していたので、救援を素早く察知して逃げ支度を始めたのだろう。良い仕事だ。

敵の撤退と救援の到着。この報せに防御塔の中は一気に明るい霧囲気になる。

「味方が来るんだって！」

「やったね、助かったよ！」

「死ぬかと思っただけ！」

いやいや、油断するのはまだ早いだろう。

そう言いたいのが敵は物凄い勢いで退却を開始しており、確かにもう戦闘はなさそうだ。なんだか拍子抜けするな。

すると大佐が俺に言う。

「もっと戦いたかった、という顔をしているな？」

「まさか。小官は楽しんで給料をもらいたいと願う下級将校ですよ」

「どうだか」

苦笑されてしまった。いやいや、本当に戦争なんかまっぴらごめんなんですよ。

ブルージュ軍の最後尾が山の茂みに消えるのと前後して、街道の方から数百騎の騎兵が突撃用の横隊で近づいてくる。側面からあれが来ると思うとゾツとする。味方で良かった。

「軍旗を確認しました。第五師団です」

大佐は溜息をつく。

「やはりリトレイユ公の差し金か。一番美味しいところを持っていったな。まあいい、ここからは私の仕事だ」

大佐は制帽を被り直して身だしなみを整えると、ニヤリと笑った。

「第五師団の将校たちに挨拶するぞ。貴官にも来てもらおう」
あそこは古巣だから嫌だなあ。

* * *

俺とアルツアー大佐、それにダンブル大尉は籠城側の将校として援軍の将校たちに挨拶する。

そして呆れられた。

「なんとというか……その、壮絶な戦い方をなされましたな」

歩兵大隊長を務める少佐が、ゼツフェル砦の城門や城壁を見て絶句している。

中隊長らしい大尉もあつけにとられていた。

「敵の攻撃はよほど激しかったと見えます。よく御無事で」
「違うんですよ。それぶつ壊したのは俺たちです。言っても信じないだろうな。」

俺がちらりとダンブル大尉を見ると、彼は目線で「黙っている」と伝えてきた。

ここが弾薬の集積所であることは第三師団の機密だ。第五師団には言えないのだろう。帝国軍は師団同士で機密を共有しないことがざらにある。

まあいいか。俺たちは第六特務旅団。どこの師団にも属していない独立部隊だ。第三師団と第五師団のやり取りに口を挟む義理もない。

第五師団の将校たちは崩落した城壁や城門を見ていたが、やがてダンブル大尉に敬礼した。

大尉の一人が彼に告げる。

「ダブル大尉、お疲れ様でした。工兵を連れてきておりますので後片付けをさせましょう。修繕は第三師団の方でお願いします」

「承知しております。御協力に感謝いたします」

大隊長がアルツァー大佐に敬礼した。

「ゴドー要塞は既に第五師団の主力が奪還作戦を実行中です。我々は敵残党の掃討作戦を命じられております」

「ほう、そうか」

「はい。第六特務旅団には後詰めの上陸まで周辺の警戒をお願いします」と、師団長よりの要請であります

「無論だ。ゼツフェル砦の勇士たちを見捨ててはおけぬ。戦局が安定するまで協力するとお伝えしてくれ」

「はっ！」

まだ完全には終わっていないが、ここから先は第五師団がやるだろう。

あの軍服コスプレ女……いやリトレイユ公殿下は、この状況を作り出したかった訳だ。

俺は大佐と共に歩き出しながら苦笑いする。

「まんまと利用されましたね、閣下」

「全くだ。第三師団はこれだけの醜態を晒した以上、第五師団に頭が上がらないだろう。それはつまり、ミルドル家がリトレイユ家に頭が上がらなくなったことを意味する」

「『五王家』の序列第三位が、末席に頭が上がらなくなった訳です」
「そういうことだ。あの女、最初からこれを狙っていたな」
国土防衛の戦争を国内の政争に利用したことになる。酷い話だ。
だがまあ、とてもシユワイデル的ではある。この国では珍しくもない。

俺はそこで第六特務旅団の存在について考える。

「本当は最初から第五師団を動かしたかったのですが、ゴドー要塞陥落前に第三師団が援軍を受け入れるはずはありません。しかし独立部隊の我が旅団を断る理由はない」

「それに戦況が悪化してから助けた方が、第五師団を高く売り込める。最初から第五師団が駐留していれば、ゴドー要塞は陥落しなかつただろう。だがそれでは得られる果実が小さい」

「どうせ収穫するなら、よく熟れてから……ということでしょう」

大佐は溜息混じりに頭を掻く。

「そういうことだろうな。やれやれ、謝罪して損した」

「謝罪？」

「いや何でもない。やはりあの女に情けなどかけるべきではないな」
大佐はクスクス笑うと、俺の背中を軽く叩いた。

「さて、帰る前にゴドー要塞の視察でもしておくか。我々にはそれぐらいの権利はあるだろう？」

「仰るとおりです、閣下」

何が起きたのか見せてもらおうぞ。

* * *

ゴドー要塞に第五師団の軍旗が翻ったのは、援軍到着の夕方だった。

ブルージュ軍は第五師団を見ただけで国境まで後退してしまったらしい。なんか変だな？

一応、ちゃんとした理由はある。

ゴドー要塞の東側……つまりゼツフェル砦に向いていた側の砲門は全部吹っ飛んでしまった。弾薬の誘爆が起きたのは間違いない。原因は不明だ。

そして東側の支城であるゼツフェル砦はもうメチャクチャだ。前線基地にならない。

この状態のゴドー要塞を占拠しても、ブルージュ軍は第五師団とは戦えないだろう。

だから逃げた。

うん、理屈としては合っている。

合ってはいるのだが、どうにも腑に落ちない。

だがこの疑念は黙っておいた方がいい。アルツァー大佐以外には言わない方がいいだろう。そんな気がする。

そして俺たちはゴドー要塞には入れてもらえなかった。大変丁寧

にお断りされたのだ。

第三師団の将校たちが城門前で何か言い争っていたが、第五師団の将校が全部追い返している。

「少尉、あれは第五師団がゴドー要塞を支配下に置くつもりだな？」
「おそらくは。聞けば第三師団は幹部将校が何人も戦死したそうですし、兵や大砲をだいぶ失っています。要塞を返してもらっても守りきれないでしょう」

俺たちはそんな話をしながら、軍馬でカツポカツポと坂道を下る。ゴドー要塞に入れないのは仕方ないが、せつかく来たのだ。ゼツフェル砦からは見えなかった要塞の西側を軽く視察することにした。

激しい戦いの跡……つまり敵味方の死体を眺めながら、警戒しつつ軍馬を歩ませる。

「支城まで見ておくか？」

「まだ危険です。護衛が小官だけですよ」

「いや、貴官も護衛をつけるべき身分なのだが」

「では閣下が小官の護衛ということだ」

そんな他愛もない会話をしているとき、俺は妙なものに気づいた。

「閣下、あれを」

「あの黒い点か？」

俺たちは望遠鏡を取り出し、遠くの丘に見えるものを確認する。

大佐がつぶやく。

「大砲のようだ。こちらを向いているな。ブルージュ軍が遺棄したもののようだ。すでに我が軍が回収作業を開始している。あれがどうした？」

言うべきかどうか迷ったが、俺は大佐の参謀として事実を伝える。「小官はあれと同じものを見たことがあります。……第五師団の攻城砲と同じ形です」

「なに？」

攻城砲はデカいし希少だから見間違えるはずがない。戦場であれのお守りをさせられたこともある。

大佐はしばらく考え、それから俺に問う。

「行って確認したい。どう思う？」

その瞬間、俺の首筋にぞわりと悪寒が走った。『死神の大鎌』だ。理由はわからないが、あそこに行けば俺は死ぬらしい。

だから俺は首を横に振った。

「危険です。あるべきではない場所にあるものには警戒が必要です」俺がそう言っている間に、回収作業中のシュワイデル兵たちにかが近づいていた。味方の騎兵だ。

おそらく状況確認に派遣された第三師団の騎兵だろう。制帽の縁取りが第三師団のカラーだ。

第三師団の騎兵は回収部隊に挨拶し、下馬して大砲に歩み寄る。回収部隊と何か雑談しているようだ。見た感じ、特に不穏な感じはしない。

だが次の瞬間、回収部隊の兵が背後から銃剣で突き刺した。騎兵が振り向くより早く、回収部隊全員が騎兵に襲いかかる。

「うわ……」

大佐が思わずつぶやいたときには、騎兵は地面に転がっていた。俺は大佐に馬を寄せて警告する。

「隠れましょう」

馬を茂みに伏せさせ、俺たちも身を低くする。この距離なら見つからないはずだ。

案の定、回収部隊は周囲を警戒している。騎兵の死体はずるずる引きずられ、俺たちの視界から消えた。

連中の制帽の縁取りは第三師団の師団カラーだが、明らかに第三師団ではない。

「第五師団か、あるいはブルージュ軍か。どちらだと思う？」

「おそらくは第五師団の方でしょう。大型砲をここからブルージュ領まで運搬するのは困難です」

あいつらが何者かは気になるが、敵だとわかっていればそれで十分だ。

俺たちはその場をそっと離れつつ、顔を見合わせる。

「今回のブルージュ軍の侵攻、予想以上に闇が深そうですね」

「そつだな。リトレイユ公には今以上に用心するとしよう。あの女は危険だ」

第29話「中尉への昇進」

【第29話】

その後、俺たちは無事に第六特務旅団の本部へと帰還した。奇跡的に一人も欠けることなく、帰ってくる事ができた。何人か死ぬのは覚悟していただけに、戦死者ゼロという結果は嬉しい。

もともと死人が出なかっただけで、負傷者や病人は結構出ていた。左手の人差し指を吹き飛ばされた子や、片目を失った子もいる。かすり傷程度の負傷者なら山ほど出た。

交戦距離が遠かったおかげで運良く死ななかったが、失った体は戻らない。まだ若い彼女たちの今後を考えると、参謀として重い責任を感じる。

俺の執務室で、小隊長のハンナが遠征中の報告書を提出してくれた。

「負傷者の他にも、行軍や籠城戦で体調を崩した子が十人以上いました。それと生理痛が重くて戦えなくなっちゃった子が何人かいますね」

「仕方ないな。兵士だって人間だ、疲れれば体調ぐらい崩す」

「あ、でも参謀殿が第三小隊を迎えに呼んでくれてたおかげで助かりました。あの馬車、すごく評判良かったですよ！」

「ははは、そうか」

あれはもともとゼツフェル砦が陥落した後、負傷兵を乗せて退却するための馬車だ。策としては空振りになってしまったが、みんなが喜んでくれたのなら何よりだ。

それに、こういう保険は空振りになるのが一番いい。

俺は安堵の溜息をつく。

「今回、誰も死ななかつたのは本当に幸運だった。普通はこんなこととはありえないからな。俺も初めてだ」

大柄なハンナが報告書をぎゅっと抱きしめ、ニコツと笑う。

「みんなが噂してますよ、大佐殿と少尉殿が死神を追い払ってくれたんだって」

死神は俺だよ。

一応、釘は刺しておく。

「こんな『幸運』が何度も続くとは思わない方がいい。ゼツフェル砦の守備隊は十人以上死んでる」

「は、はい」

実のところ、これは「幸運」でも何でもない。友軍に損害を押しつけただけだ。

今回も俺のせいで歩兵が十人以上死んでいる。ゼツフェル砦守備隊の歩兵に限って言えば死亡率は四割近い。半数近く死ぬのが俺の用兵だ。

俺はいつか、第六特務旅団の子たちを半数近く死なせる日が来るのだろうか。それは困るな。もっと良い参謀にならないと。
俺は頭を掻く。

「結果的に何とかだったが、今回も反省点ばかりだ。名参謀とは程遠いな」

「そうですね？ みんなメチャクチャ褒めてますよ？」

「そう言ってもらえるのはありがたいんだが……」

俺は机上の地図を見る。

「全体としては、今回は帝国側が一方的に損をするだけの戦いだっ
た。ゴドー要塞と周辺の砦は破壊され、第三師団は多数の兵と士官
を失った。現在、国境地帯はブルージュ軍が優勢になっている」

もっともブルージュ軍も派手にやった割に得るものは少なかった。
第五師団がミルドール領に駐留し、警戒を続けている。

おそらく第五師団はこのまま永続的にミルドール領の一部を支配
するつもりだろう。

「得をしたのはあいつだけか」

「あいつ？」

「いや、何でもなし。得をしたのは死神だよ」

得をしたのはリトレイユ公ただ一人だ。俺なんかより彼女の方が
よっぽど死神だと思う。

彼女の本性と謀略については、俺と大佐だけの秘密にしておく。リトレイユ公は秘密を知る者を逃がさないはずだ。味方にならなければ排除するぐらいは平気であるだろう。と思っていたら、ハンナが俺をじいっと見つめている。

「何か隠し事をなさってませんか、参謀殿？」

「してないよ？」

のんきに見えて意外と鋭いんだよな、この人。

俺は立ち上がって制帽を被る。

「さて、大佐殿と仕事の打ち合わせでもしてくるか」

「あっ、ずるい!?!」

何がずるいんだ。

「ハイデン下士長は兵の世話を頼む。特に負傷兵の心に寄り添う任務は貴官が頼りだ」

「それはがんばりますけど……」

なんだかすねているハンナを残して、俺は廊下に出る。あんな良い子を貴族たちのドロドロの陰謀に巻き込みたくない。

俺は長い廊下を歩いて旅団長室に向かう。

だが途中で足が止まった。この甘ったるい香水の匂い。

あの女だ。

リトレイユ公が向こうから歩いてくる。

なんでここにいるんだよ。

そう思いつつも反射的に帝国軍の慣習に従い、俺は立ち止まって敬礼した。

するとリトレイユ公も立ち止まる。

「さすがは『死神クロムベルツ』ですね」

面と向かってそれを言うヤツは滅多にいないので、さすがに俺も腹が立つ。味方を大勢死なせるのは軍人として恥すべきことだ。

「小官はユイナー・クロムベルツ参謀少尉です。それ以外の名は持ちません」

「そうですね」

リトレイユ公は悠然としている。俺が何を言おうがどうでも良いのだろう。

彼女に尻尾を振る気はない。人間的に好きになれないのもあるが、彼女に尽くしても報われないのがありありとわかるからだ。リトレイユ公は協力者を切り捨てることを何とも思わない。

だから嫌われておくことにした。

「死神の名は貴女にこそ相応しい」

「あら、ありがとうございます。光栄なことだと受け止めておきますね」

スッと目を細めて笑う糸目の美女。見た目だけは本当に綺麗な

だけどな……。

俺の言葉が何を意味するか、リトレイユ公はわかっているはずだ。
『俺はお前の本性を知っているし、それを恐れるつもりもない』
そう伝えたのに等しい。

せつかくだから、もうちょっと嫌われておくか。

「ですが死神も死ぬことをお忘れなきよう」

「心得ておきましょう」

なんかこいつ、俺を殺そうと思ってないか？ 背筋がぞわぞわするんだが。

リトレイユ公は俺に会釈もせず ゆっくり歩き出した。やれやれ、この楽しくないおしゃべりも終わりか。

だが次の瞬間、彼女はすれ違いざまにぼそっとつぶやく。

「次は『二番目』です。たくさん殺しましょうね？」
今なんて？

二番目って、もしかして「五王家」の序列第二位のこと？
ヤバいぞ、この女。

彼女の足音が遠ざかっていく。俺も無言で歩き出す。

俺は敢えて振り返らなかつたが、背後から漂う恐怖の匂いが凄く怖かった。彼女の香水の匂いが掻き消されるほどの恐怖の匂い。

これからどうなるんだ、この国……。

* * *

「これからが楽しみだな、少尉。いや……」
大佐は嬉しそうな顔で笑った。

「中尉」

俺は唐突に中尉に昇進した。

このタイミングで？

俺があっけにとられていると、大佐は苦笑した。

「リトレイユ公が裏で手を回していたようだ。ゼツフェル砦防衛が評価されたのはもちろんだが、第五師団長からの『第五師団在籍中の軍功抜群、比類無き逸材。さらなる裁量を与え、帝国に奉仕させるべき』と推薦状がついたのが大きい」

「はあ……」

リトレイユ公の性格はもうわかっている。彼女は公正な人事になると興味はないし、恩を売るつもりもないだろう。彼女は恩義というものに価値を置いていない。

「まあ、くれるというならありがたくもらっておきますか……」

「そうだな。中尉になれば給料も増える。それに貴官の年齢で中尉昇進ということは、佐官への昇進を見据えた人事を意味する」

まあそうだよな。貴族将校と同じペースだ。平民将校は五十代で大尉になれば上出来だが、貴族将校は三十代で少佐になるからな。大佐は俺を気の毒そうな顔で見る。

「リトレイユ公は貴官をずいぶん気に入っている。骨までしゃぶり尽くすときの顔をしていた」

「貴重な情報に感謝します。知りたくありませんでした」

俺たちは苦笑して、それから大佐が言う。

「貴官の発言力が増せば、私としてもありがたい。これからもよろしく頼む」

「閣下のためでしたら喜んで」

俺は敬礼し、中尉の階級章を受け取った。

まあ仕方ない。みんなのためにがんばるか。

第30話「旅団再編計画」

【第30話】

初の実戦を終えた第六特務旅団だったが、初めての仕事を終えた後というのは問題点が浮かび上がってくるものだ。むしろそうでなくはない。

「だが問題点の数が多すぎるな」

大佐は旅団長室で深々と溜息をついた。

「まず、銃の調達だ。どうなっている？」

「今月中にあと三挺届きます」

「少なすぎる。それに検品で撥ねられるものが多い」

全く仰る通りです。それは俺も頭を悩ませているところだ。

「仕方ないんですよ。職工組合に属していない闇業者ですから。あまりおおっぴらに作業ができないんです」

後ろ暗い連中が愛用している工房なので、古くからの顧客も多い。そういう馴染みの客からの依頼が来れば、新参者の依頼は後回しにされる。地位や立場は関係ない。それが誠実な商売とされる世界だ。

「閣下は『ろくろ』をご存じですか？」

「陶工が使う道具だな」

「あれを金属加工用に改造したヤツでひとつひとつ手彫りでライフリングを入れてるんですが、とにかく時間がかかるそうです」

腕はまあまあだし、口止め料分の秘密保持はしてくれる。材料をちよろまかすこともない。

その代わり生産性はあまり高くない。

大佐は溜息をつく。

「いつそメディレン領に招聘して、当家のお抱え職人にしてやるのか？ 私の金なら当主殿も文句は言うまい」

「裏稼業ですから冗談抜きで職人が殺されますよ」

暗殺用の仕込み武器だの、脱税用の隠し金庫だの、表に出せない依頼ばかり請け負っている工房だ。下手に工房を畳もうものなら「顧客たち」が口封じを目論むのは確実だった。

「では仕方ないな。技術者の養成から始めよう。当面はその工房に作らせるしかないだろうが、新型騎兵銃が揃わんのでは戦いようがない」

「ごもつともで」

「それに問題はまだある」

大佐はますます困った顔をする。

「銃を撃つのが怖いと申し出る兵が続出している。殺すのも殺されるのも嫌だそうだ」

「それが正常な感覚です」

むしろ他のみんなが適応しすぎだと思う。覚悟が決まりすぎている。

「現時点では中隊全体で十名程度だが、まだ増える可能性がある。

このままだと軍を去りかねない。だが行くあてもない者たちだ。それに旅団の戦力を拡充したいときに去られてはこちらも困る」

「問題だらけですね」

「まだあるぞ」

大佐は俺に顔を近づけてきた。

「リトレイユ公は第六特務旅団を手駒として各師団に貸し出すつもりようだ。今はジヒトベルグ家と何やら相談しているらしい」

「第二師団ですか」

第二師団を擁する門閥にして、『五王家』の序列第二位。

第六特務旅団の本部は、ミルドール家とジヒトベルグ家の勢力圏に挟まれた空白地帯にある。兵を貸し出すにはちょうどいい相手だ。

「で、あの女は我々を高く売りつけるために、さらなる戦力増強を要求してきた。資金や資材は出すからもっと強くしろと言っている」「金があれば強くなれるというものでもないのですが」

なるほど、こりゃ問題だらけだな。

俺は少し考え、大佐に笑いかける。

「では三つとも解決しましょう」

「できるのか？」

「完全にではありませんが、少なくとも大佐の眉間のしわは消えるはずですよ。美人が台無しですよ」

俺が言うと、大佐は眉間を指で擦る。

「あまり私をからかわないでくれ。……まあ、ではよろしく頼む」
「はっ」

* * *

そして、その日の夕方。

「ということで、部隊の改革案をまとめてきました」

「早いな？」

大佐もさすがに驚いた顔をしている。そんな上官を見るのが楽しい。

「まず中隊を構成する三個小隊を二個小隊程度に再編します。どうせライフル騎兵銃が足りていませんから、歩兵ばかり多くても部隊の増強につながりません」

ライフル騎兵銃は月に数挺しか増えないので次の作戦に間に合わない。

「削減する一個小隊分は射撃や走力、闘争心などの面であまり歩兵に向いていない者たちです。ですので他の仕事を割り当てます」

「他の仕事？」

「とりあえず鼓笛隊と伝令の騎兵ですね」

ゼツフェル砦の防衛戦で痛感したが、やっぱりラツパか何かで合図しないと兵をうまく動かせない。声で指揮できるのはせいぜい五十人以下だし、別動隊と連携するのも難しい。

「銃は撃てなくてもラツパなら吹けるでしょう。ラツパで人は死にませんから、銃が嫌ならラツパの訓練をしてもらいます。あるいは軍隊式馬術を」

「確かに通信に従事する人員が欲しいとは感じていたが……」

大佐は思案し、すぐにうなずいた。

「いいだろう。教導はできるか？」

「さすがに小官の手には余りますので、それぞれ使えそうな者を中隊から見つけてきました」

俺が書類を差し出すと、大佐は目を通す。

「鼓笛隊教官はラーニヤか。確かフィニスから流れてきた旅楽士の一座だったな」

「はい。射撃や走力は下から数えた方が早いですが、楽器なら何でも得意だそうです」

「で、馬術教官はサテユラなのか。流民なのは知っているが、乗馬が得意だったとは知らなかった」

「彼女はキオニス連邦王国出身です。キオニスキオニシャルン騎兵ですよ」

キオニス連邦王国は異教徒の国で、何十もの遊牧民族が数人の王の下に集まってできている。

キオニス騎兵は各氏族の戦士たちで、全員が馬術の達人で槍や弓を巧みに操る。そして氏族のために戦うときは極めて勇猛だ。

「出身氏族が他氏族に滅ぼされたのでシュワイデルに流れてきたそうです」

「あそこはいつも内輪で争っているな……」

彼らは同じ国の民という感覚が希薄で、しょっちゅう氏族単位で争っている。

ただし他国の侵攻に対しては一致団結して激しく抵抗するので帝国も手を焼いている。

「キオニス騎兵の出身なら申し分ないな。軍馬は実家に余ってるのを数頭もらってくる」

さすがは五王家のひとつメディレン家、軍馬が余ってるらしい。あれメチャクチャ高いぞ。前世の感覚で言えば装甲車ぐらい高い。維持費も高い。

「はい。それともうひとつ」

「なんだ？」

「砲兵隊を設立しようと思います」

俺は計画書を提出する。

「先日の戦闘でも痛感しましたが、やはり火砲のない軍隊では戦えません。自前の砲兵中隊を持つべきです。それに歩兵の適性がなく

ても砲兵には向いているという者もいるでしょう」

とにかく人が足りないのだ。辞めてもらっては困る。戦列歩兵以外の仕事を用意するから軍隊に残ってほしい。こっちも必死だ。

大佐は計画書をめくり、俺をちらりと見た。

「砲術教官はどうする？」

「ダブル大尉から手紙が来まして、小官の同期を送ってくれるそうです」

「第三師団から？ ずいぶん気前がいいな」

「先の戦闘で脚を負傷して、戦えない体になってしまったそうで…」

強制的に退役させられそうになっているので、第六特務旅団で使ってはもらえないか。手紙にはそうつぶられていた。「君がいるなら安心して託せる」とも。

そう言われると俺も悪い気はしない。それに今回来るのは、俺の同期の中でも結構親しかったヤツだ。

「人柄と能力は保証します。女性の扱いも心得ていますし既婚者です。この旅団にも馴染みやすいかと」

「貴官がそう言うのなら信用しよう。教官はそれでいいとして、大砲はどうする？」

俺は肩をすくめてみせる。

「約束通り、リトレイク公に資材を提供してもらいましょう。ブル
ージュ軍に貸してやるくらい大砲をお持ちのようですし」
「そうだな。第五師団の砲を融通してもらおう」

大佐の交渉力と政治力はなかなかのもので、裏で手を回して
くれるだろう。この際、多少卑怯な方法でも構わない。砲兵隊は必
要だ。

もしゼツフェル砦の防衛戦で大砲がなかったら、たぶん半日で陥
落していた。

大佐は頼杖をついて俺を見上げる。

「まったく、貴官は頼りになる参謀だな」

「恐縮です」

「次はどんな無茶を頼もうか考えているんだが」

「やめてもらえますか？」

頼まれたら頑張るけどさ。

第31話「旧友との再会」

【第31話】

しばらくして、そいつは第六特務旅団の本部にやってきた。

「ユイナー！ ユイナーじゃないか！」

良く通る美声と、誠実そうでさわやかなハンサム顔。鍛え上げられた体つき。

俺は士官学校同期の相変わらずのハンサムっぷりに何だか苦手意識を覚えつつも、懐かしさに笑みを浮かべる。

「ロズ！ 脚を負傷したと聞いたが元気そうで安心したぞ！」

「なに、吹っ飛ばされた訳じゃない。ちゃんと股間にくっついてるさ。ただ走るのが少々しんどくてな」

ロズ中尉は苦笑いした。よく見るとほんのわずかにだが、左足をかばうような歩き方をしている。

あの感じだと走るのももちろん、乗馬も難しそうだ。

戦場での移動に支障をきたすとなると後方勤務しかないが、教官職や戦技研究はベテランが就く仕事だ。若手将校は普通にお払い箱にされてしまう。

だからうちで引き取ることにした。

一緒に出迎えたハンナ下士長が敬礼しているので、俺は彼を紹介した。

「こいつが砲兵科の秀才、ロズ・シュタイアーだ。そろそろ大尉になつたか？」

「はは、なれる訳ないだろう。まだ中尉だ。お前こそ参謀中尉になつたそうだな。おめでとう。俺が見込んだ通りだ。やはり俺の人物眼は大したもんだな」

そう言つてウィンクしてみせるロズ中尉。本当にさわやか野郎だな。ム力つくぞ。

「ハイデン下士長、こいつは口が達者だから気をつけてくれ。『おしゃべりロズ』と言えば砲兵科随一の女たらしだったからな。ミルドール公弟殿下の三女を射止めた実績つきだ」

「人聞きが悪いな。きちんと夾叉を取つて、後は当たるまで撃ち続けただけさ」

ロズ・シュタイアーは平民出身だ。平民といつても裕福な商家の次男坊なので、俺とは全然違う。中流階級の上の方だ。

温和で人望もあり、見た目も良い。もちろん努力も怠らないから成績優秀だ。軍務も申し分ない。野心はなく勤勉実直という、軍人の鑑みたいなヤツだった。

だからミルドール公の弟も気に入つて、大事な娘との結婚を許した。ミルドール家を盛り立てる人材だと判断したのだろう。

……ただ、彼は少しばかり運がなかった。

「だが本当に良かったのか？ 第六特務旅団は女の子だけの旅団で、今はまだ歩兵一個中隊しかない。女の子相手に砲術の教官をすることになるんだぞ？」

するとロズは苦笑する。

「軍から除隊になれば俺の居場所はなくなる。実家は兄貴が継いだし、俺は大砲のことしかわからん朴念仁だ」

「朴念仁ではないだろ」

こいつは女性の扱いがメチャクチャ上手い。

だからこそ、うちの旅団に来て問題を起こさないだろうと思ったのだ。相手の身分が何であれ、女性に高圧的な態度を取るような男ではない。

「しかし第三旅団から追い出された今、お前の奥方は……」

たぶんもう離縁させられただろう。彼の妻がどう思おうがミルドール公弟が許すはずがない。

だがそのとき、彼の後ろから誰かやってきた。

「あなた、そちらの殿方がクロムベルツ様ですの？」

上品でおっとりした感じの美女が微笑んでいる。もしかしてロズの奥さんか？

ロズは苦笑した。

「おいおい、やんちゃな姫君だな。馬車にいろと言っただろう？」

「早くお会いしたかったのよ。あなたの一番の親友でしょう?」
「そうなの?」

ロズの奥さんは俺に一礼する。

「お初にお目にかかります。ロズ・シュタイアーの妻、ユリナと申します」

「最初に夫が妻を紹介するのがミルドル家の作法なんだろう?」

「あら、シュタイアー家にはそんな作法はないわよ?」

なんだか面白そうな御婦人だ。

さらに面白いことに、彼女のスカートの後ろから二歳ぐらいの女の子がぴよこりと顔を出す。

「ほらマーレット、御挨拶なさい」

「うー……どーじょ」

もじもじしながら頭を下げて、またぴよこりと引つ込む女の子。

俺は二人に順番に挨拶する。

「第六特務旅団のユイナー・クロムベルツ参謀中尉です。ロズ中尉には士官学校で大変世話になりました。……あの、マーレット?俺は君の父上の友達なんだ。よろしくな?」

なんか冷や汗が出てきた。訳あり人間の巣窟に幸せ家族がやってきたぞ。

ロズが頭を搔く。

「ユリナが絶対に離縁はしないと言い張ってな。意地の張り合いの末、マーレットまで加勢して義父上を屈服させた」

目に浮かぶようだ。孫には勝てなかったか。

「だが義父上が折れた本当の理由は、第六特務旅団がゼツフェル砦の防衛戦で軍功を挙げたからだ。君たちのことを、お飾りではない本物の戦士たちだと言っていたよ」

そう言ってもらえると嬉しい。みんな命懸けで戦ったからな。

ロズはさらに言う。

「それにこれでアルツァー閣下と御縁ができれば、メディレン家とパイプになるからな。ミルドール家は今、少々苦しい立場だ」
「わかっている。『東』の連中だろう？」

ミルドール領の北東部にはリトレイユ領と帝室直轄領がある。

ロズは無言でうなずき、それから明るく笑う。

「そんな訳で一家で世話になるぞ。ミルドール家に何か言いたいことがあれば、うちの嫁さんに頼め。公弟殿下はミルドール家の財務を担当しているからな」

「そうするよ……」

なんだか凄いコネを手に入れちゃったな。ありがたいと言えばありがたい。

俺はハンナと顔を見合わせて笑い、それからシュタイアー家の人々に笑いかける。

「ようこそ、第六特務旅団へ。旅団長閣下が官舎を用意してくれましたので、荷物はそちらへどうぞ」

それから数日して、アルツァー大佐は旅団長室で笑っていた。

「シユタイアー中尉は優秀な砲兵将校だ。教え上手で兵からの評判もいい。良い人材を引き抜いてくれた。さすがは我が参謀といったところだな」

「見切り処分品になっていた人材を安く買い取っただけですよ」

ロズ中尉はブルージュ軍の砲撃で負傷し、前線での任務が困難な体になった。もし先日の戦闘がなければ、今でも第三師団期待の若手将校として第一線で活躍していただろう。

彼はリトレイユ公の陰謀で人生を狂わされた被害者だ。

ふと気づくと大佐が俺の顔をじっと見ている。

「いい顔をしているな。友人を救えたのが嬉しいか？」

「まあ……悪い気分ではないです」

ロズが職と家族を失わずに済んだことに正直ほっとしている。俺らしくもない感情だ。

なんだか照れくさいので、俺はわざと悪い顔で笑ってみせる。

「彼には役に立ってもらいましょ。第五師団から中古の野戦砲五門が届きました。過去の砲撃記録つきですので、さっそく砲兵への転換訓練で使うことにしましょう。いやあ、読み書き計算をみっちりやらせておいて正解でした。なんせ砲兵は教本と算術が必須ですから」

早口でまくし立てたが、大佐は俺の顔をまだ見つめている。

「……なんですか？」

「ふふっ」

なぜか生温かい顔で笑われた。

なんだよ、死神参謀だぞ俺は。怖いんだぞ。

こうして第六特務旅団の演習場には、朝から夕方まで大砲の音が轟くことになった。

歩兵二個小隊約百人と、砲兵中隊の野戦砲五門。それに鼓笛隊と偵察騎兵たち。

まだまだちんまりとした軍勢ではあるが、徐々に編成が充実してきた。

第32話「おしゃべり中尉と砲兵乙女たち」(地図あり)

【第32話】

ブルージュ軍の侵攻から数ヶ月が過ぎ、国境地帯はしばらく平穏を保っていた。

ミルドール家率いる第三師団は弱体化したため、国境地帯の警備はリトレイユ家の第五師団が引き受ける形になっている。

しかし第五師団は積極的な作戦は行わず、両国の国境地帯はブルージュ軍が実効支配したままになっていた。

ミルドール家としては内心穏やかではないだろうが、兵力を借りている立場なので文句も言えない。ゴドー要塞と支城網も再建途中だ。

< i 5 6 0 1 4 9 — 3 5 6 7 8 >

少々気の毒に思いつつも、この小康状態は第六特務旅団にはありがたかった。なんせ装備の更新と兵の訓練ができる。

おかげさまでピカピカの砲兵隊が誕生し、鼓笛隊も誤りなく指示を伝達できるようになった。騎兵たちも馬の扱いに慣れ、見ているハラハラすることはなくなった。

だがもちろん、あのリトレイユ公が何もしてこないはずがない。

* * *

唐突に旅団長室に現れたリトレイユ公は、にこやかに微笑みながらえげつないことを言い出した。

「キオニス連邦王国との戦争をいたしましょう」

俺とアルツァー大佐は無言のままだ。静寂の中、外でロズ中尉が砲兵隊をバシバシ鍛えている声が聞こえてくる。

大佐が俺をちらりと見たので、俺は溜息をつけてリトレイユ公に質問した。

「戦争計画の提示をお願いします」

「お引き受けくださるの？」

「断れるのなら断りますが」

「あら、それは無理ですよ」

リトレイユ公はクスクス笑い、こう続ける。

「キオニス側はもう戦う気まんまんですから」

大佐が不快そうに吐き捨てる。

「話がまわりくどいのは無能の証拠だ。貴公は無能か？」

するとリトレイユ公はスツと目を細める。やっぱりこの人、すごく糸目だ。

糸目美人は割と好きなんだが、この人は性格が最悪だから……。

「『五王家』序列第二位にありながら、かのジヒトベルグ家は愚か

にもキオニスの遊牧民と争いを起こしました。今はまだ一氏族が戦っているだけですが、じきに他氏族にも飛び火します。第二師団の戦列歩兵では太刀打ちできません」

リトレイユ公が真面目になったので、俺も真面目に質問する。

「太刀打ちできそうか判断するのは我々です。そう思われた根拠を願います」

即座に封書が机上に置かれた。

「第五師団の参謀たちによる最終報告書です。第二師団の戦列歩兵は練度が低く緩慢、野戦ではキオニス騎兵の機動力に対抗できないとのことです。戦列歩兵二千に対してキオニス騎兵五百の机上演習では、第二師団の勝率は二割以下でした」

大佐が目線で「貴官が読め」というので報告書をざっと読んだが、分析結果はプロの参謀が過去の統計を元に綿密に計算したものだ。俺にはおかしな点が見つからない。

俺は士官学校で習ったことを思い出しながら大佐に説明する。

「キオニス騎兵は練度が高く、散開しながら弓で襲撃することができます。この方法を採られると戦列歩兵側は敵の一部しか叩くことができません。また騎兵突撃を敢行された場合、方陣への隊列変更が間に合わずに大打撃を受けるといふ分析です」

「貴官はどう思う？」

「異論を差し挟む余地がありません。士官学校の教本の対騎兵戦術に書いてる通りです」

「そうか……」

大佐はしばらく沈黙し、それからリトレイユ公を見つめる。

「ちょうどいい位置に第六特務旅団がいるな。高く売りつけるつもりか？」

「さすがに第五師団はこれ以上展開できませんから、そうして頂けると助かります」

大佐はすかさず問う。

「見返りは何だ」

「予算と人員の規模を増やし、旅団に相応しい兵力にするよう陸軍総司令部へ働きかけましょう。皇帝陛下への提言もいたします」

『五王家』の当主が働きかければ陸軍総司令部といえども無視はできないだろう。『五王家』の当主は形式的には帝位継承権すら持っているのだ。皇帝だって無視できない。

それにリトレイユ公が実質的に支配している第五師団は、今やアガン王国やブルージュ公国との戦いになくはならない戦力だ。軍内部での発言力はかなり大きくなっている。

俺は大佐に耳打ちする。

「閣下、お買い得です」

「わかっている。それにジヒトベルグ領が危うくなれば、どのみち我が旅団にも出撃命令が下る」

大佐は不承不承だがうなずき、リトレイユ公を睨んだ。

「相変わらず貴公の申し出は不健全極まりないな。だが気に入った。その約束、決して破るな」

「肝に銘じておきましょう」

リトレイユ公は微笑むと立ち上がった。

そこにハンナ下士長が入ってくる。

「失礼します。シユタイアー中尉が砲撃演習を閣下に御覧入れたいと……」

そこまで言っつて、彼女はリトレイユ公に気づいてギョツとした顔になる。

「しし、失礼しましたっ！ ご来客中とは知らずっ！」

しかしリトレイユ公は穏やかに微笑み、首を横に振った。

「構いませんよ。ハイデン下士長、お疲れ様です」

今日は人当たりがいいな。交渉がうまくいったからだろうか。

軍服コスプレの美女はハンナに軽く会釈し、大佐に向き直る。

「これ以上はお邪魔でしょう。用件は済みましたので、本日はこれで」

「来るだけで邪魔なのだがな。貴公とはあまり会いたくない」

「それは……そうでしょうね」

ふふつと笑うリトレイユ公。

そして彼女はびっくりするぐらいさつさと帰ってしまった。

アルツァー大佐は椅子の背もたれに体を預け、長い黒髪が流れるのも構わずにずるずる滑り落ちていく。

「やれやれ、今日は口説かれずに済んだぞ。いつもこうだといいいんだが」

「お疲れ様です」

大佐の心労はよくわかる。俺だって陰湿そうな糸目のイケメンに言い寄られたら同じ反応を示すと思う。

「それよりも閣下、砲兵隊の視察を」

「わかっているから少し休ませてくれ……」

よっぽどリトレイク公が苦手なんだな……。

* * *

砲兵隊の仕上がりは上々で、ロズ中尉も御機嫌だ。

「いや、後進の育成もなかなか楽しいな。人が育つのを見るのはいいものだ。殺すよりもずつといい」

発言がなんだか物騒だが、こいつは先日までブルージュ人に砲弾を当てる仕事に就いていたから仕方ない。

砲兵へと転身した女の子たちも楽しそうだ。

「銃よりこっちの方がやりやすいです！」

「当たったときの達成感が凄いですよ、大佐殿！」

汗とススにまみれている砲兵ガールたちを、大佐が慈しむように見つめている。

「どうせ戦うなら自分に合ったやり方がいい。昨今では大砲が戦場の主役であり、重要性は今後ますます高まる。……と、うちの参謀が言っている」

言いました。

大佐はさらに言う。

「お前たちは帝国史上初の女性砲兵となる。もちろん我が旅団にとっても初の砲兵だ。責任重大だぞ。シユタイアー中尉からしっかり学ばせてもらえ」

「はいっ！」

人望あるなあ。いいなあ。

俺は参謀だから指揮官ほどは人望がなくてもたぶん大丈夫だが、かといって嫌われる必要はない。

でもどうやれば好かれるのか全然わからない。相手は若い女の子だ。

まあいいやと思って黙っていると、ロズのやつが余計なことを言い出した。

「なんだなんだ、みんなユイナーがお気に入りか？ ダメだぞ、こいつはうちのマーレットの婿にするからな」

「冗談はよせ。お前の愛娘はまだ二歳だろっ」

俺は士官学校の同期をじろりと睨み、それからもつと大事なことを言う。

「それに誰と結婚するかは本人が決めることだ。父親に決定権はない。違うか？」

ロズの妻であるユリナは、父親のミルドール公弟と大喧嘩してまでロズにくつついてきた。

当然、ロズの娘のマーレットもそうなるだろう。そうあってほしい。

するとロズは頭を掻いて苦笑する。

「はは、こりゃ参ったな。お前の言う通りだ。……どうだ、みんなやっぱりこいつは興味深い男だろ？」

砲兵の女の子たちの中に、うんうんとうなずいてる子が数名いる。

ああ、なるほど。そういうことか。ロズは俺がこう答えることをわかった上で、わざと絡んできたのだ。俺の評価を少しでも良くするため。

昔からこいつはそういうヤツなんだ。

俺は溜息をついて異世界の友人に釘を刺す。

「俺のことはいいから自分の仕事をしてくれ。お前は昔から人が好きすぎる」

「お前に言われたくないぞ。何が『死神クロムベルツ』だ。士官学校じゃ『助っ人ユイナー』で通っていたくせに」

士官学校では実力で這い上がってきた平民と、実家の看板を背負わされた貴族との間でいろいろあった。

俺は平民側で極力おとなしくしていたが、何かある度に仲裁役を押しつけられていた。おかげで貴族の御曹司たちから憎まれたものだ。

「お前らが巻き込むからだろ……」

「巻き込めば必ず何とかしてくれただお前が悪い」

聞きましたか女子の皆さん？ こいつこんな男ですよ。今の言い草ってある？

「おかげで俺がどれだけ困ったか」

「いいじゃないか、お前は平民にしちゃデカいし剣術の名手だ。知恵も度胸もある。貴族の坊っちゃんもビビるのさ」

「今気づいたんだが、俺がどこの門閥のコネも作れなかったのはお前らのせいだよな？」

「気づいてなかったのか？ おいおい、なんてお人好しだ！」

ロズ中尉はおおげさに天を仰いでみせた。

「前言撤回だ、やはりこんな底抜けのお人好しの婿殿は困る！ みんな、こいつの嫁になると苦労するぞ！」

「だからやめろって」

恥ずかしいだろ。兵が見てる。

大佐たちまで笑ってるじゃないか。勘弁してくれ。

第33話「戦場の女神」(図解あり)

【第33話】

「ジヒトベルグ領か……」

旅团长室でアルツアー大佐が頭を抱えている。サラサラの黒髪が台無しだ。

「キオニスとの国境地帯は乾燥した草原で、都市も資源もないと聞く。補給の問題が出てくるぞ」

「こうなったら輜重隊も編成しましょう。馬車を購入して旅団内部で自己完結するんです」

どうせ砲兵隊の野戦砲も馬車で引張るので、まとまった数の馬車が必要だ。

馬車があれば負傷者を運ぶこともできるし、みんなの荷物も運べて疲労を軽減できる。戦闘に不向きな兵士の新たな異動先にもなる。大佐は顔を上げ、俺をちょっと睨んだ。

「輓馬ばんばと馬車の購入費や維持費がどれぐらいなのか、貴官は知っているだろう。予算が湯水のように湧いてくると思ったら大間違いだぞ」

「湯水が湧いてくるといふ表現、なかなかいいですね」

メディレン領は海辺なので水が豊富にあり、日本と全く同じ慣用語がある。こういうのは転生者にとってちょっと嬉しい。

しかし大佐がますます俺を睨んでくるので、俺は軽く咳払いをした。

「その辺りは旅団長閣下のお力で何とかして頂ければと。経済力を伴わない軍事力など存在しません。金がないのに戦争をするのは愚か者です」

「気安く言う」

大佐は深々と溜息をつき、体を起こして椅子にもたれかかった。

「だが貴官の言葉はおおむね正しい。軍事的才能に恵まれぬ私としては、せめて経済的な支援ぐらいは何とかせねばな」

「よろしく願います」

こればかりは俺にはどうしようもない。

大佐は濁った目で引き出しを開け、ペンと紙を取り出した。

「では私は今からあちこちに手紙を書き、いろいろな人と会い、様々な組織と交渉する。だから邪魔をするな。あともっと尊敬しろ」

「小官はこの地上の誰よりも閣下を尊敬しております」

前髪を払いつつ、疑わしそうな顔をする大佐。

「本当か？」

「本当です」

俺はビシッと敬礼して、それからそそくさと旅団長室を後にした。

陸軍総司令部は恐ろしくケチで、軍の予算だけでは兵の給料すら

まともに払えない。各師団には五王家のいずれかがバックについており、そこからの資金で何とか補っているのが現状だ。

そして第六特務旅団は表向きフリーの独立部隊なので、どこの貴族も金を払ってくれない。

だからアルツアー大佐は予算獲得のために奔走する羽目になる。うちの旅団の貴族将校は彼女一人だ。

もともと大佐の使命感ひとつで創設された旅団なので、そこは頑張ってもらうしかない。

旅団長室でもらった書類を手に、俺はハンナ下士長のところに向かう。

彼女は下士官詰所で休憩中のようなのだ。片手で本を持ち、チェスに似たゲームを独りでやっている。前世で言うと詰め将棋みたいな代物だ。

「あつ、参謀殿！」

立ち上がって敬礼しようとするハンナを制する。

「すまん、休憩中だったか。詰所に押しかけた俺が悪いんだ。気にしないでくれ」

中間管理職である下士官は気苦労が多く、オフィスと休憩室を兼ねた詰所ぐらいしか休める場所がない。一步外に出れば兵士の面倒を見て、将校の命令に従う日々だ。

「詰め五王棋か、意外だな」

「すすす、すみません！ ゲームなんかしてて！」

「休憩中にゲームをしようが昼寝をしようが貴官の自由だ。それにしても難しいのをやってるな」

『五王棋』はシュワイデル帝国式チェスで、五王家を表す六つの大駒と数種類の小駒を使う。

大駒が「六つ」というのが、実は歴史的な因縁を表している。

かつてシュワイデル帝国は『六王家』が支配していた。

ハンナはわたたししながら、俺と盤面を見比べている。

「い、いえ、なかなか友達ができなかったときに大佐殿がこれを教えてくださいました！ でも人と戦うのが苦手なので、ずっと詰め五王棋をですね」

よっぽど見られたくなかったのか、ハンナは顔が赤い。

しかし俺は感心していた。

「凄いいじゃないか。これ『騎士級』の問題集だろ？」

騎士級はアマチュア最上位クラスで、貴族のサロンでも通用するレベルだと聞く。平民でこのクラスに到達できるのは豊かな都市商人や聖職者などだ。

帝国の各王家には王立棋士協会があり、そこで五王棋士として認定されれば富裕層相手に指導ができる。平民が上流社会に入り込むルートのひとつだ。

実は俺もこのルートを考えてことがあったが、問題が難しすぎて全く解けなかった。異世界は俺に厳しい。

「俺なんか『従士級』でも苦労するぞ。ハイデン下士長は賢いな」

「いえ、独りで考えるのが好きなので……」

俺にはなんとなくわかる。

ハンナは男尊女卑の風習が強い地域で、あまりにも恵まれた体格で生まれてきた。男性なら歓迎されだろうが、女性が並みの男性をしのぐ体格だったのが不幸の始まりだ。

両親が流行り病で死んだ後、村人たちから化け物扱いされて粉ひき小屋に監禁された。

そんな生い立ちを持つ彼女は、今も見えない敵意に怯えて生きている。争い事も苦手だ。

気の毒な話だ。現代日本に生まれていれば、彼女は優れたアスリートになれただろう。

そう、思っていた。

だが彼女の優れた点は体力や運動能力だけじゃなかった。頭もいい。とっさの機転ではなく、熟慮して最善手を見つけ出すタイプの賢さだ。

長い孤独と周囲の敵意が、彼女に深謀遠慮の知恵を授けた。……あんまりそうは見えないが。

だが詰め将棋の名手と優秀な軍人は別物だ。俺は違う問題集を開

く。砲兵科の初等教本だ。

「ハイデン下士長、この一手は指せるか？」

< i 5 6 1 2 1 7 — 3 5 6 7 8 >

俺は敵味方の配置図を示す。

「貴官は砲兵中隊の指揮官だ。会戦中に敵騎兵が側面から奇襲を仕掛けてきた。味方の戦列歩兵は方陣で防御しているが劣勢だ。このままでは危うい。貴官ならどこに砲撃する？」

ハンナは教本をじっと見つめ、数秒間黙考する。

それから迷わずに一点を示した。

「でしたら……ここをひたすら撃ち続けます」

俺はこの瞬間、抱えていた問題が解決したことを知った。

「正解だ」

ハンナが示したのは、戦列歩兵から百メートル以上離れた地点。

まだ敵騎兵のいない場所だ。

だが敵は必ずここを通る。しかもここを通るときは軍馬が全力疾走を開始した後なので、後戻りも軌道変更もできない。

この地点に砲弾の雨を降らせれば、敵の騎兵は甚大な被害を受ける。

タイミングが多少ズレても土煙と飛び散る砂礫が視界を遮り、地面は穿たれて凹凸ができる。隊列を維持できない。騎兵本来の凄ま

じい衝突力は隊列が乱れると発揮できない。

ハンナは続ける。

「直接狙ってもたぶん当たりませんよね？ でも味方に近すぎると射撃の邪魔になりそうですし」

「うん、その通りだ」

射界を横切る騎兵に直接砲撃を当てるのは無理だ。照準に時間がかかる大砲は移動目標を追尾しきれない。

だから敵の移動を予測し、最も効果的な地点に砲撃を『置く』のだ。

前世ならシューティングゲームでもやっていれば自然と気づくものだが、この世界でそれを知っている者は鳥撃ち専門の猟師など一部の職業に限られる。

ハンナは誰からも教えられることなく、自分で考えて正解にたどりついた。

「どうやらハイデン下士長には砲術の素質があるようだ。新設した砲撃中隊に下士官がいなくて困っていたんだが、そっちに回ってくれないか？」

「え、ええ？ 私がですか！？」

「貴官は闘争心が薄いが優秀な下士官だ。そして砲兵下士官には闘争心よりも冷静な判断力が求められる。特に我が砲兵中隊の場合、

中隊長のロズが出撃しづらい。実質的な指揮官は下士官だ」

ロズ中尉は戦傷の後遺症で脚を痛め、馬にも乗れなくなっている。行軍についていけない。

他に砲兵将校がないので、下士官あたりに中隊長の代行をさせるしかない。

しかしハンナは慌てている。

「で、ですけど、私は下士官ですよ!？」

「心配するな、書類上の中隊長はロズ・シュタイアー砲兵中尉だ。貴官は中隊付下士官として砲兵の面倒を見る。それだけだよ」

俺はそう言って、砲術教本をハンナに手渡した。

「野戦砲は軍馬と並んで、我が旅団で最も高価な備品だ。その野戦砲を戦場で託せる者を探していた。貴官が最適だと俺は思うし、旅団長にもそう進言するつもりだ」

俺の言葉を聞いたハンナは、みるみるうちに頬を紅潮させる。

「わ……私ですか？」

「そうだ。貴官しかいない。頼む」

俺に人事権はないし、人の人生を左右できるような立派な人間ではない。だから頼むだけだ。

「参謀殿、私なんかに頭を下げないでください!？ こっつ、困ります!」

「今は上官ではなく戦友として頼んでいるんだ。頭ぐらい下げる。いやほんと、頼む」

ハンナ自身がやる気になってくれなければ、いくら命令しても良い働きは期待できない。

「そうだ、褒めまくろう。」

「世間の連中はハイデン下士長の体格ばかり評価してきただろうが、俺は貴官の本当の強さは忍耐力と知性にあると思っている。あ、いや人望もあつたな。どれも砲兵たちの指揮に必要なものだ」

「褒めても何にも出ませんよ!？」

「いいや、やる気だけは出してもらう。」

「砲兵隊は戦場の女神だが、我が旅団には女神の加護が足りない。貴官がロズ中尉から砲術を学べば、間違いなく砲戦指揮の専門家になれる。次の戦いまでにどうしても必要なんだ。女神になってくれ」

「女神ですか!？ 私が!？」

「そうだ」

「女神……参謀殿の……」

「なんか変な誤解してないか？」

「す、すみません!」

セクハラ上司扱いされてないか心配だ。

俺の懇願にハンナは大きな体をもじもじさせていたが、やがて上目遣いに質問してきた。

「参謀殿、これって『お願い』なんですよね？」

「うん、今の段階ではな」
辞令が下りたら命令になるので、いきなり命令する前に相談している。

ハンナはなおも迷っていたが、声を潜めてこう言う。

「じゃあ、あのですね、私からも参謀殿に『お願い』をしても構いませんか？」

「え？ あ、うん。いいぞ」

飯をおごるぐらいなら喜んで。

するとハンナはニコツと笑う。

「じゃあ、『ハイデン下士長』じゃなくて『ハンナ』って呼んでいただけますか？」

「はい？」

「あつ、やっぱりダメですか!？」

「いや……」

なんだこのお願い。

ハンナはなおも言う。

「ほら、あれですよ、旅団長殿も『ハンナ』って呼んでくださいませ
すし、旅団のみんなも『ハンナちゃん』とか『ハンナさん』って呼
んでますから！」

メチャクチャ早口だな。

まあ……それぐらいなら別にいいか。風紀上も問題はないだろう。

「公的な場では従来通り『ハイデン下士長』だぞ？」

「はいっ！」

ハンナは目をキラキラさせ、期待に満ちた目で俺を見つめる。

「ささ、どうぞ」

今呼ぶの？

俺は軽く咳払いをして、それからぎこちなく彼女の名を呼ぶ。

「これからよろしく頼む、ハンナ」

「お任せください！」

風圧を感じるほどの勢いで敬礼された。

本当になんなんだ。

第34話「コーヒーよりも昏く」

【第34話】

ハンナ下士長が歩兵科から砲兵科に転身して一ヶ月ほどが経ち、ロズ中尉に弟子入りして砲戦指揮のノウハウを叩き込まれている。ロズのヤツは教え上手だから安心だが、砲術は数学を使うのでだいぶハードルが高い。

「もう頭の中で数字がこんがらがっています」

ハンナが苦笑し、ロズが豪快に笑う。

「はははは！ 俺も士官学校では同じことを思ったよ！ 大砲を撃つのにどうして算術が必要なのか不思議だった」

俺はロズが持ってきたコーヒー豆を挽きながら苦笑する。

「歩兵科だって数学は必要だが、砲兵科は扱う数学が難しいからな。ハンナに押しつけられた俺は幸運だった」

するとロズが「おっ？」という顔をする。

「なんだなんだ、お前とうとう入籍するのか？」

「違う。全然違う」

相変わらず獵犬みたいに鋭いな。女たらしめ。

俺はコーヒーミルの引き出しを開けて、焙煎豆の挽き具合を確か

める。

「こんなもんか？」

「おお、いい感じだ。もしかしてどっかで飲んだことあるのか？」

「さっきから詮索がうるさいぞお前は」

俺とロズのやりとりを、ハンナがくすくす笑いながら見ている。

「仲がいいんですね」

「もちろんさ」

「違う」

ロズと俺の答えは正反対だ。

俺はやや粗挽きのコーヒー豆をロズに押しつける。

「さあ、そのヘンテコな装置で淹れてくれ」

「やっぱりお前、飲んだことあるだろ？ これが何かわかるなんて」

「お前が豆と一緒に持ってきたんだから、コーヒーを淹れるのに必要な道具なのはわかる」

この世界にコーヒー豆が存在していたのは、ちょっと驚きだ。

紅茶は珍しくない。比較的温暖なフィニスやエオベニアで茶葉を栽培しているからだ。もちろん緑茶もある。

でもコーヒー豆は違う。こいつはコーヒーベルトと呼ばれる低緯度地帯でしか栽培できない。そしてシュワイデル帝国周辺は高緯度地帯だ。

つまりロズが鼻歌交じりに淹れているあのコーヒーは、かなり遠方から運ばれてきたことになる。……この世界のコーヒー豆が高緯

度でも栽培できるのなら別だが。

いずれにしても、この世界は広い。だがその全貌は未だに謎だ。とりあえず目の前の友人に聞いてみるか。

「なあそれ、どこから入手したんだ？」

「妻の実家からもらったんだ。交易品らしいんだが、俺にもよくわからん」

ロズの奥さんの実家はミルドール公弟。『五王家』第三位の大貴族の門閥だ。金もコネも腐るほどある。

ロズはやがて湯気の立つコーヒーを運んできた。

「さ、できたぞ。ハンナも飲んでみる。苦くて笑っぞ」

「そんなに苦いんですか？」

「砂糖と牛乳を入れることをお薦めしよう。たっぷりとな」

そんな会話を聞きながら、俺はコーヒーの香りを嗅ぐ。懐かしい香りだ。

だが焙煎したて、挽き立て、淹れたてなのに、香りが弱い。やはり俺の嗅覚は転生前よりも弱くなっている。道理でこの不衛生な世界でストレスを感じない訳だ。

せつかくのコーヒーなのに残念だ……。これだと砂糖や牛乳を入れると味がわからなくなるな。

二十年ぶりのコーヒーなので、俺はブラックで味わって飲むことにする。

「おいユイナー、砂糖ぐらい入れる。苦いぞ？」

「問題ない」

俺はホットコーヒーの湯気の香りを楽しみ、それから一口飲んで含み香を楽しむ。苦みの中にも微かにフルーティーな香りがして、ほのかな甘味を感じる。ああ、これは確かにコーヒーだな。

だがそれだけだ。

もしかしたらロズの焙煎が下手だったせいかもしれないし、豆が古いだけかもしれない。何にせよ、前世で楽しんだあの味には及ばない。

そんなことを考えていたら、ロズとハンナがひそひそ話を始める。

「参謀殿ったら、この苦いのそのまま飲んでますよ」

「あいつは昔から変わり者だからな。飲み食いに関しては特に変わってる」

前世で似たようなものを見てきたから、いちいち驚かないだけだ。

香りも味も弱いコーヒーだが、とにかくありがたい。思考が冴え渡る気がする。

「美味かったよ。また飲ませてくれ」

「お、おう」

ロズは砂糖をたっぷり入れたコーヒーを飲み、それから顔をしかめた。

「貴族社会の流行りはわからん。俺は紅茶の方がいいな」

「ならその袋ごとコーヒー豆をくれ。ところで」
俺はロズとハンナを睨む。

「俺の私室は士官用サロンじゃないぞ」
そう。こいつらは俺の私室に押しかけているのだった。迷惑だから帰ってほしい。

だがロズは平然としている。

「ここは士官用サロンがないからな。打ち合わせをするにも旅団長室を占拠する訳にはいかんだろ？」

「そりゃまあな」

旅団長室には外部からの訪問客も来る。他師団のお偉いさんや貴族の使者が来る場所で、機密性の高いミーティングはできない。

「ロズの官舎でやってくれ。この城の来賓用の別館だ、居心地はいだらう？」

「お前が軍議を幼児に聞かせる主義とは知らなかったぞ。それに俺の妻はミルドール公の姪だ、公私の区別はつけておきたい」
非の打ち所のない正論だ。俺は根負けする。

「わかったわかった、もう俺の部屋でいい」
「よし」

ロズがニヤリと笑い、ハンナが楽しそうに眺めている。なんだこの空間。

だがロズはスツと真顔になり、窓の外をちらりと見てから話題を切り替えた。

「ハンナにも知っておいて欲しいんだが、政情がどんどん不穏になっている。ミルドール家はリトレイユ家に対して敵意を募らせている」

まあそうだろうな。リトレイユ公の策謀でミルドール家の第三師団は大損害を受けた。戦場で見かけたあの大砲といい、彼女がブルージュ公国を水面下で支援したのは間違いない。

だがそのことは誰にも言えないので、俺はとぼけてみせる。

「第三師団を助けてくれたのは第五師団だろう？」

「表向きはな。だがお前も気づいているはずだ」

「……まあな」

友人に嘘はつきたくない。俺は二杯目のコーヒーを注ぎながらつぶやく。

「先日の侵攻、ブルージュ軍の砲戦能力が高すぎる。ブルージュは山岳猟兵を巧みに操るが、砲兵や騎兵はまるつきりだったはずだ」
「そうなんだ。だが義父上にそれを伝えたら、『誰にも言うな』と『なるほど』」

ミルドール家の方でも薄々気づいているらしい。そして疑問を抱けば彼らは隅々まで調べ上げる。それだけの力を持っているからだ。仮に何も見つからなかったとしても、高度な隠蔽が行われている可能性は残る。

「表向きは救援に感謝しつつ、尻尾をつかもうとしている。そんなところじゃないか？」

「正解だ。やっぱりお前、参謀になるだけのことはあるよ」

ロズは苦笑し、口直しの焼き菓子をつまむ。

そして真顔に戻って俺を正面から見つめた。

「あの女は次に何をやる気だ？」

ジヒトベルグ家に助力するふりをして罠に嵌める気です。本人が言ってるから間違いない。

さすがにそれを口外するのは危険な気がしたので、俺は憶測として話す。

「あくまでも俺の憶測だが、同様の方法で他家を陥れていくつもりじゃないかな。リトレイユ家は貿易で稼いでいるが、序列は建国当初から第五位だ」

ロズがうなづく。

「序列と実力が釣り合っていないからな。ミルドール家なんか第三位だが、実態は最下位に近いだろう。ブルージュ家が帝国を裏切って以来、領土を削り取られて没落する一方だ」

それを聞いたハンナが目を丸くする。

「ブルージュ家！？ 帝国を裏切るってどういことですか!？」

「おっと、口が滑ったな」

ロズはわざとらしく笑う。

俺はロズの肩をポンポン叩きながら、ハンナに教えてやった。

「帝国はもともと『六王家』だったんだよ。五十年ほど前に何かあったらしくて、ブルージュ家が独立したんだ。それまでは『五指』に帝室は入ってなかった」

「えええええ！？」

ハンナが驚くのも無理はない。庶民にはなるべく知られないように、帝室が躍起になって隠蔽しているからな。

さすがに将校が知らないのはまずいので、士官学校では教えてもらえない。

俺はぬるくなったコーヒを飲みながら続けた。

「ブルージュ家は転生派に改宗し、ミルドール領の一部を奪って『ブルージュ公国』を名乗った。もちろんシュワイデル帝国は激怒したが、アガン王国など転生派諸国が介入したせいでブルージュ家討伐は失敗。今に至る訳だ」

帝国や周辺国の国教……特に名前がついてないが、フィニス語で『神の教え』を意味する『フィルニア』と呼ばれているのでフィルニア教とでもしておこう。

『転生派』は、そのフィルニア教の一派だ。布教の過程で北方の転生信仰を取り込んだらしく、死者の生まれ変わりを公認している。

フィルニア教発祥の地フィニスやシュワイデル帝国など南方の諸国は転生を認めておらず、死者には等しく永遠の安息が訪れるとされる。こちらは『安息派』とも呼ばれ、転生派を異端扱いしている。そんな事情があるので、俺が転生者だと名乗ったらたぶん異端審問官がやってくる。

ロズは声を潜めて続ける。

「ミルドール家はブルージユとリトレイユの両方を敵に回しているといっつていい。頼みの綱は山脈を隔てたジヒトベルグ家だが……」

あ、そこダメだよ。リトレイユ公の次のターゲットだ。

多くを語れないがいろいろ知ってしまった俺は、首を横に振った。そしてコーヒーを見つめる。

「期待しない方がいい。このコーヒーよりも暗い時代が来る」

黒く、熱く、苦く、そして皆の眠りを醒ますような、そんな時代が。

ロズはしばらく俺の顔をまじまじと見つめていたが、やがてわざとらしい笑顔を作った。

「相変わらず格好つけやがって。ならお前には砂糖と牛乳を嫌というほど入れてもらおうぞ」

こんな閑職の中尉に何ができるっていうんだ。

第35話「参謀カフェによつこそ」

【第35話】

国内の情勢は徐々に不穏さを増してきた。

「ミルドル公がとうとう第五師団にキレた」

公弟の婿であるロズ中尉がコーヒーを飲みながら溜息をつく。

「おつ、これは美味しいな。腕を上げたな、マスター」

「誰がマスターだ」

俺はコーヒーマイルをぐるぐる回しながら眉間にしわを寄せる。

「お前の淹れ方がメチャクチャなんだよ。ちゃんとムラなく焙煎しろ。抽出のときは泡を落とすな」

「どうせ苦いんだから何でもいいじゃないか」

そんな考えだから上達しないんだよ。

話を元に戻そう。

「で、ミルドル公はどうしたんだ？」

「第五師団があんまり偉そうにするもんだから、『ミルドル領は第三師団だけで結構』と啖呵を切っちゃってな。それを聞いたリトレイユ公が第五師団に撤収を命じた」

メチャクチャだ。ロズのコーヒーに匹敵する。

「……なんだ、何か言いたそうだな？」

ロズがマグカップを片手に俺を見ている。変なところで鋭いな。俺は適当にごまかした。

「それもリトレイユ公の計画のうちなのかなと思ってな」

末席のリトレイユ公に兵を借りたままでは、ミルドル公は門閥の長として面目が立たない。屈従を強いられて求心力を失うぐらいなら、手勢の第三師団で本領を守る賭けに出た。

そんなところだろう。

俺がそう説明すると、ロズは渋い顔をした。

「確かに第五師団が撤収すればミルドル家は困るが、それでリトレイユ公に何の得がある？」

「あの女は利害には敏感だ。必ず得をするように動いている」

前世にもああいうタイプの人間は結構いた。計算高く利己的で、善悪に頓着せず、理性の歯止めがきかない。

だが行動は読みやすい。判断基準は常に自身の利益にあるからだ。俺は考えを巡らせる。

「第五師団が撤収すれば、ブルージユ公国はまた動き出す。建国以来、転生派諸国の尖兵としてシュワイデル帝国の領土を奪い続けてきた国だ」

裏切り者に他の選択肢はない。

「再建中の第三師団にはブルージュ軍の侵攻を食い止める力はない。ゴドー要塞が破壊され、幹部将校も多数戦死している。優秀な若手砲兵中尉も引き抜かれた」

「ははは」

ロズが苦笑している。自分が褒められるのには弱いんだよ、こいつ。

「で、ブルージュの再侵攻でどうなる？」

「考えたくもない話だが、ミルドール領がごっそり削り取られるかもな」

「それでリトレイユ公が得をするか？」

「しないよな。」

だがひとつの可能性があった。

それを言うべきか迷ったが、俺は親友に打ち明ける。

「『リトレイユ家以外の五王家の没落』。それが彼女の望みだとすればどうする？」

「そりゃ……」

ロズは考え込み、それからコーヒーを一口飲んだ。

「まずいな」

「美味いんじゃないかったのか？」

俺は冗談を言いつつ、だいぶ冷めてきたコーヒーを飲んだ。

「だが確かにまずい。帝国は五王家が力を合わせることで、ようやく周辺国に対抗できている。内紛なんかする余裕はないはずだ」

リトレイク公の「次は二番目」という言葉。

あれが「序列第二位のジヒトベルグ家を叩く」という意味なら、俺の疑念がまた一步、確信へと近づく。

もつとも彼女の言葉を額面通りに受け取るのは危険だし、俺が勘違いをしている可能性もある。あまり深読みしすぎるのは良くない。俺は作家ではなく軍人だ。

俺は首を横に振って迷妄を振り払う。

「確実に言えるのはリトレイク公は打算でしか兵を動かさない、ということぐらいだな」

「それならまあいいだろう。理詰めで兵を動かしているのなら軍人も同じだ」

「判断の基準となる理論が政治家と軍人では違うから、あまり樂觀もできないぞ」

俺はコーヒーを飲み干すと、マグカップをロズに押しつけた。

「さあ、とつとと帰れ。俺の部屋は喫茶店じゃないぞ。あと食器は洗っておけ」

「追い出さないでくれ。この旅団司令部、既婚男性がのんびりできる部屋はここしかないんだ」

知るか。

「俺はこれでも多忙な参謀職なんだ。独りで全部やってるんだぞ」

旅団の再編計画だけでも膨大な量の仕事がある。兵の心身のケア、新兵の徴募、部隊編成、装備の調達……。本来ならそれぞれに担当者がつく仕事だ。

だがロズのヤツは笑っている。

「お前なら余裕だろう？ それに机の上の書類、あらかた終わっているように見えるぞ」

「文字通りの机上の計画に過ぎん。検証した上で段取りをまとめる作業がまだだ」

参謀というのはアイデアを出すのが仕事ではなく、アイデアを形にするのが仕事だ。元々のアイデアは上層部や上官が出す。

そしてその上官がひょっこり顔を出した。

「楽しそうだな。混ぜてもらえるか？」

「これは閣下」

俺はロズの襟首を放り出すと、直立不動で敬礼した。

なんで俺の部屋にまで来てるんだよ。

俺は謹厳実直な参謀として、上官に苦言を呈する。

「いけません閣下、このような場所に。風紀の乱れです」

「ハンナを連れ込んだと聞いているが」

ロズか。ロズなのか。

俺がロズをじろりと見ると、椅子をゴトゴトやっているロズは肩

をすくめてみせた。

アルツァー大佐はクスクス笑っている。

「ハンナ本人から聞いたのだ。かぐわしくも熱いひとときであったな」

「コーヒーの話ですよね？」

俺が不安になって尋ねると、大佐は薄く笑いながらロズの用意した椅子に腰掛ける。

「冗談はさておき、部下の将校が二人そろって私室で密会というのは旅団長として無視できない問題だ。私の悪口で盛り上がっているのなら混ざりたい」

「どうして混ざるんですか。あと密会って表現やめてもらえますか？」

俺はもう完全に諦めて、大佐の分のコーヒーを淹れることにする。俺の私室には小さいながらも暖炉があり、お湯は沸かし放題だ。

ついでに聞いておくか。

「小官をからかうためにわざわざお越しになった訳ではないでしょう」

「無論だ。ここなら防諜上も良いかと思っただけ。軍属も含めて数百人もいれば、あの女に買収された者が旅団司令部に一人二人いてもおかしくはない」

確かにスパイが紛れ込んでいる可能性は十分にある。リトレイユ公は敵国に大砲を提供するような人物だ。

アルツァー大佐は窓の外をチラリと見てから、こう切り出す。

「実家からの情報だ。リトレイユ公が帝室に接近している。それと帝室では現在、元帥号の授与式を準備中とのことだ」

五王家が五つの師団を実質的に支配している国なので、五王家のトップは軍人ではないが軍事力を支配している。この国の中央集権は建前だ。

だがあまりにも建前と実態が乖離すると建前が倒れてしまうので、いろいろな方法でつじつまを合わせる。元帥号もそのひとつだ。

大佐は椅子に深く腰掛け、つま先を少しぶらぶらさせながら溜息をつく。

「軍歴がなく士官学校も出ていないリトレイユ公は將軍どころか少尉にもなれないが、元帥なら通常の人事を飛び越してなれる。そして元帥は帝国軍人の最高位だ」

ロズ中尉が怪訝そうに問う。

「しかしあれは名誉称号ではありませんか？」

「そうだ。あくまでも儀礼的なものだが、勅命があれば複数の師団を束ねて動かす権限が法律で認められている」

リトレイユ公は第五師団なら動かせるが、他の師団はそれぞれの君主に忠誠を誓っている。元帥号があったところで命令なんか聞かないだろう。たとえ皇帝の命令であってもだ。

大佐は頬杖をつきながら皮肉っぽく笑う。

「無論、他家の師団がリトレイユ公に従うはずはない。下手をすれば反乱が起きかねない。だがあの女は今、こう思っている。『反乱が起きればそれを利用しよう。どちらでも構いません』とな」

「閣下、リトレイユ公の物真似めちゃくちゃ上手いですね」

「嫌になるほど見てきたからな……」

お気の毒に。

俺は参謀として自分の見解を述べる。コーヒーをお出ししながらだ。

「その可能性もありますが、反乱を起こさせるだけなら他にも方法はいくらかもあります。リトレイユ公は自らが火種になるような策謀は避けるでしょう。まだ切り札を隠し持っていると思われませう」

「なるほど、確かにそれはそうだ。貴官は軍事だけでなく政治にも長けているな。いつそ政界にも顔を出してみるか？」

「平民将校が政治に首を突っ込んだら破滅しますよ。小官は遠慮しておきます」

帝国の政界は複雑怪奇だし物騒だ。俺はおとなしく戦争でもしている方が性に合っている。

「リトレイユ公は混乱を利用して自らを利するのが非常に巧みです。そして自ら混乱を生み出すことにも長けています。天才的といつてもいい」

軍服コスプレの糸目美人を思い出しつつ、俺は冷たく言い放つ。

「ですがそういった人物は通常、『社会の敵』と呼ばれます」

「はははは！ なかなか言うな、貴官は！」

楽しそうに笑うアルツアー大佐。リトレイユ公に気に入られてだいぶ迷惑しているそうだが、かなりお疲れのようだ。

あとロズのヤツが俺を見て呆れた顔をしている。なんでだ。

大佐は御機嫌だ。

「ある意味、リトレイユ公には感謝せねばな。貴官を送り込んでくれたのは彼女だから……ら？」

コーヒーを一口飲んだ大佐の動きが止まる。

「苦いな」

「コーヒーですから」

「砂糖も牛乳も入ってないぞ？」

不満そうに俺を見る大佐。子供か。

するとロズがさっきの表情のまま説明した。

「そいつ、何も入れない真っ黒なコーヒーが好きらしいんですよ」

大佐が珍獣を見るような目でこっちを見る。

「貴官、味覚は大丈夫か？ それとも……こっつ、何かの鍛錬か？」

ブラックコーヒー好きなだけで何でもそこまで言われなきゃいけないんだ。

上官といえども個人の嗜好には口出しさせないぞ。

「小官はコーヒーだけを愛しております。砂糖や牛乳はいりません」
「だからってこれは苦すぎるだろう……」

出されたものは全部平らげる主義なのか、文句を言いながらちびちびコーヒーを飲む大佐。つらそうな顔をしている。

とうとうロズが砂糖入れを出してきた。

「ユイナーよく聞け。コーヒーは砂糖と牛乳を入れて完成する飲み物だ。みんなそうやって飲んでいる」

「砂糖と牛乳が欲しければ後から入れればいいだろう。入れた後は元に戻せない」

熱力学に基づく科学的な考えだ。

頭上で言い争う俺たちをよそに大佐はブラックコーヒーをちびちび舐めていたが、とうとう最後に白旗を揚げた。

「私には無理だ。せめて砂糖をくれ」

「はい閣下」

大貴族出身のアルツァー大佐なら、ブラックコーヒーの方が好きかなと思っただけだな……。

第36話「元帥杖の囃」

【第36話】

* * *

「では甘いものを買ってあげればいいんですね？　ですが、焼き菓子ならそこに……」

「昨日、食堂勤務の御婦人たちが焼き菓子を焼いていたはずだ。あれを少し買ってきてくれ。口の中が苦くてたまらん」
「わかりました」

クロムベルツ参謀中尉が頭を掻きながら退出した後、アルツァー大佐はスツと真顔になる。さっきまで苦い苦いと子供のように言っていたのが嘘のようだ。

「シュタイアー中尉」
「はっ」

大佐の真面目な表情と声に、ロズ・シュタイアー砲兵中尉は背筋を伸ばす。ふざけているように見えるが彼も生粋の軍人、今が「そういうとき」だというのはわかっていた。

大佐はカップの縁を指でなぞりながら問いかけてくる。

「クロムベルツ中尉が初めてコーヒーを飲んだときの様子を聞かせてくれ」

「え？ はい」

なんでそんなことを聞くのか疑問だったが、ロズは士官らしくすらすらと答える。

「初めてなのに最初から淹れ方も飲み方もよく知っているようでした。もつとも、何も入れずに飲み始めたので笑ってしまいました」

軽く笑いを誘おうとしたロズだったが、アルツァー大佐は笑わなかった。

「なるほどな」

それから大佐は少し優しい表情をして、こう質問してくる。

「シユタイアー中尉はコーヒーがどこで栽培されているか知っているか？」

「いえ。ミルドール家が他家から仕入れているぐらいしか」

「遠い南方から航路で運ばれてくるのだ。それもずいぶん遠回りをしてな」

大佐はそう言い、目を細める。

「輸送費が莫大なものになるため、コーヒーを口にできるのは富裕層だけだ。そして帝国の富裕層は砂糖でも牛乳でも好きなだけ入れられる。だから本邦では甘い飲み物として定着した」

「小官もそう聞いております」

「だろう？ 何も入れずに飲む者はまずいない。だがクロムベルツ

中尉は当たり前のような顔をして、何も入れずにコーヒーを飲んだ

「それが何か？」

「コーヒー豆は帝国領から数千キラムも南に下った灼熱の土地でのみ栽培できるそうさ。その土地では庶民もコーヒーを飲むが、砂糖も牛乳も満足には手に入らない。だから何も入れずに飲む」

その言葉にロズはハツとした。

「砂糖も牛乳も入れないのは『本場の飲み方』のひとつなのですね」「そうさ。おかしいとは思わないか、シユタイアー中尉？」

アルツアー大佐は不思議がるような口調だったが、表情はキラキラと輝いていた。とても楽しそうさ。

「クロムベルツ中尉はいつたい『どこ』で、その飲み方を知ったのだ？ 彼は貧しい平民の出で、コーヒーを飲む機会はない。彼の生まれ故郷は港から遠く離れている」

「本で読んだのでは？ あいつはとんでもなく博識です」

「帝国内にあるコーヒーの本は、いずれもシユワイデル人向けに書かれたものだ。そこには必ず砂糖と牛乳をたっぷり入れて飲むよう記してある」

ロズは返答に窮し、新しい上官を見つめる。

「では閣下はどのようにお考えなのですか？」

「わからないのだ。彼の経歴と能力はつじつまが合わない。だが彼

の経歴に嘘は一切ない。能力は貴官も知る通りだ」

「凄いでしよう、あいつは」

「ああ、認める」

大佐はフツと笑い、それから頬杖をついた。

「そして彼は何も教えてくれない。私にもハンナにも。おそらく貴官にもな」

「そうですね。まあ聞く気もありませんが」

ロズは肩をすくめてみせる。

「あいつはいつでも平民将校の味方で、小官たちの期待を裏切ったことは一度もありません。勇敢で誠実で有能です。たぶんこれからもそうでしょう」

「私もそう思う」

「ならば、それで良いのではありませんか？」

「そう思いたいのだがな」

腕組みをして眉間にしわを作るアルツァー大佐。

ロズは上官の表情と仕草を観察し、彼女の悩みが軍人としてのものなのか、それとも女性としてのものなのかを慎重に見極める。

そしてこう答えた。

「あいつが言いたくなければ、そのうち勝手に話してくれるでしょう」

「そうだな。口を開かせるよりも心を開かせるとするか」

「その方が閣下の悩みも解決しそうですしね」

軽い気持ちでそう言うと、アルツアー大佐がじろりと睨んでくる。

「なるほど、貴官が『おしゃべりロズ』と呼ばれている訳だ」

「おっと、失礼しました」

敬礼してごまかす。

ちょうどそのとき、クロムベルツ参謀中尉が自室に戻ってきた。

バスケットいっぱいにクッキーを抱えている。

だがその表情は険しかった。

「閣下」

「聞こう」

アルツアー大佐もロズ中尉も真剣な表情になる。

クロムベルツは静かに言った。

「第二師団より通達がありました。勅命により、ジヒトベルグ公が

元帥号を授与されたそうです」

「ジヒトベルグ公が!？」

* * *

ジヒトベルグ公とその門閥は、西方のキオニス連邦の国境地帯を守っている。そしてジヒトベルグ家が擁する第二師団はキオニスの一氏族と紛争中だ。

「キオニスでは有力氏族が次々に参戦しており、推定兵力は一万を

「超えたとみられています」

場所を旅団長室に移し、俺は参謀として資料を読み上げる。将校三人に加え、ハンナたち下士長三人も同席していた。

ネットもコピー機もない時代の軍議なので、全部俺が読み上げなくてはいけない。

「第二師団の兵力はおよそ三万。未だ兵力では優勢ではありませんが、敵の大半はキオニス騎兵です。第二師団の参謀部が苦戦は必至との結論に至り、皇帝陛下はジヒトベルグ公を元帥として第一・第三師団の一部を指揮下に加えることを命じられました」

アルツァー大佐は俺を見る。

「参謀、この裁定に関して軍事的な評価を」

「戦列歩兵や砲兵にとって熟練の騎兵は脅威です。兵力を結集するのは極めて合理的な判断かと」

本当、我が帝国にしては珍しくまともな判断をしたもんだ。

もちろん額面通りに受け取ってはいけない。アルツァー大佐が微笑んでいる。

「ジヒトベルグ公の元帥就任にはリトレイユ公の強い進言があったと聞いている。あの女が帝国や他家のためにそんなことをするとは思えん」

えーと……言っちゃっていいのかな。まあハンナは大丈夫だし、

他の下士長二人もアルツァー大佐の元使用人だから大丈夫か。

「リトレイク公にとっては他家は引きずり落とすべき存在です。であれば、ジヒトベルグ公は政敵の畏にかかったと見るべきでしょう」

「やはりそう思うか。私も同意見だ」

アルツァー大佐はそう言い、前髪を払う。

「複数の師団を統帥できる元帥号、てつきりリトレイク公自身が渴望しているのかと思ったが、どうやら違ったようだ。政敵を潰す畏にするとは」

そして大佐は嬉しそうに笑う。

「貴官の読み通り、リトレイク公はまだ切り札を隠し持っていた訳だ。まったく貴官は頼れる参謀だな」

何かありそうだとは思ってたけど、阻止できなかったんだからあんまり意味はないよ。とりあえず無言で微笑んでおく。

アルツァー大佐は立ち上がると、壁に掛かった地図を示す。

「第三師団はブルージュ公国との一戦で大損害を受け、兵力の再編中だ。本領を守る兵力にすら事欠いている。だが勅命では逆らえんおまけにジヒトベルグ家は隣邦、共に西方を守ってきた兄弟分だ」

大佐の背だと地図の上の方に届かないので、俺が代わりに指示棒で指し示す。

「そこでミルドール公は第三師団の穴を埋めるため、リトレイク公に再度の援軍を要請しました」

「義父上の話では、ミルドール公があんなに怒っていたのは六歳の

とき以来だそうだ」

ミルドル公弟の婿であるロス中尉が溜息をついている。大変だなお前も。

そう。ミルドル公は一度、リトレイユ公の第五師団を追い返している。第五師団が勝手な真似ばかりしたのが原因らしいが、追い返した相手に頭を下げれば面目丸潰れだろう。

それでも領主は本領を守らねばならない。どんなに屈辱にまみれてもだ。

アルツァー大佐は俺から指示棒をひつたくると、つま先立ちになつて地図を示した。

「帝国北部を守るリトレイユ公には、本領から遠く離れた南西部への出兵を拒む合理的な理由がある。だが隣のミルドル領にならば派遣できるという訳だ」

指示棒届いてないよ。そこ帝室領だよ。

みかねたハンナがよっこいしょとちっこい大佐を持ち上げ、リトレイユ領に届くようにしてあげる。保育士さんに向いてそうだな。

「リトレイユ家の第五師団は現在、北部の守りを一手に引き受けている。対ブルージュ戦を受け持っていた第三師団がこの状況では、第五師団はアガン・ブルージュ両国を引き受けねばならない」

話はとても真面目だし非常に論理的なんだが、ハンナに抱っこさ

れてる大佐が面白すぎて話が頭に入っていない。まあ俺は理解してるから目の前の光景を面白がっておこう。

「おそらく第五師団は今後、大幅な兵力増強が認められるだろう。リトレイユ公の発言力も増すことになる。これが彼女の狙いということでもいいか、参謀？」

いきなり話を振られた。えっ、なに!?

俺は慌てて思考を切り替え、できる参謀スタイルで答える。

「ジヒトベルグ元帥率いる第一から第三までの師団は、対キオニス戦争に敗北すると思われます」

第37話「生きて帰るために」

【第37話】

俺がジヒトベルグ公の敗北を明言したのが、一同には衝撃的だったようだ。

「そう、敗北……えっ!？」

「おいユイナー!？」

アルツァー大佐とロズが驚くが、俺はさっき簡単に計算した結果を示す。

「帝国側の総兵力は最小で四万、最大で八万に達する見込みですが、各師団は共同作戦の経験がありません。指揮系統の複雑化は予測不可能な問題を招きます」

前世の記憶がばやけてるんだけど、なんか職場でそういうのが問題になってた気がする。あれの再来は絶対に嫌だ。

「また、これだけの大兵力を動かすには高度な補給計画が必要となります」

国境の城塞都市ツィマーから先は補給ポイントがなく、先に進めば進むほど補給線の維持に兵力を割かねばならない。遊牧民の機動性や攻撃力を考えると、補給線の維持はほぼ不可能だ。

だが荒野には食料などを収奪……いや徴発できる農村がほとんどない。運び込んだ物資と人員だけでやりくりしなければならぬの

だ。

「もし作戦司令部がまとまな補給計画を立てられなかった場合、我々は弾薬や水、馬の飼葉に至るまで全て持参せねばならないのです。しかも往復分を」

言うのは簡単だが、これはとんでもない手間だ。

兵士一人の一日分の水だけでも四リットルほど見ておかないといけない。飲用だけでなく調理や衛生管理にも必要だし、事故や戦闘で喪失する分があるからだ。

百人の兵士が片道五日の距離を往復するだけで四千リットルの水が必要になる。重量なんと四トン。大量の水樽が必要なので重量はさらに増す。

水源の乏しい乾燥地帯を進軍するのがいかに困難か、これだけでもわかるというものだ。

「敵もそんなことはわかりきっているでしょうから、乾燥地帯の奥に引つ張り込んでから戦闘を仕掛けてくるでしょう。糧秣や弾薬に火を放つだけでも我々を殺すことができますので、我が軍は一瞬たりとも警戒を怠ることができません」

それを可能にするのが騎兵の機動力と国境地帯の平坦な地形だ。

「敵は機動力に優れ、荒野を生活の場とするキオニス騎兵です。どこからでも襲撃でき、どこまでも撤退できます。土地を持たない彼らを降伏させることはできません。水をつかむようなものです」

「それゆえ、貴官はジヒトベルグ公が敗北すると見ているのだな？」
アルツアー大佐の視線は鋭い。この答えは重いぞ。
だが俺の緊張に反して、俺の口はすらすらと答えていた。
「ほぼ確実かと」

ミルドル家の権威が失墜した後、リトレイユ公は「次は二番目です。たくさん殺しましょうね」と言った。

序列第二位のジヒトベルグ家を同様に失脚させるつもりだったのだ。おそらく最初からこの方法で。

大佐はじつと考え込み、それからうなずく。

「なるほど。その場合、ジヒトベルグ公は政治生命を絶たれるだろう。リトレイユ公としては好都合というわけだ」

大佐は俺に向き直ると、重々しく命じた。

「ではそれを前提とした作戦計画を立案せよ。我が旅団が無事にここに戻ってこられるよう、私の参謀として最善を尽くせ」

「はっ」

また面倒くさい任務を受領したぞ……。

ジヒトベルグ公は『五王家』の序列第二位、つまり帝室を除けば帝国貴族の筆頭とされる。

だが内陸の山間部の領主なので海上交易の恩恵に与れず、リトレイユ家やメディレン家よりも貧乏だ。人口も少ない。

とはいえ格式だけは最高峰なので、ジヒトベルグ公の元帥就任は貴族社会にすんなり受け入れられている。

帝室近衛師団である第一師団からも加勢があるし、第三師団のミルドール家はジヒトベルグ家とも仲が良い。序列一位から三位までのオールスターズだ。

だから帝国軍の内部では「これでキオニスも懲りるだろう」という見方が大勢を占めていた。敗戦濃厚と判定した俺は異端だ。

もっともその俺も敗戦の可能性については旅団内部でしか発言していないので、同じことを考えている将校は案外いるかもしれない。思っただけでもない雰囲気だからな。

「なんで私たちも出陣しなくちゃいけないんですか？」

ハンナ下士長が物資の点検リスト片手に不満そうなので、俺も点検リストを調べながら答える。

「ゼツフェル砦の防衛戦で存在感を示したからな。それに旅団司令部はミルドール領とジヒトベルグ領の中間地帯にある。両家の師団が出征する以上、さすがに知らん顔はできないだろう」

リトレイユ公が今回、俺たちに何をさせるつもりなのかはよくわからない。

強いて言えば、次の政略に備えて第六特務旅団に実績を積みさせるつもりだろうか。いや、そんなことするかな？ 彼女に人や組織を育てるといふ発想はなさそうだ。

アルツァー大佐から聞いた話では、リトレイユ公は先日のブルー
ジュ軍との一戦で人事を刷新したそうだ。

子飼いの若手将校たちを功績抜群として昇進させる一方、言うこ
とを聞かないベテラン将校たちを士官学校や戦技研究などの後方に
回したらしい。

人事権をうまく使い、第五師団を意のままに操れるように改造し
た訳だ。

となると、俺たちは用済み……かな？

どうも嫌な予感がする。やはり大佐の指示通り、旅団の生還を目
標とした計画を立案して正解だったな。

俺はハンナに伝える。

「輜重隊の馬車に積み込む食料と水樽、それに飼い葉は複数人で点
検してくれ。俺も確認する」

「はあい。弾薬と砲弾は大丈夫ですか？」

「そっちは少なめでいい。いざとなれば上に要請すれば回してくれ
る」

弾薬の供給は割とすんなり来る。全然来ないのが衣類と食料だ。
自前で確保しておくしかない。

行軍中の兵士は弾薬がなくなっても死にはしないが、食料や水や
毛布がなくなると死ぬ。つまり生活必需品の方が優先順位が高い。

「どうせ他の師団は戦う気まんまん弾薬を馬鹿みたいに持ち込む
はずだ。だが騎兵相手に何時間も撃ち合うことは少ない。一撃離脱

が騎兵の基本戦術だからな」

ハンナが感心したようにうなずいた。

「参謀殿は何もかもお見通しして感じですね」

「いやまあ、士官学校でいろいろ習ったから……」

本当は前世の歴史で学んだ。ナポレオンの遠征とか。

「水樽と補修用の資材は最優先だ。水は道中で適宜入れ替えて、常に新鮮で清潔なものを持っていく。これは俺が担当する」

俺の言葉にハンナが目を丸くした。

「参謀殿が水樽の管理をなさるんですか!？」

「荒野を旅するときの命綱だぞ。将校が管理しないで誰が管理するんだ」

安全な水場がなければ干からびて死ぬからな。

「そうだ、日持ちのする野菜も買おう。野菜は九割ぐらいは水だから、生食できる野菜なら水筒になる。食堂のおばちゃんにお薦めを聞いてくる」

「えっと……はい」

ハンナは混乱した顔をしていた。

こうして準備を整えた俺たちは、他の師団と合流するためにジヒトベルグ領に入った。

街道筋では村人たちが手を振ってくれたりして歓迎ムードだ。

「うわすげー！ 女の兵隊さんだ！」

「みんなちびっこいな、本当に戦えるのかよ？」

あんまり歓迎されてない。

だがこんな会話も聞こえる。

「馬鹿、知らねえのか。ブルージュ軍が攻めてきたときに女ばかりの旅団が砦を守ってたって話だぞ」

「ほんとかよ」

本当です。

「おお、本当だとも。砦がほとんどぶっ壊れるぐらい激しい戦いだつたが、ブルージュ軍をほとんどやっつけたんだとさ」

砦が壊れたのは俺のせいだが、訂正する必要もないから別にいいか。

なるほど、うちの旅団には思ったよりも話題性があるんだな。リトレイク公は俺たちをプロパガンダ部隊として使う気なんだろうか。そんなことを考えつつ、西へ西へと行軍を続ける。

俺は参謀だが、しょせん旅団の参謀だから今回の戦争の全容は知らない。言われた場所に行って、言われた通りに戦うだけだ。

そして俺たちは国境の城塞都市ツイマーに到着する。ここから先は不毛の荒野、キオニス連邦との緩衝地帯だ。

堅固な城壁に囲まれた丘陵の街には、すでに大兵力が集結してい

た。

「第二師団麾下の大隊はあらかた集まってるようですね」

「第二師団はキオニスとの戦いだけ意識していればいいからな。隣国のエオベニアは同じ安息派、一応は友邦だ」

大佐はそう言い、城壁に翻る大隊旗を眺める。

「第一師団からは近衛騎兵大隊がいくつか来ているな。あれは使えそうか？」

「騎兵戦闘のことはよくわかりません」

戦わせてみないと本当にわからない。

「第三師団は歩兵ばかりですね」

砲兵隊が来ていればダブル大尉とまた会えたかもしれないが、考えてみれば負け戦がほぼ確実なので来ていない方がいいだろう。砲兵は撤退に時間がかかるから危ない。

大佐は気楽そうにつぶやく。

「我々は今回、ジヒトベルグ元帥の指揮下に入る。指揮系統上は元帥直下、つまり他の師団と同列だ」

「破格の待遇ですな」

百人そこらのちっぽけな戦闘集団が、えらく厚遇されたものだ。もちろん理由がある。

「どこの師団も我々を扱いかねたのでしよう。戦力としては微妙ですが、旅団長がメディレン家当主の叔母とあっては軽く扱えませんが、はつきり言って厄介の種です」

「ふふ、言ってくれるな。だが好都合だ」

アルツァー大佐はぎらぎらした笑みを浮かべる。

「つまり我々が戦場で何かやらかしても、上官として責を問われるのはジヒトベルグ公一人ということだろう？」

「ええまあ……」

ジヒトベルグ公はこの戦争に負けたら失脚は確実だ。政治的な圧力を受ける可能性は低い。

「ジヒトベルグ家の没落など私も望んでいないが、食い止める力を持つていない。できないことをやるうとすれば、待っているのは身の破滅だ」

大佐はそう言うと、肩をすくめてみせた。

「一応、ジヒトベルグ公には旅団長の立場で進言する。どう進言すべきか教えてくれ」

「はい、閣下」

俺は大佐を通じて「敵主力を城塞都市ツィマーで迎え撃ち、持久戦で疲弊させた後に有利な停戦条約を結ぶ」という案を具申した。もちろん全く相手にされなかったのは言うまでもない。

それどころか「女が戦に口出しをするな」と第六特務旅団まるごと馬鹿にされたので、俺はジヒトベルグ公を見捨てることにした。よくも俺の戦友を馬鹿にしたな。せいぜい派手にやられてくれ。

第38話「不毛の進軍」(図解あり)

【第38話】

こうして俺たちは最後の補給地である城塞都市ツィマーを後にして、不毛の荒野を行軍することになった。

この時代、国境線は曖昧で帰属不明の土地も多い。人が住んでいない土地は支配できないからだ。

キオニス連邦との緩衝地帯になっている荒野には、街も畑もほとんど存在しない。

ところどころに草が生えているので遊牧民が利用するが、家畜が草を食べ尽くす前に移動してしまう。

だから本当に何にもない。整備された水場もない。

「どこまで行くんですか、参謀殿？」

ザツザツと規則正しく行軍しながら、うちの旅団の女の子たちがげんなりしている。

俺もげんなりしていたので、馬上で仕方なく苦笑いした。

「キオニス軍と接敵するまでだ」

キオニス連邦の遊牧氏族たちは定住していない。互いに縄張りを持っており、たまにそれで喧嘩をする。

しかし敵の侵入に対しては共闘するよう盟約を交わしており、それが事実上の国家となっている。

こんなにやりづらい相手はなかなかいない。どこを占領すりゃいいんだ。

「一応、キオニス交易都市ジャラクードまで行けば休めるが、その前にはぼ確実に戦いになるだろう。戦いの前に体調を崩すとまずいから、いつもと違う感じがしたらすぐ小隊長に報告しろ」

「はい」

交易都市ジャラクードは、帝国の城塞都市ツィマーから百キロほどの距離にある。

遊牧民たちが市場を開くだけの田舎町らしいが、他に占領できそうなものがない。補給の問題があるので、とりあえずここを目指すしかない。

俺だつたら前線基地を作つて補給線を延伸していく方法を採用するが、これは費用と時間がかかりすぎるのが欠点だ。

「参謀殿ならどうやって戦いますか？」

ハンナに代わつて第一小隊長になったローゼル下士長がフツツと問うので、俺は参謀の練習問題として少し考える。

「連中にとって土地から得られる資源は牧草や水だ。毒性のある草の種を蒔いたり、水源を汚染したりするのは効きそうだな。羊が死ねば彼らは飢え、馬が死ねば戦えなくなる」

なぜか一同が沈黙してしまった。

「参謀殿、ちよつと怖い……」

「敵の家畜かわいそう」

なんでだよ。敵が一番嫌がることをするのが戦争だろ。こういうのを考えるのが俺の仕事だぞ。

俺は拗ねて腕組みする。

「そういうことをやらずに済ませたかったら、遊牧民と争わないように共存するしかないんだ。価値観も生活様式も異なる彼らと手を取り合い、利害をうまく調整する。だがそれは軍人の仕事じゃない」

シュワイデル帝国は国土回復のために戦い続けているし、異教徒と共存するつもりもない。いい加減諦めて方針転換すればいいのにと思うが、一介の参謀中尉にはどうすることもできない。

「とにかく今は無事に帰ることだけを考えている。俺もそのことだけを考えて作戦を立てている」

「はあい」

ザツザツと戦列女子歩兵が征く。俺も共に進みながら、荒野に思いを巡らせていた。

戦争なんかなくなりゃいいのにな。

……いや。

戦争がなくなると俺が困る。

この世界で俺が生きていくには職業軍人を続けるしかない。たとえ死神と呼ばれようが、俺は軍人をやめられない。

でもできれば戦争はない方が助かる。

荒野の進軍は予想通り過酷なものとなった。

「第三師団の歩兵大隊が、すでに脱走だらけで定員割れを起こしているらしい」

「第一師団で凍死者が出ています。毛布の余剰がある部隊は供出をお願いします」

「第二師団の騎馬砲兵中隊で原因不明の腹痛が発生中。行軍を停止すること」

軍隊はどこでも進軍できそうに見えるが、実際はそのへんの隊商よりもサバイバル能力が低い。銃だの大砲だのを持ち運んでいるせいだ。

衣類も戦闘用にできているから、荒野の気候がづらい。日中はカラカラに乾いて暑いし、夜間は底冷えがする。

だから遠征をすれば、それだけで兵が死んでいく。死なないまでも傷病兵はどんどん増えていくので、行軍速度はそのぶん落ちる。そもそも行軍は一番遅い兵の速度でしか進めない。人数が増えらると必ず遅くなる。

俺と大佐の会話も、兵士の体調管理の話題ばかりだ。

「うちの旅団からは死者は出ていませんが、やはり普段よりも体調が悪いです。風邪や生理痛で動けない兵がそれなりに」

「彼女たちは輜重隊の馬車か？」

「ええ。ただ揺れる馬車では治るものも治りません。隙間風も入り放題です」

幸い、うちの旅団は毛布や薬もすっかり持ってきている。輜重隊の馬車にも最初から余裕を持たせていた。そのぶん弾薬を削っているので、長丁場になるとちよつと困る。

「本隊に随伴する上で支障はあるか？」

「いえ、我が旅団は行軍速度を最優先して訓練と装備調達を行っています。問題はありません」

なんせブーツすら他師団とはモノが違う。間違いなく帝国軍で一番いいブーツを履いている。

「本隊から取り残されたら危険です。ここはすでにキオニス人たちの領域ですので、はぐれば間違いなく……」

俺は行軍停止して病人を休ませている砲兵中隊を横目で見る。

「キオニス騎兵はどこかから我々を見ている。そう思った方がいいでしょう」

キオニス連邦は抗争を繰り返す遊牧民たちの集まりだが、これまでに第二師団の侵攻をことごとく撃退している。

その最大の理由が、この何もないだっ広い荒野だ。進軍するだけで兵を消耗させ、士気と物資を奪っていく。

「我が軍は交易都市ジャラクードを占領するために進軍中ですが、キオニス人たちも馬鹿ではありません。我々に補給をさせれば勝算がなくなることは理解しています」

軍の規模も装備も帝国軍の方が上だ。
だから敵は必ず、交易都市に入る前に攻撃してくる。

もちろんジヒトベルグ公もそんなことはわかっているから、そこを迎撃するための作戦を参謀たちに立案させている。

ただ最終的に採用されたのはジヒトベルグ公自身が立てた作戦だ。でもあれ、本当にやるつもりか？

そのとき、本隊からの伝令が駆け込んできた。

「ジヒトベルグ元帥閣下より第六特務旅団に伝達！　一キラム前方にて戦闘陣形に移行せよとのことです！」

敵かな。

アルツァー大佐が問う。

「敵を発見したのか？」

「はっ！　哨戒中の騎兵が帰還しないため騎兵隊を差し向けたところ、交易都市ジャラクードの手前に騎兵およそ七千を確認しました！」

哨戒任務の騎兵が戻らなければ、そこに敵がいると推測できる。坑道のカナリアみたいで気の毒だが、おかげでこちらは敵を捕捉した。

俺はすぐさまアルツァー大佐に進言する。

「こちらの騎兵を始末した時点で、敵はこちらが気づくことを想定

して動いているはずです」

「道理だな。第六特務旅団は命令を受領した。ただちに戦闘態勢を整える」

「ははっ！」

伝令が去っていくのを見送って、アルツァー大佐はマントを翻した。

「我が旅団は砲兵戦力として最前線付近に配置される！ 総員早足！」

第六特務旅団は指定された地点へ急行し、馬車で引っ張ってきた野戦砲五門を展開した。

大砲の護衛は女子戦列歩兵六十人だ。本当は二個小隊百人いるんだが、旅団司令部の警備やら体調不良やらで人数が減っている。軍隊の常だ。

今回、第六特務旅団は命令通りに動くだけなので旅団参謀の俺はすることがない。暇だから望遠鏡で味方の陣形を確認する。

日本古来の兵法で言うところの「雁行陣」の一種だな。戦列歩兵の横隊が幾重にも重なりつつ、右前にズレて布陣している。

戦列歩兵に守られるようにして、その後方に砲兵大隊がやはり斜めに配置される。俺たちは最右翼。一番前でもあった。

軍馬を駆るアルツァー大佐が愉快そうに笑う。

「煙たがられたか、それとも信用されていないか」

「両方でしょう。ジヒトベルグ公の『必勝の秘策』を一笑に付した

のが、新米砲兵だらけの弱小旅団とあつては」

「笑つたのは貴官だろ」

「閣下も笑つてたじゃないですか」

旅団長と参謀で見苦しく責任を押しつけ合っている間にも、配下の戦列歩兵と砲兵は素早く展開していく。第六特務旅団は動きの速さがウリだ。

大佐は子供みtainな顔をして笑う。

「だってあれ、古典的な斜線陣だぞ？ 歩兵が槍で戦っていた頃から存在する陣形だ。それを……」

「笑つちや悪いですよ閣下、車輪を再発明しただけなんですから」

「いや、そうだった。笑い事ではないな」

アルツアー大佐はスツと真顔になる。

「確かに弓騎兵に対しては右向きの斜線陣は有効とされる。理由は忘れたが」

「一般的に弓騎兵は右側に射撃するのが苦手なので、敵に左側を向けて走るんです。こちらの左翼を掠めていきますので、左側に厚い弾幕を張れる右斜線陣を敷きます」

弓騎兵なんてキオニス連邦にしかないから、アガン王国と戦っていた元第五師団の俺には無縁の陣形だ。教本でしか見たことがない。

だがジヒトベルグ家はキオニス連邦と戦い続けてきたので、この陣形はよく知っているだろう。

正直、第二師団の将兵は恥ずかしさで主君を直視できなかったはずだ。

これがわしが考え出した必勝の秘策、『ジヒトベルグの火竜陣』だ。

< i 5 5 6 3 1 8 — 3 5 6 7 8 >

壁に張り出された布陣図を見て、その場にいる将校全員が微妙な顔をした。もつと正確に言えば、噴き出しかけた。

クロムベルツ、アウト。

アルツァーもアウト。

他数名がアウト。

いやあ、貴重な体験をしたな。

第二師団の上級将校からは物凄い顔で睨まれたし、下級将校たちは目線で「もうやだこんな師団……」と訴えていた。

第一師団の近衛大佐や第三師団の騎兵少佐も半笑いだっただけで怒らないでほしい。

俺は溜息をつく。

「百年前の兵法書にも載っている陣形を誇らしげに披露したということは、ジヒトベルグ公の軍才がどの程度か容易に想像できます。勝てませんよ」

「戦う前から勝てない勝てないと言っな。士気に響くだろっ」

「これは失礼しました」

そりゃそっだ。まあでも参謀としては士気に響くようなことも言っ。

「一応、陣形そのものは理に適っています。敵を斜線陣に沿って走らせ、終端で殲滅する考えは悪くありません」

斜線陣の終端となる左翼は歩兵も砲兵も分厚くなっており、騎兵の突撃にも対応できる。

回り込まれるのを阻止するために方陣もすっかり配置されていた。方陣はどの方向でも攻撃できる陣形だ。

「そうそう都合よく左側に来てくれるか？ 敵が右側から後背に回り込んできたらどうする？」

「あの図にはありませんでしたが、遊撃用の騎兵をぶつけて敵の動きを封じます。その間に歩兵を再配置し、右側面を前面とした新しい斜線陣を張ります」

ジヒトベルグ公もバカではないので、敵に回り込まれることも警戒はしている。もっとも、そんなに器用に陣形変更できたら苦労はしない。

この世界、歩兵の練度は大したことがない。短期間の訓練でもそこそこ戦えるのが戦列歩兵のメリットなので、訓練よりも徴募に重点が置かれているのだ。

「とはいえ、そうならないように砲撃で敵を左側に追い込むのが我々の仕事です」

「まるで猟犬だな」

「御不満ですか？」

するとアルツアー大佐はフツツと笑い、それから凄絶な微笑みをキラつかせた。

「ではあの老耄の耳にも聞こえるよう、せいぜい吠え立ててやろう」
「怖いです」

戦争の申し子だよアンタ。

第39話「ジャラクード会戦（前編）」（図解あり）

【第39話】

ジヒトベルグ公を元帥とするシュワイデル帝国軍、およそ五万。
……うちの三万が布陣する。残り二万は行軍についてこられず、
現在こちらに向かっている途中のはずだ。

対するはキオニス連邦の氏族連合軍、およそ七千。全て騎兵だ。

「まずいですよこれは」

俺はもう早く帰りたい一心で、アルツアー大佐に進言する。

「騎兵の機動力と突進力は尋常ではありませんが、キオニス騎兵は特に危険です。七千もいたらどう戦っても無事では済みません」

「私はキオニス騎兵のことはよく知らないが、それでも四倍以上の兵力だぞ？ しかも銃と大砲がある」

アルツアー大佐がそう言うので、俺は首を横に振った。

「騎兵相手では四倍でも心許ないのです。勝てたとしても大損害を受け、今後の作戦行動は全て変更を余儀なくされるでしょう」

遠征軍である我々は継戦性を重視せざるを得ない。損害を受けた分だけ軍は小さくなり、作戦行動力を失う。

「後続を待つてから五万で挑みかかれば良かったのですが、それが

できませんでした。相手は騎兵なので、こちらの位置を捕捉された時点で主導権は相手側に移ります」

「いつどこで襲いかかるかはキオニス軍が決められる。いつ戦いをやめるのかもキオニス軍の自由だ。騎兵の機動力に歩兵や砲兵はついていけない。」

「では貴官は後退して合流すべきだったと思うか？」

「それも難しいでしょう。後続と合流するために後退しても、途中で襲われます。行軍隊形では三万だろうが五万だろうが勝てませんし」

ジヒトベルグ公と彼の幕僚たちは敵戦力を侮りすぎた。

「各氏族の戦士はせいぜい数十人、多くても百人を超えることは希です。従って第二師団参謀部は最大千騎程度の襲撃を想定し、その襲撃を何回撃退できるかを計算しました」

馬は人間の約十倍の食料を必要とするので、七千騎の騎兵は七万人の歩兵と同じぐらい食料を消費する。軍馬というヤツはそれに見合う巨体を持ち、戦うための訓練を積んだ生物なのだ。

「軍馬は怖いですよ。閣下の愛馬だって戦闘になれば敵兵を踏み潰しますし」

「戦闘訓練もしてるからな。倒れた敵に飛び乗って全体重で潰す馬術もある」

「それを自分の手足のように操る連中が七千騎です」

「厄介だな」

だがジヒトベルグ公も馬鹿ではない。正確に言えば彼の幕僚たちは馬鹿ではない。

「こちら軍馬は用意しています。第一師団の近衛騎兵たちがいますし、第二師団にもキオニス産の名馬を集めた騎兵隊があります」

アルツアー大佐がちらりと後方を振り返る。

「どこにだ？」

「敵に見つからないよう、右翼後方に控え……」
俺は振り向く。

……いないな。後方の砲兵陣地のどこかにいるのかな？

俺は望遠鏡で探してみるが、見当たらない。

「いませんね」

おいおい、待て待て。いやいや。

軍隊に入って信じられないような光景は何度も見たけど、これはさすがに初めてだよ。

いるべきところに部隊がいないぞ。

しかもかなり重要な部隊が。

「敵が右に回り込んできたときにぶつける騎兵が二千ほどいるはずなんです」

「見当たらないな」

そのとき俺は、さっきの伝令の言葉を思い出す。

『哨戒中の騎兵が帰還しないため騎兵隊を差し向けたところ、交易都市ジャラクードの手前に騎兵およそ七千を確認しました!』

「もしかして騎兵二千まるごとジャラクードに派遣したまま、戻ってきてないのかもしれませんが」

「だが必要な兵力なのだろうか?」

「ええ、とても」

ジヒトベルグ公は実戦経験がない。彼の兵法は教本と演習図の中だけのものだ。机上より広い世界を知らない。

「まさかとは思いますが、『七千の敵騎兵相手に二千では意味がない』と判断して、ジャラクード攻略に差し向けた、なんてことは……」

アルツアー大佐が苦笑いする。

「さすがにそれはないだろう。市内にどれぐらい敵がいるのかもわからないのに、虎の子の騎兵を……」

しばしの沈黙。

俺の首筋を『死神の大鎌』がゾワリと撫でたのは、まさにその後だった。

「アルツアー閣下」

「なんだクロムベルツ中尉」

「ここから先は小官にも旅団の指揮権をお認めください」

大佐は静かに言う。

「それがよさそうだ。ただ今をもって貴官を旅団長代理とし、一時的に指揮権を認める」

「ありがとうございます」

『死神の大鎌』が反応したということは、今何とかしないと死ぬということだ。確証はないが俺はそう解釈している。

「馬車を右側面に配置して壁にしましょう。騎兵の突進を阻むには最適です」

「方陣にはしないのか？」

「方陣にすると死角がなくなる代わりに火力が落ちます。そもそも六十人ではまともな方陣が組めません」

一辺に十五人しか割けないから火力はお察しだ。踏み潰されて終わりだ。

「それと野戦砲も初弾発射後に向きを変えます」

「わかった、全部任せる」

俺はすぐに砲兵中隊に指示を出す。

砲兵中隊長代理を務めるハンナ下士長は鼻息が荒い。

「わかりました、訓練の成果をお見せします！」

「頼むぞ、旅団の生還がかかっている」

「はいっ！」

ハンナはきびきびと指示を下す。

「騎兵に対しては予測射撃が大事ですよ！ 砲手自身が望遠鏡で馬首を確認してください！ 相手の鼻先に砲撃を『置く』んです！」
ロズ中尉の指導が行き届いているな。あいつは今回留守番だけど。

砲弾と騎兵の速度から計算して着弾地点を決めるのが理想なのが、測距儀も計算機もない時代にそれを求めるのは酷だ。だから職人芸的な砲術が必要になる。

準備をしているうちに、地平線の向こうに何かが現れた。

望遠鏡で確認する。

「騎兵の集団のようです。軍旗を掲げていません」

「味方ではないな。ハンナ、準備しろ」

アルツァー大佐が望遠鏡を覗きながら告げ、ハンナは敬礼してから砲兵たちに命じる。

「一番砲から三番砲、砲撃用意！ 目標、敵前列中央から右三つ！

下二つ！」

「一番砲、準備よし！」

「二番砲、準備できました！」

「三番砲、準備完了！」

乾いた荒れ地の砂塵を巻き上げ、騎兵がこちらに向かってきている。望遠鏡で確認すると、弓を手にした軽装の弓騎兵たちだ。距離

があるのでまだ全力疾走してない。
撃つなら今だ。

アルツアー大佐が命じる。

「敵を我が軍の左翼に誘導しろ」

「はいっ！ 一番砲から順に砲撃開始！」

ハンナが命じると一番砲が火を噴く。着弾と同時に二番砲。そして三番砲。

砲撃はいずれも騎兵たちの手前に着弾した。当たっていない。移動する目標に大砲を当てるのは至難の業だ。

敵騎兵の動きは変わらない。まっすぐこちらに向かってきている。

ハンナが叫ぶ。

「照準を修正！ 敵前列中央から右三つ、下一つ！ 四番砲から五番砲、発射！」

四番砲の砲弾が騎兵の隊列に飛び込んだ。被害は出たはずだが砂煙でわからない。

まずいな、敵は明らかにこちらの右翼を狙っている。後方に回り込む気だ。

そりゃそうだよな、騎兵相手にこんな配置をしたら簡単に回り込まれる。

大佐がつぶやく。

「案の定、机上の空論というヤツか」

「騎兵の護衛なしで斜線陣を組むなら、砲兵はもつと後方に固めておくべきでしたね。この戦いは帝国の失敗事例として教本に載りますよ」

すると大佐が笑う。

「では帰って報告するために、何としても生き残らなくてはな。こんな愚行を二度も繰り返してはならない」

「仰る通りです」

徐々に右側に回り込んでくる敵騎兵の集団を眺めつつ、大佐は俺に問う。

「それで、我々はどう生き残るつもりだ？」

「例によってリトレイク公顔負けの汚い手を使います」

「味方に損害を押しつける訳か」

「はい」

既に俺の指示で麾下の野戦砲は次の行動を開始している。敵騎兵が迂回を始めたので、こちらからはもう射角が取れない。

一門は後方警戒用に移動させ、残り四門は荷駄用の馬につないで撤収準備中だ。

< i 5 6 0 4 4 9 — 3 5 6 7 8 >

「我々の砲兵陣地は馬車で右側面と後方に壁を作っています。騎兵突撃も射撃も通りません。敵も目標は後方の本陣でしょうし、こんな砲兵陣地の相手をする気はないでしょう」

馬車で防壁を作ったときから、俺の『死神の大鎌』は反応しなくなった。つまり俺に差し迫った命の危険はない。

「敵は優先度の高い目標、そして撃破可能な目標に攻撃を仕掛けます。我々はどちらでもありません」

「そううまくいくかな？」

大佐がフツと笑うので、俺は微笑み返した。

「もちろん、やってみなければわかりません。戦死の御準備はよろしいですか？」

「いつでもできています。貴族とはそういうものだ」

この人の心臓は何でできてるんだろうな……。

第40話「ジャラクード会戦（後編）」（ 図解追加）

【第40話】

第一歩兵小隊長のローゼル下士長が叫ぶ。

「来ます！」

そしてついに、キオニス騎兵の集団が我々の真横を突破した。馬蹄の轟きが乾いた地面を揺るがす。

「おっと」

ヒュンヒュンと矢が飛んできた。キオニス騎兵たちは弓を右手で握り、矢を放っている。反対側の手でも射撃ができるのか。敵も弱点への対策はしていたということだ。

ただやはり矢勢はだいぶ弱い気がする。恐れていたほどではない。

不連続きの戦場だが、唯一の幸運は俺たちが風上だったことだ。

矢の勢いはさらに落ちるし、敵は砂塵や砲煙をともに浴びる形になる。もつとも、そのせいで敵の姿がよく見えない。

大佐が叫ぶ。

「第一小隊、後方を警戒しろ！ 第二小隊、砲の撤収を手伝え！」

敵騎兵はすれ違いざまに、こちらの砲兵陣地に矢を浴びせてきた。だが幌馬車でがっちり囲い込んである砲兵陣地を見て、「こいつらの相手は面倒臭いな」と思ったらしい。そのまま騎兵が流れていく。

俺たちの陣地はそれで良かったが、後方の砲兵陣地は悲惨だった。敵騎兵は砲兵陣地の合間を縫うようにして駆け抜け、何かを投げつけていく。

なんだろうと思っていると、あちこちで爆発が起きた。

ハンナが怪力で野戦砲を引っ張りながら首を傾げる。

「あれ何でしょうか？」

「擲弾だ。旧時代の遺物だよ」

導火線のついた旧式の手投げ爆弾だ。シュワイデル軍では既にほとんど使われなくなっている。戦列歩兵の時代に、あんなものが届く距離まで近づけない。

だが騎兵が運用するなら話は別だ。

威力は決して高くないし信頼性も低いが、爆弾をばらまかれるのは砲兵にとっては悪夢だ。大砲用の弾薬は量が多いから誘爆すると悲惨なことになる。

おかげで砲兵陣地はどこも大混乱だ。転がっている擲弾の導火線を切ったり、火薬樽を退避させたりしている。砲撃どころではない。

一方、第六特務旅団の陣地は無傷だ。馬車で困っておいて正解だったな。このままずらかろう。

だが一部の騎兵が反転して襲いかかってくる。さすがにそうそう甘くないか。

すかさずハンナが叫んだ。

「撃て！」
後方警戒用に残っていた野戦砲が火を噴いた。放たれたのは大粒の散弾だ。

突進してきた騎兵たちが数騎吹き飛び、さらに馬車に潜んでいた狙撃兵たちが残りの騎兵を撃つ。

思わぬ反撃を受け、生き残りのキオニス騎兵たちは異国語で何か叫び、慌てて反転して去っていった。

それを聞いていたキオニス出身のサテユラ騎兵隊長がつぶやく。

「『目的を忘れるな』って叫んでましたね」
「なるほど」

「どこの氏族かはわかりませんが、汚い訛りです」
「そうか」

メチャクチャ怖い顔で笑わないでくれ。氏族を滅ぼされた恨みがあるのはわかるが、他氏族に対する憎悪と侮蔑が凄い。

既に戦闘は後方に移っている。あの調子だと本陣が襲撃されているな。

大佐がサーベルを納めながらつぶやく。

「この状態で聞くのも野暮だが、参謀の意見を聞きたい」

「完全な負け戦です。我々にできることは何もありません。戦場を離脱しましょう」

「まあそうなるな。元帥閣下を見捨てることになるが」

周囲の砲兵部隊は消火活動中で、歩兵部隊は本陣への救援のために移動を開始している。

その一方、作戦予定が破綻したにもかかわらず、本陣からの伝令は来ない。大混乱だ。

だが俺は構わずに言った。

「今から大砲を引っ張って駆けつけて、うちの旅団でどうにかできると思えますか？」

「では査問会があればそう弁明することにしよう」

既に大砲は五門とも輓馬ばんばにつないであるし、馬車も準備できている。往路で兵糧と水を消費しているので、馬車にはかなりの余裕があった。

往路は貨物トラックとして。そして復路は兵員輸送車として。これも計算のうちだ。

全軍に深刻な混乱が生じている中、大佐は毅然とした態度で命じる。

「第六特務旅団総員に告ぐ！ これより戦場を離脱する！ 負傷者は馬車に収容しろ！ 点呼を忘れるな！」

俺は自分の軍馬があるので、戦場離脱が一番最後でいい。落ち着いて撤収の状況を確認する。

……と、なんだかもたついでるグループがいるな。何かトラブルか？

駆けつけてみると、数名の戦列歩兵が倒れた戦友を介抱しているところだ。

「どうした？」

「この子、お腹に矢が刺さっちゃって……」

それを見た瞬間、俺は平静を保つための努力を必要とした。

女の子の腹に矢が刺さっている。おそらく内臓に達する深さだ。

この女性兵士には見覚えがあった。確か俺のことをいつもちらちら見ていた子だ。なんだか怪しかったが、リトレイユ公のスパイとしては迂闊すぎるので特に警戒はしていなかった。

彼女は驚いた様子だったが、健気に笑ってみせる。

「ひゃっ、参謀殿！？ だっ、ただ、大丈夫です！ こんな矢、抜いちゃえば……」

「抜くな！」

俺はその手を押さえると、近くの地面に刺さっている矢を見せた。

「見る、鏃に返しがついている。抜けば傷口をグチャグチャに引き裂くことになるぞ。おいみんな、このまま馬車に乗せてやれ！」

この鏃、前世の博物館で見たものによく似ている。引き抜くときに主要な血管を切ってしまうと終わりだ。この世界には輸血の技術がない。

「三人がかりで安静にして運べ！ 他の負傷者も……」

叫んだとき、不意に『死神の大鎌』が反応した。とっさに身を翻すと、矢が足下に突き刺さる。間一髪だ。

振り返るとキオニス騎兵が数騎、こちらに突進してきていた。遊撃の連中らしい。撤退中の俺たちをめざとく見つけて蹂躪しに来たか。

連中は曲刀を抜いて突撃態勢だ。狙いは救助中の戦列歩兵たちか。

接触まであと数秒。人間の走力では逃げ切れない。

「ちいっ！」

俺はとっさに腰のライフル式短銃を抜いた。撃てるのはたった一発だが、それでも部下を見殺しにはできない。

「俺が相手だ！」

乾いた銃声と共に騎兵が落馬した。当たったらしい。

だが銃声を聞いた瞬間、残りの敵が俺に殺到してきた。そりゃそうだ、どうせ殺すなら将校だよな。「俺が相手だ」って言うっちゃったし。

戦列歩兵の女の子たちが叫ぶ。

「参謀殿！」

「俺に構うな！ 行け！」

覚悟を決め、俺は腰のサーベルを抜いた。両手用の柄をつけた特注品だ。両手で上段に構える。

騎兵に対して刀剣は無力だ。おまけに俺の剣術は低段者レベル、戦場で命のやり取りができる水準じゃない。

だが撤収作業で大半の兵が戦えない今、負傷兵を救助しているみんなを守るのは俺だけだ。

「かかってこい！」

騎兵の白刃が、騎馬の蹄鉄が、俺を殺すために殺到してくる。

だが『死神の大鎌』はまだ何も言わない。俺が死ぬのは「今」じゃない。

俺は集中し、目の前の敵のことだけを考える。

俺がまだ死を経験していなかった頃、剣の師……要するに剣道部の顧問が、こう教えてくれた。

命を捨てる気で打ち込まなければ、勝てないときがある。

相手の打ち込みを防ごう、体力を温存しよう、綺麗に一本取ろう。そんな雑念が剣を鈍らせる。

だが自分より強い相手に、鈍った剣で勝てるはずもない。

ならば命を捨てる気で打ち掛かれ。結果など気にするな。たとえ敗れるとしても、相手に恐怖を教えてやれ。

最後の一太刀でお前の全てを表現するんだ。

そう教わった。

サラリーマン時代の通勤電車の記憶すら薄れかけている俺なのに、

なんでこんな中学校の記憶がまだ残ってるんだろっな。笑ってしま
う。

おっと、笑ってる場合じゃないな。

その瞬間、『死神の大鎌』が首筋を撫でた。

「今だ！」

迫り来る死の中に、俺は踏み込む。ここが命を捨てるときだ。

足を左に捌きつつ、限界まで体を深く沈める。サーベルは振り下
ろすのではなく、押し込むように打つ。そして衝撃に備えた。

「ぎゃあああっ！」

悲鳴は俺のじゃない。俺はまだ生きている。

敵の刃は俺の制帽を吹き飛ばしていった。身を沈めていなければ
首を斬られていたな。

振り返ると騎兵が一人、落馬していた。右腕がない。右腕は曲刀
を握ったまま、近くの地面に転がっていた。致命傷だ。

俺は上段に構えて横殴りの一撃を誘い、相手の腕を斬ったのだ。
それも自分の腕力ではなく、騎馬の突進力を使って。物凄い衝撃だ
ったのでサーベルを持っていかれるかと思った。

『死神の大鎌』が正確なタイミングを教えてくれなければ、あそこ
に転がってるのは俺の方だったな。

「ひっ、ひいっ！」

キオニス騎兵がのたうち、乾いた砂に血が染み込む。

他の騎兵たちは反転すると、今度は騎馬の間隔を詰めて再びこちらに向かってきた。

まずい、今度は蹄鉄で蹂躪する気だ。さすがに軍馬を斬るのも避けるのも無理だ。

だがそのとき、銃声が轟いて騎兵が落馬した。さらに銃声が重なり、騎兵たちは次々に馬から転げ落ちていく。

生き残りの騎兵たちは一瞬動揺するが、サツと馬首を転じて逃げだした。

「参謀殿！」

馬車の幌の隙間から、ライラたち狙撃手が顔を覗かせていた。

「御無事ですか!？」

「ああ、助かった」

俺はホツと安堵しつつ、急いで自分の軍馬にまたがる。持つべきものは戦友だな。

後方ではまだ激しい戦いが続いていた。キオニス騎兵たちが本陣を襲っているようだ。ジヒトベルグ公の紋章旗、それに第二師団の軍旗が見えなくなっている。

右往左往していた味方の戦列歩兵があちこちで方陣を組み始めたが、早く逃げた方がいい。

< i 5 5 6 3 1 9 — 3 5 6 7 8 >

やがて傷だらけの伝令騎兵が駆け込んでくる。

「ジヒトベルグ公が御討死なさいました！」
やばいぞ、敵のトップと交渉できる政治家が死んだ。

伝令はさらに凶報を続ける。

「第二師団は師団長以下、幹部将校の大半が行方不明です！ 戦を指揮できる者がおりません！」

もう戦争どころじゃない。完全な負け戦だ。

アルツァー大佐は伝令に尋ねる。

「我が軍の騎兵はどこにいる？」

「ジヒトベルグ公の命で交易都市ジャラクード攻略に出撃して以降、連絡が途絶しています」

「うちの参謀の言う通りか」
道理でいないと思った。

大佐が俺を振り返ったので、参謀として推測を述べる。

「おおかた、敵の後方を遮断するつもりで騎兵を送り込んだのでしよう」

「それで振り返りに遭ったのか」

「ジャラクード市街は複雑に入り組んでいるそうですので、そこで待ち伏せに遭った可能性はあります。市街戦では騎兵は本領を發揮できません」

「ではジャラクードに相当数の敵がいると考えざるを得ないな」

アルツァー大佐は迷うことなく伝令に告げる。

「ここで踏み止まって戦うのは危険だ。旅団長の判断により、第六特務旅団はいったん退いて態勢を建て直す！ 他の師団にもそう伝えよ！」

「ははっ！」

えらいことになったぞ……。

第41話「死神と負傷兵」

【第41話】

交易都市ジャラクード近郊の平原で行われた会戦は、わずか七千のキオニス騎兵に三万のシュワイデル軍が惨敗し、総大将のジヒトベルグ公が戦死するという歴史的敗北を喫した。

こういう歴史的敗北は、できれば俺のいないところでやってほしい。だからあんな陣形はやめとけって言ったんだ。言ってないけど。

俺たち第六特務旅団は馬車を伴い、東へゴトゴトと退却していく。途中、遺棄されたどこかの師団の馬車を接收し、予備の輓馬に曳かせることにした。

積荷にも期待したのだが、あいにくとロープと丸太ぐらいしか残っていないかった。うちの旅団は食糧と水は十分持ってきたが、そのぶん弾薬が心許ない。

困ったなと思っていると、偵察に出していたサテユラたち騎兵が戻ってきた。

「キオニス騎兵たちはジャラクードに帰還したようです。その際、戦場に放置された大砲や弾薬を鹵獲していきました。でも彼らに使えるんでしょうか？」

俺は悩むことなく答える。

「キオニス人が弓と剣だけで戦うとは思わない方がいい。こちらに

できることは向こうもしてくる。実際、彼らは擲弾てきだんを使いこなした。銃や大砲も使うだろう」

するとアルツアー大佐が軍馬を寄せてきた。

「火薬を好まないキオニス騎兵が擲弾を使うとはな。あの女の仕業か？」

「おそらくは」

リトレイユ公はブルージユ公国に攻城砲を貸した人物だ。キオニス連邦王国に擲弾を横流しするぐらいやりかねない。

とにかく偵察騎兵たちの報告を聞こう。

「他には？」

「帝国軍は師団ごと^ごに退却を開始したようです。徒歩なのでいずれも我が旅団より遅れているようですが」

そうだろうな。たぶん逃げ足の遅い部隊からやられていくはずだ。悪いがスケープゴートは多い方がいい。

大佐も同じことを考えていたようで、俺に質問してくる。

「後続の友軍は我々に追いつけると思うか？」

「無理でしょう。あの混乱の中で大半の部隊は馬車を遺棄したはずです。全ての荷物を自分で背負い、負傷者の速度で行軍しなければなりません」

重い荷物を背負った兵士や負傷者は早く歩けない。頻繁に休息が必要になる。

一方、うちの旅団はみんな軽装だ。なんせ銃も弾薬も背囊も全部馬車に運ばせている。おかげで足取りは軽い。奇襲を受けたときが怖い、それよりも行軍速度の方が大事だ。

さらに負傷者や体調不良者は馬車に乗せている。

元気な者も交代で馬車に乗り、短時間ではあるがブーツを脱いで休憩できた。

本当は全員を馬車に乗せて機械化歩兵っぽく運用したかったのだが、屈強な輓馬にも休憩は必要だから自動車みたいにはいかない。

俺は騎兵たちの報告から、おおまかな状況を推測する。

「まず騎兵戦力はジャラクード市街ではほぼ壊滅したと見ていいでしょう。大砲もほとんど遺棄していますので、うちの旅団の野戦砲五門がもしかすると唯一の大砲かもしれませぬ」

自分で言ってる気が滅入ってくる。

「歩兵についても相当な被害が出たはずですが、こちらはまだそれなりに戦える兵力が残っているでしょう。ただ、弾薬や食糧の不足が深刻なはずです」

アルツァー大佐は静かに問う。

「その状態で彼らは生きて帰れるのか？」

「難しい、としか言いようがありません。この荒野を水も毛布も持たずに旅をするのです。出会う人間は全て敵ですし」

ここから帝国領の城塞都市ツイマーまで徒歩だと三日ほどかかる。

負傷兵を連れ、敵襲を警戒しながらだと四日はかかると思った方がいい。

飲まず食わずの強行軍では命の危険があった。

「敵の捕虜になるのが一番いいでしょうが、キオニス人が異教徒の将兵を捕虜にしてくれるかどうか……」

するとキオニス人のサテユラが首を横に振る。

「彼らは勇者と認められた者、それも改宗を受け入れる者しか助命しません。それ以外の異教徒の戦士は冥府に送って神の救済に委ねるのが慈悲とされています」

「冗談じゃないよ。もし神がいるとしても、たぶんそいつ異世界に転生とかさせる神だぞ。信用できるか。」

俺たちはしばらく無言のまま馬を進める。そして大佐がつぶやく。

「どうやら脇目も振らずに逃げ帰るしかなさそうだ」

「同感です」

大佐の言葉に俺たちは深くうなずいたのだった。

* * *

会戦の翌日も、東に向かってひたすら行軍する。敵の追撃に怯えるが、今のところ敵影はない。もし追撃を受けていたら後方の友軍だろう。

しばらくするとぼつぼつと味方の死体を見るようになった。往路で行き倒れになった兵士たちだ。埋葬していく余裕がなかったのか、銃と背囊だけ回収されている。

既に腐敗が始まっており、何かの獣に食い荒らされた死体もあった。

「気の毒に」

ハンナがつぶやく。俺もうなずいた。

そういや俺も前世で死んだはずだが、どんな死に方をしてどんな風に弔われたんだろう。少なくともこの無名兵士たちよりはマシだったはずだ。

それにしても味方と全然合流しないな。本隊から置き去りにされた部隊が二万ほどいたはずだが、どこに消えたんだ？ 敵にやられたのか、それともさっさと逃げたのか。

困ったな、うちの旅団だけだと戦えないぞ……。

無残な死体を見るのに疲れた俺は、車列中央の馬車に馬を進める。ここは積荷が空っぽになっており、空きスペースは負傷兵専用になっていた。

今のところ戦死者はいない。負傷兵が四名。肩や腕に矢を受けた子が多いが、一人だけ腹に矢を受けた子がいる。

軍馬に乗った俺を見て、看護役の兵士が無言で敬礼した。眠っている子が多かったからだ。

「どつだ、具合は？」

馬上から問いかけると、臨時の看護兵は声を潜めて答える。

「みんな今のところは落ちついています。ただ……」

視線の先には、横たわっている女性兵士がいた。退却時に俺が守った子だ。

刺さった矢はキオニス出身のサテユラが慎重に抜いてくれたが、やはりそのときに傷が悪化したらしい。

とはいえ、不衛生な鏃が刺さったままでは破傷風になる。出血も怖いが感染症も怖い。

「傷口を縫った針と糸は俺の指示通り、火酒で洗ったな？」

「はい。でも縫った傷口から血が止まらないんです。サテユラさんが言うには毒矢ではなかったそうですが、たぶん臓物が傷ついているから早く医者に診せた方がいいと」

「ジヒトベルグ公の侍医たちが生きてりや良かったんだが……」

なんせ軍医なんてものがまだない時代なので、従軍している医者はジヒトベルグ公の侍医たちだけだ。彼らは本陣に詰めていたので、全員が消息不明になっている。

「あの、参謀殿は医術にもお詳しいんですね？」

「ああ……まあ、士官学校で少しな。だが外科的な処置は無理だ」
本当は前世の知識だが、どっちにしても素人なので大したことはわからない。とにかく衛生を保つよう、具体的な手順を指示するくらいに限界だ。

俺は軍馬を他の騎兵に預けると、馬車に乗り込んだ。

「だいぶ出血してるな。傷口の布はいつ取り替えた？」

「小休止の後です」

負傷してから一度も出血が止まっていない。かなり出血しているんじゃないだろうか。危険な状態だ。

「もどかしいな……」

かなりの深手だが、前世の医療水準ならたぶん治せる傷だ。輸血で命をつなぎ、血管を縫合し、抗生剤で守る。それができる世界だった。

前世の自分がどれだけ恵まれていたのか、改めて噛みしめる。

ここには何も無い。清潔な脱脂綿も、消毒薬も、鎮痛剤もない。

「うう……」

彼女が目を開けた。ぼんやりとしているが、俺を認めた瞬間に目に力が戻る。

「さ、参謀殿……」

「無理して喋るな。体力を温存するんだ」

小さな声でそう話しかけると、彼女は微笑む。

「体力だけは……自信、ありますから……ちよっ、どこ触ってるんですか……」

「手首だ」

「またまたあ……参謀殿はモテますから……この女たらしい……」
「まずいな、せん妄が始まってる。」

手首に触れてすぐにわかったが、体温が低い。顔色も悪く、呼吸と脈が浅くて弱い。

医療の知識はないが、敵味方の負傷者を大勢見てきた俺にはわかる。

彼女の体は生きる力を失い、命を手放そうとしている。失血だけじゃない。おそらく腸が傷つき、そのせいで感染症も起こしている。もう助からない。

「参謀殿……」

「ここにいるぞ」

「私、やっぱ……死ぬ、んですかね……」

彼女の唇が震えている。

俺は一瞬言葉に詰まるが、すぐに笑ってみせる。

「おいおい、こんな傷で死ぬヤツがあるか」

卑怯な嘘をついてしまった。

「帰還すれば大佐が良い医者連れてきてくれるだろう。それまでの辛抱だ」

「じゃ、じゃあ……それまでは、参謀殿に……あ、甘えても、いい、ですか……?」

「調子に乗るな。とはいえ、戦友の頼みは断れないな」

俺は彼女を正視していらなくなり、制帽を目深に被る。

「養生している。また来る」

俺が立ち上がったとき、外で誰かが叫ぶ。

「参謀殿、どちらにおられますか!? 大佐殿が呼びです!」

俺は立ち上がり、馬車から軍馬に飛び乗る。

「すぐ行く！」
何が起きたんだ。

第42話「キオニス退却戦（前編）」

【第42話】

俺が馬車から降りると、戦列歩兵の子たちが馬車の荷台から銃を取り出しているところだった。

「ほら急いで！ 紙薬莢も忘れるな！」

「こつち一挺足りません！」

「そこに予備がある！ 持ってって！」

敵が近くににいるらしい。

慌てて大佐のところまで馬を走らせる。

「閣下！」

「来たか、中尉」

大佐の周囲には鼓笛隊と数名の護衛しかいない。下士長たちは戦鬪準備の真つ最中だ。

「先ほど、偵察騎兵から報告があった。後方からキオニス騎兵の集団が接近しているそうだ。こちらの轍わたちを追っているらしい」

草原には馬車の轍がくつきりと残っている。大佐は悩んでいる様子で言う。

「二台ほど囿にして進路を変えようかと思ったのだが」

「難しいでしょう。本隊の轍は隠せませんし、草原では馬車を隠すことができません。追跡側が圧倒的に有利です」

逃げ隠れできない草原だから、こちらも潔く諦めて馬車の車列を作っている。今さら隠れるのは無理だ。

「では迎撃するしかないか」

「はい。敵の規模はどれくらいですか」

「追撃を受けたので確認する余裕がなかったそうだが、百騎ほどに見えたそうだ」

「まずいですね」

こちらの戦力は戦列歩兵が約六十人と野戦砲が五門。

あとは偵察騎兵とラッパ手、そして輜重兵だ。いずれも戦力にはならない。

大佐は険しい表情で言う。

「こんな平原では教本通り方陣を組むしかないが、せめて馬車をつまく活用したい」

「いえ、方陣はやめておきましょう」

「どうということだ？」

大佐が意外そうに俺を見た。

「騎兵相手なら方陣だろう？ まさか横隊で迎え撃つのか？」

「そのまさかです」

「横隊を組めば敵は必ず側面から突っ込んでくるぞ。そうになったら壊滅だ」

時間がないので俺は手短かに伝える。

「六十人の方陣では一辺に十五人の射手しか配置できません。敵が都合良く斜めから突っ込んできたとしても、二辺分の三十人しか射撃を行えません。百騎前後の騎兵を相手するには全くの火力不足です」

方陣はどの方向に対しても攻撃可能な隊形だが、火力が低下してしまうのが難点だ。数で負けているときに使うと騎兵の突撃を止めることができず、蹂躪されてしまう。

「では回り込まれないようにする方法があるのかな？」

「はい。閣下が仰ったように馬車を使います。とはいえ、単に並べただけでは意味がありません。一工夫します」

キオニス騎兵は近隣では最強の騎兵だ。教本通りの対応では勝てない。

そして何よりも厄介なのが、てきたん擲弾の存在だ。

幌馬車を防壁にする場合、あれを油袋と一緒に投げ込まれると幌馬車が燃えかねない。大砲なんか危なくて使えなくなるし、戦闘に勝っても物資の欠乏で詰む。

敵が擲弾を携行しているかどうかは不明だ。持っていない可能性に賭けるという手もあるが、それでは参謀がいる意味がない。

おっと、キオニス出身のサテユラに確認しておこう。

「サテユラ下士補、キオニス騎兵は戦士と認められた者にしか慈悲を示さないんだよな？」

「はい。敵と交渉して戦士と認めさせる気ですか？」

「冗談だろ？」

せつかくなので、その可能性についても参謀らしく考えてみよう。キオニス人の流儀に則って、どうにかこうにか俺たちを戦士と認めさせたとする。たぶん決闘とか試練とか大胆な交渉とかする。

『おお、そなたは異教徒なれど真の戦士だ。そなたに敬意を払い、追撃はせぬ。またいつか戦場でまみえようぞ』

とかなんとか言われたとしてだ。

その言葉を信じて退却できるか、という問題がある。相手は敵だ。軍事行動中に私情ひとつで態度を変えるような連中は、どうせまた私情で態度を変える。信用できない。

敵の気次第で生殺与奪が決まるようなプランに旅団全員の命を賭けさせる訳にはいかない。

「騎士道精神で戦えるのなら光栄だが、俺は騎士じゃなくて参謀だからな。そこでキオニス騎兵の性格をもう少し詳しく教えてくれ」
するとサテユラは困ったような顔をして、頬に手を当てながら一息に言っ。

「誇り高くて勇敢ですが、それは傲慢と粗暴の裏返し。異教徒や女

子供はおるか、戦士以外の全てを見下しています。仲間内でも見栄を張りがります」

「要するにシュワイデル人の男と大して変わらない訳か」

「まあそうです」

重い溜息が聞こえてきた。苦勞したんだな。

だが、おかげで方針は決まった。俺は大佐に向き直る。

「閣下、小官が交渉の使者になります」

「今を聞いて、よく交渉する気になったな？」

大佐が呆れたように言うが、俺は首を横に振る。

「交渉の使者になりますが、交渉をするとは言ってませんよ」

「また何か企んでいるな」

大佐は困ったように頭を掻き、それから諦めたように笑う。

「いいだろう、好きにやってみる。ただし勝手に死ぬな」

「無茶を仰る」

俺は苦笑して制帽を被り直す。死神などと呼ばれていても、人の生き死にだけはどうにもならない。

「詳細は陣地構築と並行して御説明します。まずは馬車を配置しましょう」

絶対に負けられない戦いが、また始まった。

* * *

俺は軍馬にまたがり、白い旗を掲げて進み出る。

『聞こえるか、キオニスの勇敢な戦士たちよ!』

サテユラに翻訳してもらったキオニス語の文章を読み上げ、彼らの出方をうかがう。幸い、『死神の大鎌』は反応していない。

弓矢やマスケット銃が届かないギリギリの距離に、キオニス騎兵の集団が展開している。横に広がり、突撃横隊を組む直前だ。幅はちょうど俺たちの陣地と同じくらい。数は七十……いや八十騎くらいか？

俺の横にはもう一騎、丸腰のサテユラ下士補が控えている。通訳兼アドバイザーだ。

敵から反応はないので、このまま続けます。

『我々はもう祖国に帰る! 争いは無意味だ! 兵を退け!』

やっぱり反応がない。

サテユラがぼそりと言う。

「当然ですが、相手にされていませんね」

「そりゃそうだろうな」

熟練の弓騎兵である彼らから見れば、俺の手綱捌きは素人同然。

おまけにシュワイデル軍人は弓が使えない。これでは戦士として認めるところか、話を聞く価値すらないだろう。

だが彼らも馬鹿ではない。俺が将校であることは軍服で見抜いている。俺を殺せば手柄になり、シュワイデル兵を動揺させられることもわかっている。

彼らの表情は見えないが、明らかに馬鹿にされている感じだ。この空気、士官学校時代を思い出すな。

まあいいや、もう少し続けよう。

『言っておくが、我々には強力な兵器がある！ 伏兵もいるぞ！』
その瞬間、彼らがどっと笑った。

「笑ってますね」

「当たり前だ。伏兵がいるなんて教える敵将がいる訳ないからな」

どうやらこれで話は終わりのようだ。

敵のリーダー格っぽいのが何か叫ぶと、彼らは一斉に弓を構えた。まずい、『死神の大鎌』が反応してる。

「参謀殿、来ます」

「見りゃわかる。逃げるぞ、サテユラ下士補」

俺がそう言ったときには、サテユラの軍馬は十メートル以上離れていた。さすがに早い。

「はあっ！」

俺は白旗を投げ捨てて馬首を転じたが、軍馬が駆け出した直後に風切り音が聞こえてきた。幸い、もう『死神の大鎌』は反応していない。弓の射程外に出たか。

と思っていたら、結構勢いのある矢が地面にプスプス突き刺さっている。当たったら痛そうだな。

そのとき、味方陣地から砲声が聞こえてきた。野戦砲の曲射による支援砲撃だ。

「撃てーっ！」

ハンナの元気な声が聞こえてくる。なんて頼もしい。

砲弾は俺たちの頭上を飛び越え、敵陣めがけて降り注ぐ。たった五門では牽制程度だが、敵の出足をくじくには十分だった。キオニスは砲撃に慣れていない。

今のうちだ。

「参謀殿！」

サテユラが振り返りながら叫ぶが、俺は叫び返す。

「前だけ見る！俺に構うな！」

こつちも頑張って馬を走らせているんだが、なんせ乗馬の技術が違いすぎる。トップスピードに到達するまでが遅い。

その間も砲声が轟き、俺の背後に着弾している。当たっているかどうかはわからないが、もともと時間稼ぎの砲撃だ。

背後からは蹄の音。騎兵突撃が始まったか。そりゃそうだろう。敵の将校が丸腰同然で目の前にいるんだ。ヤツらが逃がすはずがない。

さすがにこのままだとヤバいので、俺は味方陣地に叫ぶ。

「支援砲撃はもういいぞ！次のフェーズを始めてくれ！」

「だったら射線を塞ぐな、さつさとどけ！」
今度は大佐の声だ。わかってるけど馬が言うこと聞かないんですよ。

かろうじて進路を斜めに取ると、ハンナの叫ぶ声が聞こえてきた。
「水平射撃、開始！」
砲声が草原を震わせた。

第43話「キオニス退却戦（後編）」（図解あり）

【第43話】

大砲は「戦場の女神」と呼ばれる。それは前世も今世も変わらない。

そして俺は今、それをしみじみと感じていた。

野戦砲から放たれた砲弾は騎兵の隊列に一直線に突き刺さる。

放たれたのは散弾。一粒一粒がピンポン球ぐらいある、超大型の散弾だ。

勇猛なキオニス騎兵といえども女神の一撃には勝てない。馬がほんのめり、騎兵がのけぞり、次々に草原に散らばる。

五門の野戦砲が敵の隊列をえぐり取ったが、まだ敵の大半が健在だ。

一方こちらは六十人の戦列歩兵が守る、ちつぽけな砲兵陣地に過ぎない。敵の半数が突っ込むだけでも大損害を受けるだろう。このままでは止めきれない。

< i 5 6 1 8 2 5 — 3 5 6 7 8 >

砲兵隊を指揮するハンナが命じる。

「次弾装填！」

敵は欠けた隊列を埋め、突撃横隊を組んで速度を上げてきた。もう少して全力疾走だ。

「撃て！」
再び散弾が敵の隊列を襲う。敵は横隊を重ねて分厚い陣形を作っていたが、散弾は容赦なく後列まで貫通する。

「各小隊、斉射！」

戦列歩兵たちも撃ち始めた。マズルファイアと共に大量の白煙がたなびき、騎兵がまた何騎かひっくり返る。もう二十騎ぐらいやつけたんじゃないか。

だがこちらの攻撃はここまでだ。もう弾を込め直す時間はない。

俺は白煙の中に入った。どうにかこうにか帰還を果たす。

「遅いぞ中尉！」

「戻りました！」

俺は下馬しながら敬礼し、すぐさま続ける。

「閣下も急いで！」

「わかってる！」

すぐに騎兵が砲兵陣地に到達する。彼らの侵入を防ぐことはできない。

「終わりか」

大佐がぼそりと言ったので、俺はうなずいた。
「終わりです」

* * *

キオニス勇者たちは勝利を確信していた。

敵の大將は交渉を申し出てきたが、あろうことか矢を浴びて一目散に逃げ出したのだ。おおかた配下の兵士たちも怯えきっているだろう。

もともとこれは勝ち戦だ。ジャラクード会戦ではシュワイデル人の浅知恵を打ち破り、ジヒトベルグ公の首級を挙げた。

残るは敗残の雑兵ばかり。掃討戦は拍子抜けするほど簡単だった。もちろん今回もあっけなく終わるだろう。

「ハーツ！」

遅しくも頼もしい愛馬を駆り、自慢の曲刀を抜き放つ。銃も大砲も恐れはしない。人馬一体の突撃に敵うものなど、地上には存在しないのだから。

これぞまさにキオニシャランの本懐。

眼前の敵陣地は白煙に覆われている。シュワイデル人どもは愚かにも、自らの武器で視界を遮ってしまった。あれでは狙いも定められまい。

火薬など使うからこうなるのだ。戦は古来より肉と鉄で行うものと決まっている。

多少の犠牲を厭わず、キオニス騎兵たちは野戦砲の群れを突破した。大砲や火薬樽など、邪魔なものが多い。速度を緩め、手綱捌き

で軽やかにかわす。

白煙の中に突入し、軍馬の蹄で歩兵たちを踏み潰す……予定だった。

おかしい。雑兵どもがいない。

さっきまで整列し、ただただ踏み潰されるのを待っていた敵兵がどこにも見当たらない。逃げたのだろうか。

不審に思いつつも、そのまま馬で駆け抜ける。敵陣で立ち止まるのは危険だ。左右には敵の馬車があり、挟撃を受ける危険性があった。ここは前進あるのみだ。

だが白煙の中を駆けていると、前方で悲鳴と衝突音が聞こえてきた。騎馬ごと何かにぶつかった音だ。

危険を察知したものの、騎兵たちは止まらなかった。止まれば後続の騎兵と激突してしまう。後続の騎兵たちも白煙で視界を塞がれている。

「ハアッ！」

うつすらと見える何かを避け、軍馬をジャンプさせる。

一瞬、丸太で作った障害物が見えた。倒れた軍馬と仲間も見える。浅はかな小細工だ。すぐに仲間を助けてやろう。そう思いながら着地する。

そして虚空に投げ出された。

「うわぁあぁっ!?!」

網に絡まった愛馬が見えたが、確認する前に地面に叩きつけられ

て半身に激痛が走った。

障害物は丸太だけではなかった。網も用意されていたのだ。両者の間隔は狭く、二つ目の網を飛び越えるには助走距離が足りない。つまり騎兵には絶対に越えることができない。

もちろんキオニスの戦士はそれぐらいでは怯まない。激痛をこらえ、曲刀を拾って立ち上がる。

だがそのそき、キオニス騎兵は自分が戦っているのが何者なのか気づいた。

「おっ……女!？」

前方に並ぶ戦列歩兵は全員、シュワイデルの若い娘たちだった。あまりのことに棒立ちになって叫ぶ。

「俺たちは女と戦をしていたのか!? 誇りある戦いにふざ」

「あのバカを黙らせる」

シュワイデル語の声と共に銃声が轟き、キオニス騎兵の意識はそこで途切れた。

* * *

「よし、黙らせたな。さあ撃ちまくれ!」

護身用の短銃を手にした大佐が叫んでいる。

俺もサーベルを構え、白兵戦に備えていた。

目の前では目を覆いたくなるような大惨事が起きていた。人間の

方ならまだいいが、軍馬の方の大惨事だ。

丸太を組み合わせた「拒馬」と呼ばれるバリケード。戦国物の映画などでおなじみのアレだ。味方が身を隠すためのものではなく、敵の騎兵を止めるためにできている。これは先日拾った丸太で作っておいた。

もつとも、これぐらいならキオニス騎兵は割と飛び越える。砲煙で視界を封じたとはいえ、煙はアテにならない。

そこでジャンプした先にネットも張り巡らしておいた。

このネットも拾い物のロープで編んだものだ。うちの旅団の兵士は海辺のメディレン領出身なので、漁網を編める子が何人もいる。こうして「騎兵には越えられないが、銃弾は普通に通すバリケード」が完成した。

< i 5 6 1 8 2 8 — 3 5 6 7 8 >

それらに脚を取られ、あるいは正面から激突し、軍馬がどんどんひっくり返っていく。その軍馬につまづいてまた軍馬が転倒する。人が死ぬのには慣れてしまったが、馬が死ぬのはちょっと胸が痛む。

もちろん騎手も無事では済まない。落馬すれば練達の騎手も重傷を負う。

時速数十キロで地面に叩きつけられ、変な角度に首が折れ曲がっている者。

腕や脚を骨折したらしく、転がって呻いている者。

そして受け身を取って機敏に立ち上がり、曲刀で突撃してくる者。

それを六十人の戦列歩兵が迎え撃つ。

敵騎兵が砲兵陣地に突入してくる前に俺たちは後退し、バリケード後方三十メートルの地点で再集結。横隊を組んで待ち構えていたのだ。

「撃て！」

騎馬を失った騎兵はただの歩兵だ。

旧式マスケツト銃が敵を薙ぎ払い、ライフル騎兵銃が生き残りを的確に葬り去る。

それでも飛び込んでくるヤツは俺が斬り捨てる。

キオニス騎兵の曲刀は騎兵サーベルと同じタイプの武器だが、こちらのサーベルは両手剣仕様だ。破壊力が違う。上段から防御を叩き潰すようにして斬り伏せる。

なんせ今世の俺は身長が高い。

「悪く思つなよ」

さつきはよくも笑いやがったな。別にいいけど。

俺の左右を固める戦列歩兵の女の子たちは、着剣したマスケツト銃を構えて必死の形相だ。

「こ、怖い！」

「大丈夫、参謀殿は剣の達人だから！」

達人ではない。

「そうだよね！ 私たちは参謀殿のお手伝いだけしていればいいよね！」

もうそれでいいや。

キオニス騎兵……元騎兵たちは落馬によって矢を失っており、弓を構える者はほぼいない。いたら最優先で射殺するよう命令してある。

敵のほとんどは曲刀が得物だ。だが着剣したマスケット銃は短槍と同じであり、リーチの差で圧倒的に有利だ。おまけにマスケット銃からは弾が飛ぶ。

大佐が叫ぶ。

「騎兵隊、敵後方に回り込んで状況確認！」

敵を一騎も逃がさないため、野戦砲付近にもネットを用意している。

今頃は馬車の下に隠れていた砲兵たちが、ネットで出口を塞いでいるはずだ。念のため、騎兵に状況を確認させる。

一方、生き残った敵は次々に下馬していた。軍馬や仲間の死骸に隠れて弓で応戦する気のようにだ。

撃ち合いになるとこちらは遮蔽物がないので不利だ。

すかさず大佐が命じる。

「総員突撃！ 制圧せよ！」

一気に突撃し、マスケット銃の銃剣で決着をつける。

散発的に矢が放たれる中、俺もサーベルを構えて走った。

「きゃあっ！」

「うぐっ！？」

悲鳴と共に誰かが倒れる。生きててくれ。

ネットを乗り越え、続いて丸太の拒馬も奪取した。敵の騎兵一人に対して、数人がかりの銃剣刺突で突き殺す。もちろん銃も撃つ。

「必ず一発撃ち込み、三人以上で同時に刺突しろ！」

この戦法は一度しか使えない。だから手の内を知られた以上、ここにいる敵は全員殺す。

乱戦に突入したとき、後方でラツパの音が聞こえた。

その号令に呼応して、新たなネットが騎兵たちに降り注ぐ。馬車の中に隠れていた輜重兵たちが投網を投げたのだ。

キオニスには川の少ない内陸の乾燥地帯だし、騎兵たちは投網漁をしない。初めて遭遇する投網に絡め取られ、どうしてもいいかわからないようだ。おまけに彼らの弓も曲刀も、網の中では使づらい。一方、こちらは網の上から銃剣で突き刺すだけだ。戦局は一気に俺たちに有利になった。

「痛っ！？」

「撃つから下がって！」

キオニス騎兵たちの死に物狂いの抵抗に、こちらにも損害が出ていく。暴れる軍馬もいて危険な状況だ。

だが三人がかりで突きかかり、至近距離で発砲できる戦列歩兵側

は強い。

だが俺はちよつと困っていた。斬撃はまあまあ得意なのだが、刺突は苦手だ。かといって斬りつけると投網が邪魔になるし、下手をすると敵を自由にしてしまいかねない。

着剣した銃を持ってくりやよかった。

そのとき、またラツパが鳴る。歩兵隊の後退を命じるラツパだ。

「おいみんな、下がれ！ 下がって！ 外に出ろ！ 野戦砲側に再集結だ！」

俺が叫び、戦列歩兵たちは馬車と網で仕切られた「騎兵の檻」から脱出した。

直後、砲声が聞こえてくる。

「撃て！」

乱戦に乗じて、砲兵隊がいったん放棄した野戦砲を回収したのだ。ぐるりと回頭し、「騎兵の檻」にいる敵を撃つ。

網で身動きを封じられた騎兵たちに、至近距離から砲弾が襲いかかる。

戦闘と呼ぶには一方的すぎる展開になった。

五発の砲弾で騎兵の大半が死んだ。数十発の散弾で端から端まで撃ち抜いたんだから無理もない。生き残りには馬車の間から銃弾をお見舞いする。

激闘は次第に静かになり、やがて動く敵がいなくなった。
歩兵小隊長たちが命じる。

「生き残りがいないか、銃剣で確認しなさい。動いたらすぐ撃つて」
マスケット銃を構えた歩兵たちが死骸の山に恐る恐る接近し、血
と臓物まみれの中に踏み込む。

怖じ気づいて立ちすくむ子もいたが、大半の兵士は無言で検死を
続けた。ときおりバスン、バスンと銃声が轟く。

やがて小隊長たちが大佐に報告した。

「敵の全滅を確認しました。第一小隊、負傷三名。うち一名が重傷
です」

「第二小隊は負傷四名、死亡一名です。輜重隊も重傷一名とのこと」
ととうとう戦死者が出た。重傷者たちも危険だ。

敵の曲刀で腹を斬られたらしい兵士が、戦友の肩を借りて毛布の
上に寝かされていた。臓物がはみ出している。ブーツの中まで血で
いっぱいになっており、濡れた足音が聞こえていた。

その隣には腕を押さえている輜重隊の子がいたが、肘から先がな
くなっている。そこらじゅう血まみれだった。痙攣しており、意識
がもうほとんどないようだ。

二人とも致命傷だ。助けようがない。

その近くには喉に矢が刺さった子が寝かされていた。涙ぐむ戦友
が矢を抜いてやっても、新たな血が噴き出す様子もない。心臓が止
まっているのだ。

口と鼻が血まみれになっていたが、それを戦友たちがハンカチで優しく拭ってやる。

銃剣突撃をすれば死人が出るのは当たり前だが、やはり胸が痛む。

だが感傷に浸る前に、俺にはやるべきことがある。

「負傷者の手当を急げ！　どんなに小さな傷口も火酒でよく洗え！　傷口を縛る布は清潔なものだけを使うんだ！　深い傷は火酒に浸した針と糸で縫合しろ！」

やがて偵察騎兵たちが戻ってきて、逃げた敵がいなかったことを報告した。続いて、重傷者二名が死亡したことが報告される。

大佐が静かにうなずき、一同に告げる。

「諸君、我々は今日を生き延びることができた。我々の命を明日へ繋いでくれた戦友たちに黙祷を」

俺たちは白い布を掛けられた三人の戦死者に黙祷した。

第44話「葬送の死神」（図解あり）

【第44話】

どうにかこうにかキオニス騎兵の追撃隊を全滅させたが、こちらも死傷者が出た。それに敵の死体をそのままにはしておけない。

だがその前にやる必要がある。俺は彼らの荷物をこそこそ漁り始めた。

士官学校で繰り返し教わったのは、敵の遺留品には価値があると
いうことだ。装備の状態ひとつ取っても、そこから敵の兵站を推測
することができる。

どの武器も傷んでいるなら整備や交換ができていないということ
だし、食糧や弾が少なければ補給に問題を抱えている。

「心情的にも衛生的にも嫌だな……」

死体漁りをしない訳にもいかないが、こいつらはうちの旅団の子
を三人も殺した。こんなところで彼女たちを死なせたくなかった。

キオニス騎兵への憎しみと恨みは消せない。

キオニス騎兵たちは正規の軍人ではなく、氏族の戦士だ。それだ
けに持ち物は雑多で、キオニス軍の情報につながるものは乏しい。
わかるのはこの氏族の情報ぐらいだ。

せめて地図とか氏族間の書簡とかあればいいんだが。

そう思って何人目かの死体を探ると、荷物の底から折りたたんだ紙片が出てきた。当たりかな。

開いてみると、全く予想外のものだった。

「ん？」

小さな子供が描いたと思われる、消し炭で描いた稚拙な絵。馬に乗ったヒゲ面の男が笑っている。

もう一人、子供らしい小さな人間が一緒に馬に乗っていた。こちらにも笑っていた。

「お前……」

死体を見下ろす。ヒゲ面の男だった。確か激しく抵抗して、銃剣だけでは仕留めきれなかった戦士だ。仕方ないので撃ち殺した。

俺は紙片を元通りに折りたたみ、それを荷物の底に戻してやった。
「馬鹿野郎が」

なんで追撃なんかしてきたんだよ。

いや、それもこれもシュワイデル軍がキオニス領に侵攻したから起きたことだ。キオニス人が襲ってくるのは当たり前だろう。彼らにとっては自衛の戦争だ。

どちらかといえば悪者は俺たちの方なので、気が滅入ってくる。

その後も死体を調べるたびに故人の人柄を偲ばせるようなものを

発見し、俺は心を殺して検分を続けた。

早く旅団司令部に帰りたい。エアコンもネットもないクソみたいな部屋だが、今は自室がたまらなく恋しい。

溜息をついていると、アルツァー大佐がやってきた。

「御苦労だったな。収穫はあったか？」

「めばしいものは何もありませんでした。ただ、氏族名はわかりました。サテユラ下土補によると『ペルゲンクシューン』、キオニス語で『冬の荒野に吹く乾いた風』の氏族だそうです」

幸か不幸か、彼らはサテユラの氏族を滅ぼした相手ではなかった。

「所持品の意匠などから、彼らは国境地帯から遠く離れたキオニス南西部の氏族だと推測されるそうです」

「では大規模な動員がかかっていると見るべきだな」

「御明察です。それと心配していた擲弾てきだんですが、この氏族は持つていなかったようです。見つかりませんでした」

擲弾がないとわかっていれば、もう少し楽な方法で戦うこともできた。何もかもリトレイク公のせいだ。

すると大佐は俺の顔を見て、何かに気づいたようだ。

「疲れているのか？」

「敵の死体を調べていたら、子供の描いた絵や拙い刺繍飾りなどを発見しました」

それを聞いた大佐はなぜか、ほっと安心した様子を見せる。

「そうか。いや、それは私も気が滅入る。ただ……」

「何ですか？」

「やはり貴官にもそういう心があるのだなと」

「そりゃそうだよ。俺は二十一世紀の日本で暮らしてた、平凡な民間人だよ。」

俺はめいっぱい傷ついた顔をしてみせる。

「小官とて人の心ぐらい持ち合わせています」

「そうだな。うん、そうだろう。いや悪かった。貴官は優しい男だ」
「なんでそんなに俺の背中を叩くんですか。メチャクチャ安心してるっぽいのが逆に傷つく。」

それから彼女はしみじみと呟いた。

「……貴官が優しい男で良かった」

「なんでそんなにしみじみ言われてるんだろう。」

「だがこうして大佐といつも通りの会話をしていると、ひび割れた人間性が少し修復された気がする。」

大佐はびつくりするぐらい優しい表情で俺に言った。

「さて、我々は敵の死体を隠蔽しなければならぬ。戦闘の痕跡を隠すためではあるが、そのついでに敵の冥福を祈ってやっても軍規違反にはならないだろう」

「そうですね」

上官が優しい人で良かった。

小隊長たちが兵士に命令している。

「敵の死体に帆布を被せて！ 早く！」

「軍馬もやるんですか？」

「当然でしょう。帆布で覆ったら杭を打って止めなさい！ 強風でめくれないよう、念入りにね！」

本当は敵も埋葬してやりたいが、俺たちは敗走中の寡兵だ。乾いた地面を掘り返す時間も体力もない。

浅く掘っても獣が掘り返すから、それならもう帆布で覆ってしまおう。これならあつという間だ。

幸いといつかなんとというか、俺たちが持ち込んだ帆布は荒野の地面と同じ色だ。偽装にも使えるよう、わざわざ染めたものを購入している。

大きな帆布はテントやシートとしても使えるし、担架などの材料にもなる。行軍の必需品だ。

騎兵たちの死体を一カ所に集め、遺品が混ざらないように一人ずつ帆布で覆う。宝石や金貨を持っている敵も多かったが、略奪は禁じた。

軍馬の死骸は重くて動かせないなので、その場で帆布を被せる。

仕上げに杭を打って四隅を止めて完成だ。

「これ、やっぱり目立たないか？」

「とはいえ、時間をかけるのは危険です。新手と遭遇しても戦う余力はありません」

時間が惜しい。ここに留まる分だけ敵と遭遇する確率が高まる。仮に敵と遭遇しなくても、兵の体力と物資は確実に消耗されていく。

味方の死体は帆布でくるみ、馬車で運ぶ。ここに残すと敵に情報を渡すことになる。せめて少しでも故郷に近い場所まで連れて帰ってやろう。

そのまま日没まで行軍して距離を稼ぎ、いくつか丘を越えたところで野営となった。

大きなテントをいくつか設営し、戦い疲れた女の子たちはゴワゴワの毛布にくるまって休む。

各隊から少しずつ不寝番を募り、残りは全員泥のように眠っている。不寝番は明日、馬車でゆっくり寝てもらおう。

だが俺はどうにも寝付けず、木箱に腰掛けてぼんやりしていた。敵に発見されるとまずいので、灯火の類は一切無しだ。星明かりだけが頼りだったが、慣れると案外悪くない。

荒野を吹き抜ける冷たい夜風に耳を澄ましていると、すぐ近くで足音が聞こえた。

サーベルの柄に手を置きつつ、静かに問う。

「誰だ？」

「耳がいいな、クロムベルツ中尉」

アルツァー大佐の声だった。

俺は警戒を解き、暗闇の中で敬礼する。

「これは閣下。まだ起きていらしたんですか？」

「それはこちらの台詞だ。寝付けないのか？」

「ええ」

大佐は俺の隣によつこらしよと座る。つま先が地面に届いていない。

「今日の作戦は感心したぞ。見事な対騎兵戦術だった」

「ありがとうございます。教本通り『騎兵の動きを封じるべし』を実行しただけですよ」

しかし大佐は首を横に振る。

「私には方陣で迎え撃つぐらいの作戦しか思いつかなかった。馬車を気休め程度の盾にしてな。だがもしそれで戦っていれば、あの場所に埋まっているのは我々の方だったはずだ」

それはたぶん間違いない。敵はかなりの規模だったし、士気も練度も高かった。

大佐は俺の顔をじつと見て、それから問う。

「貴官が考えた馬車の配置は、敵騎兵を誘い込んで殺すためのものだな？」

「はい。騎兵との戦いは、いかにして機動力と衝突力を封じるかにかかっています。閉所に誘導して両方を封じてしまえば脅威度は格段に低下します」

「簡単に言うが、よく成功させたものだ」

大佐が半分呆れたように言うので、俺は頭を掻いた。

「ええ。こちらの陣地を慎重に観察されると意図を見抜かれる危険性がありました」

「だから参謀自ら、あんな危険な茶番をしたのか」

茶番とか言わないでほしい。

「敵はジャラクド会戦でジヒトベルグ公のいる本陣を強襲しました。狙えるときは敵将の首を取りに行くのが彼らのやり方です」

これは騎兵の基本戦術のひとつだが、衝突力よりも機動力を重視する戦い方だ。

< i 5 6 1 6 4 5 — 3 5 6 7 8 >

「この旅団の男は小官だけです。キオニス人の価値観なら小官を総大将だと認識するでしょう。案の定、小官のケツを追いかけて突進してきました」

「自分を餌にする参謀など聞いたことがないぞ」

俺もない。

すると大佐はフツと笑った。

「どうやら貴官は意地でも自分を危険に曝さないと気が済まないらしいな。部下ばかり危険に曝すのはフェアではないと思っているのか？」

「別にそんなつもりはありませんが……」

だが言われてみれば、それは俺なりの罪滅ぼしなのかもしれない。思えば小隊長時代も常に先陣を斬って飛び込んでいた。もしかして俺、部下が死ぬことに耐えられないタイプなのか？ いやいや。平気だよそんなもん。今までだって大勢死なせてきたんだ。

「小官は戦死を覚悟の上で帝国軍人として奉職しております。それは全員同じはずでしょう。戦死は結果に過ぎません」

将校も兵卒も、敵も味方も、誰もが荒野の土くれになるのを覚悟するしかない。

だが大佐は脚をぶらぶらさせつつ、困ったように笑う。

「理屈ではな。だが貴官同様、私も割り切れずにいる。こんな異国の荒野で部下たちを死なせるぐらいなら、故郷で貧困と暴力に怯えたままの方がマシだったかもしれない」

「閣下が気に病むことはありません。小官の作戦立案能力が及ばなかっただけです」

すると大佐はにっこり笑う。

「それこそ気に病むことではないな。貴官以上の作戦立案能力を持つ者はこの旅団にいない。私や部下たちがまだ生きているのは、ひとえに貴官の作戦のおかげだ」

「閣下……」

さては大佐、最初からこれを言うために話を振ったな？

ちつこい大佐は俺を見上げるようにしながら、こう続ける。

「貴官は旅団のために全力を尽くし、危険を顧みず勇敢に戦い、そして我々を勝利に導いた。その功績は本物だ。何ら恥じる必要はない」

大佐はそれから少し迷いながら言った。

「人は全知全能ではない。どうにもならないことを思い悩むな。どうにかできることだけ考えろ。私もそうするから」

大佐はまだ二十二歳。前世の俺ほども生きていない。二度目の人生を歩んでいる俺から見れば、ほんの小娘だ。

そんな彼女にここまで心配してもらい、こんなに温かい言葉をかけてもらっている。

俺はどう答えるべきか迷ったが、一番素直な気持ちで口にした。

「小官は幸運です。最高の上官に恵まれました」
すると大佐はちよつと驚いた顔をしてから、ニヤリと笑った。

「私の方が幸運だぞ。最高の参謀に恵まれたからな」
この人には敵わないな。暗闇の中、俺は無言で敬礼する。
大佐も無言のまま、笑顔で答礼した。

こんな会話をしたおかげかどうか、その夜はぐっすり眠ることができた。

やはり俺はこの人についていこう。その先に何が待っていたとしても。

第45話「汝は死神なりや？」

【第45話】

敵の追撃を撃滅して以降、それ以上の追撃はなかった。ボロボロになった馬車の車列はさらに東へと進み続ける。

戦死した三名の遺体は帆布にくるみ、蛆が湧かないようにして帝国へと搬送する。あと一日か二日で帝国領に帰還できる。城塞都市ツィマーに埋葬してやるう。

そして矢を腹に受けて瀕死の女の子もまた、彼女たちの後を追おうとしていた。

「参謀殿……参謀殿……」

「ここにいるぞ」

なぜかずっと指名されているので、俺はいつの間にか彼女の看護役になっていた。どうせ今の俺は万策尽きた無力な参謀だ。負傷兵の付き添いぐらいしかすることがない。

彼女が矢を受けて既に二日経っている。輸血も抗菌剤もなく、体表の傷を縫った程度の処置ではもう限界だろう。おそらく内臓が傷つき、出血が体力を奪い、感染症が全身に広がっている。そこまで推察できるのに、俺たちは何もしてやれない。

「もう少しで帝国領内だぞ。帰ったら休暇をもらってしばらく休め」
濃密に漂う死の気配に耐えきれず、俺は気休めだと知りつつそんなことを言う。彼女はもう持たない。遅くとも数日、早ければ次の瞬間に死ぬ。

だが彼女は俺の手を握り、ぼんやりとした笑みを浮かべている。

「や……役得、です……ふふふ」

こんな状態になっても、やっぱり休暇は嬉しいんだな。こんな瀕死の子を騙していることに気が引ける。

もう体力がないので、彼女はほとんどしゃべらない。なぜかみんな俺に看護を押しつけていつも少し離れているので、俺がしゃべらないとひたすら沈黙が続く。

後は馬車の車輪の音と幌がはためく音だけだ。

気まずさと罪悪感に耐えきれず、俺は泥沼を覚悟しつつもまた口を開いてしまった。

「休暇では何をしたい？ たまには故郷に帰ってみるか？ メディレン領のシュレーデンだったな。賑やかなところだと聞いているが」

しまった、この話の振り方はまずかったな。

都市部出身の若い女の子が戦列歩兵なんかやっているのは、たぶん家庭の事情か何かだ。よほど不幸な生い立ちがなければここにはたどり着かない。

俺が死にたい気分になっていると、本当に死にそんな方が笑う。
「お母さん……さ……参謀殿だよ……クロムベルツ中尉……」
もしかして帰省に同伴しないとダメなのか？ 目の焦点が合っていないので、彼女は幻覚を見ているようだ。

相当痛くて苦しいはずだし、このまま死なせてやるべきだろうか。致命傷を負った負傷兵の中には、殺してくれと懇願してきた子もいた。そういう子は戦友たちの手で静かに送られた。

だがこの子は死にたいとは言っていない。勝手に殺す訳にはいかない。

とはいえ、この苦しみを長引かせるのは……。
そう思っただけで悩んでいると、彼女はまた笑う。

「参謀殿はね……お父さ……みたいに殴ら……ないし……すぐ、優し……」

目は虚ろだがとても幸せそうな表情をしている。どんな幻を見ているんだろう。

俺はどうしていいかわからなかったが、嘘をついた以上は最後まで嘘つきとして責任を持つことにした。

「ああ、そうだぞ。それにもう戦わなくてもいいんだ」
俺の言葉が聞こえているのかどうかわからないが、彼女はぼんやりと俺を見る。

次の瞬間、急に目の焦点が合う。

「あれ……？ リザちゃん？」
リザというのは先日の戦闘で戦死した歩兵科の子だ。
彼女はさらに言う。

「シユーナさん……ピオラちゃん？」
シユーナとピオラも戦死者だ。
だが俺も他の子も、戦死者についてこの子には何も教えていない。
弱気になるといけないからだ。

「どうしてここに……？」
彼女は俺を見ていない。俺の背後を見ている。
俺は怖くなって背後を振り返るが、そこには誰もいない。あるの
はあちこち破れた幌だけだ。

何が見えてるんだ？ 幻覚なのか？ それとも本当に何かいるの
か？
前世では霊の存在なんか信じていなかったが、実際に転生してし
まった身としては霊の存在を否定しきれない。

どうしていいかわからずに硬直していると、瀕死の負傷兵は目か
ら一筋の涙をこぼした。

「うん、一緒に……行くっ……」
「待て！ 行くな！」

もう助からないのはわかっているのに、俺は思わず叫んでいた。

シュワイデル帝国に生まれてからというもの、人間の最期なんか飽きるほど見てきた。ストリートチルドレンの頃から死は身近にあった。もう慣れてしまつて何も感じない。そう思っていたのだが、なぜか声が出てしまった。

しかし彼女は恍惚の表情を浮かべ、どこか遠くを見ている。
「あなた、が……死神……？」
臨終の床に死神も来てるのか。それとも俺のことだろうか。

問いただしてみたかったが叶わなかった。
それが彼女の最期の言葉だったからだ。

しばらくして、おそろおそろといった感じで歩兵科の子たちが顔を覗かせる。

「えっと、参謀殿？」
俺は気を取り直し、まだ生きているみんなに振り返った。

「逝つたよ」
感傷に耽っている暇はない。俺たちはまだ敗走中だ。
制帽を被り直すと、俺は次にやるべきことを実行する。

「彼女の遺体を帆布にくるんで、後列の馬車に移そう。手伝つてくれ」
「はい、参謀殿」

この日、第六特務旅団の戦死者は四名になった。

* * *

俺は馬上で手綱を握りながら、彼女の臨終の様子を思い返す。気の毒な最期だったが、不可解な点もあつた。どうして彼女は、他の戦死者を正確に言い当てられたんだ？

馬車の外の会話を聞いた可能性もあるので、戦死者の霊を見たとは言い切れない。

ただ「死んだら終わり」ではないことは、転生した俺自身が証明している。どうにもモヤモヤするな。

あと死神って、もしかして俺に死神が取り憑いてたりするの？ ちらりと振り返ってみるが、霊の気配も何も無い。もともと靈感などの類は信じていない俺だ。

この世界の手かがりがつかめたような気がしたが、逆に謎が深まってしまった。

まあいい。わからないことはわからないと受け入れるのが科学的な態度だろう。そのうちわかるといいな。

それよりも今は生存者を無事に帰還させる方が重要だ。

「クロムベルツ中尉、そこにいたか」

「これは閣下」

アルツァー大佐が軍馬で近づいてきたので、轡を並べて随伴する。

大佐は優しい目をして俺に微笑みかける。

「彼女は敵意と汚泥にまみれて死んだのではなく、戦友に囲まれて慈しみと平穩の中で旅立ったのだ。そう落ち込むな」

「落ち込んではいませんよ、閣下」

俺は笑ってみせる。将校はどんなときでも普段通りにしていなければならぬ。

ただまあ、大佐になら愚痴のひとつも許されるだろう。

でもストリートに弱音を吐くのは情けなかつたので、ちょっと冗談めかして言う。

「部下の死に何も感じなくなれば、もっと気楽になれるんですが…

…」

すると大佐は困ったような顔をして、少し拗ねたように言う。

「そんな貴官は見たくないな。私は今の貴官が好きだ」

「すみません」

そりゃそうだ。良くない冗談だった。

いけないな、まともな冗談すら言えなくなっている。これじゃ軍務に支障をきたすぞ。

そう思っていると、大佐が心配そうな顔をした。

「あまり思い詰めるな。貴官はそうやってすぐに自分を追い詰める」「
「気をつけます」

「だから追い詰めるなと」
そんなこと言われても……。

大佐は俺の表情を見て、フツと苦笑する。

「いや、今のは私が悪かったな。今の貴官の方が好きだと言っておきながら、あれこれ注文ばかりつけてしまった」

「いえ、小官が年甲斐もなく妙なことを言うからいけないのです」

前世分も合わせれば相当な年齢のはずなのに全く情けない。

しかし大佐は「おや？」という表情をした。

「貴官は私より年下だろう？」
しまった。

大佐の前だと妙に口が軽くなってしまふ。これも彼女のカリスマ性か。

とにかくごまかさねば。

「若輩とはいえ、もう二十は過ぎていますから」

平民は十歳頃から見習いとして働き始めるので、二十代前半はもう立派なベテランだ。俺もこの世界で何年も軍務を経験している。ということに納得してもらおう。

大佐はしばらく俺の顔をじっと見ていたが、やがて前を向いてうなずいた。

「そうだな。だが貴官は年齢以上に落ち着いている。それが逆に心

配なぐらいだ」

「ありがとうございます」

「なんとかごまかせた……かな？」

そのとき、前方を警戒する偵察騎兵から連絡が入った。

「行軍中の第一師団の兵、およそ一万を発見しました！ 第六特務旅団の合流を歓迎することです！」

俺と大佐は顔を見合わせる。

「途中で脱落した部隊か。皇帝直属の近衛師団が、遅参どころか勝手に退却するとはな」

「第二師団の自殺行為に付き合う義理はなかった、ということですよ」

俺は馬上で肩をすくめてみせる。

「何にせよ歓迎してくれるのなら合流しましょう。城塞都市ツィマ―まであと少しですし、皇帝直属の第一師団と一緒になら何かと安心です」

「そうだな。ではありがたく合流させてもらうか」

俺は最後尾の馬車を振り返る。

あそこには戦死者四名の遺体が安置されていた。

「もうすぐだからな」

せめてシュワイデル人の土地に埋めてやろう。

第46話「道化師の旅団」(前書き)

申し訳ありませんが「人狼への転生」15巻書き下ろしのため、しばらくは週1回更新になります。
次回更新は13日(金)です。

第46話「道化師の旅団」

【第46話】

敗残の第六特務旅団は、近衛師団である第一師団と共に帝国領に帰還を果たした。国境の城塞都市ツイマーに入り、第二師団の国境守備隊に迎え入れられる。

将校たちは代官の城館に招かれ、報告と慰労を兼ねた昼食会に参加した。

「いやあ、キオニス人どもには手を焼かされましてな！」

第一師団の近衛大佐がヒゲを撫でながら豪快に笑っている。

「元帥閣下の策を見破られ、どうにかこうにか敵中を突破してきた次第です」

嘘つけ。お前ら会戦に間に合わなかっただろ。

傍らを見るとアルツァー大佐が物凄い顔で近衛大佐を睨んでいる。さすがに近衛大佐もギョツとしたようで、口調が急激に尻すぼみになった。

「ま、まあ……あの……第六特務旅団の獅子奮迅の働きあってこそ、なのですか？」

参加している将校や貴族たちの視線がアルツァー大佐に注がれる。さっきまでの怒気に満ちた表情が嘘のように、大佐はけろりとしていた。どうやら演技だったらしい。

「ジヒトベルグ公のような偉大な名君を失ったことは、メディレン家にとつても耐えがたい哀しみです。皆様、どうか気を強く持たれますように」

そつのないお悔やみだ。さすがに五王家の一員だけのことはある。

ツイマー市の軍人や役人はみんなジヒトベルグ門閥だ。トップを失ったことで彼らの立場は不安定になる。

それだけに大佐の言葉は歓迎されたようだ。

「ありがとうございます、アルツアー様」

「どうか当家の名誉が守られますよう、お力添えを」

彼らの危惧はよくわかる。

なんせ五万の大軍を擁してキオニス領に殴り込みをかけ、戻ってきたのは二万ほど。

それも会戦に参加しなかったから助かったようなもので、会戦に参加した部隊で生還したのは第六特務旅団だけだ。

だから会戦の真相を知る者はほとんどおらず、みんな責任問題になるのを恐れて嘘だらけの報告をしているらしい。

つまり俺たちの発言ひとつで、いろんな連中の首が飛んだり繋がったりする訳だ。さすがにメディレン家当主の叔母の言葉を公然と疑う者はいない。

その大佐はというと、何事もなかったかのように平然としている。嘘つきの近衛大佐を糾弾するでもなく、かといってジヒトベルグ公をあれこれ言う訳でもない。

大佐が俺をちらりと見る。

(これでいいのだろうか?)

(ええ。迂闊な発言をするよりは、今は沈黙を保った方が得だと思われませ)

俺のアイコンタクトに大佐は小さくうなづく。

(今回の大失態はジヒトベルグ家の命運を危うくするだろうな)

(そうですね……。ジヒトベルグ家はどうかして権威失墜を防ごうとするはずですし、逆に帰還兵たちはジヒトベルグ公に全責任をなすりつけるでしょう)

俺たち自身もそうだが、とにかく敗残の兵というのは気まずい。

敗戦の責を負わされる危険性もあり、保身は全力で考えねばならない。

そうなると総大将が戦死しているのは大変都合が良く、全部総大将のせいにしてしまえる。

そんな訳で軍の内部は今とてもギスギスしており、迂闊な発言は足下を危うくする危険性があった。

大佐はアイコンタクトで器用に溜息をつく。

(立ち回りが大変だな。策はあるか、我が参謀?)
(第六特務旅団の発言力などたかが知れています。しばらくは卑劣な風見鶏に徹するしかないでしょう。ただ……)

(なんだ?)

大佐が首を傾げたので、俺は苦笑いしてみせる。

(どうせリトレイユ公が何かするでしょうから、それに乗っかってうまいことやりましょう)

国内の諸勢力の動きは複雑だが、謀略の黒幕であるリトレイユ公の狙いはシンプルだ。ジヒトベルグ家を没落させる。

俺たちにそれを止める力はないので、リトレイユ公の悪事にタダ乗りして甘い汁を吸おう。

大佐が呆れている。

(貴官の有能さは再確認させてもらったが、つくづく敵に回したくない男だな)

(褒めてるんですか、それは)

(これ以上ないぐらいに賞賛しているぞ。これからも私の傍から離れるな)

褒められた。嬉しい。

ふと気づくと、さっきの近衛大佐がびくつきながら不思議そうな顔で俺たちを見ている。

「あの、メディレン大佐殿……何か?」

どうやら大佐が側近の俺と見つめ合っていたので、極度の不安に駆られたらしい。

さらにこんなことまで言う。

「そちらの中尉は、確か『死神参謀』と名高いユイナー・クロムベルツ中尉ではありませんか？」

地味に傷つくから死神って呼ばないでくれ。いや待て、名高いの？

するとアルツァー大佐はこれ以上ないぐらいのドヤ顔になって、誇らしげに微笑む。

「そうです。我が旅団は退却中にキオニス騎兵の追撃を受けましたが、この男の策謀ひとつで逆に全滅させました」

居並ぶ諸将と官僚たちがどよめく。

「おお……さすがはゼツフェル砦の英雄」

「精鋭と名高い第六特務旅団だけのことはありますな」

「あの大敗北の中、ほぼ無傷で敵中を突破してくるとは」

んんん？　なんか変だぞ。

賞賛されて嬉しくない訳はないが、妙な違和感がある。

俺たちの勝利はあくまでも戦術レベルの小さな勝利だ。国同士の戦いではほとんど何の影響もない。

(妙です。ここは戦略階梯の議論をする場ですが、戦略階梯では我

々の勝利など讃えるに値しません)

(確かにな。ひどく不健全な匂いがする。あの女の香水のような匂いだ)

皮肉がどぎついけど、俺も同じことを考えていた。

案の定、話が妙な方向に脱線し始める。

「遠征は大敗しましたが、まだ我々にはこのような精鋭が無傷で残っております」

「さよう。リトレイユ公の下で団結し、敬愛する帝室をお守りしましょう」

やっぱりあいつか。

(閣下、これはリトレイユ公の宣伝工作です)

(わかっている。我々を政治の道具に使う気だ)

あのクソ女、何もかも見通していたんだ。

ジヒトベルグ公が大敗北することも、俺たちが無事に生還してくることも。

そして生き残った俺たちを悲劇の英雄に仕立て上げるつもりだ。

リトレイユ公はジヒトベルグ公を元帥に推挙している。無能を推挙した責任を問われる場面もあるだろう。

その声を封殺するには、この戦いを美談に仕立てて不可触の「聖域」にしてしまう手がある。

『あなたがたは異国に散った戦士たちや、激戦を戦い抜いて帰還した英雄たちを侮辱するつもりですか？』

論点のすり替えだが、こう言われると反論しづらい。英雄扱いされる部隊があればなおさらだ。

もともと帝国内の貴族や軍人たちは、ほぼみんなキオニス遠征に好意的だった。各師団の参謀本部も「勝算は極めて高い」という評価をしている。下手に検証すれば自分たちの無能ぶりを晒すことにもなりかねない。

こうしてお互いに気まずさを抱えつつ、みんな黙り込む。

軍事的な検証は置き去りにされ、帝国史における「悲劇の敗戦」として誰にも触れることができない場所に安置される。遠征は美談とされ、忘却の彼方へと追いやられるだろう。

実際、場の雰囲気はその通りになりつつあった。

「悲劇的な戦いでしたが、今こそ五王家が団結しなくてはなりませんな」

「ジヒトベルグ公の遺志を受け継ぎ、キオニス人どもから帝国を守らねばなりません」

「ええ、リトレイユ公の下で団結しましょう」

微妙に噛み合っていない会話をしているが、双方の立場の違いのせいで。早くも水面下で熾烈な駆け引きが始まっている。

そして俺たちかというと、議論の箸休めみたいに話題に上る。

「それにしても第六特務旅団は素晴らしい」

「女性ばかりと侮っておりますが、いや立派なものだ。我が師団も手本としたい」

「大佐殿の御活躍、きっとメデイレン公もお喜びでしょう」

大佐と俺は顔を見合わせ、そつと溜息をつく。

(素直に喜べないな)

(とにかく今は耐えましょう)

こんなことのために大事な仲間を四人も失ったのか……。

第47話「旅団葬」

【第47話】

帰国後に貴族社会の情勢を垣間見たことで、リトレイユ公が何を考えているかは何となくわかった。

俺たちは「キオニス遠征で死闘を戦い抜いて帰還した悲劇の英雄」に祭り上げられる。聞こえはいいが完全な道化だ。

とはいえ、敗戦の責任を押しつけられるよりは遙かにいい。

「受け入れるしかないのだろうな」

城塞都市ツイマーの城壁沿いに歩きながら、アルツァー大佐が溜息をつく。気が乗らない様子だ。

俺は参謀として隣を歩きながらうなづく。

「仕方ありません。ここまでは何もかもリトレイユ公の思惑通りです」

「ここまでは、か」

大佐は俺の言葉の意味を見抜いたようだ。

俺は補足説明する。

「はい。五王家と各師団にはそれぞれの思惑があり、潰されそうになれば当然抗います。リトレイユ公は反撃を受けるかもしれませ

どの王家も広大な領土と莫大な資産を持ち、私兵同然の軍隊を擁している。黙って潰されたりはしない。

「それにここから世論がどう転ぶかわかりません。一度動き始めた世論は、思わぬ方向に転がり始めます」

この場合の「世論」には普通の平民は入っていない。貴族や聖職者、それに豪商などの富裕層だけがこの国の世論を構成している。

大佐は城壁の日陰を歩きつつ、高い城壁を見上げる。

「あの女は斜陽の帝国を動かし始めたが、どこに動いていくかは彼女自身にも読めないということか」

「ええ、誰にも読めません」

「であれば、機に心じて敏に動くしかない。実家の伝手を頼って情報収集を強化しよう」

この人の場合、実家の伝手が強すぎる。帝国の国政を牛耳る五王家だもんな。

五王家は他の貴族と違って王家だから、君主としての格式を備えている。当然、自前の諜報機関や情報網も持っている。

そのとき、向こうからハンナ下士長が手を振った。

「大佐殿！ 参謀殿！」

城壁の外の一隅には広大な墓地が広がっており、そこに第六特務旅団の面々が集まっている。

今回の戦死者四名はここに埋葬される。既に遺体の損傷が始まっております、さすがに故郷のメディレン領まで運ぶ余裕はない。

俺と大佐は顔を見合わせ、手を振り返す。

「ああ、すぐ行く！」

フィルニア教安息派の作法に則って、四人の棺は墓穴に安置される。本来なら平民の兵士に棺桶を用意できないことも多いのだが、大佐が私費で調達してくれたのだ。

従軍神官がいないので、フィルニア教安息派の聖地・フィニス王国出身のラーニヤが儀式を代行する。彼女はもともと旅楽士で、旅先では葬送や慰霊にも呼ばれていたらしい。

「生命の太陽は地平に遠く、死の影は墓穴を覆う。我ら黄昏に汝らを送りて、安らぎの夜を願う者なり」

鼓笛隊長でもあるラーニヤは竖琴を奏で、静かな曲が墓地に流れる。

「我らの友、リザ・セイテス」

戦列歩兵の子だ。まだ若く、明るくて無邪気な少女だった。

喉に矢が突き刺さり、口と鼻から血を溢れさせて死んだ。

「我らの友、ピオラ・ローディ」

こちらも戦列歩兵だが少し年長で、夫の暴力から逃れてきたと聞いている。腹を切り裂かれて臓物が飛び出して死んだ。

夫の拳と騎兵の曲刀、どちらがマシだったのか俺にはわからない。

「我らの友、シューナ・ビヨルド」

輜重隊の子だ。争い事は苦手だったが、人一倍責任感が強くて勇敢だった。

キオニス騎兵に投網を投げつけようとして腕を切断され、のたうち回りながら失血死した。

「我らの友、レラ・シオン」

ジャラクード会戦で腹に矢を受け、三日間苦しみ抜いて死んだ子だ。他の三人と違い、もしかしたら救命できたのではないかと今でも悔いが残っている。

ラーニヤはよく通る美声でフィルニア教の弔辞を捧げる。

「慈悲深き神よ、我らの友のために安息の門を開き給え。我らの友にとこしえの安らぎを与え、再会の日まで守り給え」

安息の門か。死後の世界があるのか、一度死んだ俺にもわからない。

ただ転生はあるから、死んだら終わりとは限らないな。

彼女たち四名の魂がもつとマシな世界に転生し、幸せになることを願おう。

俺のいた世界もそんなに悪くはなかったので、良かったらあつちに転生してみんなでパフェとか食べてください。

葬儀の後はみんな休息をとるために街に出ていった。居酒屋で故人を偲んだり、戦いの疲れを癒したりするのだろう。

それを見送った後、大佐が俺に振り返る。

「何もかも貴官のおかげだ。部下たちの亡骸を荒野に晒すことなく、こうして帝国領で旅団葬をしてやれたのはせめてもの慰めだ。そもそも貴官がいなければ私たちは全滅していただろう。旅団長として貴官の功績を称える。ありがとう、クロムベルツ中尉」

俺は照れ臭くなり、制帽を目深に被る。

「いえ、小官は皆を死なせたくない一心でした。もちろん自分自身も含めて」

確かに他の部隊と違って、俺たちは旅団として戻ってこられた。しかも戦死者を全員ここまで連れ帰ってこられた。

それは生き残った俺たち自身にとって大きな救いだ。戦友が荒野で獣に食い荒らされる悪夢に苦しめられることはないだろう。

大佐は戦没者墓地を見回し、新しい墓がほとんど増えていないことに溜息をつく。

「あの会戦に参加した部隊の大半は誰も帰ってこなかった。わずかに帰還した者たちも、戦友を見捨てた負い目があるだろう」

キオニス遠征軍五万のうち、ジャラクード会戦に参加したのは三万。残り二万は途中で引き返しており、軍令違反にあたる可能性が濃厚だ。

会戦に参加した部隊のうち、ほぼ無傷で帰還できたのは第六特務

旅団だけだった。

大佐はつぶやく。

「生き残った者同士の間でも立場や意見は異なる。今後、あちこちで軋轢が生まれるだろう。下手な争いに巻き込まれると面倒だ」

俺は参謀として、言いくいことを言う。

「であればなおのこと、リトレイユ公の思惑に乗った方が良いでしょう。短期的には勢力争いの覇者になる可能性が大です」

「長期的には？」

「わかりません。リトレイユ公が獲得した優位をどこまで定着できるかで、長期的な予測は大きく変わります」

俺はそう答え、それから個人的な見解を述べた。

「ただリトレイユ公のやり方では帝国そのものが衰退します。何かする度に敵を作りますので、彼女が政治基盤をどれだけ固めたところで最後は破滅するでしょう」

ああいうタイプの謀略家は歴史上に何人もいた。

だがどれほどの英傑であろうとも、敵を増やしすぎると暗殺や失脚工作の標的になる。

「利己のために帝国の全てを蹂躪するリトレイユ公が、どこまで突っ走れるか。帝国そのものを破壊するまで走れるのなら、最後まで乗るのも一計かもしれませぬ」

大佐は俺の言葉をじっと聞いていたが、やがて前を向く。
「それはやめておこう。私はあの女が嫌いだ」
「奇遇ですな、小官もです」

俺たちは顔を見合わせてニヤリと笑うと、そのまま黙って歩き続けた。

* * *

城塞都市ツイマーから、へとへとになって旅団司令部に帰ってきた俺たち。

出迎えてくれたのは留守番役のロズ中尉だった。

「無事に帰ってきたな、ユイナー」

「無事じゃない。退却戦で騎兵に追い回されて死ぬかと思ったぞ」

するとロズはコーヒーを淹れながら呆れたように言う。

「キオニス騎兵の前に凶になって飛び出したら、普通はそのまま死ぬんだ。なんで生きてる？」

そうそう何度も死んでたまるか。一回死んだら十分だ。

俺はロズの淹れたいつも通り不味いコーヒーを懐かしく思いつつ、とりあえず言い返す。

「生き残れる可能性が最も高いプランを提案し、それがうまくいったからだ」

「さすがは参謀中尉殿」

ロズが笑う。

そして不意に真顔になり、こう言った。

「そんなお前にだけ言っておきたいことがある。ミルドール家はリトレイク公の尻尾をつかんだようだ」

危うくコーヒートを噴き出すところだった。なんだそれ。

ブルージュ公国が帝国のミルドール領に侵攻したとき、リトレイク公はブルージュ軍に攻城砲を供与した。

そのせいで最重要軍事拠点のゴドー要塞は陥落。第三師団は幹部将校多数を失い、現在も独立した作戦行動ができなくなっている。

ただ、リトレイク公が敵側に攻城砲を供与した事実は俺とアルツアー大佐しか知らない。

さすがにヤバすぎて公表も報告もできない。

俺は内心の動揺を隠しつつ、少し探りを入れてみる。

「尻尾か？」

「ああ。お前はもう気づいているだろう。ブルージュ公国軍の砲戦能力は異常だった。俺は砲戦の専門家だからわかるが、第三師団に大損害を与えたのは歩兵ではなく攻城砲だ」

ロズはカップを片手に窓の外を眺める。

「戦後、すぐさまミルドール家の諜報組織が調査を行った。だがブルージュ軍には大型砲の鑄造設備が存在しないし、技術者もいないらしい。じゃああの攻城砲はどこから湧いてきた？」

俺はとぼけてみる。

「転生派諸国から輸入した可能性は考慮したか？」

「もちろんだ。だがブルージュ公国は元々は安息派だ。転生派諸国からは白眼視されている。騎馬の輸入すら難儀しているのに大砲は無理だろう」

裏切り者の哀しい定めで、ブルージュ公国は隣国のアガン王国などとの関係があまり良好ではない。歴代のブルージュ公は転生派の中で立場を失うことを恐れ、シユワイデル帝国に対して執拗に攻撃を繰り返している。外交的なアピールだ。

ロズは俺をじつと見る。

「俺自身も多くは知らないが、ミルドール家は女狐の尻尾をつかんだらしい。だがまだ巣穴から引きずり出す方法が見つかっていないそうだ」

確実な証拠はない、ということか。

それからロズはまたいつもの調子に戻り、おどけて言った。

「ま、そんな訳だから旅団長閣下にはそれとなく伝えておいてくれ」

「おいおい」

「俺との雑談中、察しのいいお前は何か気づいた。義理堅いお前は俺の立場に十分な配慮をした上で、旅団長にも報告をする。情報の意図的な漏洩も隠蔽も起きていない。それでいいじゃないか」
なんてヤツだ。

ロズはミルドール公弟の婿であると同時に、メディレン家当主の叔母を上司に持つ。両家に顔向けできるよう、ギリギリのラインを攻めてきた。

しかも俺を巻き込んできやがった。そんな親友がいてたまるか。俺は溜息をつき、それからロズを睨む。

「貸しだぞ」

「もちろんだとも。有益な情報が得られた上に、俺個人に貸しまで作れて幸運だな。感謝しろよ？」

「もうちょっと申し訳なさそうな顔をしろ」

「わかったわかった。じゃあ後は頼む」

この野郎。

俺は冷えたコーヒーをぐいと飲み干し、それからカップを押しつける。

「これから旅団長閣下に報告してくる。お前はカップを洗っとけ」
さて、どう報告したものか……。

第48話「謀略の帝都」

【第48話】

俺が旅団長室に入ると、当番兵の女の子がカップを片付けているところだった。誰か来ていたらしい。

「すみません、出直しましょうか？」

「いやいい。重要な連絡がある」

「実は小官もです。ここ座りますよ」

俺がソファに腰掛けると、当番兵の子が気を利かせて紅茶を運んできてくれた。

「どうぞ、参謀殿」

「ありがとう、悪いな」

するとその子はお盆を手に照れくさそうな顔をした。

「いえ、さっきのお客様が早く帰られたので、お出しする紅茶が余ってしまったんです」

「なんだそうか。では貴官の手間を無駄にしないためにも、ありがとうございました頂くよ」

当番兵の子が退出した後、ちっこいアルツァー大佐が拗ねた顔をして腕組みしていた。

「階級に関係なく、機会は平等にあるべきだと考えている」

「なんです急に」

「どうして貴官は肝心なところで察しが悪くなるのか」
何言ってるんのこの人。

少し考え、言わんとする意味を理解する。ああ、そういうことか。
「お言葉ですが、それは考えすぎでは？」

「貴官は我が旅団唯一の独身男性で、温厚で誠実で有能だ。見た目もいい」

「いいですか？」

「かなりいいぞ」

なんで力説するんだ。

このままだと話が全然先に進まないの、俺は大佐に話を促す。

「それで閣下、連絡とは？」

「ああうん、まあそうだな。そちらが先か」

アルツァー大佐は咳払いし、ソファに腰掛ける。

「リトレイユ公の政治工作が激しくなってきた。彼女は国内を二分するつもりだ」

「二分……」

俺は少し考え、ハッと気づく。

「ジヒトベルグ家、それにミルドール家を帝国の敵に仕立て上げるつもりですか？」

「そうだ。さすがに察しがいいな」

喜んでる場合じゃないよ、大佐。

大佐はさらに続ける。

「ブルージユ公国相手に失態を演じたミルドール家。キオニス連邦王国への遠征で大敗したジヒトベルグ家。彼女は両家を『五王家の恥』『帝国の敵』と強く批判しているらしい」

「ジヒトベルグ公を元帥に推薦しておいて何を言ってるんですか、彼女は」

「そこを掘り返すと皇帝陛下下の任命責任が浮上するからな。我がメデイレン家としても反論しづらいぞうだ」

序列第二位のジヒトベルグ家と、第三位のミルドール家。

この両家が悪者扱いされており、残りは序列首位の帝室と第四位のメデイレン家、そして第五位のリトレイユ家だ。

「閣下、この流れだと皇帝陛下はリトレイユ家を重用するのでは？」
「そうだな。序列ではメデイレン家の方が上だが、当家はここに至るまで何もしていない。日和見主義もここに極まれりだ」

大佐はそう言ってから、フツと苦笑する。

「そのせいか最近の当主殿は私に優しくしてな。元々私には何かと便宜を図ってくれていたのだが、今は私を頼りにしているようだ」

「対ブルージユ防衛戦、対キオニス遠征の両戦役で武功がありますからね、閣下は」

「私の武功ではない。貴官の献策と献身あってこそその勝利だ」
褒められると嬉しいけど照れくさいな。

「小官の提案をここまで認めてくださるのは閣下だけです。小官にとって閣下は帝国随一の名将ですよ」

「褒めたつもりが褒められてしまったな。だが貴官にそう言われれば悪い気はしない」

大佐はニコツと笑い、そして話を元に戻す。

「ともあれ、我々の思惑とは裏腹に我々は政争の具となった。この陰謀劇の舞台から降りることはできないだろう」

「確かに」

リトレイユ公にしてみれば、俺たちなんか「生き残ればまた使える」程度の道具に過ぎなかっただろう。

だが俺たちはしぶとく生き残り続け、リトレイユ公にとって役立つ道具になった。

と同時に、ミルドール家やジヒトベルグ家、そしてメディレン家にとっても無視できない存在になっている。何せ戦争には負けていても俺たちの旅団だけは勝っているのだ。

「閣下の発言ひとつで帝国の勢力図が一変しますよ」
「嬉しくないな」

大佐は頭を掻き、それから俺を見た。

「まあいい。とにかく面倒事が増えるぞという連絡事項だ。私の方は以上だが、貴官の用件は何だ？」

「ああ、そうでした」

俺はロズ中尉から聞いた話を大佐に報告する。

「ミルドール家はリトレイユ公への反撃を考えているようです。ブルージュ侵攻で、例の大砲の件を嗅ぎつけた模様です」

「さすがはミルドール家というべきだな。黙って殴られているばかりではない」

大佐はそう言っ腕組みをする。

「どちらが勝つ？」

「まだ何とも言えません。どちらを勝たせたいですか？」

「ミルドール家に恨みはないし、ミルドール家一門衆のシユタイア
中尉は大事な部下だ。それにリトレイユ公が勝つ未来は見たくない」

そりゃそうだよな。

「では水面下でミルドール家に協力しますか？」

「そうだな……いや待て」

アルツァー大佐はにんまり笑う。ちよつと怖い笑みだ。

「方針としてはミルドール家に与するが、直接のやり取りはやめておく。リトレイユ公がそれを警戒していないはずがないからな」

「なるほど」

リトレイユ公は他人を陥れる策謀に長けている。ということはもちろん、自分を陥れる策謀に対しても敏感だろう。

大佐はこう続ける。

「そちらの工作は私が直接行う。高度に政治的で……あと、貴官のような正直な男には向いていない任務だ」

「正直ですか」

別に正直ではないと思うけど、正直だと言われたらやっぱり嬉しい。人間、正直が一番だ。

大佐は妙に優しい顔で俺を見つめる。

「貴官は己の内の正義に反することはできないだろう？　だが私はできる。貴官は正直なままでいてくれ」

「ありがとうございます、閣下。今後とも正直な参謀としてお役に立ちます」

正直な参謀ってあんまり強そうじゃないけど、大佐の厚意を無下にはしたくないからな。

このやり取りのあった数日後、俺と大佐に出頭命令が下った。

それも師団司令部や陸軍総司令部じゃない。

帝都のビオリユア大宮殿。皇帝の御座所であり、シュワイデル帝室の中枢部でもある。

そして魑魅魍魎が蠢く陰謀の巣窟でもあった。

俺が何をしたっていうんだ。

アルツァー大佐は慣れた様子でコートを着込みながら言う。

「どうせキオニス遠征の件だろう。査問会でなければいいのだが」

「冗談じゃないですよ。小官まで出頭させる意味がわかりません」

すると大佐はニヤリと笑う。

「出頭命令がなければ私一人で行かせたか？」

「それは……まあ、参謀としてはお側にいるべきかと思いますが」

なんでもかんでも相談してくるからな、この人は。

「閣下は小官に髪結いのリボンの色までお訊ねになりますので」

「何を質問しても誠心誠意考えてくれるのが嬉しくてな。このコートを新調したのだがどう思う？」

ひどい。

俺はコートをじっと見つめ、それから答える。

「よくお似合いです。閣下は厚手のコート、特にファーのついたものがよくお似合いになります」

「そうか？」

ふふつと笑う大佐。

それから急に真顔になる。

「待て、それはもしかして『もこもこに着込んでいると子供みたいだからか？』」

「はい」

中学生みたいで可愛いんだ。

大佐は急に不機嫌になり、恨めしそうな顔で俺を睨む。

「誠心誠意考えたからといって、いつも望む答えをくれる訳ではなさそうだな」

「申し訳ありません」

「おい、笑うな」

「可愛いと思うんだけどな。」

* * *

俺たちはシュワイデル帝国の中心部、帝室直轄領のど真ん中にある帝都ロツツメルへと到着した。偵察騎兵の子たちと歩兵科の選抜射手たちが数名、護衛として同行してくれる。

留守番はいつものようにロズ中尉だ。将校が留守番をしてくれるのはありがたい。

「帝都ロツツメルは初代皇帝が最初に獲得した領地だ。反乱鎮圧で武功を挙げ、五人の仲間と共にこの地を拝領した。当時は何も無い寒村だったと聞く」

馬車にガタゴト揺られながら、大佐が女の子たちにそんな話を聞かせている。

「その後もさまざまな動乱を見事に立ち回り、わずか一代で大帝国を築くまでに至った。五人の仲間には広大な領地を与えて王にしてやったが、その一人が我がメディレン家の初代当主という訳だ」

成り上がり者の皇帝が頼りにし続けたのが、五人の仲間たちだ。彼らは皇帝の期待に応え、大帝国の礎となった。

それだけに皇帝の信頼は篤く、彼らは家臣ではなく盟友として、「王」を名乗ることを許され、帝位継承権も与えられている。

まあ数十年前にブルージュ家が裏切ったけど。

アルツアー大佐はメディレン家の先々代当主の実子。本物のお姫様だ。

馬車に随行する旅団の子たちも、そんな大佐にメロメロらしい。

「由緒正しい家柄なんですネ。大佐殿、カッコイイ！」

「そうだろう、そうだろう」

「そのコートももこもこで可愛いです！」

「うんうん……うん？」

尊敬のされ方に首を傾げたアルツアー大佐だったが、彼女は俺を見る。

「ここから先は誰が敵で誰が味方かはわからない。そして敵味方はすぐに入れ替わる。肝に銘じておいてくれ」

「承知しております」

やだなあ。

第49話「御前会議（前編）」

【第49話】

帝都ロツツメルに来るのは久しぶりだ。ここには帝国領からいろんな品物が集まってくる。品質も悪くないので、銃でも医薬品でも役立つものが仕入れられるだろう。

だが俺たちの馬車はそそくさと宮殿に直行する。寄り道しないよう厳命されていたからだ。

さらに宮殿の一室に全員押し込められ、廊下には近衛師団の兵士たちが見張り番として立った。外部との接触を完全に断たれた形だ。客室は立派だったし紅茶と茶菓子まで出てきたが、どうにも居心地が悪い。

「まるで査問会ですね」

素人にもわかるほどの高級で美味しい紅茶を飲みつつ、ガレットのような焼き菓子をボリボリ食べる俺。銃も預けさせられたし、今の俺にできることは何も無い。

すると大佐が事も無げに言う。

「査問会だとも」

おいおい、ちょっと待ってくれ。

「我々のですか？」

「いや、違う」

首を横に振った大佐は、ふと笑顔になる。とても意地悪で楽しそうな笑顔だ。

「まさか貴官、柄にもなく怯えているのか？」

「もともと小官は臆病者ですよ」

大佐はクスクス笑っている。

「心配するな、吊し上げられるのは我々ではなくジヒトベルグ公だ。彼の責任を問う会議だよ」

「あの爺さんは死んでるじゃないですか」

死者の責任を問うために旅団長クラスを呼び出してる時点で、この国はもうダメなんじゃないかなという気がする。俺はともかく大佐はそんなに暇ではない。

「どうせリトレイク公が政治的に利用する気なんでしょう」

大佐は紅茶を優雅に飲み、高貴な香りに目を細めつつうなずく。

「そうだ。あの香水臭い女の企みに乗ってやろうと思っただけ。ただし最後まで付き合う気はない。途中で降りて、あの女の破滅を見届けてやろうと思う」

「小官も賛成です。ただし降りどころを見誤れば破滅します。小官にはそういった政治力がありません。閣下の嗅覚が頼りです」

「そこは私に任せてもらおう。貴官は知勇兼備の名将だが、貴族社会の人脈が乏しいのが弱点だな。まあ、リトレイク公はそこまで見

極めた上でよこしたのだろうか」

アルツァー大佐はそう言って苦笑する。

「政治力のない貴官がリトレイユ公への反撃を企てても無駄だし、貴官自身がそれをよく理解している。安心して私の参謀によこせる、という訳だ」

「大変不本意ですが、リトレイユ公の見立ては正しいと言わざるを得ません。私は彼女が嫌いですが、殊更に敵対しようという気はありませんよ」

「この世界で「力のある貴族」というものがどれほど恐ろしいか、よくわかってるつもりだ。

マフィアのボスに司法権と立法権をセットで与えたような存在だからな。どんな無法も合法化してくる。

大佐はティーカップの繊細な絵付けをしげしげと見つめつつ、こう答える。

「もう少し無茶をしてもいいのだぞ？　そのために私がいる。後始末は任せておけ」

大佐はそう言って薄っぺらい胸を張り、ドンと叩いてゲホゲホむせた。

* * *

そして俺たちは宮殿の極秘会議に招集される。

俺は同席する必要がないと思うんだが、大佐が「お前がいなかったら話にならないだろう」としつこく言うので、しぶしぶ出席した。

しかも大佐の後ろで立っているつもりだったのに席まで用意されており、大佐の隣にひっそり座る羽目になる。

こんなに座り心地の悪い椅子は前世以来だ。

「揃いましたね」

会議の司会役は呆れたことにリトレイユ公だ。とんだ茶番だぞ、これ。

早くも帰りたくなってきたが、出席者の顔ぶれが尋常ではない。

まず第一師団の将帥たち。彼らは近衛師団でもあり、皇帝直属の軍隊だ。

それと帝国フィルニア教団の高位神官。法衣をまとった法学者らしき者もいる。

他にも帝室紋章官や侍従武官など、皇帝に仕える官僚たちも出席していた。

その中に居心地悪そうにしているのが、貴族の正装をした三十代半ばの男性だ。上着にジヒトベルグ家の紋章がある。それも当主の紋だ。

先代がキオニス遠征で戦死したので息子が相続したそうだが、彼がそうらしい。

要するに彼が今回の被告人代理、という訳だ。

彼もかなりの豪華メンバーだが、極めつけは上座に鎮座している人物だろう。

シュワイデル帝国皇帝、ペルデン三世。俺たち帝国軍人が忠誠を捧げている……ということになっているおっさんだ。とりあえず一番偉い。

あまり賢そうにも覇気がありそうにも見えなかったが、そのペルデン三世が口を開く。

「ミンシアナよ、後は任せる」

誰のことだ？

一瞬混乱したが、そういえばリトレイユ公のファーストネームがそんなのだった気がする。

ファーストネームで呼ばれているということは、リトレイユ公が皇帝にかなり接近しているとみていい。こりゃ厄介だな。

リトレイユ公は皇帝に恭しく一礼し、それから一同に向き直る。

「キオニス遠征が失敗に終わったことは、帝国にとって悲しむべき事実でした。本来ならば交易都市ジャラクードを占領し、帝国領を拡大する第一歩となっていたはずなのにです」

全員の視線がジヒトベルグ公に注がれる。俺の席より居心地悪そうだな、あの席。

さすがに皇帝の面前で亡父の名誉を傷つけられては黙っていられたなかったのだろう。ジヒトベルグ公が口を開く。

「お言葉ですが……」

「陛下の御前ですよ、ジヒトベルグ公」

リトレイユ公がやんわりと、だが鋭く制止する。

皇帝はといえば、冷淡な表情で知らん顔をしているだけだ。おいおい、ジヒトベルグ家は帝室に続く序列第二位だろ。助けてやれよ。俺は先代のジヒトベルグ公が嫌いだったが、さすがにちよつと気の毒になってくる。彼の息子には何の罪もない。

リトレイユ公は一方的に会議を進行していく。

「キオニス遠征軍の総兵力は六万二千。そのうち帰還した兵は二万足らずに過ぎません」

なんか数字盛ってない？ たぶん遠征軍は五万ちようどぐらいだぞ。

「帝国軍の最精鋭が三分の一以下に減らされてしまいました。重大な損失です」

別に最精鋭じゃないだろ。寄せ集めだったし。

ジヒトベルグ家に責を負わせるために、リトレイユ公は無理矢理に事実をねじ曲げている。

とはいえ、平民の下級将校に過ぎない俺は黙っているしかない。

……と思っていたら、急に話がこっちに向いてきた。

「この損失について検証するため、第六特務旅団の旅団長と参謀に

同席を願いました。彼女たちはジャラクード会戦に参加し、無事に帰還できた数少ない部隊です」

本当は「数少ない部隊」ではなく「唯一の部隊」なんだが、どうせまた嘘の報告をしてる部隊がいるんだろう。もういいや。

「メデイレン旅団長閣下。この悲劇の惨敗がなぜ起きたのか、実際に最前線で戦った将校として見解をお願いいたします」

リトレイク公にそう言われたアルツァー大佐だったが、彼女は涼しい顔をして首を左右に振った。

「私は軍の統制が主な役目であり、軍事作戦の専門家とは言いがたい。それは私の参謀に質問してくれ」

ちよつと待つてくれよ。ここで俺に振るの？ 確かに帝国軍の参謀は貴族将校の軍事顧問だけだ。

みんなが俺を見ている。平民出身のしがない中尉を。

だからこういうのは事前に根回しとか打ち合わせしようよ。……

いや、それをさせないために外部と接触させなかったのか。

まあしょうがない。俺は起立し、慎重に言葉を選びながら発言する。

「では小官が御説明いたします。ジャラクード会戦敗戦の原因分析、ということでしょうか？」

「はい、それで結構です」

リトレイユ公が「にまあ」と笑っている。よくあんな笑顔ができるな。

だが今はまだ、彼女の掌で踊る人形でいなくてはならない。俺は彼女が気に入るような説明を始めた。

作戦計画そのものに無理があったことを指摘すれば、皇帝の不興を買う。そこは避けねばならない。

じゃあもう戦術的敗北ということにしてしまえ。

「先代ジヒトベルグ公が会戦のために編み出した陣形……実態は古くから存在する斜線陣ですが、この陣形に大きな欠陥がありました。背後に回り込まれる可能性があったにもかかわらず、それを防ぐための騎兵戦力をジャラクード攻略に送り出してしまったのです」

皇帝の軍事的知識がどの程度のものかわからないが、ド素人だと思っことにして極力わかりやすく説明する。大事なのは皇帝に与える心証だ。

「その結果、我が軍は斜線陣の後背に回り込まれてしまい、迎撃もままならないままに本陣が急襲を受けました」

リトレイユ公が素早く口を差し挟む。

「はい、結構です。御苦労様でした」

この証言を得たかったただけか。俺は小さく溜息をつきながら着席する。溜息はせめてもの抗議だ。

リトレイユ公は得意げにまくしたてた。

「お聞きになったように、先代ジヒトベルグ公の作戦立案と指揮に

は致命的な欠陥がありました。これが敗戦の全てです。そうですね？」

いや、どつちかというキオニス領に侵攻をかけたことが致命的な失策だったのだが……。しかし俺に何も言わず、リトレイユ公はどんどん話を進めてしまう。

「皇帝陛下が御命じになられたキオニス征伐そのものに無理がないことは、各師団の参謀部が結論づけています。ジヒトベルグ家当主が元帥を務めるのも、キオニスと国境を接する領主ですから当然でしょう」

現ジヒトベルグ公が何か言いたげにしているが、皇帝がじろりと睨んだらうつむいてしまった。気の毒すぎる。たぶん俺、前世であいつの見たことあるぞ。

「果たすべき使命を果たせなかったジヒトベルグ家には、相応の責を負って頂かねばなりません。そうですね、陛下？」

皇帝は大儀そうにうなずいてみせる。何でもいいから早く会議を終わらせたいたい様子だ。その点だけは俺も同感だ。

「先のユイナー・クロムベルツ参謀中尉の分析は、帰還した騎兵たちの証言と一致しています」

帰還した騎兵？

リトレイユ公は俺をチラリと見て、薄く笑った。

「ジヒトベルグ元帥が出撃させた騎兵たちはジャラクード市街で壊滅的な損害を受け、生存者は捕虜となりました。強制的に邪教に改宗させられ、額には入れ墨で邪教の紋章を彫られました。その後、『勝者の慈悲』として送り返されてきたのです」

一見穏当な処分に見えるが、たぶん戦死しての方がマシな扱いだと思う。額に異教の聖印を彫られた職業軍人なんて、これからどうやって生きていけばいいんだ。

リトレイユ公は彼らには全く同情していない様子で説明を続ける。

「帰還した騎兵たちは皆、ジヒトベルグ元帥の采配の拙さや将としての無能ぶりを証言しています。皇帝陛下をお守りする近衛騎兵たちまでそのような扱いを受けたこと、ジヒトベルグ家はどのようにお考えですか？」

まだ若いジヒトベルグ公は唇を噛み、自分よりもさらに年下の小娘相手にうなだれるしかない。

「まことに……面目次第もなく……」

こっちの胃がキリキリ痛んできたんだが。

しかしリトレイユ公はさらに追い打ちをかけていく。

「先代のジヒトベルグ公は陣中でも軍務を怠り、美女を侍らせて酒池肉林に興じていたと報告されています。これはもう帝室への反逆行為と受け止めるしかないではありませんか？」

これにはさすがのジヒトベルグ公もキツと顔を上げた。

「そんな！？ 父上はそのような人間ではありません！ 讒言です！」

「おやおや、見苦しい言い訳を。現地で戦った者たちがそう報告しているのですよ？」

もう見ていられない。

俺は覚悟を決めて起立し、リトレイユ公と皇帝に敬礼した。

「小官も現地で戦った者として、先代ジヒトベルグ公について証言したく思います。よろしいですか？」

「あら、どうぞ？」

リトレイユ公が楽しげにうなずいたので、俺は皇帝に奏上する。

「戦死されたジヒトベルグ元帥閣下は部下の進言を聞き入れぬ頑迷な御方であり、机上の空論で兵を論ずる将でした。我が旅団は女性ばかりであり、そのことを侮辱されたこともあります」

まあこれは事実だからいいだろう。

だが俺は語気を強めて続ける。

「ですが閣下の周囲に美女など一人もおりませんでしたし、閣下が酒や美食を嗜んでおられるところも一度も見ておりません」

リトレイユ公があっけにとられた顔をしている。いい気味だ。いやあ、久々にスカツとしたな。前世分も含めて。

俺はリトレイユ公をほつといて、皇帝とジヒトベルグ公に向き直る。

「元帥閣下はジャラクード会戦の決着まで軍務に精励され、勅命を果たすために文字通り死力を尽くされました。実戦経験は乏しくとも、元帥閣下は忠勇なる帝国軍人です」

「なっ……!!?」

リトレイユ公が絶句した。

第50話「御前会議（後編）」

【第50話】

戦死した先代のジヒトベルグ公に対する事実無根の誹謗中傷。こついった卑劣なやり方は、俺が一番嫌いなもののひとつだ。それにリトレイユ公の悪巧みに乗るとはいえ、こんなことをしていたら後々まずいことになる。

俺はリトレイユ公がこの先何十年も安定した政治ができるとは思っていない。彼女はいずれ破滅する。

そのときに彼女の手下だと思われたままだと、俺たちは帝国内に居場所がなくなってしまふ。

一線は引いておかねばならない。

だから俺はリトレイユ公に言ってる。

「元帥閣下の作戦立案や戦場での指揮に不備があつたのは事実ですが、元帥閣下が忠実に職務を遂行なさつたこともまた事実です。あれが『悲劇』の惨敗なのであれば、悲劇の戦死を遂げられた方を侮辱するようなことはできないはずですよ」

ジャラクード会戦の敗北が「悲劇」だというのは、さつき彼女自身と言つたことだ。

俺は悲劇でも何でもないと思つているが、リトレイユ公は悲劇だと言ってるんだから自分の発言には責任を持ってもらおう。

リトレイユ公はしばらく黙っていたが、俺を見て物凄い笑顔になった。美人の笑顔は迫力があるなあ。

「え……ええ、その通りです。悲劇ですな、本当に」

何だか含みのある言い方だ。今この瞬間、彼女の「いつか殺す」リストに俺の名前が記入された気がする。怖い。

一方、ジヒトベルグ公は目を輝かせて俺を見つめていた。敵だらけの会議で吊し上げられているところに、思わぬ味方が現れたのだから当然だろう。

でもそんな熱い視線で俺を見ないでくれ。ハグされそうで怖い。

リトレイユ公はどうかこうにか自分のペースを取り戻す。

「では、この件は事実無根の噂として処理すべきでしょう。ジヒトベルグ公の名誉を守らねばなりません。それはそれとして、ジヒトベルグ家には責を負って頂きますが。いかがでしょうか、陛下？」
こいつ凄いぞ。やはり希代の奸雄というべきか。

するとようやくやく皇帝が口を開いた。

「キオニスとの戦は継続せねばならぬ。だがジヒトベルグ家に荷が重いのであれば、その任はリトレイユ家にも手伝わせよう。所領の一部をリトレイユ家に割譲し、第五師団の兵を置くがよい」

所領没収。領主にとってはメンツと収入源の両方を奪われる最大の屈辱だ。

さすがにこれは呑めないだろうと思ってジヒトベルグ公を振り返ると、彼は深々と頭を下げていた。

「仰せのままに」

彼が今、どんな表情をしているのか俺にはありありとわかった。父親を失った心の傷も癒えていないだろうに、こんな惨めな扱いを受けて辛いだろっな。

だが勅命は勅命。俺たちはあのパツとしないおっさんに忠誠を誓う帝国貴族と帝国軍人だ。俺も無言で頭を下げる。

ああ、退職してコーヒー屋でも開業したい。いやダメだ、ロズのヤツが入り浸る。

皇帝の沙汰が下り、こうして御前会議は無事に幕を下ろした。

* * *

「しばらくはあの女の掌の上で踊ると言っただけなのに、まったく無茶をする」

控え室に戻ったアルツァー大佐にそう言われ、俺は頭を下げた。浅慮だったのは間違いない。

「申し訳ありません、閣下」

「参謀が作戦を守らないのは問題だ」

「返す言葉もありません」

すると大佐はニヤリと笑った。

「楽しかったか？」

「ええ、とても」

スカツとしたよ。前世でもあれぐらい言えたら気楽だったんだけどな。

大佐はおかしそうに笑いながらティーカップを置く。

「私は貴官の人柄や考え方を十分に理解しているつもりだが、それでもわからない部分はある。あの会議では貴官の『地金』を見てみたかった」

俺のメツキを剥がしてみたかった、ということか。

「で、いかがでしたか？」

「参謀なのが信じられないぐらいに、貴官は実直で不器用な男だな。今までよく生き延びてこられたものだ」

褒めてるの、それ？

大佐は困ったような、それでいて妙に嬉しそうな顔をしている。

「貴官は祖国や帝室に対する忠誠心を持っていない。貴官は『自分の中の正義』にしか忠誠を誓っていないのだ。貴官が士官学校や第五師団で冷遇されていたのは、彼らが貴官の中に反逆者の素質を感じたからかもしれない」

褒められてはいないらしい。

「だが貴官が世渡り上手のつまらん男ではなかったのが嬉しい」

どっちなんだよ。

「正直、リトレイユ公にあれだけ言われて黙っているような男なら、私は貴官との付き合い方を考え直していただろう。有能ではあるが仕事以外では親しくなれない男だ、とな」

結局どっちが正解だったんだ。どちらを選んでも仙人にしてもらえない杜子春の気分だぞ。

俺がよっぽど変な顔をしていたのだろう、アルツァー大佐は謝る。

「すまない、気を悪くしただろうな。だが貴官がどちらを選んだとしても、その判断を尊重して今後の動きを決めるつもりだった。それぐらいの政治力は持っている。安心して無茶をしろ」
「頼もしい限りです」

要するに俺の向き不向きを考慮するため、大まかな方針を俺に決めさせてくれたということなんだな。ありがたい上司だ。一緒に仕事できて嬉しい。

仕事……。そういえば、この人さっき何て言った？

俺が大佐の発言を思い返す前に、彼女が口を開く。

「そして今後の動きだが、私の読み通りなら貴官にこれを渡しておいた方がいいだろう。すぐに役立つはずだ」

蜜蝋の封が推された封書を渡された。

「閣下、これは……？」

質問しようとしたとき、ドアがノックされる。

「クロムベルツ中尉殿、御面会です。こちらにお越しを」
誰？

廊下に出た俺は、警備の近衛兵がいなくなっていることに気づく。代わりに軍服姿の若い男が立っていた。さっきの声の主だろう。制服の色が違うから正規の帝国軍人ではなく、他家の侍従武官だ。

そしてもう一人。

さっき会議でさんざんな目に遭わされていた、ジヒトベルグ公だ。

彼は侍従武官に無言で目配せする。彼は俺と主君に敬礼して、離れた場所に引き下がった。

がらんとした廊下で、俺は帝国貴族筆頭の男と二人きりになる。

ジヒトベルグ公は少し気まずそうな顔をしていたが、意を決したように口を開いた。

「先ほどの会議、亡父の名誉を守ってくれたことに礼を言う。その、他家の平民との私的な会話は当家のしきたりに反するのだが、どうしても礼を言いたかった。父上もお許しくださるだろう。ありがとう、クロムベルツ中尉」

礼を言いに来たにしては随分な言い草だが、大貴族からすれば平民なんか虫と一緒にだからな。貴族は立場がややこしいので怒る気にはなれない。

俺は敬礼で応じたが、俺にも俺の立場があるので一言言わせてもらおう。

「元帥閣下は経験の浅い将であるにもかかわらず、参謀たちの意見を聞き入れずに大敗北を招きました。三万の兵が散ったのは、元帥閣下の責と認めざるを得ません。小官も四名の部下を失いました」

ジヒトベルグ公は俺の無礼ともいえる言葉に腹を立てる様子もなく、じつと聞き入る。

「すまん。父上は昔から頑固だな。嫡男の私の言葉さえ聞いてくれなかったのだ。専門家の言うことは聞くようにと、あれほど申し上げたのに」

あの爺さんはどうしようもなかったけど、この人は割とまともな感じた。先代には悪いけど、代替わりして良かったんじゃないだろうか。

「正直、父上は父上自身の手で人生に幕を下ろしてしまったのだと思う。その巻き添えが三万の将兵というのは、私にも予想できなかったことだが……」

ジヒトベルグ公はうなだれ、それから顔を上げる。

「いずれにせよ、償いはせねばならぬ。まずは貴官からだ。貴官がいなければ当家は陛下の御前で面目を失し、どのような沙汰が下っていたかわからん。所領の一部没収程度で済んだのは貴官のおかげだ。何よりも父上の名誉を守ってくれた」

「それは感謝されることはありません。小官はただ、亡くなった

者に対する礼儀を貫いたまです。それに事実にも反することが罷り通れば帝国が崩壊してしまいます」

先代のジヒトベルグ公のことは嫌いだ、嫌いなヤツだからこそ最低限の礼節は守りたい。あくまでも俺の都合だ。

しかしジヒトベルグ公はひどく感心した様子で俺をしげしげと見つめた。

「皇帝陛下の御前で、しかもあのリトレイユ公の不興を覚悟してそれが言える男など、私の家臣には一人もおらんよ。予想以上に豪傑だな。どうだ、第二師団にこないか？ 中尉にしておくのは惜しい。大尉、いや少佐として迎えるぞ」

この人、本気で言ってるぞ。

「佐官では不満か？ なら私の侍従武官はどうだ？ 軍の指揮系統からは外れるが、師団長とも対等に話せる身分だ。当家の軍務を補佐し、私や息子たちに軍学の教授をしてくれ」

やばいぞ、やっぱりハグされそうな勢いだ。

「これは私の都合だが、他家の平民に借りを作つたままでは当主として面目が立たない。しかも貴官は肝の据わった男だ。当家に欲しい。もちろん貴官の旅団長には話を通す。どうだ？」

俺は根がお人好しなので、こつこつと熱心に口説かれると断りづらいな。

だが凄く申し訳ないのだが、申し出は断らせてもらう。

「小官のような者に過分なお申し出、痛み入ります。ですが小官は

大恩ある上司を置いてはいけません。どうか御容赦を」

「そうか……。いや、そうだな。すまない。借りを返すつもりが逆に困らせてしまったか」

ジヒトベルグ公は頭を掻き、それからひどく人間的な親しみのある笑みを浮かべた。

「貴官が他家の人材なのがつくづく惜しい。だが借りは返したい。何か望みはないか？」

「それでしたら、城塞都市ツイマーの共同墓地に私の部下四名が眠っております。彼女たちの墓に花でも手向けてやってください」

さすがにジヒトベルグ公本人が墓参りすることはないだろうし、献花したところで死んだ人間が蘇る訳でもない。生者は生者のために生きるべきだと思う。

だが一度死んだ人間としては、やはり死者を忘れてしまうことはできない。

ジヒトベルグ公はしばらく驚いたような顔をしていたが、やがて厳肅といってもいい面持ちで重々しくうなずいた。

「なるほど、貴官は死者の名誉を重んじる男なのだな。わかった、私自らが花を手向ける。貴官と彼女たちの名は当家の公文書に残し、敬意を払うよう末代まで伝えよう。ジヒトベルグの家名とフィルニアの神に誓う」

「感謝いたします」

俺は敬礼し、それから大事な用事を思い出す。

「これをお渡しするよう、大佐から頼まれておりました」
「ん？ これは……」

俺の差し出した封書を見て、ジヒトベルグ公は顔色を変えた。

* * *

『逆襲の狼煙』

ジヒトベルグ公は廊下を歩いていく。側近の侍従武官が影のよう
に後をついてきた。

「御前、ずいぶん無茶をなさいますね」

「どうしても彼に礼を言いたくてな。あの男は知謀だけでなく、人
徳と度胸まで備えた逸材だ。第六特務旅団が生還したのも道理だ。
部下に欲しかったな」

「でしたら封書は受け取っておいた方が良かったのではありません
か？」

「ああ、そのことか」

ジヒトベルグ公は歩きつつ、周囲に誰もいないのを確認する。

「あれはそういうものなのだよ。開封したところで時候の挨拶文し
か書いていない」

「ではいったい？」

側近の困惑ぶりにジヒトベルグ公は苦笑した。

「封の蜜蝋には妙なズレ方をした印章が捺してあったが、その印章
の傾きとズレに秘密がある。五王家でも知っている者の方が少ない

ぐらい、古い古い暗号だ」
「よく」存じて……」

「さすがに当主が知らんのでは話にならんからな。嫡流は覚えるべきことが多すぎる」

ジヒトベルグ公は溜息をつくと、声を潜めて続けた。

「だが、おかげで次にやるべきことが見えてきた。ただちに本領に戻るぞ」

「かしこまりました。……何をなさいますか？」

「ミルドル家に使いを出す。詳しい事情はまだわからんが、当家の古き盟友が事態を打開する鍵を握っているようだ」

アルツァー大佐の封書には、大きく右に傾いた印章が下にはみ出す形で捺されていた。

この印章のズレは通常、以下の意味を示す。

盟友を頼れ。

第51話「忍び寄る影」

【第51話】

俺は控え室に戻って大佐に報告する。

「手紙は受け取ってもらえませんでした」

「ではおそらく、こちらの意図は伝わったな」

「どういう意味？」

俺は不思議に思ったが、少し考えて何となく理解する。

「もしかして手紙の中身は重要じゃないんですか？」

「そう、その通りだ。まったく貴官は読みが鋭いな」
嬉しそうだなあ。

大佐はソファに深々と腰掛け……軽いから深々とはいかないのだが、とにかく寛ぎながら笑う。

「手紙の中身はダミーだ。蜜蝋の封をする印章に秘密がある。傾きとズレが暗号になっているんだよ。平民はもちろん、貴族でも五王家の嫡流周辺しか知らないだろう」

「そういうことでしたか」

「そういや大佐はメディレン家の先々代当主の実子だ。嫡子ではないが、父親から教えてもらっていたのだろう。」

それにしてもうまい方法だ。

重要な手紙ほど、敵の手に渡ったときは逆に窮地を招いてしまう。だから敵には気づかれず、味方にだけ情報が伝わるようにあれこれ知恵を絞ることになる。

そこで手紙の文面には意味を持たせず、蜜蝋の封印などに情報を持たせた訳だ。

これなら敵の手に渡っても一般人には理解できないし、仮に内容を知られても「蜜蝋の封印にそんな意味がある訳ないでしょう」としらばつくれることができる。

なんだか忍者みたいだ。

大佐はチラリと俺を見る。

「蜜蝋の封印については家中でも極秘扱いで、親友や譜代の家臣すら一度も教えたことはない。今回は貴官を特別に信用して教えた」「光栄です。もちろん誰にも口外しません」

「うん。……もう少し喜んでもいいんだぞ?」

「大変喜んでいます」

大佐がなんだか不満そうな顔をしている。俺はどんな顔をすればいいんだ。

話題を変えよう。

「それで閣下、ジヒトベルグ公に何を伝えたんですか?」

「ミルドール家と連携するよう勧めた。あそこはリトレイユ公がブルージュ公国と内通している事実をつかんでいる。ジヒトベルグ家

と情報共有すれば政治工作は格段に進むだろう」

なるほど、自分は動かずに反リトレイユ勢力を結集させる訳か。

「閣下はあくまでもリトレイユ公の手駒のまま、という感じですか」

「そうだな。彼女は味方が少ない。私が協力の姿勢を見せている限り、あからさまな敵対はしてこないだろう。打算的で読みやすい」

大佐はそう言い、またしてもフツと笑った。

「一番読みづらいのは、打算以外の理由で危険を冒す人間だ。貴官はその筆頭だな」

「御冗談を。小官は打算の塊です」

しかし大佐は笑ったままだ。

「皇帝の面前でリトレイユ公の顔に泥を塗った平民がか？ 貴官の

打算は規模が大きすぎて、私などには理解が難しいな」

それを言われると反論できない。確かにあれは軽拳だった。

「リトレイユ公は私に危害を加えるほど愚かではないが、貴官は明確に排除対象として認識されただろう。貴官はリトレイユ公の想像以上に優秀で、しかも制御不能だった。彼女はそういう人物の存在を許さない。今後は身辺に気をつける」

大佐の言うことはもったもなので、俺は素直にうなずく。

「そうします。具体的にはどのようにしましょうか」

「旅団司令部に帰還するまで絶対に私のそばを離れるな。リトレイ

ユ公とて私を巻き添えにするのは避けるはずだ」

リトレイユ公にとって、アルツァー大佐をここで殺すのは得策ではない。

ジャラクード会戦から生還した唯一の部隊を率いる名将で、未だに政治的中立を保つメディレン家との重要なパイプでもある。大佐を殺せばメディレン家が黙っていない。なんせ当主の叔母だ。

「ではお言葉に甘えて、おそばに居させていただきます……が」
「なんだ？」

「さすがに寝室まではお供できません」

「非常事態だ、気にするな」
「気にするよ！」

大佐はたぶん、自分が子供みたいな外見だから男に襲われないだろうとたかをくくっているのだろう。だがそうは言っても年頃の女性だ。俺の都合でそこまでしてもらおう訳にはいかない。

すると大佐が俺を睨む。

「遠慮する必要はないぞ」

「いえ、遠慮します」

「じゃあもう命令だ。私と同室で寝ろ」

「同室までではないですよね？」

さすがに同室は勘弁してもらったが、結局そのまま大佐の客室で

寝ることになった。貴賓用の客室には応接間や書斎や遊戯室まであり、寝る部屋ならいくらでもある。

その夜、俺は寢室に引っ込む大佐がこうつぶやくのを確かに聞いた。

「堅物め……」

聞こえないふりをして、応接間のソファで毛布を被る。

俺は大佐のことが好きだけど、女性として好きなのか自分でもよくわからないんだよ。

応接間の隣には従者用の控え室があり、旅団の兵士たちは全員そこで雑魚寝だ。

俺は将校だから別のフロアに個室が用意されており、そっちも結構いい感じではあったのだが、今回は諦めることにする。

だがこのソファも官舎のベッドに比べたら豪華だ……。

* * *

その夜、俺は夢を見ていた。

場所は電車の中。前世の通勤電車だろうか。記憶がおぼろげで思い出せないが、少なくとも車窓の風景は全く違っただろう。窓の外は人魂のような炎が揺らめく漆黒の闇だ。

まだこんな夢を見ているのか。

俺にそう語りかけてきたのは黒衣の人影だ。フードを被っていて

顔は見えなかった。他に乗客はいない。

そういえばこいつ、俺の夢にいつも出てくるんだよな。そして光源がどこにあるうとも、こいつの顔だけは絶対に見えない。

しょっちゅう夢に見てるのに、起きると忘れている。

今夜こそは覚えておきたいが、たぶん無理だろう。

俺はその微妙に死神っぽい人影に返事をする。

『こんな夢を見せてるのはどうせお前だろう？ 起きたところで悪夢だし、まったくロクでもないな、転生ってヤツは』
するとそいつは小刻みに肩を震わせた。笑っているのだ。

起きたところで悪夢、か。その割には随分楽しそうではないか？

楽しくなんか無いと言おうとしたが、そういえば最近は大充実している気がする。

別にやらなくてもいい戦争だらけで気が滅入るが、それでも大佐やハンナやロズたちと一緒にだと、まだ頑張ろうという気になれる。

しかしそいつは微かに低く笑う。

だが気をつけることだ。二度目の生には二度目の死が訪れる。それがいつになるかは、お前次第だ。

『役に立たない御忠告だな。生はかりそのめの状態に過ぎない。俺の体を構成する炭素も水素も、宇宙や海中に漂っていた期間の方が遙かに長いはずだ。死は必ず訪れる』

俺が投げやりに返事をすると、そいつは器用に肩をすくめてみせた。

ごもつとも、としか言いようがない。お前のような死生観を持っているヤツが一番手強いのだ。おまけに命の使いどころを心得ている。

ゴチャゴチャうるさいヤツだ。

こいつが何者なのかは、ずっと気になっていた。

俺を異世界に転生させた超常の何かなのか。あるいは死神のようなものなのか。

それとも単に俺の無意識が作り出す、夢の中の虚像なのか。

俺には判断できないが、科学に敬意を払う俺としてはオカルトめいた推論はできれば避けたい。

ただ、俺が異世界に転生したのは事実だし、妙な予知能力を獲得したのも事実だ。

だから何なのかわからない。

『お前は何者だ？ どうして俺につきまとう？』

するとそいつは笑うのをやめ、背筋を伸ばして真正面から俺に向

き直った。

顔はフードに隠れて見えない。

だがこいつのことは、とてもよく知っている気がする。

ヤツはフードに手をかけ、ゆっくりと脱ぎながら言った。

その問いに答えよう。それは……。

* * *

不意に目が覚めた。部屋の中は真っ暗だ。

夢を見ていた気がするが、何だったかよく思い出せない。嫌なヤツと会っていた気がするんだが、どうせ前世のクソ上司の夢とかそんなのだらう。思い出す必要もないな。

幸い、『死神の大鎌』は何も警告を発していない。今の俺に命の危機は迫っていないようだ。たぶん。

だが念のために俺はソファから滑り降りると、クッションに毛布を被せてそれらしく形を整える。

それから両手用のサーベルをそつと抜き、鞘はソファに置いて毛布から端を覗かせた。遠目にはサーベルを抱いて眠っているように見えるだらう。見えるといいな……。

この応接間には俺しかない。

貴賓用の客室は防犯と防諜のため、窓の大半はガラス格子で開かない。開く窓には鉄芯入りの鎧戸がついているし、掛け金で施錠も

している。

一方、ドアは合鍵さえあれば入れる。侵入者が来るとすれば、たぶんドアからだな。

そんなことを考えていると、ドアの方から「カチリ」という音が聞こえた。開錠の音だ。ガチャガチャと余計な音を立てなかったから、合鍵を使っている。

刺客かと思つて警戒したが、『死神の大鎌』は反応しない。よくわからないが命の危険はないらしい。本当か？

この予知能力は何度も命を救ってくれたが、いつか裏切らないとも限らない。俺は警戒態勢に入る。

俺は大きな書棚の陰に身を隠し、サーベルを胸の前で構えた。半身になって右肩を大きく前に出し、切っ先を攻撃方向に向ける刺突の構えだ。壁際ではサーベルを振りかぶることができない。

やがてドアの鍵穴から、カチリという音が聞こえた。

数十秒の……いや実際にはたぶん数秒の間を置いて、ドアが音もなく開く。

刺客なら間違いなく複数で来る。まず最初に一人、確実に殺しておかないといけない。

マスコット銃はそういう用途では申し分ないんだが、肝心なときに手元にないのが困る。

相手が本当に刺客か断定はできないが、他人の部屋に真夜中に忍び込んでくる連中に容赦する気はない。

しかもここは五王家の者が宿泊する部屋だ。この場合、法令遵守上の対応は「問題無用で無礼討ち」になる。

コンプライアンスは大事だから殺した方がいいな。

だが気になるのは『死神の大鎌』が反応していないことだ。この状況で無警告とか逆に困るんだが。

幸い、ソファの上には俺のダミーが設置してある。初動を見てからでも遅くはないだろう。

ドアが開いた後、さらに数秒経ってから誰かが室内に入ってくる。殺すなら今だ。確実に仕留められる。

でもここ、皇帝の宮殿だし……。迂闊な刃傷沙汰は政治問題になる。

俺は息を潜め、そいつが次に何をするか見守ることにした。

第51話「忍び寄る影」（後書き）

本日「オネ工軍師 ～庶子たちの戦争～」の書籍第2巻が発売と
なっています。書籍版タイトルは

「辺境下級貴族の逆転ライフ 2 可愛い弟妹が大事な兄なので、
あらゆる邪魔ものは魔女から授かった力と現代知識で排除します」
……です。レベルはカドカワBOOKSです。

第52話「切らずに切り抜けよ」

【第52話】

俺はサーベルを両手で構えたまま、侵入者を静かに観察する。

今夜は月明かりもなく、室内に照明はない。真っ暗だ。だが暗闇に目が慣れていたので、かろうじてシルエットぐらいはわかる。小柄だな。

足音を忍ばせてはいるが隠しきれていないし、足取りは暗殺者や兵士のそれではない。この音、なんだかヒョコヒョコ歩いているようだ。格闘術や剣術の心得があるようには感じられない。

そして侵入者は一人。

やっぱり妙だな。敵地で隠密活動をする場合、単独行動は非常に危険だ。

周囲への警戒や退路の確保などには仲間が欠かせない。二人か三人で連携するのが普通だ。帝国士官学校でもそう習った。

どうにも変なのでもう少し様子を見ることにしたが、侵入者はソファを覗き込んでいる。やはり俺を殺しに来た刺客なのだろうか。だけど、その割にはずいぶん悠長に観察しているな。さっさとやれよ。

焦れたい気持ちで物陰に潜んでいると、侵入者は結局何もせずに応接テーブルへと近づく。やっぱり刺客じゃないのかな……ますます自信がなくなってきた。

侵入者はテーブルの上に何かを置くと、そろそろとドアに向かって歩き出す。帰るつもりか。

見逃しても大丈夫そうだったが、もちろん見逃す訳にはいかない。ここはメディレン家当主の叔母が宿泊する部屋だ。招かれざる者は死を与えるのみ。

……なのだが、やっぱりいきなり殺すのは気が引けたので声をかける。

「動くな」

「ひゃっ!？」

若い女性の声だ。なんとなくそんな感じはしてた。

俺はサーベルを構えたまま、侵入者の前に立ちはだかる。

「ここをメディレン旅団長閣下の部屋と知っての狼藉だろうな？
覚悟はいいか」

「ままま、まつ、まつ！ 待って！ 待ってください！」

演技じゃなければ相当慌てているな。いやいや油断は禁物だ。

俺は正眼の構えでスススと間合いを詰めつつ、うるたえまくつて
いる侵入者に問いただす。

「死にたくなければ所属と目的を言え」

「しょっ、所属は！ 所属は、えと、あれです！ きゃっ、客室係

です！ ほらこのリボンの色！ あっ、見えない！」

この宮殿のメイドさんか。暗くてよく見えないから判断できない。

「目的は？」

「これを！ じゃなくて、あれを！ 膝掛けをお持ちするよう命じられました！」

膝掛け……？

そんなもの頼んだ記憶はないのだが、こつ暗いと確認もしづらいな。

そのとき不意に部屋が明るくなった。

「なんだ騒々しい」

寝室側のドアが開き、燭台を持ったアルツァー大佐が顔を出す。彼女はスケスケのネグリジエみたいなのを着ていたが、今はそれは無視する。

「閣下、お気を付けください。侵入者です。合鍵を所持していません」

「侵入者じゃありません！ 侍女頭に『膝掛けをお届けしなさい』って言われただけなんですってば！」

でかい声で叫んだから、別のドアが開いて部下の兵士たちがぞろぞろ入ってきた。

「何事ですか、参謀殿！？」

「ふぁー眠い……」

「えっ、これどういう状況？」

「なに？ 痴話喧嘩？」

「ああ、そのメイドさんと大佐殿と参謀殿のなんかアレでしょ…
…眠い」

違います。

人と照明が増えたので俺は少し安心し、改めて侵入者を観察する。確かにメイドだ。軍服姿の女の子たちがぞろぞろ出てきたので、さつき以上に怯えきっている。

衣服に不自然な膨らみはないし、短銃やナイフを隠し持っているようにも見えない。

「本当に侍女殿か？ 合鍵はどうやって手に入れた？」

「客室頭さんが侍女長様から借りたんです。お起こししないように、そっとお持ちしなさいって。膝掛けを御所望なんですよね？」

「頼んだ覚えはないな」

どうやら襲撃ではなさそうだが、この珍事はどこがおかしい。

俺は侵入者への警戒を兵士たちに任せて、大佐の方を見る。

「閣下、これはいったい……」

すると大佐は少し考え込んでいたが、やがて納得したように苦笑した。

「ああ、なるほどな。そういうことか」

いつもと立場が逆なのがちょっと悔しい。一人で納得してないで教えてくれよ。

大佐は自称侍女の女性に声をかける。

「ここに来たのは客室頭の命で間違いないか？」

「は、はい」

「客室頭は誰の命令を受けたかわかるか？」

「いえ、私には全然……」

困惑しきつた様子の侍女を見て、大佐は溜息をつく。

「だろうな。どうせあの女のことだ、間に何人が挟んでいるだろう」

俺は首を傾げる。

「これもリトレイユ公の策謀ですか」

「私はそう思う」

でも深夜に膝掛けのルームサービスなんかして、それでどうするつもりなんだよ。

いや待てよ。そうか、なるほど。

「昼間のやり取りで我々を警戒させておき、そこに不審な人物を送り込んで一騒動起こさせるという策ですか」

「そうだ。貴官相手に半端な暗殺が通用しないことぐらい、あの女とて理解している。特に今回は何の準備もしていなかったはずだから、まともな暗殺者を使うのは難しかっただろう」

大佐はそう言い、やや気の毒そうな視線を侍女に向けた。

「暗殺者と誤認されれば、侍女は問答無用で殺される。我が参謀のように修羅場をくぐり抜けてきた男なら、不審者など即座に返り討

「ちだ」

「しかしそれが丸腰の侍女だったら、大変な騒ぎになりますね」

俺が早とちりして侵入者を斬り捨てていれば、ここには丸腰のメイドの斬殺死体が転がっていたはずだ。

一介の客室メイドとはいえ、皇帝の使用人であることに違いはない。俺を逮捕する理由としては十分だ。

そして取り調べ中に不幸な事故が起きて俺は死ぬ。

そういう筋書きか。

要するに暗殺計画ではなく、失脚仕事を仕掛けられた訳だ。これなら暗殺者をわざわざ皇帝の宮殿に入れる必要はない。手持ちの駒だけで足りる。

「陰湿な策ですね」

「だが効果的だな。むしろよく斬り捨てなかったな、貴官。私なら問答無用で斬ってしまっただろう。たいした見極めだ」

大佐がすっかり感心した顔をしているが、単に『死神の大鎌』のおかげだ。致命的な事態かどうかが予知できるので、ギリギリまで判断を保留できる。

俺はサーベルを鞘に収めつつ、何でもないような顔をしてみせた。

「例え無礼討ちだとしても、宮殿内で刃傷沙汰はまずいですからね。小官でもそれぐらいの配慮はします」

「良い判断だ。あの女も貴官のそういう冷静さは見抜けなかったよ。うだな」

なんだか嬉しそうな大佐だ。旅団の子たちが呆れたような顔をしている。

一方、渦中の侍女は怯えきっていた。

「あの、私はどうなるんですか……？」

「侍女よ、私はメディレン家当主の叔母、アルツァーだ。どのような理由にせよ、私の寢所に無断で立ち入った罪は重いぞ」

「も、申し訳ございません！」

深々と頭を垂れる侍女に、スケスケネグリジエの大佐は鷹揚に応じる。

「だがまあ、皇帝陛下の使用人を処罰する訳にもいくまい。上司の命なら上司に聞くのが筋だな。客室頭に説明してもらおう。事情さえわかれば事を荒立てる必要もない」

度量の広いところを見せつけつつ、大佐は続ける。

「方法にはいささか問題があったが、膝掛けは確かに受け取った。

もう帰って休みなさい」

優しく言って、侍女の手に銀貨を握らせる。チップにしては額が大きい。

「これは……」

「心付けだ。このような時間に届けさせたのだから、相応の礼はせねばな」

スケスケネグリジエのちっこい大佐は、そう言って男前に笑ってみせたのだった。

侍女が何度もペコペコと頭を下げて退出した後、裁縫の得意な兵士たちが膝掛けを検分した。

「参謀殿。やっぱりこれ、ただの膝掛けです。布と布の間に何かが入ってる感じもないですね」

「縫い目にも細工してないようですよ……」

まあそうだろうと思ったよ。

「縫製品に密書を縫い込むのは常套手段だが、それなら俺たちが起きているときに持つてくるだろう。こんな夜中なら誰にも見つからないし、ドア下の隙間からメモを滑り込ませる方が早い」

リトレイユ公以外の誰か、例えばジヒトベルグ公あたりからの密書という可能性も多少はあったが、その線は薄そうだ。

俺は大佐に向き直った。

「やはりリトレイユ公の差し金のようですが、どうします？ 本当に客室頭から事情聴取しますか？」

「一応はしてみるつもりだが無駄だろうな。さっきも言ったが、こういう依頼は間に何人か挟むものだ。間に立った者が一人でも姿をくらませば、首謀者の解明は不可能になる」

さすがは五王家の一員、陰謀慣れしてる。

大佐はスケスケネグリジエのまま腕組みする。

「私の勘だが、客室頭とその上の侍女長までは真っ白だな。リトレ

イユ公の配下が侍女たちの指揮系統に介入し、存在しない指示を割り込ませた。だがその配下は痕跡を残さず消えているはずだ」

「参考になります」

「世辞が上手だな。貴官なら士官学校でこれぐらいは学んでいるだろう?」

「ええまあ」

敵の指揮系統に割り込んで混乱させるやり口は知っている。

できるかと言われたら自信はないが、敵が使ってきたときに対処する方法はいくつか学んだ。

……できるかと言われたら自信はないが。

大佐はふと優しい顔をして俺を見上げる。

「貴官の冷静な判断のおかげである無辜の侍女は死なずに済み、私も大事な参謀を失わずに済んだ。貴官が思うよりも遥かに危険な罠を仕掛けられたが、鮮やかに切り抜けたな」

「過分なお褒め、恐れ入ります」

早まってメイドさんを斬り殺していたら大変なことになっていた。それにしてもリトレイユ公は悪辣な外道だ。先代のジヒトベルグ公を謀殺するぐらいだから、平民なんか何万人犠牲にしても平気なんだろう。

すると大佐が心配そうな顔をして俺の腕を撫でた。

「そう怖い顔をするな。メディレン家の名誉にかけて、あの女の罪は地獄まで背負わせる」

「ありがとうございます」

俺はうなずき、それから大佐をじっと見つめた。

「閣下」

「ん？ なんだ？」

目をキラキラさせる大佐に、俺は毛布を手渡す。

「その格好では冷えます。温かくしてください」

「……むっ」

頬をぷつつと膨らませて、大佐は毛布を受け取った。

第53話「平民大尉と貴族社会」

【第53話】

* * *

【欺瞞の微笑み】

宮殿を警護する近衛大隊長は謹厳実直そのものの表情で、厳めしく敬礼した。

「お申し付けにより警備を強化しておりましたが、何も起こりませんでしたな。我々は失礼いたします」

「そうですね、取り越し苦労だったようです。お疲れ様でした」

上級貴族出身の大隊長にリトレイユ公は穏やかに応じ、彼と部下たちの退出を見送る。

それから紅茶を一口飲み、控えていた年配の従者に微笑みかける。

「ずいぶん粗末な茶なこと。もっと良い『茶葉』を取り寄せなさいな」

「申し訳ございません。『産地』を選んでいる余裕がございませんでした。それに……」

「何ですか」

白髪の従者は微かに口元を歪める。

「なかなか難しいお客様でしたので、『おもてなし』がうまく参りませんでした」

「……それは認めましょう」

クロムベルツ参謀中尉。

平民出身で第五師団の日陰者だったが、軍功は抜群だった。命知らずの勇敢な軍人。

だが本人に出世欲や野心はなく、私生活も品行方正そのもの。他家の影響も全くなく、政治的には真つ白な男だ。

まさに使い捨てるにはうってつけの人材。

そう思っていたのだが。

「危険を嗅ぎ分ける嗅覚は戦場以外でも敏感、ということですね」

いくら勇猛な軍人とはいえ、下賤の輩だから失脚工作には簡単に引つかかると思っていたのだが、予想以上に手強かった。

従者が質問する。

「新しい『茶葉』をお取り寄せいたしましょうか？」

「いえ、やめておきましょう。無理にお勧めしても無作法というものの」

謀略戦において不用意な攻め手は自滅の元だ。敵が隙を見せるまで待つ。

リトレイユ公には敵が多い。平民の中尉なんかいつまでもこた

わっている場合ではない。あの男の政治力などたかが知れている。それに彼の上官であるアルツァー大佐の力を削げば、クロムベルツ中尉を警戒する必要もなくなるのだ。

「放っておけばいいのです。……そう、放っておけば」

だが妙に引つかかるものを感じて、リトレイユ公は逡巡する。本当にこのままでいいのだろうか？

不安感は拭えなかったが、深追いしてアルツァー大佐との関係が険悪になるとまずい。これ以上は危険だ。

ここはいったん狩りを断念すべきだろう。獲物が隙を見せるまで待つべきだ。

「クロムベルツ中尉を大尉に昇進させるよう、皇帝陛下に進言します。第五師団長に連絡を取りなさい」

「はい、御前」

すかさず従者がペンとインクを取り出す。

上質の紙にサラサラとペンを走らせながら、リトレイユ公は尋ねた。

「アルツァー大佐からの手紙、ジヒトベルグ公は受け取らなかったのですね？」

「はい。宮中の衛兵たちからも証言を得ております」

「大変結構です」

リトレイユ公は蜜蝋の封印に意味があることを知らない。彼女は父親から家督を強奪したが、当主に必要な知識を継承していなかった。

「第六特務旅団が他家と接近する事態は防げたようですが、監視は続けなさい」

すると従者が首を横に振る。

「お言葉ですが、手の者が足りません。あのような僻地では連絡員も必要です」

「では買収した農民どもを使いなさい。この様子なら監視は最低限で良いでしょう」
「はっ」

リトレイユ家といえども密偵には限りがあり、全方位に完全な監視網を張り巡らせることはできない。有能で信頼の置ける人材は貴重だ。

「当面はジヒトベルグ家の動向を監視しなさい」
「承知いたしました」

これではばらくは大丈夫だろう。リトレイユ公は安堵の溜息をつく。手紙に香水を一滴垂らした。香りは文字にならないが、本人の証明になる。専門の調香師が秘密のレシピで調べた、特別な香水だ。

「ところで、私の『替えの服』はどこですか」
「今頃は『六番』に届いている頃合いかと」

「よろしい」

* * *

俺はアルツアー大佐と共に第六特務旅団の司令部に無事戻り、その直後に「キオニス戦役での戦功抜群と認め、大尉に任ずる」という辞令を受け取った。

なんだか今更なので、たぶんジヒトベルグ公かリトレイユ公の口添えだろう。

ジヒトベルグ公なら単純に恩返しだし、リトレイユ公なら俺を油断させるためだ。

リトレイユ公は俺を失脚させるのに失敗したので、もしこれが彼女の差し金なら俺を泳がせておく意図とみていい。

どちらにしても俺には何にもできないので、ありがたく昇進しておく。アルツアー大佐もニコニコだ。

「おめでとう、クロムベルツ大尉。今後ともよろしく頼む」

「お任せください、閣下。引き続き精勤いたします」

びしつと敬礼した後で、俺は苦笑する。

「できればキオニスから戻ってきた直後に昇進したかったですね。

これは素直に喜ばません」

そうやって俺はピカピカの階級章を眺める。中尉だった期間が短すぎて少し名残惜しい。なんだか位打ちをされているみたいだ。

すると大佐も苦笑いする。

「まあそう言うな。平民の身分のまま、二十代前半の若さで大尉になった者などほとんどいないぞ。若き俊英として帝国軍人たちの模範となるだろう」

「政治的な意図が見え隠れしてますから、模範にはなりそうにもありませんよ」

それに前世分と合わせるともう結構な歳なので、若き俊英と言われてもピンとこない。気分的にはそろそろ隠居したい。そんな俺の心中を見抜いたのか、大佐が首を傾げる。

「貴官はときどき、私の亡父のような表情をするな。人生に疲れたか？」

「まあ、多少は」

この人、妙に鋭いから怖いんだよな。さすがは五王家の一門というべきか。人物眼がしっかりしている。

大佐はフツと微笑む。

「では亡父のように頼りにしているからな。亡父より長生きしろよ」「努力します」

いや待て、大佐のお父さんって晩年に再婚してるから相当長生きしたはずだぞ……。

* * *

それから俺はしばらく平穏な日々を過ごすことになった。今日も旅団長と幹部たちでミーティングをする。俺以外の幹部というと、だいたいロズ中尉とハンナ下士長だ。

大佐はどうやらハンナを平民女性初の将校にするつもりらしく、将校たちのミーティングにも積極的に参加させている。

ロズ中尉によると、政情はどんどん不穏になっているようだ。

「ミルドール家とジヒトベルグ家の間で水面下で動きがあるようだな」

「ええまあ……仰る通りです、閣下」

アルツァー大佐の問いかけに、ロズ中尉が困ったような顔をしている。

俺は大尉の階級章をちらつかせつつ、ロズに迫った。

「俺たちは階級が違ってても友達だよな、ロズ中尉？」

「おいよせ、冗談に聞こえないぞ」

留守番役で昇進を逃したロズは、コホンと咳払いをする。

「義母上から妻宛ての私信に、それらしい内容が多少ありました。これを」

ロズの奥さんはミルドール公弟の娘だ。従って実家からの手紙はミルドール家からの手紙、ということになる。

ただミルドール公本人ではなく、その弟の妻が娘の一人に宛てた手紙だ。

さすがにこのレベルになるとリトレイク公も監視しきれないだろ

う。膨大な数になるのでリトレイユ家の諜報網といえどもカバーしきれない。

内容的にも娘や孫の様子を尋ねる、ごくごく普通の手紙だった。裁縫や育児のちょっとしたコツなど、娘を気遣う内容が温かみを感じさせる。

だがロズがわざわざ見せたということは、これも何か仕掛けがあるに違いない。

案の定、アルツァー大佐が真剣な表情をしている。

「『緑の仕付け糸』……これは『ベルンゲン叙事詩』のアレだな。

こつちの『金毛羊の刺繍』はグスター大帝の逸話だろう」

つまり……どういうこと？

大佐は得意げな顔をして俺を見る。

「古典に通じた者にしかわからない暗喩だ。ミルドール公弟の奥方はエオベニアの後期王朝文学がお好きらしい」

よくわからないのでロズの方を見ると、彼も首を横に振っていた。「俺が読んだことのある本は『辻占いの冒険』とか『大商売記』とかだぞ」

庶民に人気のあるヤツだ。といっても貸本屋に通うような、かなり裕福な都市部の庶民だが。

ハンナも大きな体を縮こまらせて、申し訳なさそうに言う。

「私は五王棋と砲術の教本しか読んでません……」

彼女は読み書きすら学ばずに軍隊に入ったから、むしろそこまで読んでいるのが凄いと思う。

とにかく俺たち平民にはわからない。

これだから貴族は嫌なんだよな。自分たちしか知らない身内ネタがあるから。

なるほど、これなら内通者や密偵には理解不能だろう。彼らのほとんどもは平民だ。

「で、結局何なんです？」

平民トリオの代表として質問すると、大佐は若干険しい表情で答える。

「ミルドール家はジヒトベルグ家と積極的に情報交換をしているよ。うだ。だがどうも少々不穏な気配がするな。ブルージュ公国やキオニス連邦を暗示する言葉が散見される。この陰謀からは距離を置いた方が安全そうだ」

思っていた以上にヤバそうな内容だった。他国の影がちらつく謀略となると、深入りは危険そうだ。

ロスが手紙をヒラヒラさせながら溜息をつく。

「貴族様ってヤツは、いろんな方法で意思疎通するんですな」

大佐はコクリと素直にうなずいた。

「そうだ。貴族と平民、上級貴族と下級貴族、一門と他家。ありとあらゆる方法で垣根を作り、余所者を遮断する。そして身内だけで

利益を独占する。それが帝国貴族だ」

俺は平民の社会が野蛮すぎて好きになれないのだが、貴族社会も相当に歪そうだ。俺はどこに身を置けばいいんだろう。

ともあれ、俺はこう発言しておく。

「そしてリトレイユ公は現当主ですが、当主としての教育を受けていません。だから『当主筋が知っていることを知らない』のですね？」

「そうだ。例えばあの女はエオベニアの後期王朝文学など知らんだろう。帝国内では評価が低く、帝国貴族の基礎教養とはされていない」

シュワイデル人は自国の文化をやたらと持ち上げる傾向があり、他国の文化を一段低いものと見ている。隣国エオベニアの古典など読んでいる者は貴族でも少ないらしい。

「閣下はご存じなんですよね？」

「これでも文学少女のつもりだからな。だがエオベニアの王朝文学なら前期の方が好みだ。私は悲劇よりも明るい結末の方がいい」

どうやら後期王朝文学は悲劇が多いらしい。当時の世相を反映してたんだろうか。興味がある。

「興味がありそうな顔をしているな。翻訳本を貸そうか？」

「お願いします。できるだけ明るいヤツを」

「任せておけ。貴官なら『ウルカの亡霊騎士』か『魔弓の狩人』辺りが好きそうだな」

「それ本当に明るいやツですか？」

「もちろんだ。どっちも凄くいいぞ」

大佐が急に御機嫌になつたな。何なんだこの人。

それはさておき、リトレイユ公は少しずつ包囲網を狭められていくようだな。このままおとなしく勢力を削がれていくとも思えないし、まだ何か起きるだろう。

「帝国の未来も明るい結末だといいいのですが」

「少なくとも悲劇は回避せねばな。悲劇の主人公はあの女一人です分だ」

俺の言葉に大佐がそう答え、俺たちは深くうなずいた。

第54話「裏切りの香り」

【第54話】

第六特別旅団司令部に冬が訪れた。俺がここに来て、ちょうど一年経ったことになる。

この一年間で二度の出兵を経験したが、第五師団のときはもっと頻繁に戦場に出っていたので穏やかなものだ。

以前に第六特別旅団には戦力拡充の通達が来ていたが、諸々の手続きがようやく終わって新兵たちがやってきた。メディレン領からやってきた女子志願兵だ。メディレン領には弱者の駆け込み寺となっているフィルニア神殿がいくつもあり、そこから紹介されてくるらしい。

帝国軍が身元の引受人になれば、周囲の虐待から逃れられる。おまけに赴任地はメディレン領外だ。追ってくる心配はない。仮に追っなくても旅団司令部には入れない。

そんな訳で、今回新たに百人ほどの女性がやってきた。これで二百五十人ほどの戦闘集団になるな。

ただ問題なのは、彼女たちはまだ素人だということだ。

「ここに来れば屋根の下で寝られるし、ご飯も食べさせてもらえる

って聞いたんですけど……」

真新しい制服に身を包んだ女の子たちは、みんな不安そうにしている。

不安なのはこっちも同じなんだが、受け入れ側としては堂々としているしかない。

「その通りだ。第六特務旅団にようこそ。これから貴官たちには軍人として訓練を受けてもらう。有事の際にはもちろん戦場に出る。給料と衣食住の保証は貴官たちの命の代価だと思ってくれ」

なるべく穏やかに言ったつもりだったが、これだけでみんな真っ青になってしまった。

ハンナが呆れたような顔をしている。

「参謀殿、何してるんですか」

「いや、まず説明をだな」

甘い言葉で死地に向かわせるのは不誠実だし、戦場で「話が違つ」と文句を言われても困るんだ。

でもハンナは首を横に振った。

「怯えさせちゃまずいですよ……」

「俺もまさかこの程度で怯えるとは思ってなかった」

「参謀殿みたいな筋金入りの軍人とは違うんですから」

俺だって前世は普通の民間人だよ。

でもまあ、ここはハンナの意見を素直に聞いた方が良さそうだ。俺は軽く咳払いをしてごまかす。

「もちろん、我々も貴官たちを死なせるつもりはない。どんな状況からでも生き残れるよう、徹底的に鍛え上げる」

「参謀殿、参謀殿」

「なんだハイデン下士長」

ハンナが微妙な苦笑をしている。とうとう困るのを諦めたらしい。見放されたようだ。

「あの、せつかくなので私が続きをやってもいいですか？」

幼児をあやすような笑顔だ。俺をダメな子みたいに言うなよ。

ちよつと落ち込んでしまったが、ハンナの方が新兵たちの価値観に近いだろう。俺はうなずく。

「すまない、よろしく頼む」

「はい、お任せください」

ハンナはとても良い笑顔で敬礼して、それから新兵に向き直った。

「私はハンナ・ハイデン下士長です。砲兵隊で隊長代行をしています。で、こちらの方がクロムベルツ参謀大尉殿です。第六特務旅団で二番目に偉い人です」

まあ……そうなるか。ロズはまだ中尉だもんな。

「参謀殿は怖く見えるかもしれませんが、この旅団で誰かを殴っ

たことは一度もありません」

「殴る訳ないだろう」

俺は思わず呆れて言い返したが、新兵たちの反応が少し変わった。「えっ、そうなの……？」みたいな視線が俺に向けられる。

ハンナはニコニコしながらさらに言う。

「おまけに読み書き計算も丁寧に教えてくれますし、面倒見がいいんです。と言っても信じられないと思うから、詳しい話は後で古参兵の子たちに聞いてみてね」

まあ嘘は一切ないので、古参の子たちも同じことを言うだろう。

それにしても、こんな保育園みたいな導入で本当にいいのか？

ここは軍隊だぞ？

だが考えてみれば新兵の子たちもいろいろあってここに来てるんだよな。書類上では紛れもない「志願兵」だが、他に選択肢がないから志願しただけだ。

俺は余計なこととは言わずにハンナに任せることにしたが、照れくさいので制帽を脱いで頭を掻く。居心地の悪さが凄い。

「参謀殿は旅団の子たちの味方だから、何かあれば命懸けで守ってくれます。実際に前の戦争ではサーベル一本で騎兵を斬り伏せて、みんなを守ってくれたんだよ」

まあ……嘘ではない。嘘ではないけど居心地がますます悪くなってきた。

そろそろ止めよう。

「ハイデン下士長、俺のことはいいから」

「ここからが本番なんですよ!？」

何の本番だ。やめなさい。

俺は暴走しかけている部下をなだめる。

「ありがとう、だが十分だ」

それから俺は再度新兵たちに向き直り、なるべく穏やかに語りかけた。

「新兵諸君は、まず軍隊の雰囲気になじんでくれ。どうしても合わない場合は軍を去って帰郷するか、神殿で働くという選択肢もある。無理強いしても満足には戦えないから、まずはお互いの相性を確かめよう。困ったことがあればハイデンたち下士官に相談してくれ」

最低限の教練を終えるまで半年ぐらいかな。その間に何割か脱落するだろう。

焦っても仕方がないので、人材育成はのんびりやることにする。

* * *

『陰謀の裏表』

教練場で新兵たちがクロムベルツ参謀の話をしている頃、旅団長室のアルツァー大佐は険しい表情をしていた。

「なるほど、事情は確かによくわかった」

「信じていただけますか？」

そう微笑むのは糸目の美女だ。

大佐は軽くうなづく。

「そういうことであれば同情するしかないな。我が旅団の兵士たちと何ら変わらない」

「ですが、あの方にもそう思っ頂けるでしょうか」

「なんだ、そんな心配か」

大佐はフツと笑うと、窓の外を見た。

「私はあの男を帝国史上最高の参謀だと確信している。それが答えだ」

* * *

俺は新兵たちの基礎教練をハンナたち下士官に任せて、旅団長室にやってきた。大佐に呼び出されたのだ。

もうすっかり気安い間柄ではあるが、公私のけじめをつけてドアをノックする。

「クロムベルツ大尉です」

「御苦労、入ってくれ」

「失礼します」

ドアを開けて入室した瞬間、俺はギョツとした。

リトレイユ公がいるじゃないか。何で？ リトレイユ公が何で？

俺を失脚させ、たぶん亡き者にしようとした張本人だぞ。どうして大佐は事前に教えてくれなかったんだ？

俺は一瞬混乱するが、大佐への信頼感が俺を冷静にさせた。リトレイユ公がここに来ているなら、俺を呼び出すときにその旨を伝えてくれるはずだ。

ということは、この人物はリトレイユ公ではない。

俺は何でもないような顔をして、大佐に問いかける。

「来客中でしたか。この方はどなたです？」

「ほづ……」

大佐が驚いたように目を丸くしたが、すぐにその目を輝かせる。

「やはり貴官は帝国史上最高の参謀だな」

話がよく見えないのですが。

見るとリトレイユ公そっくりの女性も驚いた顔をしていた。

「そんな、まさか……私がリトレイユ公ではないと一目で見抜いたのですか？」

いや、そういう訳ではないのですが。

どう答えようか迷ったが、ふと妙なことに気づく。

このリトレイユ公のそっくりさん、服装も髪型も顔もメイクも本物そっくりだが、匂いが違う。あの甘ったるい香水の匂いがしない。

リトレイユ公の香水はおそらく特別製で、転生後には一度も嗅いだことのない匂いだ。複雑で奥行きのあるフローラル系の香りで、「爛熟」という言葉がぴったりくる。

ただし転生前の記憶でいうと、トイレの芳香剤が一番近い。ちょっと高級なヤツ。

これは俺の前世が香水とは無縁だったせいなので、リトレイユ公はたぶん悪くないと思う。

一方、こっちのそっくりさんから良い匂いがしたが、シトラス系に近い爽やかな香りだ。

こちらも前世では制汗剤などで馴染みがあったが、この香りは転生後にも何度か嗅いだ。平民の富裕層にも普及しているヤツで、香水や抹香などの形で売られている。

今世の俺は嗅覚が鈍くなっているようなので、この違いはあまり気にしたことがなかった。コーヒーの香りもよくわからなくなっているぐらいだからな。

まあいいや、それを指摘しておこう。

「本物のリトレイユ公は香水の香りが違います。それにリトレイユ公がお越しになってるのなら、旅団長閣下が私にそのことを伏せたまま呼び出すとは思えません」

俺の言葉に、二人の女性はそれぞれ違った反応を示した。

リトレイユ公のそっくりさんは、何やら考え込むような表情だ。

「やはり香水の違いは決定的ですね……。そのことは御前にも申し上げていたのですが、決して使わせて頂けなかったのです。以前からお気づきだったのですか？」

ちよつと待て。この話ぶりと出で立ち、どう見てもリトレイユ公の影武者だよな？

だが影武者は正体を悟られないことが大前提だ。この会話はおかしい。

一方、大佐は嬉しそうだ。

「ふふ、論理的に考えればそうなるだろう。私が貴官に隠し事をするはずがないからな」

大佐はちよつと黙ってて。

俺は記憶を必死にたどり、リトレイユ公との初対面までさかのぼる。

そういえば最初に会ったときは、本物の香水の香りじゃなかった。てことはあのときから影武者と会っていたのか。

本物と会ったのは……。そうだ、旅団長室で最初に会ったときだ。香水の種類以前に、本物は香りがキツすぎるんだよな。

思い返してみると影武者と会ってる回数の方が多い。平民将校の相手なんか影武者で十分ということなんだろう。

そこまで考えた俺は、落ち着き払った口調で影武者にうなずいて

みせた。

「最初に馬車の中でお会いしたときには、もちろんわかりませんでしたよ」

「では、いつからお気づきに？」

「今だよ。今。」

話の流れ的に本当のことが言いづらくなってしまったので、俺は微笑みながら答える。

「軍事機密です」

「ごまかせたかな？」

リトレイユ公の影武者は俺をじっと見つめていたが、やがて同じように微笑んだ。

「なるほど、アルツアー様がクロムベルツ様を信頼しておられる理由がよくわかりました」

「何がどうわかったんだろう。不安しか感じない。やっぱり下手なごまかし方はよくないな。正直な参謀を目指そう。」

そんなことを考えていると、リトレイユ公の影武者は背筋を伸ばして優雅に会釈した。

「クロムベルツ様。私はリトレイユ公の影武者で、本当の名はリコシェと申します。リトレイユ領出身の平民で、実家は髪結いをしておりました」

「親戚とかじゃないんだ。それにしてもそっくりだな。」

「私は最初、リトレイユ家の奥女中として召し抱えられたのですが、

化粧の技術を認められて影武者に抜擢されたのです。背格好もほぼ同じですし、声や顔立ちも似ていましたので」

ああ、メイクで本物そっくりに近づけてるのか。

そこでアルツァー大佐がさりげなくフォローを入れる。

「彼女は聡明な人物で、やがて側近としても重用されるようになってたそうだ。外見が似ているだけでなく、交渉事などの実務も任せられるからな」

確かに彼女からは知的な雰囲気を感じる。平民だとは思わなかった。

そしてリコシエは俺に深々と頭を下げる。

「不忠の恥を忍んでクロムベルツ様をお願い申し上げます。どうか私を主君からお守りください」

第55話 『替えの服』たち

【第55話】

リトレイユ公の影武者が「主君から守ってくれ」と駆け込んでくるのは、どう考えても尋常じゃない。

政治闘争的には大変ありがたい展開だが、参謀としては畏を疑ってしまうぞ。

だがアルツアー大佐は笑っている。

「にわかには信じがたいだろう？　だがこれには理由がある。リコシエ、話してやってくれ」

「はい、閣下」

影武者のリコシエは素直にうなずき、俺を見て微笑んだ。今さらではあるが、その顔で微笑まれると凄く怖い。

「私はリトレイユ公の影武者、そして彼女の権力の代行者として様々な場に顔を出しました。あの方はプライドが高いので、謝罪や要請……つまり人に頭を下げなければならぬときに私をお使いになるのです」

なんていうか、それは君主としてダメなヤツじゃないかな。そういう大事な用件を他人任せにしまうと、肝心なところで足下をすくわれかねない。

俺が考えたことを見抜いたのか、大佐が苦笑している。

「貴官が何を考えているかはわかるぞ。だが話を聞いてやってくれ」
「わかりました」

考えてみれば実際に足下をすくわれてるよな。影武者が離反しちやつてるんだから。

リコシエは続ける。

「リトレイユ公の影武者として謝罪や要請を行うには、かなり深い事情を知らなければなりません。また、そういった場でさらに深い事情を知ることもあります。そのうち、それが恐ろしくなってきました」

なるほど、「知りすぎてしまった影武者」というヤツか。漫画とかでは最後に消されるのがお決まりのパターンだ。

影武者は本人に成りすますことができる上に、存在が非公表だ。秘密裏に消される確率は格段に高くなる。

俺が少し気の毒な気持ちで聞いていると、リコシエは苦笑した。

「そんなに同情していただけたとは思いませんでした。続けてもよろしいですか？」

「ああ、どうぞ」

俺、そんなに同情してる表情だったのか？

ちらりと大佐を見ると、彼女も苦笑していた。

「私は貴官のそういうところを一番頼もしく思っているぞ」

「恐縮です」

ふと見ると、リコシエと大佐が視線を交わして微笑んでいる。お人好しの参謀だって思われてるんだろうな。

リコシエは前よりも打ち解けた雰囲気の説明を続けた。

「リトレイユ公は平民を軽蔑していますし、決して信用しません。実は私以外にも影武者がいたのですが、全て処刑されています」

処刑とは穏やかじゃないな。しかしなぜ？

「私が影武者になったときはまだ他に二人いたようなのですが、一人は敵対者の襲撃を受けて顔を切られ、大きな傷を負いました。用済みとしてその場で処刑されたそうです」

リトレイユ公と違う顔になってしまった以上、もはや生かしておく価値はない……ということか。恐ろしい。

「もう一人の影武者とは顔見知りだったのですが、うっかり『もう完全に御主人様の代わりを務められますよ』と言ってしまい、処刑されたそうです」

確かにリトレイユ公は、そういう発言を許さないだろうな。しかしなんでそんな無謀なことを言ったんだ？

「その影武者は忠誠心が高く、リトレイユ公の役に立てることが嬉しかったようなのですが、リトレイユ公にはその心は通じなかつたようです。忠誠を捧げるに値しない主君だった、ということですよ」

リトレイユ公も怖いけど、この人も怖いな……。

リコシエの言葉が真実だという保証はないが、リトレイユ公の器が垣間見えるエピソードだ。彼女に人の上に立つ資格はないのは明らかだし、信憑性がある。

リコシエは淡々と続ける。

「これ以上、リトレイユ公に影武者を増やさせては死人が増えるだけだと思いました。そこで私は唯一無二の影武者となるよう努力し、さらに処刑されないよう細心の注意を払って今日まで生き延びてきました」

もし本当なら壮絶な人生だ。リトレイユ公の暴虐の犠牲者となった者は大勢いるが、かなりの上位者だろう。同情するしかない。

「一方、アルツアー様にはリトレイユ公の影武者として何度もお会いし、次第にお人柄を尊敬するようになりました。それにこの旅団では私と同じ平民女性が良い待遇で暮らしていますし、羨ましくなつたのです」

あー……そりゃそうだよな。この旅団だって別にそんなに快適な場所ではないが、失言ひとつで処刑される影武者生活よりは遙かにマシだ。

俺は何か言わねばと思い、やや無理をして口を開く。

「なるほど、リコシエ殿は苦労されてきたのですね。信頼も尊敬もできない主に忠誠を誓う辛さ、小官もかつて第五師団で似たような経験を幾度もしたものです」

「はい。私のような者を信頼なさる時点で、人を見る目はお持ちではないと思いました。そのような方に大それた謀略など成し得られません」

痛烈な皮肉だ。だが本音だろう。

忠義者を処刑し、主君を見限った者を重用する。暗君のお手本だ。だが俺は参謀なので、それでもまだいろいろ疑う。ここはしっかり検討だ。

リトレイユ公が影武者の本心を見抜いた上で、それでもなお利用しているという可能性はないだろうか？ 彼女は有能な影武者だから、忠誠心がなくても他に替えがない。

とはいえ、影武者が「いつどこで誰に会って、どんな話をしたか」を敵に流し始めたら、さすがに生かしておけないだろう。影武者自身が本物を暗殺しようとする可能性だってある。

いやいや、リコシエの裏切りそのものが偽りという可能性もあるな。偽情報を俺たちに信じ込ませるには強力な一手だ。

しかしこれにしても、別に影武者を使わなくても他の側近で同じことができる。離反しそうな人材には事欠かない君主だ。

影武者は存在を気づかれていないときが最も強いのだが、この計略は成否にかかわらず影武者の存在を相手に知らせてしまう。計略が成功すればまだいいが、失敗すれば大損だ。

人間を駒のようにしか見ていないリトレイユ公からすれば、「駒損」といえる一手だろう。そんな肝の太い奇策を打ってくる人物に

は思えない。

うーん……疑い始めるとキリがないが、ここはいったん信用してみるか。

疑って追いつ返したところで何の利益にもならないし、何よりも彼女が本当に助けを求めているのなら放っておけない。

士官学校でいろいろ教わったせいで、無駄にいろいろ邪推する癖がついてしまったな。

考えるのに疲れてしまったので、俺は制帽を脱いで苦笑いしてみせる。

「確かに納得できる話です。ただ疑うのが参謀の仕事なので、今もまだ混乱していますよ」

すると大佐が笑う。

「それを正直に言ってしまうのが、貴官の面白いところだな」

「リコシエ殿の話は限りなく真実に聞こえます。素直に信じて彼女の手を取るのが人の道でしょう。ただ戦争そのものが人の道に反していますので……」

やらなくてもいい戦争で敵も味方も大勢死なせてきた身だ。今さら人の道など説けるはずがない。

俺の言葉に大佐は微笑む。

「先ほど少し話を聞いたが、私の知る限り、リコシエが提供してくれた情報に誤りはなかった。彼女の人柄は信用できそうだし、耳を傾ける価値はあると思う」

「閣下がそうお考えなのでしたら、小官はそれをお手伝いするまでです」

決断するのは司令官の仕事だ。参謀は計画を作って提案するだけであり、決定は全て司令官に委ねる。

大佐は大きくうなずいた。

「ありがとう。もちろん彼女も全ての情報を握っている訳ではない。彼女が我々に報告できるのは、自分が誰と会って何を話したかぐらいだ」

それだけでもリトレイユ公を追い詰めるだけの力はあるだろう。

リトレイユ公の影武者による裏切り。

謀略戦において勝利を確信できるほどの一撃だ。

だがそれだけに全ての可能性を疑う必要はある。そんな都合のいいことがそうそう起きるはずがない。

しかし一方で、疑ってばかりでは影武者を味方に引き込めないというジレンマもある。こちらが半信半疑では、リコシエも裏切りを躊躇するだろう。

そのときふと、俺は「死神の大鎌」の力を思い出した。

そこで俺は心の中で、こつ強く念じる。

(俺はリコシエを「全面的に信じる」ことにする)

もしこれがいずれ俺の命取りになるようなら、「死神の大鎌」が

反応するはずだ。

幸い、特に反応はない。どうやら大丈夫そうだ。あくまでも「今のところは」だが。

あと俺以外の誰かが死ぬことについて「死神の大鎌」は一切反応しない。大佐やハンナたちが殺されようが反応しないし、俺が投獄されるような未来でも反応はしないと思う。

逆のパターンで検討してみよう。

(俺はリコシエを「一切信用しない」ことにする)

こちらの場合でも、やはり「死神の大鎌」は反応しなかった。要するにこれだけで俺の生死が決まる訳ではないらしい。……今のところは。

ちよつとがっかりしたが、そんな俺にリコシエが心配そうに声をかけてくる。

「あの、どうかされましたか？」

「ああいえ、少し考え事を」

「参謀殿ですものね」

穏やかに微笑むリコシエ。リトレイユ公のそっくりさんだが、物腰や言葉遣いの端々に優しさが感じられる。本物もこんな感じだったら良かったのに。

そうだな、やっぱり彼女を見殺しにはできない。畏かもしれないが、人として為すべきことをしよう。

俺は大佐に向き直る。

「閣下、何としてもリコシエ殿を守りましょう。彼女は我が旅団の女性兵士たちと同じ境遇です」

その途端、大佐が嬉しそうな顔をした。

「どうだ、リコシエ。私と全く同じことを言ったぞ」

「……本当ですね」

どうやら俺が来る前にいろいろやり取りがあっただらしい。二人で顔を見合わせて笑っている。

「クロムベルツ様のお言葉を聞いて安心いたしました。私の正体については、アルツァー様とクロムベルツ様、お二方だけの秘密でお願いいたします」

「わかった。誰にも言わないと約束する」

大佐もうなずいた。

「リコシエの身の安全を考えれば、それが最善だろうな。秘密を知る者が私一人では何かあったときに彼女を守りきれないが、あまり増やす訳にもいかないだろうし」

大佐はそう言うのと俺に向き直り、真面目そのものの口調で命じた。
「本日をもって、我が旅団はリコシエの安全を守る。これはリトレイユ公から我が旅団を守るのと同じ優先度とする。これは旅団長命令だ」

「了解いたしました」

俺は敬礼し、それからリコシエに笑いかける。

「今日から小官もあなたの味方です。危険を感じたら、すぐにここに避難してください。あらゆる手を尽くしてあなたを守ります」

リコシエは落ち着いた様子だったが、どこかホツとした様子で頬を赤らめている。保護の確約を得られて嬉しかったのだろう。この約束は必ず守ろうと心に誓う。

「あの……本当にありがとうございました。これからも未永く、よろしく願いましたます」

リコシエはそう言つと、俺に深々と頭を下げた。

第56話「裏切者たちの斜陽」(地図あり/再掲)

【第56話】

リトレイユ公の影武者・リコシエを味方に引き込んだことで、俺たちはリトレイユ公の詳しい状況を知ることができた。

「現リトレイユ公ミンシアナは、弟が生まれる五年前までは先代の一人娘だった。五王家の宗家では男系相続が伝統なので、彼女の叔父や従兄弟たちが継承候補になっていたようだ」

リコシエが帰った後、夕日が差し込む旅団長室でアルツァー大佐はそう話す。

俺も国内政治の基礎知識として知ってはいるが、貴族社会は秘密や裏事情が多いので深くは知らない。

大佐は続ける。

「だが妙なことに彼女の叔父は急死し、従兄弟たちも次々に当主の座を辞退した。何が起きたかは誰も知らないが、我がメディレン家ではミンシアナの政治工作があつたと考えている」

証拠を残さないのが彼女のやり方だという。

ただ、強引なやり方は当然のように反発を生む。

「彼女の父は自分の代で女系になってしまうことをひどく嫌がったそう。だが他に継承権を持つ者がいないことから、仕方なく娘に家督を譲った。有力家臣や一門衆たちの一部が猛反発したらしいが、

「当主の決定では従うしかない」

俺はそれを聞いて、ふと疑問を抱く。

「もしかして彼女に歳の離れた弟がいるのは、先代当主の対抗策ですか？」

「だろうな。適当なタイミングで姉から弟に家督を譲らせれば、リトレイユ家は男系のまま存続していくことができる」

五王家の持つ権力と資産は国家に影響を及ぼすレベルなので、相続をめぐるには骨肉の闘争が繰り広げられるらしい。

それを少しでも減らすために家督相続の序列や資格要件が厳密に定められているのだが、リトレイユ公はそれを逆手に取ってライバルを蹴落としたとみられている。

「弟のセリン殿がいつ成人するかによつて、政局は大きく変わる。一般的には十代半ばだな。成人前の彼には契約を結ぶ権限がないし、子を作ってもその子は嫡流とはみなされない」

子を作るって。

「……早すぎませんか？」

「未婚の嫡男との間に子を作つて、それをネタに財産を掠め取ろうとする者が多いのだ。実際には法的にも慣習的にも無効なのだが、それを知らない女中などがやる」

幼い若君をメイドが誘惑して……という感じか。嫌な話を聞いて

しまった。御曹司も楽しじゃないな。

「貴族様というのは大変ですね」

「なに、そういうときのためにどの家も法学者と神学者を召し抱えているからさほどでもないだろう。堕胎の専門家もな」

また嫌な話を聞いてしまった。あんまり深掘りしない方がいいぞ、この話題。

俺は必死に話題の修正を試みる。

「とにかくセリン殿はまだ子供として保護されている期間で、この状態であればリトレイユ公の地位は脅かされないのですね」

「そうなるな。だが先代がセリン殿を早々に元服させようとするかもしれない。リトレイユ家には七歳で元服した先例があるそうだ。これは当主と嫡男が同時に戦死したからだが、何であれ先例があるのは強い」

「七歳というと、あと二年ですか……」

なるほど、リトレイユ公が性急な謀略を推し進める訳だ。さつさと地盤を固めてしまわないと、歳の離れた弟に全部持って行かれてしまう。

でも別に弟が家督を相続したところで、リトレイユ公が追放や処刑される訳でもないだろう。当主の姉なら一生安泰だ。

アルツァー大佐はメディレン家当主の叔母で、生活には困っていないし好きなことをやって暮らしている。

そんな俺の考えを見透かしたように大佐は苦笑する。

「彼女にしてみれば、一度手に入れた権力を手放すことなど考えられないだろう。彼女の自由は当主の権力によって守られている。世の中の人間が皆、貴官のように清廉だと思ってもらっては困るぞ？」

「承知しております」

とはいえ、命令をこなして給料をもらう生活を前世から続けている俺には、どうにも理解しがたい。

職場の雰囲気が悪くて給料がすっかり払われていれば、それ以上望んでも仕方ないと思うんだけどな……。

俺に政治力が皆無なのは、たぶんこんな考え方のせいだろうな。命の危機でも迫らない限り政争なんかやりたくもない。

大佐はそんな俺の顔を、困ったような表情で嬉しそうに見ている。矛盾した表現だが、そうとしか言いようがない表情だ。

「まあいい、とにかくリトレイユ公の立場は複雑だ。家中も先代派と当代派で分裂していて、互いに牽制や調略を繰り返している。そのせいでリトレイユ公は領内からあまり動けないようだ」

「留守中に何が起きるかわからないのでは、対外工作の余裕はありませんね」

「そうだな。だからこそ領外で政治工作ができる影武者が必要だったのだろう。リコシエの努力はリトレイユ公の需要と見事に合致していた訳だ」

そう言って大佐は窓の外の夕日を眺め、そっと溜息をつく。

「おかげでリトレイユ公の陰謀が軌道に乗ってしまったのだが、リコシエにとっては生き延びるために必要だったことだ。皮肉なものだな」

有能な影武者を得たことで、リトレイユ公はそれを他家に派遣して政治工作を行うようになった。

しかもリコシエはリトレイユ公と違って、他者への思いやりがある。

彼女の気配りや思いやりは全てリトレイユ公の行いとして観測されるので、リトレイユ公の弱点を補う形になった。

俺は少し考える。

「この政争に時間をかけても良いのなら、リコシエ殿が離反した時点で勝負はついていましたね。彼女はリトレイユ公にとって最強の外交官ですし、リトレイユ公の人物面での評価も支えていましたから」

「確かにな。リコシエは『もう一人のリトレイユ公』と言って差し支えない存在だ。彼女が裏切ればリトレイユ公は家中の政争で手一杯になり、他家への干渉力は徐々に弱まるだろう。だが貴官も条件をつけているように、時間をかける余裕はない」

大佐は険しい表情で腕組みした。

「既にジヒトベルグ家とミルドル家はリトレイク公を潰すつもりで動いている。両家は政治力も軍事力も衰え、もはや自力では隣国との領土紛争にも対処できない。となれば性急で過激な政略も躊躇しないだろう」

「帝国の西半分がその有様というのは困ったものです」

かつての大帝国も領地を磨り減らされ、すっかり衰えてしまっている。これ以上ガタガタになったら俺の給料と寝床すら危うい。おまけに旅団の女の子たちを守ることまでできなくなる。

< i 5 6 0 1 4 9 — 3 5 6 7 8 >

「では閣下、二年……いえ一年以内に決着をつけるおつもりですか？」

「さすがに貴官は察しいいな。その通りだ。今の状況が長引くとキオニス遠征の惨劇が繰り返されることになる」

大佐はそう言い、そつと声を潜めた。

「ミルドル家が今、メディレン家の仲介で帝室に接近している。リトレイク公がブルーージュ公国に攻城砲を提供した件を告発するぞうだ」

敵国への内通となれば、さすがにあの皇帝も知らん顔はできないだろう。放置すればミルドル領が危うい。

最悪の場合、ミルドル家がブルーージュに降伏してしまう可能性もある。そうなればミルドル家は帝室の敵だ。

でもあの皇帝、ボンクラっぽい感じなんだよな……。

「それで帝室が動いてくれればいいのですが、あの偉大なる皇帝陛下が正しい判断を下せるかどうかが問題です。参謀としては次の手を用意すべきかと」

「貴官は皇帝に対しても容赦しないな。だが私も同意見だ」

大佐は苦笑し、俺に言う。

「この告発が失敗に終わった場合、ミルドル家は追い詰められるだろう。貴官はどうなると考えている？」

「私がミルドル公なら転生派に改宗してブルージュ側に寝返りますね。ブルージュも元は五王家の一員でしたし、悪いようにはしないでしょう。……何か？」

アルツァー大佐が目をまんまるにしているのが可愛かったので、俺は首を傾げる。

彼女はしばらく驚いた顔のままだったが、急に笑いだした。

「ぷっ、あはははは！ 面白いな、貴官は！ 実は私も同じことを考えていたのだが、言い出すのが不安でな。貴官の考えを先に聞きたかった」

ブルージュ家の裏切りは歴史の闇に葬り去られており、その事実を知る貴族たちでさえ「あんなことは二度と起きない」と本気で信じている。そう教育されるからだが、「起きない」と「起きてはいけない」は全く別の話だ。

しかし実際には寝返りなど日常茶飯事だ。条件さえ揃えば何度でも起きる。

大佐は御機嫌な表情で声を弾ませる。

「よしよし、貴官が私と同じ考えで安心したぞ。私の考えは決して妄想ではなかったな」

いや、二人そろって妄想してるだけという可能性もあると思います。

しかし大佐はよっぽど嬉しかったようで、興味深そうに俺を見つめてきた。

「なぜ貴官はミルドル家が寝返ると踏んだ？」

「以前に閣下から教えて頂いた情報が確かなら、ミルドル家はおそらくブルージュ家と何らかの裏取引をして証拠を得たのではないかと思います」

リトレイユ公とブルージュ公国の間に密約が存在するなら、ブルージュ公国にはその証拠がある。陰謀告発の材料はブルージュ公国から入手するのが一番手っ取り早い。

ミルドル家とブルージュ家は領地をめぐって戦争を続けているが、一方で戦争を激化させないための方策も用意しているだろう。欲しいのは血ではなく領地だ。共倒れになっただけは意味がない。

外交交渉を行うためのパイプは絶対にあるはずなので、それを通じてリトレイユ公を告発する証拠を揃えた可能性が高い。

一方、ブルージュ公国にとってはリトレイユ公も敵だから失脚しても困らないはずだ。帝国に内紛が起きれば都合がいいから、せいぜい高く売りつけるだろう。

もつとも、ブルージュ公国は同じ転生派の隣国であるアガン王国とも不仲だ。隣国というものはだいたい仲が悪い。

そういう意味では、リトレイユ公が失脚するとブルージュ公国は対アガン工作がやりづらくなるかもしれない。リトレイユ家はアガン王国と戦争を続けており、ブルージュにとっては「敵の敵」になる。

この辺りは山奥暮らしの参謀大尉には読みきれないので、あまり深読みはしないことにする。わからないものを無理にわかつとすると誤った推論をしてしまう。

「確実なのはミルドール家は非常に追い詰められているということ。告発が失敗すれば帝室とリトレイユ家が完全に敵に回り、味方はジヒトベルグ家だけになります」

「そうなんだ。だが頼みの綱のジヒトベルグ家は、キオニス遠征の大敗で発言力が地に落ちている。もう打つ手がない」

「ええ。後はブルージュと手を組むしかないでしょう。先々代ブルージュ家はもともと五王家の一員ですし、当時の政略結婚で共通の先祖がいます」

もちろんそう簡単に和解する気にはなれないだろうが、お互いに帝国内や転生派諸国内で苦境に立たされている。土壇場になれば為政者として決断するはずだ。

大佐は俺をじっと見ている。

「さて、リトレイユ公はどう出るかな？」
「帝国のために殉じるような人物ではありませんから、ミルドール家が寝返っても知らん顔でしょう。帝室はそうもいかないでしょうが」

大佐はすぐにうなずいた。

「ではリトレイユ公と皇帝の間に楔を打ち込めるな。ただちに政治工作を始めるとしよう。その間、貴官は兵の教練と選抜を頼む」

「了解しました」

俺は敬礼した。

さあ、ますますきな臭くなるぞ……。

* * *

第57話「崩壊の序曲」

【第57話】

そしてついに、ミルドル家がリトレイユ公を告発した。容疑はもちろん、ブルージュ公国との内通だ。

告発の根拠となる文書や証言も帝室に送り付けたらしい。もちろん帝国内に激震が走った。

「帝都は大変そうだな」

アルツアー大佐は俺の淹れたコーヒーに砂糖をどばどば投げ込みながら、まるつきり他人事の口調でつぶやいた。

俺も他人事なので、コーヒーの方が気になって仕方がない。

「閣下、そんなに砂糖を入れたらコーヒー本来の味わいが消えませんか？ コーヒーには焦がした砂糖のような、ほのかな甘い香りがあります」

「貴官はリトレイユ公の香水を嗅ぎ分けられなかった癖に、なんでコーヒーだけそんなに口うるさいんだ」

そりゃ前世の記憶だからな。今の嗅覚ではあまり感じられないのが残念だ。

アルツアー大佐は飽和水溶液の実験並みに砂糖を放り込んだ後、ようやく笑顔でコーヒーを飲む。俺の中ではあれはもうコーヒー色の砂糖水だが、楽しみ方は人それぞれなのでこれ以上の口出しはや

めておく。

大佐はフツと笑う。

「不満そうだな？」

「コーヒーについては諦めています。ミルドール家の告発については不満がありますね。どうせ偉大なる皇帝陛下は『慎重な判断』をなさったんでしょ？」

あの皇帝……ペルデン三世という平凡なおっさんは、リトレイユ公を信頼しきっている。

序列二位のジヒトベルグ家はキオニス遠征で歴史的惨敗、三位のミルドール家はブルージユ軍の侵攻で大損害を受けた。

そして四位のメディレン家は日和見を決め込んでいる（ように見える）とくれば、リトレイユ家への信頼が増すのも当然だろう。

510

そのリトレイユ家は国境地帯でアガン王国と派手に戦い、辺境の領土を守り抜いている。

さらに対ブルージユ戦争のために兵力を提供しており、転生派諸国との争いになくはならない存在になっていた。

アルツァー大佐はとびきり甘いコーヒーを飲みながら渋い顔をしてみせる。

「帝室から見れば、ミルドール家の言うことなど信用できないだろう。どれだけ証拠があろうとも、実績がなくては聞く耳を持たない。あの御仁はそういう性格だ」

俺はブラックコーヒーを飲みながら、湯気の方この大佐を見つめる。

「リトレイク公のその『実績』に疑問符がついているんですから、お気に入りに対する告発であつても精査すべきなんですが」

「それができるような人物なら、戦死した先代ジヒトベルグ公の査問会など開かなかつただろう。死体に石を投げる王に期待などしない方が賢明だ」

「確かに」

この帝国が衰退の一途をたどっているのも、歴代皇帝が無難で凡庸な人物ばかりだったからだ。帝位継承をめぐって殺し合うほどの苛烈さはないが、その代わりに何事も先例主義で問題を先送りにする。

自分の代だけはどうにか持ち堪えさせて、少し疲弊して磨り減った帝国を次の皇帝に手渡す。

近年の帝国史はその繰り返しだ。

俺はコーヒーを飲みながら、じつと考えた。

「メデイレン公国、なんてのも悪くないかもしれないな」

「大逆罪だぞ、口を慎め」

アルツァー大佐はそう言った後、ただ甘いコーヒーを飲み干す。それから当たり前のような口調でこう返した。

「そのときは元帥をやってもらうからな」

「閣下の元で働けるのでしたらお引き受けしますよ」

「ほう、その言葉忘れるなよ？」

俺と大佐は互いに見つめ合って微笑んだ。

そんな雑談をしていると、俺の部屋にロズ中尉が入ってくる。

「マスター、コーヒーを一杯頼む」

マスターじゃないんだが。というか、俺の方が階級が上なんだが。

「そこに余りがあるから勝手に飲め」

抽出した残りがあるのでロズに押しつける。

するとロズはカップを手にしたまま、深々と溜息をついた。

「義父上がミルドール公と仲違いした。……ということになっていく」

ロズの義父はミルドール公の実弟で、主に財務を担当している。

ミルドール門閥の副当主的な立場だ。

その実弟が当主と仲違いしたとなれば、やはりただ事ではない。

だが前後の事情がわかっているんで、俺は単刀直入に尋ねる。

「門閥を割る準備か」

「そうなんだが、もう少し順を追って話させろよ。お前はいつも先を読みすぎるぞ」

「すまん」

ロズはまた溜息をついて説明を続ける。

「旅団長閣下、そののできすぎる参謀が言う通りに事態が進行しています。ミルドール家はリトレイユ公がブルージュ公国と内通している証拠をつかみ、皇帝陛下に告発しましたが不首尾に終わりました」

「やはりそうか」

大佐が気の毒そうな表情でロズを見ると、ロズは頭を掻く。

「逆に皇帝陛下からは厳しいお叱りを受けたそう、ミルドール家はもう帝国内でやっていくのは無理だと判断したようです」

ロズの妻はミルドール公弟の三女だから、ロズ自身も一門衆に含まれる。俺は気が気ではない。

「ミルドール公はブルージュと手を組み、帝国を離脱することにしたんだな？ それで公弟殿下とお前たちはどうなるんだ？」

「おいおい、だから順を追って話すって言ってるだろう？ どこまでお見通しなんだよ、まったく」

ロズは苦笑しつつ、なぜかホツとした様子で続けた。

「ミルドール公は反皇帝派の門閥貴族たちを率いて、ブルージュ公国と連合王国を作ることにした。ただし転生派には改宗せず、両宗派の融和を目指すらしい」

「要するに転生派と安息派を都合良く使い分けるつもりだろ」

そううまくいくかな？ 両派からボコボコにされそうな気がする

んだが。

しかしロズは肩をすくめてみせる。

「それは俺にはわからんが、義父上は残留する門閥貴族たちの面倒を見ることになった。どれだけ疎まれようが帝国に留まりたい貴族は多いからな」

こちらもちちらで茨の道だ。当主が裏切り者になってしまつんだから、残留派のミルドール貴族たちは他家からさんざんな扱いを受けるだろう。俺なら離脱する。

だが俺はミルドール公弟の意図もなんとなくわかった。

「では公弟殿下は当主の命綱になるつもりだな」

「ん、まあそういうことだ。……お前、まさか誰かから聞いたのか？」

「参謀として憶測しただけだよ」

「やれやれ、これじゃ俺が報告するまでもなかったな」

ロズは笑いながら、すっかり冷めたコーヒーを飲んだ。

「すでにミルドール門閥の貴族たちはどちらに着くかをあらかじめ決めたようだ。国境地帯の領主たちは全員、ブルージュ側に寝返る。残る領地は半分以下だろう」

国境線が激変しちゃうじゃないか。しかも第六特務旅団の司令部にかなり近づいてしまふ。閑職だと思ってたのに騙された。

俺は溜息をつく。

「また面倒が増えるな」

「なあに、そのためにこの旅団には優秀な参謀がいる」
あいな。

するとアルツァー大佐が笑う。

「シユタイアー中尉の言う通りだ。頼むぞ、クロムベルツ大尉」

「……はい」

それもこれも全部リトレイユ公のせいだ。あいつ絶対に許さないからな。

そういえば影武者のリコシエは元気だろうか。最近は何物も影武者も全く姿を見せなくなってしまう、ちょっと心配しているところだ。

* * *

影武者のリコシエは主君への報告のため、久しぶりにリトレイユ領に帰還していた。

本物と影武者が揃ってしまうと影武者の存在が露見しやすくなるので、こういうときはレース地のベールを被って顔を隠すのがリコシエのやり方だ。

さらにこうすることで、主従の力関係を明確にできる。

本物は普段通りに。

影武者は存在を潜めて。

こういった様々な配慮によって、リコシエは今日まで生き延びてきた。

そして彼女は同じ顔の主君に、影武者としての報告をする。

「『人魚の王』に『貝殻』を要請した件ですが、未だ検討中との回答を頂きました」

リトレイユ公は符牒を好む癖がある。彼女は側仕えの使用人たちにさえ心を許しておらず、彼らに聞かれても情報が漏洩しないように気をつけているのだ。

「人魚」は海運が盛んなメディレン家を意味している。その「王」は当主のメディレン公だ。そして「貝殻」は「資金提供」を意味していた。

つまり今の報告を平文に直すと、次のようになる。

『メディレン公に資金提供を依頼した件ですが、未だ検討中との回答を頂きました』

この報告にリトレイユ公は眉をひそめる。

「……理由は？」

理由は単純明快だ。メディレン公には年下の叔母がいる。第六特務旅団を率いるアルツアー大佐だ。

大佐はリトレイユ公に協力こそしているものの、水面下では敵対している。

そして大佐はメディレン公とは仲が良い。それだけだ。

しかしリコシエはそれを言わなかった。

アルツアー大佐が不利になるのを避けたいという思惑だが、リトレイユ公は聡明で自発的な者を警戒する。警戒されては困るのだ。

だからあくまでも表向きの理由を述べる。

「『東風』が強く難しい、とのことでした」

「東風」はシュワイデル帝国の東にある海運国エオベニアを指している。帝国と同じフィルニア教安息派の友好国であり、帝国の主要な交易相手でもある。

ただ水面下では双方の利益をめぐって激しく対立しており、メデイレン家やリトレイユ家にとって手強い商売敵でもあった。

エオベニアとの利権争いで劣勢に立たされているという口実なら、角も立たない。

リトレイユ公は一瞬眉をひそめたが、すぐに平静を取り戻す。

「仕方ありませんね。……そういえばファゴニル地方は昨年、農民の反乱が起きましたね。三年間の重懲罰税を課して政治資金を調達しましょう。また反乱が起きればさらに延長で」

ファゴニル地方はリコシエの故郷だ。今も彼女の家族や友人たちが暮らしている。

だがリコシエは恭しく頭を垂れるだけで何も言わなかった。

（少しでも不満がある態度を見せてはいけない。私はリトレイユ公の影。主が踊れば影も踊るもの。それがどれだけ無様な踊りだとし

ても)

影武者は当主の身代わりを務める役職であり、政治的な助言は職務から逸脱する。使用人のそういった逸脱に対しては驚くほど苛烈なのがリトレイユ公ミンシアナという人物だった。

リコシエが無言だったので、リトレイユ公は話題を変える。

「良い『痛み止め』がもうすぐ手に入りそうです。準備が整い次第、お前に任せます」

その言葉にリコシエは内心で驚愕する。

(去勢薬が!?)

リトレイユ公は先代当主である父と、まだ五歳の弟セリンを最大の脅威と見なしている。そのためあらゆる方法で二人を排除しようとしていた。

ただ暗殺などの強硬な手段を用いれば確実に疑われる。

そこでリトレイユ公はセリンたちの生殖能力を喪失させる毒薬を調査させ、密かに用いるつもりなのだ。彼らが子孫を残せなくなれば、リトレイユ家は男系が断絶する上にリトレイユ公以外に子孫を残せる者がいなくなる。

さすがに先代も強くは出られなくなるだろう。

(先代はともかく、セリン様には何の罪もないでしょうに……。何とかしてアルツァー様とクロムベルツ様にお伝えしなければ)

あの二人なら何とかしてくれるという確信があった。

だがリトレイユ公は影武者に冷たく命じる。

「『北の斜面』に仕掛けた『鈴』が鳴っています。行って聞いておやりなさい」

（買収したミルドール門閥貴族からの報告か……：帰りに第六特務旅団に寄れば、アルツァー様たちにお会いできるのだけど）

そう思いつつ、リコシエは恭しく一礼する。

「承知いたしました」

* * *

リコシエが去った後、リトレイユ公は無言で物思いに耽る。

（このところ、どこからか情報が漏れている気がするのですが……。まさか影武者ではないでしょうね）

リコシエに「セリンたちに使う去勢薬が調達できた」と教えたのは嘘だ。

命を奪わずに生殖能力だけを奪い、しかも相手に気づかれないような薬など、そうそう作れるものではない。高名な錬金術師や呪い師に金を払っているが、未だに完成していなかった。

（もし影武者が裏切っているのなら、糸を引いているのは父上たちか他の五王家でしょう。この毒餌に食らいつくはず）

リトレイユ公は呼び鈴を鳴らした。忌まわしき者たちを呼び寄せ

る専用の呼び鈴だ。

覆面をした二人の人影が音もなく現れる。リトレイユ家に代々仕える暗殺者たちだ。暗殺だけでなく、監視や誘拐、脅迫など何でもする。リトレイユ家の暗部を司る集団だった。

彼女は暗殺者たちに命じる。

「私の『替えの服』を監視しなさい。綻びがあれば処分して構いません」

暗殺者たちは無言でうなずき、そして音もなく消えた。

* * *

第58話「突き立てられた中指」(地図あり)

【第58話】

影武者リコシエはミルドール領からの帰り道、馬車から山脈を眺めていた。

あの山脈の麓に第六特務旅団の司令部がある。アルツァー大佐たちとは目と鼻の先だ。

(御者に命じて、あそこに寄り道するぐらいは造作もない……)
ここにいる「リトレイユ公」が影武者であることは御者や侍女たちすら知らない。護衛の騎兵たちも知らないだろう。

リトレイユ公が先代当主や実弟の排除を目論んでいること、そのために去勢薬を調達したことをアルツァー大佐に伝えなければならぬ。

普段は決められた屋敷から出ることすら許されない身だが、今ならば自由だ。

(リトレイユ公は急に違う命令を与えることがよくあるし、予定にない行動も多い。怪しまれる心配はないはず)

そう思ったリコシエは、御者に命令を与えるために側仕えの侍女に声をかけた。

「馬車を……」

だがそのとき、リコシエは大事なことを思い出した。

(最も優先すべきは、私が裏切り者だと気づかれぬことでは?)

ほんのわずかな油断も隙も、リトレイユ公相手では命取りになる。それは他の影武者たちが身をもって証明してくれた。

(リトレイユ公は猜疑心が強い。後で申し開きができないようなことは、絶対にしてはいけない)

ふと見ると侍女が怪訝そうな顔でこちらを見ている。

「あの、どうかなさいましたか?」

「いえ、馬車をもう少し丁寧に御するよう命じようかと思ったのですが、きつと道が悪いのでしよう。あれこれ口出ししては御者も仕事がいやにくいというものです」

澄ました顔でそう答えると、侍女が感心したように深くうなずいた。

「なんとという優しいお心遣い……。感動いたしました」

(それ、「本物」の前では言わない方がいいですよ。あの方は下々の者の気持ちになど興味ありませんから)

内心で侍女の身を案じつつも、影武者は穏やかに微笑む。

「お前も長旅で疲れたでしょう。よく働いてくれましたね」

「い、いえ、そんな……」

目の前の相手が同じ平民だとは知らず、侍女はすっかり恐縮している様子だ。この謙虚さなら生き延びられるかもしれない。他人事ではないが侍女の無事を祈る。

(私も気をつけなくては……)

次第に遠ざかる山々を見送りながら、リコシエは気を引き締めた。

* * *

今日もロズが俺の部屋にコーヒーを飲みに来る。

「嫁さんの実家から連絡が来た。義父上が泳がせている裏切り者が、どうやらリトレイユ公と会っていたらしい。本人が来るとは驚きだが」

それ影武者だよ。この時期に本人がミルドール領に来るはずがない。危険だからな。

でもこれはロズにも秘密だ。いずれ明かすことにはなると思うが、今はまだ危険すぎる。どこに内通者がいるかわからないからな。

まあでもリコシエが無事なようでホツとした。彼女が妙な動きをすれば、リトレイユ公はすぐに気づくだろう。猜疑心だけはやたらと強いらしい。

するとロズが俺をじっと見る。

「何か知っている顔だな？」

「こんなところで査問会を開くな。参謀だから知っている機密は多い」

俺は勘の良い同僚を適当にいなしつつ、今後のことを考える。

「リトレイク公はミルドール家が帝国から離反することに気づいただろう。帝国の未来を考えるなら何としても翻意させなければならぬ問題だが、彼女にとって帝国の未来など大した問題じゃない」

ロズが苦笑する。

「凄まじい女傑だな。ある意味、尊敬に値するよ」

「同感だな」

彼女は自分の利益のためなら帝国が崩壊しても構わないと思っている。ただし、帝国が崩壊すれば彼女の利益も損なわれる。となると彼女が次にどう出てくるか。

「リトレイク公は敵を作って攻撃することで動乱を起こし、その渦中で利益を得る。そのやり方を踏襲するだろうから、ミルドール家への風当たりは強まるだろう。帝国に残留する公弟殿下もな。もちろんお前もだ、ロズ」

「そいつは困るな。俺はともかく、俺の家族が帝国で暮らしにくくなるのは勘弁してくれ」

ロズは表情を曇らせる。

「おい、良い知恵を出せ。なんかあるんだろう?」

「ある訳ないだろ」

俺は陸軍の旅団付参謀なの。政治の話されても困るの。
……いや、ないこともないか。

「少し時間をくれ。大佐に相談する」

「すまん。恩に着る」

「礼ならうまくいった後で頼む」

我ながら卑劣な策略を思いついたもんだ……。

* * *

それからしばらくして、ミルドール公が帝国からの独立を宣言し、ブルージュ公国との合併を果たした。俺は事前に知っていたが、もちろん電撃的な裏切りだ。

ミルドール公は形式的にはブルージュ公と対等の立場となり、二人の君主がそれぞれの本領を治める国になるようだ。

525

ブルージュ公はフィルニア教転生派、ミルドール公は安息派のリーダーとして公国を導いていくと発表する。

ただし国名はブルージュのままだから、どちらが上位かは明らかだ。企業の合併みたいだな。

一方、ミルドール公弟はシュワイデル帝国に残留し、ミルドール家の新たな当主を名乗った。

一見すると兄弟が袂を分かったような感じだが、実際はそれぞれが離脱派と残留派の受け皿となっている。どちらの派閥も「ミルドール宗家当主」に仕えている体裁を維持しているからだ。

ここまででは予想していたが、新しい国境線は多くの者の度肝を抜くものだった。

「ブルージュの牙が帝室直轄領に食い込んでいるぞ。ミルドール領が東西に分断されてしまっている」

アルツァー大佐がしかめっ面をしている。

< i 5 9 0 2 0 3 — 3 5 6 7 8 >

驚いたことに、出奔したミルドール公は領地の中央部をこっそり持っていつてしまった。残されたのは帝室直轄領に隣接する東部と、敵地に囲まれた西部だ。

西部は本当に孤立してしまい、南のジヒトベルグ領を通らないと東部に行けない有様だ。

ハンナなんか青い顔をしている。

「第六特務旅団の辺りが国境になっちゃってるじゃないですか！？
ていうか、地平線の辺りにブルージュ公国の軍旗が見えてますよ
!?!」

「これは予想以上にメチャクチャだな。あのクソ義父^{おやじ}め」

ロスも事情を知らなかったのか、渋い顔をしている。ミルドール公と公弟は情報統制を徹底したようだ。

ブルージュ軍は事前にミルドール領内に進軍していたようだ。気づいたらどこの城塞もブルージュ軍に吸収されていて、第三師団の兵や大砲もブルージュ軍に吸収されてしまったらしい。

ゼツフェル砦の辺りもブルージユ領になってしまったから、ダンブル大尉も今頃はブルージユ軍の制服を着せられているかもしれない。気の毒に。

アルツアー大佐は溜息をつきながら俺を見る。

「ミルドール公はブルージユとの国境地帯を手土産に持っていくと思っていたが、これはかなり思い切った割譲の仕方だな。貴官の見解を聞きたい」

そんなもん俺にもわからないが……。ただシュワイデル側の反応を考えれば、おのずとブルージユ側の思惑は想像がつく。

「帝室直轄領、しかも帝都への直通ルートができてしまいました。帝室の喉元に剣を突きつけた格好です」

大佐は難しい顔で腕組みした。

「ああ、さすがにこれは帝室が黙っていないぞ。もともと帝室は帝国の旧領地の回復を至上命題にしている。離反など許すまい。残留したミルドール門閥の領主たちにブルージユ討伐を命じるだろう」

だが俺は首を横に振る。

「今さら閣下に申し上げるまでもありませんが、誰も動きませんよ」「まあそうだな。門閥貴族は門閥の当主にのみ従う。皇帝が喚いたところで無駄だ」

しかしロズは不安そうな顔だ。

「本当に大丈夫なのか？ ジヒトベルグ家が西ミルドールを攻め落としてたりしないか？ あそこは落ち目だから勅命には逆らえないだろう」

「心配するな。ミルドール家とジヒトベルグ家は長年の盟友だから密約を結んでいるはずだ」

ロズにも秘密だが、アルツァー大佐の政治工作で両家は手を組んでいる。

ミルドール家が領地を割って離反するという大胆な策に出たのも、おそらくジヒトベルグ家が水面下で協力しているからだろう。

「ブルージュ・ミルドール・ジヒトベルグの三家は反帝室勢力とみていい。ただし、ブルージュとジヒトベルグは敵同士のままかもしれない」

「ややこしいですね……」

ハンナが混乱している。大丈夫だ、俺も混乱している。

ミルドール公に従って離脱した領主は拠点周辺のごく一部だ。表向きはそうなっている。

しかし実際には残留した全ての貴族、さらにはジヒトベルグ家が離脱派を水面下で支援している。

ハンナが俺に質問してくる。

「皇帝陛下がミルドール公を討伐しませんか？」

「攻略の足がかりになるのが東ミルドールだが、現地の領主たちは絶対に協力しないだろう。逆に帝国軍の情報をミルドール公に流す

ぐらいは平気でやる。それに」

俺は壁の地図、ミルドル公の本拠地周辺をトントンと叩く。

「ここには既にブルージュ軍が駐留して自国領土だと宣言している。第二・第三師団が使い物にならない状態で奪い返すのは不可能に近い。皇帝が討伐を命じても側近たちが止めるだろう」

帝室直属の第一師団単独では無理だが、メディレン家の第四師団は海軍主体で陸軍を内陸部に遠征させる能力はない。

リトレイユ家の第五師団は帝室の優遇でかなり強化されているが、リトレイユ公は自分の得にならないことはしない。遠く離れたミルドル領など興味はないだろう。

「じゃあ皇帝陛下は先に東ミルドルを没収しちゃうんでしょうか？」

「その場合は、東ミルドルの領主たちがブルージュ公国への離脱を宣言して終わりだな。領地を安堵してくれない君主など敵ではない。忠誠に値しないよ」

ブルージュ公国とシュワイデル帝国の新たな国境地帯は、全てミルドル門閥の貴族たちが治めている。要するに同胞だ。

ここでは帝室も余所者に過ぎない。ミルドル公はこの地域の王なのだ。

しかしハンナはますます心配そうな顔になる。

「いいんですか、これ？」

「良くはないな。この帝国は完全に分断されてしまった。このままだとすぐに崩壊するだろう」

民衆の動揺も凄まじい。五王家は帝国の守護者だと信じていただろうから、貴族たちへの不信感が高まっているはずだ。

特にリトレイユ領は農民の反乱が多いそうだから、これから頻発するかもしれない。

大佐は俺の言葉をじっと聞いていたが、やがて深くうなずく。

「ここまでの貴官の話は、私の見解と全て一致している。では皇帝には二つの選択肢しかない。そうだろう、大尉？」

「はい。『失った領土はごく一部だから大した問題ではない』とごまかしてミルドール公弟を新たな当主として認めるか、さもなければブルージュ・ミルドール・ジヒトベルグの反帝室勢力をまとめて潰すかです」

大佐は艶やかな黒髪をわしゃわしゃ掻きながら俺を見た。

「偉大にして聡明なる皇帝陛下はどちらを選ばれるかな？」

「なんせ偉大にして聡明ですからね……」

俺は苦笑するしかなかったが、これに関しては断言できた。

「この国は五つの師団がそれぞれの方面を守ること、どうにか国境線を維持してきました。後者を選択すれば国防どころではありませんし、軍事力も財力も払底します。そうなれば帝国は消滅します」

「よ」

あの皇帝は凡庸だが、凡庸だから明らかに愚かな選択はしない。必ず前者を選択する。その上で新たな計画を練るだろう。

代々の皇帝たちは帝国最盛期の領土を狙い続けている。自分の代で領土を失うことなど絶対に許容できない。

大佐は深々と溜息をついた。

「では多少の猶予はあるということだな。先日の貴官の提案は引き続き進めさせる」

「よろしく願います」

俺は大佐に敬礼した。

第59話「白羽の矢」(地図あり/再掲)

【第59話】

* * *

シュワイデル帝国皇帝ペルデン三世は、苦り切った表情で三人の男を見ていた。

皇帝の御前に立つのは、ジヒトベルグ公、メディレン公、そして新たにミルドール公を名乗っているミルドール公弟の三人だ。

つまりリトレイク公を除く五王家の当主がそろい踏みしたことになる。

皇帝は本当に渋々といった様子で口を開く。

「こうなつては仕方がない。まず貴公らの話を聞こう。ただし判断するのは余だ、よいな?」

「もちろんでございます、陛下」

そう答えたのは皇帝に次ぐ序列第二位のジヒトベルグ公だ。

まだ若いジヒトベルグ公だったが、今日の彼は堂々としている。

「先代ミルドール公は未だに帝室への畏敬の念を捨ててはおられません。元はといえば、リトレイク公がブルージュに攻城砲を融通したことが原因です。敵国に武器を貸し与えるなど、陛下への裏切りとしか申しようがありません」

皇帝はますます渋い顔をする。

「その件は余の方でも調べさせた。ただ、リトレイユ公は証拠は全て偽造だと主張しておるのだが……」

皇帝の言葉は微妙に歯切れが悪い。

居並ぶ諸侯はあくまでも無言だが、明らかに圧力があつた。リトレイユ公が敵国と取引をしていたことは事実であり、その目的がミルドール家の失墜だったことも議論の余地はない。とつとつ最後に皇帝は小さく咳払いをする。

「リトレイユ公がミルドール家を陥れるために策謀したことは、ほぼ確実であろう」

「おお……」

老齡のミルドール公弟が安堵の表情を浮かべる。

しかし皇帝はすぐに取り繕った。

「いや待て、リトレイユ公は余に忠誠を誓っておる。あの者を断罪すれば、アガンとの国境を守る第五師団に乱れが生じるかもしれぬ」

するとメデイレン公が静かに奏上する。

「その件でしたら、第五師団の古参将校たちから嘆願書を預かつております。現当主はあまりにも横暴で、人事権を乗馬鞭のように使いすぎるそうです。このままでは第五師団が疲弊してしまうと」

彼はさらに言う。

「リトレイユ公が失脚しても、第五師団の古参将校たちが軍を統率します。彼らは現当主に疎まれて閑職に身をやつしておりますが、元々は第五師団の幹部です。一線に復帰すれば実務面では何の問題もありませんまい」

「むづ……。だがリトレイユ家にも体面というものがある。先代当主とて愛娘が捕らえられては悲しむだろう。我が帝室は先代には借りがあるのだ」

皇帝にとってはこれが最後の抵抗だったが、メディレン公はそれを封殺する。

「その先代当主殿が嫡男セリン殿に家督を譲りたがっておいでです。今すぐにでも代替わりさせたいと」

帝室に貸しのある先代当主がそう言っているのであれば、もはや反対しているのは皇帝一人だ。

長い沈黙の後、皇帝はさすがのような目で諸侯を見回す。

「しかし……余はリトレイユ公が恐ろしい……。あの者の容赦のなさは存じておろう？ 誰があのを捕らえるというのだ？」

「確かに難儀ですな」

ミルドール公弟がうなずいたが、彼は落ち着いた口調でこう続ける。

「ですがメディレン公の年下の叔母・アルツァー大佐の配下に適任者がおります。私の娘婿の同僚でして、先のブルーージュ侵攻の折にめざましい軍功を挙げた優秀な若手将校です」

すかさずジヒトベルグ公が口を挟む。

「陛下もお会いになっておられます。ユイナー・クロムベルツ参謀大尉。キオニス遠征では第六特務旅団をほぼ無傷で生還させた不死身の猛将です」

「クロムベルツ……。うむ、記憶にあるな。あまり印象にないが、それほどまでに優秀であったか」

皇帝の言葉に五王家の諸侯たちは微かに苦笑する。実際には失笑といったところだが、もちろんそれを悟らせるようなことはしない。

あくまでもさりげなくジヒトベルグ公が補足する。

「当初はリトレイユ公の子飼いだと思われていた平民将校ですが、先の御前会議ではリトレイユ公の主張に堂々と反論し、我が亡父の名誉を回復してくれました。平民ではありますが誇り高さは貴族と変わりません。まさに男の中の男です」

クロムベルツのことを覚えていないということは、皇帝ペルデン三世は御前会議の細かいやり取りを覚えていないということになる。ジヒトベルグ公が味わった屈辱も覚えていないのだろう。それは諸侯を失望させるのに十分だった。

だが当の皇帝はそんなことに気づいた様子もなく、何度もつなずく。

「言われてみれば、確かにそのような者がいた気がするな。よかる

う、適任である。やらせてみようではないか」

「陛下の御英断、恐れ入ります」

ジヒトベルグ公は静かに頭を下げる。

皇帝は満足げにさらにうなずいた後、ふと心配そうな表情をした。「これで帝国の安寧は守られるであろうか？」

その問いにメディレン公がとびきりの笑顔で応じる。

「そのために我ら一同が努力いたしておりますゆえ、どうか御安心を」

「うむ、信じておるぞ」

こうして極秘裏に決定がなされ、それはただちにクロムベルツ大尉に伝えられた。

* * *

「俺にですか！？ ……失礼しました、小官にですか！？」

さすがに俺もちよっとびっくりしちゃったぞ。軍隊生活は驚くことばかりだが、今回ののは特別だ。

アルツァー大佐は淡々とうなづく。

「『リトレイク公ミンシアナを逮捕せよ』というのが、第六特務旅団に与えられた勅命だ。私は旅団長として、この命令を実行するための作戦案を貴官に要請する」

これ以上ないぐらい正規のルートで命令が下りてきた。えらいこ

とになったぞ。

「小官は憲兵将校ではないのですが」

「リトレイユ公は軍人ではないからな」

さらりと返された。これは手強い。

正規の手続きを経て命令が来たら、軍人としてはやるしかない。
俺は覚悟を決める。

「作戦の期限、および与えられた兵力をお聞かせください」

「兵力は第五師団以外は全て使えるように手を回しておいた。作戦完了の期限は約半年。ただし作戦案の提出は三日以内に行うように」
卒論より難しいことをやるのに与えられた猶予が三日なの、絶対におかしいと思うよ？

もっとも今の俺は大学生でも士官候補生でもなく、現役の参謀大尉だ。やるしかない。

「命令を受領いたしました。ただちに任務を開始します」

「ああ、よろしく頼む。すまないな、こんな急な話で」

アルツァー大佐もさすがに気の毒そうな顔をしてくれた。

「皇帝陛下は自身がリトレイユ公を切り捨てたことに怯えておいでだ。見捨てられたと知れば、リトレイユ公が何をするかわからないからな」

「彼女の本性を見抜く程度の先見性がありなら、初めから頼らなければいいでしょうに」

あのおっさんは、リトレイユ公がヤバいやツだと知りつつ頼りに

していた訳だ。中途半端な賢さに呆れてしまう。

すると大佐は溜息をついた。

「人間は自分だけは何とかできるとかだと思いたがるものだ。それは平民でも貴族でも変わらないが、貴族は平民に後始末をさせられるのが違うな」

後始末を命じられた身としては大変迷惑だな……。

もし計画が失敗すれば、リトレイユ公は俺を抹殺対象の上位に位置づけるだろうし、皇帝や諸侯も俺に責任を被せようとするだろう。損な役回りだ。

だがこれも仕事なので仕方ない。やるならさっさとやってしまおう。

「どうせリトレイユ公のことですから、皇帝陛下の心変わりはまだ察知してるんじゃない」

「そうだな。聞き及ぶ限りでは領外での活動が急に減ったようだ。領外での活動はおそらく影武者のリコシエが一人で回している」

さすがは保身の名人というべきか。リトレイユ公は危険を察知して素早く本領に引込み、捕縛や暗殺の可能性を最小限に保っている。

だがそれは俺にとって非常に都合がいい。

「それぐらい慎重に行動してくれるのなら、危険をちらつかせるだけでリトレイユ公の動きを鈍らせることができますね。適当に情報を流して警戒心を煽りましょう」

「いい方法だ。だがそれでは逮捕できないぞ?」

大佐の疑問に俺は笑って答える。

「動きを鈍らせている間に外堀を埋め、最後は勅命で帝都に召喚します。背けば叛意ありとみられますので、渋々応じるでしょう」

「そうかな?」

「応じざるを得ないので。リトレイユ領は北のアガン王国と常態的に戦っていますので、南側の帝室直轄領から討伐軍を差し向けられれば挟撃となり、とても防ぎきれません」

< i 5 9 0 2 0 3 — 3 5 6 7 8 >

「リトレイユ領には港もあるが、まさか……」

「はい。メディレン家が保有する第四師団の艦隊で海上封鎖します」
俺はそこまで説明し、にっこり笑う。

「ですので、リトレイユ公は戦うことも逃げることもできません。彼女には軍人としての力量はなく、配下の第五師団ではリトレイユ公を支持するかどうかで内部対立が起きています。彼女は政治の舞台でしか踊れないんですよ」

だから本領に引っ込んでしまった時点でリトレイユ公の命脈は尽きている。

「後はリトレイユ公がアガン王国との連携を模索しないように監視する必要があります。これはミルドール公の伝手を頼って、ブルー

ジユ公国に一肌脱いでもらいましょう」「

大佐はしばらく黙っていたが、ぽつりとつぶやいた。

「普段とのギャップが凄いな、貴官は。なるほど、恐れられる訳だ」「職務に忠実なだけですよ?」

仕事に手を抜くというのがどうしてもできない。

大佐は苦笑した。

「皆、そういうところを信頼している。では今の方針に基づいて作戦計画書を提出せよ」「

「はっ!」

俺は敬礼すると、自分の仕事を開始した。

第60話「死神は大鎌を研ぐ」

【第60話】

リトレイユ公逮捕の勅命を受けた俺は今、帝都でリトレイユ公と対面していた。

「警備のお勤め、御苦労様でした」

外套を羽織ったリトレイユ公が薄く笑っている。相変わらず怖い笑い方するなあ。

だが今日のリトレイユ公から漂う香水の香りは、清潔感のあるシトラス系の香りだった。

つまりこのリトレイユ公は影武者、リコシエの変装だ。

よく見ると、酷薄そうな笑みの中にも目元には優しい表情が浮かんでいる。本物の目は爬虫類や猛禽みたくもつと怖い。

今日は五王家当主が集う御前会議の日だ。半年に一度のこの会議では、五王家間のトラブルや外交課題など重要案件が話し合われる。さすがに普通はリトレイユ公も本人が来るのだが、警戒した彼女はこの重要な会議に影武者をよこした。

会議でリコシエは立派に影武者として辣腕を振るい、リトレイユ家の権益を堅守した。

ただやはり本物の政治家ではないので、アルツァー大佐に言わせると「あと一步の踏み込みが足りない」らしい。もう少し図々しく

ても良いそうだが、平民の悲しさでついつい遠慮してしまうようだ。政治って難しいな。

リコシエの無事を久しぶりに確認できた俺は安心し、わざとらしく敬礼して彼女を見送る。

「長時間の会議、お疲れ様でした。道中お気を付けください」

「ありがとう。あなたも息災で」

偽リトレイク公は馬車に乗り込むと、本領への帰路に就いた。

彼女の無事を祈りながら見送っているとジヒトベルグ公がやってくる。こっちは本人だろう。

「クロムベルツ大尉、本当に捕縛しなくて良かったのか？」

「捕縛してはいけません。あれはおそらく影武者です」

俺とアルツアー大佐はあれが影武者であることを知っているが、それは表に出せない情報だ。あくまでも推測の形で話す。

「リトレイク公は影武者を使っているという情報があります。今回のように捕縛される危険性があるのなら、必ず影武者をよこすですよ」

「影武者か……。頻繁に顔を会わせる間柄ではないから、影武者と本物を見分ける自信はないな」

ジヒトベルグ公はそう言って溜息をつき、それから俺に笑いかけた。

「さすがはアルツアー大佐の名参謀。相手の手の内は何もかもお見通しか。気骨も知謀もある頼もしい男だな」

別にそういう訳じゃなくて、影武者の方から助けを求めて飛び込んできたんだよな。

事情を説明する訳にもいかないので誤解しておいてもらおう。

「それよりも殿下、平民と親しげにしてよろしいので?」

確かジヒトベルグ家の当主って、平民と私的に会話するのも許されないんだよな?

俺は彼を「殿下」と呼んでいるが、実際のシュワイデル語には「陛下」と「殿下」の中間に位置する五王家専用の敬称があり、それを使っている。

何せ五王家は「王家」だ。序列こそあれ、皇帝とも対等の立場にある。

しかしそのお偉いジヒトベルグ公は、さりげなくとんでもないことを言い出した。

「心配は無用だ。貴官は私のシルダンユーにしてある」

シルダンユー? なんだそれ?

日本語話者としては背筋がゾワゾワするんだが。

するとジヒトベルグ公はふと気づいたように言う。

「おお、そうか。貴族社会の古い言葉だから、さすがの貴官も知らぬだろう。『特別な取り次ぎ客』や『裏口の友人』ぐらいの意味だ」

特別? 裏口?

「要するに、身分を越えて親しくしたい平民に与える待遇だ。例えば愛人であつたり」

ますます背筋がゾワゾワしてきたぞ、おい。

「また平民の棋士や詩人のような文化人にもシルダンユーとして礼を尽くす。身分制度を保ちつつ、社会の風通しを良くする知恵だ。貴官のことゆえ、てっきりメディレン家のシルダンユーになっていると思つたが」

違います。シルダンユーシルダンユー言つな。いや悪気がないのはわかるんだけど。

「貴官はジヒトベルグ家が正式に認めたシルダンユーだ。当家を私的に訪問することが許されるし、貴族の客人と同様に扱われる」
知らないうちにずいぶん良い待遇を与えられていたようだが、響きが気になって話が頭に入らない。今世ではこうということが頻繁にある。

とりあえずお礼は言つておこつ。

「ありがとうございます、殿下」

「なに、貴官には亡父の名誉を守ってもらつた借りがある。本当は領地を与えたいくらいだ。それに貴官を招聘することをまだ諦めてはいないのでな」

ありがたいけど、俺はアルツァー大佐の参謀をやめるつもりはないよ。

大佐は俺を信頼し、俺の好きなように仕事させてくれた。仕事が

楽しいと思ったのは生まれて初めてだ。
だから一生ついていく。

ジヒトベルグ公は俺の横顔を見て、フツと笑う。

「皆まで言うな、忠義者。貴官を家臣にできるとは思っておらん。
だが困ったことがあれば何でも言ってくれ」

「それでしたら、御相談したいことが」

「おお、言ってみるがいい」

そこで俺は事情を説明し、ジヒトベルグ公に協力を求める。

彼はすぐさま快諾してくれた。

「その程度なら当家の力をもってすれば造作もない。帝国の安寧の
ため、そして恩人のために一肌脱ぐとしよう」

「ありがとうございます、殿下」

俺が礼を言うと、ジヒトベルグ公は楽しげに笑う。

「どうやら少しは借りを返せたかな。この件が落ち着いたら墓参が
たら飯でも食いに来るといい。貴官の部下たちの墓は『四聖女の墓
地』として当家が守っているからな」

俺の肩をポンと叩くと、ジヒトベルグ公は外套の裾を翻して去っ
ていった。

* * *

その後も宮中の行事が何度かあったが、俺はその全てをスルーし
た。どうせ来るのは影武者のリコシエだ。

しかし俺に後始末を命じた人々は、俺の仕事ぶりに不満のようだ。

アルツァー大佐が苦笑しながら、勅書をヒラヒラ振ってみせた。
「『なぜ今回も逮捕しなかったのか』と、皇帝陛下がお怒りだ」
うるせえな。俺に任せただから黙って見てろよ。使えない皇帝
だな。

……と思ったが、それを大佐に言っても仕方がない。

「今までの宮中行事は全て、暦通りに毎年行われているものです。
予定が事前にわかっていますから、影武者を使うのに何の障害もあ
りません」

「確かに。リコシエがいる限りリトレイユ公は領内から出てこな
いだろう」

そうなんだよな。かといってリコシエを排除する訳にはいかない。
彼女の安全は俺たちにとって最優先事項のひとつだ。

「リトレイユ公本人が必ず来るように仕向けるには、影武者が使え
ない時期に予定外の急用で呼び出すしかありません」

スケジュール調整がつかないタイミングに、絶対に来なければな
らない用件で呼び出す。これしかない。

「リコシエ殿は秘密工作で領外に出ることも多いようです。狙うな
ら彼女が領外に出払っている瞬間です」

俺がそう言っただけで、アルツァー大佐は全てを理解したようだ。
「なるほど、そのときは影武者を帝都によこすことはできない。そ

れに『秘密工作で領外に出ていて不在』とは言えないな」

表向きの所在地と実際の所在地が一致していて、しかも影武者が使えないタイミング。

リトレイユ公を逮捕できるのはそのときだけだ。

「ジヒトベルグ公の協力で『ジヒトベルグ公と家臣団との間に亀裂が生じ、譜代の家臣に多数の離反者がいる』という情報をリトレイユ公に流すことができました」

「いつの間に……」

「先日お会いしたときに頼みました」

なんせ俺はジヒトベルグ公のシルダンユーだからな。

「うまくいけばリコシエ殿をジヒトベルグ領に引っ張り出せます」
リトレイユ公は敵を作って攻撃することで勢力を拡大してきたが、おかげで敵だらけだ。新しい味方を必要としているから、買収できそうな人材がいればすぐさま声をかけるだろう。

もちろん、そのときはリトレイユ公……の影武者が会いに行くだろう。俺のときもそうだったが、「リトレイユ公本人が来た」と思わせられるのはインパクトが大きい。あれはびっくりするよな。

リトレイユ公も決して無能ではなく、彼女なりの人心掌握術を持っているから手強い。

アルツァー大佐は満足げにうなずいた。

「ジヒトベルグ領はリトレイユ領から最も遠い上に、途中で第六特務旅団の近くを通る。行動を監視しやすいし、リトレイユ公を逮捕すればすぐに身柄を保護できるな。良い案だと思う」

「恐縮です」

これでも参謀らしく、寝ないで一生懸命考えたからな。策を考えるよりも、リトレイユ公にバレないように根回しするのが一番大変だった。しかしこれも参謀の仕事のうちだ。

「後はこの時期に合わせてリトレイユ公を呼び出すよう、偉大なる皇帝陛下に一働きしていただきましょう。勅命を出せるのは陛下だけですから」

あのおっさんには何も期待していないが、せめてそれぐらいはやってくれないと困る。

アルツァー大佐はおかしそうに笑う。

「心配するな、それは私が手綱を握っておこう。長々と政治工作をさせて済まなかったな。では次は兵を動かす段取りだ。本来の参謀の職務として戦争の準備をしてもらうぞ。貴官も嬉しいだろう？」

人を戦争の猟犬みたいに言わないでほしい。

「御冗談を。戦争ほど嫌いなものはありませんよ」

「それでこそ私の参謀だ。ずっとそのままできてくれ。私は貴官のそんなところが好きだからな」

ニコツと笑った大佐は、なんだかちよつと可愛かった。
この人の隣にいと安心するな……。もつと役に立ちたい。
だからこそ、リトレイク公との戦争計画を練らなくては。
彼女に抵抗する暇を与えないためにも、ありとあらゆるものを使
おう。

第61話「死神の軍議」

【第61話】

こうしてリトレイユ公逮捕の任務は、実行段階へと進んだ。
皇帝ペルデン三世はリトレイユ公に偽の密書を送る。

『ミルドル公は謀反人の弟でありながら、余をないがしろにして
おる。これ以上の横暴を許しておくことはできぬ。余はメディレン
公と共に東ミルドルを征伐するつもりである。その後はブルージ
ユ公国からミルドル領を奪還し、帝室直轄とする予定である。貴
公がブルージュと内通した件は不問と致すゆえ、余の元に集うがよ
い』

完全に騙し討ちだ。

だがこれでリトレイユ公の逮捕に失敗したら即座に内戦だろう。
リトレイユ公は素直に罰を受けるような人間ではない。

帝国軍の総力を挙げて、リトレイユ領をシュワイデル兵の血で染
めて食いちぎり、リトレイユ家を滅ぼすことになる。

もちろんアガン王国やブルージュ公国は大喜びするだろう。帝国
軍が内戦で弱体化すれば隣接する領地は食べ放題だ。

領民や領主にとっては迷惑な話だし、俺たち軍人にとっても危険
なだけで何もいいことがない。

そんなことを考えていると、早くも憂鬱になってきた。

とにかく内戦だけは回避したいので、今さら卑怯もクソもない。後世の歴史家にいろいろ言われるだろうが、ここは騙し討ち上等でいく。

ちょうどこの時期、リトレイユ公の影武者であるリコシエはジヒトベルグ領で調略に励んでいる。ジヒトベルグ公の流した偽情報にリトレイユ公が食いつき、存在しない離反者を囲い込もうとしているのだ。

リトレイユ公としては「ジヒトベルグ領で他家の家臣を寝返らせている最中なので行けません」とは言えない。表向き、彼女は本領にしていることになっているからだ。そして実際に本領にいる。

そして帝国内で対立が起きるときに彼女がそれを座視することはない。

リトレイユ公ミンシアナにとっては、対立こそが黄金の鉱脈だからだ。喜々として帝都に乗り込んでくるだろう。

たぶん。

第六特務旅団の将校と下士長を集めた会議が開かれ、俺は参謀として今後の作戦計画を説明する。要するにいつものメンバーだ。

「リトレイユ公は本領にいるが、彼女には影武者がいる。名前はリコシエ。このリコシエはジヒトベルグ領で秘密工作中と推定される」

ロズ中尉とハンナ下士長が俺の説明をじつと聞いている。

実はロズたちにとっては、リトレイユ公に影武者がいることは初めて知る内容だ。

ここまでずっと秘密にしてきたが、秘密のままでは作戦ができないので彼らには機密情報を部分的に開示する。ただし一般兵士に通達するのは作戦開始直前だ。

「彼女はリトレイユ公の秘密を多く握っており、本物に成りすまして軍を動かすことが可能だ。従ってリコシエの身柄確保は作戦の必成目標となる」

リコシエが俺たちの協力者であることは、作戦開始直前まで伏せておく。もしここに敵の内通者がいた場合、リコシエが危険に曝されてしまうからだ。

俺は地図を示した。

「もしも今リトレイユ公が帝都に現れば、調略を受けているジヒトベルグ家の家臣たちの視点だと『リトレイユ公が二人いる』状態になる。影武者の存在が明るみに出てしまいかねない。もちろん調略にも悪影響だ」

「あー……なるほど」

ハンナがコクコクうなずいている。他者を欺くことがとことん不得手な彼女は、視点整理が苦手なようだ。人狼ゲームでもやらせて鍛えようかな……。

とりあえず俺もうなずいておく。

「誰の視点から見てもリトレイク公は一人でなくてはならない。そこでリトレイク公は調略を中断し、リコシエを呼び戻す」
地図に挿した二つのピンを示す。リトレイク公とリコシエの推定所在地だ。

「ただ伝令が到着するまでの時間差があるから、リコシエを本領まで呼び戻す猶予はない。途中のどこかで合流するはずだ。本物と影武者の位置を重ね合わせることで、リトレイク公はまた一人に戻る」

するとロズ中尉が疑わしげな顔をする。

「別に合流しなくても、出発したらどこかで影武者が変装を解いちまえばいい。後はお忍びで本領に帰還つてところじゃないか？」

「いい指摘だ」

こいつも伊達に士官教育は受けてないよな。

俺はその点も説明する。

「リトレイク公は自分の影武者を信用していない。自分の留守中に本領に帰すと、影武者が自分のふりをして叛旗を翻す恐れがある。過去の動きを調べた限りでは、手元に呼び戻す可能性が一番高い」
なんせ影武者本人から聞いた情報だから信頼性は高い。これはただ秘密だけだ。

「おいおい、自分の影武者すら信用できないのか……」

ロズが呆れて苦笑している。

俺もつられて苦笑した。

「リトレイユ公は猜疑心が強く、絶対に騙されまいという気持ちが強すぎて誰も信用できなくなっている。もともと内外に敵だらけだからな」

アルツアー大佐がぼつりとつぶやいた。

「王とは孤独なものだ。だがそれでも信じて任せねば領地を治めることはできない。さもなければ王が全ての農地を自分で耕すことになる」

絶対に騙されない必勝法は誰も信用しないことだが、それでは王として君臨できない。

俺はリトレイユ公の境遇を少し思い、溜息をついた。

「彼女は敵を作って倒すことで勢力を拡大したが、さすがに敵を作りすぎた。そして猜疑心の強さは彼女を敵から守るのに役立ったが、勢力維持に必要な人材確保では不利に働いた」

誰も信用できないんだから、優秀な人材も忠義の家臣も使いこなせない。

俺たちを信じて全てを任せ、着実に勢力を拡大してきたアルツアー大佐とは対照的だ。

「リコシエの動向なら、調略を受けているジヒトベルグ家の家臣たちが報告してくれる。領内にいる限り居場所は完全に把握できるぞうだ」

ロズは半信半疑といった顔だ。

「寝返り工作を受けてるような連中だろう？ 信用できるのか？」

「リトレイユ公はジヒトベルグ公の流した噂に騙されたんだよ。調略を受けている連中は全員、筋金入りの忠臣たちだそうだ」

俺が笑って説明すると、ロズも苦笑いを浮かべた。

「猜疑心が強い割に騙されてるのか」

「人間は信じたいものを信じるからな。追い詰められた人間は特に騙されないように気をつけたって、人間というのは案外あっさり騙される。人狼ゲームでもやればわかる。」

ハンナが少し気の毒そうな表情で言う。

「リトレイユ公殿下は敵だらけなんですね……」

「そうだ。だが彼女を哀れむのは危険だぞ、ハイデン下士長」

俺は地図に新しいピンを挿す。

「リトレイユ公は第五師団を実質的に統率している。この一年ほどで増強されまくった帝国最大の軍団だ。国境を接するアガン王国と単独で渡り合えるだけの力がある」

リトレイユ家には帝室から大量のマスケット銃と弾薬が提供されていて、領民を半農の戦列歩兵にして戦争に備えているらしい。

「戦列歩兵は支援用の砲兵中隊を備えた大隊として編成され、相互に連携を取る形で国境線を完全に覆い尽くしている。推定兵力はおよそ六万。さすがのアガンも手出しできない状況だ」

「他の師団よりだいぶ多いですね……」

ハンナが深刻そうに言うので、俺もうなずいておく。

「帝室直属の近衛師団を総動員すれば叩き潰せるかもしれないが、そんなことをすれば帝国の軍力は壊滅的な打撃を受ける。アガン軍がなだれ込んでくるだろう。従って帝国軍同士の間は衝突は最小限に留めなければならない」

言うのは簡単なんだけど、それを実行するプランを考えるのが俺の仕事なので大変だった。

「内戦を回避する計画をいくつか用意しているので、第六特務旅団はこの計画の実行を担当する。失敗したら他の師団から確実に恨まれるから、緊張感をもって取り組んでくれ」

「は、はい！」

ハンナがビシッと敬礼した。頼もしい。

俺はいかにも有能な参謀のような顔をして、サッとアルツァー大佐を振り返る。

「このような説明でよろしいですか、旅団長閣下」

「ああ、十分だ」

アルツァー大佐は椅子から立ち上がる。立ち上がると逆に小さく見えるので座っていた方がいい気もするが、とにかく立ち上がる。

「諸君、これは帝国の運命を決定づける歴史的な作戦だ。……まあ我々にとっては帝国がどうなるかが知ったことではないが、生活を保証してくれる愛すべき祖国だからな。給料分は働こう」

フツと笑うアルツァー大佐に全員が敬礼した。

会議の後、ロズたちは自分の役割を果たすために退出したが、俺は参謀面をして大佐の隣に控えていた。いや、実際に参謀なんだけど。

二人きりになると大佐は俺をじっと見上げる。

「この作戦が失敗すれば帝国は滅亡するな」

「成功しても滅亡するでしょうから、気負う必要はありませんよ」

俺がそう言うと、大佐は驚きもせず微笑む。

「ミルドール領は既にズタズタだ。ジヒトベルグ領はキオニスへの報復に脅かされ、転生派と安息派の両勢力の狭間で生き残りを図っている。リトレイユ領も今後かなり難しい舵取りを迫られるだろう。帝国領の大半が問題を抱えているが、皇帝にこの難局を乗り切る力があるとは思えん。長くはないだろうな」

「御慧眼かと」

俺が芝居がかった口調で応じると、大佐は机にぺしよりと突っ伏した。

「困ったな。どうにかならないのか、大尉？　うちの実家だけでも助けてくれ」

「小官に言われても困るんですが」

便利屋扱いされている感があるけど、俺はランプの精じゃないぞ。政治家ですらない。

俺は溜息をつく。

「前に大佐にお願いした件がちゃんと準備できているのなら、この旅団とメディレン家ぐらいはどうにかできるかもしれない」

「あの件なら心配するな、とっくに準備できている」
それなら何とかなるかな。

「しかし面白いことを思いつく男だな、貴官は」

「過去の歴史に学びました」

「歴史を学んだだけで思いつくものか？」

「学ばずして着想を得ることはありませんよ」

俺は二つの世界の歴史を知ってるから、未来を予測する精度は普通の人以上も若干高い。しかも近代化や世界大戦のことも知っている。いずれこの世界にも訪れるものだ。

帝国の崩壊が不可避なら、崩壊後の動乱をどう生き延びるかを考える。その方法は歴史がヒントをくれる。

「帝国の滅亡は避けられませんが、なるべく流血を避けて平和に滅亡させましょう」

「平和に滅亡、か。相変わらず貴官は面白いな」

大佐は笑いながら顔を上げる。

「貴官となら滅亡も悪くない」

机上に長い黒髪を流して微笑む大佐は、ゾクリとするほど艶っぽかった。

第62話「影裏に消ゆ」（地図あり）

【第62話】

各地に張り巡らされた監視網によって、リトレイユ公が本領から動き出したことがつかめた。帝都入りの少し前に影武者のリコシエと合流するようだ。

場所は帝室直轄領。リトレイユ公と懇意の豪商から、帝都近くの山荘をしばらく借り上げるらしい。

< i 6 0 0 5 7 3 — 3 5 6 7 8 >

「五王家の一員ではあるが、改めてその力の凄まじさを感じさせられるな」

アルツァー大佐が苦笑しながら頬杖をつく。

「この国で成り上がるには、五王家のいずれかには接近せねばならない。それは貴族だけでなく、軍人でも商人でも同じことだ。だから全ての成功者は五色のいずれかの色に染まる」

親リトレイユ派の資産家なんて真っ先に監視対象になっていたから、リトレイユ公の動きはすぐに他家に察知された。

もちろんリトレイユ公側も最大限の隠蔽工作を行っていたが、さすがに残り四家の諜報力には勝てない。今回は山荘に近いミルドール家の情報網に引っかかった。出入り業者の噂をつかんだのだ。

この国で五王家を敵に回すとこつという目に遭う。だから誰も逆ら

えない。

「怖いですな。小官はメディレン家の色でしょうか」

「そうあってほしいものだな。貴官に去られては困るから、もっとしつかり染め上げておこう」

大佐の冗談はときどき本気に聞こえるから困るんだよな。曖昧に笑っておく。

あんまり冗談ばかり言ってられない。これから俺たちも出立だ。

俺史上最大の作戦に従事することになる。成否がどうなるうとも歴史に残る大作戦だ。

大佐もそれはわかつているので、スツと真顔になる。

「リトレイユ公の兵力を確認しておきたい」

「今回は皇帝との秘密会談ですから、麾下の第五師団は表向きは動かさせませんし、動かす必要もありません。ただ実際には領内の兵がいくつか動いているようです」

俺はついさつき入ってきた報告も含め、卓上の小さな地図にマーカーを置いた。

「リトレイユ公子飼いの大隊長たちが、兵を率いて帝室直轄領との境界に移動しています。確認できたのは歩兵三個大隊、およそ千五百名。名目は演習や巡回警備となっています」

「実際にはもつといそつだな」

「全ての動きを把握できている訳ではありませんから、当然いるでしょう。騎兵も動かしていると見るのが妥当です」

騎兵の動きは察知しづらい。騎馬より早く情報を伝達する方法が限られているからだ。

「確認できた三個大隊は別個に動いていますが、おそらくどこかに集結するでしょう。リトレイユ公は呼び出しが罠だった場合を考慮し、この兵力を領内への撤退に使うはずです」

「戦列歩兵千五百では近衛師団の追撃を防ぐには全く足りないな。時間稼ぎにもならないだろう。やはりもっと動いているとみるべきか」

チェスや将棋と違って、盤上にどれだけの駒が存在するのか俺たちにもわからない。見えているのが三個大隊というだけの話だ。

ただ、ある程度の予測はできる。

「リトレイユ公の子飼いになっている将校はリストアップしています。彼らが動かせる兵を

総動員したとしても一万には届きません。若手将校ばかりで階級が低く、抜擢された今でも大半がまだ大隊長や中隊長です」

近世にもなると軍隊にもいろいろな行政上のルールが増えてくるので、王侯といえども勝手な人事はなかなかできない。子飼いの部下を昇進させるのにも順序というものがある。

彼女の子飼いは若手の貴族将校たちで、まだ尉官が多い。連隊や旅団を率いる階級ではない。五百人ほどの大隊を指揮するのが限界だ。

アルツァー大佐が微笑む。

「あの女に時間を与えなかったのは正解だったな。あと数年放置すれば子飼いの将校たちが佐官になり、指揮する兵が格段に増えていただろう。それで、こちらの対応はどうなっている？」

「表立って兵を動かせないのはこちらも同じです。ほんのわずかな気配も見せられませんから、全ての師団が通常通りの動きをします。例外は我々だけですな」

第六特務旅団は行軍演習の名目で、ほぼ全兵力が出動する。

「全軍の行動に大きな変更はありません。ただ閣下の指揮を離れて独立行動を取る部隊が多いため、予期しない事態が発生したときは対処が困難です」

俺の説明に大佐がうなづく。

「不安は残るが仕方ないな。即時通信できる魔法の鏡でもあれば別だが」

あるんだよな。科学のスキルツリーを伸ばしていつて電信技術を取ればの話だけど。

今は考えても仕方ないので、俺は軽くうなずいておく。

「各部隊には適任の下士官を割り当てています。彼女たちに任せましょ」

もちろん作戦失敗時には速やかに帰投できるよう、判断基準と撤退手順を伝達しておいた。最悪の結果になったとしても兵の大多数

を生還させることが最低条件だ。俺は参謀だからな。

大佐はうなずくとコートを手にした。

「矢は既に放たれた。私にできることといえば、せいぜい二の矢を手挟むことぐらいだ。貴官も矢筒を持ってついてきてくれ」

「はっ」

俺は敬礼すると、ちっこい大佐にコートを羽織らせた。こういうのは参謀じゃなくて当番兵の仕事だが、みんな忙しいので俺が着せておこう。

小学校に行く娘にコートを着せてるお父さんみたいだな。

と思った瞬間、大佐がじろりと俺を見上げた。

「今何か、とても失礼なことを考えているだろう？」

「いえ何も。ちゃんと袖を通してください、閣下」

「ぶかぶかなんだよ、これ」

「袖まくってあげますから」

やっぱり学校指定のコートを着せてるみたいだ。

* * *

【影裏に消ゆ】

「ふう……」

リコシエは広々とした部屋の片隅で、そつと溜息をつく。

今日は変装を解いているので、護衛は二人だけだ。どうせリコシエの監視も兼ねているのだろう。

侍女たちも本物のリトレイユ公に付き従っており、ここにはいない。

(気楽でいいけれど、御前が何を考えているのかが気になる)

ジヒトベルグ領での調略工作中にリトレイユ公の急な呼び出しを受け、帝室直轄領の山荘で任務の経過報告を行った。

『調略は順調です。既に三名の重臣から内応の確約を得ました』

『そうですか』

『ただ、彼らの態度からは裏切り者に特有の必死さが感じられませ
ん』

『裏切り者の心理に詳しいのですね?』

微笑みの中に紛れる殺意を感じつつ、リコシエはこのときも冷静さを失わなかった。

『調略に応じるのは追い詰められた者だけです』

『確かに。では調略は一時中断し、お前は別命あるまでここに残りなさい』

『はい、御前』

このやり取りの後、リトレイユ公は山荘を発ってどこかに行ってしまった。

どこかの貴族か資産家の別荘なのだろう。山荘には使用人たちもいるが、リトレイユ家の者ではない。リトレイユ家の使用人といえ
ば、無口で無愛想な衛士が二人だけ。

(最近付けられたあの二人、私と同じように素性を偽っている者の

気配がする)

貴族が召し抱える衛士には二通りある。

ひとつは「私はこんなに大勢の護衛を引き連れている」というステータス誇示のための衛士。

彼らは若くて長身で顔立ちが良いが、戦士としての技量はほとんどない。平民でも構わないので安く雇える。

もうひとつが実用的な衛士で、こちらは歴戦の古強者たちだ。

多くが騎士や郷土の家系で、幼少期から厳しい鍛錬を積んでいる。銃はもちろん、乗馬や剣術も達人だ。礼儀作法も心得ている。数は少なく、特に忠誠心の高い者は替えがきかない。

今ここにいる衛士二人はおそらく後者だが、変装の名手であるリコシエには微妙な引っかけがあった。

(わずかに猫背気味なのが気になる。剣術ではなく格闘術寄りの足運び。鉄兜を目深に被る癖も、顔を隠したいように見える)

もちろん猫背でレスリング名人の騎士もいるだろうし、顔にコンプレックスを持っている郷土だっているだろう。

だがひとつひとつの小さな違和感が積み重なった結果、リコシエは彼らに警戒心を抱くようになっていた。

(名誉ある戦士の階級でないとすれば、名誉なき戦士の階級。傭兵か暗殺者だろうか。ずっと私に付けられているということを考慮す

れば、可能性が高いのは後者)

本職の殺し屋二人に監視されているとすれば落ち着かないが、影武者の宿命だ。受け入れるしかないだろう。

そのとき、不意に部屋の外が騒がしくなった。

「なんだ？」

「わからん、見てこよう」

衛士たちがドアを開いた瞬間、銃を持った兵士数名がなだれ込んできた。

「動くな！」

そう叫んだ声は若い女性のものだ。そして特徴的な深い赤茶色の軍服。

リコシエ自身も目を疑ったが、間違いなく第六特務旅団の女子戦列歩兵だ。

衛士たちが自分に向き直ったのを見た瞬間、リコシエはソファの陰に伏せながら叫ぶ。

「そいつらを撃つて！」

「えっ!？」

「どっいつこと!？」

リコシエは第六特務旅団の兵士たちに対して「この衛士たちを撃つて」と頼んだつもりだったが、気が動転して言葉足らずになってしまった。

リコシエの立場や状況を考えれば、衛士たちに対して「この侵入

者を撃つて」と頼んだように聞こえるだろう。

内心でしまったと思ったりリコシエだったが、頭上に乾いた銃声が響く。

「ぐあっ!?!」

「何をしてる、総員撃て! そいつらの仕事は口封じだ!」

男の悲鳴と、それに続く女性の号令。誰かがドサリと倒れる音が聞こえ、さらに銃声がいくつも覆い被さる。

恐る恐るソファから顔を覗かせると、衛士に偽装した暗殺者たちが床に倒れていた。至近距離から数発の銃弾を浴び、既に事切れている。

ホッとしたりリコシエの前に、凜々しい顔立ちの女性下士官が立った。

「リコシエだな? リトレイユ公の影武者の」

「そうです。あなたは?」

するとその女性軍人はリコシエに敬礼した。

「私は第六特務旅団所属のライラ下士補だ。あんたを保護するよう命令されている。この山荘は制圧したが、長居は無用だ。すぐに仕度を」

事情がわからないリコシエは呆気にとられてしまったが、ライラの顔には見覚えがあったので彼女を信用することにする。リトレイユ公の衛士が射殺される非常事態になった以上、今までのように影武者を務めることはどのみちできない。

「わかりました。……でも、なぜ急に？」

ライラ下士補は流れるような動作でマスキット銃に弾を込めながら、そっけなく答える。

「私だってわからないよ。ああ、参謀殿から伝言を預かってた」

ライラは銃を担ぐところ告げる。

「『君は君に戻れ』だってさ。意味わからんけど」

「私は私に……」

その言葉を噛みしめ、不意に目頭が熱くなるリコシエ。

「お、おい。どうかした？」

ライラが動揺するが、リコシエは目頭を拭って笑いかけた。

「なんでもありません。仕度なんか結構、早く行きましょう」

たとえ這いずってでもクロムベルツ大尉のところまで辿り着いてやる。

密かな決意を秘めつつ、リコシエは笑ってみせた。

* * *

第63話「死神クロムベルツ」

【第63話】

「リコシエの救出、うまくいっているといいんですが」

「貴官はその話ばかりだな……」

俺と大佐は帝都の宮殿で紅茶を飲みつつ、リトレイユ公逮捕のため待機していた。

あまり大勢でぞろぞろ動く訳にはいかなないので、ここにいるのは俺と大佐、それに歩兵科の子たちが数名だけだ。

そして大佐は微妙に機嫌が悪い。

ビスケットにベリーのジャムを塗りたくり……というか積み上げると、暴力的な糖質の塊を乱暴に口に放り込む。

「リコシエの身柄確保には、ライフル式騎兵銃を持たせた精鋭チームを派遣してある。それに指揮官のライラ下士補は山の達人だ。これで無理なら私の兵ではどうにもならないだろう」

しゃべりながら食べるから、口の端からジャムがはみ出してきた。

「閣下。口、口」

「わかってる」

「袖で拭わないで」

これから五王家の一角であるリトレイユ公を逮捕するのに、袖が

ジャムまみれの指揮官じゃ格好がつかないだろ。

リコシエの話題になると機嫌が悪いのは、やっぱりリトレイユ公に対する怒りなんだろうか。リコシエの境遇にずいぶん同情していたから、たぶんそうだろう。

……フォローしておくか。

「小官は閣下を心から尊敬しております。閣下の参謀になれたのは小官最大の幸運でした」

「なんだ急に」

「大事なことは言えるときに言っておかないと、いつ言えなくなるかわかりませんので」

人間は急に死んじゃうからな。前世の俺みたいに。

今世の俺だっていつ死ぬかわからない。

アルツァー大佐はしばらく俺の顔を見ていたが、表情が目に見えて明るくなっていった。どうやら機嫌が直ったらしい。やはり敬意を伝えることは重要だ。

「貴官の敬意は心地良いな。失わぬように気をつけるとしよう」

「なんでそんなに心配そうなんですか。大丈夫ですよ」

彼女の果断だが慈悲深い人柄はこの一年半でよくわかっていく。

俺は一生、この人の参謀を続けるつもりだ。

この人が皇帝だったら良かったのと思いつつ、俺は参謀として

の職責を果たす。

「予定通り、選抜射手によるライフル小隊がリコシエ救出に向かっています。連絡用に騎兵二名をつけていますが、今のところ定時報告だけです」

「演習地に残した一個小隊からは？」

「そちらからも騎兵の定時連絡が。みんなで石窯を作って無発酵パンを焼いているそうです」

「楽しそうでいいな」

「陣地構築の練習ですよ。留守小隊は半数以上が新兵ですから、これぐらいが良いかと」

今回、帝都に来ているのは一個小隊。我々がここにいるのは極秘だから、あまり多数を動員する訳にはいかない。

旅団の精鋭は前述の通り、リコシエの救出任務だ。

「砲兵中隊は護衛の一個小隊と共に所定の位置で待機中です」
増員で三個小隊に戻った戦列歩兵だが、これで全部使ってしまう。予備戦力は他師団頼みだ。

大佐もそこには気づいているようで、少しだけ表情を曇らせた。
「何をするにも兵が足りないな。もう少し増やしたいところだが、戦列歩兵になる女性など少ない方がいい」

「それは男性もですよ」

「確かに」

戦場で死ぬ人間は少ない方がいいに決まっている。ただ、兵が足りないのも事実だ。今後の課題だな。

そのとき、ドアがノックされて旅団の女の子が入ってきた。

「旅団長殿、参謀殿、お時間です。作戦区域に異状ありません」

大佐が立ち上がりながら、当番兵の女の子に問う。

「皇帝陛下は？」

「先ほど急に予定を変更して、離宮に移動されました。足を引っ張りたくないとの仰せだそうです」

「なるほど、そういう考え方もあるな。確かにいない方がマシだ」
大佐は軽く溜息をつき、装弾した騎兵ピストルを腰のホルスターに収める。

俺も愛用の両手剣仕様のサーベルを腰に吊ると、大佐に笑いかける。

「また急に心変わりされて計画を台無しにされても困りますので、おられない方が好都合です。さっさと片付けましょう」

すると大佐は苦笑する。

「五王家の当主を『さっさと片付ける』か。貴官には怖いものがないらしいな」

「怖いものなら他にいくらでもあります。閣下を失うこととか」

「ふふっ」

嬉しそうだな。

「では予定通り、作戦終了まで貴官に旅団の指揮権を与える」

それから大佐は当番兵を振り返る。

「全て予定通りだ。変更はない。総員に通達しろ」

「はい！」

なぜか当番兵は呆れた顔で俺たちを見ていたが、大佐の声にハッとして敬礼した。それから慌てて駆け出していく。

それを見送った後、大佐は俺に微笑んだ。

「さて行くか。終わったら貴官の淹れたコーヒーを飲ませてくれ」

どうやら大佐は俺に「戦死するな」と言っているようだ。最近わかるようになってきた。

俺は敬礼する。

「では焙煎したてをお淹れしましょう」

自分で言つてて死亡フラグみたいだなと思う。

でも『死神の大鎌』は何も言わなかった。

* * *

リトレイユ公は宮殿の一室に通され、皇帝が来るのを待っているはずだ。

もちろん皇帝は来ない。あのおっさんは土壇場で急に怖くなり、とつくに避難済みだ。少々情けない話だが、偉い人はそれぐらい慎重でもいい。

廊下の窓から中庭を見ると、リトレイユ公の馬車が停めてあった。周囲には二十人ほどの騎兵が下馬して待機している。

大佐がぼつりと言う。

「中庭の指揮官はライラ下士補にやらせたかったな」

「狙撃の名手ですからね。ただ山岳活動のエキスパートでもありませんので」

「わかっている。リコシエのいる山荘に派遣したのは正解だ」

俺たちはそれっきり無言で廊下を歩き続けた。

背後には六名の女子戦列歩兵が従う。今回は戦闘能力よりも度胸を重視し、肝の据わった子たちを旅団から選りすぐった。リトレイユ公が相手でも怯むことはないだろう。

目的の部屋の前には近衛師団の兵士たちがいる。リトレイユ公の警備担当だ。中尉の階級章をつけた若い貴族将校もいた。厄介事を押しつけられた若手だな。

平民とはいえ俺は大尉なので、彼は緊張した顔で俺に敬礼する。

「で、では後はお任せします」

皇帝だけでなく、皇帝直属の近衛師団も今回の件からは距離を置きたいらしい。日和見主義者だらけだ。

だが火中の栗を拾うのは慣れている。俺は無言で答礼した後、ドアを軽くノックした。

「誰です？」

リトレイユ公の声だ。

俺が返事をする声でバレかねないので、ここは近衛師団の中尉に取り次いでもらおう。

だが若い中尉は真っ青になってガタガタ震えている。

「中尉、返事を」

俺が押し殺した声で威圧すると、彼はようやく声を発した。

「陛下の使いが参りました。通してもよろしいでしょうか？」

「入れなさい」

招かれたら吸血鬼も死神も部屋に入れる。ただの参謀ならなおさらだ。

俺はドアを開けて入室した。

「失礼します」

広い客間で紅茶を飲んでいたのは、紛れもなくリトレイユ公だった。室内に護衛はいない。丸腰の従者と侍女が数名いるだけだ。

リトレイユ公は俺の顔を見た瞬間、全てを察したらしい。

「お前は!？」

「リトレイユ公ミンシアナ殿。貴方を逮捕するよう勅命が下りました。御同行願います」

俺は皇帝発行の逮捕状を広げてみせる。

次の瞬間、リトレイユ公はスカートの中から短銃を抜いた。王宮では許可された軍人以外が銃を携行するのは禁じられているが、護身用に隠し持っていたらしい。

「お下がりなさい！ 近寄れば撃ちます！」

ほぼ同時に味方の戦列歩兵たちが銃を構える。銃の数は六対一。こちらの銃口は全てリトレイユ公を狙っている。

だがリトレイユ公は平然としていた。

「お前たちに私が撃てますか？」

嫌なところ突いてくるヤツだな。撃てないんだよ。

俺たちが皇帝から命じられたのはリトレイユ公の逮捕だ。処刑でも暗殺でもない。撃てば命令違反になる。

だから命令書に「生死を問わず」という一文が欲しかったんだがな……。

大佐が溜息をついている。

リトレイユ公は銃を構えたまま、配下の使用人たちに命じる。

「ここは退きます。お前たち、中庭にいる兵に合図しなさい」

「合図？」

俺は片手を挙げた。

「合図というのは、こういのですかな？」

俺が指をパチンと鳴らすと、戦列歩兵の一人が窓ガラスを撃った。銃声と同時にガラスの割れる派手な音が響く。

直後、雷鳴のような轟音が中庭の方から聞こえてきた。シャンデリアが揺れる。

「な、何を!？」

リトレイユ公が驚くのも無理はない。ロス中尉率いる野戦砲中隊が馬車周辺を砲撃したのだ。

年配の従者が窓に駆け寄り、悲鳴のような声で叫ぶ。

「御前! 当家の護衛たちが!」

中庭にいたリトレイユ公の騎兵たちは、今ごろ野戦砲の散弾で壊滅している。馬が気の毒だが、騎兵たちに逃げられると困るんだ。

砲声はなお轟いている。

ロズの砲撃は念入りなんだよな。「おしゃべりロス」の大砲は、ロスと同じぐらいやかましい。

「ひいっ!？」

「きゃあああっ!」

使用人たちはパニックだ。

リトレイユ公もあまりの事態に動揺し、銃口と視線が違う方向を向いた。

チャンスだ。

俺は素手のままリトレイユ公に向かって走り出す。

「覚悟!」

「クロムベルツ大尉!？ おい待て、何をやっている!？」

背後で大佐の怒声が聞こえたが、ちゃんと考えあつてのことなので許してほしい。

俺が踏み込んだ瞬間、リトレイユ公が憤怒の表情でこちらを睨んだ。銃口が俺に向けられる。

「こつ、この無礼者おつ！」

だが「死神の大鎌」は何も言わない。だから俺は構わずに突っ込んだ。

次の瞬間、リトレイユ公は躊躇なく引き金を引いた。「ガキン！」という音がして火打石が火花を散らす。

「大尉！？」

アルツァー大佐の声はほとんど悲鳴だった。

幸い、銃は不発だった。俺は無傷のまま、リトレイユ公にタックルを決めて絨毯の上に引き倒す。本当はこのままジャーマンスープレックスでも決めてやりたかったのだが、やり方がわからないので裏投げで我慢しておく。

すかさず大佐が叫ぶ。

「制圧せよ！ 大尉を死なせるな！」

俺がよつこらしよと起き上がる頃には、戦列歩兵たちの銃剣がリトレイユ公の胸元に突きつけられていた。

俺は制帽を整えながらリトレイユ公に告げる。

「帝国法では任務中の将校を殺傷しようとした者は軍事裁判にかけられることになっていますが、抵抗するなら射殺しても構いません。殿下は小官を撃ちましたのでこの法律が適用されます」

リトレイユ公は体を起こしながら俺を睨む。

「まさか、それを狙って!? どうかしているわ! 死ぬつもり!」

「殺すつもりだった貴方に言われたくないものですな。殿下を拘束しろ」

戦列歩兵たちがリトレイユ公を取り囲み、乱暴に立たせると手首を縄で縛る。

「痛っ!?! やめなさい! お前たちが触れていい相手ではないのですよ!」

だが旅団の女の子たちは無言だ。表情に怒りが満ち満ちている。リトレイユ公の陰謀でキオニスまで遠征させられ、騎兵に襲われて死にかけてんだから無理もない。

リトレイユ公は連行されていったが、すれ違いざまに俺を憎々しげに睨んだ。

「死神クロムベルツ……。やはりお前は排除しておくべきでした」

「同感です。もう手遅れですが」

俺がそう答えると、リトレイユ公は妙な笑みを浮かべる。

「まさか私がこれで終わると思っていないでしょうね?」

「終わりですよ。貴方の罪が今、貴方に追いついたのです。連れて

いけ」

リトレイク公は両脇を抱えられたまま、宮殿の一角に建つ塔に送られていった。塔の最上階には貴人用の監獄がある。

とりあえずこれでひとつ片付いたな。

そう思っていたら、背後から物凄い圧を感じて振り返る。

ちっこい大佐が仁王立ちになって腕組みしていた。

今までに見たこともないような表情で、大佐がギリリと笑う。戦列歩兵の銃口よりも怖い。

「あんな無茶を許可した覚えはないぞ、ユイナー・クロムベルツ参謀大尉」

「それはですね……あの銃を見た瞬間に不発だとわかりましたので……」

これは嘘だ。単に『死神の大鎌』に反応しなかったので、当たっても致命傷ではないと判断しただけだ。

「そうか」

アルツァー大佐はリトレイク公の短銃を拾うと、ゴテゴテと装飾のついたそれを天井に向かってぶっ放した。

パァンという破裂音が轟き、豪華なシャンデリアの一部が粉々になる。

雪のように舞い散るクリスタルの欠片を背に、大佐は凄みのある微笑みを向けてきた。

「二度とするなよ？」

「……肝に銘じます」

「ごめんなさい。もうしません。
たぶん。」

大佐は銃を投げ捨てるどツカツカ歩き出した。

「次だ。ここは私とシュタイアー中尉で抑えておく。貴官はただち
に出発してくれ。くれぐれもさっきのような無茶はしないように」
「はっ」

「ここからが大変なんだよな……。」

第64話「奸雄の落日」

【第64話】

* * *

【奸雄の落日】

私は今、リトレイユ公ミンシアナと向き合っていた。彼女は塔の最上階に幽閉されている。やや狭いが内装は豪華で快適だ。貴人の監獄としては相応しい。

リトレイユ公はソファで優雅に足を組み、微笑みながら窓の外を眺めている。

「陛下を懐柔するとは驚きです。しかしこんなことをすれば、帝国が崩壊しますよ?」

リトレイユ公はそう言って、困ったように笑いかけてくる。

「執拗に南下政策を採り続けるアガン王国を食い止めているのは、私の第五師団です。私に何かあれば北の守りがなくなります。そんなことも忘れたのですか?」

私は若干の不快感を覚えつつも、務めて事務的に返す。

「第五師団は貴公の軍隊ではない。あくまでも皇帝陛下の軍隊だ。資金を出しているのはリトレイユ家だが、それとてリトレイユ公個人の資産ではない。……そんなことも忘れたのか?」

多少不愉快だったので、虜囚相手に意趣返しなどしてしまった。

我が身の不徳を恥じる。

私の言葉の意味するところは明白だ。

現当主のミンシアナがどうなるうが、リトレイユ家が消えてなくなる訳ではない。

先代当主も健在だし、弟のセリン殿もいる。当主を務める者なら代わりがいるのだ。

だが私の言葉にリトレイユ公は肩をすくめる。

「私の影響力を侮っているようですね。既に帝国直轄領の近くに精鋭二万を配置しています。私を守るためなら皇帝にすら銃を向ける忠義の勇士たちですよ。その実力はアガンの侵攻を阻んでいたことで証明済みです」

並みの帝国貴族なら震え上がるだろうが、あいにくと私にそんな脅しは通用しない。

私には頼もしい参謀がいる。

「うちのクロムベルツ大尉がその第五師団の出身で、アガン軍と戦っていた張本人だ。第五師団の内情なら筒抜けだぞ」

もちろん私も全てを知っている訳ではない。

だがこの女も全てを知っている訳ではないだろう。

私とリトレイユ公は睨み合い、互いに牽制し合う。

なんとかして彼女から有益な情報を引き出したいが、こいつは嘘

つきだから普通の方法では無理だ。
少し揺さぶってみるか。

「帝室直轄領の近くをうろついている第五師団の部隊なら、とつくに捕捉している。だが数は二万もない。この程度なら反乱を起こされても第一師団で抑え込める」

私がそう言うと、リトレイユ公はほんの一瞬だけ薄く笑った。

あの笑い、妙に引つかかる。何かとても嫌な感じだ。

しかし私が考え込もうとすると、リトレイユ公が嘲るように言う。

「まさか一戦交えるつもりですか？ アガンが攻め込んできますよ。ブルージュの二の舞になりたいのですか？」

この女の狙いはこれだ。国内での政争では隣国の脅威を盾に使う。私はさっきの懸念を払拭するため、いったんここを出ることにして立ち上がる。

「貴公はもつと別の心配をするべきだな。窓の外をよく見ておいた方がいい」

次第に沈んでいく夕陽を眺めながら、私はリトレイユ公に冷酷な事実を伝える。

「あれがお前の見る最後の日没だ」

* * *

これが俺の見る最後の日没だろうか……。ふとそんなことを思う。

俺の目の前には、第五師団の幹部将校たちがひしめいている。將軍もいれば、参謀長や連隊長クラスの佐官もいた。

俺は今、第五師団の司令部にいる。目的はもちろん、第五師団を説得するためだ。

もちろん部外者の大尉ごときが何を言っても無駄なので、切り札を用意した。

リトレイユ公だ。

「皆、軽拳妄動は慎みなさい」

毅然とした態度で一同に告げているのは、リトレイユ公……にそっくりの影武者。つまりリコシエだ。

帝都近くの山荘にいた彼女を救出した第六特務旅団は、そのまま彼女をリトレイユ領まで極秘裏かつ大急ぎで連れていった。

俺も合流し、こうして第五師団の司令部に乗り込んだという訳だ。

リコシエはリトレイユそっくりの口調と仕草で続ける。

「私はこれより帝都に向かいますが、何があるうとも皇帝陛下の御沙汰に従うのですよ。あなた方が忠誠を誓うのは本来、帝室なのですからね」

將軍たちは無言だ。

ここにいる誰がリトレイユ公に味方しているのか、正確にはわからない。というのも大半は日和見を決め込んでいるからだ。旗幟鮮

明にしている者はごくわずかだし、それすらパフォーマンスである可能性があった。

リコシエは語気を強める。

「私はこれまでの行いを反省し、過去を清算します。それゆえ帝室への反抗は許しません。これはリトレイユ家当主としての命令です。いいですね？」

「……仰せのままに」

諸将が頭を下げた。

第五師団のお偉いさんたちが意外とすんなり従ったので助かった。中にはリトレイユ公に与する者もいるはずだが、彼らも自分の地位と出世が何よりも大事なんだろう。

將軍たちが退出した後、俺はリコシエに笑いかける。

「申し訳ありません、殿下。またしてもこのようなお役目を」

「いえ、こういうときのために私がいるのですから」

リコシエはにっこり笑う。見た目はリトレイユ公そっくりの糸目美女だが、こちらには人をホッとさせる温かみがある。人徳の差だな。

さて、これで第五師団の指導部は抑えた。リトレイユ公直々の命令となれば、彼らには静観する大義名分になる。

もしかすると、このリトレイユ公が影武者であることに気づいている者もいるかもしれない。だが気づかなかったと言っておけば何も問題はない。

「では帝都に戻りましょう、殿下」

「そうですね」

公式記録では、リトレイユ公はここで第五師団の將校たちに帝室への忠誠を示すよう訓示し、帝都に戻って幽閉されることになる。

ここを出ればリコシエは変装を解き、そしてもう二度とリトレイユ公の影武者には戻らない。

その後はアルツァー大佐が身柄を保護し、リコシエを下士長待遇で軍属にしてくれるそうだ。秘書官として身近においてくれるという。

彼女は変装を解いてもリトレイユ公に似ているので、余計なトラブルに巻き込まれやすい。リトレイユ領から離れ、第六特務旅団の軍属として軍服に身を包んでいれば安心だ。

帰りの馬車に案内しようと思ったとき、不意に背後から声をかけられた。

「クロムベルツ少尉、いや今は大尉だったか。立派になったものだ」
「そういやここは俺の古巣だった。俺は内心で溜息をつきながらも、笑顔で振り返る。」

振り返った先にいたのは第五師団の副師団長だった。

階級はもちろん将官相当の將軍。俺にとっては雲の上の人だ。確かにリトレイユ宗家の分家筋で、彼もリトレイユ姓を名乗っている。

「これは副師団長閣下。御挨拶が遅れて申し訳ありません。火急の折ですので」

俺が敬礼すると、白髪の老將軍は軽く手を挙げた。

「貴官の言う通りだ。挨拶はいい。しかし貴官はリトレイユ公と親しい間柄であつたかな？」

嫌なこと聞いてくるな、この爺さん。

副師団長クラスなら、俺が帝室御前会議でリトレイユ公に喧嘩を売ったことは知っているだろう。そしてリトレイユ公がそんなヤツを許しておかないことも。

副師団長は俺の返事を待たず、偽リトレイユ公に向き直る。

「良い香りですな。いつもの雄鹿香ではないようですが」

こいつ、本物と影武者が香水で識別できることも知ってるみたいだぞ。偽者だと気づかれている。

だが副師団長がその気なら、さっきの訓示のときに「こいつは偽者だ」と言えば済んだはずだ。

黙っていてくれたということは……つまり、そういうことなんだろう。

俺が軽く目配せすると、リコシエはその意を酌んで穏やかに微笑む。

「ええ、こちらが私のまとうべき香りですから」

「なるほど……」

リコシエがあっさり「私は影武者ですよ」とバラしたので、副師団長は少し驚いたようだ。

だが怪物の巢のような師団司令部で最高幹部まで登り詰めただけあって、副師団長は取り乱すことはなかった。

「私もこの香りが当主に相応しいと存じます」

驚いたな。この爺さん、偽者の方がマシだとぶっちゃけたぞ。

それから副師団長は偽リトレイユ公に質問してきた。

「ところで例の者たちはどうなさいますかな？」

「例の者、ですか？」

「ええ。お雇いになった傭兵一万が、そろそろベリユーンの廃城に集結した頃合いでしょう？」

何それ。初めて聞いたぞ。

貴族たちは使用人の一種として傭兵を召し抱えることがあるが、一万は桁違いだ。

傭兵は小作人や芸術家たちとは違い、雇っても利益を生み出さない。国内外で勝手な略奪などできないから出費だけだ。

だから貴族たちは傭兵を軍事力の調整に用い、ごく少数しか雇わない。必要がなくなればすぐに契約を打ち切る。

つまり一万人もの傭兵を雇ったこと自体が、これから軍事行動を起こす証拠と言える。

帝国軍が存在する今の御時世、軍事力を切り売りする在野の傭兵団はそれほど多くない。大半は素人同然のゴロツキだろう。統制は取れておらず、補給もまとまてできないはずだ。

山賊と大差ないだろうから、放置しておくのはまずいな。

俺の表情を読んだのか、リコシエがすぐさま質問を重ねる。

「すぐにその者たちを呼び戻しなさい」

「我々は帝国軍人ではない者に命令はできません。御前の御命令なら聞くでしょうが、『代理の者』では難しいかと」

リトレイユ公はリコシエを信用していなかったから、影武者が勝手なことをしないように策を講じているのだろう。副師団長の言葉はそれを示唆している。

ベリユーンの廃城といえば、帝都の喉元だ。傭兵たちが帝都を襲撃すれば大変なことになる。

だが俺は諦めない。

この副師団長はどうかする手段を知っているからこそ、影武者に取って代わって情報をリークしたのだ。取引の材料にするために。

そう考えてみると、指揮官の不在が気になるな。傭兵たちは戦術レベルの作戦なら立てられるが、戦略レベルの作戦は手に余る。帝室相手に戦争するなら士官教育を受けた専門家が要だ。

攻略法があるとするれば、その辺りかな。俺は尋ねてみる。

「傭兵たちを指揮するのは誰ですか？」

すると副師団長は俺をじっと見て、それから静かに答えた。

「今動いている若手将校たちだよ、クロムベルツ大尉。彼らは本来の部下に加え、傭兵たちも指揮するよう命じられている。そうでしたな、御前？」

「……はい、そうでしたな」

それなら彼らを止めれば済む話だな。

俺は笑顔を見せる。

「では問題ありません。こちらにはリトレイユ公殿下もおられますし、後はお任せください」

副師団長は俺を値踏みするような目で見た。嫌な目だ。

「元より第五師団は軽々には動けない。兵は出せないが、全て任せていいのかね？」

「ええ。御安心を」

これだけ裏事情を知っている副師団長は、第五師団内部の親リトレイユ派トップに違いない。リトレイユ公が逮捕された後、報復人事の嵐が吹き荒れて親リトレイユ派は更迭される。

だから危険を冒して情報をリークし、手を汚さずに恩だけ売りに来たという訳だ。

考えようによってはなかなかダーティな処世術だが、こちらとしては大変助かる。

だから俺の裁量でこう答えておく。

「第六特務旅団のアルツァー大佐は、閣下を大変高く評価しておら

れるはずです。小官も第五師団の一員だった者として、改めてそう進言するつもりです」

今後はアルツァー大佐が後ろ盾になるかもしれないよ。そう伝えておく。

案の定、副師団長の表情がわずかに柔らかくなった。

「そうかね。光栄なことだ」

ごく簡素な返答だったが、これは契約成立とみていいんだろうな。日和見主義者のおかげで重要な情報が入ったのはいいが、これでまた面倒臭いしがらみがひとつ増えてしまった。

俺は副師団長に挨拶した後、リコシエを馬車に乗せる。護衛はうちの旅団の騎兵たちだ。

「このまま真つすぐ帝都にお戻りください。後はアルツァー大佐が何とかしてくれます」

「恩に着ます、クロムベルツ大尉殿。ですがあなたは？」

心配そうなりコシエに俺は敬礼した。

「予定通り、帰る前に残りの仕事を片付けてきます。馬車を出してくれ」

火種は全部消しておかないとな。

第65話「死神街道」(凶解あり)

【第65話】

俺は腰の両手サーベルをトントンと叩き、気持ちを落ち着かせる。兵の指揮は久しぶりだが、今回は人数が多い。

「大尉殿、敵斥候が本隊に戻りました。発見された様子はありません」

「わかった。もうしばらく辛抱して隠れててくれ」

こちらの斥候からの報告に俺はうなずいた。

ここはリトレイユ領の外れにあるベリユーン城へと続く、たった一本の街道だ。

ベリユーン城は百年以上前に廃城となって荒れ果てていたが、リトレイユ公が雇った一万人の傭兵がひしめいている。さっき斥候を送って確認した。

シュワイデル傭兵たちは万単位の大規模な軍事行動を計画することも、指揮することもできない。命じられた通りに戦うのが彼らの仕事だ。

だからリトレイユ公は戦略家や指揮官として子飼いの将校たちを送った。

今から彼らを迎撃し、傭兵隊との合流を阻止する。

ここは峡谷になっており、眼下の街道に対して左右の斜面から攻

撃を加えることができる。うまい具合に身を潜める岩場も多数あった。

戦列歩兵を並べるには不向きな地形だが、散兵戦術を採るなら申し分ないだろう。

やがて斥候から報告が入る。

「大尉殿、所属不明の部隊が街道北側から接近中です。銃を持たない騎兵が十余り、戦列歩兵が千から千五百ほどです」

騎兵はたぶん将校たちだろうな。戦列歩兵は配下の部隊だ。

懐中時計を見ると、あと二時間ほどで日没だ。

今頃はアルツァー大佐がリトレイユ公を尋問しているだろう。今夜中にリトレイユ公の戦力を削いでおかないと、皇帝の気が急に変わって和睦などと言い出しかねない。

俺は伝令歩兵を通じて、配下の一個小隊五十名に命じる。

「指示あるまで待機。射撃合図は『妖精の踊り』、後退合図は『私を捕まえて』だ。各班で再確認しろ」

「はっ！」

大丈夫かな。戦場では命令を正しく伝えるだけでも難しい。聞き違いや勘違いによって兵が勝手な行動を始めることがざらにある。

だが野戦で三十倍の兵力を相手にするときには、どんなミスも許されない。緊張してきた。

眼下の街道は大きく湾曲し、山裾を迂回している。その山裾に布陣しているのが俺たちだ。

「敵最後尾が予定地点を通過しました」

「姿が見えなくなるまで待ってから荷車で封鎖しろ。騎馬の通行を確実に塞げばいい」

まずは敵の退路を断つ。

それと前後して、俺の位置からも敵の隊列が見えてきた。第五師団の戦列歩兵たちだ。騎馬はやはり将校だ。騎兵はいない。大砲もない。

勝てる……かな？　ねえ『死神の大鎌』、そのへんどうなの？

俺の頼りない予知能力は何も教えてくれないが、俺が死ぬことはないらしい。俺の生き死になんかどうでもいいから、この戦いの勝敗を知りたいんだ。

よし、俺は負けたらここで戦死してやるからな。どうだ？

……やはり反応がない。いつものことだ。

やっぱり信頼度の低い予知能力に自分と部下の命を預けるのはやめておこう。今の俺は臨時で指揮権を預かった参謀、つまり作戦の立案から実行まで全部やらないといけない身だ。

やがて「敵の退路を封鎖した」という報告が入る。もうやるしかない。

俺は傍らを振り返った。鼓笛隊長のラーニヤ下士補が微笑んでいる。彼女は豎琴を持っていた。軍服に似合っていないが、今回はこ

れが必殺の兵器となる。

「一曲いかがですか、参謀殿？」

「ではお願いしよう」

俺はなるべく冷静を保ちつつ、旅の女楽士だったラーニヤにリクエストする。

「『妖精の踊り』を」

「はい」

ラーニヤがすぐさま、軽快なメロディを奏で始めた。

峡谷に豎琴の音が響くが、敵の隊列は乱れない。さすがにこれが攻撃命令だとは思わなかっただろう。

だがすぐに山肌のおちこちから狙撃が始まる。

「一番端まで命令が伝わった。止めてくれ」

俺がそう言うとラーニヤは演奏を止め、心配そうな顔をする。

「ずいぶん離れてますけど、本当に届きますか？」

「従来のマスキット銃なら届かない。だがライフル式マスキット銃なら届く」

こちらは五十人が散発的に撃つだけなので、もちろん大きな被害は出ていない。だが敵の隊列は大きなので、撃てば大抵誰かには当たる。

近くにいる味方が撃たれば兵は動揺し、指揮官としても対応策

を考えなければならぬ。

「こちらの狙撃兵はわずか一個小隊だから、敵の指揮官の判断は『構わずに駆け抜ける』が正解だ。だがそれはできない」

「なぜですか？」

ラーニヤが問うので、俺は苦笑してみせた。

「走った先に伏兵がいれば挟撃されて全滅だからな。索敵を行っていない場所に兵を動かさないよう、士官学校で徹底的に教え込まれる」

「そういうものですか」

「ああ。そしてリトレイユ公の子飼いの将校たちは従順で扱いやすいタイプばかりだ」

反骨心旺盛で決断力に優れた将校なんて、リトレイユ公が重用するはずがない。彼女が好きなのはお行儀の良い人形だけだ。

彼らはいさつき斥候を放ち、ここの安全を確認した。だが襲撃を受けた。

当然、この先にも敵の待ち伏せがあると思うだろう。

実際は何にもないんだが。というか、そんなに潤沢に兵を動かす余裕はない。

俺の副官を務めるミドナ下士長が言う。

「大尉殿、敵の反撃が」

「有効打にはならないから構わず撃ち続けてくれ」

こちらは高所に布陣し、岩場に隠れながら撃っている。しかも距離は百メートルほど離れているので、ほとんどの敵弾は届かない。届いたとしても殺傷力をほぼ失っている。

一方、こちらの射撃は敵後列まで完全に射程内に捉えている。撃ち合いは一方的だ。

< i 6 0 5 2 8 8 — 3 5 6 7 8 >

「さて、リトレイユ公子飼いの将校どもが無能でなければ突撃してくる頃合いだな」

弾の届かない地点で撃ち合いをしても無意味だ。被害だけが増える。

となれば距離を詰めるしかないのです、斜面を駆け上がってくるだろう。こちらの狙撃は精密だが少数で、接敵までの間に出る被害は大したことがない。

案の定、突撃ラツパが聞こえてきた。千五百の兵で斜面を駆け上がり、そのままこちらを蹂躪するつもりだ。戦力差が三十倍だから、そんな力押しも可能だろう。

もっとも俺だってそんなことはお見通しだ。

ミドナ下士長が緊張した表情になる。

「大尉殿、敵が！」

「落ち着け。ラーニヤ、『英雄凱旋曲三番』だ」

「は、はい」

ラーニヤ鼓笛隊長が豎琴を演奏する。この合図が何を意味するかは、第五師団の軍人には絶対にわからない。

わかるのは俺たち第六特務旅団だけだ。

あともうひとつあった。

「大尉殿、第四師団の射撃が始まりました」

「そのようだな」

街道の反対側の崖から、第四師団麾下の歩兵大隊が斉射を開始していた。

彼らの銃は旧式のマスケット銃だが、こちらも高所から撃ち下ろす形だ。しかも反乱軍は第四師団に背を向けており、将校たちも無防備な背中を晒している。

既に反乱軍は突撃態勢に入っているので、隊列は完全に乱れていた。

< i 6 0 5 2 8 9 — 3 5 6 7 8 >

「大混乱だな」

第四師団から借りられたのはわずかに一個大隊五百人ほどだが、この規模の弾幕が降り注ぐと反乱軍が一斉にバタバタと倒れていく。それも後列の将校や下士官が。

あの中に俺の同期がいないことを祈りつつ、俺はつぶやく。

「挟撃は時差を置くことで、左右ではなく前後からの挟撃になる。

……初等戦術演習で習っただろ」

陽動側を向かせることで、無防備な後背を主力側に向けさせる。

基礎の基礎だ。

既に敵の指揮系統は混乱している。突撃命令と退却命令のラッパが同時に鳴り響き、戦列歩兵たちはどの命令に従うべきかわからなくなっているようだ。

斜面を駆け上がってきた敵兵も途中で勢いが弱まり、こちらの狙撃で次々に倒れていく。

「意外と元気なヤツが多いな。ラーニヤ、『私を捕まえて』を頼む」「はい、参謀殿」

俺は第六特務旅団の子たちを後方に下げ、敵との距離を取ることにした。散兵戦術を終わらせ、俺の周囲に集めさせる。

反乱軍の選択肢は少ない。こちら側の斜面を駆け上がっても戦闘には勝てない。ここには一個小隊しかいないからだ。おまけに狙撃兵たちはどんどん逃げる。

かといって反対側の斜面を登って第四師団と戦おうにも、あちらの斜面はほぼ崖だ。急すぎて駆け上がれない。

崖が石垣と同じ効果を果たしているので、これは純粹な野戦ではなく攻城戦に近い。となると三倍の兵力差でも厳しい。おまけに挟撃されて敵の隊列はグチャグチャだ。

まともな指揮官なら、もう戦おうとは思わないだろう。

ラーニヤが演奏しながら、ふとつぶやく。

「あら？ 敵が逃げ出しましたね」

「そりゃ逃げるだろう。逃げられはしないが」

街道の両端は石を積んだ荷車で塞いである。左右は垂直に近い急斜面だ。歩兵なら迂回できるだろうが、騎乗した将校は無理だ。

第四師団はここぞとばかりに盛大に撃ちまくり、第五師団の死体を積み上げていく。彼らに「同じシュワイデル人」という感覚はない。第四師団にとって第五師団は他家の軍隊だし、特に反乱軍は謀反人の一味だ。帝国の敵でしかない。

今回、俺は古巣の第五師団からも皇帝の第一師団からも兵を借りることができなかった。

メディレン家の第四師団に派兵要請が受諾されたのは、アルツァー大佐の実家だからに過ぎない。この国では何をすることも実家のコネが重要になる。

そんなことを考えていたせいだろうか、ミドナ下士長が心配そうに尋ねてくる。

「大尉殿、どうかなさいましたか？」

「何でもない。つまらない戦争だなと思ってな」

「つまらない……？」

「いや、面白い戦争がある訳でもないんだが」

失言だったかな。

俺は眼下の反乱軍が壊滅的な状態に陥っているのを見て、作戦計画の最終段階を実行することにした。

「店じまいにしよう。ベリユーン城方面の街道封鎖地点に向かう。目標は敵士官だ。一人も通すな」
「了解しました」

五十人の狙撃小隊が一丸となって移動を開始し、封鎖地点で右往左往する敵を片っ端から撃ち殺す。軍馬を乗り捨てて先に進もうとする將校たちを容赦なく撃つ。

廃城に集められた傭兵たちに反乱軍の將校が合流しなければ、傭兵たちは動かないだろう。仮に動いたとしても、指揮官不在では農民一揆と大差ない。

だから將校だけは通せない。

やがて敵歩兵の大半が戦意を失い、リトレイユ領方面へと逃散していった。

しばらくして、確認できた敵將校全員を射殺あるいは捕縛したという報告を受ける。

「こちらの被害は？」

「ありません。……あんな大軍と戦ったのに」

ミドナ下士長は驚きを隠せない様子だったが、俺は首を横に振る。

「そうなるように作戦を立てて、貴官たちはそれを忠実に実行した。当然の帰結だ。それより早く帰らないと大佐に叱られる」

「はい、大尉殿」

ミドナ下士長とラーニヤ下士補は顔を見合わせ、なぜかクスクス笑った。

第66話「リトレイク公の最期」

【第66話】

* * *

【空っぽの小瓶】

私は今、運命の岐路に立たされていた。
目の前の悪党……リトレイク公ミンシアナの処遇だ。
彼女の前で報告書を読み上げる。

「先ほど、クロムベルツ大尉から早馬で報告が届いた。ベリユーンの廃城に向かっていた第五師団の反乱軍を迎撃し、入城を阻止したそうだ。反乱軍將校たちの大半は射殺され、一部は捕虜となって尋問を受けている」

ミンシアナの顔色は悪い。唇が微かに震えているのは、あながち演技でもないだろう。

「まさか……。そんなはずはありません。嘘はおよしなさい」

「別に貴公が信じる必要はない。好きにすればいい。だがこれで貴公の手札は全て失われたことになる」

ミンシアナは即座に反論する。

「軍事力ばかりが私の力だとも？ 私はリトレイク家の当主なの

ですよ」

「その件だが、貴公はもうリトレイユ公ではない。ただのミンシアナだ」

「それはどういう……」

私は事実のみを彼女に伝えた。

「貴家には皇帝の助言があった場合に当主を引退させる規定があるそうだな。リトレイユ宗家は皇帝ペルデン三世の助言に基づき、貴公を当主不適格と判断した。今後は実弟のセリン殿が家督を継承し、貴公の父君が後見人を務める」

「まさか！？ 嘘です！ そんな規定など聞いたことも……」

そう言いかけて彼女はハツとする。

私は小さく溜息をついた。

「そうだ。貴公も私も、そういつた『隠された掟』を知らない。私たちは嫡男ではないからな」

五王家の次期当主となる者は、幼少期から貴族社会の知識を叩き込まれる。

その中には最高機密となる『隠された掟』も含まれる。たとえ当主の実子であろうとも、家督継承者と見なされていなければ教えられないことはない。

「当主の地位を剥奪する方法など広く知られては困るからな。貴公のような者には教えないだろう。お家騒動の火種になるだけだ」

「そんな……」

ミンシアナの顔は真っ青だが、それでも私は言わなければならぬ。
い。

「明日、父君が『迎えの者』をよこす。表向きはそれで領内の山荘に送られることになっている」

「ま、待ちなさい！ 父が私を生かしておくとは思えません！」

「その通りだ。貴公は故郷に帰るが、生きて帰る訳ではないだろう。まあ死去の公表は半年ほど置いてからになるだろうが」

「なっ!?!」

リトレイユ公ミンシアナは病気が何かで弟に家督を譲り、故郷の山荘で療養するも惜しまれつつ逝去した。そういうことになる。

別に彼女の名誉のためではない。リトレイユ家の名誉のため、そして帝国貴族社会の秩序を守るためだ。

「そのような無法、決して許しませんよ」

「許さなければどうだというのだ。既に皇帝もリトレイユ家も貴公を見放した。第五師団も貴公の子飼いの将校どもを粛正し、反ミンシアナ派が返り咲く。ベリユーン城の傭兵たちは支払いの見込みがなくなつて解散した。終わりだ」

ここに居るのは何の権力も持たない、私と同年のただの娘だ。

「後は貴公がいつこの世を去るかだが、皇帝陛下はなるべく早く逝去して欲しいと思つて居るらしい。護送中に逃げ出されないよう、」

処刑してからリトレイユ家に引き渡すことになった。私が銃殺隊の指揮を任されている。夜明け前に終わらせるとのことだ」

もはや言葉も出ないのか、顔面蒼白になっているミンシアナ。

私は彼女のことを嫌いだし、この女のせいでキオニス遠征軍二万人が死んだことを許すつもりはない。

だがやはり心が痛む。一人の人間として同情する気持ちは消せない。

それでも任務は任務だ。私は私の務めを果たさねばならない。

「とはいえ、陛下とて五王家の前当主が平民の兵士に撃たれるのを心苦しく思っておられる。貴公は平民嫌いだからな。そこでこれを預かっている」

私は机上に小瓶を置いた。

「これは大変貴重な薬で、一切の苦痛なく眠りながら逝けるらしい。皇帝から直々に死を賜るなど、近年では希なことだ。誇っていいぞ」

「冗談じゃないわ!」

ミンシアナは逆上して立ち上がった。

「私が嫡男だったら、こんなことにはなってなかったでしょう! 女に生まれただけでこんな目に遭わされて! 貴方も女なのにも思わないの!？」

「思うことはある。だから私は実家を離れて軍人になり、階級の力でどうにか世間を渡ってきた」

貴族の女に生まれれば、政略結婚の道具になるしかない。それが嫌なら俗世を捨てて神殿で暮らすか、私のように軍人としてお飾り部隊の長になるか。

いずれにせよ選択肢はほとんどないだろう。

「だが貴公は貴族の身分を甘受し、何不自由ない生活を送った。クロムベルツ大尉のように道端のパン屑を拾い、石畳で眠ったことなど一度もあるまい。生まれの不幸ならクロムベルツ大尉の方が遙かに上だ」

私はミンシアナを睨みつける。

「私と部下たちは砲弾の下をくぐって砦を死守し、砂塵にまみれながら異教徒の騎兵と殺し合った。大事な部下を四人失ったぞ。全員女だ。女に生まれたことを呪う貴公が、その呪いで同じ女を殺したのだ」

「何を言っているのです？ 死んだのは平民でしょう？ 同じではありませんよ」

何が悪いのか本当にわからないという顔をしているミンシアナに、私はもう怒る気も湧かなかった。

この女にどんな言葉を尽くそうが何も伝わらないのだろう。話し合うだけ無駄だ。

そう思わせてくれた彼女に感謝する。おかげで心の痛みが少し薄れた。

「ではこの問題は男女ではなく貴賤の対立だな。貴公を撃ちたい兵士は大勢いるから、銃殺隊は多めに用意した。楽に死ねるだろう。これから処刑を執行する」

私が机上の小瓶に手を伸ばすと、ミンシアナは叫んだ。

「待ちなさい！ リトレイユ家の当主が平民に……それも獣のように銃で撃ち殺されるなど、許されないことですよ！」

私は小瓶を手に取ると、それをミンシアナに差し出した。

「なら皇帝から賜った死を持って逝け」

ミンシアナは額に汗を浮かべながら、机上の小瓶を凝視する。

「私が……これを……」

「これが貴公にできる最後の選択だ。処刑か自害か好きな方を選べ」

「で、ですが……。ところでクロムベルツ大尉はどこです？」

「ここにはいない。あの男の優しさに縋ろうとしても私が許さん。

貴公は彼を謀殺しようとしたからな」

あの男は優しすぎるから、不可能だとわかっていても「死んだことにして隠棲させられないか」などと検討するだろう。

だがそれは軍人として許されない行為だ。我々軍人は殺すべきときには必ず殺さねばならない。

クロムベルツもそれはわかっているから、結局は任務を優先させる。そして割り切ることができずに心に傷を負う。そういう男だ。

私の参謀は優しすぎるからな。

「死神クロムベルツ」の異名など、彼の本質を何ひとつ表現できていない。

だから私がこの女の死神になる。

「貴公がこれを飲むなら最期まで見届けよう。その程度の慈悲と義理はある」

「の……飲めばいいのでしよう、飲めば……」

目に見えて震えながら、ミンシアナは小瓶を手に取った。

凝った細工のガラス瓶は、まるで香水瓶のようだ。この女の最後を彩るには相応しい小道具かもしれない。

ミンシアナは食い入るように小瓶を見つめ、震える指で封を切る。息が荒い。

「全部……飲めばいいのですか？」

「その方が確実だろうな」

同情していい相手ではないとわかってはいるが、それでもやはり可哀想になってきた。自害を強要されるなど、彼女の性格では耐えられない屈辱と恐怖だろう。

だが私の死んだ部下たちは、死を受け入れる猶予すらなかった。

憐憫の情を強めぬよう、私は敢えて非道な笑みを浮かべてみせる。

「貴公は静かな部屋でソファに腰掛けたまま死ねるのだ。私の部下たちは冷たい砂の上で死んだぞ」

「平民と一緒にするなんて、あなたはどうかしているわ……」

ミンシアナは小瓶を手にまだ震えていたが、私が腰のサーベルに手を伸ばした瞬間に慌てて飲み干した。

「んっ……うぐっ……」

毒薬の瓶を一気に飲み干し、その瓶を絨毯の上に投げ捨てる。

「の、飲みましたよ！ さあ私の覚悟を讃えなさい！」

「……そうだな。それは認めよう。やはり貴公は貴族だった」

ここで自棄になられても困る。礼儀として一応褒めておく。

解毒薬も治療法も敢えて作られなかった『皇帝の毒薬』だ。今すぐに毒薬を吐き出しても間に合わない。

ミンシアナの死は確定した。彼女はもうすぐ死ぬ。

ミンシアナは冷や汗で全身びっしょりと濡れていたが、やがて視線を彷徨わせながらフラフラと立ち上がる。

「この部屋でなら、どこで死のうと同じなのでしょう？　せめて休

みたいわ」

「寝台に行くか？」

「そうですね……」

ミンシアナは天蓋付きのベッドに横たわる。私は彼女の肩を抱き、それを介助した。道連れにされないよう、攻撃を警戒しながらだが、汗に濡れた前髪を払い、仰向けになったミンシアナがつぶやく。

「死ぬのね、私……」

「苦しくはないか？」

「ええ。ただ少し、息苦しい気がしますわ」

それを裏付けるように、ミンシアナの呼吸がハアハアと荒くなつてくる。

ふと気づくと、ミンシアナが私を見ていた。今までに見せたことのない、すぎるような目だ。

「怖い……。逝くまで、手を……。手を握っていてくださる……。？」
私の部下たちを死なせておいて、そんなことをよく頼めたものだ。だがそれを拒むだけの強さは私にはなかった。

渋々ではあるが無言で手を握る。

「わ……。私の、最期の見届け人が、五王家の……。だなんて、悪くな

……。」

ようやく意識が薄れてきたようだ。このまま眠りに落ちれば、安らかに最期を迎えられるだろう。

大勢の人間の人生を狂わせてきた大悪人だが、無駄に苦しめる必要もない。

「ねえ、アルツァー……」

「なんだ」

「もし、生まれ変わったら……。今度は友達に……。なつてくださる……」

……？」

お断りだ。

そう思ったのに、全く違う言葉が口から出た。

「私の言うことを素直に聞くのならな」

無意味な約束だ。フィルニア教安息派には生まれ変わりなどない。死後の行き先は冥府の安息の地と決まっている。

だがミンシアナは童女のようにあどけなく笑った。

「ありがとう……じゃあ良い子にする……。踊り疲れてとても眠いわ……ちよつと寝て、目が覚めたら……冬離宮のお庭を散歩しましよう……砂糖菓子もいっぱい……」

意識が混濁して昔の夢を見ているのだろうか。

ふと視線を床に向けると、空っぽの小瓶が月光に濡れていた。

リトレイユ宗家の家督を奪い取り、戦乱と政争の果てに彼女が得たものがこの毒薬の小瓶ひとつだ。

愚かたしか言いようがないが、これが彼女の望んだ人生だったのだろうか。

そうだ。彼女に聞いておきたいことがあった。

「貴公はなぜ、わざわざ当主の座を奪った？ あれほどまでに権力に固執した理由は何だ？」

返事はなかった。彼女は二度と醒めぬ眠りに落ちていたからだ。

それからしばらくすると、微かに上下していた胸も止まる。

絡めていた指がほどけて、するりとシーツに落ちた。

「……おやすみ、ミンシアナ」
私は制帽を被り直し、典医たちを呼ぶために立ち上がった。

第67話「検死」

【第67話】

俺が女子戦列歩兵たちと共に帝都に戻ったのは、戦鬪の翌日だった。ベリユーン城に集結していた傭兵たちの説得と部下たちの休息のため、現地で一泊せざるを得なかった。

そして戻ってくるなり、俺は衝撃的な事実を知る。

「そうですか、リトレイユ公が亡くなりましたか……」

逮捕後すぐに死亡したのは意外だった。死神などと呼ばれる俺だが、他人の死期なんか全く見通せない。

だがもちろん、彼女の死は自然死ではないだろう。

アルツァー大佐はどことなく落ち着かない様子で、そわそわしながら俺に告げる。

「被疑者死亡のため、予定されていた審問会は中止になった。これから皇帝陛下の侍医たちが検死を行う。軍関係者として同席を頼む」「承知しました」

今回の件は帝国軍が深く関与しているから、その代表という訳か。平民出身の大尉じゃ少々軽いが、陰謀の後始末を誰かに押しつけるのも気が引ける。彼女を死に追いやったのは参謀の俺だ。

そう思っていたのだが、リトレイユ公ミンシアナの検死は予想以上に過酷なものとなった。

宮殿の南向きの一室に、彼女の遺体は安置されていた。検死というから薄暗い霊安室みたいなのを想像していたが、部屋の中はとても明るい。

ベッドに寝かせられているリトレイユ公の亡骸。死に顔は穏やかに眠っているようにしか見えない。

毒薬を飲んで自害したそうだが、自分で飲むとは思えないから自害を強要されたんだらう。彼女の性格的に一悶着あったのは容易に想像がつく。

そして彼女は全裸だった。もちろん上からシーツを被せられてはいるが、どうやら結構しつかりした検死を行うらしい。

この時代の検死なんて、せいぜい脈を取って死亡を確認する程度だと思っていた。

やがて帝室に仕える侍医たちが入ってくる。

最初に侍医長の内科医。続いて外科医。いずれも五十代ぐらいの男性だ。その後助手らしい若手の医師たちが続く。

彼らは俺と大佐に一礼した。俺たちも軽く会釈する。

外科医が最初にこう言った。

「はじめまして、帝室侍医団のフォービエン外科部長です。まず外傷の有無を確認いたします。諸君、シーツを取りなさい」

フォービエン医師の指示でシーツが取り除かれた。

これ……俺が見ちゃってもいいんだろうか。大嫌いな政敵だったとはいえ、相手は女性だ。彼女も俺なんか素肌を見られたくないだろう。

俺は隣の大佐にそつと耳打ちする。

「閣下、小官は後ろを向いていた方がいいのでは？」

「検死の見届け人が後ろを向いていてどうするんだ。貴官の優しさは知っているが、今は任務に徹しろ」

大佐にたしなめられてしまった。

すまん、リトレイユ公。

俺が居心地の悪い思いをしていると、外科医たちは容赦なくリトレイユ公の遺体を調べ始める。

「ドネフ君、殿下の御口を開いて。そう、敬意をもって丁寧にな。マクミラン君、鏡を当ててくれ」

なんで南向きの明るい部屋で検死するのかわかった。ライトのない時代だから、太陽光を鏡で反射させて内部を照らすんだ。

俺の視線に気づいたのか、フォービエン外科部長が物静かな口調で言う。

「他殺の可能性を排除するため、御遺体の口腔内に傷がないか確認しております。口蓋から脳髓に抜けるように短剣を突き刺す方法もございますので」

大佐が納得したようにうなづく。

「ああ、なるほどな。結構だ、我々に構わず続けてくれ」

「はい、閣下。……ふむ、よろしい。次は鼻腔だ」

てきぱきと調べていくフォービエン医師。医療の未発達な世界だが、それでも帝国最高峰の外科医となれば相当なものだ。

「よし、耳孔を。……うん、傷はないな。所見を記録しなさい」

「はい、先生」

「では次だ。殿下の御髪おぐしを解きなさい」

首から上を隅々までチェックされるリトレイユ公。

首から上のチェックが終わると、次は首から下だ。外科医たちは大きなレンズを手にして、腋の下や臍などを順番に見ていく。

「シワや爪の間も全て調べなさい。針の痕などはないか？」

「見当たりません」

上半身が終わると、フォービエン医師は助手たちに命じた。

「脚を開きなさい。脱臼しないよう丁寧にな」

そこまで調べるのか……。いや、当たり前なんだろうけど。

フォービエン医師は振り返り、アルツァー大佐に申し訳なさそうに告げる。

「同性として御不快でしょうが、お許しください。頭部の七孔と鼠径部の二門は目立つ痕跡を残さずに致命傷を与えることができるた

め、必ず中まで調べるようになっております」

大佐は軽く手を挙げる。

「当然の処置だ、気にしないでくれ。我々の死体の扱い方はもっと荒っぽい」

「御配慮恐れ入ります」

フォービエン医師は一礼すると、再び検死作業に戻る。

「もう少し奥まで光を当てて」

「先生、出血があります」

「いや……これは月の物だ。目立った傷はない」

俺はリトレイユ公のことが嫌いだったが、さすがに気の毒になってきた。

外科医たちが外傷の有無をチェックした後は、内科医でもある侍医長が最終的な検死を行う。前世の近世ヨーロッパでもそうだったが、この世界でもやはり内科医の方が権威があるらしい。

「ふむ……」

侍医長は腕組みし、深く考え込む。彼はリトレイユ公が毒を飲んだことを知らされていない。これは極秘事項だ。

彼はアルツァー大佐に向き直る。

「閣下。リトレイユ公の死因は特定できませんでした。考えられる死因はいくつかありますが、決定的なものがありません」

正直な人だ。科学者として信用できそうだ。

アルツァー大佐は真面目な顔でうなずく。

「そうか。可能性としてあり得るものを教えてはくれないか？」

「ご存じでしょうが、帝国伝統医学の人体観では地・水・火・風の四元素に陰陽の二態が加わり、八相を成します。全ての病はこの八相で説明できます」

士官学校で俺も習ったな。バカバカしいので聞き流したけど。

ただこの伝統医学、理論はメチャクチャなのに治療実績は意外と良い。数百年の経験に裏打ちされた治療法だからだ。だから皇帝や貴族たちからも信頼されている。

侍医長は講義するような口調で続ける。

「御遺体の各部位をこの八相に当てはめて診断いたしました。諸相が入り乱れており断定に至りませんでした」

病死じゃなくて毒殺だからかな……？

「貴人ほど四元素の力が強く、陰陽も強く発現すると考えられています。諸相が入り乱れるのもリトレイユ公の血筋の為せる業かという世界では貴族と平民は別の生き物と考えられているので、こういう理屈が罷り通る。いやむしろ、貴族と平民を区別するためにこんな屁理屈が存在しているんだろう。」

アルツァー大佐は小さく溜息をつき、重ねて問う。

「では伝統医学は置いて、貴殿の経験ではどうだ？」
侍医長はしばらく沈黙した後、ぼそりと告げた。

「直接の死因は窒息でしょうな。ですが絞殺の痕はありませんし、酒や薬物の兆候も確認できませんでした。爪などを見ても、お苦しみになった形跡がありません。締め切った室内で火を焚いたときは苦痛を伴わない窒息が起こりますが、御遺体の血色がそれとは違います。ま、何らかの御病気でしよう」

侍医長はリトレイユ公の死因が毒殺であることを知っているのだろうか。もし知っているのなら、隠蔽に協力してくれていることになる。

あんまりあれこれ聞かない方がいいんじゃないだろうか。

「閣下」

「ああ、わかっている。この後、リトレイユ家の侍医たちも遺体の確認を行う。そのときに彼女の持病についても聴取を行う予定だ」

「承知いたしました。何か情報があれば御連絡をお願いします」

「そうしよう」

侍医長たちはそれぞれの所見をまとめ、書類に署名する。これでリトレイユ公の死因は「おそらく病死」となった。

何通もの書類のうち、一通がアルツァー大佐に手渡される。

「こちらが検死報告書の写しです。同じものを各王家に提出いたします」

「ありがとうございます。メディレン家の分は私が預かっておく」

一方、外科医のフォービエン氏はじつとリトレイユ公の遺体を見つめていたが、侍医長たちの退出に伴って部屋を出ていった。

残されたのは俺たち二人と、検死を終えたリトレイユ公の遺体だ。

彼女の亡骸はさつきと変わらず、生前の姿をそのままに残している。敷かれたシーツが乱れ、髪を解かれているせいで、ちよつと正視しづらい感じになっていた。

「敵とはいえ、この扱いは気の毒ですね」

思わずそんなことを口走ってしまったが、大佐は俺を責めなかった。

「そうだな。だがリトレイユ家の検死の前に、侍女たちが来て髪を結び直してくれるそうだ。生前の威厳を取り戻してくれるだろう」

大佐は疲れたような口調で言い、フツと苦笑した。

「どのみち、彼女の死体にもう大きな意味はない。ここから先は検死報告書の方が政治的に重要な意味を持つ。魂と政治的価値を失った肉体は丁重に弔われる」

彼女の悪行を思えば、埋葬してもらえただけまだマシだと思う。

だがそれでも、人として哀れみの感情は抑えきれない。

「五王家の当主でさえ、死ねばこの扱いですか」

「五王家の当主だから、だよ」

大佐は制帽を脱ぎ、前髪を邪険に払う。

「家督を継承した瞬間から、彼女は帝国を構成する主要な部品になったのだ。個人の意志だの尊厳だのは後回しにされる」
なるほどな。

俺は路上生活時代、貴族たちは周囲から尊重されて楽しくやっつて
るんだと思っていた。

だが眼前のリトレイユ公の遺体は、そうではないことを教えてくれた。

死にたくもないのに死なねばならず、死ねば死んだで政治的な危険物扱いだ。紙切れ一枚と交換できる程度の尊厳しかない。

荒野で朽ち果てていく戦列歩兵や、飢饉や疫病で共同墓地の穴に投げ込まれる農民と、どれぐらい違うのだろうか。

今の彼女は、彼女自身が踏みつけてきた多くの屍とそれほど変わらないように思えた。

午後の陽光を浴びて哀しいほどに白いシーツを、俺はじっと見つめる。

「もしかすると、彼女はそれが嫌でこんなことをしたのかももしれませんね」

「かもな。いずれ地獄で再会したら聞いてみよう」

「地獄ですか」

「ああ。私は安息の園には行けそうにもないよ」

アルツァー大佐は壁際の椅子に腰掛け、深々と溜息をつく。

「クロムベルツ大尉」

「なんですか？」

「私がああなつたときは、検死の立会を務める将校は貴官に頼みたい」

さつきまでの陰鬱な様子が嘘のように、アルツァー大佐の表情は晴れやかだった。

その不自然な明るさと申し出の内容に俺は困惑する。

「小官でいいんですか？」

「貴官なら不満はないぞ。違う将校を連れてきたら祟ってやるからな」

冗談っぽいけど完全に本気の口調だった。怖い。

じゃあここは冗談っぽく本気で返すか。

「では小官がああなつたときは、閣下をお願いしてもいいですか？」

「断る」

大佐はふくれっ面で腕組みをした。なんでだよ。

「貴官が戦死するとき、私もこの世にはいないだろう」

「それは小官の台詞です。閣下を一人で死なせる気はありません」

「ふむ」

大佐は少し考え込む。口元がにやけていた。

「じゃあ死ねないな……」

「なるべく死なないでください」
今日の大佐はちよつと変だぞ。心配になつてきた。

そのとき、ドアがノックされて宮廷の侍女たちが入室してきた。
彼女たちは俺たちに一礼する。

「次の検死の前に、リトレイユ公殿下の御髪を整えさせて頂きます」
「承知した。それと遺体の付き添いを頼む。我々の仕事は終わりだ」
大佐は制帽を被り直しながら立ち上がった。

「行こう、大尉。生きている私にコーヒ―を淹れてくれ。とびきり
熱くて濃いやつをな」

「なんだか無理して笑っている大佐に、俺は強い不安を覚えながら
微笑みかける。」

「では最高の一杯をお作りしましょう」

第68話「甘い誘惑」

【第68話】

俺たちは宮殿の中に用意された客室に戻り、部下や他家の報告を待つことにする。といっても主な対応はロズ中尉がやってくれるから、俺たちは休憩だ。

ついでに大佐にコーヒーも淹れてあげよう。なんか落ち込んでるからな。

俺は「何かあつたんですか？」とか「元気出してください」などとは一切言わず、ただ無言でコーヒー豆を焙煎した。

慣れとは恐ろしいもので、最近は音だけで煎り具合がわかる。この豆なら中煎りから半歩ぐらい進んだところで焙煎を止めるのが大佐好みだな。

大佐はソファにもたれて黙っていたが、やがてぼつりとおつぶやいた。

「クロムベルツ大尉」

「なんです、閣下？」

「私は昨夜、人として恥ずべきことをした」

大佐は制帽を目深に被り、暗い口調で続ける。

「皇帝は五王家間の不和を何としても避けようとした。審問も処刑も行わず、何の記録も残さず、ひっそりと幕引きにしたかったのだ」

俺は焙煎の手を止め、大佐に向き直った。

「そこで閣下が勅命を受けて自害を強要なさった訳ですか。虚実を織り交ぜ、半ば恫喝して」

大佐は驚いたように顔を上げる。

「今のでよくわかったな？」

俺はコーヒーマルに豆を入れると、ハンドルをガリガリ回しながら答える。

「閣下の性格と状況を考えると、他に落ち込む理由が思いつきません」

「さすがは私の参謀だ」

そんなんじゃないよ。俺の前世には詰め腹を切らされる武士の話とか色々あったからな。実態は処刑だが、あくまでも自発的意志による自害だ。

そしてここでも同じことが起きた。人間のやることは異世界でも変わらない。

それだけだ。

「幽閉中の罪人が勝手に死ぬ分には、誰の責任でもありませんからね。それに検死結果は病死です。死者を裁く法は我が国には存在しませんし、査問会も開けませんから、これで一件落着です」

事情を知らない平民たちは病死の発表を信じるだろうし、事情を

多少知っている貴族たちは「自害したから罪を免じて病死扱いにしてもらったんだな」と察する。なべて世は事もなし、だ。

「閣下は軍人として貴族として、勅命を忠実に果たされたのです。賞賛される行いではありませんか」

だが大佐は哀しそうに笑う。

「貴官はそう思っていないだろう？」

「ええ。ですがその重責を閣下が一人で果たしてくださったことに、正直安堵しております。そんな自分が許せません」

俺は卑怯者だ。

ちょうど暖炉でヤカンの湯が沸いた。俺は湯を注ぎ、コーヒーを抽出する。

「閣下がその役目を引き受けなければ、他の誰かがしていたでしょう。もし誰もしなければリトレイユ公は自害せず、審問会を経て帝室の秘密裁判に至り、最期は公開処刑です」

「さすがにそうはならなかっただろう。リトレイユ家も彼女を始末したがっていたからな」

「なら、どのみち彼女の末路は決まっていた訳です。損な役目を押しつけられたのが閣下だった、というだけの話ですよ」

コーヒーの湯気がふわりと漂う。だが俺の嗅覚は鈍く、あの甘く切ない芳香を前世ほど感じることはできない。リトレイユ公の香水

の違いにも気づけなかった。

その代わり腐敗臭にも鈍いから、この不潔極まりない異世界でもどうにか順応できた。失うことは得ることでもある。そう思う。

「とはいえ、それで閣下の負い目が消える訳ではないことぐらい承知しております。小官にできることといえば、お側にいてコーヒーを淹れることぐらいでしょう」

宮殿には極上の茶器が潤沢に所蔵されており、今日はナントカ…
…カントカという、よくわからない名工の逸品を使わせてもらう。
極薄の白磁に金の縁取りが美しい。

俺の淹れたコーヒーによって、その白と金がさらに引き立つ。今だけは俺は軍人ではなく芸術家だ。

俺は湯気の立つカップを大佐の前に置き、隣に天使をあしらったシュガーポットを添えた。

「どうぞ、閣下。エチピアル産の長期熟成豆を中煎り粗挽きにしました。閣下好みの甘い香りと、優しい酸味をお楽しみください」

「ああ……。ありがとう」

大佐は何だか気の抜けたような顔をして、おずおずと手を伸ばす。砂糖を何杯も入れているが、「ちょっともうおやめになった方が…
…」と言いたくなるのを我慢して見守る。飲み方は自由だ。

それからコーヒーの香りを大きく吸い込むと、カップを両手で持

って、ちょび……と一口飲んだ。

大佐の張り詰めたような表情が、ふわりとほどける。

「美味い。いつもの味だ」

「光荣です」

これじゃ執事だよ。

それっきり大佐は無言になり、メチャクチャに甘いであろうコーヒーをちょびちょび飲む。俺は無言で自分のコーヒーを飲んだ。このモカっぽい感じ、俺も大好きなんだよな。

ロズとハンナは酸味よりもコク重視なので、しっかり乾燥させた豆を深煎りにしたのが好きだ。俺は砲兵式コーヒーと命名している。

ふと大佐を見ると、彼女は穏やかに微笑んでいた。よかった、少し落ち着いたようだ。

「貴官とこうしてコーヒーを飲んでいると、少しだけ日常が戻ってきた気がするよ。ありがとう、大尉」

「それは何よりです。日常の雰囲気は重要ですからね」

俺たちは戦場という非日常の空間で仕事をするが、基本はやはり日常の空間で生きている。人間らしい心の余裕を取り戻すためにも、日常を失ってはいけないと思う。

大佐はつま先をぶらぶらさせつつ、俺を見て笑う。

「貴官のコーヒー話が聞きたいな。前に聞いたのでもいい」
「では……」

俺は大佐の好きなモカコーヒーについて説明することにした。

「小官も見たことはないのですが、このコーヒー豆は農家の屋根で天日干しにして乾燥させるそうです。ただ屋根には並べることができないので層ができてしまい、乾燥ムラが生じるのだとか」

「それはいけないな」

「いえ、それがいいのです。下の方の豆は乾燥が遅く、その間に発酵が進みます。それが独特の香りを生み出しているそうですよ」

これは前世に本で読んだ知識だが、たぶんこちらの世界でも同じように作っているのだろう。味や香りがそっくりだ。

「発酵が進んだ豆だけでは臭くて飲めたものではないでしょうが、それが混ざることによってこの甘く気品のある香りが生まれるのです。第六特務旅団もそうあるべきかと」

「うちの旅団もか？」

「はい。兵士には勇敢な者も臆病な者もいます。臆病者ばかりでは戦えません、勇敢な者ばかりというのも危なっかしい。それに歩兵と砲兵では求められる資質が違います」

俺はコーヒーの水面をじっと見つめる。

「異なる者たちが力を合わせたときほど強いものはありません。リトレイユ公は自分と異なる者たちを認められなかったため、強力な地盤を築くことができませんでした。ですが閣下は違います」

そう言つて俺は笑いかける。

「小官のように下層で湿つていた豆でも、閣下というコーヒーの中ではひとつの役目を果たせます。それは閣下の懐の深さのなせる業です」

平民の女性を本気で守ろうとした貴族なんて、アルツァー大佐以外に見たことがない。変わり者にも程がある。

慈善事業に取り組む貴族たちのほとんどは、単なる道楽か名声が目当てだ。俺はそういう連中を山ほど見てきた。

「小官やロズ中尉やハイデン下士長にとって、閣下が正義の人かどうかは関係ありません。閣下がおられなければ、我々は使い捨てにされていきました。少なくとも小官にはアルツァー大佐、あなたが必要なのです。これからも」

ちよつと卑怯な言い回しだっただろうか。

アルツァー大佐はカップを持ったまましばらく硬直していたが、やがてカップを口に運んだ。

「なるほど。つまり貴官は私に罪悪感を抱いたまま生きていけと言っているのか」

「おおむねその通りです。閣下がリトレイユ公のことを思い出されるたびに、それは鎮魂の祈りになるでしょう」

リトレイユ公は二万の将兵を戦死させ、五王家に修復不可能な亀裂を生み出した極悪人だが、彼女の死を看取った大佐は彼女のことを生涯忘れないだろう。言っちゃ悪いが、リトレイユ公には過ぎた冥福だ。

大佐は困ったように微笑み、残ったコーヒを一気に飲み干した。
「まったく悪い参謀だな、貴官は」
「光荣です」

笑いながら胸に手を当ててお辞儀する。

すると大佐はニヤリと笑った。

「それと、今の会話でもうひとつわかったことがある」

「何ですか？」

「貴官は転生者だな」

えっ!?!?

第69話「ただひとつの名」

【第69話】

大佐を慰めているつもりだったのに、いきなり転生者だと言われた俺はさすがに戸惑う。

なんでわかつたんだ!?

まずい。ファイルニア教安息派は転生を認めていない。転生者だとバレたら異端審問だ。たぶん火あぶりになる。

とはいえ、別に信心深い訳でもないアルツァー大佐が俺を告発するとも思えない。そんなことしても何の利益にもならないしな。

落ちて着け俺。これはたぶん……そう、きっと何かの隠喩だ。あるいは冗談。

すると大佐は俺に顔を近づけながらこう問う。

「クロムベルツ大尉。貴官はエチピアル産のコーヒー豆がどうやって熟成されるのか、知っていたな？ あの独特の香りが生じる原因も」

「はい。まあ、想像ですが」

するとアルツァー大佐は不自然なほど優しく微笑む。

「エチピアル産コーヒー豆の香りはコーヒー商人たちの七不思議のひとつだ。輸入を仕切るメディレン家や仲買人のフィニス商人たちも、あの独特の風味がなぜ生じるのか知らない。貴官はなぜ知って

いる？」
しまった。

いやでも前世のエチオピア産のモカコーヒーはそうらしいし、名前も香りもそっくりだから熟成法も同じだって思うよな！？

俺の思考は前世の知識に引っ張られる。アルツァー大佐のミドルネームとかシルダンユーとかで半笑いになってたら、思わぬところで足元をすくわれた気分だ。

とにかくこの場を切り抜けないと。

「いやまあ、想像ですので……」

「シュワイデル人はコーヒー豆のことを何も知らない。そういえば私は、コーヒー豆が蔓に実るのか木に実るのかさえ知らない」

「木ですね」

しまった。知ってることを全部しゃべりたい欲求に負けてしまった。

アルツァー大佐は獲物を仕留めた猟師みたいな顔をした。

「よく知っているな。貴官は実に博識だ。私の参謀にふさわしい」
まずい。まずいぞ。

アルツァー大佐はさっきまでの落ち込みが嘘のように、微笑みながらじわりじわりと近づいてくる。

なんでそんなに楽しそうなんだよ。

「やはり貴官、前世の記憶を持つ転生者が何かだろうか？」

「そんなもの存在しませんよ。あんなものはフィルニア教転生派の妄想です」

俺はその、あれだ。敬虔な安息派教徒ですの。

だがもちろん、大佐の猛攻は止まらない。

「私を甘く見るなよ、ユイナー・クロムベルツ。貴官が私の参謀になった瞬間から、私は貴官の正体を探っていた。その知的な言葉、優しい眼差し、どこか陰りのある横顔。何一つ見逃さないようにしてな」

それじゃまるでストーカーだよ。やめてくれ。

「路上暮らしの平民出身なのに、まるで高等教育を受けた者のように知的な言葉。無数の悪意と侮蔑に曝されてきてなお、他者に向ける優しい眼差し。誰にでも向ける笑顔とは対照的に、孤独なときに見せる陰り。貴官は矛盾の塊だ」

おっと、意外とちゃんと見られていた。

「貴官は帝国領からほとんど出たことがないのに、まるで世界の全てを見てきたかのように多くを知っている。幼少期から路上生活をしていたはずだが、立ち振る舞いや考え方に品がある。平民なのに古式ゆかしい騎士たちの戦場剣術を使う。自分でもおかしいと思わないか？」

おかしいかおかしくないかで言えば、そりやおかしいよな。

「思います」

「だろう?」

あつさり負けた。俺、もしかして参謀に向いてないんじゃないだろうか。

いやいや、これは本来なら異端審問直行だぞ。

しかしアルツァー大佐は腰に手を当てて満足げにうなずいただけだった。

「ようやく認めたな。だが積年の疑問が解決して満足だ。今後も頼りにさせてもらうぞ」

あれ? 今までの会話は何だったんだ?

「閣下」

「なんだ?」

「小官の素性を調べなくてもいいんですか?」

「ん、調べてほしいのか?」

意地悪な笑みを浮かべるアルツァー大佐。からかうような視線に絡みつかれ、俺はドキツとしてしまう。

彼女はソファにもたれかかり、長い黒髪を背もたれに流す。

「貴官の誠実さと能力は知っている。今後もそれは変わらないだろう。これ以上、何を詮索する必要がある?」

つまり彼女は、俺の正体が何であろうが俺を信じて今後も参謀を任せると言っているのだ。

そんなに信頼されているのか。

すると大佐は前髪を弄びながら、ちょっと照れたように笑った。

「ま、本当は貴官の正体を知るのが怖いのだがな。転生者ならまだいいが、噂通り本当に死神だったら怖いなと思ったものだ。だがそう信じたくなくなるほどに、貴官は生と死の岐路をよく知っている」

大佐にまで死神だと思われるのはちょっと嫌だな……。

どうしようか迷っていると、大佐は気弱に微笑んだ。

「貴官の正体は言わなくていい。だがもし死神だったら、私の最期は看取ってくれ。貴官が連れて行ってくれるのなら、地獄の道行きも楽しかろう」

「なんでそんなことを……」

すると大佐は視線を落とす。

「私はリトレイユ公の……ミンシアナの最期を看取った。あの悪女め、私の手を握ったまま幸せそうに逝ったよ。私もいつか地獄に落ちる。そのときはせめて、あんな風に穏やかに看取ってもらいたい」

なんか胸が苦しくなってきた。

「閣下のように心美しい方は地獄になど行きません。もし地獄行きなら小官もお供します。閣下のいない世界に転生しても退屈でしょうから」

「転生？」

俺は転生以来、絶対に秘密にしようと誓ってきたことを口にする。「俺は転生者、前世の記憶を持ったまま生まれ変わった者です。そ

れもこのことは全く異なる世界の住人で、文明としては三百年ほど進んでいました」

あーあ、言っちゃったよ。異端の告白だ。

アルツァー大佐は目をまんまるにして、俺の顔をまじまじと見上げていた。口が半開きなのが可愛い。そんな表情は初めて見た。

この顔を見られただけでも、危険を冒す価値はあったな。

しかし大佐が驚いていたのは一瞬だった。やがて心の底から嬉しそうな顔を見ると、大佐はコホンと咳払いをする。

「なるほどな。それが事実なら全ての疑問が綺麗に解決する。突拍子もない話だが論理的だ」

「そんなに簡単に信用しちゃっていいんですか？」

すると大佐は顔を赤らめて、やや早口で返す。

「だってお前が言うことに嘘は一度もなかったらう。こんな真面目な話をしているときに、お前が嘘をつくはずがない」

いつもの「貴官」ではなく「お前」と呼ばれているのが何だか面白い。相当慌てているな。

じゃあ俺も一人称変えちゃおうっと。

「俺だって閣下に嘘なんかつきませんよ。前世の俺がいた国は日本。剣術も学問もそこで学びました」

大佐は珍しく躊躇するような口調で、ぼそりと問う。

「名前は？」

「名前ですか？」

「お前の本当の名前だ。……知りたい」

可愛いこと言う人だな。

だが俺は頭を掻く。

「記憶がだんだん薄れているせいで、自分の名前が思い出せません。サイトウとかマツイとか、それっぽいのがいくつか思い浮かぶんですが、どれが自分の名前だったのかわからないんです」

これは本当だ。俺自身の実体験と、本などで得た知識との区別が曖昧になっている。転生以降、両者の境界線がどんどんぼやけていた。

俺の本名も「名前だけ知ってる人」のリストの中に埋もれてしまったようで、もはや区別できない。

俺は苦笑してみせる。

「だから俺はユイナーです。日本には漢字という表意文字があって、漢字だとこんな風にも書けますね」

俺は手帳に「唯名」と書いてみせた。

大佐が呟く。

「ずいぶん四角い文字だな……。表意文字ならキオニス文字と同じか。確か文字そのものに意味があるのだろうか？」

「はい、これは『ただひとつの名前』ぐらいの意味です。もうこれでいいでしょう」

「なるほど、それはちょうどいいな」
クスクス笑う大佐。

「では私の参謀は二ホン生まれのユイナーだった訳だ。それを知ったところで何かが変わる訳ではない。これからも私のそばにいてくれ」

「はい、誠心誠意お仕えます」
俺は敬礼した。

なんだか変なタイミングで、しかも拍子抜けするほどあっさりとかミングアウトできちゃったな。肩の荷が下りた気分だ。

そう思っていると、アルツァー大佐がハツと思い出したように質問してきた。

「とっ、ところでユイナー！」

「なんでしようか」

「お前、前世では恋人はいたのか？ いや、もしかして既婚者……？」

それ聞くの？

俺は跪ひざまづいて大佐の手をそっと取り、微笑ほほえんでみせる。

「あいにくとさっぱりモテませんでしたので、妻はおるか恋人すらいませんでした」

「そうか！ それは残念だったな！」

大佐の表情がパアアツと明るくなった。もう少し残念そうに言うてほしい。

アルツァー大佐はふんふんと鼻歌を歌いつつ、とてもいい笑顔になった。今にも小躍りしそうだ。

すっかり元気になったようだ。告白して良かった。

「お前が三百年も先の学問や技術を知っているのなら、これまでの活躍も納得できる。今後はますます頼りにさせてもらおうぞ、ユイナ」

俺は膝をついたまま、苦笑して敬礼する。

「これからも変わらずお役に立ちますよ、閣下」
すると大佐も苦笑した。

「ありがとう。だが少しは変わってほしいのだがな」

「そうなんですか？」

何か不満があるなら言ってみてほしい。

しかし大佐は溜息をつき、俺の制帽を取って頭をくしゃくしゃ撫でた。そして制帽を乱暴に被せてくる。

「そういうところをだ」

だから何を！？

こうして俺は初めて、深い秘密を共有する仲間を得たのだった。

政情はどんどん怪しくなってきたけど、この仲間を守るためにも頑張りよう。

第70話「去る心たち」

【第70話】

* * *

【二指は北を指す】

『ミンシアナ、おお、愚かなミンシアナ!』

劇場に俳優の力強い声が響き渡る。

『私欲に溺れて村人たちを苦しめ、あまつさえ私の果樹園を無断で売り払うとは!』

貴賓席に座っている老紳士が苦笑する。

「これが『愚かなミンシアナ』ですか。酷い田舎芝居だ」

隣の三十代ぐらいの紳士が渋い顔で応じる。

「全くです。伝統ある帝立劇場の演目とは思えません」

『愚かなミンシアナ』は、リトレイユ家お抱えの劇作家が制作した演劇だ。架空の農村を舞台にした悲劇で、村長の娘ミンシアナが金と権力に取り憑かれて破滅していくストーリーになっている。

『お許しを、お父様! でも私、どうしても絹のドレスを着てみたかったのよ!』

『田舎娘の分際で何を申すか! お前の踏み潰してきたものを見る

「がよい！」

舞台の上でミンシアナは醜態を晒し、それを村長が厳しく折檻する。

老紳士は劇に興味を抱けない様子で、天井のシャンデリアを眺めながら隣の紳士に問う。

「この芝居、最後はどのような結末ですか？」

「愚かなミンシアナは神罰によって発狂し、荒野で稻妻に打たれて死にます。その後は村長が村の秩序を回復するそうですよ」

「醜態極まる脚本だ。こんなものの執筆を命じられた劇作家に同情しますよ」

芝居はまだ続いていたが、老紳士は席を立った。

「潮時ですな、ジヒトベルグ公」

「ええ、公弟殿下」

ミルドール公弟の問いかけに、ジヒトベルグ公は立ち上がりながらうなずく。

二人は帝立劇場の広い廊下を歩きながら、誰にも聞かれないように会話を続けた。

「例の件は順調ですか？」

「ええ。『愚かなミンシアナ』も片付きましたし、後顧の憂いはないでしょう。私の仕事もここらで終わりです。早く甥っ子たちに会いたいですな」

この半年ですっかり増えた白髪を撫でつけながら、ミルドール公

弟は苦笑した。

「ブルージュ公は隙あらば転生派勢力を拡大しようとしてきますので、兄も苦労しているでしょう。私のような者でもないよりはマシなはずです」

ミルドール家は当主がブルージュ家に寝返り、弟が帝国に残留している。それぞれが門閥貴族を束ねており、公弟までも寝返った場合、ミルドール地方全域と第三師団全てがブルージュ公国のものになる。

ジヒトベルグ公は苦笑する。

「陛下はお怒りになるでしょうな」

「あの方はミルドール領が帝国に戻ってくると本気で信じておいでですからな。沈んだ夕陽が西から昇るはずがないのですが」

口調は穏やかだったが、ミルドール公弟の言葉には深い失望が刻まれていた。

「おまけにジヒトベルグ家からの派兵要請にも応じず、近衛師団を直轄領の防衛に割いているようでは先はありません。『親指』が『人差し指』に協力せねば、領地どころか砂粒ひとつ拾えますまい」

ジヒトベルグ公はうなずいた。

「同感です。当家も陛下が命じたキオニス遠征で遊牧民たちの恨みを買ってしまい、辺境を騎兵に荒らされています。危なくて耕作させられません。それなのに陛下は知らん顔です」

自前の第二師団が壊滅状態なので、ジヒトベルグ家は自領の防衛すらままならない。

するとミルドール公弟はフツと微笑んだ。

「では例の件、御了承頂けると思っけてよろしいかな？」

ジヒトベルグ公は力強くうなづく。

「はい。先祖伝来の土地を守るには、もはやそれしかありませんまい」
彼はミルドール公弟をまっすぐ見つめると、迷いのない口調で告げた。

「どうか口添えをお願いいたします」

「お任せください。山脈の南北を守る我らは一心同体」
二人はがっちり握手し、晴れやかな表情で笑った。

ジヒトベルグ公はふと、気になっていたことを尋ねる。

「しかし公弟殿下は御家族をどうされるのです？ その、具体的に言つとシュタイアー家の方々を……」

ミルドール公弟の三女はロズ・シュタイアー砲兵中尉に嫁いでいる。そしてシュタイアー家は第六特務旅団の敷地内に住んでいた。するとミルドール公弟は微笑む。

「アルツァー大佐とクロムベルツ大尉がおります。あの二人なら娘一家を守ってくれるでしょうし、メディレン家とのパイプにもなり

ましよう。貴公もそうお思いだからこそ、クロムベルツ大尉を『裏口の友人』にしたのでは？」

「ええ。彼には恩がありますが、それを置いても貴重な人材です。貴族社会のしがらみのない平民で、メディレン公の叔母の腹心。有能で清廉、おまけに穏健で義理堅い。家臣にしたいくらいですが、敵側にいるときにも価値が高い男です」

ジヒトベルグ家とミルドール家が帝国を離脱した場合、残りの三家とは敵対することになってしまう。

だが敵対するからこそ、敵の中には信頼できる交渉相手が必要になる。だからこそ厚遇したのだ。単なる恩返しではない。

ミルドール公弟はうなづく。

「謀反を鎮圧したアルツアー大佐の派閥なら、リトレイユ家に対しても強く出られます。『小指』も『薬指』も動かなければ、ミルドール家討伐は難しいでしょう。『親指』一本では何もつかみ取れませんから」

帝室単独ではブルージュヤアガンといった隣国と戦う力は持っていない。他家の協力が必要だ。他家との連携を阻止することで帝室からの攻撃を封じる戦略だった。

ミルドール公弟はさらに続ける。

「リトレイユ家への牽制なら、アガン王国内の強硬派に南下政策を

吹き込んでも良かったのですが、沿岸部で転生派が勢いづくともメデイレン家に迷惑がかります」

「得策ではありませんな。帝国を割るからこそ、メデイレン家とは友好を保ちませんと」

二人はうなずき、ロビーへと出る。待機していた両家の護衛たちが影のように付き従う。

ジヒトベルグ公が笑いかける。

「外は冷えますな。どうです、ホットワインでも飲みながら五王棋を何局か御指南願えませんか？」

ミルドール公弟は少し驚いた表情をしたが、すぐに笑顔で返す。

「いいですな。私の趣味をよくご存じだ」

「当家醸造のヴァカンドスティンの特級をお持ちしました。授業料としてぜひ御賞味を」

「ははは、私のような末席者を接待しても仕方ないでしょうに」

二人は笑い合いながら馬車に乗ると、さらなる密談のために帝都の闇に消えていった。

* * *

俺は作戦計画書を書く手を止めると、ハンナの困り切った表情と対峙した。

「そんなに酷いのか？ アルツァー大佐が？」

ハンナは大柄な体を縮こまらせるようにして、こっくりうなずく。

「はい、もう夜毎にうなされてまして。昨夜は添い寝したんですけど、ずっと『私を連れていくな』とか『貴公の言葉など聞かぬ』とか、寝言が凄くて」

添い寝したんだ。お母さんみたいだな。

想像したらほっこりしてきた。

いや、今はそれどころじゃない。寝言の内容が不穏すぎる。

「リトレイユ公の死亡直後は悪夢にうなされたりはしてなかったはずだ。始まったのは最近か？」

「はい。半月ぐらい前からです。最初は大したことなかったみたいなんですけど」

ハンナは指を折って数えた後、おそろおそろといった様子で俺に問う。

「やっぱり、リトレイユ公の怨霊とかですか？」

「霊など存在しないぞ、ハンナ。存在してたら作戦計画に組み込める」

「た、例えば？」

「そうだな、怨霊を砲弾みたいに撃ち出して敵軍まるごと呪い殺せたら楽でいいなと思ったことはある。どうせ相手も真似して呪殺合戦になるだけだから無意味だが」

「参謀殿は怖いもの知らずですね！」

別にそんなことはない。霊より怖いものが多いだけだ。

俺は書きかけの作戦計画書にペンを走らせながらそう答えると、ハンナに説明した。

「アルツァー大佐の悪夢が酷くなった時期は、ちょうど『愚かなミンシアナ』の上演が始まった時期と一致している」

「あー……あのリトレイユ公と同じ名前の女性が破滅するお芝居ですか」

「そうだ。リトレイユ家はミンシアナに全ての罪を着せて、五王家としての体面を保つつもりだ。だが死者への侮辱はアルツァー大佐にとつて辛いものだろう」

俺だつて嫌だ。

俺はペン先をインク壺に浸しつつ、軽く溜息をつく。

「死んだ娘を実父が貶めてるんだ。どっちが愚かだかわかりやしない」

「そうですね……」

ハンナはアルツァー大佐がリトレイユ公に自害を強要したことは知らない。知らない方がいいこともある。

「表向き、リトレイユ公は病死したんだ。そのまま葬っておけばいいのに、彼女の父はそれでは我慢ならぬらしい。まあ、その件はまた別に考えるとして」

対リトレイユ工作は用意してある。自分で考えておいて嫌になるような、卑劣なものだ。

とにかく今は大佐のケアだ。

「その件は俺も力になる。軍人の心の手当については士官学校で少し習った」

「ありがとうございます！」

バツと敬礼するハンナ。腕の風圧で俺の前髪が揺れる。

確かにリトレイユ公に自害を強要した後から、アルツァー大佐の様子がおかしい。検死のときも、いつもの豪胆さが感じられなかった。

大佐は豪胆に見えるが、彼女の言葉通り内心では震えている。貴族としての誇りが彼女を支えているに過ぎない。

だがもし、その誇りが揺らいでしまったら……。

そう考えると、リトレイユ公の死はアルツァー大佐に深刻な傷を残した可能性がある。俺は平民だから考えが及ばなかった。

ハンナには事後報告を約束し、俺は自分の執務室を出る。

大佐の居場所をあちこち探し回った挙げ句、軍服姿のちっこい背中を城壁の尖塔で見つけた。旅団司令部がまだ貴族の別荘だった頃、展望台として使われていた塔だ。

「閣下」

「……ユイナーか」

冷たい風に黒髪を流しながら、アルツァー大佐がゆっくり振り返る。

俺は持ってきたコートを背中に掛けながら問うた。

「景色を御覧になっていたんですか？」

「いや……」

大佐は妙に寂しげな表情で、ぽつりと答える。

「死んだミンシアナが羨ましくてな」

ちよつと待て。これ絶対にヤバいだろ。

ありがとうハンナ、早めに教えてくれて。

大佐の心は俺が必ず取り戻すからな。

俺は大佐を刺激しないよう、静かに歩み寄った。

第71話「亡霊と死神」

【第71話】

城壁の尖塔で風に吹かれながら微笑む大佐は、今にも冷たい風にさらわれて消えてしまいそうに見える。

いや、本当に消えてしまう。確信がある。

なぜかわからないが、『死神の大鎌』の能力が発現している。辺りに満ちる死の気配。

だがそれは俺に向けられたものではない。

見えない死神は今、アルツァー大佐の喉笛に大鎌を当てているのだ。

俺が救わなければ。

戦場に立つときの何倍もの恐怖を感じながら、俺は大佐に声をかける。

「リトレイユ公が羨ましい、とは？」

「ああ。お前も見ただろう、検死のときの彼女を」

見た。丸裸にされ、髪を解かれた哀れな彼女の亡骸を。

「俺には無惨な姿に思えましたが」

「私もそう思ったが、同時にひどく羨ましく感じたのだ。命を含む全てのものを手放した彼女は、全ての苦悩からも解放された。どんな苦悩だったかは私にはわからないがな」

まあ確かにそう言えばそうだ。あのときの彼女は全ての因縁から解き放たれて、まっさらな状態だった。

自害した彼女をもう誰も傷つけない。激しく対立していた俺やアルツアー大佐でさえ、死んだ彼女には憐憫の情を覚えた。

アルツアー大佐は尖塔の窓枠にもたれかかりながら、どこか遠い目をする。

「私もいつかああなるのだと思うと、不思議と心躍るのだよ。待ち遠しい気分にはさえる。自分でもあまり健全ではないと思っているのだが、どうにも抑えきれなくてな」

俺は何か言おうと思ったが、うまく言葉が出なかった。

実は俺にも大佐の気持ちがあつてしまったからだ。

あのときのリトレイユ公は全てを失っていた。全てを剥ぎ取られた彼女に、俺は奇妙な美しさを感じた。芸術的というか文学的というか、とにかく無視できない何かがあつた。

どう返せばいいかわからなかったの、俺は率直に言つ。

「俺もあのときのリトレイユ公は不思議な安らぎに満ちていると思いました」

「わかつてくれるか？」

大佐がちよつと嬉しそうに微笑むが、俺は参謀として上司に釘を刺す。

「ですが、それは見る者の主観です。死者は何も考えず、何も感じません。苦しむことはありませんが、安らぐこともないでしょう。生者が死者に意味を見いだすのです。リトレイユ公ではなく閣下自身の問題なんですよ」

俺の言葉に大佐は少し不思議そうだ。胸に手を当て、ややうつむき加減になる。

「私の心か」

「ええ。閣下は死に魅入られておいでです」

死神呼ばわりされてる男にそんなこと言われたら嫌だと思っが、大佐は微笑んでいる。

「それも悪くないな」

こりや重症だな。

俺は精神科医ではないし、宗教家でもない。ただの軍人だ。

それでもここには俺しかいない。俺が諦めたら死神に大佐を連れて行かれる。

絶対にさせるものか。

大佐がおかしくなったのは、リトレイユ公を自害させたときからだ。彼女の死が大佐の心に影響を及ぼしているのは大佐自身が認められている。

突破口があるとすれば、きっとそこだ。

でも攻略法がわからない。

こんなことなら前世で心理学を専攻しておくんだっ。どっちに

しようか迷ったんだよな。俺はいつも選択を間違えてばかりだ。
だがリトレイユ公の亡霊なんかに負けてたまるか。俺は死神と呼ばれた男だぞ。

俺は覚悟を決めて、大佐に思いっきり近づく。上司と部下の距離ではなく、家族や友人の距離だ。俺の鈍い嗅覚でも大佐のいい匂いがする。ちよつとドキドキしてきた。
いやいや、今は大佐の心のケアだ。

俺は物憂げな大佐に顔を近づけ、なるべく優しい声で心理的な揺さぶりをかける。

「閣下がお望みなら、今ここで御命を刈り取ってもいいんですよ」
「ふぁ……」

おっ、反応があつたぞ！　ここが突破口か！

大佐が俺を見上げて硬直しているので、俺はすかさず二の矢を放つ。

「閣下の心をリトレイユ公に奪われるぐらいなら、いつそこで殺めて閣下を永遠に俺のものにしてしまった方がいいかもしれませぬ」

死に魅入られているなどと言っても、人間の生存本能は強い。死を目の前に意識すれば、ほとんどの人は生存のための行動を取る。
尊敬する上司を脅かすのは俺としても不本意だが、荒療治で目を覚ましてもらおう。

……と思つてただけど、なんか大佐の反応がおかしいぞ。
冷たい風で白くなつていた大佐の頬が、みるみるうちに紅潮して
くる。大佐の目にも力が感じられる。
もしかして怒らせちゃったか？ まずいぞ、上官への脅迫は重罪
だ。

大佐はぶるぶる震えていたが、やがて震える唇からかすれた声が
漏れ出す。

「ず……ずるいだろう……そ、そういうのは……」
この言葉、どう解釈したらいいんだろう。わからん。
もしかしたら、いろいろやっちゃまったかもしれない。

もう仕方ないので肚をくくって微笑んでいると、アルツァー大佐
は「ぷはぁ」と大きな溜息をついた。クソデカ溜息だ。怖い。
そして大佐は俺をキツと睨むと、凄みのある表情で迫ってくる。

「お前、そこまで言ったのなら責任は取れよ!？」
何の責任を？ たぶん二択なんだろうけど、正解がわからない。
どっちだ、どっちの責任なんだ。

わからないけど、撤退可能なタイミングはもはや過ぎた。交戦中
に敵に背を向ければ死ぬように、この状況で大佐に背を向けること
はできない。

だから答えはひとつだ。

「もちろんです。俺は閣下の参謀ですから」
参謀たる者、自分の発言には最後まで責任を持たなくてはいけない。そうでなければ多くの将兵を無駄死にさせることになる。当然のことだ。

当然の発言をしたただけなのだが、アルツァー大佐は急にそつぽを向いてしまった。

「そ、そうか……。ならばよし」
どうやら虎口を脱したようだ。虎の口よりヤバいものに頭から突っ込んだ気がしなくもないが、たぶん気のせいだろう。

その証拠に、アルツァー大佐からは『死神の大鎌』がもたらす死の気配が完全に消えている。俺はリトレイユ公の亡霊に打ち勝ったらしい。ひとまずのところは、だが。
少しホツとしつつも、用心深い俺は大佐に念を押しておくことにする。

「死んだ彼女より、生きている俺の方を見てくださいね」
「……………ああ」
大佐は俺にそつぽを向いたまま、ぼつりと答えた。
心配だ。俺は大佐を救えるだろうか……………。

* * *

【死神の掌で】

私は執務室に戻る途中、隣を歩く長身の参謀を見上げる。落ち着き払った彼の横顔を見るだけで頬が熱くなる。

あれは……あんなのは反則だろ!?

今でもミンシアナを自害させたことに負い目は感じている。この負い目はたぶん一生消えないだろう。

彼女を自害させることは皇帝からの勅命だったが、誰の命令だろうが関係ない。これは私が墓場まで背負っていく罪だ。

こんな重荷、できればさっさと私ごと墓穴に投げ込んでしまいたい。そう思っていたのだが、我が参謀には全て見抜かれていた。さすがだ。

そしてあの口説き文句。あんな良い声と言葉でドキドキさせられたら、死ぬことなんかどうでも良くなってきた。

「どうされましたか?」

しらじらしく尋ねてくるユイナ。実に心地良い声だ。おまけに顔がいいんだよ、貴官は。どうせ自覚していないのだろう。この無自覚な大悪党め。

私は五王家のひとつ、メディレン家の先々代当主の実子だ。だが現当主の年下の叔母でもある。宗家嫡流にとってあまり好ましくない存在だ。お家騒動の火種だからな。

当然、私に言い寄る命知らずもいなかった。

だがユイナーは五王家の威光など全く恐れない。こいつは異世界からの転生者だからな。

あれから少し話を聞いたが、ユイナーの国には貴族はおらず、平民の代表が要職に就いているらしい。だから彼は他の者と違い、貴族への恐怖心が薄いのだ。

そんなユイナーだからこそ、私にも大胆に接してくる。

そして私は恋愛経験こそないが、書物や演劇で様々な恋物語を見てきた。ロマンスへの憧れも人並みにはある。

さっきのユイナーの態度は、まさに……まさにだ！ まさにそれだった。

恋物語の中にしかないと思っていた、殿方からの甘い誘惑。しかも「ちよつといいな」と思っていた、ユイナー・クロムベルツ参謀大尉からの誘惑だ。

あれはまさに、優しい死神。

中世シュワイデル文学の『ウルカの亡霊騎士』の主人公・復讐の騎士ディベルハウトや、『魔弓の狩人』のライバル・黒弓卿イースティンみたいだった。

さっきのやり取りを思い出すだけでクラクラしてくる。

「閣下、まだお加減が良くないようですが」

「いや、むしろ絶好調だ」

私は貴官を一生推挙するぞ。推せる。

だがユイナーは私を案ずるような表情で、妙に優しく言う。

「無理はなさらないでください。閣下は大切な御方です」

「あ、ああ」

無自覚イケメンが殺人的な優しさを無償提供してくれる。ここが安息の地か。だったらわざわざ死ぬまでもないな。

私は大事な参謀を心配させないよう、少し無理をして笑ってみせた。

「私はリトレイユ公の死を抱えて生きていくが、その死に押し潰されたりはしない。心配するな」

「閣下……」

ユイナーが心打たれたような顔をしている。この男は本当に表情豊かだ。

地獄の業火に焦がれるミンシアナには悪いが、私はまだまだそこへは行かないつもりだ。

ここには私に優しくしてくれる、素敵な参謀がいる。

第72話「あなたの友として」

【第72話】

* * *

アルツァー大佐の落ち込みぶりとは、その後の妙な機嫌の良さに不安を感じた俺だったが、その不安はどうやら的中したようだった。

「ユイナー。私を母と呼んでみないか？」

「……閣下？」

執務室の机から穏やかに微笑んでいるアルツァー大佐を見て、俺はハンナを呼ぼうか迷う。彼女なら大佐を穏便に拘束できるだろう。この世界にはまだ精神医学はないが、心のケアの専門家はいるはずだ。今から探した方がいいな。

「待てユイナー。私をそういう目で見るのはよせ。これは真面目な話で、少々込み入った事情がある」

「本当でしょうか？」

「直属上官をもう少し信用しろ。貴官の昇進の話だ。……ちよつと驚かせてみたかったのは謝る」

大佐は頬を赤らめてからコホンと咳払いし、仕事の表情に戻った。「リトレイユ公の謀反を防いだ功績から、帝室は貴官を少佐に昇進させたいと考えている。ジヒトベルグ家、ミルドール家からも推薦

状が来ている。もちろんメディレン家からも送った」
「光荣です」

「なんだかポンポン昇進させてくれるな。」

「だが平民出身の俺はそのままでは佐官にはなれない。明文化されてはいないが、そういう暗黙の内部規定がある。どいう形でもいから貴族の仲間入りをしないとダメだ。」

「しかし閣下、俺は平民ですよ」

「わかっている。そこで貴官に貴族の仲間入りをしてもらおうと思っただけだ。」

「ああ、それで俺を閣下の養子に……」
「全然込み入ってなかった。単純明快な話だ。」

「平民出身でも貴族と縁組すれば貴族待遇を受けられる。一番多いのは貴族との結婚だが、養子になるルートもある。あるにはあるのだが。」

「閣下は独身でしたよね？」

「そうだ。お家騒動の火種を作らぬよう、これからも独身を貫くつもりでいる。だが養子ぐらいは別に構わないだろう。養子になったところで家督の継承権は得られないからな。我が国では信頼できる家臣を養子にすることもある。遺産の管理人としてな」

「そいうものか。貴族社会はよくわからんな。」

アルツァー大佐はクスクス笑いながら、悪戯っ子のような目で俺を見る。

「どうだ？ 私に甘えてもいいんだぞ？ 母上と呼んでみる」

「閣下。俺は転生者ですから、前世分も含めると閣下よりだいぶん上ですよ」

前世のプライベートな記憶がだいぶん曖昧になっているが、通勤電車に乗っていたことは覚えている。

あれは何色だったかな……確か第六特務旅団の制服と同じ色だから、マルーンの通勤電車だったはずだ。もう覚えていないが。

「閣下は母というよりは娘ですね」

「私の見た目で言ってるだろう、それは」

「いえ決してそんなことは」

大佐の見た目は確かに中学生ぐらいだもんな。初対面の人はみんな不安そうな顔をする。

大佐はふくれっ面をしながら、自分の胸や腰をぺたぺた触っている。

「ミドナもローゼルも『お年頃になれば大丈夫ですよ』と言っていたのに騙された。考えてみれば母上だって、未だに子供と間違われ……」

「その話長くなりますか？」

遮って悪いけど、今は仕事の話者优先してほしい。

大佐もそれに気づいたのか、渋い顔をしながら腕組みする。

「で、どうなんだ？ 私の養子になって少佐に昇進するか？」
「やめておきましょう。別に階級は欲しくありませんし」

大佐は珍獣を見るような目をした。

「本気で佐官を蹴るつもりか？」

「大佐の参謀でいられるのなら、階級章の柄なんか何でも構いませんよ」

「無欲にも程がある」

深々と溜息をついた後、アルツァー大佐は俺を真面目な顔で見つめた。

「悪いがそもいかなのだ。さつきも言ったように、五王家の各家から推薦状が出ている。れっきとした公文書だ。これを蹴られると各家の立場がない」

「俺の昇進なのに俺の自由にならないんですか」

苦笑してみせたが、帝国軍がそういう組織なのはわかっている。昇進すればするほど政治的な意味合いを帯びてくることも承知だ。

「仕方ありません。昇進は呑みましょう」

「相変わらず話が早くて助かるな」

「ですが気になる点がひとつあります」

「なんだ？」

身を乗り出した大佐に、俺は顔を近づける。

「閣下の養子になった後、閣下と結婚できますかね？」

「んなっ!？」

ぴゅっと小さく飛び上がった大佐が、みるみるうちに真っ赤になっ
た。

少々卑怯だが、養子になるのは遠慮させてもらうぞ。こんなちっ
ちやいママなんて……ちよっと面白いけど、俺と大佐の関係性を誰
かに変えられるのはお断りだ。俺たちの関係性は俺たちが決めれば
いい。

大佐はというと、難しい顔をして小声でつぶやいている。

「さすがに無理だろうな、養子を夫に迎えるのは……。しかし養子
になってしまえば一緒に暮らせて同じ墓に入れる訳で、これはもう
事実上の婚姻状態なのでは……。いや待て倫理的にダメだろう、それ
は……」

しばらく放っておいても面白そうだったが、大佐をからかうのは
本意ではない。代案があるのだ。

「閣下、あの……閣下？」

「なんだ、メディレン家の法務官たちに問い合わせるからちよっと
待て」

「そうではなくてですね」

俺は深呼吸をして、あの恥ずかしい単語を口にする。

「俺を閣下のシルダンユーにして頂ければ、問題は解決しませんか
？」

きょとんとした後、大佐の顔がみるみるうちに明るくなる。

「ああ、シルダンユーか！ すっかり忘れていた！ いいな、シルダンユーは！」

会心の笑みで何度もうなづく大佐。やめて、そんな言葉を口にしないで。

「お前はジヒトベルグ公のシルダンユーだし、私のシルダンユーにもすれば格として十分に足りる。ひとつなら大した価値はないが、『五指』の複数からシルダンユーを許された者といえば、当代一流の才人ばかりだからな。よし、お前は今日から私のシルダンユーだからやめて。」

俺の表情を敏感に察したのか、大佐が首を傾げる。

「どうした、名参謀？」

「ええと……」

「もしかして、何かまだ問題があるのか？」

大佐が心配そうな顔を始めたので、誤解を招かないよう正直に打ち明けておくことにする。

「実はですね、『シルダンユー』というのが、前世の言葉では別の意味を持っています……」

「どんな意味だ？」

「知りたいですか？」

「とてもな」

もう仕方ないので、なるべく婉曲的な表現で手短かに説明をした。

「説明は以上です」

「そ……そのような職分が存在するのか……異世界は凄いな……」
顔を真つ赤にした大佐がうつむいてしまったので、俺は犯罪者になった気分で見線をそらす。どうすりゃいいんだよ、こんなの。

「ええと、あれだ。お前、そういうシルダンユーにも興味があるのか？」

「それを聞いてどうしようというんですか」
もうやだ。せめて発音が「シュルダンユエ」とか「シルドウンユフ」とかだったら良かったのに。

ともあれ、俺はこうしてアルツァー大佐の「裏口の友人」となり、ジヒトベルグ家とメディレン家から客分としての地位を得た。

これは両家の外交的なパイプになったことを意味する。もはや「ただの平民」ではない。

愛人にも認められるなど乱発気味の客分待遇だが、五王家の複数の宗家筋から認められたとなれば単なる偶然ではない。

これならさすがに陸軍上層部も昇進を認めるだろう。認めなければ第二師団や第四師団から「うちのボスが認めた人材を認めないつもりか？」と苦情が来る。

どうにも生臭い話だが、栄光あるシュワイデル帝国軍は生臭い組織だから仕方がない。帝国軍に限らず、大きな組織というのはだい

たいそうだ。

数日後、帝都から少佐の階級章が送られてきた。これで俺も少佐だ。

同時にアルツァー大佐も昇進した。見慣れない階級章をつけた大佐が苦笑している。

「新しく創設された『准将』という階級だそうだ」

「将官と佐官の間の階級ですか」

「各師団の將軍連中が『孫や娘ぐらいの小娘が將軍になるのは我慢ならん』とゴネたそうだな。將軍に準ずる階級として准将が作られた。私が第一号だ」

帝國軍には大将や中将といった階級がなく、将官は全員「將軍」だ。

この階級は貴族にとっても容易なものではなく、たゆまぬ努力と長年の精勤、そして派閥闘争の末に勝ち取ることができる。

出世欲と権力欲が強いタイプにとって將軍の地位は聖域も同然だから、下手にいじると冗談抜きで反乱を起こしかねない。

俺は溜息混じりに苦笑してみせる。

「呆れた話です。他人の階級などどうでも良いでしょうに」

「そんなことを言うのはお前だけだ、我が転生者よ」

所有格ついてるのが気になるけどまあいいや。

「ともあれ閣下、これでようやく准将閣下とお呼びできますね」「前世の日本でもそうだったが、帝国でも「大佐閣下」とは呼ばない。大佐は旅団長でもあるので「旅団長閣下」とは呼べる。」

だが准将になったことで、今後は役職を離れても閣下と呼べる訳だ。尊敬する上司の出世は純粋に嬉しい。

アルツァー大佐……いや准将は呆れた顔をしている。

「お前、自分の昇進には無頓着なくせに、私の昇進は嬉しいのか？」
「当然です」

「今さっき、他人の階級などどうでも良いと言ったのは誰だ？」
「誰ですかそれは」
「いいから早く准将の階級章を見せてくれよ。」

大佐じゃなくて准将は深々と溜息をつき、それから立ち上がった。「リトレイユ公ミンシアナの乱は鎮圧したが、国内外の政情はますます不安定になっている。私は准将として難しい判断を迫られることが多いなるだろう。そのとき、お前が私の傍らにいてくれれば心強い。これからも頼むぞ、ユイナー・クロムベルツ参謀少佐」

このまつすくな信頼が心地良い。異性としても魅力的なアルツァー准将だが、上司としても人間としても魅力がある。
俺は直立不動の姿勢でビシッと敬礼した。

「お任せください、准将閣下。全身全霊をもってお仕えいたします」
「ありがとうございます」

ちっこい准将閣下はニコツと笑い、俺もつられて笑い返した。

これから帝国はどんどん落ちぶれていくだろうが、俺と准将がいれば第六特務旅団ぐらいは何とか守り抜けるだろう。
だが事態は俺の想像を超えて、急速に悪化していた。

数日後、「ミルドール家残留派とジヒトベルグ家がブルージュ公国に寝返り、新たな国境地帯に所属不明の軍勢が集結しつつある」という通達が帝都から届く。

帝国の崩壊が決定的になった瞬間だった。

第73話「未来への脱出」(地図あり)

【第73話】

シュワイデル帝国を支える五王家のうち、序列第二位のジヒトベルグ家と第三位のミルドル家が隣国ブルージュ公国に寝返った。もちろん領地ごと。

そして両家の境界線上に間借りするような形で駐屯していた第六特務旅団は、敵中に孤立した形になってしまった。

この旅団はメディレン家ゆかりの部隊なので、第二師団や第三師団と一緒に投降してしまう訳にはいかない。そんなことをすればアルツァー准将の実家に迷惑がかかる。

「閣下、まずいことになりましたね」

全員に撤収命令を出しつつ、俺とアルツァー准将は執務室で会話を交わす。暖炉で機密文書を燃やしながらだ。

准将は険しい表情だ。

「ミルドル家が丸ごと寝返る可能性は想定していたが、そのときは貴官の提案通りにジヒトベルグ領を経由して脱出するつもりだった。まさかジヒトベルグ家まで寝返るとはな」

面目ない。さすがにこれは読みきれなかった。

「今思い返せば兆候はありました。ジヒトベルグ家は勅命でキオニス遠征を行い、先代当主が戦死しています。麾下の第二師団も壊滅し、おまけにリトレイユ公の讒言で皇帝からは悪者扱いです。帝室に忠誠を誓う理由なんかありませんよ」

あのときもジヒトベルグ公は冷静に対処していたが、腸が煮えくりかえるような思いだったに違いない。そうでなければ、ちよつと口を挟んだ程度の俺をシル……いや客分待遇になどしなかつたはずだ。

リトレイユ公は死んだが、彼女の負の功績は燦然と光り輝いていた。俺たちが知っているシュワイデル帝国は分断され、既に崩壊している。

こういうときに未練や楽観は命取りだ。損切りは素早く。逃げ足は速く。

そうしないと、前世の俺みたいにクソ案件の始末をさせられた上に社内外で孤立する。俺以外のヤツが逃げるからだ。

だから俺は一瞬の躊躇もなく撤収を進言したし、その場で准将に承認された。そして今こうしているという訳だ。

「幸い、ブルージュ公国側からは宣戦布告などの敵対的な反応はありません。もちろんこのまま居座れば退去を命じられるでしょうし、場合によっては攻撃を受けるでしょうが」

「情勢が一気に悪くなると彼らも困るから、態度を曖昧にしているのだらう」

アルツァー准将はうなずき、ふと苦笑してみせる。

「ここは私や貴官にとって重要な場所ではない。兵たちもほとんどがメデイレン領出身だ。貴官の言う通り、さっさと逃げるのが正解だな」

「撤回命令が出ていませんので、厳密には持ち場を放棄したことになりますが……」

よくこんな提案をしたなと自分でも思う。軍法会議ものだ。だが准将は気楽な表情をしている。

「なに、気にする必要はない。我が帝国の五指は『人差し指』と『中指』が離反し、『小指』もガタガタだ。この状態で『薬指』をへし折るような真似はできまい」

「閣下も悪党ですな」

「貴官から言われるのは褒め言葉だな」

そんな会話をしているうちに、どうにかこうにか機密文書を全部焼却できた。灰の塊を火かき棒で潰し、解読できないように完全に破碎する。

そこにロズ中尉がやってくる。

「閣下、物資の梱包が完了しました。兵たちは下士官たちが各小隊を統率しています」

「よろしい。大砲はどうする？」

准将の問いにロズは軽く答える。

「軽便なので運べるところまでは運びましょう。撤退戦で使うかもしれませんが、邪魔になれば置いていけばいいだけの話ですから」「確かに。ところで貴官の妻子はどうした？」

するとロズは頭を掻く。

「それなんです、馬車に便乗させてもらえませんか。妻はともかく、娘はまだ三歳なので危なっかしくて」「もちろん。貴官の分も座席を手配しているぞ」

「いやあ、小官は歩きますよ」

「無理をするな、貴官は脚に後遺症を抱えている。家族の側にいてやれ」

アルツァー准将はそう言って明るく笑う。俺の上司は相変わらずの男前だな。惚れる。

准将は俺に向き直ると、机上の地図を示した。

「最後の確認だ。撤退の目的地はメディレン領西端の城塞都市、パツジェ。想定ルートは全部で三つ。そうだな？」

「はい、閣下。北の街道沿いにミルドール領を通って帝都に至る帝都ルート、南の街道沿いにジヒトベルグ領を通る迂回ルート、そして」

俺は何もない場所をトントンと叩く。

「迂回ルートからさらに分岐し、エオベニアとの国境近くを踏破する山岳ルートです」

「できれば山岳ルートは避けたいな。大砲や馬車が通れないし、帝国南部とはいえ山岳部には積雪があるはずだ。それに同行する軍属たちは山岳訓練をしていない」

「とはいえ、街道を通行できるかどうか甚だ怪しい情勢です。街道が通っている土地はもう、ブルージュ公国の領土になっていますから」

俺は渋い顔の准将に告げる。

「今は騎兵斥候を出して偵察に行かせているところですが、おそらく良くない報告を持って帰るでしょう」

やがて騎兵隊の斥候から、南北の街道沿いの砦にブルージュの軍旗が確認されたという報告が入る。それほど大規模な軍勢ではなかったようだが、攻撃を受ける可能性があるため近づけなかったという。

予想通りだ。俺が敵の司令官なら帝国の准将、しかもメディレン公の叔母を逃がすつもりはない。身柄を確保できれば交渉材料にできる。

准将が渋い顔をしている。

「彼らも狡猾だな。旅団司令部を包囲すれば敵対的な軍事行動にな

つてしまつが、街道に兵を配備するのは通常の対応だ。そして我々は敵地に閉じ込められた」

「まあそうですね」

「この城は砲撃に脆い上、籠城したところで援軍は来ない。いつそ投降するか？」

俺は首を横に振る。

「いえ、ジヒトベルグ公やミルドール公がまともな人物で助かりました。穏当な方法で退路を断ってくれたおかげで、こちらも穏当に退却できます」

「できるか？」

「どうか……。あんまり自信はないので正直に言つ。」

「率直に言つてかなり厳しいですが、まだ山岳ルートがあります。」

これで無理ならそのときに投降しましょう」

「それもそうだな。となると大砲と馬車はここに置いていくしかないか……」

「いえ、それはそれで使い道がありますので」

俺は頭の中で素早くプランを更新する。

計画がうまくいかないときにどうするべきかは、士官学校の演習でさんざんやった。あと前世でもさんざん経験した。

俺には二回分の人生経験がある。

「ところで俺、この世界ではまだ海を見たことがないですよ。新鮮な海の幸が楽しみです」

「この状況でも逃げ切る気まんまんだな……いいぞ、好きなだけ食わせてやる。貝のオイル煮でも焼き海老でも馳走してやるぞ」
「勤労意欲が湧いてきました」

よし、海でも見に行くか。

俺たちが司令部前の演習場に出ると、大荷物を担いだ兵士たちが緊張した面持ちで整列していた。

後方には食堂や工房のおばちゃんたちもちらほらいる。近隣の村落に避難するか我々に同行するかの二択で、後者を選択した人々だ。アルツァー准将が号令を下す。

「これより第六特務旅団は旅団司令部を放棄し、敵勢力を迂回しつつメディレン領パツジエへと向かう！」

言うほど簡単ではないことは全員がわかっている。
だからこそ、司令官である准将は明るく言い放つ。

「諸君たちの多くにとってメディレン領に良い思い出はないだろうが、諸君はリトレイユ公の反乱を阻止した救国の英雄だ！ 胸を張って堂々と凱旋するぞ！」

准将の人心掌握術は頼りになる。苦難のときに心を支えるのはプライドだ。

そして准将はニコツと笑った。

「まあ心配するな。うちの参謀がいろいろ考えてくれている」
俺は提案するだけだよ？

何か言い返したかったが、みんなの目に力が戻ってきているのを見ると黙るしかなかった。兵を統率するのは俺の職務ではない。准将は慣れた動作で軍馬に乗ると、高らかに叫ぶ。

「帰郷したら諸君に新鮮な海の幸をたらふく食わせてやろう！ 出発だ！」

* * *

【過去から来た男】

「連中は本当にこちら側に来るのか？」

ブルージュ軍大尉の階級章を付けた男は、やや不安そうに背後を振り返る。

「師団長命令だから私の部隊は貸してやるが、シュワイデル人どもが逃げるなら国境方面だろう。方向が真逆だぞ？」

< i 6 2 1 4 6 4 — 3 5 6 7 8 >

すると軍服姿の老人が薄く笑う。ブルージュ軍の青い軍服と異なり、彼の軍服は灰色だ。近隣で灰色の軍服を採用している国はない。「心配性だな。あんたは兵を貸してくれればいい。そこから先は俺の職分だ。それよりも」

老人は真顔で質問を投げかける。

「第六特務旅団の参謀の名前はユイナー・クロムベルツで間違いない？」

「ああ、そうだ。『死神クロムベルツ』だよ。リトレイユ家の反乱を阻止した本物の死神さ。ゼツフェル砦の防衛もヤツの仕業だと聞

いている」

ブルージュ軍の大尉はそう答え、だいぶ薄くなっている頭を掻く。「その死神参謀とメディレン家の女将軍が帝国領に脱出するのを阻止しろと、ブルージュ公が仰せだ。だがジヒトベルグ公もミルドール公も知らん顔をしている。やりづらいたらありやせんよ」

灰色の軍服の老人は答える。

「同情するよ。誰しも立場と事情があるからな」

「貴様に同情されてもな……。くどいようだが、本当にこちら側に展開させていいんだな？」

「無論だ。この状況で国境にノコノコ向かうようなバカどもなら、とつくにキオニス戦役でくたばっているさ」

「ふむ。確かに帝国との国境地帯はブルージュ軍が埋め尽くしているからな。しっかり偵察しているのなら選択肢から外すだろう。だが、こちら側に来るとも限るまい？ 普通なら籠城するのでは？」

しかし灰色の軍服を着た男は静かに笑う。

「いいや。ヤツは必ず来る。あの坊やは生きるか死ぬかの分かれ道をよく心得ているのさ」

そのとき、野戦司令部のテントに伝令が駆け込んでくる。

「街道の北側からシユワイデル軍の軍旗を掲げた部隊が接近中です

！ 軍旗は第六特務旅団！」

「まさか!？」

大尉が腰を浮かせて驚くが、灰色の軍服を着た男は薄く笑う。

「な、言っただろ？」

「貴様……… いったい何者なんだ？ ただの傭兵ではあるまい」

大尉の問いには答えず、灰色の老傭兵はゆっくり立ち上がる。

「さて、契約履行の時間だ。あんたらはここを封鎖してくれ。エ
オベニア方面に抜けられると厄介だ」

* * *

第74話「消えた旅団」

【第74話】

俺は山間部の集落で旅団のみんなを休憩させつつ、折りたたんだ地図を広げていた。

「エオベニアとの国境地帯にもブルージュ軍が展開していたのは、少々予想外だったな」

「お前にも予想外ということがあるのだな」

白い息を吐きながらアルツアー准将が微笑んでいるので、俺は黒パンを頬張りながらうなずいておく。

「当然です。予想が当たったことの方が少ないぐらいですよ。ただし」

「ただし？」

俺は黒パンを水で流し込むとニヤリと笑ってみせた。

「予想が外れても問題ないようにしておくのが参謀ですので」

「頼もしいな。では今回も安泰か」

「安泰からは程遠い状況ですが、まあ何とかしましょう」

俺は地図を指でなぞる。

「どのみち街道を南下し続ける予定はありませんでした。街道を通ってエオベニア側に出してしまうと、一瞬でエオベニア軍に捕捉されます」

「エオベニアは帝国と同じフィルニア教安息派の国だが、逆に言えばそれだけの関係でしかないからな。同盟国ではない」

「ええ。事前に話を通す余裕がありませんでしたから、エオベニア軍に見つかる少し面倒です。そこで山岳地帯を踏破する訳ですが……まあ見つかるに面倒なのはこれも同じですね」

この時代の領土は、都市という「点」と、それを結ぶ航路や街道といった「線」で構成されている。

城壁に囲まれた都市の周辺には農村が散在しており、農村から先には君主や軍の力は及ばない。人が住んでいないからだ。

もちろん山岳地帯にも炭焼き職人や木こり、猟師などがいる。あと修行者や山賊もいる。ただいづれも世間から距離を置いて暮らしているので、領主に通報したりはしないだろう。たぶん。

打ち合わせ中の俺たちの周囲では、第六特務旅団の子たちが同じように黒パンを食べていた。出発前にありったけ焼いておいた貴重な黒パンだ。

酸っぱくてボソボソしてて未だに食べづらい主食だが、雑穀入りで栄養だけはある。しばらくこれで食いつなぐことになるだろう。

俺は昼飯を済ませると、軍服についた雪を払って立ち上がる。幸い、積雪は大したことない。

「さて、敵もこちらの動きを捕捉した頃合いでしょう。中隊規模の

歩兵と砲兵では包囲されたら終わりですので、そろそろ雲隠れといきましょつか」

タイミング悪く、うちの上官は黒パンを口に放り込んだ瞬間だった。目を白黒させて咀嚼し、苦勞して飲み込む。

「あ、すみません閣下」

「いや大丈夫だ。水をくれ」

素朴な木のマグカップで冷たい水を飲み干した准将は、口元を拭いながら俺に問う。

「雲隠れはいいが、この山を登るのか？」

「軍人や農民にはわかりませんが、ここはエオベニア方面に抜ける登山ルートの入り口だそうです。ラーニヤ下士補が言っていました。あまり雪が積もらないので冬でも歩きやすく、山賊や獣の危険も少ないそうです」

准将は納得したようにうなづく。

「旅楽士だった彼女は、関所を迂回する秘密の抜け道にも詳しいだろう。メディレン領でも通行税を払わない連中が多くてな」

「ははは」

帝国貴族の力は強大で、あらゆるインフラを掌握している。そして通行税を課し、さらに力を蓄える。

だが平民は平民で遅しい。あらゆる方法で税を回避し、わずかな力を温存する。

この国は……いや、支配者と民衆はどこでもそういうものだ。

「ジヒトベルグ公はこの抜け道を知っているのか？」
「知らないか、知っていて黙認しているかのどちらかでしょうね。
ちなみにこの領主は知った上で黙認しています」

これは説明するまでもないだろう。准将はすぐに言葉の意味を理解した。

「エオベニアからの旅人がここを通れば、街道から外れた何も無い村に金が落ちる。人員を割いて取り締まるぐらいなら、黙認する代わりに村の顔役連中から上納金でもせしめた方が得だ」
「御慧眼です」

うちの上司は話が早くて助かる。

「そのせいか、この村にはなぜか立派な雑貨屋と酒場があります。
いずれも経営者は領主の元使用人です」

「ははは、それなら安心だな。領主も荒事は望むまい」

准将はそう笑った後、不意に表情を引き締めた。

「だがそうになると、このルートへの存在は『公然の秘密』ということになる。長居は無用だ」

「同感です」

俺はうなずき、准将に報告する。

「この登山道は馬は通れますが馬車はさすがに無理です。雑貨屋で事情を話して格安で売り払いました。馬車馬の一部は売らずに残し

ています」

「荷駄は必要だからな。ところで野戦砲はどうするつもりだ？」

「あれは軽いので馬車馬に直接牽引させてはどうでしょうか。敵に渡す訳にはいきませんので、運ばなくなったら破壊して雪か藪に隠しましょう。あくまでも人員の生存が第一です」

「わかった、それでいいだろう」

兵士は戦闘に必要な装備を持ち歩くため、そこらの登山者よりも生存力が低い。重い銃は杖としては使いづらいし、ポーチに詰めた弾薬は食べられない。

だから無理はさせられない。

「地元民の話では、当面の天候は穏やかで遭難の危険はないそうです。とはいええ山の天候は急変しますので、備えは十分にしておきました」

前世はインドア派だったんだけど、今世はインドアどころか住む家にすら困っていたので、アウトドア経験は豊富に積んでいる。貴族の山林に不法侵入して密猟もしていたので、軍隊に入る前から野営にも慣れていた。

本当は前世の知識で楽をしたかったんだけど、人生ってなかなかうまくいかない。

俺は周囲をざっと見回し、みんなの食事があらかた済んでいるのを確認する。

「さて、行きますか」

「そうだな。早く野営地に着いて寝よう」
アルツァー准将は立ち上がると、皆に命令した。

「さあ出発だ！ 諸君の演習の成果を見せてくれ！」

* * *

【ジヒトベルグ公の苦笑】

「アルツァー准将がいらない？ しかも第六特務旅団ごと行方不明なのか？」

ジヒトベルグ公は居城の一室で報告を受け、振り返って苦笑いを浮かべる。

「やられました。まさか降伏勧告の使者が着くよりも早く撤収していたとは」

「さすがと言つべきですな」

視線の先では、ミルドール公弟が柔和な笑みを浮かべていた。

彼は兄の元に帰参した後、与力としてジヒトベルグ公と行動を共にしている。ジヒトベルグ公は先代当主の父を喪っており、経験豊富なアドバイザーがいなかったからだ。

ジヒトベルグ公は軽く溜息をついて前髪を掻き上げる。

「退去の安全と引き換えに少しばかり恩を売るつもりでしたが、こつも鮮やかに撤退されるとは思いませんでした。やはり本職の軍人は動きが違います」

「おおかた例の参謀でしょう。ユイナー・クロムベルツ少佐」
「まず間違いありません。配下の者たちに搜索させているのですが、行方がつかめないのです。エオベニア方面に向かったことはほぼ間違いないのですが……」

ジヒトベルグ公はそう言い、執務用のイスに腰掛ける。

「ブルージュ公の配下が一個大隊ほどエオベニア方面に展開しているらしいので、いずれブルージュ軍が捕捉するでしょう。少数ですが手練れの傭兵団も雇っているようです」

ブルージュ公はフィルニア教安息派のミルドール公やジヒトベルグ公を信用しておらず、連合国家となった今でも情報の共有は不完全だ。

もちろんジヒトベルグ公もブルージュ公には余計なことは教えていない。お互い様だった。

ミルドール公弟は思案の表情を見せた。

「ここでアルツァー准将やクロムベルツ少佐がブルージュ軍の捕虜になっては、我々の描く外交戦略が頓挫しかねませんな。ミルドール家の力で少しばかり攪乱しましょうか？」

「いえ、ブルージュ公は我々を信用していません。何かあれば我々の策謀だとすぐに気づくでしょう。公国の主導権を握るまでは雌伏せねばなりませんまい」

「それがよろしいでしょうな。危険を冒すのはもう少し先です」

権謀術数を指南するようにミルドール公弟はうなずく。事実上、彼はジヒトベルグ公の顧問だった。

「ではどうなさいますかな？ このままでは中隊規模の戦力しかないアルツァー准将たちが、ブルーージュ軍の一個大隊と遭遇してしましますが」

するとジヒトベルグ公はフツと笑った。

「キオニス騎兵の大軍と渡り合ってほぼ無傷で生還した男が、ブルーージュ軍の一個大隊ごときに捕まるはずがありません。けろりとした顔で帝国領に帰るでしょう」

「はっはっは。男の中の男のような貴公が、クロムベルツ少佐の話になるとまるで騎士に恋い焦がれる姫君のようすな」

ミルドール公弟の微笑みにジヒトベルグ公は苦笑する。

「あの男は紛れもなく英雄ですよ。智仁勇全てを備えています。私の將軍にしたかった」

「それは私も同感です。彼が第三師団の参謀本部にいれば、ブルーージュの侵攻をはねのけていたかもしれませぬ。もしそうなら帝国の分断も起きなかつたでしょう」

ミルドール公弟は溜息をつき、白髪を撫でつけた。

「思えばシュワイデル帝国は、有能な人材を適所に就けられなくなっていたのですな。そのような国が滅ぶのは神の御意志でしょう」

「神の意志、ですか。便利な言葉だ」

ジヒトベルグ公は考え込みつつ、その眼差しを帝国の地図に向ける。

「では神の御意志に従い、敬愛する帝室を滅ぼすしかありません。流血海に流れる道は遮断されれば、我らに未来はありません」

「となりますと、やはり近衛師団は無傷で手に入れたいですな。ブルージュ公とはいずれ一戦交えることになりましようから」

「はは、恐ろしい御方だ。仇敵と手を組んだかと思えば、その手を切り落とすことを考えておられる」

ジヒトベルグ公は笑うと、不意に真面目な表情をした。

「帝室直轄領を手中に収めたところで、我ら両家だけでは周辺勢力と対抗できません。やはりメディレン家とリトレイユ家を味方につける策謀が必要ですね」

「ええ、そうなります。リトレイユ家はアガン王国の南下に怯えているでしょうから、懐柔は可能でしょう。後はメディレン家ですが、あそこは遣り手揃いで交渉材料に乏しい。『五指』がこれだけ傷ついても『薬指』だけは無傷です」

ミルドル公弟がそう言い、ジヒトベルグ公が後を継ぐ。

「円滑な交渉のためにも、アルツァー准将とクロムベルツ少佐には無事にメディレン領に帰還してもらわねば困る。そうですね？」

「そういうことです。とはいえ今は表立って動けません。彼らの力

を信じましょう」

ミルドル公弟は微笑みつつ、イスからゆっくり立ち上がる。

「彼らが動きやすくなるように、私が少しばかりブルージユ公の御機嫌を伺ってきます。何か良い手土産はありませんか？」

「でしたらブルージユ公への親愛の証として、我が領地の適当な鉱山をひとつ差し上げましょう。探掘技師団ごとどうぞ」

「おや、これはまた随分と奮発されますな。よろしいので？」
するとジヒトベルグ公はニヤリと笑う。

「いずれ一戦交えるのでしょうか？ そのときに取り返せば済む話です。宝石や美術品を贈っても取り返せませんが、手の者を潜ませた自領の鉱山なら造作もありません」

「良いお考えです。頼もしくなりましたな」
ミルドル公弟はにっこり微笑んだ。

第75話「追いついた過去」

【第75話】

安全圏への脱出を目指す俺たちは馬車を捨て、エオベニア王国へと通じる登山ルートを移動していた。

登山道は歩兵二人が並んで歩ける程度の幅があり、隊列が延びることをある程度防いでくれている。馬や大砲が通行可能なものもありがたい。

こちらにはロズの家族や食堂や工房のおばちゃんたちなど、非戦闘員も少なからずいる。

「下見したときにも思ったが、やはり立派な道だな。ありがとう、ラーニヤ下士補」

遠いフィニス出身の鼓笛隊長に声をかけると、彼女は小さくうなずいた。

「お役に立てて光栄です、参謀殿」

まだリトレイユ公ミンシアナが存命の頃、俺はミルドル家が離反したときに備えてこの山岳ルートでの撤退計画を立てていた。途中までだが下見もしている。

もちろん他にもいっぱい撤退計画を考えていた。山ほど作戦計画を立てて、どれにするか司令官に決めてもらうのが参謀の仕事だ。地味だが俺の性に合っている。

それはさておき、今後のことを考えよう。

ここはもともと巡礼者や苦行者が通る険しい山道だったらしいが、やがて一部の交易商人が目をつけた。街道の関所を迂回できるからだ。関所の荷改めや通行税は彼らに何のメリットもない。

密輸も厭わない交易商人たちが少しずつ手を入れていった結果、馬車はさすがに無理なもの、馬が通れる程度の抜け道ができた。

もちろん付近の領主たちはすぐに気づいたが、彼らはそれを上に報告するよりも黙認して荒稼ぎすることを選んだ。

収入源の乏しい山奥の領地に、後ろ暗い積荷を抱えた連中がコソコソやってくるのだ。適度に便宜を図りつつ、金をふんだくるのが正しい領主というものだろう。

「さつきからすれ違う連中は巡礼か密輸商人のどちらかなんだろうな」

「ええまあ、そうでしょうね……」

結構多いぞ。半分が密輸商人だとしても結構な物資が越境していることになるな。

実態を把握していないと、戦争計画を立てるときに思わぬ誤算が生じる。おかげで戦争は誤算だらけだ。

それに彼らは俺たちを目撃しているから、ブルージュ軍が徹底的に聞き込みをすればすぐに捕捉されてしまうだろう。

「急いだ方が良さそうだ。ラーニヤ下士補、鼓笛隊のリズムをほんの少しだけ早めてくれ」

「はい、無理のない程度にしておきますね」

ブルージュ軍には精銳の山岳獵兵が多い。彼らはもともと獵師で、銃と野外行動のスペシャリストだ。

ゼツフェル砦の攻防では今ひとつパツとしなかつた連中だが、こは山の中。彼らにとつては最も戦いやすい場所だ。行軍中に襲われたらひとたまりもない。時間との戦いだ。

俺は溜息をついて考えるのをやめる。どのみち、もう引き返すことはできない。

「とにかく良い道だ。教えてくれてありがとう、ラーニヤ」「いえいえ」

我らが鼓笛隊長は少しはにかんだ表情で笑ってみせた。

この道は荷物を抱えた密輸商人たちが往来する山道なので、当然のように野営する場所もある。さすがにエオベニア側は未踏だが、帝国側の野営地は把握している。

「今夜はどの野営地を使うつもりだ？」

アルツァー准将が尋ねてきたので、俺は事前に作成しておいた地図を眺める。

「次の野営地だと早すぎる気がします、その次の野営地は遠い上に狭いですね。兵をしっかりと休ませるか、距離を稼ぐか、どちらを重視しますか？」

「悩ましいな。貴官はどう思う？」

俺は道中のみんなの様子を思い出しつつ、上官に具申する。

「拠点を放棄したことで、誰もが内心では動揺しています。過去の訓練でも初日は不眠や靴擦れなどのトラブルが頻発しましたので、あまり無理をさせない方が良いかと」

「そうだな、私もそう思う。強行軍で明日以降の行動に支障が出れば本末転倒だ。早めに野営し、明日の夜明けと同時に起床しよう」

「はい、閣下」

ということでもまだ明るいうちに野営地を確保し、さっさと天幕を張る。

まばらだが他の旅人たちもいるので彼らにも便宜を図ってやり、心証は良くしておいた。恨みを買つとブルージュ軍に通報されやすくなる。

「さてと」

またしても黒パンをもぐもぐ頬張った後、俺は貴重な白湯を飲む。煮炊きの煙は敵に見つかる恐れがあり、あまり多くの湯は沸かせない。

今回は体調の悪い者にパン粥を用意したので、残った湯でちよつとだけ贅沢させてもらった。しばらくはコーヒートもお別れだな。

次第に薄暗くなっていく山の風景を眺めつつ、明日の行軍計画について改めて考えていると、誰かがこちらに近づいてきた。男性のようだ。

見たところ旅人のようだが、何か変だな。何だろう。

こういつとときに感じた些細な違和感は大抵、後で大きな意味を持つ。

だから俺は違和感を無視せず、その男を警戒することにした。

「止まってくれ。それ以上近づくな」

その途端、男はぴたりと立ち止まる。動揺した様子もない。まるで……そう、まるで俺がそう言うのを知っていたかのようにだ。

次の瞬間、低い声でそいつは笑う。

「相変わらずだな、ユイナー」

「その声は……まさか、爺さんか!？」

嘘だろ、おい。

俺は十歳になるかならないかの頃、今世の父親の虐待に耐えかねて家を出た。厳密に言えば家を出たり戻ったりして半放浪状態だったんだが、その頃の相棒だったのが兵隊上がりの老人だった。

顔は広いが行く先々で名乗る名前が変わっていたので、どれが本名かはわからない。

そして俺が士官学校の入試に合格した後、ふっと姿を消してしまった。俺も寮生活になり、そのまま少尉任官でリトレイユ領に送られたので、それっきり会っていなかった。

どうせどこかで元気にしてるんだろうとは思っていたが、やっぱり元気だったようでちょっと嬉しい。

当時からタフで頼もしい老人だったが、まさかこんなところで出会うとは。

しかし彼が巡礼や苦行なんかするはずがない。

やるとすれば密輸の方だが、それも何か違う。彼は密輸品を買い取った上で、出所をロンダリングして稼ぐタイプだ。戦場帰りの彼は無駄なリスクを嫌う。

巡礼でも密輸商人でもないとなれば、後は山賊かそれに近い存在だろう。

久しぶりの再会だが、俺は警戒を緩めないことにした。その方がこの爺さんも喜ぶだろうしな。

案の定、老人は御機嫌だ。

「偉くなくても鈍ってないな。俺が見込んだ通り、とびっきりの将校になったようで嬉しいぜ」

「ありがとう。あんたのおかげだよ。白湯でも飲むか？」

いつでも抜刀できるように重心を低くしたまま笑ってみせると、老人は手をヒラヒラ振って苦笑いした。

「そんな殺気剥き出しじゃ喉を通らねえよ。心配するな、今日は争うつもりはねえさ」

「本当かな？」

「長年の相棒だったが、俺はこの老人を心から信じる気にはなれない。」

彼が嘘をついたことは一度もない。ただ、はぐらかされたことなら何度もある。

彼が裏切ったことも一度もない。だがそれも、彼が俺を高く評価して利用価値を見いだしていたからだと思う。

油断できない相手だ。

そんな油断できない元相棒は立ち止まったまま、全く緊張感の感じられない様子で首をコキコキと鳴らしている。

「懐かしいな。一緒に釣りをしたときのことを覚えてるか？」

「それ、貴族の愛人宅に忍び込んで観賞魚を釣ろうとしたときの話だろ。危うく死ぬところだったぞ」

この老人と組んでいろいろな悪事を働いたが、毎回トラブルだらけで何度も危うい橋を渡った。『死神の大鎌』の力がなければ、二人そろって十回は死んでるだろう。とにかくメチャクチャだった。

だが思い返すと懐かしい。酒浸りの父親に殴られながら、どうにかこうにか食べ物漁って寒さに震えていた頃よりもずっと楽しかった。

おっといかん。警戒心が緩めるとまずいぞ。これも全部計算だろう。

「悪いが今は仕事なんだ。場合によっちゃあんたを撃つこともありえる仕事だよ」

じわりと脅してみたが、老人は全く動じていない。

「ああ、そうなるかもしれん。実は最近、傭兵団の頭をやってな

ま、行き場のない兵隊どもの再雇用を創出して訳だ。お上品な仕事さ。今はブルージュ公に雇われてる」

「おいおい」

俺はマグカップを投げ捨て、サーベルの柄に手を掛けた。だが抜く気はない。身構えてみせたただけだ。

ここまで手の内を曝したということは、この老人が今ここで襲ってくる可能性は低い。襲う気があるのなら、傭兵を率いていることやブルージュ公に雇われていることなど言わない方が有利だ。

「それを聞いて俺があんたを生かしておくと思ってるのか？」

「思ってるとも。俺の知ってるユイナーはそんな乱暴者じゃねえ。きちんと筋を通す見上げたヤツさ。そうだろ？」

老人はそう言っつて木の幹にもたれかかり、パイプをくゆらせる。ちよつと待て、火種なんかどこに隠し持ってた？ いつ火を着けた？ ていうか、どつからそのパイプ出したんだ？ そう。この老人は謎が多い。俺の知らない知識や技術を持っている。だから油断ができない。

パイプに詰めた煙草はかなり上等なものようだ。貴族将校が嗜む銘柄に香りが似ている。

どうやら最近は羽振りがいいらしい。

老人は煙を吐き出すと、独り言のように続ける。

「メデイレン家の女將軍を捕まえてこいってのが、今回の契約でな。ブルージユ公は今後の交渉を有利に運びたいらしい。ユイナー、お前は対象外だ。他の將兵もな。だから見逃してやってもいい」

こういうときに彼が嘘をついたことは多分一度もなかった。もっとも今回もそうだとはい限らないので、俺は敢えて信じないふりをする。

「あんた、敵方の傭兵の言葉を信じるか？」

「いいや？ 話なんか聞かずにズドンさ」

ニヤリと笑った老人は、会話を心底楽しんでる様子だった。

「だがお前は俺とは違う。いきなり撃たずに話を聞く。死神だなんだと言われていても、お前は優しい子なのさ。だから俺もこうして顔を見に来た。で、そんな優しいユイナーに相談がある」

老人は真顔になった。

「お前の上官を説得してくれ。降伏させて欲しいんだ。無理な願いなのは百も承知だが、俺は既に山岳獵兵どもを付近に展開させている。このままやりあえばお互いに死人が出るぞ。どうする？」

おっと、そうきたか……。

第76話「死神参謀と灰色の老兵」(前書き)

書籍第1巻がPASH!ブックス様から本日発売です。ユイナールと老人の出会いを描いた巻末書下ろしが収録されていますので、興味があればぜひ御一読ください。

第76話「死神参謀と灰色の老兵」

【第76話】

かつての相棒だった老人は、あくまでも穏やかに語る。俺を脅すような感じではない。

そして俺は知っている。

彼が穏やかに語るときはいつも血が流れるのだ。この老人は必勝必殺の備えがあるとき、最も温和になる。

「降伏か……」

時間を稼ぐため、俺はとりあえず思案する様子を見せておく。

まずこの老人の言葉が本当なのかどうかだ。

山岳猟兵は要するに人間狩りの訓練をした猟師だから、当然のように手強い。行軍中にゲリラ戦を仕掛けられたら休息もできなくなる。

だが本当にいるのかな？

……いや、確かに妙な連中がいたな。

俺は確かめるように老人に言う。

「そういえば街道からついてきた旅人の中に、兵隊上がりの歩き方をしているのが何人かいたな。早足の俺たちにぴったりついてきている上に、鼓笛隊の行進曲に反応してる。この野営地にもいるだろ。六人ぐらいかな？」

「あーいかにいかに、ちよいとしゃべりすぎたな。お前が鋭いことを忘れてたぜ」

「どうだか。言い当てられたふりをしているだけで、本当はもつと兵を隠している可能性だってある。何が本当で何が嘘なのか、話せば話すほどわからなくなっていく。」

「だがそこまで気づいてるのなら話は早い。俺の命令ひとつで……いや、俺がここでお前に殺されたとしても、部下たちは任務を遂行する」

老人はコートの右腰をポンポンと叩いた。銃の形に膨らんでいる。

「お前が考えた『ねじれ筒』なら、遠く離れた場所から正確に狙撃できる。隠れ潜みながら少しずつ負傷兵を作っていけば、お前たちは山の中で身動きが取れなくなる」

困ったことに、この老人はライフル式マスコット銃を知っている。俺と一緒にそいつで密猟しまくったからだ。敵もあれを装備しているのなら、もはや射程の優位はない。

しかも俺の性格をよく知っているのだから、俺が負傷兵を決して見捨てないのもバレバレだ。

思っていたよりも状況が悪いな。

負傷者が一人出れば、それを救護して運搬するために三人か四人必要になる。銃弾一発で四、五人が戦闘不能になる計算だ。軍隊に

とつては戦死者より負傷者の方が重い。

こちらは二百人ほどの部隊だから、四十人ほど負傷兵が出ればほとんど戦闘不能になってしまう。

負傷兵を見捨てれば戦えるが、そんな酷薄な司令官と運命を共にしたい兵はいないだろう。俺の敬愛するアルツァー准将はそんな人じゃない。

老人はここで穏やかな口調になり、諭すように言う。

「もちろん真正面からやり合えるほどの兵力は持ってきてないが、お前らを打ち負かすぐらいは訳もない話さ。わかるだろ？」

俺の返事を待たずに老人は続ける。

「だが結末のわかりきった戦いなんかしてもしょうがねえ。アルツァー准将に降伏するよう勧める。お前らは降伏しなくていい。逃げたいヤツは全員逃がしてやる。もちろん准将閣下には貴族として礼節をもって遇するさ。大事な人質だからな」

困ったぞ。戦えばおそらく老人の言う通りになるだろう。ちょっと悔しいが、准将に投降してもらうことも検討した方がいいな。

だがそう思った瞬間、俺の首筋に久しぶりにアレがぞわりと来た。『死神の大鎌』の冷たい感触だ。

理由はわからないが、ここで降伏を受諾すると俺は必ず死ぬらしい。

目の前の老人が俺に嘘をついているとは思えないから、おそらく彼にとつてもイレギュラーな何かが起きて俺は死ぬのだろう。

じゃあもう降伏できないじゃないか。

みんなのために降伏して死ぬという選択肢もあるにはあるが、できればもうちょっと生きてみたい。

だから俺はニヤリと笑った。

「悪くない提案だ。だが断る」

老人は驚いた様子で、俺の顔をまじまじと見つめる。

「おいおい本気か、ユイナー？ 部下たちに命じて、今すぐお前の頭を撃ち抜いてもいいんだぜ？」

やりかねないから怖いんだよな、この爺さん。人を殺すときに全く躊躇しない。

だがここで弱気になってはまずいので、俺は余裕たっぷりと言い放つ。

「そつちこそ冗談がきついで。勝ち戦で上官を売る大間抜けだと思われてたのは心外だな」

「勝ち戦なものかよ。お前たちは今、敵地を逃亡してるんだぞ。どう考えたって……」

俺は敢えて老人の言葉を遮る。ごめんな、爺さん。

「いや、勝ち戦だよ。ブルージユ公は正規軍を動かすのを諦めて、シユワイデル人が率いる傭兵団に追撃させてる。エオベニアの国境を越えるのが怖いんだ。下手に刺激してエオベニアとの関係が悪く

なったら困るからな。准将の身柄ひとつじゃ割に合わない」

老人は溜息混じりに首を横に振る。

「そうかもしれんが、そいつは依頼主の都合さ。俺の仕事とは関係ねえ。俺は契約を履行する。それだけだ」

「好きにすりゃいい。あんたの契約も俺の仕事とは関係ないからな」

話は終わりだとばかりに、俺は元相棒に言い放つ。

「残念だが今回は敵同士だ。そろそろ帰ってくれ」

「おや、撃たないのか？」

フツと笑った老人に俺は答える。

「あんたは正規の軍人じゃないが、殺し合いじゃなく話し合いをしに来てくれた。使者の安全は保証するのが帝国軍人だ」

「律儀だな」

「ブルージユ公の心証を悪くしたくないだけだよ。いつ捕虜になるかわからないからな。さ、帰ってくれ。今夜は冷えるぞ」

老人はしばらく俺の顔をじっと見ていたが、やがて肩をすくめた。

「しょうがねえ。今日はもう帰った方が良さそうだ。またな、ユイナー」

「ああ、またな」

気さくに笑った瞬間、老人が俺に飛びかかってきた。素手で組み討ちを挑むつもりらしい。俺を捕虜にする気だ。

それを予期していた俺はイスに腰掛けたまま、つま先で焚き火を蹴った。

燃えさかる小枝や枯れ葉が宙を舞い、老人の顔めがけて飛んでいく。下町の庶民が喧嘩のときによく使う技で、昔はこうやって砂や犬の糞を相手にお見舞いしたものだ。

それに被せるように俺は顔面めがけてパンチを放つが、華麗に避けられる。

「おい爺さん、話が違っじゃないか。やり合う気はないんだろ？」
「状況が変わったんでな。リンゴが落ちたら木に登ってもしょうがねえ」

そりやそうだ。相変わらずだな。俺たちは用心深く距離を取った。

爺さんは無傷だ。焚き火もしっかり避けられてる。まあ通用しないよな。

だが黄昏時に目の前で火が激しく動けば、人間の目はそれに惑わされる。老人の視力だと明暗への順応も遅いはずだ。仕掛けるなら今がチャンスだな。

だがこの爺さんは白兵戦の達人だ。掴まれたら捌く自信はない。しかも俺を殺すつもりがないので、『死神の大鎌』が頼りにならない。

こんな物騒なジジイとプロレスごっこを続ける気はないので、俺は迷わず抜刀する。

だが斬りつけるのではない。俺はサーベルを振り上げ、仁王立ちになって号令をかけた。

「総員構え！」

「何っ!？」

老人は瞬時に飛び退く。マスケット銃の恐ろしさは彼自身が誰よりも熟知している。数を撃てば弾は弾幕になり、どう避けようとも当たるのだ。

次の瞬間、老人は背後の夕闇に消えていた。呼子笛を鳴らす音が森の奥から聞こえてきて、どんどん遠ざかる。

相変わらずの俊足だな。元気な爺さんだ。

ほっとした瞬間、思わず笑みがこぼれてしまう。

「ふふっ」

彼はたぶん、俺の射撃命令がハツタリだとすぐに気づいたはずだ。実のところ、俺の号令を聞いて銃を構えていた兵士なんか一人もいない。

だが老人はほんの一瞬とはいえ、自分がまんまと騙されたことに気づいた。敵の術中に陥ったことに気づいた瞬間、これ以上は危険だと判断して退いたのだ。

命知らずの猪武者なんかよりも、そういう慎重な相手が一番やりづらい。

「なんか騒がしいね？」

「敵襲かな？ あれ、参謀殿だ」

その頃には異変を察した女性兵士たちが天幕のあちこちから飛び出してきて、着剣した銃を手に不安そうな顔をしている。

俺はサーベルを手にしたまま、彼女たちに命じる。

「野営地にいる民間人を全員拘束しろ。まだいればの話だがな」
もちろん一人も残っていないかった。全部敵兵だったらしい。

あの爺さんが会いに来てくれていなかったら危ないところだった。さっきの奇襲もどことなく手加減してるように思えたし、なんとなくからかわれてるような気がする。久しぶりに会えて嬉しかったのは、どうやら俺だけじゃなかったようだ。

急激に深まる森の闇を見つめながら、俺はぼつりつつぶやく。

「義理は果たした……ってところか？」

「どうなさいましたか、参謀殿？」

わたわたと駆けつけたハンナが心配そうにしているので、俺は笑ってみせた。

「何でもない。それよりも別命あるまで非常警戒態勢を敷いてくれ、俺は准将に報告してくる」

「了解しました！」

あの爺さんのことだ、この奇妙な挨拶も何か考えがあつてのことだろう。

それよりもアルツァー准将に相談しないと。
ここからは厳しくなるぞ。

* * *

【灰色の獵犬たち】

山道を大きく外れた茂みの中に、五十人ほどの男たちがひっそりと佇んでいた。

全員、目立たない色合いのマントをまとっている。これだけの人数が一カ所に集まっているというのに、人の気配を全く感じさせない。

そのとき、茂みを揺らす微かな物音がする。

瞬間的に全員が銃を構えた。

「待て待て、俺だ」

のんびりした声と共に、さっきの老人が現れる。

「団長だ！」

「よく御無事で！」

兵士たちの出迎えに苦笑しつつ、老人は日焼けした頬を撫でる。

「やれやれ、あの坊やを強くしすぎた。ありゃ一筋縄じゃいかんぞ。参ったな」

「なんだか嬉しそうですね？」

「ははは、嬉しそうに見えるか？」

笑いながら老人は部下の肩を叩く。

「殺し合いの前に、あっちの参謀に降伏を勧めてきたんだがな。案の定断られちゃった」

「この状況で降伏しない理由なんかありますか？」

「あるんだろうよ。あの坊やは必ず正しい道を選ぶ。死神に守られてるのさ」

老人の言葉に傭兵たちが微かに動揺する。

「そーいや、その参謀って『死神クロムベルツ』じゃ……」

「リトレイク公の反乱を阻止して、わずか一個中隊で反乱軍を叩き潰したっていう、あの『死神クロムベルツ』か!？」

老人は軽く手を挙げ、部下たちの動揺を鎮める。

「落ち着け。あの坊やが名将だからって、この状況で逃げ延びることとはできんさ。俺たちの優位は変わらん。だがまあ……あの態度は気になるな。あれはハツタリじゃない」

老人はそう言って考え込む様子を見せる。

「いろいろ考えられるが、一番危険なのは連中がエオベニア王に話を通している場合だ。国境付近にエオベニア軍を展開されたら追撃どころじゃねえな」

「まずいですね、団長」

「なに、可能性のひとつに過ぎんさ。帝国領内で仕留めれば悩む必要もねえ。そしてお前ならそれができる。そうだな？」

「はい、団長！」
全員が背筋を伸ばす。

老人は目を細めてうなずき、それからこう言った。

「ヴァスロ隊は先行して哨戒だ。国境地帯に不穏な兆候があればすぐに報告しろ。ヴィッセンとスクシアの隊は俺に続け。バロフ隊には後詰めと輜重を任せる。糧秣をなくすなよ？」
「はっ！」

敬礼する傭兵たちに老人は笑いかける。

「女を撃つのは気が進まんが、銃を持って戦場にいるのなら対等に扱わんとな。礼儀正しくやれ。つまりあれだ、容赦はするな」
「はっ！」

第77話「獵兵狩り」(図解あり)

【第77話】

俺は今、真つ暗な山道に一人で佇んでいた。

銃は持たない。一応サーベルだけ腰に吊ってはいるが、もし敵の山岳獵兵に見つかれば応戦する手段がない。

つまり見つかったら俺は死ぬ。

そして俺は死の危機が間近に迫ると、『死神の大鎌』の予知能力が発動する。

今回、俺はこの能力に自分の命を預けることにした。この能力は生と死の崖っぷちでのみ役に立つ。命を懸けなければ使えない能力だ。だが他に方法がない。

俺はこの能力に全てを賭けて、追っ手の敵傭兵団を逆襲して殲滅することにした。このまま山岳獵兵に追われながら国境の山岳地帯を行軍すれば、道中で必ず多数の犠牲者が出る。

山岳獵兵たちは攻撃側で、俺たちは防衛側だ。防衛側は攻撃側よりも苛烈に反撃しなければ生き残れない。

なんせ攻撃側は「攻撃を諦める」という選択肢があるが、防衛側には「防衛を諦める」という選択肢がない。防衛を諦めたら敵に蹂躪されるだけだ。

だから叩く。二度と追撃できなくなるまで、徹底的に叩きのめす。

危険は承知の上だ。

山道を一步、また一步と、来た方向に戻っていく。

野営地からずいぶん離れたところで、不意に首筋に冷たい感触が走った。『死神の大鎌』だ。これ以上先に進めば俺は死ぬらしい。

ぴたりと立ち止まり、茂みに身を隠す。

すぐ近くに敵がいるはずだ。

しかし山岳猟兵は元猟師だ。獣にすら悟られずに姿を隠して忍び寄る相手に、素人の五感では太刀打ちできない。全然わからないぞ。どこだ、どこにいたんだ。

俺がドキドキしながら身を潜めていると、背後からトントンと背中を叩かれた。

ひゃつと飛び上がりそうになったが、すぐに気持ちを鎮める。敵がこんな優しいアプローチをしてくるはずがない。これは味方だ。振り返るとライラ下士補が真剣な表情で前を見ていた。

「参謀殿、あそこです。大勢潜んでますよ。休憩しているようです。俺には全くわからないが、元猟師のライラにはわかるらしい。そのために連れてきたんだから当然だが、なんでわかるんだろうな…」

「まあいいや。居場所がわかったのなら、後は作戦通りに実行するだけだ。」

俺は敵の位置を記憶し、ライラと共にそろそろと慎重に後退する。敵に気づかれたらこの作戦は失敗だ。

野営地ではハンナたち砲兵隊の面々が待機していた。准将から指揮権と共に預かっている。

「参謀殿、どうでしたか？」

「あの岩場だ。ありったけ撃ち込め」

「了解です！」

ハンナは敬礼し、すぐさま砲兵たちに命じる。

「目標、前方の岩場！ 照準修正、左三つ、上四つ！ 撃て！」

五門の野戦砲が次々に火を噴いた。砲火が夜空を焦がし、岩場に砲弾が撃ち込まれる。夜の峰に轟音がこだました。

まさか居場所がバレて砲撃されるとは思ってなかっただろう。悪く思っなよ。

「えーと……参謀殿、もう一発いつときますか？」

「いやいい。すぐに敵が動き出すぞ。手順通りだ。砲は遺棄しろ」

「はいっ！ みんな逃げて！」

砲兵隊の子たちが砲を置き去りにして駆け出す。俺たちも逃げよう。

* * *

【猟兵狩り】

暗闇に轟音と叫び声が響く。

「畜生、何が起きやがった！」

「砲撃だ！ 狙われてるぞ！」

「なんでここがわかつたんだ!？」

真つ暗闇の中で傭兵たちが騒いでいても、老人は冷静だった。

「大声を出すな。猟犬が吠えるのは獲物を追い立てるときだけだ」
その一言で傭兵たちは瞬時に統制を取り戻す。

負傷者が出ていることを確認し、老人は素早く命令を下す。

「砲撃は野営地からだ。寝静まるのを待ってやるつもりだったが、向こうが始める気なら遠慮はしなくていいぞ。ヴィッセン隊の負傷者はスクシア隊に入れ。砲火を直接見た者もな」

山岳猟兵たちは日没後、ひたすら暗闇に溶け込んで視覚の暗順応に専念していた。

彼らの大半は今も暗闇を見通す目を持っているが、大砲の発射炎を見た者は目が光に慣れてしまい、暗順応を失った可能性があった。暗順応できていない者は足手まといになる。

「五人か、案外多いな。なら代わりにスクシア隊から四人ほどヴィッセン隊に入れ」

ヴィッセン隊には隠密行動の名手たちを集めていたが、万全でない者を連れていく訳にはいかない。狙撃手を集めたスクシア隊から補充する。

補充が一人少ないのは、負傷兵を抱えることになったスクシア隊への配慮だ。

真つ暗闇の中、老人は部下たちに命じる。

「スクシア隊は散開して山道から陽動を行え。後方のバロフ隊が来るだろうから合流しろ。ヴィッセン隊は俺に続け。北側の沢筋から攻め上がった砲を制圧する」

すぐさま傭兵たちは動き出した。

老人の後に続いた十名余りの傭兵たちは、散発的に聞こえてくる銃声に耳を澄ませながら慎重に沢筋を登っていく。

涸れて雪が積もった沢は足場が極めて悪く、登山ルートとしては最も危険だ。

だがそれだけに警戒されにくい。

正規の山道では味方が派手に動いて敵を引きつけている。たまに聞こえる砲声は着弾点がバラバラで、狙いが定まっていないようだ。おそらく損害を与えていない。

「スクシアたちはいいい仕事をしているな。俺たちもいい仕事をしよう」

老人がニヤリと笑うと、傭兵たちも笑った。

「よし、いい顔だ。戦場の男の顔だな。行くぞ」

「おう！」

老人と傭兵たちは沢筋を駆け上がり、ほとんど絶壁に近い斜面をスルスルとよじ登った。砲兵陣地の側面を衝く形だ。

砲兵陣地は狙撃を恐れてか全ての灯火が消えていたが、暗闇に目を慣らしていた山岳猟兵にとっては星明かりで十分だ。

暗闇の中、山岳猟兵たちは音もなく野戦砲に忍び寄る。まだ銃は撃たない。発砲炎で暗順応が解けてしまっし、居場所が露見すれば集中射撃を受けるかもしれない。撃つのは標的を捕捉してからだ。だが彼らはすぐに困惑した声で報告した。

「団長、誰もいません」

「おいおい、そんなはずが……いないな」

老人は大砲の砲身に触れる。まだ温もりがあった。ここから砲撃があったことは間違いない。

「なんだ、拍子抜けだな」

傭兵の一人がそうつぶやいたが、老人はそれをたしなめた。

「油断するんじゃない。すぐに隠れる！」

老人が叫んだ瞬間、パパパッと銃火が闇を切り裂いた。

「うわっ!?!」

「上からだ!」

すぐさま全員が木箱の裏などに身を潜める。待ち伏せされていたようだ。

< i 6 3 0 2 3 8 — 3 5 6 7 8 >

「ははっ、思った通りだ。ゼッフェル砦の再来って訳かい、ユイナ

「
老人は愉快そうに笑うと、部下たちに命じた。
「多勢に無勢だ、長くは粘れねえ。大砲だけ破壊して引き揚げ……」

言葉の途中で老人はふと黙り込む。

「いや待て。何かがおかしい」
思考をまとめようと木箱を撫でていた老人は、その木箱を凝視する。その直後、ハツとしたように叫んだ。

「退却だ！ 総員退却！」

「えっ！？」

「ぐずぐずするな！」

木箱の陰から老人が駆け出す。
それを待っていたかのように無数の銃弾が降り注ぐが、暗闇を駆け抜ける老人には当たらない。

「だ、団長！？」

「いいから早く来い！ 走れ！」

「でも沢筋を下るのは……」

傭兵の言葉は最後まで続かなかつた。
隠れていた木箱が爆発したからだ。

爆風が吹き抜け、何かが木々の太い枝をバキバキと薙ぎ倒す。単なる爆風ではない。銃弾のような何かが仕込まれていたようだ。凄まじい殺傷力だった。

爆薬の裏側に隠れていた部下たちは全滅だろう。

「ちいつ！」

間一髪で老人は急斜面を滑り降り、真つ暗な藪の中を転げ落ちる。滑落と表現して差し支えないほどの勢いだったが、積もった雪が衝撃を吸収してくれた。

激痛に耐えながら背後を振り返るが、続いてくる者はいない。銃声も止んでいる。

「付近にまだ敵が潜んでいるかもしれん！ 警戒しろ！」

ユイナーの声だ。どうやら砲兵陣地を奪還されたらしい。

おそらく生き残っている部下はいないだろう。あそこに戻るのは自殺行為だ。

「クソツ！」

老人はよろめきながらも闇に紛れ、後方の隊に合流する。

山道から離れた森の中で、二十人ほどの兵が老人の帰還を待っていた。スクシア隊と後続のバロフ隊だ。

「団長、よく御無事で！」

「ヴィッセンたちは！？」

「全員やられた」

老人は差し出された水を一口飲むと、乱れた前髪を掻き上げた。

「何もかもがゼツフェル砦の再来だ。空っぽの陣地と伏兵。慌てて隠れた木箱にや御丁寧に爆薬が仕掛けてあった。しかも鉛玉か何か

と一緒に。至近距離であれをくらったら助からん」
「そんな……」

「あの坊や、山岳猟兵の強さと弱さを知ってやがったんだよ。真つ暗な冬の涸れ沢を駆け降りるなんてバカなこと、素人ならできても猟師にやできねえ」

「確かに自殺行為ですからね」

うなずいた部下たちに老人は溜息をつく。

「だろう？ ヴイツセンたちが迷っている間に木箱の爆薬が引火しちまった。俺は助かったが……まあ涸れ沢を降りるのは確かにバカだな。あちこち打って傷だらけさ。無事だったのは運が良かっただけだ」

分隊長のスクシアが怯えた様子で口を開く。

「この手際、やっぱり『死神クロムベルツ』ですか？」

「だろうな。貴族のお嬢様にや猟兵の習性なんざわかりやすまい」
老人の言葉に傭兵たちが動揺する。

「思ってた以上に手強いな、帝国の死神……」

「まさか緒戦でヴィツセン隊が全滅するなんて想像もしてなかったぞ」

老人は片手を挙げて一同を制する。

「まあ落ち着け。お前らを犬死にさせる気はねえ。夜が明け次第、先行しているヴァス口隊を狼煙で呼び戻せ」

「団長、まさか追撃中止ですか？」
「さすがに今帰つちまつたんじゃ契約違反だろ。だが計画は変更するしかあるまいよ。斥候に割くだけの兵力がもうねえ。場合によっちゃ撤収もありえる」

その言葉に傭兵たちがさらに動揺した。
「そんな！？ まだ一戦やっただけですよ！？」
「俺たちはまだ戦えます！」

だが老人は首を横に振った。

「一個小隊五十人で四倍の敵をちびちび消耗させていく作戦なのに、まだ一人も敵を仕留めないうちから十人以上やられちまつてる。このまま戦えば磨り潰されるのがオチだ。お前らの命を預かる身として、そんな死に方はさせられねえ」

老人は木にもたれかかる。

「この先はエオベニア領だが、俺たち傭兵にはケツ持ちがないことを忘れるな。投降しても捕虜の待遇は受けられねえ。捕まれば山賊扱いで縛り首だ」

「だったら帝国領内で一気にケリをつけたら……」

傭兵の一人がそう言い、老人は軽くうなずいた。

「一応、そのつもりではいる。短期決戦なら先行偵察は必要ないしな。ただしヴァス口隊は野外行動が専門で、銃の腕はそれほどじゃねえ。そううまくいくとも思えん」

老人は腕組みした。

「何より、あつちにや人狩り獵兵を狩る死神がいる。お前ら獵兵にできることも、お前らだからこそ絶対にやらないことも全て見抜いてる死神がな。追撃するなら覚悟はしておけ」

そう言った後、老人は背後の暗闇を振り返る。

「あの坊や、とんでもねえ化け物に育ちやがったな……」

第78話「死神は狩人の魂を狩る」

【第78話】

敵の死体を埋葬する余裕はないが、かといって崖下に投げ捨てるのも気が引けるので布でくるんで安置する。こいつらはあの爺さんの部下だ。後は爺さんがやるだろう。

彼らの冥福をゆつくり祈る暇もなく、俺は鹵獲したマスカット銃を検分した。

「ライフル式じゃないな……」

意外なことに、全滅した敵兵の銃は大半が従来式のマスカット銃だった。

ライフル式のものはずか三挺。敵は十人以上いたから、これは分隊狙撃手用だろう。

「ユイナー、どうした？ おっと違うな。どうなさいましたか、クロムベルツ少佐殿」

同期のロス中尉が声をかけてきたので、俺は振り返る。

「そのわざとらしい訂正はよせ。それより敵の武装が貧弱だ。向こうにもライフル式マスカット銃があるのは予想してたんだが、数が少なすぎる」

するとロスは、ごく当たり前のような口調で答える。

「それ、数を揃えるのが難しいヤツだろ？ 傭兵ならそんなもんじ

やないか？」

「まあ……そつだよな」

どうやら敵の山岳猟兵たちには、十分な数のライフル式マスケット銃が行き渡っていないらしい。

「なるほど」

俺は元相棒の爺さんがやってきた理由がひとつ、わかってしまった。

ライフル式マスケット銃が十分あるように思わせたかったんだ。

俺とあの爺さんはライフル式マスケット銃で密猟していた間柄だから、お互いに「アレは持つてるだろう」と認識している。だから俺も騙されたが、実際には彼らの武装は貧弱らしい。

ロズが家族用の天幕に引っ込んだ後、入れ替わりにアルツアー准将がやってくる。

彼女は野営地の惨状を眺めつつ、軽く溜息をついた。

「貴官に指揮権を預けると、どこもかしこも地獄絵図になるな」

「死神だとも言いたいんですか」

どうせ俺の指揮は杜撰だよ。

しかし准将は苦笑しながら俺の肩を叩く。

「敵にとってはそうかもしれないが、我々にとっては守護神だよ。」

貴官は敵を駆逐した。やはり実戦経験が段違いだな。私の指揮や立

案ではこうはいかない」

やった、褒められた。尊敬する上官に褒められると気分がいい。

俺は周囲への警戒を怠らず、しかし微妙に頬が緩むのを感じていた。

「敵は手練れの山岳猟兵ですので、猟師にできることなら全てできます。明かりを持たずに暗闇の中から襲いかかってくることも可能です」

前世でマタギの逸話をいくつか聞いたことがあるのだが、彼らは何時間もかけて目を暗闇に慣らすそうだ。それによって真っ暗な森の中でも行動できるらしい。

さすがに普段入っている山での話だとは思うのだが、それでも人間離れた業だ。

念のために猟師出身のライラに聞いたら「できますよ」と即答されてしまったので、敵の侵入を想定した上で作戦を練り直していた。「どこから敵が来るかわからなかったので、大砲を襲撃するように仕向けました。その上で敵を待ち伏せし、爆薬入りの木箱の陰に誘導した訳です」

山野を縦横に駆け巡る山岳猟兵だろうと、行動が読めるのなら大して怖くはない。プロ同士の勝負は高度な読み合いになるので、案外あっさりと決着がついてしまうことがある。今回もそうだ。

「我々は軍属の非戦闘員や、三歳の女の子まで連れていきます。山岳
獵兵に追われ続けながら山中を移動し続けるのは難しいでしょう。
ここで彼らを殲滅するべきです」

論理的に考えて他に解決策が思いつかなかったのだが、やっぱり
思考が死神っぽいな。

アルツァー准将は少し考え込み、それから周囲の闇を見回す。

「だが敵の生き残りは山中に撤退したぞ。深追いは危険だ」

「はい。今夜は休息を取るしかないでしょうね」

すでに野営地のあちこちには松明を灯している。敵は野営地に近
づくだけで松明を目撃し、暗順応が解ける。

ただし松明には決して近づかないよう、みんなには繰り返し厳命
しておいた。狙撃の的になるからだ。

「この備えなら暗闇からの奇襲は難しいはずです。いったん寝まし
よう」

「やれやれ、また敵に怯えながらか。ゼツフェル砦の再来だな」

「軍人をやっている以上、敵に囲まれてても眠れないと仕事になり
ませんよ」

俺も怖いんだけど、とにかく体と脳を休ませないと明日以降戦え
ないから仕方ない。

幸い、その夜はもう敵の襲撃はなかった。夜襲に備えて不寝番も
立てていたんだけど、特に妙な動きはなかったらしい。

夜明けと共に湯を沸かし、同時に周辺に歩哨を繰り出して警戒線

を張る。

ライラたちを見送ったハンナ下士長が心配そうにしている。

「大丈夫でしょうか……」

「危険なのは間違いないが、本隊が急襲を受けると大損害が出る。

ここには炊事のおばちゃんたちやローズの家族もいるからな」

俺もライラたちが心配なので、自分に言い聞かせるようにハンナに説明する。

「敵は追撃戦を想定しているが、この山道は敵もよく知らないはずだ。特にエオベニア領に入るのは相当警戒するだろう。彼らは傭兵で、正規の軍人としての身分を保障されていない」

「あつ、だから前方にも警戒線を張るんですね！ 敵の斥候が先行してるから！」

「お、察しがいいな。そういうことだ。昨夜の戦闘で敵は予想外の損害を受けたから、兵力を整えるために斥候を呼び戻すかもしれない。それを捕捉できればいいんだが」

ま、向こうも百戦錬磨の山岳猟兵だろうから、俺たちに見つかるようなへまはしないだろう。

俺は白湯の入ったマグカップと、布に包んだ黒パンの塊を差し出した。

「とりあえず貴官も朝飯にしてくれ。今日も大変だぞ」

「はい、参謀殿！ いただきます！」

* * *

【獵兵と獵師】

獵師の出で立ちをした男たちが山道を歩いている。先行偵察中だった山岳獵兵たちだ。

「さっきの狼煙……緊急の帰還命令なんて、何があったんですかね？」

「砲声と銃声が聞こえたから戦闘が起きたのは間違いない。計画を変更するような何かがあったんだろっ」

分隊長のヴァスロがそう答え、配下の十数名に告げる。

「もつすぐ第六特務旅団の警戒線に引っかかる。ここから先は安全に迂回できるルートがない。ここを抜けるまでは獵師に戻れ」

すると獵兵たちが笑う。

「任せといてください。獵師の演技ならどんな役者より巧いですよ」

「そりゃそうだろ」

敵地に在っても獵兵たちは落ち着いていた。

やがて彼らの前方に、マルーンの軍服と白いマントを羽織った女性兵士たちが現れる。

「止まれ！」

「止まって！」

獵兵たちは微かにささやきあつ。

「本当に女の兵士だ」

「あんな連中が人を撃てるのかよ」
だがヴァスは部下を制した。

「油断するな。あいつらはキオニス騎兵どもを返り討ちにしてキオニスから生還した強者たちだ。お前らに同じことができるか？」
全員が一瞬で黙り込む。

分隊長のヴァスが笑顔を作った。

「おつい、女の兵隊さんたちか！ 見慣れねえ色だな、どこの軍服だ！」

「シュワイデル帝国第六特務旅団です！ あなたたちは！？」

「見りゃわかんだろうが！ 鹿撃ちの獵師だよ！」

そう答えてヴァスは背後を振り返る。

「いいか、『ツノ』撃ちだぞ。『オオ又シ』や『トガリ』撃ちじゃない。俺たちは『ツノ』撃ち獵師だ」

獵兵たちは無言でうなずいた。

帝国兵たちは警戒しつつも、獵兵たちに銃を向けるようなことはしなかった。あくまでも地元獵師として扱っつもりのようなのだ。

すぐに将校らしい若い男がやってくる。少佐の階級章をつけていたため、獵兵たちは彼を貴族将校だと判断した。平民は少佐にならないからだ。

帝国の少佐は気さくな態度で明るく笑いかけてくる。

「作戦行動中ですまない。猟の邪魔だろう?」

「いやいや。この辺りには、めばしい鹿はおりませんでしたから」

ヴァスロがそう答えると、少佐は納得したようにうなずいた。

「鹿か。確か猟師の言葉で『シシ』と言っただろう?」

「はは、いえいえ」

貴族将校が山言葉を知っていることにヴァスロは少し驚いた。

貴族は高慢で平民を見下している。特に猟師は領主の権限が及びにくいこともあって、「下賤」とされることが多いからだ。

だがこの質問も引つ掛けかもしれない。本物の猟師なら正しい山言葉を知っていて当然だ。ヴァスロは丁寧に訂正する。

「いやあ、そいつは猪の方ですよ。鹿は『ツノ』です」

「おや、そうか」

次の瞬間、少佐はパチンと指を鳴らした。

その場にいる全ての戦列歩兵たちが銃を構える。

「なっ!?!」

驚いた猟兵たちとは対照的に、少佐は微笑んでいた。

「山言葉が山ごとに違うのを知らなかったようだな。この界隈の猟師は鹿のことを『マクリ』と呼ぶんだ。『ツノ』呼びはミルドール地方に多い。お前たちはブルージユ公の傭兵だな?」

「い、いや違いますよ。地元の鹿を狩り尽くしちゃまずいんで、しばらくこっちに厄介になってるだけで」

ヴァスロはとつさに嘘をついたが、帝国の少佐は手近な猟兵の弾薬ポーチを開いた。

「鉛玉も火薬入れもずいぶん多いな。猟師は無駄な荷物を持ち歩かないと聞いているが、これなら百発は撃てそうだぞ。この山の鹿を狩り尽くす気か？」

「ぐっ……」

言葉に詰まったヴァスロに帝国の少佐はさらに言う。

「鉛玉の大きさが鹿撃ちにちょうどいいサイズなのは褒めてやるよ。これでウサギ狩りだと言われても誰も信じないからな。だがこいつは人を撃つのもちょうどいいサイズだ」

もう何も言い返せなくなったヴァスロに、少佐は笑いかける。

「確かに今は鹿撃ちの季節だ。だがお前たちの荷物には獲物を運ぶ空きもなければ、解体道具も見当たらない。そりゃそうだろう。お前たちの獲物は鹿ではなく帝国兵だ」

反論の余地もない指摘にヴァスロは唇を噛む。

四方八方から銃剣を突きつけられているが、こちらは銃を構えていない。猟師は獲物に遭遇するまで銃を包みから出さないからだ。

もはや反論も反撃もできない。ヴァスロは覚悟を決めた。

「俺たちをどうする気だ」

「さて、どうしようかな」

少佐は楽しげに笑いながら、押収した銃を点検している。
それから彼はこう言った。

「お前、本当は何の猟師なんだ？ 鹿撃ちにしちや偽装が稚拙だ。
鳥撃ちか？」

「聞いてどうする」

「単純に聞きたいからだ。俺は猟師じゃないが、貴族様の私有林で
鳥撃ちをよくやったよ。もちろん密猟だ」

ヴァスは驚いて問い返す。

「あんた……貴族じゃないのか？」

「平民さ。少佐になったのはお偉方の都合だ」

「まさか、あんたが『死神クロムベルツ』か!？」

すると帝国の少佐はうなずいた。

「そう呼ばれることもある。嬉しくはないがな。正しくはユイナー・
クロムベルツ参謀少佐だ。元は路上育ちの平民さ。で、お前は何撃
ちの猟師だ？」

ヴァスはしばらく無言だったが、やがて口を開いた。

「俺は罾猟が本職でな、銃は撃たん。くくり罾で狐を捕ってたよ。
毛皮が高く売れるのさ。あいつらは鶏小屋を荒らすから農家も喜ぶ」
「なるほど」

少佐は他の獵兵たちを見回した。

「お前たちは？」

武装解除させられていた獵兵たちは互いに顔を見合わせるが、やがて渋々といった感じで口を開く。

「あんと同じ鳥撃ちだよ。こんな口径のデカイ銃は使わん」

「熊狩りをやってた。勢子だけだな」

「俺なんか砂金掘りさ。溪流釣りのふりしてよ」

「鉾山技師だよ。獵師だったのは俺の親父さ」

ヴァスロ隊は銃の扱いが得意ではないが、その代わりに野外活動に長けた偵察隊だ。前職を見れば一目瞭然だった。

少佐は納得したようにうなずいている。

「そういうことか。どいつもこいつも興味深い履歴をしてるな。調書を取るからいろいろ聞かせてもらおう。妙な真似はするなよ？」
楽しそうな少佐の様子に、獵兵たちは困惑の表情を隠せなかった。

* * *

「ヴァスロたち遅えな……」

老人がつぶやいたとき、ようやく野営地にヴァスロ隊が戻ってきた。

「すみません、団長。ヤツらの捕虜になってました」

「捕虜に？ 逃げてきたのか？」

するとヴァスロが困惑したように答える。

「いや、それが解放されちゃって……」

「何だつて？ おい、尾行されてないだろうな？」

「それは大丈夫です。途中まで向こうの獵兵っぽいのがうるうるしてましたが、こっちが武装してるせいか追ってきませんでした」

「んん？」

老人は妙な顔をする。

「そっぴいやお前ら、銃を持ったままだな。没収されなかったのか」「弾薬は一発分だけ残して全部没収されたんですが、銃は返してもらいました。無いと道中が危険だろうって」

「おいおい、捕虜から武器を取り上げねえのかよ」

老人は呆れてみせたが、すぐに溜息をつく。

「そいつ、銃身を念入りに点検してただろ？」

「え？ あ、はい。全部確認してました」

老人は腕組みする。

「『ねじれ筒』じゃねえ銃なんか分捕つても仕方ねえってことだな。やはり相当数を配備してやがるのか。それにしても」

老人はヴァスロ隊の面々を見回した。

「お前ら、すっかり山男の顔に戻っちゃってるな。獵兵の顔じゃねえ。何があった？」

「いえそれが、尋問で昔のことをいろいろ聞かれました」

「なるほどな。あいつらしい」

苦笑した老人はヴァスロの肩を叩く。

「無事に戻ってこれて何よりだ。バロフ隊と交代して輜重を担当しろ」

「いいんですか？」

「お前らは面が割れてる。次に見つかれば命はねえ。それに今の前は兵隊魂が抜けちまつてる。死神に抜き取られたな」

「すみません……」

「バカ野郎、謝る必要があるかよ。全員無事に戻ってきたんだ。それで十分さ」

老人はそう言って笑い、それから表情を引き締めた。

「ところで、爆破できそうな場所はあったか？」

「はい、団長。山頂付近に手頃な場所を見つけました」

「よくやった。後は任せとけ」

第79話「銀嶺の参謀」

【第79話】

俺たちは敵の追撃を警戒したが、あれっきり襲撃はぴたりと止んだ。

緒戦で敵の兵力を大きく削いで、計画変更を余儀なくさせた……のかな？ ちよつと自信がない。

「尋問では有益な自白は何も引き出せませんでした。彼らの様子や行動からある程度の推測は可能です」

俺はアルツァー准将に説明しつつ、貴重な白湯を飲む。

空気が乾燥しているせいで喉がガラガラだ。しゃべるのも叫ぶのも仕事のうちだから喉のケアをしておかないと。

「彼らはミルドール地方のシュワイデル人、それと国境地帯のブルージユ人のようです。まあ彼ら自身にとっては大した違いはないんでしょうが」

すると准将はビスケットにジャムを塗りながら苦笑する。小休止中のカロリー補給は軍務のうちだ。作戦行動中はまともに食事が摂れない。

「猟師は山ごとに社会を形成すると聞いたことがあるからな。山を国境にしたがる貴族とは価値観が違う」

「仰る通りです。比較的狭い地域の住人で構成されていますので、

展開している部隊は小規模でしょう。事実、敵の動きを見た限りでは一個小隊程度のようにです」

猟師出身のライラが率いる分隊が危険な偵察任務を引き受けられていている。敵は追撃を断念した訳ではないが、攻撃は中断したままだ。

「ライフル式マスケット銃の配備率は高くないようですし、一個分隊ほど倒しましたので敵の脅威度はやや低くなりました」

「やや低く、か」

「ええ。そんなに低くはなっていません。相手は俺の元相棒です」
「お前の『おじいちゃん』か。彼の本名と軍歴は不明なのだな？」

准将の問いに俺は頭を掻く。

「はい。戦列歩兵だったのはたぶん間違いないと思うんですが、それすら保証の限りではありません。なんせホラ吹き爺さんですって」
「楽しそうだな。お前のそんな表情が見られて嬉しいぞ」

山の中を逃避行してるのによくそんな台詞が出てくるな、この人。心臓が鋼でできてるんじゃないか。

俺は頬が熱くなってくるのを感じつつ、冷静を装って咳払いをする。

「もうすぐ国境を越えますが、あの爺さんの性格ならエオベニア領内までは追ってこないでしょう。ただし……」

「その前に決着をつけに来るのだろうか？　そうでなければとつくに撤退しているはずだ」

「その通りです」

俺は地図を広げた。

「追撃中にこちらの負傷者を増やして行軍不能にし、閣下の投降を促すという敵の作戦は不可能になりました。しかし行軍不能にするなら方法は他にもあります」

俺は地図の一点を示す。

「山頂付近に崖沿いの道があります。巡礼者たちが『肩擦り崖』と呼ぶ難所で、荷馬一頭が通るのがやっとの狭い道です。ここが崩落すると我々の進路は完全に封鎖されます」

「そこを爆破するつもりか？　言うほど簡単ではないぞ」

「尋問した獵兵の中に、元鉱山技師だという不審な者がいました。仕事の内容になると急に口を閉ざすんです。誘導尋問で探ってみたところ、どうも石切り場で爆薬を扱っていたようでした」

「では可能性はあるか。だがそれなら捕虜たちを始末すべきだったのではないか？」

「その場合、あの爺さんは別の策を考えるでしょう。厄介な爺さんですから何を思いつくかわかりません。それよりはこの策を温存させた方が楽です」

「なるほど。敵の指し手をひとつに絞らせる訳か」

察しのいい上官で助かる。

「そういうことです。敵が『肩擦り崖』の封鎖に力を注ぐのであれば、道中の戦闘は減るでしょう。我が軍の被害も抑えられます」
「優しい参謀殿だ。いいぞ、私も同意見だ」

准将は微笑むと優雅に足を組んだ。

「それで、お優しい参謀殿は私にも優しくしてくれらるんだろうな？」
「もちろんです。閣下を危険には曝しませんし、敵の手にも渡しません」

俺は自信と誇りを持って断言してみせたが、なぜか准将はふくれっ面をした。

「続けてくれ」

「え？ はい……。ええと、敵の作戦は崖の上を崩落させて道を塞ぐか、崖の下を崩落させて道そのものをなくしてしまうかの二択になるんですが、可能性が高いのは前者ですね」

「崖ごと崩すのはやはり相当な手間か？」

「はい。限られた人員と時間で確実に実行できるのは前者です。後者は準備と実行の両面で困難が伴います」

なんせ電気着火とかできない時代だからな。遠隔起爆が可能なのはせいぜい導火線だが、信頼性が低い。積雪と強風が火を消してしまっただろう。

「この時期、警戒すべきは岩ではなく雪の方でしょう。尾根筋に積雪があり、表層雪崩が起きる可能性があります。実際に数年前に雪崩が起きて、通過中の隊商が被害を受けたそうです」

「よく調べているな……」

それが仕事だからな。周辺の地理については平和な時期に調べ上げておいた。

アルツァー准将は感心したように腕組みする。

「しかしお前は尋問から雪崩のことまで何にでも詳しいな。それも前世の知識か？」

「知識は前世で仕入れましたが、実体験は今世の方が豊富ですよ。前世は山歩きなんかしたこともありませんでしたから」

俺は苦笑する。

准将はそんな俺の顔をぼんやり見ていたが、慌てて表情を引き締めた。

「そ、それで敵の出方は？」

「岩を爆破するには掘削して何力所も孔を開け、そこに爆薬を仕掛ける必要があります。しかし雪なら棒状の爆薬を差し込むだけで済みます。ただし我々の人数なら復旧が可能ですので、事前に爆破しても決定打にはなりません」

俺の言葉に准将は素早く反応した。

「では我々の通過中に雪崩を起こし、隊列を分断する気か」

「おそらくは。閣下は皆を安心させるためにいつも隊列の後方におられますので、通過中に前半分を切り離してしまつつもりでしょう」

准将はいつも最後尾に目が届く距離にいるので、隊列が延びきつた場所ではかなり後ろの方になる。危険だから賛成できないんだが、今回はそれを逆手に取って敵を罠に掛けようと思つ。

准将はじつと考え込む。

「では私が囿になるつ。この地点を通過する際、私は最後尾に回る」
待つて。ちよつと待つて。参謀の話聞いて。

俺はどうやってこのハンサムすぎる美女を口説くか、頭をフル回転し始めた。

* * *

【白熱の銀嶺】

雪に覆われた山頂付近の尾根で、十人余りの男たちが作業をしていた。

「急げ、敵が近いぞ」

「わかつてる。だが作業手順は抜かせんのだ」

「おい、そこを踏むな。崩れるかもしれん。今はまだ雪崩を起こす訳にゃいかねえんだ」

男たちは雪に小さな孔を開け、そこに油紙の筒を差し込んでいく。石切場で使う爆薬だ。爆薬の楔を何発も打ち込むことで岩を切断する。

今回切断するのは岩ではなく雪の塊だった。

「団長、こんなので本当に雪崩が起きるんですか？」

「冬の終わりに起きる雪崩ってのはな、新雪の塊が凍った根雪の上を滑り落ちて起きるのさ。一応、条件はそろってる」

老将はそう言って腕組みした。

「とはいえ、この程度の積雪じゃ雪崩にやらねえ。そこで新雪の塊を切り出して、強引に雪崩を起こすって訳だ。爆薬はしつかり奥まで挿せよ」

老将は望遠鏡を取り出し、遙か下の山道を覗き込んだ。

「敵が通過を始めたな。準備はできたか？」

「おおかた終わりました。現時点でも爆破は可能です」

灰色の老将に報告したのは分隊長のバロフだ。彼はブルージュエ兵隊の出身で、実は猟兵ではない。

「よし、上出来だ。やっぱり本職は早えな」

老将は部下を褒め、不敵に微笑む。

「さてと、仕上げの時間だ。お姫様はいつも通り隊列の最後尾にいる」

「怖がりのお姫様ですか。好都合ですね」

しかし老将は望遠鏡を覗きながら首を横に振る。

「いやあ、ありゃ部下が全員渡り終えるまで見守るつもりだろう」

おっと、あの坊やも隣にいるな。説得してるようだ。はは、相変わらぬの苦労性か」

苦笑した後、老将はふとつぶやく。

「だが、あのお姫様は本物かな？」

「どういう意味です？」

「この状況は俺たちに都合が良すぎる。策を読まれてるかもしれん」

バロフ分隊長が驚く。

「まさか！？ 向こうには工兵も山岳猟兵もいないんですよ？ 爆破で雪崩を起こすなんて奇策、読めるはずが……」

だが老将は首を横に振った。

「あの坊やは利口な上に勘が鋭いからな。生まれて初めて見た物でも、即座に本質を言い当てる。恐ろしいぐらいさ。本物の准将は先行してるかもしねえな」

バロフ分隊長はうるたえた様子だ。

「どうします？ もう爆破しますか？」

「バカ言え、下手に雪崩に巻き込んで殺しちゃったら意味がねえだろ。それっぽいのはいないか？」

「と言われても、そこらじゅう女ばかりで……」

バロフの言葉に老将は頭を掻いた。

「やれやれ、こりゃ心配するだけ無駄だな。あの将校をアルツァー」

准将だと考えることにしよう。隊列の後半が渡り始めたら爆破して孤立させる」

「いいんですか？」

「最後尾に罠を置いたのなら中央に本物を置いたりはいしねえ。雪崩に巻き込まれる可能性が一番高い。俺なら危険を覚悟で先頭に置く」
老将がそう言ったとき、銃声が轟いた。

とつさに全員が伏せる。工兵の一人が叫ぶ。

「敵です！」

「わかってる、応戦しろ！ チツ、やっぱり読んでやがったか」

老将がつぶやいたとき、聞き覚えのある声がした。

「その通りさ、爺さん！」

「何だと!？」

慌てて顔を上げると、山頂近くの崖の上からユイナー少佐が銃を構えていた。

ほぼ垂直の崖なのでお互いに接近戦は不可能だ。老将はとつさに岩陰に隠れつつ、大声で怒鳴り返した。

「なんでお前がここにいる!？」

「先に渡って反対側から登ってきたからな！ 険しくて苦労したよ
！」

「てことは何だ!？ 下にいるのは影武者か!？」

「この旅団にもう一人、男性将校がいるのを知らなかったのか？
あれは俺の同僚だよ！俺の軍服を着てるけどな！」

銃声は何発も聞こえてくる。向こうは崖の上にいるのではつきり
とは見えないが、どうやらそれなりの手勢を率いてきたらしい。数
の上では互角のようだ。

「クソッ……」

老将は呻いた。

「じゃああの准将閣下も影武者だな！？本物はどこにいる！？」
「教える訳ないだろ！耄碌したんなら引退して子犬でも抱いてな
！」

「相変わらず可愛くねえな、お前は！」

怒鳴り返した後、老将は部下に命じる。

「おい、撤退だ！」

「準備できたのに爆破しないんですか！？」

「してどうするんだよ、雪崩で封鎖しちまったら追撃不能になるだ
ろうが。こんな戦で命を無駄にするな。退け！」

工兵たちは稜線に隠れ、そのまま後方へと退いていった。

老将もそれに続いたが、ちらりと背後を振り返った。崖の上から
ユイナー少佐が女子歩兵たちに何か指示している。

「まったく、立派になりやがって……」

すっかり青年になった元少年に軽く敬礼すると、老将は銀嶺の彼
方に消えた。

* * *

「行っただか」

俺は額の汗を拭い、ほっと一息ついた。大勝負だったが、どうやら賭けに勝ったようだ。

いや、油断は禁物だ。

「全軍の通過完了まで監視を続けるぞ。ただしこれ以上の射撃は極力控える。発砲音で雪崩が起きると困る」

「了解！」

ライラたち選抜狙撃手がライフル式マスケット銃を構え、油断なく周囲を警戒している。決して一流とは言えないが、今の俺に動かせる最高の射手たちだ。

あ、そうだ。忘れてた。

「准将閣下とロズ中尉に『もう渡っても大丈夫だ』と報告してくれ。あと待機中の砲兵たちにも連絡を頼む」

「はい、参謀殿」

実はアルツァー准将はまだ通過していない。ロズ中尉と一緒にいるのは本物だ。准将の影武者なんか最初からいない。

万が一にも准将が雪崩に巻き込まれないように俺が考えたのが、

「影武者に見せかけてやつぱり本物」作戦だった。

そしてあの爺さんにそれを信じ込ませるために、俺がわざわざこんな山のとっぺんまで登ってきた、という訳だ。

あの爺さんの性格を考えると、最前線で爆破指揮に出てくるだろうからな。

俺の顔を見て「下にいるユイナーは影武者だ」と気づいた爺さんは、アルツァー准将の方まで影武者だと思い込んだ。

准将が通過しているのならもう爆破する理由はない。むしろ追撃不能になるので爆破は控えるだろう。

もつとも理屈の上ではそうなんだが、戦場では理屈に合わないことがしょっちゅう起きるので自信はなかった。爺さんが耄碌してなくて助かった。

「それにしてもここ寒いな」

するとライラ下士補がフツと笑った。

「くつついて暖まりますか？」

「遠慮しておく」

冗談言うようになったんだ、この子。

* * *

【再会を誓って】

老将は工兵たちと共に後方に退いていたが、道中でふと立ち止まった。

「いけねえ、すっかり騙されちゃったぜ」

「どうしたんです、団長？」

傍らのバロフ分隊長が不思議そうにしたので、老将は苦笑いする。「すまん、お前の言ってたことが正しかった。さっきのは爆破が『正解』だ」

「えっ!? でも准将が通過した後で爆破してもしようがないでしょっ?」

「いや、ユイナーの坊やがわざわざ俺に顔を見せに来た理由を考えててな。坊やの影武者と一緒にいた准将、ありゃたぶん影武者じゃねえ」

「マジですか!? どうします、戻りますか?」

「もう遅い」

老将がそう言ったとき、轟音が山嶺にこだました。

「雪崩です、団長! あいつら自分で爆破しました!」

「砲兵を使ったな。これじゃ追撃できねえ。俺たちの人数じゃ復旧に時間がかかりすぎる。かといって街道に布陣した正規軍に今から連絡しても間に合わん。やれやれ、あの大隊長に合わせる顔がねえな」

老将は大仰に嘆息し、それから皆を見回した。

「まあいい。俺たちが依頼されたのは、あいつらをミルドール家やジヒトベルグ家に行かせないことだ。ここまで来れば契約は果たせる。准将を捕虜にすれば報酬は倍額だったんだが、あんまり欲張ってもしようがねえか」

老将はあごひげを撫で、ニヤリと笑う。

「お前たちもいい働きぶりだった。おかげで次の戦ができるぞ」
「次もありますか？」

なぜか戦いを熱望するような部下たちに老将は楽しげに答えた。

「もちろんだとも。あの坊やがこのつまらん戦争を面白くしてくれ
る。さあ下山だ」

第80話「薬指の王」

【第80話】

「本職の工兵の仕事は丁寧だな」

俺は急斜面を滑り落ちていく白い奔流を見下ろしつつ、感心しながら腕組みした。やはりあの爺さん、いつも良い仕事師を集めてくる。人を見る目は確かだ。

おそらく他の山岳猟兵たちも選り抜きだったんだろう。まともに戦わなくて正解だった。

「参謀殿、准将閣下がお呼びです」

ここまで登ってきた伝令の子がハアハア言いながら敬礼してきたので、俺も答礼で返す。

「すぐ行く。わざわざすまないな」

「だ、大丈夫です。すぐ呼んでこいと閣下が……それはもう……」

息を切らしながら彼女が言うので、俺は苦笑する。

「少し休むといい。みんなと一緒に降りてきてくれ」

俺が百メートルほど下って山道に戻ると、アルツァー准将が待っていた。

「無事で何よりだ。上からの追撃はなさそうか？」

「そうですね。途中に断崖があるので、山頂側からの迂回は不可能です。追撃はもうないと思っていいでしょう」

前世の登山家なら装備と技術で攻略してしまうかもしれないが、こちらの世界の登山用具はどれも素人の手製だ。それに猟兵たちは重い銃と弾薬を携行している。

ライラたち山育ちの面々に聞いたところ、全員から「無理です。死にます」と簡潔なお返事を頂いたので、それを信じることにする。

「さて、ここからはエオベニア領にいったん抜けて、そこからまた帝国領に戻ります。戻ったところで補給を受けられるよう、以前から第四師団とは連携していますので。……大丈夫ですよね？」

「そこで心配するな。私を誰だと思っている」
第四師団を擁するメディレン家の一員。現当主の叔母上だ。

准将は馬にまたがるとバツとマントを払いのけ、一同に号令をかけた。

「諸君の働きのおかげで、一兵も失うことなく窮地を脱した！ だがまだ目的地に着いた訳ではない！ ベッドで寝られる生活を取り戻すために、今しばらく歩みを続ける！」

みんな准将のことを慕っているの、表情がキリツと引き締まる。いいぞ、さすがは俺の准将閣下だ。

准将は満足げに兵士たちを見回した後、俺を見てふと怪訝な顔をする。

「なんでそんなに嬉しそうなんだ？」

「嬉しそうですか？」

「娘の成長を見守る父親みたいな顔をしているぞ。そういう目で見

るな」

そんなこと言われても……。

* * *

こうして俺たちはエオベニア領にちよつとだけ失礼して、翌日には無事に帝国領に入った。エオベニア領でも多少のトラブルはあったが、ここからはもう敵襲を警戒する必要もない。

辺境の山村で補給を受けた後は街道をのんびり行軍し、俺たちは無事にメディレン領の城塞都市パツジエに到着することができた。

そして今、俺は再び人生最大の正念場を迎えていた。

「貴官がクロムベルツ少佐か。我が叔母をよく支えてくれたそうだな」

パツジエ要塞の会議室で俺を見ているのは、五王家の「薬指」メディレン家の当主だ。

四十代半ばだが宝飾品や礼服を自然に着こなしており、ジヒトベルグ公やミルドール公弟と比べるとオシャレだ。

さぞかし海上交易で潤っているのだろう。武人というよりは敏腕経営者といった印象で、物腰は穏やかだ。

しかし不思議な威圧感がある。さすがは五王家の当主というべきか。

「失礼、先に名乗らねばな。私がメディレン家当主、ハーフェン・シャハー・モンツォ・ユン・ポルトリーテ・アウグレン・ゼッツァライヒ・メディレンだ。……いや待て、何か抜けているな」

威圧感が一瞬で消え、その辺にいそくなおっさんになった。親しみやすいぞ。

「まあよいか。このような長い名は貴官には滑稽であろう。『薬指』のハーフェンとでも呼んでくれ」

「お心遣い感謝いたします。それと正式な名乗りを頂いたのは生まれて初めてです。大変光栄です」

貴族は偉くなればなるほど名前が長くなる。家系だの地位だのを示すのに必要だからだ。

もちろん長すぎて不便なので、正式な名乗りは家督継承などの儀式でしかやらない。

逆に言えば、この親しみやすいおっさんは俺との面会に儀式と同等の格式を示してくれたことになる。

だから礼を言っておく。

するとメディレン公はフツと微笑んだ。

「やはり機微を解するか。さすがは叔母上の見込んだ男ですな」

メディレン公の隣に座っているアルツァー准将が渋い顔をする。

「『叔母上』はやめていただきたいのですが、ハーフェン殿？」

「良いではありませんか。うちの子たちも『大叔母様』と呼んでおります」

「シユライト殿は私よりも年上ですし、マリエ殿やメルク殿も私とそう変わりません」

家族ぐるみで仲が良いらしい。ほっこりしてきた。

しかしさっきの名乗り、さりげなく俺を試していたのか。こういうところは非常に貴族的だな。まあでも褒められたので悪い気はない。

年下の叔母とのやり取りの後、メディレン公はこちらに向き直った。

「貴官の忠誠と能力はよく知っている。少なくとも五王家に知らぬ者はいないだろう」

そんなに。

「敵地から無事に叔母上を連れ帰ったことで、貴官には借りができた。普通ならミルドール家に頼んで身柄を引き渡してもらうしかないところを、旅団ごと堂々の凱旋だからな。まったく大したものだ」
そう言われると照れくさい。

754

少し気が緩んだ俺だったが、メディレン公はスツと目を細める。

「それも転生者ゆえ、かな？」

おおっと……。

フィルニア教安息派にとって、生まれ変わりは信仰の否定だ。生まれ変わりを認めているのは転生派で、ここがどうしても妥協できないらしくて対立している。

公の場で転生者だと名乗れば異端審問直行だろうが、これは非公の会見だ。

それに俺が転生者だと知っているのは、アルツァー准将ただ一人だ。彼女がメディレン公に教えたのだらう。

准将が俺を陥れるようなことはしないから、素直に認めてしまつて大丈夫だ。

「そうです」

その瞬間、メディレン公の表情が変わった。

「ほう……」。転生者と認めるか」

「准将閣下からお聞きになったのでしよう。ならばいちいち隠し立てする必要はありません。時間の無駄です」

そう答えるとメディレン公が苦笑する。

「その通りだが、即答する判断力と度胸が凄まじいな。筋金入りの強者だ。貴官ほどの男を小隊長にしていた第五師団は見る目がない」

それからメディレン公はアルツァー准将を振り返る。

「この者、恐ろしいほどに有能ですな。転生するだけで人間の力はこれほどまでに高まるものでしょうか？」

「この男の場合、転生する前から有能だったと思いますよ。本人は決して認めませんが」

変な誤解が発生しているので訂正しておこう。

「前世では平民の子でも十年以上、ほぼ無償で学業に専念できます。その違いでしょう」

「羨ましい世界だ。だがそんなに賢い平民たちを統べるのは大変そうだな。私には自信がない」

メディレン公はまた苦笑した。

「いいだろう。貴官の器量と前世の知識、紛れもなく本物だ。旅団ごと第四師団に来るがいい。旅団に相応しい規模の兵を与える。参謀少佐に相応しい待遇もな」

受けちゃっていいのかな。

ちらりとアルツァー准将を見ると、彼女は少し呆れていた。

「ユイナー、なぜそこで躊躇う。さつさと承諾しろ。転生者だと認めることよりも重大な決断か？」

「小官にとつてはそうです。閣下のお側を離れたくありません」
すると准将の顔が真っ赤になる。

「心配しなくても私がお前を手放す訳がないだろう。お前を師団本部になどやるものか。何を言い出すかと思えばまったく馬鹿馬鹿しい」

めちやくちや早口だな。

まあいいや、准将やみんなと一緒にならどこでも行く。

「准将閣下にお仕えすることが小官の望みであります。それさえ叶えられるのでしたら、いかようにでもお使いください」

「肝の据わった男だな。なるほど、ジヒトベルグの若君が惚れ込む訳だ。よかろう。では第四師団に転属し、メディレン家を支えてくれ」

「はっ！」

メディレン家は准将の実家だからな。できる限り力になろう。

* * *

俺たちはメディレン家の庇護下に置かれることになったが、旅装を解いてパツジエで休息している間に妙な雲行きになってきた。

皇帝の使者が来たのだ。

それも俺のところだ。

「皇帝陛下から直々の招聘です。それも近衛師団への転属ではなく、帝室侍従武官です。国家規模の戦略について皇帝陛下に助言する立場ですぞ。御存知でしょうが待遇は將軍と同格です」

使者を務める貴族階級の紋章官は「どうだ嬉しいだろう」と言わんばかりの表情で俺を見ていた。

確かに嬉しいし、昔の俺なら喜んで拝命していただろう。なんせ侍従武官は兵を率いて戦場に行く必要がない。

皇帝に直接会って物を言う立場なので身分も相応に高くなり、儀礼上は將軍たちと同格の扱いを受ける。

平民としては最高の地位だろう。

だから俺は紋章官に丁重に返事した。

「大変光栄なことです。しかし小官は第四師団への転属が内定しております。お引き受けしかねます」

「第四師団……？」

紋章官が首を傾げる。

「皇帝陛下は貴官を高く評価しておいでです。それを無下にして第四師団に行かれるというのですかな？」

「小官はそのような器ではありません。どうか御容赦を」

丁重かつ断固としてお断りさせていただく。俺はアルツァー准将と一緒に仕事がしたいんだ。他国への無謀な侵攻なんてクソみたいな仕事ではなく、もう少しマシな仕事を。

紋章官は渋い表情で俺をじっと見つめる。

「これは勅命です。勅命に従えぬのなら、本当の辞退理由をお伺いせねばなりませんまい」

俺は軽く笑う。

「お答えすれば不敬罪に問われましょう」
「ますます渋い表情になる紋章官。」

彼とてバカではない。帝室の使者を任される程度には信任されている人物だ。

俺が皇帝に対して畏敬の念を持っておらず、帝室侍従武官という役職に魅力を感じていないのはとっくに理解している。

紋章官はしばらく黙っていたが、最後に大きく溜息をついた。

「えー……では建前でよろしい。差し障りのない理由を頂戴したく承知しました。アルツァー准将に恩義を感じており、この難局を切り抜けるまでお支えせねば武人の誇りに傷が付きまます。まあ難局を切り抜ける頃には帝国は滅びているでしょうが」

紋章官は額に手を当てて嘆息する。

「最後のは聞いておりませんので、前半だけお伝えしておきます。余計なお世話でしょうが貴官は正直すぎる」

「同感です。准将閣下に見いだされるまですっと少尉のままだったのも、たぶんそういうことなのでしょう」

俺が笑うと紋章官も苦笑した。

「やれやれ、正直すぎて憎めない御仁だ。陛下が何と仰るかはわかりませんが、個人的に御武運をお祈りしております。帝国が滅びたときにはこちらで雇ってください」

「ありがとうございます。その旨、メディレン公にお伝えしておきます」

なんだこの会話。

だがこの様子からすると、帝室直属の紋章官ぐらいになると帝国滅亡の不安を感じているのだろう。外交官として多くの機密情報を握っているからだ。

やはり帝国は危ういか。だとしたら次の手を考えないとな。

俺は帰りかけている紋章官に声をかける。

「では今後のことを踏まえた上で、少しお願いがあるのですが」

「おや、なんなりと」

第81話「必至の皇帝」(地図あり)

【第81話】

* * *

【必至の皇帝】

「勅命を蹴つたと申すか」

シユワイデル帝国皇帝ペルデン三世は理解できないといった様子
でつぶやいた。

「ありえぬ。帝室侍従武官にしてやると確かに伝えたのであるうな
?」

紋章官は深々と頭を垂れる。

「間違いなく伝えております。かの者、アルツァー准将にひとかた
ならぬ恩義を感じており、その恩義に報いるまでは離れられぬと申
しております」

「うむ、忠義の者よな。そう申されては無理強いもしづらい」
ペルデン三世は腕組みし、ソファに腰掛ける。

「しかし帝都ロツツメル近くまでブルーージュの軍勢が迫っておる
のだ。帝国軍人ならば馳せ参じるのが当然であろう?」

「ははっ、まことに恐れ多いことで」

何がどうとは言わないのが宮廷で長生きする秘訣だ。紋章官はよく心得ている。

一方、ペルデン三世は苛ついた様子で首を振っていた。

「ええい、もうよい。知恵を貸さぬ参謀には頼らぬ。近衛師団を帝都防衛に招集せよ」

「近衛師団の主力は国境地帯の警備に就いているはずですが……。まさか呼び戻すのをごさいますか？」

「そんなことはわかっておる。わかっておるが、その……うづむ、五王家にも援軍を要請せよ。リトレイユ家はどうした？」

「リトレイユ家と第五師団は、アガン軍の南下を食い止めるために臨戦態勢でございます。むしろ援軍を要請されているのはこちらです」

紋章官の言葉にペルデン三世は拳を振り回す。

「では、ではメディレン家だ。第四師団を呼べ」

「第四師団の主力は海軍でございますし、リトレイユ領を守るために出撃中です。陸軍の大半はアルツァー准将の第六特務旅団に編入されました」

「そうであったな……。ならば帝室を守る兵はどこにいる？」

< i 6 3 6 7 2 0 — 3 5 6 7 8 >

紋章官は頭を垂れたまま答えた。

「どこにもおりませぬ。後はもう傭兵や農民兵を徴募するしか……」

「それで勝てると思うのか？」

「それがしは紋章官ゆえ、お答えしかねます」

ペルデン三世は「ふーっ」と荒く息を吐くと、紋章官に告げた。

「もうよい、下がれ」

「ははっ」

恭しく一礼して紋章官が下がり、ペルデン三世は一人になる。

「どうすれば良いのだ……」

彼の机上には、近衛師団参謀本部からの具申書と門閥貴族たちからの陳情書が積み上げられていた。

参謀本部からは一時避難の具申。

「帝都は包囲される恐れがあり、帝都城壁は発達した火砲に対して脆弱であるため危険。帝都防衛は近衛師団に任せ、陛下は他家と連携を取りやすい東部で外交と内政を執り行つのが最善」という分析が添えられている。

一方、門閥貴族たちからは「我々を見捨てないでほしい。『帝冠は帝都に』が我が国の大原則であり、皇帝が帝都から離れれば我々は命を懸けて戦えない」という陳情。

帝都ロツツメルに拠点を構える豪商やフィルニア教ロツツメル教区大神官など、貴族以外からも同様の嘆願が届いている。

いずれも一理あり、ペルデン三世には判断がつかかねていた。

廷臣たちの間でも立場や考え方の違いから意見が分かれている。

「どうすれば良いのだ……」
決められない皇帝はソファにもたれかかり、やがてうとうとと居眠りをし始めた。

* * *

「軍人としての訓練を受けていない皇帝なんかいてもいなくても変わりませんので、帝都にいない方が楽ですね。身辺警護が面倒です」

俺はそう答えつつコーヒーを飲む。

「ただ政治的には皇帝の避難は大きな意味を持ちますし、軍の士気にも影響するでしょう。まあ大事なのは帝室の存続であって皇帝の命ではありませんから、陛下には帝都で死ぬ覚悟を決めてもらい、皇太子殿下を東部に避難させるのがリスク分散になると思いますよ」

763

「お前は皇帝の命が大事ではないのか」
アルツァー准将は呆れ顔で激甘コーヒーを飲み、それから苦笑した。

「だが面白い。もっと話を聞かせてくれ」

「もちろん皇帝陛下にも一人の人間として幸福を追求して頂きたいはあるのですが、逃げたいのなら譲位してからですね。皇帝が逃げたら士気が下がり、門閥領主たちが降伏してしまいます。この国では帝冠は動かせません」

俺たちの机の上にはシュワイデル版将棋である「五王棋」の盤が置かれている。駒も配置されていた。

五王棋マニアのハンナが用意してくれた盤面だ。よく知らないけど歴史的な対局の再現らしい。かっこいいな。よく知らないけど。

「この盤面と同じです。『皇帝』の駒がここから一歩でも動く、護衛する『近衛』や『門』との連携が断たれて自陣が崩壊します。逃亡が破滅につながるんですよ」

俺はコーヒーを飲み、それから溜息をつく。

「俺たちが逃避行をしている間、帝都では政治的な動きが何もありませんでした。信じられません。あの皇帝はアホです」

「おい、不敬参謀」

准将が笑いながら俺の額とツンとつつく。大変だ、鉄拳制裁されてしまった。

もっとしてくれ。

俺は笑いながら続ける。

「ブルージユ公が新しい国境に沿って軍を展開したとき、すぐに皇太子や重臣を東部に派遣して統治システムを構築させるべきでした。非常時ですから簡単な指揮系統で構いません。東部にあることが重要です」

「ふむ」

「その後で皇太子に譲位し、『帝冠は帝都に』の原則に従って新帝を帝都に呼び戻してもいいんです。自分は先帝として東部に移り、皇太子が構築したシステムを使って政治を続ければいい。誰からも文句は出ません。ただ皇太子殿下が気の毒ですから、個人的には父親が在位して帝都に残れと思いますね」

「確かに合理的な案だ。時間はかかるが、その猶予はあった。しかし今はもうない……と。そういうことだな？」

「その通りです。こうすれば帝都が陥落しても東部の政治機能で戦い続けられますから、ブルージユ公も無理はせずに外交決着を図ったかもしれません。もう手遅れですが」

策なら他にもあった。ミルドール家などの外交ルートを通じて交渉を始めても良かったし、同じ安息派のエオベニア王国に支援を求めるとも考えた。

だが誰も何も提案しなかった。皇帝に決断力も指導力もなく、彼がすぐに責任を発案者に押しつけるからだ。責任を取らない最高責任者なんか役に立たない。

「正直、あの爺さんにしてやられましたよ。山岳地帯で逃げ回ってる間にこんなに状況が悪化してるとは思いませんでした」

あのと時帝都方面に脱出できていたら、皇帝に拝謁して今の案を具申できていた。もちろん俺たちはそのまま東に逃げるが、策ならいくらかでも考えてやる。

「俺は参謀としては三流です。目の前の戦いにはどうにか勝てます

が、いつも知らないところで負けています」「それは將軍たちの仕事だからな。少佐のお前が悩むことではない。気にするな」

直屬上官が気にするなと言っているので、俺は気にするのをやめる。

『皇帝』の駒を指でつつきながら俺は言った。

「この盤面はもはやひっくり返せません。あと数手で詰みます」

准将はフツと笑う。

「では次の対局を用意せねばな。駒と違い、私たちの人生は続く」

「そうです。俺たちは人生を続けねばなりません」

「そうだな」

准将が力強くうなずいたので、俺も同じぐらい力強くうなずき返す。

「旅団の皆の人生のために策を尽くしましょう」

「……そうだな」

急に渋い顔になった准将が、ズズツと音を立ててコーヒーを飲んだ。

なんなのもう。

第82話「帝冠は帝都に」

【第82話】

* * *

【帝冠は帝都に】

今日も皇帝の元に報告が入る。

「陛下、ミルドール領と帝室直轄領の境界にてブルージュ軍の活動が活発になっております。参謀本部の分析では大規模な攻勢の準備中ではないかと」

「ミルドール公はそれを看過しておるのか。帝室直轄領は帝国の聖域であるぞ。なんと嘆かわしい」

側近たちは無言だ。

誰も「ミルドール公はブルージュ公と手を組んだんだから、看過どころか援助してるんじゃないですかね？」などとは言わない。

この皇帝はそういう類の助言を好まない。

「やはりミルドール公とジヒトベルグ公に親書を送り、翻意を促すしかあるまい。両名とも五王家の一員、本心では帝国への思慕の念があるう。両公が戻ればブルージュなど恐れるに足りぬ」

すると帝室侍従武官がやんわりと制した。彼は退役した老将軍だ。

「お言葉ですが陛下、それだけはおやめください。陛下のお言葉は両公の心に慈雨のごとく染み渡りましようが、もはや両公の意志ひとつでは旗幟を動かせぬのです」

「しかし彼らの意志なくしては帝国はあるべき姿を取り戻せぬ」

「それは……」

皇帝に直言できる侍従武官といえども、その先は言えなかった。

皇帝ペルデン三世が在位している限り、彼らが戻ってくることは決してない。

その代わりに侍従武官は奏上する。

「物事には手順がございます。まずは近衛師団がブルージュ軍を撃退できるよう、惜しめない助力をなさいませ」

「そうであったな。帝室の財産にて戦費を調達いたせ。兵糧や弾薬など不足のものがなにか、近衛師団本部に聞いて参れ。前線に送り届けるのだ」

「陛下の御深慮に感服いたしました。ただちに手配いたしましたよう。心なしかホツとした表情になり、侍従武官は恭しく一礼した。

数日後、次の報告が入る。

「帝室直轄領の要塞が攻撃を受けております。前線への輸送で兵が手薄になっている隙を狙われました」

「死守せよ。何としても守り抜くのだ。敗北は許されぬ」

厳かな、指示のようで指示ではない発言。

だが将校たちは何も言わない。この皇帝に戦争指揮能力があると

は誰も思っていないからだ。

さらに次の報告。

「要塞と兵糧弾薬を敵に奪取されました。防衛線を後方の要塞まで後退させます」

「ならぬ。すぐに奪い返せ」

「承知いたしました。最善を尽くします」

退出した将校が廊下で深い溜息をついていたことに、皇帝は気づかなかつた。

そして次の報告。

「帝室直轄領の門閥領主たちが救援を求めております。領地がブルージュ軍に脅かされているそうです」

「近衛師団はどうなっております？」

「ブルージュ軍は火砲を巧みに操り、我が軍は防戦一方にございます。割ける兵はございませぬ」

「ではそのように伝えよ」

このとき皇帝は、独立した砲兵科すら持たないブルージュ軍が巧みに火砲を操っている不自然さに気づかなかつた。

もし気づいていれば正しい選択肢を選べたかもしれない。

しかし歴史に「もし」はない。

また次の報告。

「帝室領を預かる門閥領主たちが次々にブルージュ側に寝返っている模様です」

「なんとという恩知らずだ。この戦が終わる次第、処罰を下さねばなるまい。それよりもブルージュ軍はまだ撃退できぬのか」
「前線では將軍たちが最善を尽くして奮闘しております」
「うむ、よい」

報告。

「陛下、ブルージュ軍は帝都ロツツメルまでわずか半日の距離に迫っております。もはやここは危険です。どうかお逃げください」

「それはできぬ。『帝冠は帝都に』が帝室の伝統である。早く敵を撃退せよ」

「御意……」

「無論、余も座視はせぬ。ミルドール公とジヒトベルグ公に親書を送ろう」

「前線に向かわれた侍従武官殿が、それだけはおやめくださいと重ねて申しておりますが……」

「捨てておけ。侍従武官が余を使うのではない。余が侍従武官を使うのだ。帝国は五王家が共に力を合わせるのが正しい姿である。余の説得があれば二人とも必ずや正道に立ち返るはずだ」

そして次。

「昨日から軍からの報告が途絶えておるな。戦況はどうなっておる」とすると侍従長が申し出る。

「帝都の将校たちの大半が欠員補充で前線に出払っております、なかなか報告が参りません。おそらくかなり苦戦しているのではないかと……」

「我が近衛師団は精強にして忠実な、帝国最強の師団ではないのか？」
「もちろんでございます。しかし敵がそれ以上に強ければ敗れます」
「侵略者に敗れるような我が近衛師団ではないはずだ。他家の援軍は来ぬか？」

「リトレイユ家はアガン軍との交戦中ですし、メディレン家は流血海で航路を守っております。どちらも援軍の余裕はございません」
「承知しておる。ミルドール家とジヒトベルグ家はどうなのだ？
翻意して戻ってはこぬか？」
「それは……」

そこに新たな「報告」が、足音高く駆け込んでくる。
「申し上げます！ 南西より帝都に接近する軍勢が確認されました！ 軍旗はジヒトベルグ家です！」
「おお、来たか！」

皇帝は立ち上がる。
「すぐに使者を送れ！ 余は貴公を待ち望んでおったとな！」
「は？ ……ははっ！」
すぐに使者が帝都を発つ。

このとき、皇帝の周囲には上級将校が一人も残っていないかった。
経験豊富な侍従武官たちも与力として前線の近衛師団に出向しており、帝都には近衛師団の尉官が連絡将校としてわずかに残されて

いるだけだった。帝室門閥の下流に属する彼らに発言力はほとんどない。

使者が戻ってくる。

「ジヒトベルグ公より返事を頂戴してきました。『我、ただ正義を行うのみ』とのことですよ！」

「そうか、うむ。正義を行うとな。では安泰だ」

軍事とは無縁の侍従長が、恐る恐る皇帝に問う。

「近衛師団や他家に救援を要請しますか？」

「必要あるまい。この帝冠ある限り、帝都は守られる」

翌日には帝都のすぐ近くにジヒトベルグ公の軍勢が現れた。かつては第二師団だった部隊だ。

「ようやく『人差し指』が帰参したか。これまでの離反は赦そう」
満揚げにうなずいた皇帝だったが、近衛師団の新兵少尉は青い顔をしている。

「陛下、何か変です。キオニス遠征によって壊滅的な損害を受けた第二師団に、あれほどの兵力があるとは思えません」

「それこそがジヒトベルグ公の誠意と能力の表れだ。そなたはまだ若いゆえ、そういった機微がわからぬのであるう」

皇帝は自分の命じたキオニス遠征の話題を意図的に避けた。

「それよりも城門を開けて軍勢を迎え入れよ」

「お待ちください、陛下！ 軍勢の動きが妙です！ 行軍隊形から包囲隊形に展開しています！」

少尉の言葉通り、ジヒトベルグ軍は帝都ロツツメルを半包囲する形で布陣を始めた。

皇帝も初歩的な軍学は修めており、その陣形の意味するところはすぐに理解する。

「なんとということだ！？ おのれジヒトベルグ！ 正義を行うという言葉は嘘だったのか！」

その場にいる全員が無言だ。

（ジヒトベルグ公は「正義を行う」としか言っていないんだよなあ）
（彼にとって陛下は親の仇も同然だからな。キオニス遠征で先代が死んだのは、陛下の命令が原因だ。親の仇討ちは正義だろ）
（あーあ、ハズレクジ引いた……）

侍従や将校たちが何となく顔を見合わせている間、皇帝は絶望の表情で天を仰いでいた。

「正義は！ 正義はいずこにあるのか！」

醒めた目でチラチラと目くばせする側近たち。

（少なくともここにはねえよ）

（ダメだこりゃ。ジヒトベルグ軍に投降するか……）

（そうだな。当代当主は穏和な人物らしいし、同じ安息派だから悪いようにはしないだろ）

彼らは一刻も早くこの場を立ち去りたくて、なんとか退出する理由を探している。

その間、暗黙のやり取りは続く。

(いや待て、包囲される前に逃げるのも手だぞ)

(そうだな。口頭で命令を受領したことにして、どさくさ紛れに逃げるか)

(逃げるとしたら東だな。リトレイユ領かメディレン領か)

(そんなもんメディレン領一択だろ？ あそこには「死神クロムベルツ」がいる)

(昇進して今は少佐だったよな。何とかしてくれそうだな)

やがて帝都を包囲するように大砲が並べられる。狙いは脆弱な城壁だ。近衛師団の参謀たちの意見書通りだった。

しかしその後の展開は、意見書通りにはならなかった。

最初の砲弾が城壁を叩き壊すよりも早く、帝都の城門が開いてしまったからだ。

皇帝の最初の命令がそのまま実行されてしまったのか。それとも内通者がいたのか。

誰が開いたのか。

誰も知らない。

*

*

第83話「復讐者」

【第83話】

こうして帝都ロツツメルはジヒトベルグ軍によって占領された。シュワイデル人同士による泥沼の市街戦を避けたい両軍の思惑が一致し、最低限の兵しか残されていなかった帝国軍は無血降伏する。

そしてジヒトベルグ公は与力のミルドール公弟と共に宮殿に入り、帝都の支配者となったことを公式に宣言した。

ミルドール公弟がジヒトベルグ公に問いかける。

「お疲れ様でした。ところで国境地帯の様子はどうですか？」

「ブルージュ軍と近衛師団が睨み合っているそうです。近衛師団の後方連絡線は我が軍が遮断していますので、近衛師団は補給も逃走もできません。停戦を命じる偽の勅書を送りました」

皇帝の命令書である勅書を偽造すれば死罪は免れないのだが、ジヒトベルグ公は平然としている。

ミルドール公弟は息子を見るようなまなざしで微笑んだ。

「良いお手並みです。その玉座に相応しい」

そのとき、ジヒトベルグ軍の将校がやってくる。

「御前、皇帝陛下をお連れしました」

「お通ししろ。丁重にな」

「ははっ」

すぐに皇帝ペルデン三世が連れてこられる。前後左右をジヒトベルグ軍の屈強な兵に囲まれ、その顔色は真っ青だ。

ジヒトベルグ公はさすがに気の毒になり、立ち上がって皇帝に声をかけた。

「陛下、お久しゅうございますな」

玉座の前に立つジヒトベルグ公を見たペルデン三世は、怒りで頬を赤くした。しかしその怒りは一瞬で消え去り、気の抜けたような声で応じる。

「ジヒトベルグよ……」

「無用の流血を避け、和睦に応じてくださったことに感謝します」
実際は勝手に城門を開かれて何もできずに捕虜になったのだが、ジヒトベルグ公は敢えて「和睦」という言葉を選んだ。見限ったとはいえ、帝国の支配者に対する配慮だ。

さすがにペルデン三世もそれがわからないほど暗愚ではない。深々と溜息をつき、うなだれる。

「そのような情けをかけるでない。余をどうするつもりだ。殺すのか」

「和睦ですぞ。このまま帝都にお住まいください。ただし宮殿より出ることは叶いませぬ」

待遇はともかく、実質的には捕虜だ。

「ジヒトベルグよ、これは大逆罪であるぞ。かような非道、フィルクニアの神がお許しにならぬ。無論、心ある者たちも許さぬだろう。領主たちとて受け入れはすまい」

「そうかもしれませんが、それはもはや陛下には関係のないことです。どうかお心安らかに日々をお過ごしください。後日、ブルージユ公に拝謁して頂きます。勝者への敬意をお忘れになりませぬよう。すっかり意気消沈していたペルデン三世だったが、この言葉にはカツと目を見開いた。

「ブルージユだと！？ 帝国を裏切った血筋ではないか！ 裏切り者の末裔に下げる頭は持ち合わせておらぬ！」
「ですが陛下は敗軍の将にあらせられます。それともまだ、戦い続けるおつもりですか？」

ジヒトベルグ公は剣を抜き放つと、陽光に輝く白刃をペルデン三世の足下に放った。

広間に硬く冷たい音が響き渡る。
「ならばそれをお取りください。陛下は帝国に並びなき誉れ高い騎士。戦意をお持ちならば、不束ながら私めが一騎討ちのお相手を仕ります」

ジヒトベルグ家の歴代当主は武芸に通じた強者揃いで知られる。キオニスキオニスの勇猛な遊牧民族たちと戦うには、当主自らの勇猛さが欠かせないからだ。

それを知っているペルデン三世は剣を拾おうとはしなかった。彼も古今の剣術を伝授された使い手ではあるが、年齢と修練の差を考えると勝ち目は乏しい。

「な、なんと無法な……」

怯えた様子の皇帝を見て、ジヒトベルグ公は明らかに失望した表情で軽く手を払った。

「もはや話すこともありませんまい。お連れしろ」

両脇を衛兵に支えられたペルデン三世は慌てて叫ぶ。

「ま、待つのだ！ 五王家は結束して外敵に立ち向かうのが帝国の正道ではなかったか？ 高祖たちのロツツメル誓いを忘れたか？ かような暴虐、我らの高祖たちが聞けば嘆き悲しもう！」
声は遠ざかり、やがて聞こえなくなった。

ミルドル公弟がサーベルの柄から手を放し、溜息をついてからジヒトベルグ公に声をかけた。

「無茶をなさる。本当に一騎討ちが始まったらどうしようかとヒヤヒヤしましたよ。そういうところは父君にそっくりだ」

冗談交じりの言葉にジヒトベルグ公は力なく微笑む。

「父の無念を晴らす正義の復讐だと思っても、やはり罪悪感が消せぬのです。五王家の伝統と帝国の歴史を考えれば、『正しい』のは陛下の方ですから」

「正しさだけで世の中が回れば誰も苦勞はしません。それに一騎討

ちで陛下を討ち奉ったところで、今さら正当性が得られる訳でもありませんまい」

ミルドール公弟はそう言って苦笑し、若き君主の肩に手を置いた。「気を強くお持ちなさい。帝国領を転生派から守るためには、安息派の庇護者たる我々が国を支えるしかないのです」

「篡奪者の言い分ですな」

「ええ、その通りです」

ミルドール公弟は平然とうなづく。

「我らの先祖も篡奪によって帝国を建設しました。気にする必要はありません」

「それぐらいの図太さは必要でしょうな。では気に病むのはやめましょう」

ジヒトベルグ公は微笑み、それから玉座を降りて床の剣を拾った。鍛え抜かれた業物を見つめつつ、ジヒトベルグ公はつぶやく。

「ここを死に場所を選ばなかったことを、いつか後悔なさらねば良いのだが」

* * *

それから数日間、皇帝ペルデン三世は宮殿の一室に幽閉されていた。

普段使っている広々とした私室ではなく、見知らぬ部屋だ。おそらくは来賓用の客室だろうが、ペルデン三世が訪れたことはない。

廊下にも窓の外にもジヒトベルグ家の兵が大勢いて、とてもでは

ないが抜け出せそうになかった。

ペルデン三世は苦悩の表情で立ち尽くす。

（ブルージュ公に屈服しては帝室の伝統と威信が……どうすればよいのだ……）

ブルージュ家はかつての『帝室と五王家』だった時代に、五王家の一員だった家門だ。当然、家格としては帝室よりも下とみなされている。

元は『五王家』だから由緒正しい王家のひとつなのだが、必要以上帝室を刺激しないように敢えて公国を名乗っている。

そのブルージュ公に皇帝が敗者として跪いたとあれば、周辺国は帝国の衰退をはっきりと意識するだろう。

実際にはとくに意識されているのだが、ペルデン三世の国際感覚はあまり鋭敏ではなかった。幼少期から帝国が旧領を回復し君臨する「正しい世界」を教えられてきた彼は、それ以外の世界を認められない。

その偉大な帝国の皇帝が捕虜になり、裏切り者の末裔に頭を垂れる日が来てしまう。

それはペルデン三世の思い描く「正しい世界」からは最も遠い光景だった。絶対に許容できない。

（かくなる上は自害してでも帝室の尊厳を守るしかあるまい）

結論は出ているのだが決心がつかず、豪華な内装の部屋をうろうろと歩き回る皇帝。

するとドアが解錠される微かな音が聞こえ、ノックもなく何者が室内に侵入してきた。

ジヒトベルグ軍の老將校だ。大尉の階級章をつけており、軍用のブリーフケースを持っていた。

「何者だ。無礼であろう」

恐怖心を押し隠して精一杯の威厳を見せつけると、老大尉は静かに一礼した。

「お静かに、陛下。クロムベルツ少佐の命で参上しました」

大尉の言葉には微かな平民訛りがあったが、皇帝は気にしなかった。この年齢で大尉なら平民將校でもおかしくはない。それにクロムベルツ少佐は平民出身だ。部下は平民ばかりだろう。辻褄は合う。

老大尉はブリーフケースからジヒトベルグ軍の制服を取り出す。歩兵のものだ。

「急いでこれにお着替えください。小官の部下に紛れて脱出していただきます」

「クロムベルツの策か？」

「はい。本日中にも陛下の身柄はブルージュ領に移送されてしまいます。詳しい話は道中で」

他国で虜囚になってしまえば皇帝としては終わったも同然だ。ペルデン三世はすぐにならず。

「忠勇なる者よ、今は貴官を信じるしかあるまい。すぐに脱出しよ」

「恐れ入ります。指輪なども全てお外してください。身元が割れます」
「うむ、道理であるな」

廊下には老大尉の部下らしい兵が数名おり、それに紛れて皇帝は宮殿を脱出する。

兵士のふりをするのは初めてだったが、軍人の所作の原点である貴族の礼儀作法を身に着けた皇帝にとっては簡単なことだった。教育だけは誰よりも受けている。

巡回に出る分隊に紛れて城門をくぐると、帝都の路地裏で再び着替えを要求される。

「ここからは軍服は逆に目立ちます。平民の衣服にお着替えを」

「う、うむ。捲土重来のためには仕方あるまい」

「今は御辛抱ください。馬車を御用意いたしておりますので」

老大尉たちも平民の薄汚れた服に着替える。

「ブルージュの侵略に怯えて帝都を脱出した平民が多数おりますので、その中に紛れます。検問などは小官が受け答えをしますので、陛下は体調が悪いふりをなさってください」

「承知した。貴官に任せよう」

夕暮れの雑踏の中から一台の馬車が近づいてきた。旅人を乗せる街道馬車だ。

「さ、今のうちに」

「さすがはクロムベルツよ。見事な手際だ」

馬車は帝都を出て、夜通し走り続けた。固い板の座席は不快だったが、すっかり疲れていた皇帝は座ったまま眠りこける。

やがて不意に馬車が停まった。

「着きましたぞ。お降りください、陛下」

「ん？」

夜明けの薄明かりの中、皇帝は馬車から降りる。

だがここは鬱蒼とした森の中だ。空は明るくなっていたが、森の中はまだ暗い。

「ここはどこか？」

「ここがどこになるかは、そりゃあんた次第さ」

老大尉は着剣した歩兵銃を持っていた。同乗の護衛たちも同様に銃を手にしている。

不穏な気配を感じ取り、ペルデン三世は身構えた。

「狼藉者め、余を殺すつもりか！」

「おいおい勘違いすんなよ。殺すつもりなら馬車の中で済ませてる」
老大尉は笑う。

「俺はユイナー・クロムベルツの相棒さ。そこは嘘じゃねえ。ただし『元』がつく。今はあるお偉いさんに雇われててな。最初はあるに毒を飲ませるように依頼された。苦痛もなく眠るように死ぬる薬なんだとさ」

銃を構えたまま、老大尉は楽しそうにそう言った。

「だが俺は殺し屋じゃねえ。戦う気のない人間を殺すのは流儀に反する。そこは雇い主にも承知させた。だからあんたを殺さずに生かしておいてやれるのさ。狼藉者どころか命の恩人だぜ？」

「殺さぬというのか……？」

「どのみち皇帝としてはもう終わりだからな。今のあんたは身元を証明するものを何も持ちじゃない。こんな場所ですれ違う人間に『我こそは皇帝なるぞ』なんて言っても信じちゃくれねえよ。皇帝の顔なんか誰も知らないんだからな。なんだったけな、『皇太子と物乞い』だったか……まあ、そういう物語があるんだとよ」

老大尉は苦笑しつつ、皇帝の足元に何かをドサリと放り投げた。

「そいつはあんたの兵隊たちが使ってる背囊だ。中には毛布と着替え、それに食糧と水が入ってる。弾薬もな。ほれ、こいつも持っていけ」

銃剣つきの歩兵銃がガシャリと転がされる。よく見ると火皿に火薬が入っていない。まだ撃てない状態だ。

「これだけありゃキオニスからでも帰ってこられるさ。あんたの兵隊が証明してる」

「なんと無礼な！ このような暴挙、神が許さぬぞ！」

「あんたが捕虜になるのを黙って見てた神様が？ そりゃ面白い冗談だ。ブルージュの宮廷道化師にしてもらえ」

老大尉は笑っていたが、目は全く笑っていなかった。

「第七次ブルージュ遠征を覚えてるか？ 皇太子時代のあんたが言い出した無謀な遠征だ。兵隊の間じゃ『雪だるま戦争』って呼ばれてるヤツさ。折り重なった死体が雪に埋もれて、そこらじゅうで雪だるまみたいになってやがった」

ペルデン三世にとっては苦い過去のひとつであり、帝国にとっても最後のブルージュ遠征となった戦いだ。この大敗によって、帝国旧領であるブルージュ地方の回復は完全に放棄された。

「そ、それが何だというのだ」

「俺はそのとき雪だるまになりそこねた敗残兵の一人でな。兵糧の手配すらせずに真冬の山奥へ進軍を命じたあんたなら、早春の森ぐらい軽いもんだろ」

「元兵士が最高司令官たる皇帝にこのような仕打ちをするのか！」

「そうとも、同じ目に遭わせてやる。『巖窟王』の復讐ってヤツさ。どこの誰だか知らないが、まったく粹な復讐を考えるヤツもいるもんだよ」

老大尉はそう言って馬車に乗り込むと、帽子を脱いで恭しく一礼した。

「見知らぬ森で平民の暮らしを楽しみな。すぐ近くにや廃れた山小屋もある。どうにでもなるさ。だが『山親父』にはそんな態度を取らない方がいいぜ」

「誰のことだ？」

皇帝の問いに答える者はおらず、馬車は猛スピードで走り去る。

たった一人で見知らぬ森に取り残された皇帝。

しばらく茫然とした後、気を取り直して銃に装弾する。銃を扱う動作は手慣れており、暗がりの中でも無駄がない。王侯の嗜みとして御料林での鹿撃ちや鳥撃ちは行っていた。野外活動にも多少の心得はある。

ただ単独行は初めての経験だ。

「無礼千万な下郎め。これしきで余を葬ったと侮るでないわ」

怒りと屈辱は大きかったが、それよりも今は生き延びることを考えなくてはいけない。皇帝は歩き出す。

すぐにボロボロの丸太小屋を見つけたが、彼はそれを無視した。

「あれこそが罠であろう。余は騙されぬぞ」

さらに森の中をうろつくと、大岩の下に手頃な穴を見つけた。中腰で入れる大きさで、中は乾燥していて快適そうだ。

「やはり神は正統なる皇帝を見放さぬわ。日が差せば方角がわかる。まっすぐ東に行けば良いのだ。余にはまだメディレン公とリトレイユ公がいる。クロムベルツの策略があれば巻き返すことも容易であるろう。見ておれ、復讐するのは余の方だ」

自分に言い聞かせるようにつぶやきながら、皇帝は横穴に入っていく。

ここが『山親父』の越冬用の巢穴だとは知らずに。

その後、ペルデン三世の姿を見た者はいない。

* * *

第84話「嵐の航海士」

【第84話】

その日、俺たちはメディレン宗家の本拠地であるポルトリーテ市を訪れていた。小高い丘のある帝国最大の港町だ。

准将も一緒だが、もちろん観光ではない。メディレン公ハーフェンに呼ばれている。

丘の上の城館に到着すると秘密の会議室に案内され、すぐにメディレン公ハーフェンが現れた。今日もオシヤレをバツチり決めて、スタイリッシュな出で立ちだ。

准将といい、ここの家系は顔立ちが整ってるよな。

たぶん代々当主が美人ばかり選んで美形遺伝子を貯め込んできたんだろうな……などと失礼なことを考えていると、メディレン公がアルツァー准将に挨拶した。

「叔母上、それにクロムベルツ少佐。多忙なところを宗家まで足労願ひ、申し訳ない」

「いえ、ハーフェン殿。これもメディレン家の一員の務めです」

准将がそう言い、それから俺を見てフツと笑った。

「もつとも私はついででしょう。ハーフェン殿が必要としているのは、私の参謀では？」

「ははは、その通りです。とはいえこの者は叔母上の腹心ですから

な。いや、唯一無二のパートナーでした」

とたんに准将の顔が真っ赤になった。

「おたつ……お戯れが過ぎます」

「ん？ ですが以前に届いた手紙……」

「本題に入りましょう、ハーフェン殿！ ユイナー、もういいから始めてくれ。違った、クロムベルツ少佐だ」

准将が冷静さを失っている。こんなときこそ、唯一無二のパートナーとして俺が冷静にならなくては。

なぜかハーフェンがしきりに首をひねって不可解そうにしているので、俺は口を開く。

「本日は小官に御用とのことですが、いったいどのような御用件でしょうか？」

「ああ、そうだったな。なに、貴官にとってはちょっとした雑談に過ぎぬであろう。気楽に構えていてくれ」

メデイレン公は笑いながら俺を見た。

あの目、笑ってはいるが何か企んでいるな。

「転生者たるクロムベルツ少佐に聞きたいことがある」
ほらきた。

「貴官が転生者であることは、ほぼ疑う余地がない。行軍速度を至上とし、敵の予想を上回る速さで進軍と撤収を可能にする戦争計画。

それに飛距離を数倍に延ばす最新型マスケット銃」

メデイレン公は頬杖をついてニヤリと笑う。

「これら全てを貴官が一人で思いついたのなら、紛れもなく有史以来の大天才であろう。転生者だと言われる方がよほど納得がいく」
「そりゃそうだ。前世でも才能ある人々が、何世代にもわたって発展させてきたものだ。一人の人間が思いつける代物じゃない。」

メデイレン公は真顔になり、俺をじつと見つめた。

「転生者よ、教えてほしい。これから先、この世界はどうなる？
いや、もっと具体的に尋ねるべきか。まず銃と大砲はどうなるのだ？」

具体的な質問は助かるな。

「前装式のライフルマスケット銃は、やがて金属薬莢による後装式へと変化します。数秒で装填できます」

「ほづ……」

「もつとも金属薬莢は非常に高度な技術を要します。今の技術力では実現は難しいでしょう」

雷管と金属薬莢が課題だ。無煙火薬も必要になる。

俺は化学も工学もまるでわからないので、この世界の専門家に改めて発明してもらおうしかない。

「もし金属薬莢ができれば銃本体に複数の弾丸を装填させられるよ

うになり、これぐらいの速さで撃ます」
俺は机上をトントンと叩いてみせた。

メデイレン公の顔色が変わる。

「そのような銃を全ての歩兵が持つのか!? では戦列歩兵など…

…」

「はい。もはや戦列歩兵などの過ぎません。散兵の時代になります。我が旅団のライフル式マスケット銃ですら、現在の軍事教本を全て書き換えるだけの力があります」

今のマスケット銃はまともに撃ち合えるのが五十メートル程度だ。それ以上は当たらないし、威力の減衰も速い。だからこの距離で戦列を組む。

しかし二百メートル先の敵を殺せるようになると、二百メートルの間隔で撃ち合うようになる。

必殺の銃剣突撃も、この距離では歩兵の息が上がってしまう。重装備の歩兵は速く走れない。防御側は銃弾の再装填が余裕で間に合う。

銃剣突撃そのものは廃れないだろうが、主要な決着手段ではなくなる。

というような説明もしておく。

メデイレン公は真剣な表情だ。

「城塞の銃眼なども改良せねばならぬな。では砲がどうなるか知りたい。ライフル式の砲は可能なのか?」

メディレン家の第四師団は海軍だから、艦載砲が一番気になるだろうな。

俺は答える。

「はい、ライフル砲が存在します。飛距離も命中率も飛躍的に高まるでしょう。艦砲も例外ではありません」

メディレン公の顔がパツと明るくなった。

「おお、そうか！ では忌々しいアガン海軍の船を海底の記念碑にしてやれるな。……いや待て」

メディレン公は不審そうな目で俺を見る。

「貴官は言葉選びが極めて正確な男だ。その貴官が今、『高まるでしょう』と言ったな？」

「はい。小官はライフル砲には詳しくありません。滑腔砲が再び使われていると聞いています。新しい滑腔砲では砲弾が機械仕掛けの矢のようになっていて、射出後に矢羽を開いて正確に飛ぶのです」

実を言うと俺もよく知らないんだが、確か戦車砲がそうになっていると聞いたことがある。

メディレン公はとてむびっくりした様子で、ぼかんとした顔をしていた。想像できなかったのだろう。

「砲弾に……そのような仕掛けが？」

「はい。ただし小官は前世では軍人ではありませんでしたので、その機密を知ることではできませんでした」

こつ言っておけばこれ以上詮索されないだろう。

メディレン公は非常に感銘を受けた様子で、しきりにうなずいている。

「なるほど……なるほどな。では船はどうなる？ 貴官の世界では帆船は未だ現役か？」

「帆船は廃れました。次に来るのは鉄の装甲板を持つ蒸気船です」「ジヨウキセン？」

もしかしてこの会話、長くなる？

俺は蒸気機関の概念をメチャクチャおおまかに説明した。

「湯気力で動く船です」

「ヤカンの蓋をカタカタさせる、あの力か？」

信じられないような顔をしているメディレン公に、俺は力強くうなずく。

「あの力です。わずかな薪では蓋を震わせる程度ですが、大量の石炭を燃やすことで猛烈な湯気を発生させ、歯車を回すことができます」

「う、うむ……。まあ信じよう」

信じてないだろ。なんだあの疑惑のまなざし。

じゃあもつと信じられない話をしてやろう。

「小官の時代では特殊な鉱物から熱を取り出し、やはり同じように歯車を回して、城ほどもある巨大な軍船で大海原を渡るようになり

ます。その軍船には空飛ぶ機械が幾つも積まれており、その飛行機械は音よりも速く空を飛び、矢のような爆弾を放ちます。機械仕掛けの爆弾は地平線の彼方まで敵を追尾し……」

「待て、私の理解を超える。疑った私が悪かったから、知識の洪水で溺れさせようとするな。そんな先の未来は私の息子たちに教えてくれ」

「これは失礼いたしました」

わかればいいんだよ、わかれば。

俺は原子力空母の説明はやめることにして、メディレン公に言う。「これから兵器は恐ろしい勢いで進歩します。兵器を開発するにも運用するにも、高度な専門家が 필요합니다。資源も大量に必要です。さしあたっては石炭と鉄鉱石が国家の血となるでしょう」

794

メディレン公が渋い顔をしている。

「ずいぶんと金のかかる戦争になりそうだな……」

「御慧眼です。石炭と鉄の時代では、軍事力は国家の生産力や経済力で決まります」

「夢物語のようで全く夢がない話だ。だからこそ信ずるに値する」

そう言って苦笑すると、メディレン公はうなずいた。

「だがそれだけ軍船が進歩するのならば、海を制することにそれだけの価値があるという訳だ。そうだな？」

「仰せの通りです」

このおっさん、なかなか察しいいな。

メデイレン公はフツと笑う。

「よし、決めた。この機に乗じて沿岸部の帝室直轄領を支配下に置く。港の領主たちに庇護を与えよう。それと石炭であつたな。帝国の石炭は西の山脈より産出している。ジヒトベルグ公たちともいわずれ和解せねばならんか」

この時代はまだ石炭があまり重視されていないが、帝国西部のシユワイデル山脈で大量に採れる。鉄鉱石もだ。

山脈を支配するジヒトベルグ家やミルドール家は、産業革命以降に莫大な富を手にすることになる。

メデイレン公はそんな未来を見据えているらしい。やはり利に敏感な人物だ。

彼は俺をじつと見つめる。

「今の説明、嘘偽りはなかるうな？」

「小官の前世の世界においては間違いありません。この世界も物理や化学の法則は同じのようですし、帝国建国時から現在までの流れも小官の前世の世界に似ています」

「似ているか？」

「と言っても三百年ほど昔の話ですが」

「貴官、さりげなく私を未開人だと馬鹿にしておらんか？」

「とんでもない」

メディレン公はアルツァー准将の甥だけあって、ツッコミの入れ方が似ているな。

前世の方が三百年ほど進んでいるのは事実だが、文明を発展させたのは俺ではない。この三百年間を生きた大勢の人々の功績だ。俺には誇れるものが何もない。

「有史以前からの祖先たちが数多の失敗と困難を乗り越えてきたからこそ、小官の前世があつたのです。個々の時代の人々を軽侮するなどありえません。それはこの世界でも同じです」

俺の言葉にメディレン公は何か感じるものがあつたようだ。ジト目で俺を見ていたのが、ハッと驚いたように目を見開く。

「なるほどな……。叔母上が見込んだのは、こういうところか」
「どういうところ？」

メディレン公は真剣な表情になる。

「貴官の実績と人柄は、それだけで重用するに値する。貴官の知識は船倉を満たす黄金よりも貴重だが、それだけに転生の秘密は守らねばならぬ」

メディレン公の庇護があるとはいえ、転生者だってバレたら異端審問だからな……。知識を伝えるにしても、うまいこと辻褃を合わせないと。

メディレン公は厳かに告げる。

「メディレンという名の船は、これより嵐の海を渡らねばならぬ。だが貴官の知恵があれば航海の無事は保証されよう。異界より来たる航海士よ。二度目の人生で嵐の海に挑む覚悟はあるか？」

そんなもん、とつくに覚悟は決まっている。

あの爺さんとコンビを組んだ日から。

「どこに生まれようが小官は小官です。嵐の海を越えねばならぬのなら、越えるまでです」

「良い気概だ。聞くまでもなかったな」

メディレン公は笑い、こう続けた。

「シユワイデル帝国は滅亡した。帝都ロツツメルが陥落し、皇帝陛下は虜囚となられたそうだ」

いくら何でも早くない？

第85話「激動する『世界』の始まり」

【第85話】

帝都ロッツメル陥落せり。

メディレン公ハーフェンとの会議直前に届いた急報によって、情勢の天秤は一気に危機へと傾いた。なんせ皇帝まで捕虜になったのだ。

メディレン公はフツと笑う。

「この情報は当家の密偵がもたらしたものだが、情報源は帝室紋章官ブレッツヘン卿だ」

誰だっけ？ あ、思い出した。

以前、俺に帝室侍従武官の話を持ってきた人だ。

紋章官は紋章学の専門家であり、同時に外交官でもある。紋章を識別して捕虜や戦死者の身元を保証でき、捕虜交換の使者も務めるからだ。

こういう人材とのコネは持つておくに限る。だからブレッツヘン卿に話をもちかけた。

帝室が没落したときにはメディレン家で再び紋章官として召し抱えるので、メディレン家にも情報を流してほしい、と。

帝室の将来に不安を感じていた彼は快諾し、今も帝都近郊に留まって情勢を伺ってくれている。

メディレン公は続ける。

「それに近衛師団や帝都の豪商、ロツツメル教区神官にも当家の協力者はいる。貴官が驚くような人物も協力者だ。協力者を保護せねばならぬので、誰かは明かせぬが」

予想はしていたことだが、やっぱり五王家はおっかないな。

「彼らの話を総合すると、帝室関係者か近衛師団に内通者がいたらしい。帝都包囲の混乱に乗じて軍の指揮系統に介入したようだ」
ジヒトベルグ公がミルドール公か、それともブルージュ公かはわからないが、「こういうとき」に備えて帝都に人員を配置していたらしい。

近衛師団は実戦経験こそ乏しいものの、装備・士気・練度・規律の全てが高水準だ。皇帝を守る軍隊が弱い訳はない。まともに戦えば激戦は避けられない。

そうなれば帝都は荒廃し、ジヒトベルグ公たち新支配者は帝都の有力者たちの支持を失う。

それを避けるため、ジヒトベルグ公たちは慎重に戦争計画を練っていたようだ。

なんとなくメディレン公が発言を求めているような顔をしているので、俺は小さく咳払いする。

「おそらく無傷で帝都を手に入れるため、謀略を巡らせたのでしよう。武力で帝都を攻略するとみせかけて、皇帝と帝都を無傷で手に入れたのです」

「貴官もそう思うか」

アルツァー准将も発言する。

「思えば我が旅団をブルージュの傭兵団が執拗に付け狙っていたのも、クロムベルツ少佐を帝都やジヒトベルグ公に近づけないためだったのでしょう」

あの爺さんは准将を捕虜にしたがっていたが、最後はやけにあっさり退いた。

軍事には「必ず達成しなければならぬ」「必成目標と」「できれば達成しておきたい」「望成目標があり、准将捕縛は望成目標だったと考えると納得がいく。

メディレン公は深くうなずいた。

「ミンシアナの乱を阻止したクロムベルツ少佐が帝都に入れば、そのような企みなど即座に露見してしまうであろうからな。またジヒトベルグ公の元に逃げ込めば、情に篤いあの御曹司の心が揺らぎかねぬ」

今ひとつ悪党になりきれない雰囲気があるんだよな、あの人。育ちの良さだろう。

さて、そうなるとブルージュ公国の次の戦略がうつすら見えてき

たな。俺は口を開く。

「ブルージユ公国は無傷で帝都ロツツメルを占領しました。近衛師団もブルージユの軍門に降るでしょう。皇帝が捕虜になってしまつては戦えません」

メディレン公は腕組みする。

「そつだ。皇帝が虜囚となり、帝室の権威は失墜した。だが帝室門閥貴族たちにとって、転生派のブルージユ公は受け入れがたい。ブルージユ家に忠誠を誓うぐらいなら、ジヒトベルグ家を序列一位と認め、門閥に入る方がまだマシであろうな」

俺もそう思うが、懸念事項もある。

「手続き的にも情情的にも可能なのですか？」

この辺りの心情は平民で異世界人の俺にはわからない。

するとメディレン公は薄く笑つた。

「なに、そんなものはどうとでもなる。どこの家も、家系図の上の方には不自然な空白があるものだ。そこに適当な名前を書き入れれば、シュワイデル門閥であつた家系がジヒトベルグ門閥に早変わりする」

俺は思わず口走つてしまつた。

「いいんですか、そんなので」

「良くはなかるつが、誰しも自分の代で領地と身分を失いたくはあ
るまい。そのぐらいは妥協の範疇だ」

するとアルツァー准将が口を開く。

「もともと政略結婚で実際に親戚関係になっていることも多いからな。一人の当主には二人の親がいて、四人の祖父母があり、八人の曾祖父母がいる」

メディレン公も深くうなずいた。

「叔母上の言う通りだ。五代遡れば三十二人の先祖がいる。遡れば遡るほど先祖は増え、上流でつながりがあれば由緒正しい流れを汲む者と言い張れる。門閥などと言ってもそんなものだ」

割といい加減なんだな。だが融通が利くのは良いことだ。

だからメディレン公は沿岸部の領主たちを取り込むつもりなんだな。あれこれ理屈をつけてメディレン家の血脈ということにしてしまいい、傘下に収めてしまおう気だ。

メディレン公は俺を見た。

「ということで当家も周辺領主の取り込みに腐心しておる。だがミンシアナの乱以降、復位したりトレイク公との関係がぎこちなくな……」

俺のせいじゃないよ？

「それでしたら、准将閣下のリコシエ秘書官が適任でしょう」

「ん？ ああ、ミンシアナ殿の影武者だったという者か。叔母上から話は聞いている。事実上の代理人であったそうだな」

リコシエはメディレン公にとっては末端も末端の人物だが、彼は

ちゃんと覚えていた。

「その者がどうした？」

「嫡男セリン殿はどうやら、リコシエ秘書官を姉と慕っているようなのです」

「なんと」

目を丸くしているメディレン公に俺は笑いかける。

「ミンシアナは実弟とほとんど面会しませんでした。理由はわかりませんが、ほぼ全ての面会でリコシエ秘書官が影武者として出席しています」

酷薄どころか弟の命まで狙っていたミンシアナと違い、影武者のリコシエは幼いセリンに優しく接していたそうだ。リコシエには故郷に弟妹がおり、幼い子供に冷たくするなどできなかったのだという。

そのため嫡男セリンはリコシエにとっても懐いている。

「その後リコシエ秘書官は自分の身元を明かしましたが、セリン殿は幼すぎて事情がよくわからなかったようです。まだ五才ですから、『お姉ちゃんの名前と服装が変わった』ぐらいの認識なのでしょう」

俺の説明にメディレン公は微笑んだ。

「心温まる話だ。身分や血が違えども姉弟なのだな」

「はい。セリン殿はリコシエ秘書官を今も慕っており、リトレイユ

公の目を忍んで交流を続けています」

「ふーむ」

目を閉じてしばし考え込むメディレン公。

「ではリコシエ秘書官に相応の待遇を与えねばな。『姉』がメディレン家で厚遇されていると知れば、セリン殿も好感を持つ。リコシエ秘書官を一代貴族に任じるか」

俺は彼が何を考えているのかわかってしまった。

この世界の君主たちは自らが身元保証人になることで、平民を一代限りの貴族に叙任することが可能だ。

ただし乱立を防ぐため、五王家では帝室のみがその権限を行使するという暗黙の了解がある。

メディレン公が俺を一代貴族に叙任すれば、数百年におよぶ帝国の慣習を破ることになる。明確な反逆行為と受け止められるだろう。

だから俺は苦笑して言う。

「今後は殿下のことを『陛下』とお呼びすべきでしょうか？」

「甘美な響きだな。だがそのための準備が必要だ」

やっぱりこの人、「メディレン王」として帝国東部に君臨するつもりだ。

右を向いても左を向いても悪党しかいないぞ、この国。メディレン公は表情を引き締める。

「もはや帝室に力はない。それでも帝国の政治は五王家の誰かが担わねばならぬ。私が帝国の新たな屋台骨となろう。クロムベルツ少佐よ、貴官の知謀で私を本當の王にしてくれ」
そう言つて彼は俺に頭を下げた。

彼の表情や仕草が半分演技だというのはわかっているのだが、それでもこうやつて真摯に頼まれるとグツと来てしまうな。会話の運び方といい、人心掌握が本当に巧い。

それにメディレン公は帝国で五指に入る実力者だ。その人物から頭を下げられては断れない。

アルツァー准将の顔をちらりと見ると、軽くうなずいている。敬愛する上官殿の裁可も下りたことだし、協力しよう。

「お任せください閣下。帝国よりマシな国を作るためなら、小官は人生を賭して尽力いたします」

真面目に答えたつもりだったが、メディレン公は大笑いした。

「ははは！ 確かにな！ どうせ壊すならもつとマシな国にせねばならぬ。良い国を作って子々孫々まで繁栄するでしょう。頼んだぞ、クロムベルツ少佐」

国家的陰謀に首までどっぷり浸かってしまった……。

* * *

アルツァー准将とクロムベルツ少佐が退出した後、メディレン公
ハーフェンは会議室でしばらく佇んでいた。

(帝国よりマシな国、か……)

目を閉じて黙考するハーフェン。

(確かに私が知る帝国は酷いものだ。生活に苦しむ民衆に怨嗟が満ち、その矛先が我ら貴族に向けられている。帝室が隣国と戦争を続けているのも、近年では不満を逸らす意味合いが強い)

窓のない防諜会議室の壁には、精緻な「世界地図」が掛けられている。最盛期の帝国領を中心とする周辺世界だ。数千キラム彼方の交易地や、帝室すら所持していない流血海の全容も描かれていた。それをじっと見つめてハーフェンは考える。

(帝都陥落で貴族の間には動揺が広がっているはずだ。この混迷を逆に好機と為し、メディレン家が歴史の覇者となれば痛快であろうな。不要な戦が止めば、皆が今より豊かに暮らせよう)

メディレン公は極秘書類を取り出す。

書類の表紙には、メディレン家に伝わる秘密の文字で「メディレン王国独立案(帝国分割案)」と書かれている。

メディレン公はその書類を一枚めくり、人事欄の空白部分にこう記した。

初代宰相、ユイナー・クロムベルツ・メディレン。

「うむ。義理の叔父が転生者というのも面白い」

満足げにうなずいたメディレン公だったが、ふと不安そうな顔になって再びペンを手にした。名前の下に小さく書き加える。

本人が受けてくれれば。

第86話「メディレン家の野望」

【第86話】

こうしてメディレン家は帝国崩壊のどさくさ紛れで東シユワイデルの覇者を目指すことになった。

それもこれも皇帝ペルデン三世が乱世に全く不向きな君主だったからだが、さらに俺たちの予想を上回る続報が飛び込んでくる。

「皇帝が行方不明だと？」

アルツアー准将の呆れ顔が凄い。

俺は帝都から届いたばかりの密書を准将に手渡した。

「帝室紋章官ブレッツヘン卿からの報告ですので、ほぼ間違いありません。表沙汰にはなっていませんが、帝都は連日の大搜索だとか」

准将はイスの背もたれに体を預け、悩ましげな顔をした。

「理解しがたい状況だ。ブルージユの三公にとって皇帝は重要な人質だ。そう簡単に逃がすとは思えないし、殺害して失踪扱いにするとも思えないな」

実を言うと俺も皇帝の身柄は安泰だろうと思っていたので、少々混乱している。ジヒトベルグ公もミルドール公も、比較的穏健なやり方を好む君主だ。

「ブレッツヘン卿の自宅にもジヒトベルグ軍の将校が来て、事情聴取をして帰ったそうです。連中は帝都の下水まで調べているという話でした」

「なりふり構わず、という感じだな。皇帝の失踪を隠蔽したいのであれば悪手だが、皇帝を殺しておいて失踪を装うのなら妥当な行動だ。どう思う？」

確かにそうなのだが、俺は首を横に振る。

「俺なら皇帝を殺しても『失踪』にはしませんね。『病氣療養中で面会謝絶』にします」

「確かにその方が死んだまま人質にできて合理的だな。お抱え医師に診断書でも書かせておけば済む」

俺たちの会話、冷静に考えてみるとひどいな。まあいいか。

「そもそも大事な人質を殺さないでしょう。帝都周辺の領主たちを懐柔するにも皇帝の権威は役立ちます。帝室門閥の貴族は帝室の代官という建前ですから、皇帝が領地を返せと言えば逆らえません」

この辺りは大名と旗本の違いみたいなもんで、シュワイデル門閥貴族の誇りでもある。皇帝の命令があれば素直に従うだろうが、そうでないとかなり揉めるだろう。

准将もうなずく。

「確かに皇帝が行方不明では都合が悪いな。わざわざ行方不明にす

るぐらいなら、一族郎党まとめて公開処刑にする方がまだ理解できる」

「そつなんだけど真顔で言わないでほしい。美人だから妙な凄みがある。」

俺は軽く咳払いをする。

「行方不明が事実だとすれば、ブルージュ公の差し金かもしれないん」

「ブルージュ公が？」

「ブルージュ公国にとっては、帝国の五王家は分裂したままの方が都合がいいでしょう。皇帝を殺して行方不明にしてしまえば、五王家は永遠に現れない皇帝の帰還をただ待つことになります。ジヒトベルグ公やミルドール公は占領統治が進まず、ブルージュ公にとつてはむしろ好都合でしょう」

准将は溜息をつく。

「秩序ではなく混乱を目的とするなら良い策だな。死亡が確実なら皇太子をすぐさま即位させられるが、失踪ではそういう訳にもいかない。他に判断材料はないか？」

「そういうことなら、この情報が役立つかもしれないな。」

「失踪の裏付けを取るためにブレッツヘン卿が動いてくれましたが、帝室侍医団の動きが妙です」

「妙というのは？」

「皇帝が存命なら普通は毎日検診しますし、死ねば検死するでしょう。しかしどちらの動きもありません。皇妃など帝室関係者の健康状態は帝室侍医団によって記録されているのですが、皇帝だけ空欄になっていくそうです」

アルツァー准将はまた考え込む。

「それは確かに妙だ。断定はできないが、皇帝が本当に失踪した可能性は高まってきたな。皇帝が最後に公の場に表れたのはいつだ？」

俺は書類をめくり、記された情報を准将に伝える。

「帝都陥落当日にジヒトベルグ公と会い、近衛師団に停戦を命じたのが最後ですね。停戦は皇帝の本意ではないはずですから、強要されたのか、あるいは偽の勅書でしょうが」

陥落翌日からは動静が伝わらなくなっていたので、いつ失踪したのかわからない。

「三日後に帝都中で大捜索が始まっていますから、このわずかな期間で失踪したことになります」

「やれやれ、どこまでも面倒な皇帝だ」

アルツァー准将は溜息をついた。

「何から何までわからないことだらけだが、それでも対応は決めなければならぬ。それも今すぐにだ。ハーフェン殿と相談しよう」
「ではお供します」

俺とアルツアー准将はメディレン宗家の本拠地ポルトリーテ港に急行し、メディレン公ハーフェンと緊急会談した。

「皇帝陛下失踪の噂ですが、こちらでも真偽はつかめていません。ハーフェン殿の方ではいかがですか？」

「その私を疑うような目はやめてくれぬか、叔母上。私は潔白です」

露骨に嫌そうな顔をしているメディレン公。

でも五王家の当主たちって、どいつもこいつも陰謀好きだからなあ……。陰謀に向いてなかった皇帝が捕虜になって失踪しているから、謀略家でないと生き残れないのはわかる。

そんな目でメディレン公を見ると、視線に気づいた彼は咳払いをした。

「味方から疑われるのは不本意だが、貴官はそれが仕事であったな。実はジヒトベルグ公から密使が来た。『本当に皇帝を匿っていないのか』としつこく尋ねられたぞ」

尋ねちゃうのか。ジヒトベルグ公は相変わらず直球勝負だな。

じゃあ真実がどうあれ、ジヒトベルグ公は皇帝の身柄を確保しそこねたと公表した訳だ。ジヒトベルグ公にとっては不都合な「事実」だ。

メディレン公は整えたヒゲを撫でつつ、苦笑まじりに言う。

「ジヒトベルグの若君は皇帝陛下を快くは思っておるまいが、それでも帝室を破壊しようなどとは思っておらぬはず。五王家の『人差

し指』、良くも悪くも御曹司であるからな。皇帝陛下の失踪が事実であれば、これは彼らしい対応といえよう」

帝室に次ぐ格式を持つジヒトベルグ家としては、あまり無茶をしたくないということか。

ジヒトベルグ公自身も穏健な政治家だし、ここは信用してもいいだろう。

俺はチラリとメディレン公を見る。

「もちろんメディレン家では匿っていないのですよね？」

「無論だ。匿っていたらやりたい放題だったのだがな。今からでも逃げ込んできてはくれぬものか」

心の底から残念そうに溜息をつくメディレン公。

何するつもりだったんだ。いや、言わなくていい。

「皇太子殿下を含め、帝位継承権を持つ者は全て虜囚になっているようだ。誰が即位しようが新帝はブルージユの傀儡にしかねぬ」
「なんで分散させなかったんだ。馬鹿じゃないのか。」

そう思っていたらアルツァー准将が苦笑した。

「では帝室は滅ぶべくして滅んだのですな。うちの参謀もそう申ししております」

申してないよ？

メディレン公も苦笑する。

「帝室としては陛下の逝去が確実になければ、皇太子殿下を即位させることはできまい。何事も格式と前例を重んじる家柄だからな」

俺は呆れて発言する。

「皇帝不在のまま帝都が敵に占領されては、国としては死んだも同然でしょう」

「さよう。それゆえ、この偉大なる祖国を守るためには五王家の一員としてメディレン家が立たねばならぬ。そういうことになるな、ははは」

うわー悪い。悪い人だ。

だが乱世には必要な悪い人でもある。このプランに乗っかる。そうだ、こういうときに言う台詞があったな。俺はニヤリと笑ってみせる。

「御運が開けましたな」

するとメディレン公はフツツと笑った。

「では運が開けた以上、進むしかあるまいな。帝都を奪還するぞ」
そう言っつてメディレン公はきびきびと俺に命じる。

「今のブルージュ軍と正面から仕掛けてもブルージュ公は動かず、ジヒトベルグ公たちを使って共倒れを狙うであろう。それゆえ軍略と外交の両面で動く」

妥当な判断だな。ブルージュ公だけが得をする展開は避けなければならぬ。

「私が外交でブルージユ内部に亀裂を入れるゆえ、クロムベルツ少佐は主に軍略を担当せよ。ブルージユ軍の東進を阻み、反攻からの帝都攻略をちらつかせるのだ。実際には帝都を戦場にはできぬから、あくまでも揺さぶりをかけるためにな」

そう言ってメディレン公は俺に笑いかけてくる。

「私には陸戦が全くわからん。当家の侍従武官も海軍出身者だらけでな。貴官は貴重な陸戦の専門家だ。頼りにしているぞ」

「はっ！」

なるほど、俺を厚遇しているのはそういう理由か。納得しつつ、俺はアルツァー准将に向き直る。

「ということですので、手伝ってもらいますよ」

「それは構わないが、私はお前の直属上官だぞ。頭越しの命令を嬉しそくに受けるんじゃない」

微妙に拗ねてるな……。

第87話「皇帝の亡霊」

【第87話】

帝国領の東半分を守るために、陸軍を任された俺とアルツアー准将。

ただか少佐の俺がずいぶん大きな任務を任されたものだが、それにしても困ったぞ。

とりあえず准将やロス中尉、それにハンナたち下士長も集めて会議をする。リコシエ書記官も一緒だ。

俺は壁に貼られた地図を示しながら、一同に説明する。

「ブルージュはそれほど豊かな国ではないが、今回は無理して傭兵を雇っている。さらに帝国の第一、第三師団を吸収しているため、総兵力は十万を超えると推定される」

准将がうなづく。

「ずいぶん大所帯だな」

「ええ、大所帯です。食わせていくのも一苦労ですよ」

戦記物では十万や二十万の大軍がポンポン出てきて壊滅しているが、現代日本の地方都市の人口まるごとだと考えると途方もない数だ。

二十万人の兵士は朝夕に四十万食の兵糧を消費する。そこそ清潔な水も毎日数十万リットル必要だ。

しかも彼らは戦うのが専門で、土木工事は多少やるものの食料生産などはしない。おまけに大荷物を持ってあちこち移動する。

鳥取市や松江市の人が全員徒歩で移動すると考えれば、数日間の行軍計画を立てるだけでも大仕事なのはわかるだろう。

彼らが飢えずに戦えるよう面倒を見るのが俺たち平民将校や下士官の仕事だったので、この大変さはよく理解しているつもりだ。

「もちろん、そんな大軍を一カ所に配置しても占領地を効率的に防衛できません。周辺の食料も食い尽くしてしまうでしょう。適当に分散させています」

そう答えてから俺は一同に地図を示す。

「ブルージュ公にとって信用できるのは自国の兵だけだ。国の規模を考えると、越境してきたのは多くて四〜五万程度と推測される」

近代以前の人口ってびっくりするぐらい少ないので、これでもかなりの大兵力だ。

「ブルージュ兵はおそらく、退路の確保に配置されている。ブルージュ公も帝国領を占領するために東進したいはずだが、隙を見せればミルドール公は即座に裏切るだろう」

ハンナが恐る恐る挙手する。

「でも参謀殿、ミルドール公はそんなに簡単にまた裏切って大丈夫ですか？ 帝国を裏切ったばかりなのに、信用なくしちゃいけません」

か？」

ハンナの疑問はもつともなので、俺はうなずく。

「そういう意味での『信用』なら、最初の裏切りときに投げ捨てているだろうな。ミルドール家はブルージユに寝返ったのではなく、ジヒトベルグ家と組んで『二王家』として独立したと考えた方がいい。ブルージユ公とは利害が一致して手を組んでいるだけだ」

俺の言葉を受け継いでアルツァー准将が言う。

「そう判断したからこそ、メディレン公ハーフェン殿は両家をブルージユから引き剥がそうと考えたのだ。それで少佐、この両家の兵力はどれくらいだ？」

「投降した近衛師団も含めると、五〜七万というところでしょうか。その気になればブルージユ公の遠征軍を叩き潰せる兵力です。おそらく、ミルドール公たちの発言力は相応に増しているかと」

「なるほど、ではブルージユ内部は相当ギスギスしているだろうな。そこに我が旅団が楔を打ち込む訳だ」

まあそうなんだけど、言うほど簡単じゃない。

「ブルージユ側も寄せ集めですが、こちらも相当な寄せ集めです。第四師団の陸軍全てと海軍陸戦隊の一部、それと第五師団の予備兵力や退役兵を回してもらいます。総勢三万ほどです」

陸軍と海軍陸戦隊では装備も戦術も違つし、指揮系統も違つ。同じ陸軍でも、第四師団と第五師団でまた違つ。

これを一本化してひとつの軍隊として動かすには、アルツアー准将をトップとする強力な指揮系統を再編する必要がある。

「この寄せ集め部隊を動かすには准将閣下のお力が不可欠ですが、閣下には指揮経験も軍内部の人脈も不足しています」

「言いたい放題だな。だが事実だ」

アルツアー准将は溜息をつき、制帽を脱いだ。

「認めたくはないが、私は経験の浅い小娘だ。万単位の軍を動かすには将としての器が足りない。三万の兵を動かすために、私はどうすればいい？」

俺はそっけなく答える。

「無理なものは無理ですから、動かせる兵だけ動かしてください。五千か一万ぐらいなら閣下と我々でどうにかできます」

ロス中尉が腰を浮かせる。

「残りの二万以上の兵はどうするんだ？」

「さつきも言ったように、全軍を一カ所に集めたりはしない。適当に司令官を選んで任せとけばいいだろう。どうせ全軍集めてもブルージュ軍の総兵力の三割ほどだ。勝ち目がない」

そう、勝ち目がない。俺は頭を掻く。

「寄せ集めの上に、寄せ集めても数が足りない。今はなるべく戦いたくない」

「そういうときこそ、敵さんは乗り気で攻め込んでくるもんだろ？」

ロズ中尉が苦笑いをしているが、これは彼が正しい。

「その通りだ。ブルージユ公にせよ『二王家』にせよ、帝国領を切り取るなら今この瞬間しかないとわかつている。だから少々卑怯な方法で足止めする」

「おっ、いいな。お前がそう言うときはだいたい、必勝の秘策があるときだからな」

うるさいぞ、おしゃべりロズ。アルツアー准将が興味ありげな顔をしてるじゃないか。

「ほう……昔からそういう感じだったのか？」

「ええ、准将閣下。こいつは無駄に善人だから、自分の立てた策に後ろめたさを感じるんですよ」

やめろって言ってるだろ。

アルツアー准将だけでなく、ハンナ下士長までもが興味津々といった表情をする。

「参謀殿、どんな策なんですか？」

「興味がありますね」

リコシエ秘書官まで。やめろ、そんな期待に満ちた目で俺を見るな。全然大した策じゃないから。単に卑怯なだけだ。

俺は咳払いをする。

「いやあの……噂を流すだけなんだが」

「どんな噂を？」

みんなが俺を見ている。ストレスが凄い。俺は昔から、誰かの期待を裏切るのが一番怖いんだ。

胃がキリキリしてきたので、俺はもったいぶらずにさっさと白状してしまっ。

「実は……」

* * *

【解き放たれた狼】

帝都に近い街道筋の宿で、ブルージュ公の側近は例の老人を詰問していた。

「本当に皇帝は始末したんだろうな？」

灰色の軍服の老人はパイプ煙草に火をつけ、旨そつに紫煙をくゆらせる。

「始末はしてねえよ。手はず通り、タルザスの森に捨ててきたさ。

あそこは崖と沼に囲まれた迷いの森だ。おまけに人狼が出るって噂まであって、地元民も旅人も近寄らねえ」

そう言っって老人は楽しみに続ける。

「おかげで狩りの獲物にや事欠かないから、皇帝陛下も森の生活を満喫してるだろうぜ。依頼通りだろ？」

「それならいいのだが、最近『皇帝らしい人物を見た』という噂があちこちで流れている」

笑っていた老人はスツと表情を引き締めた。

「あん？ そりゃどういう事だ？」

「聞きたいのはこちらの方だ。間違いなく皇帝はまだあの森にいるのか？」

「あの森を抜ける出口はひとつしかねえ。そこを俺の部下たちが見張ってる。皇帝が出てこないように、そして誰も森に入らないようにな。で、どちらも異状無しだ」

老人の言葉に、ブルージュ公の側近は考え込む様子を見せた。

「それが本当なら、噂は噂ということか……。だが真偽はもはや関係なくなってきた。皇帝が健在だと信じた帝国の軍人や貴族たちはブルージュに屈服するまい。御前はお怒りだ」

「おいおい、そんな政治のややこしい話は俺の知ったこっちゃないぜ。契約範囲外だ」

老人は肩をすくめつつ、安物の甘ったるいワインをちびりと舐めた。

「だがそこは浮世の義理ってヤツだ。少しばかり相談に乗ってやるよ。噂はひとつじゃないんだろ？」

「あ、ああ。最初は早春節の三日に、帝都郊外のスワンソン村で皇

帝によく似た人物を見たという噂だ。ここは帝室の保養地だから、村民たちは皇帝の顔を知っている」

男はそう言い、声を潜めて続ける。

「翌日は東のバスゴダーニユ市だ。帝室御用達の宝石商に、身分の高い客が宝石を売りに来たという噂。決済は皇帝のサインで、ブルージユ公の紋章官が本物だと鑑定している」

老人はニヤニヤ笑って腕組みしている。

「ふん、なるほどな。次はもつと東だろ？」

「そうだ。七日に近衛師団の第一儀仗騎兵中隊がバルネダ要塞に入ったという噂。要塞にはそれらしい軍旗が掲げられているそうだ」

第一儀仗騎兵中隊は皇帝の警護を担う選りすぐりの精鋭だ。式典などで皇帝の威厳を演出するためにも不可欠であり、通常は皇帝のいない場所には現れない。

それを聞いた瞬間、老人は大笑いした。

「ははははは！ やるじゃねえか、ユイナー！ そりゃ面白い！」「面白がっている場合か！？」

「いやいや、そりゃできすぎた話だ。『皇帝は帝都を脱出し、態勢を立て直しながら東へ向かっている』って筋書きだろ？ あいつの意図はわかるが、そりゃ見え見えだぜ。サインはおおかた署名入りの白紙委任状の流用で、軍旗は偽物だ」

老人は苦笑してみせるが、ブルージユ公の側近は渋い顔をした。

「そう思っているのはお前だけだ。この噂のせいでシュワイデル門
閩の領主どもが勢いづいている。近衛師団の残党も東に移動を始め
た」

「なんだそりゃ、どいつもこいつも単純だな」

するとブルージュ公の側近は溜息をつく。

「人は信じたいものを信じるからな。皆が信じたい噂を流せば半信
半疑でも食いつくものだ」

「ああ、そりゃ間違いいねえ。皇帝を行方不明にして帝国を混乱に陥
れようとした策が、まんまと裏目に出ちまった訳だ。なるほど、こ
りゃユイナーの方が一枚上手か」

老人は少し考え込む様子を見せ、それからすぐにこう言った。

「どうする？ タルザスの森で楽しく暮らしてる皇帝陛下を捕まえ
てくるか？」

「もう間に合わん。この機に乗じてメディレン公が動き始めている。
あの男の懐に飛び込んだ領主や将校は戻ってこないだろう。メディ
レン公は敏腕の商人だ。軍才はないが人の扱いには長けている」

ブルージュ公の側近はそう言って、すがるような目で老人を見た。
「そこでブルージュ公がお前に新たな依頼をしたいと仰っている。
実は……」

だが老人は片手を挙げてそれを制した。

「おっと、それを聞いちゃう訳にはいかねえ。契約を結ぶ気もねえのに話を聞くのは御法度だ。そうだろ？」

「断るといふのか！？ 仕官はどうする！？」

驚いた顔の側近に、老人はニヤリと笑う。

「いやはや参ったぜ、そんなものに興味があると本気で思ってたのか？ どの国でも貴族様ってヤツは平民の考えることがわからんようだな」

老人は立ち上がる。

「俺たちはもう十分稼がせてもらった。故郷に帰って孫のオムツでも換えながらのんびり暮らすさ。ブルージュ公に伝えとけ。戦争ぐらい自分でやれ、とな」

「お、おい！？」

呼び止める声に振り向きもせず、老人は客室を出る。

廊下には彼の部下である山岳猟兵たちが数名たむろしていた。

「孫なんかいたんですか、団長？」

「いる訳ねえだろ。俺は優雅な独り者さ」

老人が笑いながら歩き出すと、山岳猟兵たちもスツと後ろに続いた。

「それでどうします？」

「皇帝が森でくたばってたことは誰にも言うな。扱いを間違えれば俺たちの命が危ない。だが切り札にもなる。皇帝の宝飾品は危なく

て換金できねえから俺が預かっておく」

自由の身となった老人は、軽快に歩みながら楽しげにつぶやいた。「ユイナーのおかげでますます楽しくなってきた。さて、次は何をしてくれるんだ？」

第88話「亡者を蘇らせて」

【第88話】

「流した噂はどれもうまくいっているようだな」

アルツアー准将が報告書を読み、フツと笑う。

「堅実なお前が『皇帝を使う』と言ったときには驚いたが、蓋を開けてみればやはり堅実な効果が出ている。多くの者たちがもう少し粘ろうと抵抗の動きを見せ始めた」

「恐縮です」

俺は澄ました顔で敬礼してみせるが、准将に褒められて嬉しくない訳がない。やったぜ。

ただ罪悪感はある。

「皇帝陛下はおそらく存命ではないと思われまますので、こつこついう形で死者を歩かせるのは胸が痛みます」

「お前の場合、冗談なのか本気なのか区別がつかないな……」

「本気で言ってるんですが……」

日頃の行いが悪いせいか、微妙に信用がない。

アルツアー准将は上機嫌で笑いかけてくる。

「お前のおかげでハーフェン殿の策略も順調だ。ブルージュ公国への投降を考えていた者たちがメディレン家に助力を求めてきている」

「最後に流した噂が『近衛師団の第一儀仗騎兵中隊がメディレン家の本拠地ポルトリーテの城塞に入った』ですからね」

実際に目撃されたのはメディレン家の偵察騎兵小隊だろう。それっぽく動かしたからな。

だが「それっぽい動き」があれば、噂に信憑性が出てきて広まりやすくなる。

皇帝を守る騎兵たちがポルトリーテの城塞に入ったってよ。

おお、そっぴい騎兵っぽい連中が城塞に入ってくところを見たぞ。

じゃあ噂は本当だったんだな。

皇帝は生きてるんだ。

学生時代に情報なんちゃらの講義で何かそういうのを習った記憶があるが、噂が広まる仕組みというのはそういうものらしい。

准将は頬杖をつき、俺の顔をまじまじと眺める。

「まったく、可愛い顔をして悪党だな。次はどんな策を繰り出してくるのやら」

「参謀として計画を立てているだけなので悪党ではありません」

俺は平静を装ったが、准将の黒髪が机上にこぼれ落ちるのを見ると妙な気分になってくる。落ち着け俺。今は職務中だし、あの人は俺の尊敬する上司だ。

するとアルツァー准将はフツと微笑みながら姿勢を正す。

「さて、これで帝国貴族たちがブルジョウに下る流れは止まった。ブルジョウ側の三公も内部対立があるため、あまり無茶な動きはできまい。当面は時間が稼げるだろう」

「そうですね。ただし、稼げる時間はわずかです」

「わかっている。メイレン家の工廠ではライフル砲の試作が始まっているし、ハンナ下士長には砲兵少尉の臨時任官手続きを取った。海軍士官学校で砲術科に籍を置かせる」

我が国では平民女性は士官学校に入れない。そのため将校になる道が閉ざされているのだが、それは陸軍の話だ。

海軍戦力の大半は第四師団の管轄下にあるので、メイレン公が「まあよいではないか」と言えば第四師団の海軍士官学校に書類上の在籍ぐらいはできる。

今は戦時下なので特例として砲兵中尉のロズが教官になり、必要な課程を終えたら海軍士官学校の卒業資格を与えてハンナを砲兵少尉にさせる。帝国初の平民女性将校だ。歴史に名前が残るぞ。

ちよつと強引な方法だが、これで砲兵隊の指揮官が二人に増える訳だ。

「砲兵隊は将校二人で回してもらおうことにして、後は歩兵だ。私が直接指揮を執っている余裕はないし、貴官には参謀としての職務がある。そこで第五師団から尉官を何人が回してもらおうことになった。ただし能力には期待するな」

「わかっています」

アガン王国と戦っている第五師団が「こいつ余ってるよ」と派遣してくれるような人材だ。俺自身もそれだったので偉そうなことは言えないが、あまり期待しない方がいいだろう。と、ここで准将は少し悩む様子を見せた。

「使える将校が足りていないのは厳然たる事実だ。戦列歩兵の強さは、兵の質よりも下士官や将校の質による部分が多い。そうだな？」

「はい。健康なら誰でも戦列歩兵になれますが、それを動かすのは『誰でも』という訳にはいきません」

だから士官学校で将校を養成して戦術理論を叩き込むし、現場の熟練兵は下士官に昇進させて兵を統率させる。

この世界の軍部が「人材」として認識しているのは将校や下士官だ。兵は消耗品扱いだから、敵前逃亡さえしなければ何でもいと思っっている。ひどい話だ。

そんなひどくて当たり前前の話をわざわざしてきたってことは、何かあるんだろうな。

そう思っていると、准将は言いづらそうな顔でこうやってきた。

「実は我が旅団に下士官を売り込んできた者がいる」

「誰です？」

なんか嫌な予感がしてきたぞ。

准将は溜息をついた。

「ヨーゼフ・フォンクトハウトという傭兵隊長だ」

「聞いたことのない名前ですが」

「……お前の『おじいちゃん』だよ」

あの爺さん、そんな名前だったの!？」

* * *

【死神に取り憑かれた者たち】

時間は少し遡る。

「お初にお目に掛かります、アルツアー・メディレン准将閣下」
背筋をただして敬礼したのは、灰色の軍服を着た老人だった。

アルツアー准将は答礼しつつ、苦笑いを浮かべる。

「私を虜にしようとした者と、こうして面会することになるとはな
これも戦人の倣いか」

「人生というのはわからんものですな。今回は小官も旧友と敵味方
になりました」

ヨーゼフと名乗った老軍人は穏やかに笑っている。

(あいつから聞いていた印象とは随分違うな)

功利的で抜け目がなく、貴族や金持ちに対しては冷淡。だが義理
堅い一面もあり、貧者には意外な優しさを見せる……らしい。

(この態度はおおかた、貴族向けの演技だろう。小娘の私に侮られ

ない程度にへりくだり、ちょうど良い距離感で接している）
そこまで判断したところで、准将は資料を手取る。

「小隊指揮官三名と下士官二十八名の長期契約か。全て歩兵科か？」
「はい。厳密には山岳猟兵です。小官は第三師団麾下の山岳警備隊で下士長を務めておりました。西部のシュワイデル山脈での戦いで、は特にお役に立てるか」と

帝国西部を横断するシュワイデル山脈は、北側をミルドル家が、南側をジヒトベルグ家が支配している。そこでの戦いが何を意味するかは明白だった。

アルツァー准将は穏やかな表情で首を横に振る。

「さて、それは私の参謀に聞いてみよう。そして貴殿は私の参謀と浅からぬ因縁があるそうだな？」

「はっはっは。なに、一緒に組んで少しばかり悪さをしたただけのことです」

（領主の私有地で密猟すれば死罪だが、それを『少しばかり』ときたか。なかなかの悪党だな）
准将は呆れたが、もちろん表には出さない。

（この男には利用価値がある。何しろユイナーの少年時代を知って……いや、それはどうでもいい）

緩んでいた気持ちを引き締め、准将は老人に問いかける。

「ところで貴殿、なぜ偽名を名乗った？」
その瞬間、老人の目から笑みが消える。
「ほづ……なぜそうお思いに？」

「フォンクトハウト姓はミルドル地方の限られた地域にしか存在しないが、貴殿の発音にはリトレイユ地方の訛りを矯正した痕跡がある。私を小娘と侮らず、もっと丁寧な経歴詐称をしてくれ。少し傷ついたぞ」

笑ってみせる准将に、老将は頭を掻いた。

「いや、これは参ったな。そうじゃねえんですよ、准将閣下。もし本当に経歴を偽るなら平民大尉を名乗りますとも」

「確かにな。傭兵団の頭目が下士長では迫力に欠ける」

すると老将は背筋を伸ばした。

「実を言いますと、小官は第一師団で輜重隊に所属していた下士補待遇の軍属、マルゴット・ダルゼンであります」

「おいおい、せめて第五師団と言ってくれ。どう考えてもリトレイユ生まれだろう？」

「では第五師団の砲兵下士官、セレド・ウォーリフにしておきましようか」

「本名はどれなんだ」

別に怒りもせず准将は老将の経歴詐称のオンパレードに付き合う。

そんな准将を見て、老将は真顔になる。

「どれも本名だと思っております。こいつは全部、『雪だるま戦争』で死んだ仲間たちの名前なんですよ」

「『雪だるま戦争』？……ああ、第七次ブルージュ遠征か」

「ご存じで？」

「無論だ。講義で習っただけだがな。ペルデン三世陛下が皇太子時代に指揮した無謀な遠征だ。歴史的な大敗を喫したと聞いている」

アルツァー准将が正直に言うと、老将はうなずく。

「あの戦争でたくさん部下や同僚が雪だるまになっちまいましたね。生きてりや皆いろんなことができたはずなんですが、飢えと寒さであっけなく死んじまいました」

話のつながりが何となくわかったが、准将は黙ってうなずくだけに留めた。その方が良い気がしたからだ。

老将は淡々と続ける。

「だから生き残った小官が、あいつらの名前を全部預かっておくことにしたんですよ。死んだはずの連中が契約書や公文書にひよっこり出てくるんです。あいつらはまだ死んじやいない。どうです、痛快でしょう？」

「……なるほどな。無名戦士の名を歴史に刻むためか。後世の歴史

家が苦情を言いそうだが、それもまた歴史の一部とってもらえないかな」

すると老将は「おや？」という顔をする。

「お怒りにならんですな」

「貴殿が正しいと思ってやっていることを非難できるほど、私は正しくないよ。私自身、不正と陰謀まみれの身だ。むしろ貴殿の志に少なからず感銘を受けた」

「貴族様にそう言っただけで頂けるとは光栄だ。閣下は他の貴族とは少し違うようですな」

老将は大きく溜息をつき、それからこう続ける。

「だがまあ、今は生きてるヤツらの面倒を見る方が先だ。小官の部下たちを雇ってくれませんか？ 下士官の心得は小官が叩き込みました」

「ふむ……」

「前はユイナーのせいでは負けちゃいましたが、依頼自体は達成して部隊は生還してます。自分で言うのも妙な話ですが、普通なら全滅してた戦いですよ」

老将の言葉にアルツァー准将はうなずく。

「それは認めよう。あの状況で損失を最小限に抑え、目的を達成した貴殿たちは賞賛に値する。クロムベルツ少佐がいなければ、我々は脱出すらできなかった。貴殿の部下の能力は高い」

それから准将はこう言った。

「ただし、さつきも言ったように私の参謀に検討させてからだ。それと名前をコロコロ変える傭兵団長とは契約できん。だが貴殿は本名は決して明かすまい。そこでだ」

アルツアー准将は悪戯つ子のような顔で笑った。

「貴殿のことは勝手に『大クロムベルツ』と呼ばせてもらおうぞ」

「大……クロムベルツ？」

驚いた様子の老将に准将は言う。

「貴殿はクロムベルツ少佐の『おじいちゃん』だろう？ ならばクロムベルツ姓で問題ないはずだ。混同しないように我が旅団では『大クロムベルツ』と呼ぶ。勝手に呼ぶから拒否権はないぞ」

目を丸くした「大クロムベルツ」は、ユイナーそっくりの仕草で頭を掻いた。

「いやはや参ったな……。器のデカイ御仁だよ。なるほど、こりゃユイナーが惚れる訳だ」

（ん？ んんん？ 今、なんて言った？ 今、なんて言った？）

第89話「祖父からの贈り物」

【第89話】

「ようユイナー、元気そうだな」

メディレン領のパツジエ城塞の長い廊下を歩いていたら、とんでもないヤツに声をかけられた。

俺は立ち止まり、懐かしい顔をじろりと睨む。

「よく俺の前にノコノコ出てこられたな、爺さん。いや、ヨーゼフ・フォンクトハウトだっけか？」

すると元相棒の老人は手をヒラヒラ振ってみせた。

「よしてくれ、偽名に決まってるだろ。『密猟師シュレイバー』や『三番通りのパゾ』とかと同じヤツさ」

ああ、あれな。会う人ごとに違う名前を名乗ってて、しかもそのどれも結構長い付き合いつぱかったから驚いた。この爺さんは、複数の偽名を長期間に渡って使い分けているらしい。

俺は呆れつつ苦笑する。

「で、今は『大クロムベルツ』って訳か」

「好きな名前を自由に名乗ってたら、とうとう向こうから名前をつけてきやがった。こんな生活も年貢の納め時かもな」

山ほど偽名を持っている老人はそう言って、人懐っこい笑みを浮かべる。

「だが感謝してるぜ。あのお姫様は俺の部下たちを雇用してくれたからな」

「俺は反対したんだがな……」

これは厳密に言えば嘘だ。小隊長や下士官クラスのベテランは喉から手が出るほど欲しかったし、彼らは雇う価値のある人材だった。ただし以前は敵対していたから、警戒は怠っていない。

「はは、用心深いな。あいつらを教導隊の教官にしたのは、それが理由か？」

「そうだよ。爺さんの部下なんて、いつ裏切るかわからないからな」
新兵や下士官候補生を訓練する教官は、前線での作戦行動には参加しない。

もしかすると後方でスパイになるかもしれないが、メディレン家の防諜能力を舐めてもらっては困る。妙な真似をしたら鮫の餌になってもらうからな。

だがもちろん、それだけが理由ではない。

「それに戦争が長期化すると人材が不足する。ベテランの損失は軍の弱体化を招くからな。経験豊富な軍人には後進の指導を任せて、軍全体の練度を底上げしてもらおうつもりだ」

「相変わらず優等生だな、お前さんは」

老人は苦笑したが、目は笑っていた。

「ま、その方がいいさ。あいつらは退役後に傭兵としてもう一度戦場に立ち、今度は立派に任務を果たした。しかも実力を敵方にも認められて、教官として職を得たという訳だ。俺は好きだぜ、そういう結末」

……今ちよつと、感慨のようなものがにじみ出てなかったか？

俺はこの老人に得体の知れないものを感じている。心の奥底に何かを隠し持っている気がする。さっきの瞬間、それがチラリと見えただ気がした。

俺は老人を見る。

「あんたは仕官しなかったんだよな？ どのみち雇う気はなかったが、そろそろ隠居か？」

「そうやってチクチク皮肉るのは良くねえって、昔教えただろ？ まったく底意地が悪いつたらありやしねえ」

老人はそう言ってニヤリと笑う。

「俺の戦争はまだ終わっちゃいねえ。次に会うときはまた敵同士かもな」

一緒にいると油断がならないが、いなくなると思うと寂しさもある。複雑な心境だ。

「またどこかで傭兵をやるのか？」

「そうだな。ブルージュ公の野心に付き合うのはもう終わりだ。手

持ちの情報をどう読み解いても、最後はお前が邪魔してブルージュは負けるからな。負け戦はもう懲り懲りだ、どうせなら勝ちたいね」
この爺さん、兵隊時代は負け戦続きだったらしいんだよな。

「といつてもキオニスやフィルニア教徒を雇わないだろうし、エオベニアやフィニスは内外の政情が安定してる。後はアガンぐらいか？」

「んーまあ、その辺は行って考えてみるさ。別に帝国を滅ぼしたい訳じゃねえ。意趣返しならもう済んだ」

行き先は明かさないうもりだな。相変わらず用心深い爺さんだ。それにしても今、ちよつと気になる発言をしたな。意趣返し？
俺はわざとしかめっ面をしてみせて、老人をじろりと睨む。

「次はいきなり襲ってくるなよ。こないだは久しぶりに再会した瞬間に襲ってきやがって」

「そりゃ仕事だからしょうがねえだろ。まあ悪いとは思ってるよ。ほら、手え出しな」

なんだよ、飴でもくれるのか？ そんなんじゃ買収されないぞ。

本来なら警戒すべき相手だが、俺は無造作に手を出した。大した危険がないのは『死神の大鎌』でわかっている。

そんな俺の様子が面白かったのか、老人は笑う。

「偉くなつてもお前は変わってねえんだな。安心したぜ、これをや

るよ」

掌に転がされたのは、飴……ではなくて指輪だった。五粒の小さな宝石が嵌め込まれた、金の指輪だ。あちこち摩滅していてかなり古い代物に見える。

「なんだこれ」

「鈍いやツだな、あのお姫様に渡すんだよ。平民将校の給料じゃ指輪ひとつ買えねえだろ？」

ああこれ、婚約指輪のつもりか。一応、こつちの世界でも婚姻の証として指輪や首飾りを贈るんだよな。

「ちよつと待てよ、なんだか薄汚れてるぞ……それに女性の指には大きすぎないか？」

「ああ、そついや男物だった」

「おいおい」

アルツァー准将は手が小さいから、親指でもスポスポ抜けそうなのがする。どうすりゃいいんだ、こんなもの。

俺は突き返そうと思ったが、何となく引つかかるものを感じてポケットにしまった。

「ま、いいや。あんたからの贈り物はだいたい役に立つ。これも役に立つものなんだろう」

「信じてくれるのか？」

「『大クロムベルツ』は俺の元相棒だからな」

俺がニヤリと笑うと、老人は頭を掻きながら俺に背を向けた。

「やれやれ、からかい甲斐がねえよ。だがまあ、そういうヤツが幸せに近いんだろうな。あの不器用そうなお姫様を幸せにしてやりなお互い好き合ってるんだろ？」

「平民と貴族ってのは、そう簡単じゃないぞ」

「だいたい俺、前世分も含めるともうだいぶおっさんだから……。肉体の年齢はともかく、実際の年齢は准将とずいぶん離れている。いろいろ躊躇してしまうところだ。」

しかし老人は遠ざかりながら、軽く片手を挙げてみせた。

「それは俺もよくわかってるさ。貴族ってのはいけ好かねえ。だがお前のおかげでようやく一勝できたぜ。……いや、一笑つてとこか」「何言ってるんだよ？」

俺は爺さんの言葉に妙に引っかかるものを感じていたが、彼は振り返らなかつた。

「気にするな、独り言さ。じゃあなユイナー」

「ああ、またな」

参謀としては彼をここで拘束した方がいいのはわかっているのだが、どうしてもそれができずに俺は彼の背中を見送った。彼の背中が昔より少し小さくなった気がする。つくづく甘いな、俺。

彼が去った後、俺はポケットをこそごそやって指輪を取り出した。なんか……見覚えがあるような……？

よく見ると、指輪の内側に刻印がある。手垢がこびりついて生理的に嫌なんだが、これは帝国の古代文字だな。士官学校でちょっとだけ習ったぞ。

「えーと……『我は』『至高なる』『フィルニアの』『……』『加護と』『信託によりて』『？』『五指を』『握る』『……』『王の中の』『王』『？』」

なんか大層なことが書いてあるな。やっぱりちよつと気になる。

俺は指輪をアルツァー准将に見せることにして、旅団長室に向かって歩き出した。

第90話「覇者の指輪」

【第90話】

俺は旅団長室に行つてアルツアー准将に事情を説明し、例の指輪を見せた。

「あの自称ヨーゼフ爺さん、他称大クロムベルツ爺さんがくれた指輪がこれです」

「指輪か!？」

今一瞬、アルツアー准将の表情が乙女っぽくなつたぞ。やっぱり女の子だから宝飾品には興味があるんだな。

でもこれ、だいぶ汚いんだよな……。

「御期待に添えるようなものではありませんよ?」

「わかつている。お前にそんな期待はしていない」

なんで拗ねるの。軍務させてよ。困つたお姫様だ。

「ほら、早くよこせ」

手を出してきたのはいいんだけど、手の甲が上なのはどついついと?

「閣下、見てほしいのは指輪の内側なので……」

「むじ」

むっ、じゃないよ。また拗ねてる。やりづらいな。

俺は准将の小さくて柔らかい手を取り、掌を上に向けてから指輪を置いた。

「これです」

「あ、ああ。うん。まあこれはこれでなかなか……」

准将は顔を赤くして訳のわからないことを口走ったが、すぐに冷静さを取り戻す。

「こ、これは!?!」

やっぱりぜんぜん冷静じゃなかった。今度は驚いてるぞ。

「おいユイニャー!?! いやユイナー! こんで……これ、この指輪は、本当にあの老人から受け取ったんだにゃ!?!」

噛みすぎだろ。

俺は准将が慌てているのがよくわからなかったが、どうやら重要な指輪らしい。

「間違いありません。ただ、指輪の由来については何も教えてくれませんでした。というか、聞きませんでした。申し訳ありません」

「それは仕方ない。これが何なのか知っているのは、皇帝に会ったことのある者だけ……。いや待てよ、お前は皇帝に会ったことがあるな? しかも複数回」

「あります」

じろりと俺を睨む准将。

「じゃあ、この指輪にも見覚えがあるだろう?」

「あるような、ないような……」

「……お前は本当に軍事にしか興味がないんだな」

そんなことはないです。宝飾品に興味がないだけです。

准将は指輪を何度も確かめながら、こう説明してくれた。

「これは皇帝の権威を象徴する宝具のひとつで、歴代の皇帝が必ず身に着けている『覇者の指輪』だ。内側に刻まれた祝福の言葉が神聖な力を持ち、あらゆる外敵から帝国を守護すると言われている」

「迷信ですよな？」

「無論だ。帝国の現状を見ればわかるだろう」

異世界だから本当に魔法とかあるのかなと思ったが、やっぱりないらしい。

アルツァー准将は指輪を綺麗に拭くと、内側に記された古代文字を読んだ。

「『我は至高なるフィルニアの加護と信託によりて、五指を握る王の中の王なり』と書かれているな」

よかった、俺の解読結果と同じだ。古文は役に立つ。

准将は形の良い眉をしかめ、指輪を何度も確かめている。

「まさか模造品じゃなからうな？　だが細工自体は極めて精巧なものだし、宝石も本物っぽい……」

ややこしい指輪を置いていきやがったな、あの爺さん。

准将は指輪を机上に置き、大きく溜息をついた。

「この指輪については多少気になる点があるが、それは当家の学者たちにそれとなく調べさせよう。今わかっているのは、お前の『おじいちゃん』が皇帝失踪の関係者だということだ」

「あの爺さんはブルージュ公に雇われていましたから、皇帝失踪はブルージュ公の差し金の可能性が高いですね」

「断定はできないが、おそらくそうだろうな。少なくとも、大クロムベルツはそう宣言したも同然だ」

この指輪を俺にくれたってことは、やっぱりそういうことなんだろうな。

「ブルージュ公を非難する決定的な証拠とは言えませんが、少なくともジヒトベルグ公やミルドール公を疑わずに済む訳です。……ま

あ、これが本物なら」

どうしても疑っちゃうんだよな。

だが逆に指輪が偽物だとすれば、非常に精巧なイミテーションを用意できたことになる。帝室に詳しい者でなければ作ることができない。

もちろん、あの爺さんは帝室に詳しくない。私的に偽造するのは不可能だろう。

アルツァー准将はフツと笑い、指輪を小物入れにしまった。

「一応、預かっておくか。ハーフェン殿に相談しておく」

「よろしくお願いします」

「ああ、任せておけ。ところで」

准将は急に窓の方を向きながら、なにかゴニョゴニョ言い始めた。

「私は金より銀の方が好きでな。宝石は蒼や翠が好みだ」

「はい？」

また睨まれたぞ。なんだあれ、遠回しな催促か。

俺は敬礼し、旅団司令部の会計に貯金の残高を聞きに行くことにした。

* * *

【海賊公ハーフェン】

シュワイデル帝国の北側に位置するアガン王国は、流血海の覇権を争う海軍国でもある。

そのアガン海軍の軍艦63隻が洋上を滑るように南下していた。いずれも大型の戦列艦であり、多数の砲門を備えている。

アガンの主力艦隊を率いるのは猛将と名高いルジャール提督。艦長時代に敵艦二隻を同時に沈めた実力から、「アガンの双頭鯨」の異名を持つ。

白髪混じりの老猛将は、歴戦幕僚たちに告げる。

「聞けばシュワイデルの皇帝は行方不明だという。忌々しいシュワイデル艦隊の息の根を止める好機だ。ここで陸軍より先に港を制圧

せねば、我が海軍の名誉にかかわる。しかと心せよ
「はっ」

ちょうどそのとき、水平線に艦影が見え始めた。帝国の海軍旗を
なびかせた艦隊が急速に近づいてくる。

「ルジャー爾閣下！ 敵艦隊に捕捉されました！ 旗はメディレン
家です！ 艦数37、いずれも中型戦列艦の模様！」
「衰えたな、メディレンよ。もはや艦隊の維持もままならぬか」

ルジャー爾提督は不敵に笑った。

「艦隊戦力とは砲の戦力。その数の中型艦では、彼我の砲火力は倍
ほども差がある。海の藻屑になるがいい。接近せよ！」

「閣下、敵艦隊がこちらに左舷を向けました。砲門開きます」

「回頭ついでに苦し紛れの威嚇射撃か。哀れな」

次の瞬間、彼の座乗する艦隊旗艦ペルガリア号が凄まじい破壊音
と共に揺さぶられた。

「なっ、何事だ!？」

「艦首に被弾しました、直撃です！」

「そんな馬鹿なことがあるか！ 座礁ではないのか!？」

ルジャー爾提督は叫ぶ。

「最大射程より四〇五マルゼーも離れているのだぞ！ 艦側面を見
せていないのに、この距離で命中などするか！」

だが破壊音が止まない。続けざまに艦が揺さぶられる。

「二発被弾しました！ 一発は喫水線付近です！ 浸水が止まりません！」

「船乗りが海水にうろたえるな、慌てずに応急修理をしる！ 旗艦がひるんでは艦隊戦はできんぞ！」

怒鳴るルジャールに、ペルガリア号の艦長が叫ぶ。

「閣下、いったん距離を取りましょう！」

「ならん、ここで回頭すれば艦側面を曝すことになる。艦隊を二手に分け、左右から接近しろ！ 敵の砲火力を分散させつつ襲いかかれ！」

戦術教本にも載っていない異常な状況だったが、ルジャール提督は闘志を捨てなかった。「双頭鯨」の異名は伊達ではない。

しかし数分後、ルジャール提督は凄まじい弾雨の中に斃れる。

艦隊旗艦ペルガリア号はメディレン家の高速艦隊から集中砲火を浴び、射程内に敵艦を捉えることすらできずに沈没した。

アガン側の艦船は全て撃沈あるいは拿捕され、帰還できた艦はいなかった。

そのためアガン王は、主力艦隊全滅の第一報をメディレン側から通告されることになる。

第91話「海賊提督ヴィルゲント」

【第91話】

新兵の訓練計画や部隊の再編成案で忙しい俺は、メディレン公に呼び出される。

ライフル砲の実戦配備試験が完了したというのであれば、忙しくても行くしかないだろう。

メディレン公ハーフェンは御機嫌だ。

「クロムベルツ少佐よ。アガン王国の主力艦隊を全滅させたぞ」

「……ライフル砲の実戦配備試験ですよね？」

何やってんだ、このおっさん。

俺は呆れてしまったが、そこから聞いた詳細は恐ろしいものだった。

快速船のみで構成されたメディレン家の特別艦隊は、リトレイユ領の沖合でアガン海軍の主力艦隊を待ち伏せた。シュワイデルの皇帝が行方不明になったと聞けば、当然動き出してくるからだ。

敵の艦隊は総勢63隻で、大型の戦列艦ばかり。まさに洋上に出現した移動要塞だったそうだ。

メディレン艦隊は37隻、しかも中型の戦列艦のみ。砲火力の差は歴然としている。

しかも新型のライフル砲は生産が間に合っておらず、各艦に一門

ずつ配備するのがやっとだったそうだ。

だがここからがメディレン艦隊の恐ろしいところだった。

メディレン艦隊を任されたのは、新任のヴィルゲント提督。普段は航路警備の小艦隊を率いている、ぱっとしない若輩だという。

このヴィルゲント提督はライフル砲を全艦に一門ずつ配備するのではなく、艦隊の三分の一に三門ずつ搭載させた。しかも左舷限定だ。

理由はわかる。

「37隻の艦に一門ずつ配備したのでは、再装填が終わるまで修正射ができません。一門目で当たりを取って、二丁三門目で狙いにいく作戦ですね」

「おお、わかるか」

俺は砲兵科出身じゃないが、まあそのへんは前世のシューティンゲームとかで経験がある。

「それと各艦は一定間隔で並びますから、一門ずつでは砲火力の密度が薄くなります」

「そうだ。……まあ、私も説明を聞いて得心したのだが」
得意げにうなずきつつも、微妙に素直なメディレン公。

こうして十分な火力密度を得たメディレン艦隊だが、敵艦隊と正面から撃ち合うには足りない。

そこでまず敵艦隊の旗艦に砲撃を集中させ、指揮系統の破壊を狙った。

これが予想以上にうまくいってしまったらしく、旗艦はあっさり撃沈。アガン艦隊の提督は別の艦に移乗する暇もなく戦死してしまつたらしい。

これも理由はわかつた。

「ライフル砲の貫通力と低伸性が原因でしょう。大きな放物線を描く従来の砲と違い、ライフル砲弾は敵艦に真横から命中します。喫水線付近を撃ち抜けば浸水や水の抵抗などで速力が落ち、身動きが取れなくなりますので」

「そうだ。……貴官は何でも詳しくすぎて、実に説明し甲斐がないな。だいぶ勉強したらしいメディレン公がつまらなさそうにしている。すみません、空気が読めなくて。」

この喫水線付近を狙って足を止めてしまう戦法が大当たりした。メディレン艦隊はもともと高速艦なので速力に余裕があり、巧みに距離を取りながらアウトレンジから叩きまくった。

アガン側は提督の戦死によって指揮系統が乱れており、メディレン側のどの艦に新型砲が搭載されているか判断できなかったようだ。

メデイレン艦隊のヴィルゲント提督の巧みな采配によって、旧式砲の艦は囷や盾として新型砲の艦を護衛。絶対に近づけさせず、逃がもしないという艦隊機動でアガン艦を次々に航行不能にしていた。

「で、最後は身動きできなくなった敵艦隊が降伏してきてな。状態の良い艦だけ拿捕して、残りは沈めてきたという訳だ。37隻で出撃した艦隊が50隻以上になって帰港してきたときには、さすがに私も驚いた」

戦闘したら艦が増えるなんてびっくりだよな。

敵の捕虜には余計な情報は渡さず、ひとまず拘留しているらしい。いずれは捕虜交換で帰してやるそうだ。

一部の水兵はそのままメデイレン艦隊で雇用するという。

海軍の水兵は厳密には軍属扱いの民間人で、アガン水兵にはシュワイデル出身の船乗りが大勢いる。逆に帝国の水兵にもアガンやエオベニア出身の船乗りが大勢いるそうだ。

そういうものらしい。

俺は安堵して咳払いする。

「当面はアガン側にライフル砲の機密が渡らないようで、ひとまずは何よりです。それで、そちらの海軍将校はどなたですか？」

さつきから海賊船長みたいなヤツがこっちを見てるんで、どうにも落ち着かないんだが。

するとそいつが元気に起立した。

「俺か！？ 俺は海軍少佐のヴィルгентだ！ よろしくな！」
アガン艦隊全滅させたのお前か。イメージしてたのと全然違ってた。

「てめえの開発したクロムベルツ砲、メチャクチャ強えな！ 気に入ったぜ！」

声がデカい。ここは船の上じゃないんだぞ。

どうしよう、俺の苦手なタイプだ。

メディレン公は嬉しそうな顔をしている。

「ヴィルгентは私の遠縁でな。海軍は大佐までしか階級がなくて、上が詰まってなかなか昇進させてやれずにいたのだ。今回の戦功で中佐に昇進させてやれる」

「ということ、すぐにてめえより上の階級になるぜ！ 敬語使えよ！」

得意げに腕組みしてふんぞり返っているヴィルгент提督に、メディレン公が苦笑してみせる。

「いや、クロムベルツ少佐も同時期に昇進させる。ライフル砲開発の功があるからな」

会話の感じからすると、俺が転生者であることをメディレン公はヴィルгент提督に伝えていないようだ。その方が助かるが、開発したのは俺じゃないんだよな……前世の誰かだ。

まあでも転生者だとバレると異端審問だし、ここは秘密にしてお
くか。

ヴィルゲント提督は主君のメディレン公にギヤーギヤー言ってる。
「そりゃねえだろ伯父貴！ 陸軍なんかほつとけよ！ こいつ参謀
だろ！？ どうせ戦場に立ったことも……」

「キオニス遠征のジャラカード会戦から無傷で生還した隊がひとつ
だけあっただろ。あの隊の参謀がクロムベルツだ」
「げっ!?!」

目を剥いてるヴィルゲント提督。こいつの反応面白いな。

だが一言付け加えておかないと。

「無傷ではありません、メディレン公。あの戦いで大事な部下を四
人失いました」

それを聞いたヴィルゲント提督の表情がまた変わった。

「へえ……面白いヤツだな、あんた」

俺もお前のことは面白いと思ってるよ。

メディレン公は続ける。

「さらにリトレイユ公ミンシアナの謀反を阻止し、反乱軍を討伐し
たのもこの男だ。武勲ではお前など足下にも及ばぬ。敬意を忘れる
な」

「うっ……ぐう……」

ヴィルゲント提督はしどろもどろになっている。やっぱり面白い
ぞ、こいつ。

だが面白がってばかりもいられない。

たかだか少佐、しかも普段は航路の警備しかしていないヴィルゲントが実戦配備試験に抜擢されたのは、他の提督たちが嫌がったからだ。ベテランほど、慣れてないものを嫌がる傾向がある。

こりやもう少し、この男に軍功を立ててもらわないといけないな。そう思っていたら、ヴィルゲント提督がギリギリ歯噛みしながら唸る。

「こつなったら、てめえ以上に大暴れしてやるぜ……見てろよ、『死神参謀』！ お前が死神なら、俺は鮫……いや嵐……そう、『鮫嵐』！ 『鮫嵐』のヴィルゲントだ！」
絶対に今思いついただろ、そのサメ映画みたいな二つ名。

ヴィルゲント提督は夏休みの男子小学生みたいな目をして拳を握りしめた。

「アガンの『双頭鮫』と名高いルジャー提督をブチ殺した以上、俺はそれ以上の鮫だからな！」

別にサメで競わなくてもいいと思う。どんだけサメが好きなんだ。

「おつといけねえ、死人の名前を出すときはきちんと悼まねえとな……。安らかに眠れよ、ルジャー。あんた、いい提督だったぜ……」

妙なところで倫理的だった。

ともあれ、こいつがアガンの主力艦隊を全滅させてくれたおかげで、国境警備の第五師団は少し楽になるはずだ。余剰戦力を回してもらいやすくなるだろう。

この調子で頑張ってもらおうか。

「これからもよろしくな、ヴィルゲント提督」

「おう、クロムベルツ参謀！」

ヴィルゲントの強すぎる握手に振り回されながら、俺は次に何をすべきかを考え始めていた。

第92話「曲者ぞろいの少尉たち」

【第92話】

メディレン公の艦隊がアガン海軍の主力艦隊を完全に撃滅したことで、帝国東部の戦況は一変した。

俺の執務室でロズ中尉がコーヒーを飲みつつ、ハンナ下士長と世間話をしている。

「アガン王がリトレイユ公に講和を求めてきたそうだな」

「えっ、そうなんですか！？ あの戦争大好きなアガンの王様が！？」

「驚きだろうか？ とはいえアガン海軍が壊滅して航路は帝国の支配下にあるからな。その状態で陸軍だけ侵攻しても補給が続かないのさ」

俺は書類仕事をしつつ、わざとらしく咳払いをしてみせる。もちろん全く通じていない。

ロズは砲術教本をパラパラめくりながら会話を続ける。

「アガン陸軍の基本戦略は、海軍と連携しながら海岸沿いを南下することだ。海上輸送が兵站の根幹に組み込まれている。だろ、ユイナー？」

こっちに話を振るな。俺はしかめっ面でうなずいてみせる。

「そこのおしゃべり男の言う通りだ。アガン陸軍は高い打撃力と浸透力を誇る難敵だが、それは物資や補充兵の輸送を海軍に丸投げしているから成立したことだ。海軍が壊滅した今、陸軍は拠点から半日の範囲でしか動けない」

戦場の女神とされる大砲も海軍に運ばせていたので、アガン陸軍には騎馬砲兵がほとんどいない。砲兵が歩兵の進軍速度についていけないのだ。

そのことを説明しつつ、俺は続ける。

「攻め込む力を失ったアガンにとっては、攻め込まれないことが何よりも重要になった。そりゃ講和も申し込むだろう。もちろんメデイレン公は足下を見て、あれこれと交換条件を引き出したが」

「メデイレン公ですか？ 講和を申し込まれたのはリトレイユ公ですけど……」

ハンナがそう言いかけたが、ふと何かに気づいた様子だ。

「そういえばリトレイユ公、もう隠居同然なんでしたっけ？」

「ああ。嫡男のセリン殿に家督を譲る準備をしているぞ。いや、させられている」

まだ五才のセリンは、第六特務旅団のリコシエ秘書官を実姉だと思っ
て慕っている。前リトレイユ公ミンシアナの影武者だったリコシエは、今や本物以上の影響力を持っていた。

そしてセリン以外に家督継承権を持っている者はいないので、リ

トレイユ家はメディレン家の傘下に入ったと言っていていいだろう。

そんなことをハンナに説明していると、俺はロズの視線に気づいた。何か言いたそうな顔をしている。

「どうした？」

「いや……。お前、自分の手柄のことは本当に何にも話さないんだな」

手柄？

「クロムベルツ砲のことだぞ？　俺が砲兵将校なのを忘れてないだろうな？」

「気になるか？」

「気になるも何も、メディレン公がうちの旅団にも何門か回してくれたからな。これからは慣熟訓練だ」

アガン艦隊を全滅させたライフル砲が使えとなれば、歩兵の支援が楽になるな。これは助かるぞ。

「ああ、そうだったな。期待してるぞ」

「そうじゃなくてだな」

ロズ中尉は溜息をつく。

「あのとんでもない大砲はお前の発案なんだろう？　性能試験表を見たが、メチャクチャな射程と威力だ。あんなものを撃ち込まれる敵兵が哀れになる」

「ライフル式マスケット銃を大きくしただけだから、そんな大層なものじゃない」

「お前はそう言うがな、これは戦争の常識を塗り替える新兵器だ。ユイナー・クロムベルツの名前は砲術史に永遠に残るぞ」

俺は前世の世界から持ち込んだだけなので、自分では何一つ発明していない。歴史に残すのはやめてほしい。

ロズはそんな俺の表情から何かを読み取っていたようだったが、もう一度深々と溜息をついた。

「お前は昔っからそうだったよな……」

「よくわからんが多分そうだ」

他人から見れば俺は画期的な火砲を生み出した人物なんだろうが、俺から見れば前世で学んだことをそのまま伝えただけだ。賞賛されても後ろめたさが残る。

だから俺は知らん顔をして立ち上がった。

「さて、では砲兵隊はライフル砲の慣熟訓練を行ってくれ。歩兵隊の方は一足先に出陣だ」

俺は制帽を被ると、ハンナに向き直る。

「次に会うときはハイデン少尉と呼ばせてもらおうぞ」

「はいっ！ しっかり精励いたします！」

びしっと敬礼する大柄なハンナ下士長。

我がシュワイデルでは手続き上、海軍士官学校を卒業しても陸軍少尉にはなれない。

だが「手続きを遵守して当家が滅びたら帝室以上の間抜けだな」というメディレン公のお言葉が第四師団司令部に突き刺さり、戦時特例ということで少尉任官のお膳立てが整った。

いいのかなとは思うが、メディレン公の言ってることにも同感できる。今はライフル砲を扱える砲兵将校が一人でも多く必要だ。俺は砲兵科の二人に軽く手を振る。

「ブルージュ軍の侵攻は俺たちが食い止めておくから、なるべく早く来てくれよ」

うなずくロズと敬礼するハンナに背を向けて、俺は外に出た。

廊下では緊張した面持ちのミドナ下士長とローゼル下士長。それに新たに下士長になった古参兵たちがいる。

第六特務旅団の戦列歩兵は二個中隊になり、小隊長は合計六人になった。新任下士長たちは新設された小隊を率いることになる。

「行こうか」

「はい、参謀殿」

六人もの下士長を従えて廊下を歩いていると、俺もずいぶん偉くなったんだなあ……と感慨を抱く。少佐だから当たり前だけど。

将校不足の旅団で一人で参謀やってると、部下がぜんぜんいないので実感を抱きにくい。

もつと問題なのが自前の中隊長を用意できなかったことだ。
仕方ないから第五師団から余り物の少尉を二人派遣してもらった。
人選で揉めに揉めたようで、今日になってやっと到着した有様だ。

本当は少尉ではなく、ある程度経験を積んでいる中尉の方が嬉しいんだが、ベテラン将校なんてそうそう余ってないので仕方ない。
そいつらが旅団長室で俺たちを待っていた。

まず一人目。

「デイゴ・フォルトン少尉であります」

ニヤリと笑って敬礼したのが、痩せた中年の男性将校だった。見るからにベテランそうだが、もちろんまともなベテラン将校が送られてくるはずはない。

「よろしく。ユイナー・クロムベルツ少佐だ」

「光栄ですな。死神には、小官のことは放っておいてくれとお伝えください」

やな挨拶だな、おい。

だがまあ、こいつの経歴を見れば納得はできる。

平民出身は大尉で打ち止めとはいえ、普通はこの年齢になればお情けで中尉にはしてもらえない。新米少尉と同格では兵に示しがつかないからだ。

実はこのフォルトン少尉、一度は中尉に昇進して中隊長になっているのだが、物資の横流しで降格処分を受けている。よく不名誉除隊にならなかったものだが、何か理由がありそうだな。

一方で軍功と呼べるものはゼロだから、そりゃ第五師団もいらないだろう。

そして二人目。

「シャル……シャル・レーン少尉、であります」

女の子か？　女の子だよな？　どう見ても金髪サラサラの美少女だぞ？

いやでも、書類には確かに男性と書いてあった。しかも卒業したての新米将校ではなく、軍歴が二年もある。訳がわからない。

落ち着け、確かに声は低めだ。敬礼もビシッと決まっており、同じ職業軍人だなという安心感がある。

たぶん大丈夫だろう。……たぶん。

彼はこれでも貴族将校なのだが、レーン家はリトレイユ門閥の末流に位置する弱小領主らしい。領主本人が畑を耕しているような有様なので、窮乏は推して知るべしだろう。

レーン少尉は俺の表情を見て察したのか、小さな声で申し訳なさそうに言う。

「小官はよく御婦人と間違われるのでありますが、男ですのでお気遣いは無用です」

「ああ、承知している。男同士、遠慮はしないぞ」

士官学校の成績そのものはなかなか良いし、後方勤務の将校として軍務も堅実にこなしてきたようだ。決して悪い将校ではないだろう。

ただ平民の兵士たちが彼の命令を素直に聞くかと考えると、ちょっと厳しい。

兵士たちは小隊長に命を預けているので、見るからに頼りなさそうな隊長では信頼されない。前線指揮官として使えないから余ったんだろう。うちに回されてくるのも納得できる。

だが俺としては好都合だ。なんせ彼が指揮する兵士たちは彼と同じぐらい華やかだ。みんな女の子だからな。威圧感がない方が親しみやすいだろう。

だから俺は笑ってみせる。

「そつちの不良中年よりも期待している。貴官ならきつと良い働きをしてくれるだろう」

その瞬間、レーン少尉が頬をパアツと赤らめた。

「あつ、ありがとうございます！ 任務に精励いたします！」

表情や仕草がいちいち色っぽいんだが、本当に男性なんだよな？

それを見ていたアルツァー准将が小さく咳払いをする。

「これで不足していた将校も補充できた。クロムベルツ少佐は大隊長を兼務し、臨時の中隊長二人の面倒を見てくれ。彼らの働きぶり次第では正式に中隊長とし、中尉に昇進させる」

「小官は指揮官ではなく参謀なのですが……」
そこらへんはきっちり分けようよ。
しかし准将は俺をジロリと見る。

「私に彼らの面倒が見られると思うか？」
「無理でしょうね」

見るからに曲者っぽい不良中年と、気弱そうな貴族のお坊ちゃんだ。誇り高く勇敢なアルツァー准将とは反りが合わないだろう。

わかったよ、俺がやればいいんでしょう。

「旅団長命令とあれば仕方ありません。やるだけやってみます」
「うむ」

満足そうにうなづく准将を見て、二人の少尉は不思議そうな顔をしていた。

第93話「寄せ集めの軍団」

【第93話】

第五師団の無料二連ガチャで来た少尉たちは、予想通り訳アリ物件だった。

そして予想通り、俺が彼らの面倒を見ることになる。

面倒臭いことがどんどん増えてしまつて憂鬱だが、俺ももう少佐だから仕方がない。

俺は新任の少尉二人に声をかける。

「デイゴ・フォルトン少尉」

「なんです？」

人懐っこそうな笑みを浮かべている中年少尉に、俺は淡々と質問する。

「貴官の軍歴を見た。アガン軍に物資を横流ししたそうだな？」

「まあ、そうです」

悪びれもせずに笑っているフォルトン少尉。

アルツァー准将がしかめっ面をしている。

だが俺は全く変わらない口調で、重ねて質問した。

「賞罰欄の付記を見る限り、貴官は占領地の民間人に要請されて食料を配給しただけだな？ 降格の理由としては不自然だ」

フォルトン少尉は俺をチラツと見たが、すぐに視線をそらした。「お偉方が決めたことです。小官の知ったこつちやありません」この様子だと、どうやら何か事情がありそうだ。

書類上では紛う事なき腐敗將校だが、俺は彼の経歴を見たときから妙に引つかかるものを感じていた。

物資の横流し以外、彼の経歴には汚点と呼べるものがない。もちろん勲功もないのでトータルではマイナスの経歴だが、彼を切り捨てるのは早計な気がする。

俺はフォルトン少尉にこう言う。

「同感だ。貴官の過去など、俺も知ったこつちやない」第五師団から送られてきた書類の束を、俺は真つ二つに破り捨てた。

実はこれをやるために、事前にこつそり切れ込みを入れておいた。さすがにこんな分厚いものは引き裂けないからな。

「な……何してるんです、少佐殿？」

驚いた顔のフォルトン少尉に、俺はゆっくり歩み寄る。

「俺は貴官が何をしてきたかなど興味はない。興味があるのは、これから何をしてくれるかだ」

フォルトン少尉に顔を近づけると、俺は下町の裏通りで培った威圧の表情をしてみせた。

「俺は貴官を少し面白そうな男だと思っている。だがもし貴官のそ

の韜晦が無能を隠すだけの薄っぺらい欺瞞なら、すぐに原隊に送り返してやる」

俺の挑発的な物言いに、フォルトン少尉が一瞬だけ鋭く険しい表情を見せた。予想通り、彼の本当の表情には凄みがある。

だが彼の素顔は一瞬で引っ込み、すぐに皮肉っぽい笑みに覆い隠されてしまう。

「へいへい、おつかねえ上官殿ですな。せいぜい精励しますよ」

とりあえずこんなもんでいいだろう。

そう思っただけ振り返ると、シャル・レーン少尉がガタガタ怯えている。明らかに俺を見て怖がっている。

「ひっ……!!」

肝が小さすぎる。大丈夫かな、この人。

俺はなるべく笑顔で話しかける。

「あー、貴官を原隊に送り返す気はないぞ。さっきも言ったが、貴官には普通に期待しているからな。こんなダメなおっさんと同じように扱うつもりはない」

フォルトン少尉が渋い顔でぼやく。

「参謀殿。こいつが可愛い顔をしてるからって、そりゃないでしょう」

まあ待て、ここからが本題だ。

「フォルトン少尉は前線指揮官として戦えることを証明している。最低限の水準はクリアしている訳だ。だが貴官にはそれが無い。前線での指揮経験がないからな」

「え……？」

ビクツとして俺を見上げるレーン少尉。

俺は微笑みながら続けた。

「貴官は本来、小隊長として経験を積むべき時期だ。それを飛ばして中隊長にするのだから、フォルトン少尉と同じという訳にはいかないだろう」

「す、すみません!？」

怯えているレーン少尉に、俺はなるべく優しく言う。

「落ち着け。無理だと思っていれば、旅団長閣下も貴官を中隊長代行になどしない。それだけ期待しているということだ。すぐにベテランのフォルトン少尉と同じ働きができると信じている」

「は……はい!」

弱気に見えてもそこは職業軍人。表情を引き締めて、レーン少尉はビシッと敬礼する。

「御期待に沿えるよう、粉骨砕身いたします!」

「うん。だが無理はするなよ」

それから振り返って、フォルトン少尉に嫌味をぶつけてやる。

「貴官が有能なら、年下の同僚をフォローするぐらいは訳もないだろうな」

「小官は給料分しか働きたくないんですがね」

ぼやくフォルトン少尉に、俺はニヤツと笑ってみせた。

「中隊長になれば給料は増えるが、それだけ仕事も増えるさ。早く実力を発揮して大隊長になってくれ」

そのとき、ほんの一瞬だがフォルトン少尉が驚いた目をしたのを、俺は見逃さなかった。

フォルトン少尉は顔を覆って大仰に溜息をついたが、やがて降参したように手をヒラヒラ振った。

「わかった、わかりましたよ。こんな貴族の坊ちやまに足を引つ張られちゃ困るから、面倒ぐらいいは見ますって。ったく、ひでえ少佐もあつたもんだ」

「俺もそう思う」

真顔でうなづく俺。

「さて、そんな悪辣で酷薄な少佐の俺だが、貴官たちには伝えておくべきことがある」

「いや、そこまでは言つてませんが」

呆れたような顔をしている中年の少尉を尻目に、まだ二十代前半の姿をしている俺は机上に地図を広げる。

「貴官たちの到着を待っている間に、情勢が少し動いた。最新の情報伝える」

ちらりと二人の顔を見ると、フォルトン少尉は聞いていないような顔をしているが地図はしっかり見ている。若輩のレーン少尉は緊張した面持ちで何度もうなずいていた。

俺は話を続ける。

「現在、帝都ロツツメルはブルージュ軍の支配下にある。ロツツメルから東方二十キラムほどの範囲はおおむねブルージュ軍が優勢だ。ただし領主たちは皇帝陛下の帰還を信じて、ブルージュ軍に対しては不服従を貫いている者が多い」

するとフォルトン少尉が皮肉っぽい笑みを浮かべる。言いたいことはわかるぞ。俺が代弁してやろう。

「ここで侵略者に尻尾を振って、皇帝が帰還すれば立場がなくなるからな。形式的にはシュワイデル門閥の領主は皇帝の代官に過ぎない」

俺は地図を示した。

「これがブルージュの侵攻が遅々として進まない一因だ。帝都近郊の領主たちが反ブルージュのため、ブルージュ軍は補給線に不安を抱えている。そのため東に勢力を拡大できない」

そしてメディレン家が東部の領主たちを門閥に関係なく取り込んでおり、強固な防衛線を築いている。「祖国防衛」という大義名分は貴族たちを結集させる原動力になっており、今のところ連携はうまくいっているようだ。……今のところは。

どうせすぐに内紛が起きるだろうから、早いところ決着をつけない

といけない。

そこは伏せておいて、俺は説明を続ける。

「ブルージユ側は内部に対立を抱えている。ジヒトベルグ家とミルドール家はブルージユにとって潜在的な敵だ。今も帝都の支配権を巡って争っているらしい」

ジヒトベルグ公とミルドール公は、さすがに同じ帝国貴族であるシュワイデル門閥領主たちに苛烈な仕打ちはできない。情勢がどう変化するかわからないからだ。

一方、ブルージユ公としては帝国領を切り取るチャンスだ。できるだけ領地を奪いたい。

だがブルージユ公が東に進もうとすれば、ミルドール公とジヒトベルグ公が背後を固めることになる。今は味方だが、いつ敵になるかわからない連中だ。

とはいえこのままじっとしていても意味がないので、ブルージユ公が動き出した。自ら大軍を率いて東に進軍し、東部の要塞をいくつか奪取するつもりようだ。

「既に先遣隊が要塞への援軍として派遣されている。我々は後詰めの援軍だ。貴官たちには女子戦列歩兵一個中隊をそれぞれ預ける」

本当は「誰も死なせるな」と言いたかったのだが、そんな無茶は言えないので我慢する。どれだけ優位を得て慎重な戦い方をしても、

やはり死ぬときは死ぬのだ。

「我が旅団は歩兵二個中隊と砲兵一個中隊で構成されている。実質的な戦力は一個大隊だ。しかも砲兵中隊は新型砲の慣熟訓練中で出撃できない」

顔を見合わせる少尉たち。レーン少尉が青い顔をしている。

「それってつまり、小官たちだけで戦うってことですか？」

「ま、そういうことだな。よくある話さ」

肩をすくめるフォルトン少尉。こっちは肝が据わっているな。

俺は続ける。

「心配するな。メイレン公が兵を掻き集めてくれた。いくつかの大隊が臨時で第六特務旅団の指揮下に入る。連隊長にする将校がないので、これらの大隊は旅団長が直接指揮を執る予定だ」

もちろんアルツァー准将にとっては初めての経験なので、俺が参謀として支えなければならぬ。中隊の面倒を見ている余裕はない。だからこいつらに働いてもらわなきゃならないんだ。俺は祈るような気持ちで、この新任の中隊長代行たちを見つめる。

「貴官たちの中隊は旅団長閣下の親衛隊として動く。他の大隊から常に見られていることを忘れるな」

「了解でありますよ、少佐殿」

「りよ、了解であります！」

苦笑しながら敬礼するフォルトン少尉と、頬を紅潮させて敬礼するレーン少尉。

俺は不安な気持ちを押し隠すように、制帽を目深に被り直した。
「ではブルージユ公の鼻面を殴りに行くか。兵たちへの挨拶と訓示
は各自で行え」

無事に帰れるといいんだが……。

第94話「裏切りのデイゴ」

【第94話】

* * *

【裏切りのデイゴ】

デイゴ・フォルトン少尉はパツジエ要塞の広い練兵場を歩きながら、周囲を油断なくうかがっていた。

（本当に女ばかりだな）

「本当に女ばかりだな」

思わず声に出してしまった。

隣を歩くシャル・レーン少尉が輝くような金髪を揺らして振り返る。

「本当ですね、フォルトン少尉。平民とはいえ、こつも華やかだと軍隊とは思えない」

（お前さんも同じぐらいに場違いで華やかだな……）

だが相手は底辺とはいえ貴族なので、デイゴは言葉を慎んだ。

「全くだな。第五師団で人選が難航した訳だ」

「雄々しい益荒男たちを率いてこそその軍人ですから、打診を嫌がる将校が多かったと聞いています」

(雄々しい益荒男なんて言葉、その綺麗な唇から出てくるとは思わなかったぜ)

デイゴは内心で苦笑したが、ついなので聞いてみる。

「レーン少尉は嫌がらなかったのかい？」

シャルは恥ずかしそうに頭を掻いた。

「お前も女みたいだからちようどいいだろうと、連隊副官に言われました。あ、連隊副官は我がレーン家の本家筋でして……」

「なるほど、貴族様の論理で断れなかったって訳か」

デイゴは軽く肩をすくめてみせた。

「俺は自分から志願したんだ。あのまま第五師団にいても出世は見込めないからな。少尉のままじゃ、退役後の恩給暮らしなんて夢のまた夢さ」

「そうですね、大尉の恩給でも割とギリギリだと聞きますし。小官も実家が貧乏なので、できれば退官までに少佐までは行きたいところですよ」

「あー、確かに貴族様は大尉じゃ格好がつかんよな」

そのせいで退官直前に階級を上げて、書類上の見た目だけ整える慣習も横行していると聞く。平民にも導入してほしいもんだとデイゴは内心で溜息をついた。

気を取り直したデイゴは、要塞内で出陣の準備をしている女性兵士たちを見る。

(くつちゃべってダラダラやっているように見えるが、何をするにも手際がいいな。見ている間にどんどん作業が片付いていく。ガキの頃、洗濯場でお袋たちが同じようにしてたのを思い出すな)

同じことに気づいたのか、シャルがつぶやく。

「作業が早いですね。笑いながらのんびりやっているのに、誰もサボってない」

「そうだな。俺の元部下たちにも見習わせたいぜ。原隊じゃ搾り力スみたいな連中しか回ってこなかったからな」

軽口を叩きつつ、デイゴは考えていた。

(さて、こりゃリトレイユ公の思惑通りって訳にゃいかなさそうだぞ)

デイゴ・フォルトンはリトレイユ公のスパイだった。

現当主は大逆人ミンシアナの実父で、当主に返り咲いた後にはミンシアナを非難する言動を繰り返している。彼が制作を命じた戯曲「愚かなミンシアナ」は、その象徴だ。

だがミンシアナを非難することで我が身の安泰を保とうとしたりトレイユ公は、逆に軽侮の眼差しを向けられることになる。

「実の子をあれだけ悪く言えるのはさすがだな。子が子なら親も親だ」

『後継者の育成は当主の義務だろうに、己が責を棚に上げて恥ずかしくはないのか』

そんな声が相次ぎ、リトレイユ公の影響力や人望はみるみるうちに失われる。メディレン家に走る領主たちも出てきた。地理的に近いから、どこの領主も数代遡ればメディレン門閥と姻戚関係のひとつぐらいはあるからだ。

焦ったリトレイユ公は、ある密命をデイゴの上官に言い渡した。

『クロムベルツ少佐の醜聞を探り、失脚させよ』

(いくら焦ってるとはいえ、クロムベルツ少佐の弱みなんか握ったところでリトレイユ公の立場が変わると思えん。それに今、そんなことやってる場合じゃねえだろ……?)

デイゴは昇進の好機とばかりに当主派の上官から密命を受領したものの、正直すでにやる気をなくしていた。

『リトレイユ公はクロムベルツ少佐の醜聞をお望みだ。彼の弱みを握ればリトレイユ家の復権も夢ではないと仰せでな。女に囲まれていれば醜聞のひとつぐらいあるだろうと』

『ちよいと確認したいんですが、本気で言ってるんですよね?』

『主君に命ぜられれば、身をもって忠誠を示すのが貴族というものでな』

『じゃあ御自分で身をもって示せば……』

『このまま第五師団にいても、お前は退役まで少尉のままだぞ。行くのか行かないのか早く決めろ』

『行きます』

こうしてデイゴはリトレイユ公のスパイになった訳だが、着任初日に密命を投げ出したくなっていた。

(思っていたより訓練されてるな。さすがに白兵戦は苦手そうだが、部隊全体に規律がある。「いい兵隊」の匂いがするな)

小隊長として誰よりも長く最前線で兵を率いてきた経験から、デイゴは第六特務旅団の兵士たちを的確に評価していた。

(キオニス戦役をほぼ無傷で生き延びた上に、ミンシアナの乱を鎮圧した連中だから当然か。新兵らしいのも大勢いるが、新兵特有のもたつきがない。古参兵の影響を受けてるせいか)

デイゴは頭を搔いて気持ちを切り替えた。

(ま、兵どもが精強なのは予想してたことだ。戦歴が強さを証明してる。女も男も関係ねえ。となるとだ)

チラリと振り返ると、クロムベルツ少佐が海軍少佐と激しく議論していた。

(上層部との軋轢あたりはどうか？ 三年足らずで三階級も昇進した前代未聞の平民将校だ。貴族将校、しかも海軍となれば相当に不和があるはず)

耳を澄ますと、案の定かなり険悪なやり取りだ。

「だーかーらー！ ロズ・シュタイアーだっけ？ あの砲兵中尉く

れよ！」

「絶対やらん」

「名譽の戦傷で脚が悪いんだろ？ 船なら歩かなくていいぜ？」

海軍少佐の言葉に、クロムベルツ少佐はきつぱりと言い返す。

「揺れる船内では、立っただけで脚に負荷がかかる。階段やタラップの上り下りも負担だろう。おまけに大半の船には船医が一人しかない。傷病兵が大勢出ればロズの診察はできなくなる」

すると海軍少佐は黙り込む。デイゴはそれを見逃さなかった。

（陸軍の平民少佐にああまで言われちゃ、海軍の貴族将校サマとしちゃ不愉快だろう。こりゃ案外……）

だが海軍少佐は幼児のようにこっくりうなずいた。

「道理だな。ちょいと惜しいがシュタイアー中尉は諦めよう」

「わかってくれたか」

「おう、だからハイデン下士長をくれ！ ありゃいい砲兵将校になるぜ。頭がいいだけじゃなく、度胸も人望もある！ おまけに何もかもがでかくて美人だから最高だ！ あと五王棋もメチャ強え！」

クロムベルツ少佐が頭を抱える。

「わかってないなお前は！？ こっちは砲兵将校が足りてないんだよ！ 海軍は砲兵将校なんかいくらでもいるだろ！」

「いや、陸戦ができるヤツが欲しいんだよ。陸戦隊の上陸支援をするときや敵の港を叩くときにゃ、陸軍の砲兵隊と戦わなきゃならぬいからな」

「だったら最初からそう言ってくれ」

クロムベルツ少佐の言葉に、パツと顔を輝かせる海軍少佐。

「じゃあいいんだな!？」

「ダメに決まってるだろ。ハイデン下士長は旅団長閣下の腹心だぞ。引き抜いたらメディレン公の叔母上が海軍司令部まで殴り込んでくる」

すると海軍少佐は壁に手をつき、わざとらしく溜息をついた。

「はあ……海軍士官学校への口利き、俺も協力してやったのによ」

「そうだったのか。ありがとう、ヴィルгент少佐」

クロムベルツ少佐の言葉に驚くディゴ。

(ヴィルгент!?!? アガン海軍の主力艦隊を一隻残らず全滅させた『海の悪魔』のヴィルгентか!?!?)

残念ながらヴィルгент提督の自称『蛟嵐』は全く普及していない。

リトレイユ地方の人々は、メディレン出身の彼に微かな畏怖をこめて『海の悪魔』と呼んでいる。

(おいおい、海軍の大英雄様が後ろ盾かよ………てつきり不仲なんだろつと勝手に決めつけてたが、こりゃ予想外だ)

困惑するデイゴには気づきもしないで、ヴィルゲント少佐は笑顔を見せた。

「いやあ、さすがに伯父貴に頭を下げられたら断れねえからな」

「それはここで公言していいヤツなのか？」

「海の男が細かいこと気にすんな！」

「俺は陸の男だ」

(何だかずいぶん親しそうだな。思ってた以上に貴族将校との人脈が太いぞ)

実際には二人はお互い「なんだこいつ」ぐらいにしか思っていないのだが、デイゴの誤解を解く者はいない。

デイゴの勘違いは続く。

(参ったな、クロムベルツ少佐は見るからに仕事一筋って感じだし、ここに来てからはまだ参謀を悪く言うヤツを一人も見えてねえ。こりゃ無理筋だろ。リトレイユ公のアホ臭い陰謀ごっこにそこまでして付き合う義理もねえしな)

そのときふと、デイゴはクロムベルツの言葉を思い出した。

『俺は貴官が何をしてきたかなど興味はない。興味があるのは、これから何をしてくれるかだ』

ふと立ち止まるデイゴ。

(それってつまり、俺の過去は不問ってことだよな。これからの働

きを評価すると)

あのとき、クロムベルツは第五師団からの申し送り書類を破り捨てた。その思い切りの良さに驚いたが、デイゴは書類に切れ込みが入っていることを見逃さなかった。

(芝居が下手だぜ、死神さんよ。だが俺と会う前から、あの台詞と仕草を用意していたとは驚きだ。今後の働きに期待するって言葉は、その場の思いつきじゃねえ)

シュワイデル人が称揚する「男らしさ」とは、往々にして短慮や粗暴の裏返しだ。デイゴ自身はそういう見せかけの「男らしさ」を嫌っていた。戦場では命取りになるからだ。

(熟慮の末に俺の過去を不問にしてくれた訳か。そこらの勢いだけの安っぽい連中とは違う、本物の男だな。だとしたら俺は……)

ぼんやりと考えるデイゴの背中を、トントンとレーン少尉が叩いた。

「フォルトン少尉、ぼちぼち行きませんか？ 受け持ちの中隊員たちに挨拶しておかないと」

「そうだな。しょうがねえ、少佐様のために働くか」

デイゴは頭を掻くと歩き出した。

第95話「この世界は楽しみに満ちて」

【第95話】

* * *

【戦化粧】

「お久しぶりです、リコシエ殿。あ、どうぞお座りください。散らかっていますけど」

シャル・レーン少尉はリコシエに椅子を勧めた。

アルツアー准将の秘書官を務めているリコシエは、穏やかに微笑む。

「お変わりありませんね、レーン様。いえ、ますます美しくなられましたね。アイラインを描くのがお上手になられています」

「美しくなる必要はないのですが、自分でも化粧が上達しているのを感じます。これもリコシエ殿の御鞭撻あればこそですよ」

するとリコシエは困ったように笑う。

「殿方に化粧をお教えることになるとは思いませんでしたが、戦化粧となればお引き受けするしかありませんでしたからね。今どき珍しいと母が申しております」

リコシエは前リトレイユ公ミンシアナの影武者になる前は、一族

で髪結いをしていた。化粧はお手の物だ。
シャルは照れくさそうに頭を搔く。

「父が農業で多忙なものですから、騎士としての心構えは祖母や母から教わりましたからね。戦化粧は御婦人の化粧とは違うはずですが、誰もやり方がよくわからなくて……」

「もうすっかり廃れた習慣だと聞いております。私も母に聞いて知ったぐらいですから」

するとシャルは嬉しそうに微笑む。

「戦死したときに顔が土気色では、検分をする敵将に対して失礼というものです。当家は国境付近で常にアガンの騎士たちと戦ってきた一門ですから、平時も戦化粧は欠かせません」

当時、影武者をしていたリコシエは、第五師団に変な貴族将校がいるという噂を聞きつけていた。男なのに女みtainな化粧をしているという。

だが会ってみて、この美貌の少尉が骨の髄まで戦人であることを確信した。

すぐさまリコシエは彼をミンシアナに推挙しようと思った。

ミンシアナは父性的なもの全てを憎悪していたので、心の中では軍人たちを嫌悪している。その点、見た目が美しいシャルは適任だった。中身はしっかりした正統派の軍人だが、見た目は女性的だし性格も温厚だ。

だがリコシエが推挙の打診をしたところ、シャルはその申し出をきっぱりと断った。

権力闘争や陰謀に手を染めることを嫌うシャルは、ミンシアナの側近となって昇進することを潔しとしなかった。

リコシエはそんなシャルにますます敬意を抱き、個人的に親しくなっていた。やがてシャルはリトレイユ公の手先ではなく、影武者リコシエの理解者となった。

シャルに限らず、リコシエ本人と親しくなった者は意外と多い。彼らはミンシアナではなくリコシエの盟友だった。

その後ミンシアナが処刑されると、第五師団内部ではミンシアナ派将校は粛正の対象となる。シャルはミンシアナ派から距離を置いていたため、除隊や左遷の憂き目に遭わずに済んだ。

リコシエは深々と頭を下げる。

「また無事にお会いできましたが、私のせいでレーン様にも累が及ぶところでした。申し訳ありません」

「いえ、おかげでリコシエ殿と親しくなれましたから。こうしてお役に立てているのが嬉しいんですよ」

全く嫌味を感じさせない、爽やかな笑み。育ちの良さを感じさせる。顔立ちが整っているからなおさらだ。

だが次の瞬間、その表情がスッと引き締まる。

「一緒に着任したフォルトン少尉は密命を帯びているようです」
「やはりそうですか。今の大胆那様には、付き従う者たちがほとんどおりません。使える人材も限られてきます」

リコシエはリトレイユ公ミンシアナの代理人として様々な陰謀に
関与した経験から、派遣されるフォルトン少尉を怪しいと睨んでい
た。

能力はあるが経歴に傷がある彼のようなタイプは、権力者の走狗
にされやすい。

ちょうどシャルも同時期に派遣が内定していたため、それとなく
監視を頼んでおいた。

シャルは紅茶を一口飲み、ふと心配そうな表情をする。

「クロムベルツ少佐は心を許しているようですが、用心なさった方
が良いかもしれません。おそらくフォルトン少尉は皆が思っている
よりも有能な方です。僕のような若輩では太刀打ちできませんよ」

リコシエはうなずく。

「ありがとうございます。そのように伝えておきますね。ですが、
たぶん心配はいりませんよ」

「なぜですか？」

不思議そうな顔のシャルに、リコシエは笑いかける。

「ミンシアナ様との謀略戦に勝利したクロムベルツ様が、ミンシア
ナ様に敗れた大旦那様に負けるとは思えませんから」

「確かに」

* * *

「どうも引つかかるんだよな、あの二人……」

俺が首をひねっていると、アルツアー准将が俺の頭をコツンとこづいた。

「なんだ、私の参謀ともあろう者が、その程度も見抜けないのか」
今なんか、「私の」のところだけ強調しませんでしたか？ 太字のゴシック体みたいな強調の仕方だったぞ。

アルツアー准将は愛馬の背中を撫でながら、こう言う。

「レーン少尉はリコシエ秘書官の知人だ。心配はいらない」

「そうだったんですか」

「だったら早く教えてくれよ。」

「リコシエ秘書官は影武者時代に自分自身の人脈を築いていたからな。ミンシアナはそれを自分の人脈だと勘違いしていたようだが」
生きていたときは憎らしかったが、死んだ今となってはつくづく哀れな人だったと思う。持っていた力は全部借り物で、彼女自身には何もなかった。

「もっともリコシエとしては、久しぶりに会うレーン少尉が誰かの手先になっていないか心配だったようだ。それとなく探ってくれたが、大丈夫そうだと話していた。で、お前に教えた訳だ」

「事情はわかりましたが、情報共有はもっと早い方がいいですね」

「すまないな、私もこのところ多忙で」

アルツァー准将は軽やかなジャンプで軍馬にまたがり……またがれないので、お尻を押して座らせる。

准将は俺を振り向いてキツと表情を鋭くしたが、俺は知らん顔をしておいた。俺が手伝わない限り、永遠にぴよんぴよんしてないといけない。

准将は顔を赤らめて、コホンと咳払いをする。

「そのレーン少尉からの報告だが、フォルトン少尉はリトレイユ公の密命を帯びているらしい。適当な理由をつけて原隊に送り返した方がいいかもしれないな」

だが俺は首を横に振った。

「彼が経験豊富な前線指揮官であることは事実ですし、今は将校が一人でも欲しい有様です。有能なら裏切り者でも構いません」
「おいおい」

准将は呆れ顔だが俺は本気だ。

「中隊や小隊の指揮官は部隊の壊滅がそのまま死に直結します。さすがにフォルトン少尉も交戦中に裏切ったりはしません。彼に密命を与えたのはブルージュ公ではなくリトレイユ公ですからね。敵方に内通はできませんよ」

准将は真顔になって考え込む。

「一理あるな。お前が監督するなら問題ないか」

「まあ……何とかします」

中間管理職みたいになってきた。参謀と大隊長を兼務って過酷すぎないか。労働基準監督署に訴えてやりたい。

「なんだ、不満そうだな」

「言っておきますが、准将閣下のためだからここまでやるんですよ？」

「わかっている」

准将はそう言つと、俺をちよいちよいと手招きした。

「なんです？」

渋々近づくと、准将は悪戯っ子のような笑みでこう言つ。

「ありがとう、ユイナー。お前がいてくれるから私は何も心配していないぞ。お前と共に果てられるのなら、戦場でも刑場でも楽しめるぞ」

「本気で言ってるんですか？」

「うむ」

准将は当然のような顔をしてうなづく。この人、ときどき怖い。

武闘派の貴族は覚悟が決まりすぎている。

だがそんな准将に覚悟と敬意を示すために、俺も当然のような顔をした。

「俺もそうです」

「あははっ」

まるで子供のように無邪気に笑うと、准将は馬上で背筋を伸ばす。

「ではこの広い世界には楽しみが満ちているという訳だ。良かったな、ユイナ―。今世は幸運に恵まれているぞ」

「そう言えなくもありませんが」

准将は笑いながら俺に手を振る。

「私は将兵を激励してくる。ついてくるか？」

「ついてこなかったら拗ねるでしょう？」

俺は自分の軍馬にまたがると、この可愛い上司を急いで追いかけることにした。

第96話「烏合の軍」(地図あり)

【第96話】

ともあれ、第六特務旅団に歩兵将校が二人も来た。これで二個中隊を任せられる。

経験豊富な兵が多い第一中隊はフォルトン少尉が指揮する。レーン少尉は実戦経験が皆無だから指揮できないだろう。

幸い、フォルトン少尉は女性兵士たちに好意的に受け入れられた。以下、俺が彼女たちから聞いた意見を列挙する。

『肩の力が抜けてて意外と悪くないです。エロオヤジかと思ったら紳士的ですし』

『話が面白いんですよ。親しみやすい人ですね。近所にああいうおじさんいました』

『なんか……うちのお父さんみたいです。酔っ払ったらくだらない冗談ばかり言うんですけど、真面目で腕の良い職人でした。死んじやっただんですけど』

おおむね「親しみの持てるおっさん」という評価のようで、これは少々意外だった。兵隊の扱いがこなれているのは予想していたものの、女性相手だと距離感が難しい。

それを難なくクリアしてみせたということは、やはり能力が高いのだろう。いい買い物をした。

そして美女と見まがうばかりのレーン少尉の方も、これはこれで好評だ。

『優しいし美形だし最高です！ もう絶対に中隊長変えないでくださいね！』

『ずっと顔を見ていただけます。訓示をもっと聞きたいと思った上官は初めてです』

『参謀殿、見てください！ キオニス戦役の古傷が、お化粧で隠れちゃいました！ レーン少尉殿に教えてもらっただんです！』

いろいろ言いたいことはあるが、兵士に受けが良いことは前線指揮官の絶対条件だ。

でも君たち、中隊長はアイドルでもファッションリーダーでもないんだぞ。

まあいいや。

そして新たな中隊長の下で、六人の下士長が小隊長として兵士を統率する。

「第一中隊の銃、馬車に積み込み終わりました！」

「不足がないか、員数を数えて！ 二人でね！」

「すみません、修理に出したブーツが戻らないんですけど!？」

「足型の番号を言いなさい。中隊の備品を支給します」

馬車に次々に荷物が運び込まれ、荷台に固定される。兵士たちには背囊やブーツなどの不足分が支給され、第六特務旅団は予定通りに臨戦態勢を整えた。

「クロムベルツ少佐殿、本当に兵士に銃を持たせなくていいんですかい？」

「フォルトン中隊長が頭を掻きながら質問に来たので、俺はうなずく。」

「今回は味方の勢力圏を行軍するから、重い装備は全て馬車で運ばせる。兵の疲労は最小限に抑えておきたい。警備のために小隊狙撃手にだけライフル式騎兵銃を持たせる」

「お優しい参謀殿に感服しましたよ。さぞかしモテるんでしょうな」
ニヤリと笑うフォルトン中隊長。嫌味かな？

細かいことで喧嘩しても仕方ないので、俺は困ったように笑い返す。

「貴官ほどはモテないがな。道中に不穏があれば、中隊長判断で武装を命じる。その場合はレーン中隊長にも助言をしてくれ」

「はっ！ 御命令通りに！」
ビシリと敬礼して、フォルトン中隊長は去っていく。仕事はきちんとしてるんだよな。

彼の背中を見送っていると、今度はレーン中隊長がわたわたと駆けってきた。

「あっ、少佐殿！ すみません、『魚の道』ってなんですか！？
中隊の子たちの会話についていけなくて……」

「知らないのか、レーン少尉」

国境の山奥出身のレーン中隊長に、俺はなるべく簡潔に説明した。「帝室直轄領の港から帝都まで続く、よく整備された街道だ。帝室に鮮魚類を運ばせるために整備されたと言われてるのが名前の由来だな。だが実際には交易で得た富を運ぶための輸送路であり、同時に軍用道路でもある」

すみません、全然簡潔じゃなかった。オタクだから知ってること全部しゃべりたい。

説明が長すぎたかなと思って恐る恐るレーン中隊長を見ると、彼は頬を上気させて感心しきっていた。

「なるほど、だから馬車をあんなに用意しているんですね。街道が整備されているのなら、そのまま戦場まで直行できますから」
「そうだな。険しい山道などがあると馬車をそこで捨てることになるが、舗装された石畳まであるからな。馬車でも快適に通れる」

快適といってもガツタンゴットン揺れるんだが、銃を担がなくていいのは助かる。とにかく重いんだよな。

レーン中隊長は納得した様子で俺に敬礼する。

「御教授ありがとうございました！ 参謀をなさっているだけあって、本当に何でもございなんですな」

基礎的な地理は士官学校でも一通り習うはずだが、レーン少尉のときはカリキュラムが違ったのかな？ 帝国の人材育成制度は疲弊感が強く、今ひとつ信用できない。

「俺からもひとつ聞いていいか、レーン少尉」

「なんでしよう、少佐殿？」

「貴官は士官学校にどれぐらい通ったのかな？」

「最初の一年だけです。軍学の概論や盤上演習だけで終わってしまいました」

やっぱりそうか。貴族将校の基礎教養は実家に丸投げだから、レーン少尉のような没落貴族だと十分な教育ができていない。

一方、士官学校で鍛え上げた平民将校は損耗率が高いので、我が軍は構造的な問題を抱えていることになる。そりゃ勝てない訳だ。

「どうかなさいましたか、少佐殿？」

「いや、何でもなし。頑張ろうな、レーン少尉」

「はいっ！」

頬を染めて敬礼するレーン中隊長。美少女みたくて可憐だけど、経験が浅いから少し心配だ。

やはりベテランのフォルトン少尉にサポートしてもらおう。やや不安はあるが、フォルトン少尉は必要だ。

レーン中隊長が軽やかな足取りで持ち場に戻った後、俺は制帽を脱いで壁に寄りかかる。

寄せ集めの兵と、足りない装備。そして不安が拭えない将校たち。俺たちは勝てるだろうか？

* * *

【野営地にて】

「小娘の指揮下に入るようになるとは……」

「まあまあビゼル中佐。これもお国の一大事ですよ」

「左様。それにメディレン家は今や帝国最後の希望です。アルツァー様を直属上官に頂いたとなれば、軍人の誉れになりましょう」

他の大隊長たちに宥められ、ビゼル大隊長は白いあごひげを撫でて嘆息した。

「誉れと言えましようか？ アルツァー嬢が一番上の孫と同年ですぞ。うちのボンクラ息子など、それを聞いて笑い転げておりました」

「はっはっはっ！」

大隊長たちは皆、アルツァー准将の軍功には敬意を払っている。彼女の實力は本物だ。

とはいえ見た目はまるで子供だし、実際に年齢も若い。体裁を気にする貴族将校たちは、クロムベルツ少佐のように素直にはなれなかった。

第一師団から部隊や一族と共に落ち延びてきたビゼル中佐は、やれやれといった表情で笑う。

「ま、メディレン宗家の令嬢とあらばお力添えするのも帝国貴族の誉れと考えることにしましょう」

「そうですね。我らの力がなければ、いかにアルツァー准将といえどもブルージユ公とは戦えますまい」

「確かに。片腕と称されるクロムベルツ少佐を除けば、幕僚と呼べる将校もほとんどおりませんからな」

そのとき、野営地の天幕にクロムベルツ少佐が入ってきた。

寛いでいる諸将を見回し、若き平民少佐は渋い顔をする。

「失礼します。合流を待たずに先に出発しておくようにと、旅団長閣下より命令があったはずですが」

大隊長たちは顔を見合わせたが、最年長のビゼル中佐が口を開く。「わかつとるが、閣下に御挨拶をしたくてな。心配せずとも明日の早朝に出発する。それで十分だろう？」

「それでは遅すぎます」

ビゼル中佐は顔をしかめた。

「君は参謀の癖に用兵をわかつとらん。あまりに先行すれば相互の連絡が遅れ、統率が取れなくなるのだ」

「いえ、その御心配は無用です」

クロムベルツ少佐は慎重に言葉を選んでいる様子で、こう言った。「閣下直属の部隊は行軍速度が速いので、他の大隊には先行して頂かないと追い抜いてしまうのです」

「しかし君、閣下の部隊といえは女ばかりだろう？」

ビゼル中佐の言葉に他の大隊長たちも同意する。

「女の足では男ほど早く歩けん」

「我々の兵を女より鈍間だとバカにしているのかね？」

「失敬だぞ、クロムベルツ少佐」

しかしクロムベルツ少佐は首を横に振った。

「小官は男性兵士の小隊を率いていた経験がありますが、第六特務旅団の女性兵士の方が行軍速度は上です。小官の意見など無視して頂いて結構ですが、旅団長閣下の命令には従ってください」

大隊長たちも歴戦の軍人なので、直属上官の命令には絶対服従であることは承知している。だが平民の若造に従うのも癪なので、渋々といった表情で応じた。

「わかった、わかった。そこまで言うなら行軍の何たるかを教えてやるぞ」

「参謀気取りの若造にはわかるまいな」

「せいぜい遅れないように後ろからついてこい」

クロムベルツ少佐はそんな嫌味の数々にも全く動じていない様子で、あくまでも真面目に応じる。

「よろしく願います。閣下は三日の遅れなら許すと仰っていました」

「うん……！」

年下の平民に侮辱されたと感じたビゼル中佐は顔を真っ赤にしたが、さすがに少佐を叱責するのは遠慮した。尉官なら怒鳴りつけていただろう。

だがここまで言われて黙っていても、貴族の沽券にかかわる。彼は若き参謀を睨みつけた。

「ならば我々が三日先に到着してやる。閣下には『戦場にてお待ちしておりますぞ』と伝えてもらおうか」

「承知しました。必ずお伝えいたします」

まるで頓着していない様子で、クロムベルツ少佐はにっこり笑った。

* * *

そして俺たちは帝都ロツツメルを目指して行軍を開始したのだが、案の定他の大隊が鈍足で悲しくなってきた。

「ビゼル大隊が半日遅れ、他の大隊は一日近く遅れています。話になりません」

「大言壮語した割には大したことがないな。徐々に遅れが増している」

アルツァー准将は馬上で嘆息しつつ、こう続ける。

「まだ目的地までだいぶあるぞ。彼らの大隊は踊りながら行軍しているのか？」

うちの准将、口が悪いなあ。

< i 6 6 3 6 0 7 — 3 5 6 7 8 >

俺は苦笑しつつ、馬を並べながら准将に説明した。

「他の大隊は荷物を全部歩兵に持たせているんですよ。疲労の蓄積が早く、長時間の行軍ができません。おまけにブーツをはじめとする装備品が劣悪なので、行商人や巡礼者よりも鈍足です」

「たったそれだけでこんなに差がつくものか」

「そうです。何度も言ってますが、行軍速度は一番遅い者の速度になります。人数が増えれば増えるほど遅くなりますので、大隊規模では規定の行軍速度を維持できないのが普通です」

「その点、我が旅団は行軍が軽快だな」

「軽装ですし、ブーツもズボンも歩きやすいものになっています。行軍についていけない者は馬車に乗せますしね」

「常々感心しているが、貴官の対応には抜かりがないな」

そりや命を懸けて戦ってもらうんだから、こっちも命懸けで知恵を絞るよ。前世じゃ下っ端だったから、現場で働く人の気持ちはわかっているつもりだ。

それに部下が女の子ばかりなので、どうしてもあれこれと気を遣う。

「女性ばかりの旅団では、体調不良者がいるのが日常ですから」

「そうだな。まったく女の体は不便だ。貴官が羨ましいぞ」

おおむね同意するが、ちょっとだけ意見具申しておく。

「仰る通りですが、男の体にも多少の不便はありますよ」

「それもそうか。すまない。知りもしないのに羨ましがるのは失礼だな」

アルツアー准将はそう言って苦笑した後、ふと首を傾げる。

それから、ある一点を凝視した。

「確かに座るときに不便そうだ……」

「じろじろ見ないで欲しいんですが」

女性にとっては人体の不思議なんだろうが、股間を凝視されると落ち着かない。

第97話「羊の丘」(図解あり)

【第97話】

こうして俺たち第六特務旅団と援軍の大隊群は、行軍速度の乱れからバラバラに戦場に到着することになってしまった。だから先に行けって言ったのに。

「俺なりに知恵を絞って策を練ったんですが、肝心の指揮官たちが言うことを聞いてくれないんじゃない話になりませんよ」

俺がアルツアー准将に愚痴を言うと、彼女は困ったような顔をして俺の背中をポンポンと叩いた。

「歴戦の彼らから見れば私は小娘だし、貴官は平民の若造だ。諸将が従わないのも無理はない」

「予想通りだったので特に問題はありますが、正規の軍隊とは思えませんな」

とはいえ、近代化された組織でもこういうのはあるよな。……あった。思い出したくもない。

いや待てよ、本当に思い出せない。あのときのトラブルは何が原因だった？ そもそも、仕事のトラブルだったか？ というか俺の職業は何だった？

気づかないうちに、前世の体験記憶がどんどんぼやけている。

知識そのものは無事だ。俺が本で読んだ知識は体験とは無関係だ。

黒色火薬が硝石と木炭と硫黄でできていることは、俺の体験ではない。火薬の調合なんかしたこともない。

だが俺の実体験の方はかなりあやふやになっている。

俺の実体験と本などで見聞きした知識とが混濁して、どれが自分の経験だったのかわからない。どうやら前世の記憶を二回目の人生が上書きしているようだ。

これを止める方法はわからないので、俺はだんだん日本人転生者からシユワイデル人のユイナー・クロムベルツになっていくのだろう。

だがそれも今に始まったことではないので、いちいち慌てるような話ではない。思い出さたくないことは忘れてしまおう。

俺が黙ってしまったのが少し心配だったのか、准将が俺の顔を覗き込んでくる。

「やはり不快か？」

「いえ、前世でもこういうことがあったなと」

「ははは、そうか。お前は優秀だから、きつとどこでも疎まれていたのだろうな」

「いやいや、そんなんじゃないんですよ。たぶん。思い出せないけど。」

俺は気持ちを切り替えて、だんだん見えてきた大きな丘を指差し

た。

「当初の計画では我が軍は素早い行軍で先手を取り、あの『羊の丘』メウル・カルに堅固な野戦陣地を構築してブルージュ軍を迎え撃つ予定でした」

頼るものがない野戦、特に平原での会戦では陣地構築が勝敗を分ける。ここを考えない参謀はいない。当然、敵も同じことを考えてくる。

帝都からの距離や彼我の行軍速度、それに補給に必要な街道や要塞の位置を考えると、寄せ集めの俺たちが勝てそうな決戦場はここしかなかった。

< i 6 6 4 7 1 9 — 3 5 6 7 8 >

シュワイデル語で『羊の丘』を意味するこの丘は、街道に沿う形で横たわっている。街道を監視するには絶好の場所だ。

切り立った崖はないが勾配が強い丘で、耕作には不向きとされて牧草地になっていた。

数百年にわたって羊飼いたちが利用していたが、ここに『魚の道』と呼ばれる街道ができた結果、丘には領主の城館が建てられた。街道の警備のためだ。

羊飼いたちは去り、国内の政情や治安が安定した後には城館も廃れた。

准将は望遠鏡で丘の城館を観察し、「後期モレン建築なのに破風にも鼻隠しにも彫刻がないな……雑な仕事だ」などと呟く。それから俺を振り返った。

「大軍を迎え撃てる地形は、この近辺ではあそこしかないからな。頂上にある貴族の城館は野戦司令部にちょうどいい」
そうなんだよな。

しかし俺は溜息をつく。

「ですが予定が狂いました。我々は二個中隊三百人の兵しかいません。しかも初陣の新兵が半数以上を占めています。あの丘に布陣しても包囲されれば全滅です」

「六個大隊三千人の兵を展開する予定だったのに、一割しかないのでは話にならない。おまけに水源もないから籠城戦も無理だ」

困った顔をしているアルツァー准将。そんな表情も可愛い。だが俺の直属上官にそんな表情はさせたくない。

「幸い、他の大隊は遅くとも明後日には到着する予定です。二日間だけ何とかしましょう」

「何とかなるかな？ いや、お前はさっき『予想通り』と言っていたな」

「予定が狂うのも予定のうちです。何もかも予定通りになるのなら参謀はいりませんし、戦争に負ける国はなくなります」

「だが実際にはそうではないから、お前のような有能な参謀が必要だ。頼りにしているぞ」

「有能かどうかはわかりませんが、それで給料もらってますから最善を尽くします」

こんな薄給じゃ割に合わない気がする。やはりさっさと退役して、

どこかの港街でコーヒー屋でも開業する方がいいか。

「おい、溜息をつくな。給料が安いのは私も同じだ」

「閣下には実家からの仕送りがあるでしょうに」

「それはそうだが」

急に口ごもる准将。

それから彼女は上目遣いに俺をチラリと見た。

「じゃ、じゃあ家計を共にするか？」

「それって……」

俺が身の引き締まる思いになったとき、伝令の女子騎兵が駆け込んできた。

「申し上げます！ 街道の西、約二十キラム先にブルージュ軍らしき軍勢を確認しました！ 総数は不明ですが、歩兵だけでも四〇五千はいそうな感じです！ 騎兵もいました！ 砲兵は未確認です！」

アルツアー准将の表情から一切の迷いが消え、一瞬にして戦人の表情になる。

「近いな。明日には接敵しそうだ。どうする？」

俺は参謀として意見を述べる。

「やはり丘の上に布陣するのは無理です。第二案を採用しましょう」
「わかった。その場合、どれぐらい勝ち目がある？」

俺は予言者じゃないから断言はできないが、それでも士官学校で

戦術を学んだ専門家だから、こういつときはわかりやすく説明することを求められる。

でも難しい質問だな。

「味方の到着が間に合えば、おそらく負けない戦いができるでしょう。間に合わなければ勝負にもなりません」

「だが味方の到着を早めることはできない。となると、時間稼ぎの策があるのだな？」

うちの上官は鋭いなあ。理解が早くて助かる。

「敵も『羊の丘』を要衝として狙っているはずです。十分な兵がいれば難攻不落の陣地になりますし、後方からの補給には街道を使えます」

アルツアー准将は地図をじっと見つめ、それからニヤリと笑う。

「貴官の策を当ててみせようか。『羊の丘』の南東にある、あの『子羊の丘』に布陣するのだろうか？」

俺はフツツと笑ってみせた。

「残念、違います」

「違うのか……」

ちえーつとつまらなさそうな顔をする准将。たまに子供みたいだよな。

「あそこなら寡兵を隠すのにちょうどいいと思ったのだが」

「そこは合っています」

「そこは合ってるのか……？」

よくわからないといった様子で、准将は首を傾げている。

俺は解説した。

「ですが、寡兵を隠しても勝てなければ意味がないでしょう。敵も伏兵は警戒しています。あんな場所に我々が布陣しても無意味ですよ」

「そうか、では忘れるとしよう」

「いえ、忘れないでください。ここはとても重要ですよ」

「もう何がなんだか……。おい、上官をからかうのはよせ」
「すみません。悩んでる准将の顔が可愛いのでつい。」

「すみません、悩んでる准将の顔が可愛いのでつい」
気が緩んで、思っていたことがそのまま口から出ちゃったよ。怒られるぞ。

そう思って准将の顔をチラリと見たら、准将は口をもによもによさせながら照れくさそうな顔をしていた。

「そ、そうか。可愛いか……」

「はい」

もうヤケクソで肯定しておく。どうせいつ戦死するかわからない身だ。前世のときみたいに心残りがあると困る。

ただ俺も猛烈に恥ずかしかつたので、コホンと咳払いをして話題を変えることにした。

「とにかく我々は街道付近に布陣しましょう。目立つように、なおかついつでも逃げられるようにしておきます」
すると准将が上目遣いに俺を睨んだ。

「お前、またそうやって逃げるつもりだな」

「そうですか？」

「いや、そっちの話じゃなくて！」

どっちの話だよ。

その場に残っていた伝令騎兵の子が、困ったように笑う。

「あのー……私はこれからどうすれば……？」

ハッとしたように准将が振り返り、すぐさま軍人の顔に戻る。

「すまない、忘れていた。こちらに向かっている後方の各大隊に現状を連絡してくれ。可能な限り急げと」

「はいっ！」

びしッと敬礼した後、妙に粘つく微妙な笑みを残して騎兵が立ち去る。また変な噂が立ちそうだな……。

「仕事しましょうか、閣下」

「うん」

さっきの他愛もないやり取りの続きのために、俺たちは目の前の戦いに専念することにした。

第98話「全ては死神の掌に」(図解あり)

【第98話】

街道沿いの「羊の丘」を巡る争奪戦で、我々はブルージュ軍に丘を譲る形になった。司令部を置くには良い場所だったんだが仕方ない。こちらは街道沿いの平地に布陣する。戦いでは不利だが、いつでも逃げ出せる場所だ。

翌日、ブルージュ軍の歩兵三個連隊と騎兵一個連隊が「羊の丘」周辺に現れる。総勢五千余り。いきなり仕掛けてこないのは予想通りだ。

「予想通りですな」

「本当に予想していたのか？」

仲良く並んで望遠鏡を覗きながら、俺とアルツァー准将はそんな会話をする。

実は本当に予想していたので、ここはちょっと自慢しておきたい。といっても、例の予知能力「死神の大鎌」を使ったので、あんまり自慢はできない。

俺は例によって「俺は撤退も降伏もしない。死ぬまで戦う」という想定で、布陣する場所を選んだ。その選択が俺自身の死を招く「死亡エンド確定ルート」なら、「死神の大鎌」が教えてくれる。

この能力は戦いの勝敗ではなく、俺の生死を予知するものだ。だ

から勝敗と生死を重ね合わせる必要があった。

まず「羊の丘」に布陣するのは死亡エンド確定。あの丘に布陣した時点で敗北は避けられないらしい。

近くの「子羊の丘」もダメだった。布陣したら死ぬ。

このふたつは軍事学の常識で考えれば、まあわかる。包囲されるからな。

ただ街道沿いに布陣する分には、どこも「死神の大鎌」が反応しなかった。包囲されなければ何とかなるようだ。今回は割と死亡判定が緩い。

こんな感じで答えがわかっているから、後は士官学校で学んだ知識を当てはめて途中の式を作るだけだ。連立方程式のように戦いの全貌が見えてくる。

「ブルージュ公は今回、軍事顧問のヒューゲンス將軍を派遣したそうですね。経験豊富な理論家で、敵を決して侮りません。極めて慎重な將軍として我が国でも知られています」

「手強いな」

「手強いです。ただ今回はそれが幸運でした」

しばし無言で望遠鏡を覗いている准將。

「お前の話はさっぱりわからんな？」

「ヒューゲンス將軍は敵を侮りませんから、どんなときにも慎重に動くんですよ。だから街道沿いにたった三百人の歩兵がぼつんと展開していれば、必ず伏兵を警戒します」

三国志演義でも似たような話はいくつかある。敗走中の張飛がただ一騎、橋の上で魏軍を大喝して攻撃を躊躇させた逸話が有名だ。

蜀軍と違つて我が軍には諸葛亮孔明みたいな天才軍師はいないが、敵が慎重なおかげで助かった。

「敵は我々を攻撃する前に、まず二つの丘を調べます。それから街道を迂回して、我々の後方も偵察するでしょう」

「伏兵など存在しないことは、すぐにバレてしまふな」

「ただ援軍の到着が間近なのはわかりますから、敵の思考は『もうすぐ到着する帝国軍三千をどう迎え撃つか』に絞られます。寡兵の我々は数に入りません」

自分で言つて悲しくなつてくるが、数千の兵が激突する戦場では三百人の歩兵なんて大した脅威ではない。正面から戦える戦力ではない以上、困だと判断するのが普通だ。

「我々を追いかけ回すと連隊の相互連携に乱れを生じる可能性があります。羊の丘から離れてまでやることではありません。陣形を崩さずに帝国軍を迎え撃てば、少ない損害で勝利できます」

「地の利は軍学の基本中の基本だからな。専門家ほど基本を重んじるという訳だ」

「特に今回、ブルージュ軍は敵地を行軍していますので慎重に動か

ざるを得ません」

俺はニヤリと笑った。だいぶ意地悪な笑みだと思う。

「周辺の領主や領民はブルージユ軍を敵視していますから、ブルージユ軍は物資や人員の現地調達が困難です。下手に徴発すれば武装蜂起を招きかねません。そのため、集積している兵糧を焼かれるだけでも深刻な損害になります。警戒心は強いですよ」

ブルージユ公は別にそれほど良い君主ではないが、これから支配する土地で余計な揉め事を起こしたらまずいことぐらいは判断できる。現地での収奪は避け、街道を使ってせつせと物資を補給しているようだ。

これは帝都にいる帝室紋章官のブレッツヘン卿から報告を得ている。彼はかなりの危険を冒して、こういった機密情報を流してくれていた。やはり人脈の力は大きい。

俺は説明を続ける。

「ヒューゲンス將軍は公国軍事顧問です。もし軍学の定石を守らずに敗北すれば、ブルージユ公に軍学を指導する身として立場がありません。勝てる戦いで負けることも、勝ち目のない戦いを強行することも許されないのでしょう」

ヒューゲンス將軍や幕僚たちにとっては、ここで無理して戦う理由は何もない。無謀な戦いは避け、次の戦いを見越して兵を温存さ

せるだろう。多くの兵を失えば帝都ロツツメルの支配すら難しくなる。

アルツアー准将はふむふむとうなずき、にこりと笑う。

「なるほどな。失うものが多い者は手堅く攻めてくる訳だ」

「はい。実際、定石通りにやれば負ける可能性はほとんどない戦いです。我が軍は主力の到着が遅れており、その主力も三千しかいません。一方、敵は五千以上です」

国家の命運を賭けた前哨戦としてはちよつと小規模だが、帝国もブルージユも他に敵を抱えている。総動員という訳にはいかない。

「敵は数の利を最大に生かし、さらに地の利を上乗せして勝利を狙ってくるでしょう。想定外の損害が出ると、ジヒトベルグ公たちが好機と見て叛旗を翻しかねません」

ブルージユ公も内外に敵を抱えた状態になっており、外交的にはかなり苦しい。もともと「六王家」のひとつに過ぎなかった小国だから、かなり無理をしている。

「ここで我々が劇的な勝利を収めれば、ジヒトベルグ公やミルドール公が動きます。帝室門閥の貴族たちも反抗の狼煙だと思つてでしょう」

逆にここで負けてしまうと、俺たちはメディレン領まで後退を余儀なくされる。陸軍兵力に余裕がないのだ。

好機をうかがっている各勢力はブルージユ優勢と見て去就を決めるだろう。

前哨戦ではあるが、この結果で歴史が変わる。

「絶対に負けられない戦いです。大胆にいきましょう」

「そうきたか。やはりお前は面白い男だな」

アルツァー准将は上機嫌で笑う。

「だがそういうところが気に入っている。それぐらいの剛勇さがある
と欲しいところだがな」

「ははは、いえいえ」

なんか視線が突き刺さっている気がするが、今は仕事なので気にしないことにしよう。

* *

そしてブルージュ軍は予想通り「羊の丘」に展開してきた。

「取られちゃいましたね、城館」

「取られてしまったな」

並んで望遠鏡を覗きながら、俺たちは間の抜けた会話をする。

< i 6 6 6 4 7 5 — 3 5 6 7 8 >

しかし准将は笑っていた。

「敵が思い通りの場所に来てくれるというのは助かるな。いつもこ
うだと嬉しいのだが」

「閣下はお気楽に仰いますが、本当にあの場所に居座ってくれ
るかどうかは未知数だったんですよ？ 街道を直進してここに襲いか
つてくる可能性もあつたんですから」

俺が「死神の大鎌」を強引に使って予知したからこそ、こんな豪胆な策が取れるんだ。

しかし俺の苦勞を知ってか知らずか、准将は相変わらず笑っている。

「そこを判断してくれるのが我が参謀でな。私の自慢のパートナーだ」

准将が冗談ばかり言っているときは、実は内心で不安になっているときだ。少なくとも本人はそう言っている。

つまり准将は今、とても不安なのだろう。

俺は准将に向き直ると、軍人の敬礼ではなく貴族の作法で恭しくお辞儀をした。

「その信頼、身に余る光榮に思います。閣下は俺が命に代えてもお守りします」

「う、うむ!？」

声が裏返ってるぞ、この人。せつかく冗談で返したのに。

どうやら俺にはユーモアのセンスがないらしい。ユーモアは知性だと高名な作家が言っていたが、俺は参謀としての知性が足りてるんだろうか。

完全に硬直してしまったアルツァー准将をどこかに運んだ方がいいのかなどと考えていると、俺たちの陣地に物凄い勢いで帝国の騎兵将校が駆け込んできた。

「伝令！ 伝令です！ アルツアー閣下の陣地はこちらですか！」

「わああ！？」

「馬！？ 騎兵！？」

「この人、少尉さんだよ！ 敬礼、敬礼して！」

護衛の兵士たちがパニックになっているが、将校は俺たちに駆け寄って敬礼した。

「申し上げます！ ビゼル大隊、まもなく到着いたします！ 後続の各大隊も今夜には到着の様！」

緊張しきつた表情の将校を前に、俺と准将は顔を見合わせた。

* * *

「申し訳ございませぬ、旅団長閣下」

その日の夜、大隊長たちが准将の前に整列して深々と頭を下げていた。みんな中佐や少佐、つまり結構なお偉いさんだ。佐官一同の謝罪風景なんて、軍隊生活しててもなかなか見られるものじゃない。

他人事なので内心で完全に面白がっていると、アルツアー准将が微笑みながら軽く手を挙げた。

「気にする必要はない。私の参謀が『三日の遅れなら許す』と伝えていたはずだ」

また「私の」のところだけ強調されてた気がするが、今は置いておく。

一方、ビゼル中佐たちは恐縮しきっていた。

「いえ、遅れは遅れにございます。面目次第もございません」

「ビゼル殿の仰る通りです。この恥は命に代えても漱すすぎますので、どうか我らに活躍の機会をお与えください」

彼らは職業軍人だが、その前に門閥貴族だ。名誉と体面を重視する。そうしないと貴族社会で立場がなくなり、一門が衰退してしま
う。

だが准将はまるで気にしていない様子で笑った。

「気持ち嬉しいが無理はするな。あまり気負わず、部下たちを労
つてやれ」

「ははっ！」

下げた頭が上がらない様子で、大隊長たちは平身低頭している。
壮観だなあ。

「と、とにかく我ら一同、粉骨砕身いたします！ どのような御命
令にでも従います！」

「その忠勇、嬉しく思う。私は若輩の身だ。経験豊富な貴官たちを
頼りにしているぞ」

「ははっ！」

土下座しそうな勢いで頭を下げる諸将。まるで時代劇だよ。

彼らが各大隊の陣地に戻った後、准将は俺を見上げてニヤリと笑
う。

「ユイナー、お前が狙っていたのはこの展開だな？ 何もかもがお
前の掌の上という訳だ」

「閣下の目はごまかせませんね」

厳密に言うつもりだったのでなく、「どうせそうなるだろう」という諦めだ。

俺は苦笑しながら説明する。

「彼らが素直に命令に従うとは思えませんでしたので、会戦の前に少し認識を改めてもらいました。我が旅団はある意味では精鋭ですし、閣下も一軍の将たる器をお持ちです。そのことを理解してもらいたかっただけです」

俺は続ける。

「彼らは命令を軽視して失態を犯し、さらに何の処罰もなく赦されました。叱責すらされないというのは、彼らにとって恥辱です。貴族として恥辱は漱がねばなりません」

帝国貴族というのは、とにかく筋を通さないといけない生き物だ。あくまでも貴族社会での筋だから、平民や異教徒相手では筋も何もないが……。

貴族の論理で筋を通すためには、彼らはこの会戦で名誉挽回するしかない。

一歩間違えば勇み足を招きかねない危険を孕んでいるが、寡兵で大軍を撃破する作戦なんてもともと危険しか孕んでいない。危険は承知の上だ。

アルツァー准将は苦笑しつつ、俺の胸をトンとつついた。

「実にいい悪党だな、お前は」

否定はできない。こうなることを見越した上で、俺はビゼル中佐たちを罠に嵌めた。

だが全ては彼ら自身が選択したことだ。自身の選択には責任を持つてもらおう。

「悪党でいいですよ。おかげで最低限の勝算は出てきました。『狼も間もなく配置に就きます』」

「勝てずとも大打撃を与えられれば、それでブルージュの侵攻は弱まる。外交手段をねじ込む余地が出てくるだろう。だができれば勝ちたいな」

「はい。一人でも多くの兵を生還させるためにも、何とかして勝ちましょう」

俺は准将に敬礼した。

第99話「羊丘会戦（前編）」（ 図解あり）

【第99話】

翌朝早く、「羊の丘」に周辺に布陣したブルージュ軍が動き始めた。

もちろんこつちも動いている。

「各大隊、展開完了しました」

寄せ集めの六個大隊、約三千人の戦列歩兵たちが横隊を敷いて戦闘態勢を整えていた。

帝室直属の第一師団もいれば、リトレイユ家から借りてきた第五師団もいるし、メイレン家の第四師団の陸軍や海軍陸戦隊もいる。本当に寄せ集めだ。

だが士気だけは高い。

< i 6 6 7 8 1 4 — 3 5 6 7 8 >

俺は望遠鏡を覗いて、思わず呆れてしまった。

「何してるんだ、あのおっさん……。閣下、ビゼル大隊は大隊長が最前列です」

「ほう、勇壮だな」

「大隊長が戦死すると指揮系統が混乱します。やめさせた方が良いのでは？」

だがアルツァー准将は首を横に振った。

「大隊長自らが最前列に立つ覚悟を示せば、大隊全てが覚悟を決める。少なくとも将校や下士官たちは兵の逃亡を絶対に許さないだろう」

「それはそうですが」

「あまり私が口出しすると、ますますビゼル殿の面目を潰す。後で恨まれるのは御免だ」

「貴族様も大変ですな」

指揮官が張り切りすぎて兵卒との温度差ができてしまうと厄介なんだが、今回はそれも言ってもらえないか。

サーベルを手に堂々と立つビゼル中佐を見て、俺は彼の健闘と生還を祈った。

「さすがに他の大隊はビゼル大隊のようなことはしていませんが、どこも大隊長が隊列中央にいます。指揮がよく通るでしょうが、少々危ういですね」

「そう仕向けたのはお前だろうに」

それはそうなんだけど。

「『狼』の準備完了まで歩兵部隊が盾になってくれないと負け確定です。逃亡さえしなければ戦い方は消極的で構わないですよ」

「一応そう伝えてはいるのだが、私がいえば言うほど彼らが覚悟を決めてしまうようだな……」

戦場への遅参という大失態を演じた挙げ句、総司令官から「無理するな」と言われてしまつては立つ瀬がない。

ここで言われた通りに無理せず戦えば、後から軍内部や貴族社会で何と言われるかわかったもんじゃないだろう。

「貴族様というのは実に扱いづらいですな」

「私もそうだぞ。扱いには気をつける」

「そうします」

雑に返事して望遠鏡を覗いていると、軍靴の踵をトストス蹴られた。子供みたいだからやめなさい。

「フォルトン中隊長とレーン中隊長には『友軍を盾にして粘れ』と伝えてあります」

「酷い命令だな」

「なんせ悪党ですので」

我ながら酷いとは思つが、誰かが死ななければならぬ戦場で同僚や部下たちを最初に死なせたい者はいないだろう。それにうちの旅団は次世代の歩兵のテストケースでもある。無為に死なせる訳にはいかない。

とはいえ相当に後ろめたいので、俺は溜息をつく。

「とにかく味方の被害は最小限に抑えましょう」

「同感だな。我々の采配に多くの命が預けられている。責任を果たすとして」

ちつこいくせに肝っ玉はどでかいのが俺の上官だ。だからこそ支え甲斐がある。この人を死なせたくない。

「ビゼル大隊以下、六個大隊で予定通り敵の正面戦力を迎え撃ちます」

「敵は二個連隊か。ほぼ互角だな」

帝国や近隣諸国では「歩兵三個小隊で一個中隊、三個中隊で一個大隊、三個大隊で一個連隊」という編成が主流になっている。

軍の編成は時代や地域によって全く違うが、これはわかりやすくてありがたい。ちなみに一個小隊は五十人だ。

なお大隊や連隊には偵察騎兵や鼓笛隊など、サポートを行う部隊が付属している。そのため大隊は五百人前後になる。

今回はお互いに六個大隊で殴り合う展開になったので、双方三千人のマスケット兵が戦列を組んで睨み合っていた。

「敵の側面戦力としてさらに歩兵一個連隊、それと丘の裏側で見えませんが騎兵一個連隊が控えていると思われます」

「騎兵はどれくらいだ？」

「ブルージュ騎兵は一個大隊が約百騎だったはずですので、三百騎くらいですかね」

馬の世話には人手がいるので、非戦闘員がその倍以上随伴している。もちろん彼らは突撃してこないが、敵には違いなのでお帰り願いたい。たぶん大量の飼料を集積しているはずだ。

「三百か。正面突破には少し心許ないが、側面から隊列をグチャグチャにかき回すには十分な兵力だな」

「はい。こちらが少しでも劣勢になれば、敵は騎兵を投入して一気に決着をつけようとするでしょう」

騎兵そのものも強いが、軍馬の戦闘力がとにかく恐ろしい。

軍馬は敵を踏み潰す訓練を受けているし、人間用の銃弾では簡単には止まらない。必殺の銃剣すら、致命傷を与えるには強度も長さも足りないのだ。

最大の弱点が騎兵なので、騎馬に騎兵が乗っているのは救済措置だとすら思える。騎兵は人間なので人間用の銃弾で殺せる。

「敵の側面戦力の歩兵第五十四連隊は、おそらく迂回挟撃を警戒するための備えでしょう。もちろん正面戦力が足りなくなってくれば、スライドして正面を補うはずですよ」

「では勝ち目はないな」

「ありませんね。地形的な有利もありませんし、こちらが全滅するまで粘っても敵一個連隊を潰せるかどうかでしょう」

盤上演習や戦史講義でも、この状況で劣勢側が勝てる可能性はほぼなかった。

アルツァー准将はやや不安そうな顔で、南の「子羊の丘」をじつと見つめる。

「『狼』は間に合うのか？」

「間に合うはずですが、確認のために騎兵を送ると敵に露見する可能性があります。どのみちもう逃げられませんかから、覚悟を決めて戦いましょう」

「お前は本当に豪胆だな」

逃げなくても死なないのわかってるからね。もちろん予知が外れる可能性だってあるので、そのときは俺も准将も死ぬだろう。

「閣下」

「なんだ」

「戦死するとしても、俺は閣下のお側を最期まで離れませんよ」

「おい、このタイミングで言うな。不吉だろう」

准将は怖い顔をして俺を睨んだが、ふと微笑む。

「だがまあ、それならそれで悪くはない。だが今日はまだ戦死の気分ではないな。勝利するぞ」

「御意」

じゃあスパッと勝っちゃうか。

* * *

【羊と狼】

ブルージュ軍先遣隊の総司令官、ヒューゲンス将軍は黒パンをも

そもそとかじっていた。陣中では兵卒と同じものを食べるのが彼の習慣だった。兵の不満や体調を把握するのに必要だからだ。

「うむ、まずいな。ミッセル、敵の動きはどうか」

「そちらは『まずく』ありませんよ、閣下」

ヒューゲンス將軍の参謀、ミッセル大尉が笑う。まだ若い貴族将校で、ヒューゲンスの弟子の一人だ。

「敵は教本通りの動きをしています。これなら勝てますよ」

「教本通りか」

「はい」

するとヒューゲンス將軍はナプキンで口元を拭いながらつぶやく。

「それは妙だな」

「何がですか？」

「私の記した教本には『劣勢でも真正面からぶつかれ』と書いてあったか？」

ミッセル参謀は首を傾げる。

「確かに変ですね。これじゃ帝国軍は磨り潰されるだけです」

「そうだ。数の不利は別の有利で補わねば勝てん。だが盤面を見る限り、敵には有利な要素がひとつもない。普通なら兵を退く局面だ」

ヒューゲンス將軍は立ち上がると、城館の窓から戦場を見下ろした。

「地形の有利は揺るがん。となれば数の有利で逆転するのが正道だが、敵の援軍はあらかた出尽くしている。この情報に誤りはないかな？」

「はい。騎兵による偵察では、周辺に兵は見当たりませんでした」「偽装された兵はないか？」

「アガン人の隊商ぐらいです。航路を帝国軍に掌握されているので、陸路で品物を運んでいるでしょう。国同士が戦争しても民間人は交易しますからね」

ヒューゲンス将軍は腕組みし、深く唸る。

「ふむ、一見すれば平穩無事か。平穩さが逆に不気味だ。嫌な予感がする」

「そうですね？ 敵は緒戦の敗北を覚悟の上で、外交工作の時間稼ぎをしているようにも見えますが……」

弟子の参謀の言葉に、ヒューゲンス将軍は首を横に振った。

「いや、相手はあの『死神クロムベルツ』だ。彼と戦った敵は必ず大損害を受けてきた。今回も何か鬼手があるだろう。だが浅学非才の身ゆえ、さっぱりわからん」

クロムベルツ参謀少佐は、ブルージュ軍参謀司令部で最も警戒されている人物だ。同じ参謀畑の将校たちは、慎重さと豪胆さを兼ね備えた彼を心底恐れていた。

重苦しい空気に耐えかねたのか、ミッセル参謀はぎこちなく笑っ

てみせる。

「大丈夫ですよ、閣下は慎重すぎます。最初にいた三百ほどの敵歩兵も、結局何もしてきませんでしたよ。あれも手始めに撃破してしまつて良かったのではありませんか？」

「それを言われると辛いのだが……」

ヒューゲンス將軍は戦術理論の研究者だが、前線指揮官たちからは慎重すぎると批判されることが多い。

「現場を知らぬ学者と言われるのは構わんが、勝てる戦いを逃して兵を知らぬ兵法者と言われるのは少々堪えるな」

ミッセル参謀が期待に満ちた目を向けてくる。

「では閣下、そろそろ始めますか？」

「それが両軍の総意であろうな。よからう、死神の誘いに乗ってやる。ただし第五十四連隊は『子羊の丘』方面への備えとし、奇襲を警戒せよ」

「はっ！」

* * *

「動き出しましたね。味方の各大隊が応戦を始めました」

「いよいよだな」

「はい」

俺はアルツァー准将の傍らに控えつつ、緊張していた。

「今回、『狼』の襲撃が成功するかどうかは作戦の成否を分けます。失敗したら勝ち目はありません」

「お前の作戦は毎回そうだな……」

苦笑交じりに言われてしまったので、俺は頭を掻く。

「寡兵で大軍を撃破する作戦なんて邪道もいいところですから、どこかで大博打を打たなければ不可能ですよ。大軍には大軍を用意するのが正しい軍略です」

俺は溜息をついて続ける。

「でもこういう戦い方をしている方が注目されるんですよ……」

「そうだな。今後もこの戦い方で勝ってくれ」

「冗談じゃない、命が幾つあっても足りないぞ。絶対に退役してやる。」

そう思ったのだが、准将の笑顔を見ていると真逆の言葉が口から出る。

「閣下のためなら喜んで」

「うん」

上機嫌の准将閣下だった。

一方、戦況は上機嫌とはいかない様子だ。

「敵の第五十三連隊第一大隊と交戦中のテルゲッツ大隊、損害多数との報告！ 長くは持ちません！」

「後詰めのマーゼン大隊を出せ。テルゲッツ大隊は後方で二個中隊に再編する」

アルツアー准将の采配は冷静だ。

「ビゼル大隊が第五十二連隊第三大隊を撃退！ 敵大隊が後方に退いています！」

「よし！ だがビゼル殿にはそれ以上前進せぬよう厳命せよ！ すぐに別の大隊が来るぞ！」

アルツアー准将のカリスマ性のおかげで、寄せ集めの大隊はどれも必死に戦っているようだ。

だがそれだけではない。

「敵の動きが慎重です。やはり二個連隊では打撃力不足なのでしよう」

「こちらも二個連隊相当の兵力を持っているからな。そう簡単に決着は着かんぞ」

アルツアー准将は腕組みし、じつと戦場を見据える。

「この戦い、長引くな」

「はい。ヒューゲンス将軍は正面の二個連隊でこちらを消耗させた後、側面を警戒している一個連隊と騎兵を両翼から投入するつもりです」

俺は地図の上の駒を動かす。

「左右から半包囲された場合、疲弊した我が軍には正面突破か撤退の二択しかありません。しかし正面には『羊の丘』の急斜面が待ち構えており、突破は不可能です」

准将はそれを見てつぶやいた。

「つまり半包囲された場合、こちらには撤退の選択肢しかない……
という訳だ。よく考えられているな。数の利と地の利を生かきつ
ている」

その通りなので俺は溜息をつく。

「そうですね。我々が撤退すれば、野戦築城して『羊の丘』を鉄壁
の陣地に変えてしまつつもりでしょう。そうなれば手がつけられな
くなります」

「羊の丘」の横には街道があり、後方からの補給は容易だし、進軍
するのも容易だ。さらに帝国軍の侵攻を監視するにも都合がいい。

「講義はいいが、このまま戦い続けると味方の損害が大きい。『狼』
はまだか？」

准将の不安そうな問いかけに、俺は首を横に振って応えた。

「まだです。敵が半包囲攻撃を開始するまで待たないと、『狼』自
身が危険に曝されます」

そしていよいよ、決着の瞬間が訪れる。

「敵騎兵が街道方面に移動しました！ 地形捜兵らしき騎兵を確認
！」

地形捜兵は騎馬が突撃できるかどうか、戦場の細かい地形を確認
する兵だ。つまり恐怖の騎兵突撃が右から来る。

「敵の第五十四歩兵連隊が行軍隊形に変わりました！ 前進してきますー！」

そして左からは無傷の歩兵連隊が壁となって押し寄せてきた。俺たちはこれから、この無敵の矛と盾に挟撃されることになる。

< i 6 6 7 8 0 9 — 3 5 6 7 8 >

報告に来た兵士たちが真っ青になっている中、俺はホツとした思いで笑った。焦らされて困ってたんだ。

「では『狼』を解き放ちましょう。閣下、御命令を」「よし！」

アルツァー准将が指揮杖を掲げ、戦場に轟くほどの声で命じる。「『子羊の丘』の第六特務旅団ライフル砲兵中隊に命令！ 砲撃を開始せよ！ 子羊のふりは終わりだ！ 群狼よ、羊の喉笛を食いちぎれー！」

第100話「羊丘会戦（後編）」（ 図解あり）

【第100話】

* * *

【群狼の咆吼】

そのとき、ヒューゲンス將軍は望遠鏡で戦場を眺めていた。眼下では後詰め歩兵連隊と騎兵連隊が左右に展開し、瀕死の帝国軍を殲滅しようとしている。

「何かあるはずだと思ったが、何もなかったか」

参謀のミッセル大尉が苦笑する。

「またお偉方に『心配性』だの『理屈屋』だの言われてしまいますね」

「それで結構。心配性の理屈屋でなければ軍事顧問は務まらないよ。最後まで油断はせん。周辺におかしな動きはないか？」

「いえ、今のと……」

ミッセル大尉の言葉は轟音で遮られた。

城館の壁が崩れ、石材や木材が滝のように流れ落ちてくる。地図や書類を置いた作戦テーブルが梁の下敷きになり、真つ二つに割れた。

「うわあっ!？」

「落ち着け、ドアから廊下に出ろ！ 建物の陰から外に出るのだ！」
よるめくミッセルの背中を庇いながら、ヒューゲンス將軍は廊下に出る。

続けざまに遠くで砲声が轟き、城館のあちこちで破壊音が響く。
木が裂け、ガラスが割れ、石が砕ける音だ。

砂埃だらけになったミッセル大尉が泣きそうな顔をしている。

「せ、先生！ これはどういうことですか！？ 敵に砲兵はいなかったはずです！」

「その通りだ。よしんば伏兵があったとして、この距離に届く砲など確認でき……」

その瞬間、ヒューゲンス將軍は踵を返して部屋に飛び込んだ。

「まさか！？」

「あつ、先生！ どちらに！？ そちらは危険です！」

ぼつかりと壁に穴の空いた部屋で、ヒューゲンス將軍は「子羊の丘」を睨む。

通常の砲なら絶対に届かない距離を隔てて、「子羊の丘」から砲煙が立ち上っていた。

「なんとということだ……敵は新型砲を開発していたのか」

「先生！」

駆け込んできた参謀に、ヒューゲンス將軍は落ち着いた口調で告げる。

「ミッセルよ、ただちに帝都ロツツメルに戻れ。公王陛下にお伝えするのだ。『我が軍は敵の新型長射程砲による奇襲を受け、敗北した』とな」

「敗北！？ ですがまだ我が軍が圧倒的に優勢です！」

だがヒューゲンス將軍は首を横に振る。

「いや、勝負は決した。私はこの場に留まって最後まで指揮を執るが、この情報は一刻も早く陛下にお伝えせねばならん。私の代わりに行ってくれ。死ぬなよ」

ヒューゲンス將軍の言葉に、ミッセル參謀は無言で敬礼する。目に涙が浮かんでいた。

「先生も、どうか御無事で」

「できる限りのことはしてみよう。さあ急げ」

* * *

【戦場の女神】

その頃、「子羊の丘」では少尉の階級章をつけたハンナ・ハイデンがサーベルをかざしていた。

「よし、城館はほぼ破壊しました！ 一番砲と二番砲は城館への砲撃を継続！ 敵の伝令を近づけさせないで！」

丘の各所には偽装された仮設砲台があり、ライフル砲の砲口がブルージュの軍勢を睨んでいた。

大柄なハンナは砲声に負けないほどの大声で叫ぶ。

「他の砲は攻撃目標を敵歩兵連隊に変更！ 三番砲、四番砲、五番砲は行軍の先頭を照準！ 六番砲、七番砲は最後尾を狙ってください！ 残りは隊列中央に着弾を分散！」

すぐさま女子砲兵たちが大砲を操作し、次弾を装填しながら照準を合わせる。

「撃てええええっ！」

丘が震えるほどの轟音が轟き、数瞬遅れて平原に土煙が舞い上がる。ばたばたと兵士が倒れていくのが見えた。

< i 6 6 9 0 7 6 — 3 5 6 7 8 >

「おつかねえなあ、お嬢ちゃん。こりゃ護衛なんかいらなかったかもな」

そうつぶやいたのはヴィルгент提督だ。海軍陸戦隊の猛者たちを率いての参陣だった。

ハンナ少尉は振り向いてニコツと笑う。

「少佐殿のためなら、これぐらいは頑張ります！」

「おおっと、そりゃ俺のことかい？」

冗談で返したヴィルгентに、ハンナは真顔で応える。

「いえ、クロムベルツ少佐殿ですけど？」

「わかってるよ。あーあム力つくぜ、あのモテモテ野郎」

近くの木の幹をげしげし蹴っていると、陸戦隊の将校がそっと声

をかける。

「何も閣下までついてこなくても良かったと思っんですが。鮫は陸には揚がりませんよ、鮫嵐提督」

だがヴィルゲント提督は木を蹴りながら吠える。

「バカ野郎、鮫は陸でも暴れるし、何なら空も飛ぶんだよ！ なんとって『鮫嵐』なんだからな！ それにハイデン少尉は海軍士官学校の後輩だ、活躍を見届けてやんなきゃ可哀想だろうが！」

女子砲兵たちがそれをチラチラ見ている。

「なにあの人」

「海軍の偉い人だよ。隊商に偽装して大砲を運べたの、あの人のおかげなんだって」

「じゃあ良い人なんだ。あ、着弾ちよつとズレてる。次弾装填お願い」

てきばきと装弾しながらおしゃべりを続ける女子砲兵たち。

「なんかね、うちの参謀殿と仲が良いみたい。右に一目盛り修正するね」

「あー、そういう感じ？ 待って、砲身少し冷やす」

「どういう感じよ。はい、濡れ布巾」

「いやあ尊い尊い。じゃあ点火するよ。耳塞いで」

放たれた砲弾はほとんど放物線を描かずに直進し、ブルージユ歩兵連隊の一個小隊を貫通する。

たった一撃で下士官以下十数人が死傷し、この小隊は作戦遂行能

力をほぼ完全に奪われた。

* * *

俺は望遠鏡を覗き込みつつ、ホツとした気分で笑った。

「敵の第五十四歩兵連隊は大混乱です。ハンナの砲撃は的確だな」

「嬉しいか？」

アルツァー准将がニヤリと笑うので、俺は苦笑する。

「彼女の実力が評価されそうなので嬉しいですね。できればもっと違う分野でも開花させてあげたかったです」

前世だったら軍人だけでなく、女流棋士とかモデルとか格闘家とかにもなれたと思うんだよな。この世界では軍人以外の選択肢がなかったのが惜しい。

准将も小さくうなずいた。

「そうだな。だが今は彼女の実力に救われたことを喜ぼう。これより攻勢に移る。敵の第五十二、五十三歩兵連隊を包囲せよ！」

敵は包囲攻撃の命令を受け、両翼の部隊が移動している瞬間に司令部を砲撃された。

彼らは司令部の城館が破壊されたのを見て混乱し、包囲攻撃を続けるかどうかで判断に迷う。指示を仰ぐにも司令部はもうない。

そして包囲攻撃は各部隊の連携が命なので、足並みが少しでも乱れればそこに突破口が開ける。

「今回は敵の騎兵連隊が崩壊の糸口となった。騎兵突撃を中止し、後方に退いたのだ。」

「連隊としては正しい判断だ。だが軍としてはどうかかな」
アルツァー准将は微笑みつつ、麾下のライフル式マスケット中隊に命令を下す。

「敵騎兵が退いたことで、敵左翼は動揺している。女子戦列歩兵中隊は最右翼に展開し、味方の戦鬪を支援しろ！」

長距離の狙撃ができるライフル式マスケット銃は、側面から十字砲火を浴びせるのに最適だ。多少距離があっても十分に届くし、少数の兵で大きな打撃を与えることができる。

旅団長の命令に、中隊長たちがサツと敬礼した。

「了解しました。行こうか、レーン少尉。鴨撃ちを教えてやる」
「はい、お供します！」

歴戦のフォルトン中隊長と美貌のレーン中隊長がただちに命令を実行する。

マルーンカラーの軍服が横隊を組むと、パパパツと銃火が光った。もうもうとたなびく白煙。

わずか二個中隊の銃撃だが、敵の左翼大隊がバタバタ倒れていく。命中率がまるで違う。おまけに敵の反撃は弾が届いていない。

「これで敵左翼は抑えました。敵右翼はライフル砲兵中隊が叩きま

す

「敵は驚いただろうな。あの距離からの砲撃など、どの教本にも載っていない」

「大砲に詳しい戦術家ほど驚くでしょうね。この数十年、大砲の構造に大きな進歩はありませんでしたから」

敵が司令部を置いた「羊の丘」はそこそこの高さがあり、平地から砲撃しようとするとかかなり肉迫する必要があった。もちろん敵の歩兵に阻まれるだろうから、砲撃は難しい。

しかしライフル砲は従来の砲の三倍以上の射程を持ち、威力も命中精度も段違いだ。

まさに今回限りの切り札、必殺の隠し武器だ。

望遠鏡で敵が砲撃に翻弄されているのを確認した後、准将は俺を振り返る。

「正面はどうなるかな？」

「両翼が潰されて背後が急斜面の上り坂なら、残された道は正面突破しかありません。しかし突破したところでその先に何がある訳でもありません」

敵の中央にいる部隊は、戦術的には完全に死んだ部隊になっている。戦闘能力をまだ残してはいるが、効果的に運用する方法がもうない。

それは敵の連隊長たちも理解しているだろう。どこの国でも連隊長クラスは相応に優秀だ。

敵の各連隊はじりじりと後退を始め、丘の斜面を迂回するようにして後方に退いていく。だが大半の兵は逃げることができず、大隊や中隊単位で降伏してきた。

無駄な殺し合いを避けられたのは嬉しいが、ちょっと困るので准将に教えておく。

「うまい方法です。降伏されたら殺す訳にもいきませんが、かといって戦場に置き去りにもできません。彼らの処遇で足止めされます」「兵を死なせずに我々を足止めする良い方法だな。私も今度使おう。いや、お前がいれば負けることはないか」

プレッシャーになるからやめて。パワハラですよ閣下。

< i 6 6 9 0 7 7 — 3 5 6 7 8 >

早朝に始まった戦闘は昼過ぎには完全に終息し、ブルージュ側の白旗があちこちに掲げられて戦闘は終了した。

死傷や逃亡で失った兵力は、帝国側が九百人ほど。結構な痛手だ。幸い、女子戦列歩兵は遠距離からの狙撃が中心だったので、数名の死傷に留まった。とはいえ戦死者は出ている。

ブルージュ側の死傷は帝国軍より多い千五百ほどだが、部隊単位の降伏が大量に出たので合計で三千近い兵を失っている。大敗といつていいだろう。再起不能だ。

偵察から戻った女子騎兵たちが報告する。

「敵の残存兵力は街道を全速力で後退していきます。最後尾はファールブル橋の辺りですが、橋脚に何か仕掛けしているのが見えました」

アルツアー准将は苦笑する。

「橋を爆破して追撃を振り切るつもりか。我々にそんな余裕などないのだがな」

俺は頭を掻く。

「そうですね、捕虜の数が凄いいことになっちゃいましたから……」

敵が置き土産とばかりに残していったのが、二千人近い投降兵や負傷兵だ。主に第五十二連隊と第五十三連隊の戦列歩兵で、下士官や将校も多数いる。

だが准将はフツと笑う。

「ここからは将器ではなく王器が問われる局面だな。私に任せてもらおうか」

「閣下のお心のままに」

俺は恭しく一礼すると、我が主が何を見せてくれるのか見守るところにした。

第101話「蘇ったミンシアナ」

【第101話】

「ブルージュ軍将兵の諸君、私がアルツァー・メディレン准将だ」
武装解除された捕虜たちの前に立ち、ちっこい准将殿は威風堂々と胸を張る。

捕虜たちは座らされ、周囲には着剣した帝国兵士たちがずらりと警戒にあたっている。

とはいえ、やはり緊張するな。

決して好意的とはいえない視線を浴びながら、アルツァー准将はまるで動じていなかった。

「諸君は祖国の栄光のため、勇敢に戦った。賞賛に値する見事な戦いぶりだった」

まずは敗軍を讃えるところからか。准将らしいやり方だな。そして俺は、彼女のそういうところが好きだった。

ブルージュの将兵たちが「おや？」という顔をしたところで、准将はすかさず次の言葉を発する。

「これで諸君は義務を果たした。もう戦わなくてもいいのだ。敵に降伏することは軍人に認められた権利であり、我々はその権利を尊重する。諸君は名誉ある戦士として遇され、生きて故郷に帰れるだろう」

捕虜たちの心の際間にスルリと入り込む一言だ。

死を覚悟して戦う勇敢な兵士だとしても、生きて帰れるのなら帰りたいだろう。しかも戦士としての名誉を保ったままならなおさらだ。

捕虜たちは顔を上げて准将の話に聞き入り始めた。

准将は少女のような声で優しく、だが同時に司令官としての威厳を保って堂々と続ける。

「この戦争はまだ続いているが、諸君は義務を果たして戦いの場から下りた。諸君を正しく遇することは我々の義務だ。さもなければブルージユの捕虜になっているシュワイデル人たちが危うくなる。だから安心するがいい」

そのとき伝令が駆け寄ってきて、俺にそつと耳打ちする。

「司令官のヒューゲンス将軍が投降していました。『羊の丘』を下りて最前線の兵を指揮していたようです」

俺は素早く思考を巡らせ、それから伝令に伝える。

「ここにお連れしてくれ。丁重に頼む」

「はっ」

俺は准将の言葉が一区切りつくのを待ってから、当たり前のような顔をして准将に告げた。

「旅団長閣下」

「うん？」

「ヒューゲンス將軍をお連れしました」

アルツァー准将の表情が一瞬、ちよつとだけしかめっ面になる。

（演説の途中だぞ？）

（だからこそ、ちよつと良いのでは？）

（そんな器用な真似ができるか！）

（閣下なら大丈夫ですよ）

無言のやり取りが一瞬、めまぐるしく交錯する。

捕虜たちの方を振り向いたアルツァー准将は、もうすっかり普段通りだった。

「諸君たちの総司令官、ヒューゲンス將軍も投降している。それゆえ諸君は何ひとつ恥じ入る必要はない。誇らしく胸を張れ」

そこにヒューゲンス將軍が連れてこられる。背の高い細身の老人だ。「羊の丘」から下りてきたけど、どちらかという山羊みみたいな印象だな。

将官への敬意を示して武装解除させておらず、腰にはサーベルを吊ったままだ。

ヒューゲンス將軍はアルツァー准将と正対し、正式な敬礼を交わした。俺たち帝国将校も全員、それに倣う。

アルツァー准将は微笑んだ。

「御無事で何よりです、ヒューゲンス將軍。一度お会いしたいと思っております」

「光栄に思います、アルツァー閣下」

ヒューゲンス將軍は言葉少なだったが、状況を見て全てを悟ったようだ。

そして「よろしいか？」と断った上で、自分の部下たちに訓示を垂れる。

「私の采配の至らなさで敗れてしまったことを深く詫びる。敗北の全責任は私にあり、貴官たちにはない。名誉あるブルージュ軍人として捕虜の立場を遵守し、敗れてもなお誇り高いブルージュ兵の姿を帝国軍に見せてやるうではないか」

総司令官からのお墨付きだ。これでみんな、安心して捕虜になれる。何かあっても処罰されるのは將軍一人だ。

ブルージュ兵たちの顔つきが戦士から一般人へと変わっていく。人殺しなどんでもないと考える、平時の一般人の顔つきだ。

演説を終えたアルツァー准将にそつと寄り添うと、俺は上官をベタ褒めする。

「お見事です、閣下。やはり閣下は王者の器をお持ちです。小官の小細工などとは訳が違いますな」

「そう褒めるな。まだ胸がバクバク鳴っているのだ。触って確かめるか？」

照れ笑いを浮かべるアルツァー准将は歳相応の乙女の顔つきで、こちらも様変わりっぷりが凄い。人はみんな、いろんな顔を使い分けて生きているのだなと実感する。

と、そこにヒューゲンス将軍が近づいてきた。

「アルツァー閣下、あなたの部下にクロムベルツ少佐という参謀がおられることは存じております。ぜひお会いしたいのですが」
「それならここにあります」

無造作に突き出された。なんだよ、猫じゃないんだぞ。

上官に抗議してやろうと思ったが、ヒューゲンス将軍がいろんな感情の入り交じった眼差しで俺を見てきたので中断する。

「そうか、貴官があのお有名なクロムベルツ少佐か」

「はっ、ユイナー・クロムベルツ参謀少佐であります」

敵方とはいえ相手は將軍閣下だ。職業軍人のルールとして、敵でも階級は尊重しなければならぬ。

するとヒューゲンス将軍はあごひげを撫で、制帽を脱いだ。

「貴官の軍略には恐れ入ったよ。敗北を認めよう。その上で教えるを請いたい。私はどうすれば貴官たちに勝てたのだろうか？」

それを教える訳にはいかないんだが、でもライフル砲が切り札だったのはヒューゲンス将軍も気づいてるよな。だったら教えなくて

も気づいているだろう。

「『羊の丘』の城館は狙い撃ちされますので、あそこに司令部を置くのは非常に危険です。それでも丘を占拠するのであれば」

俺は遙か彼方の「子羊の丘」を指し示す。

「第五十四連隊から一個大隊を『子羊の丘』に派遣し、我が軍の砲兵部隊が陣地構築するのを阻止なさるべきでした」

「……やはりそうなるか」

もしそうすればライフル砲兵は平地に展開することになり、ブルージュの歩兵が肉迫すれば退かざるを得なくなる。司令部への砲撃ができたとしても、その後が続かない。

そして第五十四連隊には二個大隊がまだ残っているのです、正面戦力の補充に回す余裕は十分にある。つまり我々は負ける。

だがこれはライフル砲が従来の砲の三倍以上の射程を持つと知っていないければ、絶対にありえない選択肢だ。

「とはいえ、従来の砲では『子羊の丘』から撃つても司令部には届きませんし、正面戦力のぶつかり合う主戦場にも届きません。普通ならあり得ない選択肢です」

「なるほどな」

ヒューゲンス將軍はそう言い、深く溜息をついた。

「御教授感謝する。つまり定石通りに勝とうとする限り、敗北は確実だった訳だ」

未知の新兵器を使った一回限りのハメ技だからな。俺が同じ立場

だつたら「そんなん勝てる訳ねえだろ！」とキレてると思う。キレないヒューゲンス將軍は立派だ。

その立派なヒューゲンス將軍は俺を見て、ふと寂しそうに笑う。「これからの時代の戦争は、私のような老いぼれには難しすぎるよ。うだ。我が国も貴官のような若く優秀な將校を育てなくては生き残れないだろう。私の余生はそれに費やすことにするよ」

俺は老將軍に何か言葉をかけてあげたいと思ったが、彼は敵国の將校だ。

だからこんなことしか言えない。

「それは困ります。閣下のような名将が本気で後進を育成なさつたら、私では手に負えません。これは長期の抑留を検討しなくては」

「それは困るな。では今のは私と貴官の秘密にしておいてくれたまえ。だが貴官がブルージュに生まれてくれなかったのが悪いのだよ……まったく、アルツァー閣下が羨ましい」

他愛もない冗談を交わすと、ヒューゲンス將軍は俺に敬礼してくれた。

* * *

【復讐の大鎌】

「急げ！ 今夜中に屋敷を包囲するのだ！」

リトレイユ領の片隅で、百人ほどの兵士が暗闇の中を移動していた。マスケット銃や長槍など、武装はバラバラだ。古めかしい甲冑

姿の騎兵もいる。

彼らはリトレイユ公の郎党や傭兵たちだった。現リトレイユ公は娘のミンシアナに家督を奪われたが、彼女の死後に再び当主に返り咲いている。

兵士たちが進軍する道の先には、実子セリンが養育されている秘密の屋敷があった。

「御前様、本当に若君をお討ちなさるので……？」

甲冑姿の騎士が不安そうに声をかけるが、リトレイユ公は不機嫌そうだ。

「仕方あるまい。メデイレン公が悪いのだ。あの軽薄者め、セリンを傀儡にしようと策謀しておるからな。これもお家の為ぞ」

「ぎよ、御意……」

リトレイユ公は既に第五師団への影響力を失っており、正規軍を動員することはできなかった。師団内部はセリン派が主導権を握っており、とてもではないがセリン抹殺の派兵などできる雰囲気ではない。

そこで使用人や傭兵などを掻き集め、どうにかこうにか百人ほどの手勢を用意したのだった。

「メデイレン公やセリン派貴族たちに気取られるとまずい。速やかにセリンを討ち、一門の安寧を図るのだ」

「ははっ！」

ここに集っているのは、リトレイユ公の命令なら何でも従うという数少ない者たちだ。ある意味では忠義者といえる。大半の者はセリン支持に回り、メディレン公を実質的な盟主と見ている。

だが盲目的な忠義者の一団は、セリンが養育されている屋敷の手前で急に立ち止まった。

森へと続く一本道に信じられない人物が立っていたからだ。

「お久しゅうございます、父上」

黒いドレスをまとい、手に大鎌を持っているのは先代リトレイユ公ミンシアナだった。

「おっ、お嬢様!？」

「馬鹿な!？ ミンシアナ様は病で亡くなったはずだ!」

実際には服毒自殺を強要されたのだが、彼らはそこまで事情を知らされていない。

だが事情を知るリトレイユ公は蒼白になっていた。

「ま……まさか……生きていたというのか……?」

「あら、娘の生還を喜んでくださるのかしら?」

ミンシアナは微笑んだが、すぐに冷たい表情をする。

「違いますよね? 始末したはずの鬼子が地獄から這い出してきたのが、さぞかし御不快なのでしょう?」

大鎌をくるりと回し、地獄から蘇った大公は薄く笑う。

「でも安心なさつて。私はお父様をお迎えに上がっただけですから。そうそう、忠義者のお前たちも一緒にね？」

パンという乾いた銃声が轟き、リトレイユ公の隣にいた騎士が崩れ落ちて落馬する。

森の暗闇に多数の兵士が潜んでいるようだったが、マスケット銃弾の届く距離ではない。

「なっ、なんだ!?!」

「死神だ! 死神の銃弾だ!」

「逃げる!」

だがリトレイユ公の郎党たちが逃げ出す暇もなく、立て続けに起こった銃声が死神の笑い声のようにこだまする。しかも正面と左右からの十字砲火だ。

「うわあああつ!?!」

「かつ、囲まれてるぞ!?!」

「いつの間に!?!」

姿の見えない敵に射程外から攻撃され、みるみるうちに数を減らしていく郎党たち。リトレイユ公も混乱して命令を下せずにおり、すでに軍としての統制は失われていた。

だがリトレイユ公は五王家の一員として、なけなしのプライドを掻き集める。

「おのれミンシアナアアッ! 父に対して何たる不遜! 地獄に送り返してくれよう!」

名匠が鍛えたサーベルを抜き放ち、逞しい軍馬を駆るリトレイユ公。

「では共に参りましょう」

黒いドレスの美女は大鎌を一閃させた。

「ぐあつ!?!」

美女に到達する遙か手前でリトレイユ公が落馬し、びくびくと痙攣する。そして動かなくなった。あつけない最期だった。

それを見た郎党たちの恐怖は極限に達する。

「ひいひいひいっ!?!」

「死神の呪いだ!」

「おつ、お助けを! ミンシアナ様あああつ!」

だがミンシアナは生前そのままの冷酷な笑みを浮かべ、こう答えた。

「お前たちは皆、忠義の者たちばかり。地獄でもお父様に尽くしなさいね?」

銃声が全てを塗り潰し、やがて静寂が訪れた。

* * *

リコシエは溜息をつくとき、森に潜んでいる軍勢に声をかけた。
「お疲れ様でした。後始末をお願いします」

森からぞろぞろ現れたのは、灰色の軍服に身を包んだ歩兵たちだ。

身分や所属を示すものは何もつけていないが、陸軍第四師団の兵士たちだ。全員がライフル式マスケツト銃を装備している。

そして彼らを率いているのが、鋭い目つきをした老人だった。

「おつかねえお嬢ちゃんだ。やれやれ、ユイナーの回りはこんなのはっかりか」

「いえその、生前のミンシアナ様を再現しただけですから……。先ほどの狙撃、お見事でした」

老傭兵は硝煙たなびく歩兵銃を担ぎ、ニヤリと笑ってみせる。

「的が大きいんで楽だったよ。だがなぜ、こんな危険まで冒して亡霊のふりをしたかったんだね？」

「すみません、私のわがままです」

リコシエはそう言うと、ちょっと苦笑した。

「私の父は腕のいい髪結いで、仕事は丁寧ですし誰にでも親切です。お気楽すぎて、いつも母に叱られていますけどね。でも私はそんな父が大好きなんですよ」

「うん？」

「ですがミンシアナ様の父親は自分の栄達しか考えない身勝手な男でした。大した能力もないのに当主の座にしがみつき、我が子さえも権力の道具としか見ていなかったのです」

「はは、無能なのは間違いないだろうな。あんたを影武者だと見抜けなかったぐらいの間抜けだ」

「この男が私の父ぐらいまともだったら、ミンシアナ様にはもつと違う人生があつたかもしれない。子は親を選べません。あの方にも恨み言のひとつぐらいいは言う権利がございましょう」

リコシエは大鎌を携えたまま、リトレイユ公の骸を冷たく見下ろす。

「ですので、影武者として最後のおつとめを果たした次第にござい
ます」

「なるほど、あんたなりに筋を通したって訳だ。俺は好きだぜ、そ
ういうの」

部下たちが亡骸を森に運び込むのを監督しつつ、老傭兵はパイプ
をくゆらせる。

「それにしても勝ち戦はいい。敵のいない戦場で煙草が吞めるから
な」

老人はそう言つと、黒衣の美女にニヤリと笑いかけた。

第102話「東シユワイデル同盟」(前書き)

8月に新型コロナナ感染によつて療養を余儀なくされ、9月現在も書籍化作業がかなり遅れています。ギリギリまで定期更新を維持してきましたが、これ以上は仕事に差し障るため年内は不定期更新とします。

来年の更新予定はスケジュールが固まり次第お知らせします。

第102話「東シユワイデル同盟」

【第102話】

* * *

【蒼き旗の折れるとき】

「帝国軍の新型砲については、詳細はわからぬのか？」

「脅威的な射程を誇るといふことはわかっているのですが、構造や製法、配備状況などは全く不明です」

ブルージユ公の前で直立不動のまま固まっているのは、ミッセル大尉だ。捕虜になったヒューゲンス將軍の参謀でもある。

「砲声や砲煙から判断して、新型砲は十数門あるように見えました。十分な数を配備していると思われるですが、断定はできません」

「師に似てそなたも慎重な物言いをするのだな、ミッセル」

ブルージユ公はヒゲを整えつつ、神経質そうな目でミッセル大尉をじろりと見る。

「わかりませんで済むのなら参謀も軍事顧問も不要だ。わかる範囲で助言をせよ」

「でしたら、ここは全軍をブルージユに帰還させるのが最善かと思われます。敵の砲だけ射程が倍以上も違うのでは、もはや既存の戦

術理論は成立しません。いったん軍を引き、対抗策を研究して軍を再編するしかありません」

ミッセル大尉は師の持論を繰り返したが、ブルージュ公はやはり納得しなかった。

「馬鹿なことを申すな。ここまでの戦いで得たものを全て失うことになるのだぞ。どれだけの資金と兵を投じたかわかっているのか？」
「それは……」

参謀とはいえ、大尉の身分では国家機密などほとんど知らされていない。ブルージュ公とこうして謁見できるのも、上官であるヒューゲンス将軍が公王の軍事顧問だからだ。
だがそれでも、ミッセル大尉は諦めなかった。

「しかし新型砲の脅威を一刻も早く伝えるよう、ヒューゲンス将軍が自らを囿にして時間を稼いでくれたのです。事の重大さがおわかり頂けるかと思えます」
「ふむ、なるほどな」

ブルージュ公は一瞬、納得したような表情になる。
しかしミッセル大尉がホツとした瞬間、こつ切り返してきた。

「そなたの報告では確かにそうだな。だが実際には、ヒューゲンスを見捨てて逃亡しただけではないのか？」
「何を仰るのです!？」

まだ若いミツセル大尉は、ブルージュ公の言葉をどう解釈すべきか理解できなかった。

そのため、彼はあくまでも専門家として正しい意見を述べる。

「小官はヒューゲンス將軍の命により、メウルカル会戦の敗因分析をお伝えしているまでです」

「それが信用できぬと申しておるのだ。そなたは一度、軍法会議にかけた方が良さそうだな」

ブルージュ公は「全軍撤退は政治的に不可能なので、今すぐ黙らなければ処罰するぞ」と恫喝しているのだが、ミツセル大尉にはそれが通じていない。永らくヒューゲンス將軍の庇護下にあり、そういった駆け引きに慣れていなかったのが彼に災いした。

「偉大なるフィルニアに誓って、小官は恥ずべき行いなどしておりません」

「恥知らずは皆そう言うのだ。もうよい、さがれ」

ブルージュ公がサツと手を振ると、控えていた衛兵たちがミツセル大尉の腕をつかむ。

「大尉殿、こちらへ」

「ま、待ってください！？ 御前、どうかお考え直しを！」

「いけません、大尉殿。無礼ですぞ」

参謀畑を歩んできたミツセル大尉では、練達の衛兵たちにはとて

も敵わない。そのまま引きずられ、部屋から連れ出される。

室内が静かになり、衛兵長が無言でブルージユ公に伺いを立てる。

ブルージユ公はヒゲを撫でつつ、不快感を隠そうともせずと言った。

「参謀肩章を剥奪して本国に送り返せ。糧秣の勘定でもやらせておくのがよからう」

「御意」

* * *

こうしてメウルカル会戦、通称「羊丘会戦」は帝国軍の勝利で幕を閉じた。

俺たちは大量の捕虜、しかもブルージユ貴族の將軍まで手に入れてしまったので、彼らの処遇であちこち駆けずり回った。進軍どころじゃない。

「二千人の捕虜って……もう射殺して埋めちまった方が早いんじゃない」
「二千発の銃弾と二千分人の墓穴が必要だぞ、フォルトン少尉。彼らがおとなしく射殺の順番待ちをしてくれるとでも思っているのか？」

「わかってますよ、参謀殿。まずは寢床と飯の手配ですな。行くぞ、レーン少尉」

物騒な会話をしつつ、捕虜たちをあちこちの要塞に移送する。将校たちは尋問して情報を引き出したいし、やることが山積みだ。

戦争って始める前の準備も大変だけど、終わった後の始末も大変

なんだよな。

転生して軍人になって以来、戦記小説の大勝利のシーンも全く楽しめなくなってしまうた。歴史的な激戦は戦後処理も歴史的に大変なので、想像するだけでげんなりする。

だが進軍どころじゃなかったのは、ブルージュ側も同じだったらしい。

ブルージュ側は先遣隊の壊滅に驚き、そのまま帝都ロツツメルまで軍を後退させてしまった。

おかげで戦わずに済んだが、引き際が良すぎて少し不自然だ。

もしかすると、ヒューゲンス將軍の幕僚たちがブルージュ公に新型ライフル砲の脅威を説いたのかもしれない。將軍の身柄を拘束できたので安心していたが、彼の幕僚たちならライフル砲が戦争を一変させてしまうことを理解できただろう。

そう考えてみると、ヒューゲンス將軍が捕虜になったのは捨て身の策略だったのかもしれない。

真相は不明だが、結果的にこの撤兵はブルージュ公を救うことになる。

ブルージュ軍が後退を始めた直後、ジヒトベルグ家とミルドール家がブルージュ公国からの脱退を宣言したからだ。

帝国五王家の一員だった両家は、「西シュワイデル同盟」を結成。連合王国として独立を宣言する。同時にブルージュ公国に対して帝国領の返還を求めてきた。

図々しいと言えばあまりにも図々しいが、外交で遠慮してても始まらないのでこれでいいんだろう。たぶん。

この大混乱に小躍りしたのが、我らがメディレン公ハーフェンだ。このおっさん、どさくさ紛れに利益を掠め取るのが上手い。

すぐさまメディレン家を中心とした「東シユワイデル同盟」を結成してしまった。

まだ五歳のセリンを新当主とするリトレイユ家、そしてすっかり影響力を失ってしまったシユワイデル家を巻き込んだので、五王家の数と正統性では東シユワイデル同盟の方が大きくリードする形だ。

ちなみにセリンの父親、つまりリトレイユ公は「狩猟中の不幸な事故」で亡くなったそうだ。……絶対に事故じゃない。俺は信じない。

でも真相をほじくり返すと俺も事故死しそうなので、知らん顔をしておく。貴族社会ってのはこれだから怖い。

何にせよ、これで東シユワイデル同盟はメディレン公を中心にまとまった。俺たちも「シユワイデル帝国軍」から「東シユワイデル同盟軍」になり、なんだか落ち着かない感じた。

正統性では東シユワイデル同盟が上だが、西シユワイデル同盟も序列二位と三位のコンビなので決して負けてはいない。

そして国力はほぼ同等。

こうなると戦争で決着をつけるのは難しい。勝つにしても犠牲が大きすぎるからだ。外交の出番になる。

困ったのはブルージュ公だ。帝国の内紛につけ込んで食い荒らすつもりだったのに、気づけば帝都周辺しか占領できていない。周りは敵だらけだ。

ブルージュが手を組めそうな相手は隣国のアガンぐらいしかない。だが今のアガンは艦隊を失い、収入源である航路も脅かされている。同じフィルニア教転生派とはいえ対立要素は多いし、今のアガンには海軍を持たない内陸国と手を組むメリットがない。

といった事情があり、メウルカル会戦の後にはぱったりと戦闘が停止してしまった。結局戦ったの俺たちだけか。いつも損な役回りだ。「ヒューゲンス將軍の身柄は、いったんメディレン領に送ることにした。我々は護送がてら報告に戻り、休養と補給を受けることになる」

アルツァー准将がそう言い、それからニコツと笑う。

「それとフォルトン少尉とレーン少尉の昇進が決まった。今後は中尉として正式に中隊長を務めてもらう。それと砲兵隊設立と人材育成の功によって、シュタイアー中尉は大尉に昇進だ」

めでたいな。戦友たちの昇進は素直に嬉しい。

「ああもちろん、お前もヴィルゲント提督と共に中佐に昇進だ」

「昇進が早すぎて怖いんですが」

「功績を立てた者を昇進させない訳にはいかんだろう」

勲章でいいと思うよ。子供の兵隊ごっこじゃないんだから。

だが第四師団……というかメディレン公の思惑はわかる。子飼いの将校を出世させて、使いやすくするつもりだ。東シユワイデル同盟には陸軍の上級将校が少ないから、それを補う意味もあるだろう。しかし俺、書類上の年齢はまだ二十代前半だぞ。中佐っておかしくないか？

なんだか不気味だが、断るのも変なのでおとなしく拜命しておく。できればもうこの辺で出世は打ち止めにしておきたい。偉くなると大変なんだ。

「それで、対ブルージュ戦はどうなります？」

「西シユワイデル同盟と水面下で密約を結び、帝室を除く四家で外交圧力をかけることになった。帝室に帝都を返さなければ全面攻勢に転じるぞ、とな」

まあ白々しい。

俺は苦笑する。

「で、帝都が返還されたら帝室を帝都に封じ込めて、東西のシユワイデル同盟はそのまま存続するという訳ですか」

「そうだな。皇帝が失踪したままだから、帝室直轄領を返したところで治めきれないだろう。我々がきちんと面倒を見なくてはな」

ずいぶん悪辣なやり方だが、たぶんこれが一番丸く収まる。帝室

はもうお飾りに過ぎない。

となると、俺たちの次の仕事は決まったな。

「では帝都奪還のために、外交と軍事の両面から圧力をかけていきますか」

「ああ。東シユワイデル同盟が帝室の庇護者として君臨するために、もう一働きしてもらおうぞ」

俺は苦笑しつつ、冗談まじりにぼやいてみせる。

「閣下は類い希なる名将にあらせられますが、少々人遣いが荒すぎますな」

「お前以外の部下を荒く使った覚えはないし、お前ならこれぐらいは造作もないだろう？」

おい、この人完全に真顔で言ってるぞ。なんて上官だ。

でもまあ、それで平和になるなら安いものだ。戦争なんか早く終わらせよう。

帝都奪還のため、俺は参謀として次の策を考えることにした。

第103話「バンギユラスの檻」

【第103話】

メウルカル
羊丘会戦での歴史的な勝利から数週間が過ぎたが、俺は捕虜となつているヒューゲンス将軍をときどき訪ねていた。今日はランチを一緒に摂る。

彼が軟禁されているのはメディレン領の要塞で、部屋はもちろん貴族用の広くて快適な客室だ。

捕虜といつてもブルージュ公に仕える軍事顧問だし、彼自身も大貴族だからな。

そんな彼と向き合いつつ、俺は口を開く。

「ミツセル参謀大尉が解任され、ブルージュ本国の主計官に転属となつたそうです」

ミツセル大尉はヒューゲンス将軍の参謀だが、実質的には弟子に近いという。ヒューゲンス将軍自身が優れた参謀なので、彼の参謀はみんな見習い参謀だ。

ヒューゲンス将軍は食卓に似合わない黒パンをちぎって口に運んでいたが、深々と溜息をついた。

「なんとということだ……。敵である貴官からそのような情報を知らされるとは、耐えがたい屈辱だな。しかし情報には感謝せねばなりませんまい。ありがとう、クロムベルツ少佐」

ヒューゲンス將軍はベテランだから、俺の伝えた事実を鵜呑みにはしないだろう。敵が無償でくれる情報など、信じるに値しない。だが残念ながら、この情報は事実だ。

メデイレン家は交易を通じて広大な情報網を構築しており、その末端はブルージュ本国の隅々にまで及んでいる。

もちろん何もかも承知という訳ではないが、知りたい情報があれば伝手を頼ってある程度はつかむことができた。

で、ヒューゲンス將軍の弟子が左遷されたことを突き止めた訳だ。

謹厳実直に軍服を着せたようなヒューゲンス將軍は、何かを考えている様子で黒パンを咀嚼している。

俺は余計なことを言わず、自分の黒パンをもぐもぐ食べる。

本当は白パンぐらい用意できるのだが、彼は「敵地に在っては最前線の兵士と同じものしか食べない」と言って頑なに譲らず、俺たちはそれに敬意を払った。

やがて彼は口を開いた。

「この黒パンは、本当に私の部下たちが食べているものと同じなのかね？」

「そうです。閣下のお口には合わないでしょうが、小官は割と気に入っておりますよ」

貧民街で売られている黒パンは中に何が入っているかわからない。かさ増しのために家畜飼料の粉末が混入しているのはまだマシな方で、中には砂を入れる悪質な業者もいた。

それに比べれば、この黒パンは安全性が担保されている。酸っぱくてぼそぼそしているが、味もそんなに悪くはない。スープとよく合う。

ヒューゲンス将軍はテーブルの上のスープ皿をじっと見つめる。

「ベーコンと野菜の汁物か。これも末端の兵士たちに？」

「はい。虜囚生活では食事が唯一の楽しみですから、なるべく旨いものを食わせるように指示しております。具の内容や量も同じですよ」

これは反乱や脱走を防止するためでもある。人間というのは安全な寝床と旨い飯があれば、あまり無謀なことはしないものだ。俺は今世でそれを痛感した。

だから捕虜たちにはなるべく快適な生活をさせている。まあ、予算の範囲でだが。

ヒューゲンス将軍はしばらく黙っていたが、やがて深々と頭を下げた。

「貴官の言葉は信用に値する。貴国が我々捕虜に対して手厚い処遇をしていることには、やはり礼を言わねばならないな。総司令官として正式に感謝する」

「おおげさですよ」

俺は内心嬉しかったが、なんでもないような顔をして黒パンをもぐもぐ食べる。

「ミッセル大尉のその後についても、わかる範囲でお伝えします。

閣下と大尉殿は師弟だとお聞きしておりますので」

「あれは出来の悪い生徒でしてな。なかなか独り立ちさせられません」

心なしか、ヒューゲンス將軍の口調が柔らかくなつた気がする。

これも計算のうちだろうか？

だがヒューゲンス將軍はひげを撫でつつ、苦笑いを浮かべた。

「おおかた、我が君の氣に障るようなことを言つて左遷されたのでしよう。何でもかんでも事実を言えば良いというものではないのですが、その辺りがまだ飲み込めておらぬのです。戦況を読む目もまだ未熟ゆえ、貴官を見習わせたい」

おっと、ずいぶん打ち解けてきたな。嬉しいが油断は禁物だ。

とはいえ警戒しては情報を引き出せないのです、俺はさりげなく探りを入れていく。

「小官など未熟な若輩です。メウルカル会戦での勝利にしても、たまたま新型砲があり、いちかばちかの賭けがうまくいったに過ぎません」

「私には、貴官が『いちかばちかの賭け』をするような参謀には見えんよ。貴官はあるとき、確かに必勝の氣迫をもって作戦を立案していた。用兵のひとつひとつにそれが見えるのです」

お世辞だろっけど照れるな。

おつといかん、なかなか本題に入れないぞ。

「閣下、この若輩にお教えください。この戦争を終わらせるにはどうすれば良いのでしょうか？」

「敵である私にそれを尋ねるのかね？ 虜囚となつてからは情報を遮断され、戦況を読むことすらできないというのに」

特に気を悪くした様子もなく、淡々と食事続けるヒューゲンス
將軍。

俺は食い下がった。

「小官はこの戦いを早く終わらせたいのです。兵は疲弊し、民は迷惑し、何も得るものがありません。徒に長引かせるのは軍人としての良心に反します」

「軍人としての良心、か。つくづく貴官は清廉な人物だな」

ヒューゲンス將軍はそう呟き、手にした黒パンを皿に置いた。

「だが貴官こそ真に尊敬に値する軍人であることも、また事実だ。同じ軍人として心打たれた。それゆえ、私に言える範囲でお伝えしよう」

彼は俺をまっすぐ見つめる。

「我が君は目先の損得にこだわりすぎるところはあるが、大局がわからぬ御方ではない。目に見える形で敗色濃厚であり、兵を退く落しどころさえあれば、必ず兵を退くだろう」

目に見える形で、か。なかなか難しいな。

するとヒューゲンス將軍は静かに続けた。

「この戦争を続けたところで、もはや国益に見合わぬことは私も承知している。我が君もそれは内心理解しておいでだろう。だが王が兵を退くには、相応の大義が必要なのです」

「兵を進めるのに大義が必要なように、ですか」

「仰る通りです。やはり国内外の事情がありますからな」

そう言って、ヒューゲンス将軍は深く溜息をついた。

「これぐらいの会話であれば、敵方との雑談ということでも許されるでしょう」

「お気を遣わせてしまい、申し訳ありません」

彼にも立場がある。あまり敵方と仲良くする訳にはいかないし、秘密を漏らすこともできない。

ここで彼が話したことは一般論だから、それだけで責を負わされることはないだろう。

だが彼がこの場で語ったということには、それなりに意味がある。食事が終わり、俺は立ち上がった。

「閣下から御教授を賜ったことを感謝いたします」

「いや、教えられたのは私の方だ。これが『バンギユラスの檻』ではないことを祈りますが」

バン……何？

貴族は古典に通じているからおそらく何かの逸話か伝承なんだろ

うが、俺にはわからない。いや、俺だって平家物語とか宇治拾遺物語とかなら少しはわかるんだぞ。

でもシュワイデル文学とかはさっぱりだ。

しかしここで「なんですか、それ？」なんて言えるはずもないので、俺はにっこり微笑んだ。

「御懸念には及びませんよ」

「であれば幸いです」

合ってる？ この返答で合ってる？

俺は内心どきまぎしつつ、敵の將軍に敬礼すると退出した。

……帰ったら准将にでも聞いてみるか。

* * *

「ふむ……」

敵方の若き参謀が去った後、ヒューゲンス將軍はナプキンで口元を拭いながら唸った。

(あの揺さぶりにも全く動じないとは、なんとという胆力だ)

バンギユラスの檻。

シュワイデル帝国の初代皇帝がまだ一介の騎士だったときに、卑劣な敵将バンギユラスに囚われた逸話だ。

バンギユラスは執拗に嘘の情報を教え、初代皇帝と五人の仲間たちとの絆を断とうとした。

結果的にその試みは徒勞に終わり、バンギユラスは討ち取られている。

この故事から、「バンギユラスの檻」は「情報を遮断して嘘の情報を信じ込ませようとする」という意味で広く用いられるようになった。

ブルージュではあまり知られていない故事ではあるが、ヒューゲンス將軍は国内外の古典に詳しい。

そのヒューゲンス將軍は、じっと考え込む。

(彼ほどの俊英があゝの逸話を知らぬはずはない。にもかかわらず、さざ波ほどの動揺も見せなかった。彼の言葉には嘘はないのだろうか)

通常、敵が純粹な善意で捕虜に情報を与えることはない。その情報が事実であれ虚偽であれ、そこには何らかの意図が生じる。つまりは捕虜を利用しようという後ろめたさがあるはずだ。

そこを指摘されれば動揺し、多くの場合は怒ったり弁明したりする。

穏和なクロムベルツ少佐なら怒りこそしないだろうが、微かに動揺して苦笑いぐらいはするだろうと思っていた。

しかし彼は全く動揺しなかった。苦笑いすらしなかった。

まるで「何を言っているのかわからない」とでもいうように、不

思議そうにしていたのだ。

逆にヒューゲンス将軍が動揺することになってしまった。

（まさか……まさかだが、彼は本当に純粋な善意で私に会いに来てくれたのか？ ミツセルのことを教え、私を安堵させるために）
常識ではありえない話だが、クロムベルツ少佐の反応も常識ではありえない。

どう判断すべきか苦慮した末、ヒューゲンス将軍はふと中世の騎士物語を思い出す。

（彼は新進気鋭の若き天才参謀だが、古き良き時代の騎士道精神を持ち合わせているのかもしれない。彼は敵に敬意を払える人物だ）

そう考えると、全ての辻褄が合う気がした。

（もしそうなら、私はブルージュ貴族として恥ずべき振る舞いをしてしまった。彼の善意を疑ったのは明らか非礼だ。非礼は償わねば）

ヒューゲンス将軍は机の引き出しから羊皮紙と封筒を取り出すと、流麗な筆致でサラサラと書き付ける。

それから呼び鈴で看守役の帝国将校を呼び出し、封筒を示した。

「先ほど、私はクロムベルツ少佐殿に失礼なことをしてしまいました。お詫びの手紙を差し上げたい。まだ要塞内におられるはずだから、これをお渡しして頂けるかね？」

「は、はい！ ただちにお渡しして参ります！」
ヒューゲンス將軍を尊敬している将校は直立不動で敬礼すると、
その封筒を受け取った。

* * *

第104話「冥府の契約」

【第104話】

俺は大クロムベルツ……つまり元相棒の老人と向き合っていた。
ここはメディレン家の持つ要塞のひとつだ。
彼がメディレン公に雇われていることを知った俺は、密命を帯びてこの要塞を訪れていた。

俺が持参したコーヒーを飲みながら、老人はいつものように微笑んでいる。

「こいつは苦いが妙に美味しいな。初めて飲む」
「コーヒーだよ。遙か南方数千キラム彼方の灼熱の大地で栽培されている、貴重な豆で作った飲み物だ」

「そんな土地があるのか。長生きはするもんだな。人生ってヤツは実に面白い」

灰色の軍服に身を包んだ老人は、フツと笑った。
こんな出で立ちだが、今の彼はメディレン家の出入り業者ということになっている。傭兵だから間違いではない。

「お前とは、あのまま綺麗にお別れしたかったんだがな。だがお前のことだ、単に会いたかったなんて理由じゃあるまい？」
微笑んではいるが、目は笑っていないな。

俺は単刀直入に用件を切り出した。

「今日は公用で来た。第六特務旅団であんたを雇いたい」

「ほう。だが昔の馴染みだからってタダにはならんぜ？ 正規の報酬はもらう」

「もちろん払うさ。今回もメディレン公からの依頼だ。依頼書と契約書も預かっている」

俺は分厚い封筒を取り出して机の上に置いたが、爺さんはそれには触れずに俺をじっと見つめる。

「雇われの前線指揮官なら他にも声をかける相手がいくらでもいたはずだ。俺の退役時の階級は知っているだろう？」

「ああ。メディレン公が調べてたよ。あんた、『雪だるま戦争』のときに戦時任官で下士補になってたんだな。堅実な軍務で下士官に昇進した後、退役時の名誉昇進で下士長になってる」

一般の兵卒として入隊し、下士官不足を補うために戦地で臨時に任官したんだろう。

下士官がバタバタ死ぬ状況はどうかしているが、帝国がブルージユに侵攻して大敗北した戦争だ。無理もない。

そして正規の下士官教育を受けていなくても、このじいさんは兵士たちを統率できると上層部は判断した訳だ。

結果的にその判断は正しかった。彼の小隊は半数が生き残り、極寒と敵の追撃を振り切って生還できたからだ。

同じ中隊の他の二個小隊はほとんどの者が凍死したという。

この国のトップはおおむね無能だが、現場のリーダーたちはだいたい良い判断をするな。

ただ、そういう国は長続きしない。だから今、存亡の危機に瀕している。

俺はそんなことを思いつつ、元相棒の老人に語りかける。

「下士長として復職して、戦時任官で少尉に昇進させる。女子戦列歩兵一個小隊の隊長になってくれ。全員女の子だが、俺が自分で鍛えた兵たちだ。さらにあなたの元部下たちを下士官としてつけよう」
「……聞く価値はありそうだな」

老人は真剣な眼差しで俺を見つめる。

俺はどこまで事情を打ち明けるべきか悩んだが、なんせ旧知の間柄だ。ここでコソコソと隠すよりは、大胆に全部打ち明けてしまった方がいいだろう。

その方が俺の本気を感じてもらえるはずだ。

「あなたが皇帝の失踪に関与しているのは知っている。あの指輪が証拠だからな。あなた自身がそんなことを計画するはずはないから、当時の雇い主……つまりブルージュ公の意向だろう」

「俺が計画するはずがないってのは、どういう意味だ？」

愚問だな。

「あなた、昔っから弱い者いじめはしないだろ？」

と勝手に老人は大笑いした。

「ははは、皇帝を弱い者扱いか！ お前ってヤツはやっぱり面白いな、ユイナー！」

この食えない爺さんとあの皇帝じゃ比較にもならない。戦士としても策略家としても人間としても圧倒的な差がある。この爺さんが皇帝になった方が帝国は安泰だろう。

いや、政治家としては少々まずい気がするな……。

老人は笑った後、俺をじっと見つめる。

「いや、すまんすまん。話の腰を折っちまったな。それで？」

「そのあんたを将校としてアルツァー・メディレン旅団長の幕僚に加えりゃ、ブルージュ公はさぞかし焦るだろう。さらに帝都を包囲攻撃すれば、ヤツは必ず兵を退く」

これは秘密だが、ブルージュ公の軍事顧問であるヒューゲンス將軍の助言が効いている。

どうやらブルージュ公は皇帝が本当に死んだのか疑問に思っているようで、皇帝帰還の噂が流れるたびに過剰反応しているという。流れ者の傭兵に大事な仕事を任せるからだ。

その流れ者の老傭兵は軽くうなずき、ソファにもたれかかる。

「お前らしい面白い策だな。だが俺には危険なだけで得はない。お断りだ」

俺もソファにもたれかかり、余裕の態度でコーヒーを飲む。

「いや、あんたは引き受ける。報酬が破格だから」

「金額の問題じゃねえのさ」

「俺も金の話はしてないぜ」

「なら士官の口か？ 興味ねえよ」

「名誉や地位の話もしてないんだが、耄碌するには早すぎるだろ？」

俺は意地悪な口調で老人をからかう。この爺さんは、こういう煮ても焼いても食えないような問答が大好きなのだ。これも敬老精神なので勘弁してほしい。

案の定、爺さんは身を乗り出してくる。

「金でもねえ、名誉でも地位でもねえ。だとしたらお前は俺に何を支払うつもりなんだ？」

「昔、あんたが教えてくれたじゃないか。人を使うには、そいつが一番欲しているものを用意しろって。だから俺はあんたにそれを用意した」

芝居がかった仕草で、俺はずいといと身を乗り出す。

「あんたに晴れ舞台を用意してやる。帝国の存亡がかかった大決戦、帝都を巡る攻防だ。あんたは正規の将校として『表』の戦場に立つ。もちろん勝ち戦だ。そうなるように俺が策を練る」

「こりゃまた自信たっぷりだな」

「帝都を攻略できなくても、ブルージュ公が退けばそれで勝ちだからな。ブルージュ公が退くよう、いろいろ卑怯な手を用意している。あんたの起用もその一部だ。危険な作戦だから生還の保証なんぞな

いが、そんなもん必要ないだろ？」

俺はわざと戦死を強調してみせる。

彼は別に死に場所を探している訳ではないが、自分を罫に嵌めようとする言葉には敏感だ。「安全だ」とか「確実に生還できる」とか言えば警戒するだろう。

だから逆に「死ぬよ？」と言えば、むしろ安心するだろうと思った。

この読みは正しかったのか、老人はまんざらでもなさそうな顔をして顎を撫で回している。それからニヤリと笑った。

「おいおい、敬老精神が足りんぜ。俺を殺す気か？」

「どうせ最後はみんな死ぬ。だったら悔いのない死に方をしたい。違うか？」

なんせ俺は一度死んでるからな。いつか死ぬのは受け入れているが、納得できない死に方だけは御免だ。

そしてそれはこの老人も同じだろう。

老人は俺をまじまじと見つめた後、困ったように溜息をついた。

「ずいぶん立派な死神になったな、ユイナー」

「その名で呼ばれるのは嬉しくないな」

「褒めてるのさ。フィルニアの教えじゃ、死神は主神の使いだ。役目を終えた魂を導き、安息の園に連れていく御使みつかいだからな」

「知らなかつたな」

「不信心にも程があるぜ。まあ俺も戦友の埋葬をしたときに従軍神官から聞いたただけだが」

さらりと重い過去が出てくる。

リトレイユ公ミンシアナの影武者だったリコシエの報告によると、この老人は常に勝ち戦にこだわっていたそうだ。

なんでリコシエからそんな報告が上がってくるのかが気になるが、おおかたリトレイユ家のお家騒動に絡んだ非正規作戦……要するに暗殺作戦で知り合っただらう。

深く追求しない方が身のためだ。

「あなたの軍歴が敗戦続きだったのは知っている。この数十年の帝国がそうだったからな。勝ちたいんだろ？ それも素顔を曝した正規戦で」

「やれやれ、貴族様ってのはどいつもこいつも耳が早いな。どこまで掴んでるんだ？」

「『雪だるま戦争』のとき、あなたが戦死した知り合いの名前を使って生き延びたことは知ってる」

メディレン家が本気になれば大抵の記録は漁れる。軍隊には記録が山ほど残っているから、大した手間ではなかったようだ。

「十日も前に戦死した下士長の補給申請書が後方の集積所に提出さ

れているが、実際に物資を受領したのはこの下士長の小隊じゃなくてあなたの小隊だ」

「下士補の申請じゃ通らねえっていうんで、ちよいと名前を拝借したのさ。おかげで俺の小隊は凍えずに済んだし、あいつの手柄もひとつ増えた。誰も困らんだろ？」

この爺さん、死人を好きなように蘇らせてるから死霊使いみたいだな。あちこちで死神呼ばわりされてる俺とは対極だ。

俺は微笑みながら老人を見つめる。

「あんたは自分の戦争を勝って終わらせたいんだろ？　だが裏稼業に手を染めたあんたは、傭兵になっても『裏』の戦場にしか立てなかった。これからもそうだろう。終わらない悪夢だ」

ブルージュ公もメディレン公も、この老人を公職には就けていない。雇用の記録も存在しない。どこまでいっても裏稼業の傭兵だ。そのことはこの老人もよく理解しているだろう。

彼は溜息をついて腕組みした。

「嫌なところを突きやがる。だがその通りだ」

「今回は正式に軍人として復職して、本物の正規軍を率いる。あなたの戦いは表の記録に残るんだ。帝都に勝者として凱旋できるぜ。長い悪夢を終わらせるときが来たんだ」

沈黙。

だがこの沈黙は拒絶じゃない。老人は続きを待っている。
だから俺は言っちゃった。

「頼むよ、おじいちゃん。俺みたいな死神には、亡者の軍勢を率いるあんたが頼りなんだ。久しぶりに組もうぜ」

「うまいこと言って泣き落とそうだったって無駄だぜ。まだそこまで耄碌しちやいなえ」

老人は溜息をついたが、机上の封書を手に取った。

「だがまあ、お前の人を見る目は本物のようだな。俺も歳だ、あと何回戦場に立てるかわからん。悪くない賭けだ」

「契約成立だな。あんたの命は買い取ったぞ」

「おいおい、言うことまで死神じみてきたな」

俺たちは笑い合い、がっちりと握手を交わした。

第104話「冥府の契約」(後書き)

「マスケットガールズ！」書籍版2巻の発売が決定しました。1
2月23日です。

コミカライズ版も12月2日から「コミックPASH！」様で連
載開始予定です。漫画は飛鳥あると先生です。

第105話「准将の決断／帰ってきた古強者」(前書き)

【コミカライズ連載開始!】

コミックPASH!様でコミカライズの連載が始まりました(漫画：飛鳥あると先生)。

今なら無料で読めます。

<https://pash-up.jp/content/00001720>

「こういう漫画が読みたかったんだ」というのが完全な形で実現していますので、原作者としてメチャクチャ喜んでおります。ぜひ御一読ください。

第105話「准将の決断/帰ってきた古強者」

【第105話】

帝都ロツツメルをブルージュ公国軍から奪還するため、俺は作戦を立案するようにアルツァー准将から命じられた。

一大任務のようだが、これも参謀の通常業務だ。

俺が用意したいくつかの作戦案を前に、アルツァー准将は熟慮する。

なんせシユワイデル帝国とメディレン家、それに俺たち自身の未来がかかった選択だ。いつもは即断即決のアルツァー准将も、さすがに悩んでいる様子だった。

やがて彼女は白く繊細な指先で、作戦案のひとつを示す。

「本当にこれで勝てるのか？」

「勝てる可能性が最も高い作戦のひとつです。小官にはこれ以上の助言はできません」

参謀は決定に関与しない。

正直、どの作戦も一長一短だ。

負けるリスクを最小にした結果、勝てる可能性も最小の案。

負けたときは二度と立ち直れないほどの損害を被るが、勝てる可能性が非常に高い案。

戦場での勝利は堅実なものに留め、それを材料にして交渉を有利

に進めるための案。
他にもいろいろある。

敬愛する上官の緊張をほぐすため、俺は苦笑してみせた。

「どの案も考えついでから実現性を確認するのに苦労しましたよ。できることなら全部採用してほしいのですが」

「やり直しのできない一発勝負だぞ。どうやって全部採用させる気だ」

アルツアー准将は呆れた顔で笑ったが、それで緊張が解けたらしい。いつもの彼女が戻ってきた。

「いや、そうだな。貴官の苦労に報いるには私が選ばねばなるまい。それが私の責務だ」

「はい、お願いします」

彼女の言う通り、決断するのが司令官の役目だ。

どれほどの重圧を感じたとしても、決めない司令官に価値はない。大陸を接見した大帝国がここまで衰退したのも、歴代の皇帝たちが決断を先送りにした結果だ。

だが俺の好きなアルツアー准将は、そんな小物とは違う。

「よし、決めたぞ」

アルツアー准将は計画書のひとつを迷いなく選び取ると、ニコッと笑った。

「お前の作戦で戦死するなら、それはそれで悪くない」

「そういう理由で選ばないでください」

「冗談だよ。私は勝つ」

覚悟を決めたときのアルツァー准将は、神秘的なほど高貴な輝きが宿る。もっと簡単に言うと、とても美しい。視線が釘付けになってしまう。

俺の視線に気づいたアルツァー准将は、フツツと笑った。

「どうした、惚れたか？」

「それでしたらとっくに」

「にゃっ!?!」

真っ赤になると同時に、高貴な輝きが消え失せてしまった。惜しい。

アルツァー准将は俺をじろりと睨むと、小さく咳払いをした。

「軍議を開くぞ。ただちに将校を招集しろ」

「はっ、ただちに」

俺は苦笑しつつ敬礼した。

* * *

第六特務旅団の幹部が会議室に集まる。
旅団長、アルツァー・メディレン准将。

第一歩兵中隊長、ディゴ・フォルトン中尉。万年少尉の不良中年だが、メウルカル会戦の軍功でめでたく昇進した。戦場慣れしており、部下たちからの評判も上々だ。

第二步兵中隊長、シャル・レーン中尉。彼も昇進した。美女にか見えない好青年で、旅団の一部女性兵士たちから熱い視線を向けられている。

しかし彼自身は色恋沙汰には全く興味がないらしい。

第一砲兵中隊長、ロズ・シュタイアー大尉。政治的な理由で昇進が止まっていたが、もうあれこれ配慮する必要もなくなったので大尉になった。少佐への昇進もすぐだろう。

第一砲兵中隊副長、ハンナ・ハイデン少尉。帝国史上初となる、平民出身の女性将校だ。歴史に名前が残るのは確実だな。

あとは参謀の俺。

これで全員だ。

うちの旅団の小隊長以下は下士官ばかりで、専門の士官教育を受けていない。そのため今回の軍議には招集しなかった。難しい話を聞かされるぐらいなら休養してもらった方がいいだろう。

こうして見ると全体的に若いな。

「おおむね集まったようだな。では帝都攻略作戦の説明を始める」
アルツァー准将はそう言うと、よく通る声で説明を始めた。

「まず現地の状況だ。ブルージュ軍は現在も帝都ロツツメルを占拠している。帝都の民は一部が逃亡したが、大半は現在も居住を続けているようだ。市街はおおむね治安が保たれている」

一同をゆっくり見回し、准将は説明を続ける。

「駐留する敵兵力は、およそ四万と推定されている。本国から援軍

を呼び寄せたようだが、帝都周辺に置いておける兵としてはこれが限界だろう。これ以上増やせば食料も寝床も足りないはずだ」

十万とか二十万の大軍は、その土地にある資源やインフラを食い尽くしてしまう。内陸部だから物資の輸送にも限界があり、とてもじゃないが長期の駐留はできない。

とはいえ少ない兵では負けてしまうので、これぐらいが無理なく維持できる最大兵力なのだろう。

「さて、攻略目標である帝都ロツツメルは歴史ある城塞都市で、堅固な城壁に囲まれている。……中世の城壁にな」

士官教育を受けている面々には、それだけで意味が伝わるだろう。中世の城壁は歩兵と矢を防ぐためのもので、高く薄い。投石器の攻撃で大ダメージを受ける。ましてや砲弾となれば耐えきれない。

「まあ城壁は無いよりマシという程度だが、そんなことはブルージョ軍も承知している。そのため、彼らは帝都周辺に防御陣地を構築したようだ。市民を雇って城壁の外側に長大な塹壕を掘らせ、分厚い防御線を張り巡らせている。塹壕同士を連結するトンネルもあり、まるで野ウサギの要塞だ」

とうとう出てきてしまった。塹壕。

塹壕自体は別に特殊な技術を必要としないので、小規模なものなら現在もときどき使われている。だが今回は規模が違う。いくつもの塹壕が折り重なるように掘られ、帝都の東側を数百メートルにわたって防衛しているのだ。

実は転生以来、俺が一番恐れていたことがこれだ。
前世では機関銃が登場してから急速に塹壕の必要性が高まったが、こちらの世界ではライフル砲の登場が引き金になってしまったようだ。早くも塹壕戦の時代が到来してしまった。

これがあるから、前世知識で新兵器をポンポン出すのは危険なんだ。本来のペースより早く技術革新が進んでしまうと、死ななくてもいい人間が大勢死ぬ。

それにあまり技術が進んでしまうと、俺の素人知識でどうにかなる範囲を超えてしまう。

参ったな。

するとフォルトン中尉が少し不思議そうな顔をする。

「ずいぶん鮮明に現地状況がわかってるんですね」

そう思つのも無理はない。望遠鏡では塹壕内部の構造まではわからないが、シュワイデル軍の斥候が塹壕まで近づくのは危険だ。もちろん帝都に入ることもできない。

これには秘密がある。帝室紋章官のブレッケン卿が帝都から情報を送っているのだ。

だいぶ前に俺と会ったときに親しくなり、メディレン家への仕官を条件に協力してくれている人物だ。

もちろんかなりの危険を伴うが、紋章官の中には諜報員としての

顔を持つ者もいる。ブレッツヘン卿もそのタイプで、様々な裏ルートを使って報告書を送ってくれていた。

そのせいか、たまに報告書が小麦粉の袋や木箱の隙間から出てきたりする。ブレッツヘン配下の密偵から口頭で報告されることも多い。

だがこれらはもちろん重要機密だ。ブレッツヘン卿の安全と俺たちの信用に関わるので、彼の存在は明かせない。出す必要のない情報は外部に出さないよう、士官学校で繰り返し教わった。

だからアルツァー准将も苦笑いするだけだ。

「情報源は軍事機密だが、信頼に値する。それに複数のルートから情報収集し、裏も取っているからな。それで納得しろ」

「ははあ、なるほど。そういうことですか……。承知いたしました、閣下」

余計な詮索は損をするだけだと踏んだのだろう、フォルトン中尉はおとなしく引き下がる。無頼に見えるが、引き際は心得ている男だ。

複数のルートってことは、やはりブレッツヘン卿以外にも情報提供者がいるんだろう。以前、帝都の豪商や教区神官にも協力者がいるとメディレン公ハーフェンが言っていた。

准将はそれから作戦内容の説明に入ったが、それは一同を困惑させるものだった。

「本当にそんなことが可能なんですか？ 正攻法で攻めるのは難しいのですか？」

不安そうにレーン中尉が言うと、ロズ大尉が口を挟む。

「真正面からの力攻めだと、まず塹壕を突破できないだろう。ありつたけの新型砲を撃ちまくっても塹壕の兵を殲滅できない。塹壕に敵の歩兵がいる限り、騎兵も歩兵も通れんぞ」

ライフル砲はあまり曲線を描かずに飛ぶため、目標に対してはほぼ真横から当たってしまう。つまり塹壕手前の地面だ。

角度をつけて上に打ち上げれば真下に落とせるが、それだとせっかくの長射程が全く生かせない。

苦労して塹壕の中につまく着弾させたところで、鉛の塊ではせいぜい数人を死傷させる程度だろう。榴弾とは違う。

ブルージュ軍は昔からある安価でお手軽な方法で、未知の最新兵器に対抗してきた訳だ。

「確かにそうですが……」

レーン中尉が不安そうに俺を見たので、全員の視線が俺に集中する。立案したのは俺だからな。

俺は小さく咳払いをした。

「この作戦は最小の犠牲で帝都を攻略するため、失敗しても戦線を維持できるのが特徴だ」

主力の消耗を避ける作戦なので、失敗しても負けない。帝国軍は戦力の大部分を温存でき、帝都の半包囲を継続できる。

もちろん、そんな都合のいいことばかりではない。

「その代わり、成功する確率はあまり高くない。少数の精鋭に全てを委ねることになるが、彼らとて命は惜しい。少しでも弱気になればこの作戦は失敗する」

今回の作戦は、現代的に言えば特殊部隊を送り込む作戦だ。しかし現代のような通信機器やセンサー類はない。危うさがつきまとう。

「そこで、その精鋭たちを統率するための人材を用意した。今からそれを諸君に紹介しよう」

するとそのタイミングを見計らっていたように、最後の将校が入ってきた。

中尉の階級章を付けた老人だ。どこの所属でもない、灰色の軍服を着ている。

ハンナが口をあぐり開けている。そういや初対面ではなかったな。

「さ、参謀殿？ この人って、まさか……？」

「そのまさかだよ。彼女に教えてやってくれ」

老人はきびきびとした動作で准将に敬礼し、それから俺に笑いかけた。

「参謀殿の御命令とあれば」
嬉しそうな顔しやがって。

老人は人懐っこい笑みをハンナに向ける。

「立派になったな、お嬢ちゃん。本日付で第六特務旅団所属となった、特務中尉のクロムベルツだ。その参謀殿の『おじいちゃん』だよ。新入りおじいちゃんだが、よろしく頼む」

新米少尉のハンナは椅子をひっくり返しながら立ち上がり、慌ててビシッと敬礼した。

「はっ、はいっ！ おじい……いえ、中尉殿！」

いや、その人は俺の祖父じゃない……。

第106話「帝都奪還作戦開始」(前書き)

本日12月23日は書籍第2巻の発売日です。詳しくはPASH!
ブックス様公式ページを御確認ください。
コミカライズ第2話もコミックPASH!様で公開中です。

第106話「帝都奪還作戦開始」

【第106話】

帝都ロツツメル奪還作戦が、いよいよ始まった。

攻撃側はメディレン家の私兵である第四師団、そしてリトレイユ家の第五師団。さらに帝室近衛師団である第一師団の残党や各師団の予備役が加わり、兵力は六万に膨れ上がっている。

帝都ロツツメルはシュワイデル帝国を東西に結ぶ要衝にある。東部のリトレイユ地方とメディレン地方、そして西部のミルドール地方とジヒトベルグ地方。帝国全土から富と人材が集う繁栄の都だ。……まあ、百年以上前の話だが。

「落日の残光に照らされる退廃の都、といったところだな。豪華絢爛たる腐乱死体だ」

城壁に翻るブルージュの軍旗を眺めつつ、アルツァー准将は居並ぶ士官たちに笑いかけた。文学少女だから表現がねちっこい。

冷たい夕暮れの風に髪をなびかせつつ、准将は続ける。

「今のロツツメルは老朽化した城壁の外にまで、だらしなく市街が広がっている。貧しい平民たちが住む街だ」

落ちぶれて城壁内部の土地を手放す羽目になった者。

凶作や重税で故郷から逃亡した農民。

戦場で後遺症を負った廃兵。

帝都の富のおこぼれを掠め取る犯罪者。

まあ、いろんな人がいる。

「この貧民街は日当たりの良い南側に広がっているが、外縁部は破壊されている。破壊された家屋は南門を守るバリケードになっている。かなり多数の兵が市街に潜んでいるようだ」

南側からの突入は無理だろう。見通しのきかない市街戦では守備側の待ち伏せが脅威だ。おまけに連絡も取りづらいときた。騎兵も砲兵も身動きが取れない。

「北側と東側には貧民街がなく城壁まで進めるが、いずれも塹壕が張り巡らされている。また、北側に布陣するとブルージュ領からの援軍が現れた場合に後背を衝かれる形になる」

ブルージュ本国を背にする形になるので、北側からの攻撃は膠着するとまずい。

「さりとて、西側は敵が退路として守備している。苦勞して西側から迂回攻撃を仕掛けたところで、撤退が難しく危険だ。従って選択肢からは除外する」

結局、どうにかなりそうなのは東側だけだ。

攻撃可能な場所をひとつに絞らせることで、敵はそこに主力を投入できる。

こうなると屍を積み上げて高さを競うような血みどろの潰し合い

になりがちで、それは極力避けるように士官学校では何度も教わってきた。

別に人道的な理由じゃない。兵力を消耗しすぎると戦闘を継続できなくなるからだ。

「結局、どうにかなりそうなのは東側だけ、ということだな」

アルツァー准将がそう言って俺を見る。俺が考えていたことと全く同じだ。以心伝心というヤツだろうか。

まあ俺と以心伝心してるのは、あの死神ぐらいだろうか。

……あの死神って誰だ？

記憶にないが、そんな夢でも見たのかな？

まあいい、今は軍務に集中しよう。

准将は俺をチラリと見た。

「詳しい説明は立案者にやらせよう。中佐、説明を」

またそうやって面倒臭いところだけ俺に振る。わかってるんですよ。

俺は内心で溜息をつきつつも、士官たちに伝えた。

「ブルージュ側もバカではありませんから、搦め手への備えはしています。主力の正面突破で決着をつけるしかありません」

すると他師団の将校が渋い顔をした。

「それでは損害が甚大になりますか……」

「そうです。そのため、まず最初に特殊部隊を投入します」

「特殊……部隊？ まさか擲弾兵の決死隊でも送り込むのですか？」
「そんな案を立てていたら参謀をクビになってしまいますよ。もちろん違います」

俺は苦笑する。

「実は……」

* * *

【潜伏者たち】

「死神クロムベルツってのは、そんなにおっかない將軍なんですかね？」

「將軍じゃなくて参謀だ。最前線に立ってサーベルを振り回す参謀だと聞いているが、傷ひとつ負ったことがない猛将だとさ」

物資が集積された倉庫で、ブルージュ軍の歩兵中隊長が副官と雑談をしていた。彼らの部隊は帝都の南門の外側に広がる市街に潜伏している。

市街の外縁部にある家屋はあらかた破壊され、その残骸がバリケードとして積み上げられていた。

さらに帝国軍の斥候や帝都内の密偵などを通さないため、全ての街路に検問所と警備兵が配置されている。

この中隊が潜伏する倉庫は、各検問所を統制する指揮所になっていた。

元々は窃盗団が盗品や密輸品の履歴を「洗う」ために保有してい

たものだが、彼らはブルージュ軍に処刑された。

「女ばかりのお飾り旅団を鍛え上げて、帝国屈指の精鋭に育て上げちまつたらしい。マルーンの軍服を見たら用心しろよ。負け知らずの女戦列歩兵どもだ」

「想像つきませんね……」

「俺もだ。だがメウルカル会戦でヒューゲンス將軍が捕虜になったのは事実だからな」

そんな会話をしているところに、中隊の兵士が慌てて駆け込んでくる。

「中隊長殿！ シュワイデル人どもが第八検問所で騒いでいます！」

「何事か!？」

「倒壊させた家屋の大家だという連中です。借り手が勝手に承諾して賠償金を持ち逃げしたので、補償してほしいと」

「大家だという証拠はあるのか？ それにそいつは借り手と大家の問題だ。俺たちの知ったこっちゃないぞ」

しかし兵士は困惑した様子で報告を続ける。

「それと塹壕掘りに雇われたという連中が、日当の不払いがあったと言っています。物凄い剣幕で怒鳴り散らしていて、もう手がつけられません」

「そんなバカな。どうせ二重取りを目論んでる連中だろう。遠慮無

く叩きのめして……いや、待て」

中隊長は帝国軍のことを思い出す。

「下手に事を荒立てて暴動でも起こされると面倒だ。しょうがない、俺が行って話を聞いてやろう」

すると副官が不安そうに口を開いた。

「中隊長殿、危険です。敵の陽動かもしれない」

「確かにその可能性はあるが……。おい、そいつらは本当に民間人なのか？」

中隊長の問いに、兵士は大きくうなずいた。

「た、たぶん。大家の方はそれっぽい権利書を振り回していますが、誰も読めなくて……」

兵の大半は満足な読み書きができない。外国語ならなおさらだ。

さすがに士官ならシュワイデル語の読み書きぐらいはできる。

「ちっ……。仕方がない、俺が確認する。お前もついてこい」

副官にそう命じると、中隊長はよっこらしよと立ち上がった。

一方その頃、少し離れた場所では大クロムベルツが岩陰で休憩していた。

率いる部下たちは傭兵時代の山岳猟兵たちだ。野外行動のスペシヤリストで、隠密と狙撃の名手たちでもある。

「しかし隊長、あんな変わった連中をよく集めましたね。役者崩れ

に偽書屋、窃盗団の生き残り……」

「おいおい、傭兵上がりの俺たちが言えた義理かよ」

「はは、そりゃ違いねえ」

老将の言葉に中年の兵士たちが笑う。

その一人がふと何かに気づいたように言った。

「あの騒いでる連中の中に混じってちよいと暴れば、いい陽動にはなりますよ？ 普段着に着替えりゃバレねえ」

しかし大クロムベルツは首を横に振る。

「よせ。作戦中は軍服を脱ぐな。そいつをやると戦場の秩序が失われる」

「そうですか？」

「兵隊と市民の区別が曖昧になると、敵は市民を殺し始める。真っ先にやられるのが、昔の俺たちみたいな身元のはつきりしない男どもだ。そういうクソみたいな真似は王侯貴族にでも任せとけ。俺たちは違う」

平民には平民の誇りがある。特に平民の中でも冷遇されがちな山間部の出身者にとっては、老将の言葉は深い説得力を持っていたようだ。

「……そうですね。すみません」

「いいさ、誰でも一度は思いつく。思いついてもやらないヤツが一番賢い。ちとと」

大クロムベルツは立ち上がった。

「雇った連中には騒動を大きくするように伝えてある。そのうち貧民街の連中が騒ぎ出すだろう」

「そううまくいきますか？」

「何でもいいから暴れたい連中なんざ、ごまんといえるからな。お前らもそうだろ？」

ニヤリと笑った老将に、一同が無言で深くうなづく。

「はは、まったくしょうがねえ連中だ。おとなしく新兵の教練でもやってみりゃ、死なずに済むってのにな」

「ときどき戦場に立たないと、戦争のやり方を忘れちまうんです」

「じゃあしつかり覚えて帰れよ。あの坊やが勝ち続ける限り、この国の戦争はどんどん減るからな」

灰色の軍服を着たクロムベルツ中尉は制帽を被り直し、一同に告げた。

「騒ぎが大きくなるのを待って、東側の塹壕の南端を襲撃する。寝ぼけたモグラどもに戦争のやり方を教導してやれ」

「はっ！」

第107話「鮮血の塹壕」 (前書き)

長らく更新が止まっており、大変お待たせしました。書籍等の諸作業が完了したため、今週より毎週更新を再開します。

第107話「鮮血の塹壕」

【第107話】

* *

「ぎゃああっ!?!」

「てっ、てて、敵襲っ! うわあっ!」

「塹壕の中に敵がいるぞ!」

「小隊長殿に報告しろ!」

ブルージュ兵たちが大混乱に陥っている中、灰色の軍服を着た老将たちは狭い塹壕の中で縦横無尽に暴れ回っていた。

「この野郎おっ!」

ブルージュ兵が着剣したマスコット銃で突きかかるが、老将はナイフの刃先で軽く受け流す。そのままスルリと相手の間合いの内側に滑り込んだ。

鋭い銃剣も一撃必殺の銃弾も、銃口より手前にいる相手に対しては無効だ。

「ひっ!?!」

ブルージュ兵が驚愕の表情を浮かべたときには、ナイフが一閃して兵士の手首を腱まで切り裂く。鉈のように分厚い刃を持つ、ブルージュの山刀だ。

返す刀で重い刃を叩き込むと、ブルージュ兵の首から鮮血が噴き出した。

「ぎゃあああつ！」

「苦しませてすまんな」

倒れたブルージュ兵はまだ痙攣していたが、老将は構わずに走る。

「相変わらず凄まじいですね、隊長」

「はは、こんなものの扱いばかり上手くなっちまって情けねえ」

部下の言葉に苦笑する老将だったが、その瞬間にバツと伏せる。

「撃て！」

小さな声で命じるよりも早く、後続の部下が老将の背中越しに発砲した。

「がつ！？」

銃を構えて待ち伏せしていた敵兵が頭を撃ち抜かれ、騎兵ピストルの餌食となる。

「ほい次」

「おう」

三番手の兵士が射手に新たな騎兵ピストルを渡す。

騎兵ピストルを手にした射手が苦笑する。

「しかし人間つてのは実にトク臭いですな」

「野の獣とは違うからな。だが獣と違って銃を持っている。油断す

るなよ」
「はい」

大クロムベルツと部下の山岳猟兵たちは、帝都ロツツメル東側の塹壕を快進撃していた。

老将はフツと笑う。

「どんな塹壕にも端がある。端の防御が薄くなっていたのは好都合だった。騒ぎも起こせたしな」

「おまけに敵が一行になってるから楽ですね、隊長」

「一人ずつ相手できるからな」

部下たちと軽口を叩きながら、その間にもブルージュ兵の屍を積み上げていく老将。

「ぐわあっ!？」

「おっと、小隊長か。手癖で殺しまつたが、まあいいか」

大クロムベルツのナイフ捌きはもはや神業の域に達しており、ブルージュの歩兵少尉をサーベルを抜く暇も与えずに屠ってしまった。

刃に絡みつく油脂を払いつつ、老将はつぶやく。

「なるほど、ユイナーの坊やが言ってた通りだ。戦列歩兵の装備は塹壕戦にや向いてねえな。サーベルでさえこのザマだ」

戦列歩兵のマスコット銃は長大で、銃剣を着ければ槍として機能する。

だが狭い塹壕の中では、槍など邪魔なだけだ。

一方、山岳猟兵たちは山刀や騎兵ピストルで武装しており、閉所での戦闘に特化した武装になっていた。

しかも奇襲となれば、油断していたブルージュ兵たちに勝ち目はない。

さらに彼らは「南門の外側で何か騒動が起きている」と聞かされているため、普段と違う騒々しさに対して鈍感になっていた。

（こりや確かに俺の得意な奇襲戦だ。しかも正規の作戦ときた。あいつ、なかなかの「親孝行」じゃないか）

思わず苦笑してしまった老将だったが、その歩みがふと止まった。

短い塹壕の終端で、最後に残った若いブルージュ兵が両手を挙げて降参していたからだ。

「おいおい、困るぜ」

ガタガタ震えている若い敵兵を見て、老将は溜息をつく。

「降伏つてのは、捕虜になれるときにやるもんだ。俺たちが捕虜を取れると思うか？ おっと、まだ撃つなよ」

最後の言葉は背後に部下に対してだ。

まだ十代のブルージュ兵は軍服と同じぐらい真っ青になりながら、北部訛りのブルージュ語で叫ぶ。

「う、撃たないで！ 降参！ 降参するから！」

「いや、だからな……」

そう言った老将だったが、もう闘志は消え失せていた。どうしても殺せない。

「しょうがねえな、行つちまえ。見た通り、お前んとこの小隊長は名誉の戦死だ。中隊長に御注進するがいいさ」

「ひゃ、ひゃい！」

丸腰のブルージュ兵が塹壕から飛び出していくのを見て、部下たちが動揺する。

「いいんですか？」

「構わんさ。それよりもあいつの行き先をよく見ておけ。近くに中隊長がいるはずだ」

老将は薄く笑う。

「この塹壕はどれも同じに見えるが、最前列は騎兵止めの浅い空堀だ。あそこに兵はいない。後列の塹壕同士も適当に掘られているように見えるが、中でつながっていて小隊単位で動かせるようになってる」

ブルージュ軍が帝都市民たちに築かせた塹壕群はかなり広大なものだったが、老将はその構造を既に見抜いていた。

「となりや、内部の構造を熟知してるヤツが欲しい。ただまあ尋問しても本当のことは言わんだろうから、こつやって利用する」

老将の言葉に部下たちが納得した様子を見せた。

「あ、なるほど。悪辣ですね！」

「さすがは隊長だ」

老将は苦笑する。

「おいおい、しっかりしろ。『送り狼』は狩りの基本だろうが。将校どもを徹底的に狩り尽くして、指揮系統を破壊するぞ。俺たちの仕事は隙を作ることだ。それだけ考える」

「はっ！」

部下たちと共に再び風のように走り出しながら、老将は心の中で溜息をつく。

(戦場で敵を殺したくねえと思っちまったか。……俺も老いたな)

* * *

その頃、俺たちはちよつと面倒なトラブルに巻き込まれていた。いつも通りだ。

「この作戦は危険すぎます。部下たちが従いそうにありません」

「さよう。あの堅固な塹壕に向かって前進するのは、兵たちに死ねと言っているようなものですぞ」

帝国軍の諸將に囲まれ、アルツァー准将が溜息をついている。美女の苛ついた表情というのは、実に怖い。

「はあ……っ」

かなり威圧感のある溜息を長々と吐いた後、准将は厳しい表情でおっさんたちを見上げた。

「それを命じるのが貴官たちの職責だ。我らの軍服は戦装束、死地に赴く者が着る服だぞ。死ねと命じて何が悪い」

四十代や五十代の厳めしい帝国貴族たちが、ちっこい准将殿に頭を下げる。なんせメディレン家の直系だからな。

だが彼らとて百戦錬磨の古狸たちだ。

こんなことを言い出した。

「若くして歴戦の将たる閣下の御言葉、恐縮の至りです。しかし現実問題として、平民の兵どもにそこまでの覚悟はありません。閣下も現場をよくご存じなら、申し上げる必要もないことですが」

さりげない、だが明確な皮肉。要するに彼らは「小娘風情が口出しするな」と言っているのだ。

もちろんそれがわからない准将ではないので、前髪を払って俺に向き直る。

「参謀、どう思う?」

あ、これは「皮肉には皮肉で返せ」と言っているな。もう視線と口調だけでわかる。わかるぞ。何かを期待している視線だ。

この人に期待されると、俺はもう逃げられない。

俺は小さく咳払いをする。

「彼らの申し上げた通りです。我が軍は寄せ集めの弱卒ばかり、指揮官も経験の浅い素人ばかりですのぞ」

平然と言つてやつたら、貴族たちの何人かがサーベルの鞘に手を置いた。おいおい抜刀するなよ。ちらりと視線を向け、牽制がてら薄く笑つてやる。

アルツァー准将は真剣な表情だ。

「確かにこの者たちの統率力に期待するのは無理か。できぬことをやらせるのも気の毒だ」

煽る煽る。いいぞ閣下、それでこそ俺の敬愛する上司だ。

俺は苦笑してみせる。

「そうですね。領民を兵役に就かせていた時代と違い、兵力の運用には専門家の知識と技術が不可欠です」

……待てよ、これ流れるにまzukないか？

案の定、ギラついた視線がいくつも俺に向けられる。

「面白い！ ではやつてもらおうか、『専門家』の参謀よ！」

「メウルカルの英雄だか何だか知らんが、どうせ陣頭に立ったこともないのだらう！」

「頭でつかちの青二才め！」

やっぱそうなります？

しまつたな……。

さすがにアルツァー准将が少し不安そうな顔をしているが、それでも態度は堂々としていた。

「などと申しているが、どうする？」

「小官は参謀ですので指揮権を持っていませんが、そんなものなくとも兵は動かせることを証明してみせましょう」

俺は笑いながら制帽を被り直すと、帝国軍諸将をちらりと見た。

「とはいえ、死ぬ覚悟もない弱卒や弱将に用はありません。小官一人で行ってきますよ」

「なに！？」

全員の声が綺麗に揃った。

「馬鹿な！」

「自棄になつて死ぬつもりか！？」

「そんなものは作戦でも何でもないぞ！」

予想通りの反応に、俺はフツツと笑う。

「小官は塹壕に向かつて全軍で前進する作戦を立案しました。作戦に変更はありませんが、誰も来ないのなら一人で行くまでです。ついでに、あの塹壕まで無傷で辿り着けることを証明してみせましょう」

そしてサーベルを抜き放つと、ボンクラどもを睨んだ。

「末代まで笑いものになりたければ、そこで震えて見ている。俺が戦争のやり方を教えてやる」

第108話「二人の突撃」

【第108話】

アルツアー准将と一緒に野戦陣地の中を歩きながら、俺は叱られていた。

「リトレイユ公を捕縛したときに言ったはずだぞ、こういうことは二度とするなと」

「あれはとっさの行動でしたが、今回は熟慮の末の決断です。何の問題もありません」

なんせ「死神の大鎌」の予知能力が何の警告もしてこないのだ。つまり俺は単身で突撃しても死なない。厳密に言えば、生き残れる可能性が残っている。

……なんで死なないのかは全くわからないが、とにかくそうらしい。

「我が軍は毎日のように援軍が加わって数万……兵士と民間の輜重が混ざるなどして正確な実数が把握できない状態になっていますが、とにかくこの大軍の士気はあてになりません」

「大軍なのにか？」

「大軍だからです。他人事なんですよ」

俺は溜息をつく。

「ブルージュによる帝国侵攻はほぼ失敗しています。帝都を解放し、

英雄として凱旋する寸前まで来ました。昇進だつて期待できます。そんなときに死にたくはないでしょう。指揮官たちも危険は冒したくないはずです。損失は他の部隊に押しつけない」

かつての俺が同じことを考えていたように、他の将校たちも同じことを考えているだろう。塹壕に突撃して大損害を被るのは、自分以外の部隊にお願いしたい。

アルツアー准将は眉をひそめたが、すぐに苦笑した。
「確かにな。その心情を責めるのは酷だ」

アルツアー准将は優しいなあ。彼女の頭を撫でなくなる衝動をぐっと堪え、俺はうなずく。

「しかし今回、敵の塹壕と城壁に向かって前進しなければなりません。これは一般的にはかなり危険な行為です。誰も先陣は切りたくないでしょう」

「だからお前がやるのか？ 呆れた参謀だ」

アルツアー准将は溜息をついたが、駆け寄ってきたミドナ下士長から軍旗を受け取った。

「お嬢様、こちらを」

「お嬢様ではないと言っているだろうが。それよりも各隊に伝達を忘れるな」

「は、はい……。どうか御武運を」

俺たちに敬礼すると、ミドナ下士長は何度も振り返りながら去っていった。なんか……。違和感を覚えるのだが。

首を傾げていると、アルツアー准将は俺に軍旗を差し出した。

「参謀中佐とはいえ、大した権限もないお前では敵も何をしに来たのかわかるまい。帝国軍旗を持つていけ」

「助かります。あ、これ槍にできますね」

ポールの先端に短い穂先がついている。確かちゃんと鋼鉄製だったはずだ。一人ぐらいは倒せるだろう。

「それは皇帝の本陣を示す旗印だぞ。血に染めるどころか、地面に着けただけで軍法会議になる」

「今思いつき引きずってませんでしたか？」

准将はちっこいからな。

まあともあれ、これを掲げていけば正規の軍事行動だと証明できる。逃亡や降伏ではないことは明らかだろう。

「では閣下、ちよつと行ってきます」

「ああ、そうだな」

敬礼した俺を尻目に、そのままステステ歩いていく准将。

「閣下、そつち敵陣ですよ？」

「わかっている。早くついてこい」

何言ってるんの？

「何言ってるんですか？」

そのまんま言葉に出ちゃったよ。

もう力づくで押さえつけて旅団の子たちに引き渡そうかと思っただが、准将は首を傾げる。

「何を怯えている？ 『私が死んだらお前も自害する』 という条件で予知すればいいだろう」

「あ、そうか。そうですね。そうでした」

大した問題じゃなかった。

俺は「この人が死んだら俺も死ぬ」と考えながら歩き続けたが、

「死神の大鎌」は何の警告も発さなかった。本当かよ、おい。

「……特に問題ないようです。びっくりですね」

「ならばよし。生きて帰れる望みが砂粒ほどもあれば十分だ。活路は己で切り拓く」

上機嫌で歩くアルツァー准将だったが、ふとおかしそうに笑う。

「お前は私と一緒に死んでくれるのだな」

「当然でしょう。閣下のいない世界など生きていても仕方ありません」

当然のことなのでそう返すと、准将は頬を染める。

「真顔でよくそんなことが言えるな？」

「本心を言うときに真顔で何が悪いんですか」

俺たちは既に本陣を出て、かなりの距離を歩いている。そろそろ敵も俺たちの珍道中に気づいている頃だ。

背後には整列はしているものの、動く気配のない戦列歩兵たち。

そして前方には帝都ロツツメルの見栄え重視の城壁と、不気味に沈黙している塹壕群。

あの塹壕では今、大クロムベルツ中尉とその部下たちが死闘を繰り広げているはずだ。

「そろそろ砲の有効射程内です。礼砲の一発も欲しいところですね」「私とお前の新たな門出にか?」「それも悪くないかな……。」

そう思った瞬間、城壁で何かが火を噴いた。

「来ます」

「うむ」

かなり離れた場所に着弾。重い砲弾が地面をえぐり、水飛沫のように土を巻き上げた。土煙が風に流れる。

まだ榴弾が開発されていないので、破片でやられる心配はない。

「下手ですね」

「ブルージユには専門の砲兵がいなかったな」

また着弾。ずいぶん手前に落ちた。向かい風なので土煙の中に突っ込んでしまう。

おいやめろ、俺の准将閣下が汚れるだろうが。

「ちゃんと当てるよな……」

「狙われている者の言うことではないな。だが面白い男だ」

准将閣下は土埃まみれでニッコニコだ。こんな楽しそうな准将は久しぶりに見た。

「しかし当たたらぬ砲撃ばかりでは、確かにつまらない。まだ銃弾が届く距離ではないが、騎兵のひとつも繰り出してきそうなものだが」
「それでしたら、ハイデン少尉の砲兵中隊が抑えます。ほら」

背後から砲声が轟いてきた。

「騎兵に大砲は当たりませんが、鼻先に撃ち込んでやれば突撃してきません。砲撃が止んだ後に地形捜兵を出すまで、騎兵は動かないでしょう」

「ずいぶんと呑気な騎兵たちだな」

「山岳地帯のブルージュには練度の高い騎兵があまりいませんので、キオニス騎兵のときに比べたら演習みたいなものです」

もちろん超一流のプロもいるだろうが、まとまった数が揃わないのでは戦争にならない。

前から後ろからドカンドカんと大砲が轟く中、俺たちは帝国軍旗を翻しながらのんびりと歩みを進める。

だんだん塹壕が近づいてきた。距離にして百メートルというところか。命中を期待できる距離ではないが、当たれば殺傷可能な距離だ。

「撃つてこないな」

「あの爺さんが塹壕で大暴れしているはずですからね。組織的な攻撃はないと思います」

ただ、それにも限界はある。塹壕内で白兵戦を繰り広げている少数の山岳獵兵たちは、いずれブルージユ軍に鎮圧されてしまっただろう。

「彼らで作ってくれた猶予を無駄にはできません。そのためなら一騎駆けだってします」

ドゴンドゴンと砲弾が地面を穿つ中、アルツァー准将は散策するかのように歩きながら俺を見る。

「とつくの昔に彼らが全滅していたらどうする？ あるいは元の雇い主だったブルージユ公に寝返っているかもしれないぞ」

「あの爺さんがそんなに簡単にやられてくれるのなら、雪山での逃避行も楽だったんですけどね」

俺は苦笑して続ける。

「あの爺さんは陽の当たる場所で戦争をして、ちゃんと勝ちたいだけなんですよ。ブルージユ公の下では非正規戦しかやらせてもらえませんでしたから、今さら戻らないでしょう」

「あの老人を信頼しているのだな」

「理屈に合わないことはしない爺さんですから」

俺はあの老人と何度も危ない橋を渡ったが、恐ろしいほどに筋を通す人だった。貧民の小僧だった俺を決して子供扱いせず、対等なパートナーとして接してくれたのだ。

だから俺はあの老人を特別に思っている。そんな大人はそれまで一人もいなかった。そんな彼を慕う古兵^{ふるつわもの}たちが大勢いるのも納得が

いく。

するとアルツァー准将はポツリと呟く。

「羨ましいな」

「何がです？」

「私もそれぐらい信頼されてみたいものだ」

「あんな爺さんより、よっぽど信頼していますが。止まって！」

俺はアルツァー准将の肩をつかんだ。「死神の大鎌」が危険を察知したからだ。

俺たちが止まった一瞬後、すぐ手前に砲弾が落ちてきた。榴弾だったら即死だっただろうが、ただの鉄球なので土くれのシャワーが降り注いだだけだ。ただし口の中が土だらけになった。

「うわっぶ」

「だんだん狙いが正確になってきているのか？」

「いえ、半数必中界に入れた感じではありませんので、ただのまぐれでしょう。しかし危ないところでした」

俺はこの人が肉塊になるところは見たくない。そんなもの見るくらいなら俺が肉塊になる。

「あなたが無事で良かった」

「う、うん……。真顔で言うな、照れるだろうが」

赤面しつつ、ごにょごにょ言っている准将。

制帽の土を払うと、我が愛しの准将閣下はにっこり笑った。
「楽しいな。お前といつまでもこうして歩いていたいものだ」
「それはそれで困るんですが」

味方がついてきてくれなかったら俺たちは確実に戦死だ。

背後を振り返ると臆したと思われかねないので、俺は後ろを振り向かずに歩き出す。

「これが終わった後も、いつまでもお側を歩きますよ」

するとアルツァー准将は大声で笑う。

「あはははははっ！ よし、言質は取ったからな！ 今日が人生最期の日でも悔いはない！ 行くぞ、ユイナー！」

「だからいつまでもお側を歩くって言ってるでしょう！」
勝手に死なないでくれよ。

やっと人生が楽しくなってきたところなんだから。

第109話「君主の病」

【第109話】

* * *

その頃、シュワイデル軍の陣地では動揺が広がっていた。

「たった二人で出ていったヤツらがいるぞ！　ありや誰だ!？」

「バカ、知らねえのか！　ありやメディレン家の准将閣下と、その腰巾着の参謀だ!」

「おい嘘だろ、総大将じゃねえか!？」

戦列歩兵たちがどよめいている。

「しかも参謀って、あの『死神参謀』のクロムベルツか!？」

「ああ、俺たちに塹壕に向かって突き進むような作戦を立てた、あのクソ野郎だ!」

そう叫んでから、彼らは一瞬黙る。

「あいつ自分で突き進んでるな」

「ああ、しかも総大将と二人で……」

「どういうことだ?」

「わからん……」

すると歴戦の下士官がヒゲを撫でながらつぶやく。

「お前らが行かないのなら俺が行く、ということなんだろうな」

「でも死にますよ!？」
「死なない自信があるんだろ。だからあんな無茶な作戦を立てたんだ」

下士官の説明に一同が呆れ顔をした。

「いや死ぬでしょ……」

「あいつがくたばれば、さすがにお偉方も作戦が無茶だってわかるだろ」

「巻き添えをくらうあのちっこいお嬢ちゃんが気の毒だな」

「貴族はすぐ死にたがるからほっとけ」

大半の兵は呆れ顔だったが、第六特務旅団の面々は少し違っていた。

「おい、うちの旅団長殿が最前線を歩いてるぞ!」

不良中年のフォルトン中尉は、第六特務旅団に配属されてから驚くことだらけだった。

しかし今回ののは今までとは比較にならない。

「何やってんだ、あの参謀は!」

「隣を歩いておられるようですが」

「んなことは見りゃわかるんだよ!」

フォルトン中尉は怒鳴ったが、美貌のレーン中尉はいつも通り平然としていた。

「一騎駆けは将の華です。きっと何かお考えがあるのでしょう」

「考えがあるうがなかるうが、あんなことやってたら死んじまうぞ。」

いいのだ」

フォルトン中尉は背後の女子戦列歩兵中隊を振り返る。

「第一中隊、突撃横隊に変更！ 旅団長閣下を死なせるな！」
しかしレーン中尉がすかさず制止する。

「待つてください、フォルトン中尉。ミドナ下土長の伝令では、第六特務旅団は持ち場を離れぬようにとの厳命です。新型銃の射程を生かせと」

「そんな悠長なこと言ってる場合かよ！？ あの嬢ちゃんと参謀が死んじまったら、俺の昇進が止まっちゃうだろうが」

ぼやくフォルトン中尉に、レーン中尉はフツと笑う。

「素直じゃないですね。どうして『あの二人が好きだから死んでほしくない』と言わないんですか？」

「恥ずかしいからだよ、言わせんなバカ！」

フォルトン中尉はサーベルを抜くと、そのまま駆け出した。

「誰も行かないのなら俺だけでも行くぞ！ 中隊は残していく！」

「おっ、いいですね！ では私もお供します！」

「勝手にしろ」

* * *

アルツァー准将とその参謀によるたった二人の突撃行にシュワイデル帝国軍は衝撃を受けたが、それ以上に混乱したのがブルーシュ

側だった。

中でも総大将であるブルージュ公は混乱の極致にあった。

「本当なのか！？ 本当に総司令官が参謀と二人で突っ込んできているのか！？ ありえん！」

ブルージュ公の怒号にも近い詰問に、報告に来た将校はうるたえる。

「事実でございます。我が軍の紋章官たちが確認しました。影武者でもない限りは……」

「影武者か……うっむ」

貴族が影武者を使うことは日常茶飯事だ。軍人の場合、軍服と制帽でいくらかでもそれらしく仕立て上げられる。

「帝国軍に潜ませている密偵からの報告は？」

「さすがにまだ連絡はございません。少なくとも、総司令官が一騎駆けをするような兆候は報告されていませんでした」

「くそっ……」

ブルージュ公はイライラした様子で前髪をいじる。彼の幼少期からの癖だ。ヒューゲンス将軍がいれば諫めただろう。

「南側の貧民街でシュワイデル人どもが騒いでいるというのも気になる……。よもや暴動でも起こす気ではあるまいな。いったい何が起きているのだ？」

将校は困惑した表情で首を振る。

「小官にはとても……」

「本職であるそなたらにわからんのであれば、どうして私にわかるというのだ」

そこに別の報告が飛び込んでくる。

「申し上げます！ 塹壕群に敵襲！ 規模は不明ですが、既に多数の死傷者が出ている模様です！」

「なにっ！？ 籠城の生命線である塹壕に、やすやすと敵の侵入を許したのか！」

「も、申し訳ございません！ 南門での騒ぎのせいか、報告が上がってくるのが遅れまして……」

しどろもどろになっている兵士をブルージュ公は睨みつける。

「ただちに塹壕内の敵を掃討せよ！ 今まさに敵の総司令官が向かって……」

そう言いかけて、ブルージュ公はハツとしたように口を閉ざす。

「アルツアー准将の参謀といえば、あの『死神クロムベルツ』だ。

同行しているのはクロムベルツ中佐で間違いないな！？」

「そのはずです」

「まさか本人が来る訳はあるまい。あの男はシュワイデル建国以来の策士だと聞く。だが影武者とはいえ、突撃させて死ねば全軍の士気は落ちるはずだ……」

ブルージュ公はぶつぶつと呟く。

「塹壕に奇襲を仕掛けるための捨て駒なのか？ いや、それなら他に良い策がありそうなものだが……」

考え込む主君に、将校と兵士が顔を見合わせる。

「公王陛下、どのように対処いたしましたでしょうか？」

「ええい待て、早計は禁物だ。私はあやつの方策になど乗らぬ」

ブルージュ公は前髪を乱暴に払う。

「南門の騒動、塹壕への奇襲、総司令官の突撃……。いったい何だ、何を企んでいる……？」

もしヒューゲンス将軍がここにいれば、「個々の事象はひとまず切り離して考え、淡々と個別に対処すべきです」と進言しただろう。ヒューゲンス将軍がいなくても、彼が逃がした愛弟子のミッセル参謀大尉がいれば、同様の進言をしたに違いない。

だがミッセル大尉はブルージュ公の不興を買い、本国に戻されている。

今のブルージュ公の周辺には従順なイエスマンしかおらず、大胆な提案や進言をする者は一人もいなくなっていた。皮肉にも彼が謀殺したシュワイデル皇帝の末期と同じ状態だ。

しかしブルージュ公はそのことに気づいていない。

「お前たちにもわからぬような不可解な事態が進行しているのであれば、こちらのありきたりな手は見透かされているとみて良いのだ

ろくな。だが私は違う」

ブルージュ公はニヤリと笑う。

「帝都内の兵を集めよ！」

「では塹壕の敵を掃討しますか!？」

「違う。それこそが敵の策に違いあるまい。我が軍の主力が城門を開き、塹壕の奪還に動き出した隙を狙っているのだ。塹壕奪還に充てるのは一個大隊で十分だ。それよりも帝都周辺に斥候を放て！報告あるまで兵は動かすな！」

この命令に将校や侍従たちが動揺する。

「お待ちください、それでは塹壕を放棄することになってしまいました！」

しかしブルージュ公は止まらない。

「敵が少数ならば塹壕の兵力だけで鎮圧できよう。不可能ならば相当数の兵が既に侵入しているのだ。でなければ総大将が参謀だけ連れて悠々と歩いてくるなどありえぬ」

ブルージュ公は早口でまくし立てる。彼は自説の正しさを検証するのではなく、自説の正しさを補強するために都合の良いストーリーを作り上げていた。

「よいか、正面の敵戦力はこけおどした。おそらく主力をどこかに潜ませているはず。それを捜し出せ！帝都の守備兵力を全方位に隙間なく配備し、警戒を怠るな！」

ヒューゲンス将軍がいれば嘆息しただろう。「全方位に隙間なく

配備」できるのなら最初からそうしている。実際には全方位に薄い防御を張り巡らせるだけだ。

一般的に、兵力は分散させるよりも集中させた方が強く、止まっているときよりも動いているときの方が強い。

シュワイデルでもブルージュでも、士官学校ではこの大原則を徹底的に叩き込まれる。

ブルージュ公の下した決断は、この大原則に真っ向から反するものだった。

しかし彼の側近たちは皆、従順なイエスマンばかりだ。主君に逆らうぐらいなら戦争に負ける方がマシだと本気で考えている。

「公王陛下の深謀遠慮、恐れ入りました。仰せのままに」
彼らが恭しく頭を垂れたことで、この戦いの行方は決定的なものになった。

* * *

第110話「2人の愚者」

【第110話】

その頃、大クロムベルツと呼ばれている老将は、塹壕の中で死闘を繰り広げている最中だった。

「おい、味方の攻撃はまだか？」

「まだのようです」

ブルージュ兵の死体を見下ろし、ふうつと溜息をつく老将。さすがに疲労の色が濃い。

「ユイナーめ、ジジイを酷使しすぎだろ。さすがにこっちの勢いが衰えてくる頃合いだ。これ以上は暴れられんぞ」

敵の混乱を衝いて塹壕の一部を占領したものの、これが一時的なものに過ぎないことは老将自身がよくわかっている。敵が態勢を立て直して攻勢に出れば、孤立した寡兵など一瞬で潰されてしまうだろう。

(まずいな……)

老将の脳裏に一瞬、過去の戦場が蘇る。

あるとき老将の部隊はブルージュの雪深い山岳地帯で孤立し、みるみるうちに数を減らしていった。

（余力のあるうちに退却するか？　だがここで攻め手を緩めりゃ、すぐに塹壕は奪還されちまう。そして同じ手は二度通用しねえ）
生き残ることを考えれば、ここは退くのが「正解」だ。過去に何度も死にかけた苦い経験が、そう告げている。

しかし老将は退かなかった。

「塹壕の北端まで押し込め！　いいか、絶対に頭は出すな！　この塹壕は敵のもんだ！　城壁側からの弾は防いじゃくれねえぞ！」
部下たちに指示を飛ばし、自らも塹壕を駆け抜けていく老将。

塹壕は帝国軍にたやすく占拠されないよう、ところどころで折れ曲がっていて迷路のようだ。そのたびに不意の遭遇戦が発生する。

「ちいつ！」

襲いかかってくる敵兵をナイフで斬り捨て、騎兵ピストルで撃ち抜く。

「三番目の塹壕を制圧しました！　損失四名！」

「四番目の塹壕を攻略中です！　敵の抵抗が頑強です！　至急増援を！」

「空堀の方から敵が回り込んできました！」

塹壕に駐留していた兵たちは態勢を立て直し、組織的な反撃に移ったようだ。こちらの損害も目に見えて増えてきた。

老将は返り血を拭いながら部下たちに命じる。

「第一分隊を下がらせる！ 第二分隊と第三分隊で攻撃を続行だ。第一分隊は再編成、他分隊の補充に回す。後詰めのお嬢ちゃんたちを手旗で合図を送れ。『作戦は順調、損害軽微。引き続き待機せよ』とな」

「はっ！」

通常の戦列歩兵を塹壕に入れるには、まだ制圧が十分ではない。ブルージュの塹壕は帝都に背を向ける形になっていて、城壁からの撃ち下ろしに対しては防御が不十分だ。

「もうちょい殺らにやならんな。行くぞ」

そう言っつて塹壕の角を曲がった瞬間、また次の敵集団に襲撃をかける。

だがその中に、見覚えのある顔があった。

「あつ……」

声を漏らしたのは老将ではない。そのブルージュ兵の方だ。

どこで会ったのか思い出すよりも早く、老将は大振りのナイフを投げた。ブルージュ兵たちが射撃姿勢を取っていたからだ。

「うぐっ！？」

敵の発砲よりも早くナイフが突き刺さるが、狙いがわずかに逸れた。疲労のせいか、それとも動揺のせいか。

顔を狙ったナイフは首に刺さり、敵兵は呻きながらも引き金を引いた。

パンという乾いた音が塹壕に響き、後に続く部下たちが叫ぶ。

「隊長!?!」

「敵だ!」

「撃たれたんですか!?!」

駆け寄ってくる山岳猟兵たちに老将は手を挙げて応えた。

「心配するな、掠り傷だ。撃て!」

塹壕内で激しい銃撃戦が起き、双方に少くない被害が出た。

だが練度と装備の差で山岳猟兵側が勝ち、待ち伏せしていたブルージユ歩兵たちを殲滅する。

「隊長、終わりました」

「だいぶやられたな……。それにしてもこいつは」

老将は脇腹を押さえつつ、瀕死の若いブルージユ兵を見下ろした。

「お前、さっき降伏したヤツだな?」

首からどくどくと血を流しながら、若いブルージユ兵は目に涙を浮かべる。

「す……。すみません……。に、逃げた懲罰で……。最……。前線に……」

「謝る必要はねえさ。まったく俺もお前もバカだな。何のために見逃してやったんだか」

老将がそう答えたときには、若いブルージユ兵は事切れていた。

「隊長、知り合いですか?」

「最初の塹壕を襲ったときの生き残りだ。命乞いしてきたんで逃が

してやったんだが、どうやら中隊長あたりに咎められたらしいな。
惨いことをしやがる」

老将は溜息をつくと、塹壕の土壁にもたれかかった。

「まあいい、それよりも塹壕の攻略だ。こちらは少数、長くは制圧
できん。南の塹壕は遺棄して北に軸足を移すぞ」

「はっ」

部下たちがうなずくが、その表情には少しばかり疲労が見えた。

「しかし味方の突撃はまだですかね？」

「はは、何言ってやがる。俺たちの仕事が終わるまで、本隊は来ね
えぞ。来て欲しけりや塹壕の北端まで突っ走れ」

老将はそう答えたものの、やはり兵たちの表情は冴えない。

ふと気づくと、遠くから大砲の音が聞こえてくる。敵味方双方が
撃ち合っているようだ。

「なんだ？ 何が起きてるんだ？」

「わからん、ちょっと塹壕の外を見てみる」

老将がそう指示した直後、部下の一人がぼつりとつぶやく。

「まさか俺たち、捨て駒にされたんじゃない……」

だが老将はそれを笑い飛ばした。

「あの坊やにそんな真似ができるのなら見てみたいもんだな！ あ
いつなら一人でも加勢に来るぞ」

すると塹壕の外を確認していた部下が報告する。

「来ました」

「ほら見てみる、ちゃんと本隊が……」

「いえ、そうではなく」

部下は望遠鏡を覗き込んだまま、ひどく困惑していた。

「参謀が一人で……いや、一人ではないです。旅団長と一緒にです。

総勢二名」

「なんだったって!?!」

老将は傷の痛みも忘れて塹壕の土壁にへばりつく。

部下から引ったくった望遠鏡で確認すると、確かにユイナーが軍旗を手にこちらに向かっていた。隣にはアルツァー准将もいる。

総司令官と参謀だけの、たった二人の突撃だ。

「なんだありゃ」

「こんな作戦ありましたっけ?」

「それより本隊は来ないのか!?!」

山岳猟兵たちが動揺しているが、老将は大笑いした。

「ははっ、はははははははは！ こりゃすげえ！ あの野郎、やりやがった!」

「どういふことです、隊長!?!」

心配そうな顔のベテラン山岳猟兵たちに、老将は笑いかける。

「見りゃわかんだろうがよ。あいつ、毎回無茶な作戦ばかり立てるから『お前が行け』みたいなことでも言われたんだろうよ。俺たちも昔、そういう作戦ばかりだっただろ？」

「ああ確かに……」

老将はハアハアと息を切らしながら、塹壕の土壁に寄りかかる。

「実際のところどうかはわからねえが、少なくともあそこには作戦を立てた張本人と総大将がいる。お前ら、こんな光景見たことあるか？」

「ないです」

首を横に振る部下たちを見て、老将はクククと笑う。

「そりゃそうだ。普通は死んじまうからな。だが見る、あいつら大砲に撃たれて笑ってやがるんだ。戦場のど真ん中でイチヤつきながら二人で歩いてきてるんだぞ。イカれてやがる。本物のバカだ」

「参謀と司令官が本物のバカじゃ困りますよ!？」

「全くだな。だがこれを見た兵隊どもはみんな、お前たちみたいに驚く。ビビッて動けない弱虫どもだって、あれを見りゃ何かは思うさ。それにな」

息を整えながら、老将は続けた。

「もつと驚くのは貴族様たちだ。なんせあのバカの片方は五王家の『薬指』、メデイレン公の叔母上なんだぜ。こんなところで見殺し

にしてみる、メディレン公が怒り狂うぞ」

今の東シュワイデルは実質的にメディレン公が掌握している。行方不明の皇帝よりも遥かに支配力があるのだ。それを理解していない貴族は一人もいないだろう。

老将は血に濡れた手で頬の汗を拭いつつ、ニヤリと笑った。

「こりゃ面白え、すぐに全軍が地響き立てて駆けつけるぞ。俺たちの仕事はあと少しだ。死なない程度に気張れ」
「はっ！」

第111話「狂乱の大突撃」

【第111話】

* * *

その頃、帝国軍の将兵たちは啞然としていた。

「信じられねえ……」

「大砲が一発も当たたらねえぞ」

彼らの視線の先には、帝国軍旗を翻す「死神参謀」の姿がある。

傍らにはメデイレン公の叔母であるアルツァー准将がいた。

二人とも砲撃の中、威风堂々の進軍だ。

「なんで大砲が当たらないんだ？」

「いやまあ、そうそう当たるもんじゃないんだが……」

ブルージュ軍には専門の砲兵がいなかったため、帝国砲兵のような精密射撃はできない。

だがそのことを多くの帝国歩兵は知らない。

望遠鏡で見ていた小隊長がつぶやく。

「なんてこつた、准将閣下も参謀殿も楽しそうに談笑しておられるぞ……まるで恋人同士の散歩だ」

「マジですか!？」

「なんでイチャついてんだよ!？」 頭おかしいんじゃないか

「同じ人間とは思えねえな……。やっぱりあいつ、死神なんだ」
下士官や兵卒たちがざわめく。

若い小隊長は望遠鏡の先を帝都の北側に向ける。

「しかし敵の騎兵ぐらいは出てきても良さそうなものだが……」

「たぶんこっちの砲兵が抑えてるんでしょうな。さっきから派手に撃ってる部隊がいます」

ベテラン下士官が指差した先には、第六特務旅団の砲兵中隊の旗が翻っていた。

「じゃあ塹壕からの敵の応射は……まだ遠いか」

士官学校を出たばかりの若い小隊長は頭を掻いた。

「わからんことだらけだ。中隊長からの指示はまだ何も無いが、どうすりゃいいんだ、これは？」

するとベテラン下士官が溜息をつく。

「指示がないなら動く訳にもいきませんが、兵たちが興奮しています。先走って飛び出していきかねません」

「なんだって？」

小隊長が見回すと、麾下の戦列歩兵たちは物騒な会話を交わしていた。

「おいどうする!？」

「どうするったって、あんなとこに飛び出していったら死んじゃうだろ……」

「死んでねえじゃねえか! 見ろ! 二人とも無傷だ!」

整列したマスケット銃の銃剣がゆらゆら揺れている。兵たちが動揺している証拠だ。

「あのまま司令官と参謀だけで行かせていいのかよ？」

「いいだろほつとけ」

「じゃあ俺たちは何のためにここにいるんだよ。これじゃあ故郷に帰っても女に自慢できねえだろ？」

ざわめく戦列歩兵たち。普段は戦いを嫌がる彼らが、明らかに異質な雰囲気を漂わせていた。

「あんなちっこいお姫さんが、死神野郎とたつた二人で突撃してるんだぜ！　これでやらなきや男じゃねえだろ！」

「ああ、まるでおとぎ話の姫と騎士だわ……」

「くそつ、見るだけかよ！　なあおい、隊長殿！　行かなくていいんですかい！？」

粗野な男たちの叫びを聞いた小隊長はうろたえる。

「まずいな、こんなの俺じゃまとめきれないぞ……」

「ここは自分たちが抑えます。小隊長殿は上層部に相談してきては？」

親子ほども年の離れた下士官にそう言われ、若い小隊長はうなずいた。

「そ、そうだな。ちょっと意見具申してくる。俺が戻るまで兵たちを抑えておいてくれ」

その頃、連隊長クラスの上級将校たちは頭を抱えていた。

「まずいことになったぞ……」

「クロムベルツめ、まさか総司令官を引つ張り出すとは」

「そのせいで兵たちが妙な興奮状態に陥っている」

「そりゃそうだ。私だって興奮しているのだから。ははは！」

白ヒゲをひねりながら肩を揺らす騎兵将校に、歩兵将校が食つてかかる。

「馬鹿を言え、これは騎士の時代の戦争ではないのだ。あの死神がこれ以上軍功を立ててみる、メディレン家が帝国の支配者になってしまうぞ」

「あんなものはしょせん苦し紛れのハツタリ、見え透いた三文芝居だ。放っておけば、そのうち第六特務旅団あたりが動き出すだろう。血を流すのはメディレン家だけでいい」

「確かに」

彼らがうなずいたとき、望遠鏡で前線を見ていた将校が声をあげる。

「いや待て、何かおかしい。第六特務旅団から二人ほど駆け出したが、あれは将校だ。片方は女に見えるが、もう片方は間違いなく男だぞ」

実際は二人とも男性なのだが、レーン中尉の性別は遠目にはわかりづらい。

「なんだって!?!」

「あそこの男性将校といえば、新任の中隊長だろう? 部下はどうした?」

「ついてこないな……」

どんな戦術教本にも載っていない事態に、将校たちは動揺する。

「ちよつと待て!?! まさか准将閣下は自分の兵すら動かす気がないのか!?!」

「中隊長が飛び出したのも、見るに見かねてということか……!?!」

「そんな馬鹿な話があるか!?! あの稀代の策士、死神クロムベルツが一緒なんだぞ!?!」

顔を見合わせて絶句する将校たち。

ひんやりとした沈黙の中、誰かがつぶやいた。

「これでもし、准将閣下が戦死でもしようものなら……」

メディレン公ハーフェンは身内に手厚く穏和なことで知られるが、それだけに身内をやられたときは容赦しない。

そしてアルツァー准将はメディレン公の年下の叔母であり、実質的には姪のような存在だ。

「ま、まずい……」

すると最初に笑っていた白ヒゲの騎兵将校が、ひらりと愛馬にまたがった。

「悪いがお先に失礼する。近衛騎兵の騎士道精神、今こそ見せつけ

てくれるわ！」

「あつ、待て！」

「我がリトレイユ一門にとつても名誉挽回の好機と見た！ 小官もこれにて失礼！」

「待てと言っている！」

抜け駆けする将校が何名か出ると、残る将校たちも腹をくくる。

「ええい、出遅れば逆に問責されるかもしれん！ もういい、わしが責任を取る！ 麾下の連隊を前に出せ！」

「論功行賞であいつらに忠義顔をされてたまるか！ 総員突撃せよ！ 先行する隊を盾にして進め！」

やけくそのように突撃ラツパが吹き鳴らされ、ほぼ独断のような形で各部隊が前進を開始した。

* * *

俺が肩の土くれを払っていたとき、なんだか背後が騒がしくなってきた。

「なんだ？」

振り返りたいが、こういうときに未練がましく後ろを振り返ると効果が薄れる。俺たちは前だけ見ていれればいい。

「参謀！」

「参謀殿！」

不良中年のフォルトン中尉と、美貌のレーン中尉の声だ。さすがにこれは振り返る必要があるな。

見れば二人とも血相を変えて、抜き身のサーベルをひっさげてる。登場だ。

しかしこいつら、待機命令を無視しやがったな。

「何をしてるんだ、お前たちは」

「そりゃこつちの台詞ですよ！ ていうか、あんたバカだろ！？ バカなんだな！？」

いつもは冷静で斜に構えているフォルトン中尉が、目を見開いて俺に詰め寄ってくる。

「おいフォルトン中尉。俺は一応上官だぞ？」

「うるせえバカ！」

命令無視の次は上官への侮辱ときたもんだ。軍法会議ものだな。

レーン中尉はというと、俺たちを見て目をキラキラさせている。

「お二人の勇姿に感銘を受けました！ 不束ながら小官もお供してよろしいでしょうか！？」

「死ぬぞ？」

「はい！」

はいじゃないんだが。うちの旅団には問題児しかいないのか。

一方、アルツァー准将は楽しそうだ。

「せっかくユイナーと二人で楽しんでたというのに、全く無粋だな！ まあいい、これで戦力が倍になった訳だ。勝利は間違いないな」

こつちも無駄にテンションが高い。お祭りじゃないんだよ？

そう言おうと思ったとき、地面が微かに揺れているような気がした。

砲撃のせいかと思ったが、なんか違うな。背後から歓声が近づいてくる。

「……なんだ？」

視線を向けた瞬間、俺は信じられないものを見てしまった。

帝国軍の数万の戦列歩兵が、誰も戦列を作っていないかった。

全員が雄叫びをあげながら走ってくる。なんだあれは。まだ銃剣突撃の距離じゃないだろう。バテちまうぞ。あいつらアホなのか？

「おいおいおい」

俺が呆れていると、アルツァー准将が笑う。

「お前の狂気が皆に伝染したな。古来の戦はこういうものだったと聞く。一人の勇者が全軍を奮い立たせるのだ」

「そんな前時代的な……」

そう言いかけたが、俺はふと思い直した。

いずれ機関銃と塹壕の時代が始まり、個々人の武勇はほぼ無意味になる。

だが今はまだ違う。今は戦列歩兵の時代だ。勇敢な兵士の活躍が戦況を変えることもある。俺がアガン軍の野戦砲に単身で斬り込んだときもそうだった。

アルツァー准将は前を向いたまま続ける。

「戦とは論理ばかりでするものではない。時には熱狂が支配する」ともある。なにせ人間の集団というものは論理的ではないからな」

「仰る通りで……」

さすがに帝国屈指の政治家の一門だ。

「平民の兵士にとっては、さぞかし胸躍る光景だったのだろうな。

そして貴族の将校たちにとって、私が最前線にいる状況は脅迫に近い。ユイナー、お前も悪い男だな」

「閣下が勝手についてきたんでしょ」

なんでみんな、寄ってたかって俺を悪者にしたがるんだ。

俺が抗議してもアルツァー准将は知らん顔だ。

「さあ前を向け、ユイナー。威風堂々と前に進もう。彼らが私たちに追いついたとき、最高の興奮を演出してやらねばな」

「悪いのはどっちなんですかね」

俺はぼやきつつ、フォルトン中尉たちに告げる。

「行くぞ。お前たちは俺の後ろに隠れてろ」

「参謀殿！」

うるさい、その感動したような目を今すぐやめろ。そいつのじやないんだよ。

クソ、これじゃ参謀失格だ。こんなムチャクチャな戦い方、もう二度とやらないからな。

第112話「覚悟のとき」

【第112話】

* * *

戦列歩兵は本来、戦列を組んで堂々と前進する。装備はそれなりに重いため、全力疾走するのは必殺の銃剣突撃のときぐらいだ。だが今、数万の帝国戦列歩兵たちはがむしゃらに走っていた。

「急げ！ 急げ！」

「てめえ、どこの連隊だ！？ 邪魔だ、どけ！」

「うるせえぞリトレイユ野郎！ この逆徒の手先がよ！」

「帝都を敵に取られた間抜けが偉そうな顔すんじゃねえ！ 落ちぶれ帝室野郎は引っ込んでろ！」

友軍を押しよけるようにして歩兵たちが突き進む。

彼らの視線の先にあるのは、帝国軍旗を翻す名参謀「死神クロムベルツ」と、その上官である麗しきアルツァー准将だけだ。

恐ろしい塹壕も帝都の城壁も、兵たちの視界には存在していない。

「ぎゃっ！？」

砲撃は続いており、当然のように被害は出る。塹壕からは散発的な銃撃もあり、流れ弾が帝国軍の誰かを射貫くこともあった。

だが倒れた者を飛び越えて兵たちは走り続ける。

「クソつたれ、流れ弾が腕を掠めやがった！　ちくしょう、いてえ！」
「ちゃんと避けねえからだ！　見ろよ、あのちっこい准将閣下を！
一発も当たってねえぞ！」
「いや、なんで一発も当たらねえんだ!?」
「そりゃ死神がついてるからだろ！」

それで全員が納得し、彼らはしやにむに走り続ける。
「お前ら、覚悟を決めろ！」
「おうよ！　もうすぐ准将たちを追い越すぞ！　俺が一番乗りだ！」
「いいや俺だね！　故郷のガキどもに自慢してやる！」
「バカ言え、俺だ！　勲章は戴きだぜ！」

もう何のために走っているのか当人たちも理解していないが、そこには間違いなく熱狂と興奮があった。

「絶対に俺が一番だ！」
「いや待て、もう誰か塹壕に辿り着いてるぞ!?　あれを見ろ！」
誰かが指差した先には、確かに第六特務旅団の軍旗が翻っていた。

* * *

その少し前。

帝都東側に張り巡らされた塹壕の中で、老将たちの部隊は孤軍奮闘を続けていた。

限られた兵を効果的に動かし、迷路のような塹壕内に兵力を浸透させていく。

「北側の塹壕に迂回攻撃をかける！ 制圧できなくても構わんから
圧をかけとけ！ これ以上、味方を撃たせるな！」

「隊長、南側から敵が！ 押し返されてます！」

「貧民街に伏せてた兵力だな。問題ない、いったん退いて再度仕掛
ける！」

コートに血に染めた老将は仁王立ちになり、麾下の各分隊を手足
のように動かす。

「後詰めのお嬢ちゃんたちとの連絡線が断たれちまうが、そっちは
もう気にしないでいい！ 味方はすぐそこまで来てるからな！ そ
れよりもうちの旅団旗を掲げとけ！」

ひっきりなしに続く銃声と砲火の中、歴戦の山岳猟兵たちが驚く。
「居場所がモロバレになっちまいますよ！？ 城壁から撃たれます
！」

「敵に撃たれるなら上出来だ。味方に撃たれるのは御免だろ？ 見
ろ、俺なんかも撃たれてるぞ」

そう笑った後、老将は土壁にもたれかかる。

「いたた、さすがにちよいと……。この歳になると疲れやすくてい
かな」

「いや、撃たれてんですから休んでてください」

「バカ言え、こんな場所で休めるかよ。早いとこ片付けて帝都で祝
杯だ。おら働け！」

部下たちの背中をどやしつけ、彼らが走り出したのを見送ってから、老将は背後を振り返った。

塹壕の向こうには、怒濤の突撃を敢行している帝国軍数万の姿がある。

「はは、こりやすげえ。良くない突撃の見本市だ」

帝国兵たちは雄叫びをあげ、銃剣つきのマスケット銃を構えて突っ込んできている。

誰も彼もが一番槍を争うかのように走り続けているが、塹壕到着までに息が上がってしまっただろう。

だが皆、そんなことはお構いなしのようにだった。

「そして、こっちも良くない迎撃の見本市ときた」

城壁を守るブルージュ軍はもはや塹壕のことなど構っている余裕はないらしく、大砲の照準を帝国軍主力に向けて盛んに放っている。だが砲撃の勢いが鈍く、敵の攻勢を押し返すだけの圧力が不足している。

「砲身が過熱して撃てなくなってやがるな。何も考えずに撃ちまくるからだ、アホめ」

何が起きているか瞬時に見抜いた老将は、やれやれと溜息をついた。

「どうにかなりそうだな。しかし全く、何もかもが愉快だぜ……うつく」

痛みに顔をしかめつつ、老将は立ち上がる。

「おい、軍旗をよこせ。そいつは俺が掲げてやる」

「危険です、狙い撃ちにされますよ」

「この傷じゃどのみち戦えねえ。もう指揮を執る必要もねえしな。

ほれ、よこせ。ばつちりキメてやるからよ」

渋る部下から、老将は第六特務旅団の軍旗を受け取る。

「誰が何と言おうが、最初にここに辿り着いたのは俺たちだ。ここで誰よりも勇敢に戦ったのも俺たちだ。それだけは絶対に変えさせねえ」

傷の痛みを無視すると、老将は立ち上がった。

背後には迫り来る味方の大軍。

前方にはそびえ立つ城壁と無数の敵兵。

狂乱の戦場の中心で、老将は第六特務旅団の軍旗を掲げる。

「クソどもめ、撃ちたきや撃ってみろ！ だがな、俺たちは勝ったぞ！」

無数の銃声が轟く中、旅団旗は戦場に大きく翻った。

* * *

ブルージュ公は蒼白になっていた。

「前方の敵主力が突撃してきただ！？ それで、応戦はどうなっている！？」

「はっ！ こちらは正面戦力が薄く、敵の大軍を止めることは到底不可能です！ 塹壕奪還のために派遣した大隊が城門まで退却しま

した！ とても防ぎきれません！」

ブルージュ公は前髪を神経質そうにいじりながら、宮殿の窓を眺める。

「あの大軍はまるでやる気が見えなかったが、見かけ倒しの烏合の衆ではなかったのか……。それで、側面や後方に敵はいなかったか？」

「今に至るまで発見されておりません」

「読み違えたか……」

ブルージュ公は帝国の正面戦力を陽動と判断し、側面や背後からの敵襲を警戒して兵力を全方位に配した。正面戦力が薄くなっているのはそのためだ。

だが実際には、数万の帝国兵が怒濤の突撃を敢行してきた。

「皆、すまぬ。完全な誤算であった。将として面目が立たぬ。だが今はそれを悔いている場合ではない。すぐに兵力を東側の城壁に再集結させる。塹壕付近で停滞している敵に弾を浴びせてやるのだ」

「はっ！」

伝令が走り去るの見送った後、ブルージュ公は毅然とした態度で続ける。

「よいか、城壁に迫った敵は歩兵ばかりだ。この城壁は騎士の時代のものだが、それだけに攻城梯子や破城槌には強い。敵の砲兵隊が前進してこぬうちは、我らの優位は揺るがぬのだ。仮に敵の砲撃が始まったとしても、まだ決着はつかぬ」

一般的には、敵の砲撃が届くようになれば籠城戦は絶望的だ。

側近や将校たちが顔を見合わせた後、おずおずと質問してきた。

「それはなぜですか？」

「この宮殿には皇帝の妻子が軟禁されておるのを忘れたか？ 砲撃で傷つけようものなら、メイレン公の掲げる帝国復興の大義が根底から揺らぐであろう」

実際にはクロムベルツが心配していたのは帝都の一般市民への被害だったのだが、ブルージュ公には想像すらできないものだった。最上位の貴族にとって、平民など家畜や畑と大差はないからだ。

だがいずれにせよ、「帝国側は自由に砲撃できない」というブルージュ公の読みは当たっている。

「敵の攻勢はいずれ限界を迎える。どれほど士気が高くとも、傷や疲労が重なれば動けなくなるからな。今は時間を稼……」

そのとき、送り出したはずの伝令が戻ってきた。

「たっ、大変です！ 市民が蜂起しました！ 大通りに出られませんか！」

「なんだと!？」

ブルージュ公の顔色が公国旗を思わせるほどに蒼くなった。

すかさず別の伝令が駆け込んでくる。こちらは制帽を失っており、額から血を流していた。

「帝都各所にて、散発的に暴動が発生している模様でございます！
巡回中の兵たちが襲われ、銃を奪われました！ 衛兵の詰所から
も火の手が！ 小官もここに来る途中、民衆から投石を受けました
！」

伝令たちの様子を見れば、報告が正しいのは明らかだ。ブルージ
ユ公は蒼白のまま拳を震わせる。

支配者にとって、民衆の蜂起は災害と同じだ。

しかもここは敵地であり、鎮圧が難しい。籠城戦の最中となれば
なおさらだ。

「おのれ、平民風情がつけあがりおつて！ これもクロムベルツと
やらの策か！ 小癩な真似を！」

「それはわかりませんが……それで、その、どういたしましょうか
？」

「もはや容赦は無用だ！ 暴徒どもを片っ端から撃ち殺せ！」

そう怒鳴るブルージユ公だったが、側近の将校たちが首を横に振
った。

「治安維持用の小規模な部隊では、蜂起した多数の市民相手には無
力です。暴徒の数がどれほどかはわかりませんが、一回の斉射で鎮
圧できねば殺されるのは兵たちの方です」

再装填に時間のかかるマスケット銃では、暴徒化した市民相手に
は銃剣しか頼れるものがない。だがそれも数の暴力の前では無意味
だ。

将校の一人がさらに言う。

「それよりも公王陛下、市街で暴動が発生しているのならば、各方面の城壁に配した兵力を呼び戻すことが困難です。入り組んだ市街を移動中に襲撃されれば、いかな精強無比のブルージュ兵といえどもひとたまりもありません」

行軍中の戦列歩兵はほとんど戦えないし、帝都は建造物が入り組んでいる。大通りを行軍中に左右の建物の上階から攻撃されれば、身動きが取れなくなってしまふ。

「まずいな……。このままでは内外に敵を抱えたまま、兵力を細切れにされてしまふ」

「陛下、どうなさいます!？」

うるたえるばかりの側近たち。

彼らは皆、余計なことを言わずにブルージュ公の機嫌を取ることので出した者たちだ。自分の意見など言うはずもない。

ブルージュ公は苦り切った顔をしていたが、やがて肩を落とした。「まだ城門は突破されておらぬ。だからこそ、私にできることがまだひとつだけある」

「それはいつたい……?」

側近たちは顔を見合わせた。

第113話「帝都奪還」

【第113話】

* * *

俺たちが塹壕に近づくと、散発的な射撃が始まった。まだ制圧できていない北側の塹壕からだ。南側からの射撃はないので、あつちは爺さんが抑えてくれてるんだらう。

しかしさすがにこれは危ない。ヒュンヒュンと銃弾の風切り音が聞こえてくる。

「さっ、参謀殿、撃たれてますぜ!? 味方も駆けつけたし、もうここらで止まった方が」

歴戦のフォルトン中尉がとても妥当な意見を具申したが、俺は振り向きもせずに却下する。

「いいや、塹壕まで突っ走るぞ! 立ち止まるな!」

「本気ですか参謀殿!? いや正気ですか!」

フォルトン中尉が悲鳴をあげるが、俺は走り出しながら答える。

「この銃弾は北側の塹壕から斜めに発射されたものだ! 俺たちが走れば、敵は予測射撃が必要になる!」

「理屈じゃそうかもしれないがね!? ちょっと、待ってくださいよ!」

フォルトン中尉の声はすぐ背後から聞こえてくる。ちゃんと走ってついてきているようだ。

レーン中尉の楽しそうな声も聞こえる。

「なんだかんだで敵に肉迫できていますね！　こうしてお供できるのはレーン家の名誉です！」

「いや待て、はしゃぐんじゃないよ!？」

フォルトン中尉とレーン中尉のやり取りを背後に聞きつつ、俺はアルツアー准将と共に駆ける。

小柄な准将は走るのがあまり速くない。もともと運動方面はあまり得意ではないようだ。

「閣下、転ばぬようお願いします」

「わたし、私をつ、幼子扱いっ、するっ、なっ！　それっ、よりっ

……速っ……」

毅然とした声が切れ切れに聞こえてくるけど、俺たちは別に全力疾走はしていない。体格差と日頃の鍛え方の違いだろう。

「みんな、閣下の息が上がっておられる。歩くか？」

俺が問うと、フォルトン中尉が悲鳴をあげた。

「敵にバンバン撃たれてるんですがね!？」

「ですが、歩くのも豪胆でいいかもしれません」

「お前の価値観はそれしかねえのかよ!？」

君たちの漫才を聞くために質問した訳じゃないんだよ。

「しょうがない、もうすぐ塹壕ですから飛び込んで休憩しましょう」

背後からフォルトン中尉がまた叫ぶ。

「敵の塹壕ですよ！？ あんた、准将閣下を白兵戦に巻き込む気が！？」

こいつのツッコミは的確だなあ。

感心しつつ、俺は前方を指差す。

「あれを見る、味方がいる」

塹壕からによつきり突き出しているのは、第六特務旅団の軍旗だ。俺もさつき気がついた。

あれは例の爺さんに持たせた軍旗だ。味方が塹壕まで来たとき、同士討ちを防ぐために必要になるからな。

俺の言葉にフォルトン中尉が即答する。

「味方とは限りませんぜ。敵に奪われた可能性も」

「わかってるが、そのときは敵を殺して軍旗を取り戻す必要があるからな。どっちにしても行くしかないぞ」

フォルトン中尉は呆れたように呻く。

「あなたの心臓は鉄でできてるのかよ……」

だってもう他に選択肢がないじゃないか。俺は「死神の大鎌」で予知できるからいいけど、お前らを死なせる訳にはいかないんだ。生き残れる可能性が少しでも高い方に賭けるしかない。

「第六特務旅団、突撃！」

「つつても四人しかいませんぜ、参謀殿お！」

「はいっ、突撃します！ これぞ騎士の本懐！」

「おつ、お前につ、指揮権はつ、ないつ、だろっ！」

将校四人のグダグダな突撃だが、このときすぐ背後にまで味方の大軍が迫っていた。

「いたぞ！ アルツアー閣下だ！」

「クロムベルツ中佐もいるぞ！」

「あれが死神参謀かよ！」

「やっと追いついたぜ！」

「俺たちもお供します！」

うるせえ。

雪崩のように押し寄せる味方に背中を押されるようにして、俺たち四人はそのまま敵の塹壕へと飛び込む。

飛び込んだ先はもちろん、第六特務旅団の軍旗が翻っていた場所だ。

塹壕にはブルージユ兵らしき連中はいない。灰色のコートを着た帝国兵、つまり大クロムベルツ爺さんの部下たちばかりだ。元々は傭兵で、さらにその前はブルージユ軍や帝国軍の山岳猟兵だ。

彼らは俺たちを見て、驚きと安堵の入り交じった表情を浮かべる。
「参謀殿！」

「安心しろ、味方を連れて来たぞ。ただし同士討ちにならないよう、貴官たちは俺の近くにいろ。ところで……」

あの爺さんはどこだ？

そう言おうとしたとき、俺はコートに血に染めた老人を発見した。軍旗の棹に寄りかかり、かろうじて立っている。

「おい、爺さん！ 撃たれたのか！？」

老人は俺を見て、ふっと笑った。

「心配すんな、ちよいとよろめいただけさ。はは、もう歳だな……」
「いやどう見ても腹を撃たれてるだろ！？ もう戦わなくていい！
すぐに軍医のところまで後送してやる！」

するとアルツァー准将が息を整えつつ、こう言った。

「今は敵も味方も混乱していて危険だ。帝都に入れば帝室侍医団がいる。フォービエン外科部長を覚えているか？」

「ああ、リトレイユ公の検死のときに会いましたね。彼の腕ならこの程度の傷は朝飯前でしょう」

俺たちは老人に聞こえるように、わざと大きな声で会話する。

治療の見込みがあるとわかれば負傷兵は安心し、より長く持ち堪えられるようになる。

決して絶望させてはいけない。絶望した負傷兵は簡単に死んでしまう。戦場で何度も見た。

「さて、どうしたものか……」

塹壕に入ってしまったので周囲の戦闘が把握しづらくなっているが、数万の帝国兵が塹壕群になだれ込んでいるので戦闘というよりも一方的な殺戮だろう。守備側のブルージュ兵はそんなにいるはず

がない。塹壕の規模を考えると、せいぜい一個連隊ぐらいだ。

「てっ、敵だらけだ！ シュワイデル兵しかいねえ！」

「おい、ブルージュ野郎だ！ 逃がすな、ブツ殺せ！」

「ひっ、ひいいいっ!？」

聞こえてくる怒号だけでも、まあだいたい想像がつく。塹壕に入っている歩兵は一列に延びきっていて、どこにも逃げ場がない。大軍になだれ込まれたら押し潰されて終わりだ。塹壕は制圧できそうだな。

ただ、城門はまた別だ。こいつは銃剣を何万突きつけてもどうにもならない。

周囲の様子を伺っていたフォルトン中尉がぼやく。

「帝都に入るのは大賛成なんですがね、それができなくてこんな戦争になってるんですよ」

俺は苦笑する。

「その通りなんだが、そっちはたぶん大丈夫だ。なんせ……」

そのとき周囲から大歓声が起きた。

「なんだ？」

「俺が見ます」

塹壕から用心深く顔を突き出したフォルトン中尉が、振り返って叫ぶ。

「敵が降伏したらいいです！ 城壁に降伏旗が掲げられました！ あっ、城門が開きます！」

なんで？ 早くない？

するとレーン中尉も興奮で頬を染めながら言った。

「やりましたね、参謀殿！ こんなにあっさり勝つなんて、やっぱり凄いですよ！」

……いや、だからなんで？ まだ砲兵隊を呼んですらいなのに。

冷静に考えれば、この局面での降伏は理解できなくもない。城門が破られてからでは降伏しても遅いからだ。戦後の交渉を考えると、遅すぎる降伏は好ましくない。

すでに帝国軍が塹壕までなだれ込んでいる以上、どのみち籠城戦は長く続けられない。だから降伏する。正しい判断だ。

実のところ、俺が参謀として考えたのもそこではある。

城壁を破壊して市街戦に持ち込めば、市民にも相当な被害が出るし、宮殿に軟禁されているであろう皇帝の家族にも危険が及ぶ。

だから「全軍で塹壕突破して城壁まで詰め寄る」という作戦を立てた。

ブルージュ公の軍事顧問であるヒューゲンス将軍は、ブルージュ公の性格についてこう教えてくれたからだ。

目に見える形で敗色濃厚であり、兵を退く落としどころさえあれば、必ず兵を退くだろう。

とはいえ、なんか早い気がする。俺の把握してないところで何か起きてるとしか思えない。

だが開かれた城門からブルージユの紋章官たちが丸腰で現れたのを見て、俺は考えるのをやめた。

「終わったか。ヒューゲンス将軍の言葉は本当だったな」
となると、彼から託された手紙も使い道がありそうだ。

そんなことをぼんやり考えていると、俺は小さな掌に背中を叩かれた。

「いてっ……いや、痛くないな。なんですか、准将閣下」
「なんですかじゃないだろう。仕事だ」

アルツァー准将は俺を見上げて呆れた顔をしていた。

「味方の兵はまだ闘争心をたぎらせている。敵の紋章官を攻撃しないよう、統制する必要がある。それと敵方との交渉もな。忙しいのはここからだぞ」

そう早口で言った後、准将はフツと優しい笑みを浮かべた。

「それと、お前の『おじいちゃん』を早く治療してやりたい。帝室侍医団に連絡を取る。お前もついてこい」

「はい、閣下！」

やっぱり俺、この人が大好きだ。

第114話「英雄クロムベルツの凱旋」

【第114話】

勝ち戦というのは、だいたいがあつけない終わり方をする。

というか、こちらにまだ十分な余力があるから敵が降伏なり逃亡なりする訳で、勝った側は「えっ、もう終わり？」という印象が強い。後詰めの部隊なんかは一発も撃たずに勝利することもざらにある。

士官学校では「攻勢終了点」みたいな小難しい言葉を使って理屈っぽく説明するのだが、今回は攻勢終了点に達する前に勝ったので、教科書通りの無難な勝ち方だ。

ただ疑問はある。

「砲兵隊を前進させてから勝つつもりだったんだが……」

まだ砲兵を呼んですらいなのに、あっさり勝ってしまった。おかげで損害も非常に少なかったようだ。まだ報告が届いてないのでわからないけど。

フォルトン中尉が呆れている。

「勝ってたんだから何でもいいでしょう。あんな無茶苦茶な突撃、もう二度とやりませんぜ。そんなんだから死神だの何だの言われるんですよ」

ついてこいなんて一度も言っていないだろ。

ただ、あっさり勝てた理由は帝都に入った後でなんとなくわかった。

投降兵たちの一部が負傷していたからだ。俺たちは帝都の中では戦っていないので、俺たち以外の誰かと戦ったことになる。となれば市民だろう。

アルツアー准将がぼつりとつぶやく。

「どうやら市民の暴動があったようだな。ブレッツヘン卿が先走ったか」

「そのようですね」

帝都攻略を有利に進める小細工はいくつも用意していたが、そのひとつが帝都の民衆を使って暴動を起こすことだ。

ただ市民を直接戦わせることには倫理的な問題があり、暴動の規模によっては收拾がつかなくなる危険性もあったので、戦況が膠着したときの切り札だ。

俺はアルツアー准将にそつと伝える。

「暴動を起こせなんて一度も伝えていないんですが、密書でのやり取りだとやはりうまくいかないようです」

「酢漬けの樽から出てきた密書は半分滲んでいたしな。伝書鳩も届いたかどうかわからん」

ただ、この暴動がクリティカルヒットしたのは間違いないだろう。

為政者にとって民衆の蜂起ほど怖いものはないからだ。それも籠城戦の最中に起きたら、降伏という選択肢すら消えてしまう可能性があった。

なんせ民衆は軍人みたいに規則に縛られていないから、王侯貴族を捕虜にするときの国際的な慣習なんか守らない。ルール無用だ。

「結果的に内外から攻撃されて、ブルージュ公は降伏を決意したのでしょう。英断です。それに引き換え、俺ときたら味方の説得にも失敗して准将閣下を危険に晒してしまい……」

とてもじゃないが、良い参謀とは言えない。

俺は溜息をつく。

「自分が軍人としていかに無能であるかを痛感しました。今回の攻城戦は過去最大の失敗です」

「歴史的な大勝利を収めておいて、過去最大の失敗とはな。お前らしい」

アルツアー准将は困ったような顔をして笑うと、俺の尻をポンポンと叩いた。なんかスキンシップ多くない？ あとお尻触るのやめてください。

「お前の懺悔は後ほどゆっくり聞く。それよりも今は混乱を收拾する方が先だ」

そう言って彼女はコート裾を翻して歩き出す。

「総員聞け！ 私は第六特務旅団長、アルツアー・メディレン准将である！」

* * *

そこから先のアルツアー准将の活躍は凄かった。血の気の多い味方兵士を威圧し、階級と身分とカリスマ性と気迫で黙らせる。

なんとか戦場に秩序を取り戻せたのは、ひとえにアルツアー准将の指導力だ。俺では絶対にこうはいかないだろう。なんか俺、あんまり役に立ってない気がするな……。

そして俺は今、帝都ロツツメルの大通りを凱旋している。

騎兵小隊のサテユラ下士補たちが軍馬を連れてきてくれたので、アルツアー准将だけは騎乗しての凱旋だ。総司令官が徒歩じゃ格好がつかないからな。

俺は爺さんの付き添いのため、歩くことにした。参謀なんて裏方だから徒歩で十分だ。

負傷した大クロムベルツ中尉、つまり俺の元相棒の爺さんは担架での凱旋となった。

爺さんは頑強に「自分で歩く」と言い張ったが、旅団の女の子たちと爺さんの部下たちが無理矢理担架に詰め込んだ。そして今は屈強な山岳猟兵たちに運ばれている。

第六特務旅団の女子戦列歩兵が行進する中、大通りの左右の建物からは歓呼の聲が降り注いでいるようだ。

「見るよおい、本当に女の子だけの軍隊だ！」

「あれがメディレン家のお姫様か！ ちっこいけど美人だな！」

「ねえ、『死神クロムベルツ』ってのはどの人なの!？」
「わかんねえよ! あっ、あの歩いてる将校じゃないか? ほら、あの若い方!」
「いい男ねえ。ちょっと声かけてみようかしら」
単に珍しがられてるだけだった。

担架の上で爺さんが苦笑いする。

「やっぱりお前、ただもんじゃなかったな。俺も兵隊生活は長かったが、帝都に凱旋できるなんて思ってもみなかったぜ」
「だろ?」

「はは、当たり前みたいな顔しやがって……。ほら聞けよ、どいつもこいつもお前を讚えてやがる」
そうかな?

改めて耳を澄ませてみる。

「クロムベルツ! 英雄クロムベルツ!」

「ありがとうクロムベルツ!」

「お前すげえぜ!」

意外と褒められてた。言われないと気づかないもんだな。

でも俺は笑いながら首を横に振った。

「あれじゃどつちかわからないだろ? あんたも今は『クロムベルツ』なんだぜ、大クロムベルツの爺ちゃん」

「ん?……ああ、そうだったな」

出血のせいかだいたい顔色が悪くなっていたが、老人はニヤリと笑

う。

「ならこの歓声の半分は、俺のもんってことでいいな？」

「いいよ。そうじゃなきゃおかしいだろ。誰よりも勇敢に戦ったのはあんだだ」

すると俺のやり取りを聞いていたのか、アルツァー准将が馬上で声を張り上げる。

「帝都の人々よ！ 私の部下たちを褒めてやってくれ！ この男が参謀のクロムベルツ中佐だ！ そして一番乗りを果たして塹壕を突破した英雄、大クロムベルツ中尉に惜しみない賞賛を！ この手負いの老将だ！」

たちまち歓呼の声がそれに応える。

「爺さんが一番乗りかよ、すげえな！」

「ありがとうな！ あんたのおかげだ！」

「どっちもクロムベルツなのかよ。やっぱり死神クロムベルツの縁者か？」

俺は沿道の群衆に向かって叫ぶ。

「そうだ！ 俺の自慢の爺ちゃんだ！ 名誉の負傷を負った爺ちゃんを讃えてやってくれ！」

「おお、クロムベルツ家に栄光あれ！」

「あんだたちすげえぜ！」

「帝都の解放者だ！」

大通りが震えるほどの大歓声が響き渡った。

大クロムベルツと命名された爺さんは呆気にとられていたが、身を起こして手を振りながら笑う。

「ふ、ふははは……。これ、俺がいまわの際に見てる夢じゃねえだろうな？」

案外そうかもな。「死神」も隣にいるし。

「安心しろよ、爺さん。これは現実だ。あんたは誰よりも勇敢に戦って、本物の英雄になっただよ」

「この俺がか……」

言いたいことはわかる。あんたは皇帝殺しに関わったし、その前から犯罪者同然だった。

でも俺が士官学校に入る歳まで生き延びられたのは、この老人が俺の保護者になってくれたからだ。しかも俺を対等の相棒として扱ってくれた。

だから俺は言う。

「このクソみたいな世界で、あんただけはガキの俺を一人前の人間として扱ってくれた。どんなときでも筋を通した。そんな尊敬すべき人間が英雄になれないのなら、世の中の方が間違ってる。違うか？」

老人は驚いたように俺をまじまじと見つめた後で、フツと笑った。「生意気なこと言いやがる……まったくお前ってヤツはよ……。だが、最高にいい気分だぜ……」

そして老人が目を閉じると、その体から急に力が抜けた。

「おい、爺さん！？　しっかりしろ！　勝手に満足して死ぬな！　起きろ！」

嵐のような大歓声の中、俺は目を閉じた老人に叫び続ける。大丈
夫だ、まだ息はしている。

こんなところで死なせてたまるか。俺は死神じゃないんだ。

第115話「勝利は薬指に」(前書き)

コミカライズ版「マスケットガールズ!」1巻が、コミックUPA
SH!(主婦と生活社)様から発売中です。文章で軽く流している
場面もしっかり描写されていますので、ぜひ御一読ください。

第115話「勝利は薬指に」

【第115話】

* * *

容態が急変した爺さんを帝室侍医団のフォービエン外科部長に預け、俺は後ろ髪を引かれる思いで軍務に戻る。ブルージュ公が降伏した以上、和平の交渉が急務だ。

すでに帝都には続々と帝国兵が入ってきて、ブルージュの投降兵を武装解除していた。彼らの処遇を含め、今後のことを決めないと
な。

旅団のことはフォルトン中尉たちに任せ、俺と准将は宮殿に向かう。

他師団の將軍たちも来ていたが、政治的な思惑もあり、ブルージュ公との会見には同席させない。メディレン家直属の書記官や紋章官だけを連れていくことにする。

いろいろ準備をしていたらすっかり遅くなってしまった。

宮殿の一室で待っていたブルージュ公は、なんだか神経質そうなおっさんだった。

さつきからずっと前髪をいじくりまわしているが、元々そういう癖なのか、ストレスが強すぎて手が止められないのか、どっちなんだろうな。

彼はアルツァー准将と貴族同士の正式な挨拶を交わした後、すぐに俺の方を見てきた。

「……貴公がクロムベルツ参謀か」

「はい。陸軍第六特務旅団のユイナー・クロムベルツ参謀中佐であります」

ビシツと敬礼。相手は敗者とはいえ、一国の元首だ。丁重に扱わねばならない。

ブルージュ公は俺を上から下まで何度も見返し、猜疑心の塊みたいな顔をして質問してくる。

「貴公がヒューゲンスを打ち負かし、今また私を打ち負かした名将ということだな」

「小官はただの参謀です。それよりもアルツァー閣下とお話しください」

ちょっと意地悪なようだけど、「どうやって勝ったのか？」と聞かれたら困るので准将に振る。いろいろやらかしたが、結果的にうまくいっただけだ。

同じことをもう一度やれと言われてもできないから、できれば戦史には残さないでほしい。……無理だろうな。

ブルージュ公はしばらく俺をじっと見ていたが、アルツァー准将に目を移す。

その途端、彼の顔色が変わった。

「その指輪は……!?!?」

左手の薬指をさりげなく、そしてわざとらしく撫でながら、アルツァー准将が薄く笑う。

「どうかなさったかな、ブルージュ公？」

彼女の薬指には、俺が爺さんからもらった皇帝の指輪が嵌まっていた。これが何を意味するか、ブルージュ公だけは知っているはずだ。

お前が皇帝を殺したことは知っているぞ。

そう言っているのに等しい。

皇帝は表向きには失踪したことになるし、これからも永遠に失踪したままにしておく。そうすれば次の皇帝がなかなか即位できず、帝室シュワイデル家はその間に力を失うだろう。

だが実際には皇帝は死亡しており、その黒幕はブルージュ公だ。俺たちはそれを知っている。

もちろん、アルツァー准将は何も言わない。

メディレン家の象徴である薬指に皇帝の権威を輝かせながら、アルツァー准将は微笑む。

「貴公が名誉ある降伏を申し出られたことに、メディレン家を代表して敬意を表する。法と秩序、理性と慈悲に基づいて交渉を進めたい。よろしいか？」

表面的には穏やかで丁寧な言葉だが、実質的には「お前が皇帝を殺したことも全部知ってるからな、交渉でナメた態度取ったら覚悟

しとけよ？」と脅迫している。

ブルージュ公は前髪を激しくいじり、髪が何本か抜けた。引つ張りすぎだ。

蒼白のブルージュ公は、微かに唇を震わせながらも応じる。

「も……もちろんだ。しゅっ、肅々と交渉を進めよう。将兵に対しては特に、その……寛大な処遇を求めろ」
ちやんと言えて偉い。

* * *

その後の交渉はアルツァー准将が見事な手並みを見せ、圧倒的優位を崩さずに和平の枠組みをまとめていった。

第一条、ブルージュ遠征軍は締結日より起算して十二日以内に東シユワイデル同盟および西シユワイデル同盟の領外に完全退去すること。

第二条、ブルージュ公ならびに帝都内のブルージュ将兵は帝国軍の正式な捕虜として処遇し、第一条の履行が確認された時点で両国国境にて解放するものとする。ただちに国外退去すること。

第三条、今回の侵攻によって受けた被害を補填するため、ブルージュ公国は東シユワイデル同盟と西シユワイデル同盟に対して賠償金を支払う。

第四条、国境線は侵攻直前の状態に戻すこととし、帝国側はブルージュ領の割譲を要求しない。また両国は締結日より五年間の不可

侵条約を結ぶものとする。

……などなどだ。

勝者として得られる権益を最大限確保しているが、第四条などではブルージュ公にも配慮をにじませている。不可侵条約はブルージュ公にとっても国内向けの「成果」にできる。

彼が失脚すると後継者に条約を破棄されかねないので、あまり無茶な要求はできないのだ。

我が敬愛する准将閣下は軍人であると同時に政治家でもあるので、こういった交渉は俺なんかより遥かに上手い。王侯貴族の心理や国際情勢などにも通じているからだ。

やることがないのでぼんやりしていた俺だが、和平の条件が整ったところでブルージュ公が俺に向き直った。

「帝都を内外から同時に攻めるといふ貴公の策、そしてそれに自分と主君の命を懸けるといふ覚悟のほど、しかと見せてもらった。貴公こそ稀代の名参謀、そして誇り高き騎士だ」

なんか急に褒められて怖いんですが。

俺は知っているぞ、こういふのは無茶振りの予兆だ。

そして案の定、彼はろくでもないことを言い出した。

「だがいつたい、どこからが貴公たちの策だったのだ。貴公たちが裏の事情にまで通じていることはわかる。まさかゴドー要塞攻略以前から、全てお見通しだったのではあるまいな？」

待ってくれ、その頃の俺は一介の少尉だぞ。国家レベルの陰謀なんか知ってるはずがない。

とは思うのだが、こういうときにバカ正直に本当のことを言うようには訓練されていない。職業軍人は敵を欺くのも仕事のうちだ。

言われてみれば、確かにブルージュ公にとっては俺が黒幕に思えるかもしれない。皇帝暗殺を依頼した相手は俺の「おじいちゃん」で、彼は全ての依頼を終えた後で帝国軍に帰った。

俺がああ爺さんをブルージュ側に潜入させていたと思うのも無理はない。

ではまあ、そう誤解しておいてもらおうか。この野心家の御仁にとっても、良い薬になるはずだ。

俺はにっこり微笑む。

「過大評価ですよ。小官はただ、アルツァー閣下に忠誠を誓う一介の平民将校に過ぎません」

嘘は一切ついていないが、絶対に誰も信じないであろう返事。

そして嘘こそついていないものの、俺はブルージュ公を欺いた。

帝国軍人は皇帝に忠誠を誓うものだが、俺はアルツァー准将に忠誠を誓っているのだ。

俺は今、皇帝には忠誠を誓っていないことを明言した。出身である第五師団のリトレイユ公に対しても誓っていない。

それは暗に「あんたを利用してリトレイユ公と皇帝を排除した」と認めている……と言えなくもないだろう。

予想通り、ブルージュ公の顔色が目に見えて悪くなる。また前髪
いじってるぞ、この人。

「やはり……そういうことなのか……」

「それよりもこの場をお借りして、殿下に申し上げたいことがござ
います」

ブルージュ公の家臣たちは、主君をシュワイデル皇帝と同格とみ
なして「グランデュエ」と呼んでいる。日本語で言えば「陛下」だ。
一方、俺たちシュワイデル人はブルージュ公を五王家の一員とし
て扱い、ワンランク下の「パルエチユール」と呼ぶことになってい
る。

感覚的には「陛下」と「殿下」の中間、やや陛下寄りぐらいだが、
とりあえず「殿下」ということにしておこう。異世界はややこしい。
そのややこしいブルージュ公殿下が俺を見つめる。

「なんだ？ 貴公は勝者だ、申すが良い」

俺は一礼し、どうしても言いたかったことを伝える。

「今後は殿下の不興を恐れずに直言する者を重用なさいませ。そう
いう者が一人でもお側にいれば、小官の凡庸な小細工など通用しな
かったでしょう」

「ミッシェルのことか。やはり貴公、何もかもお見通しのようだな」

大きく溜息をつき、ブルージュ公は手を振る。

「敵に諭されるようでは私の立場がない。だが今回の件で学ばぬよ

うでは、君主としてあまりにも無能というものだ。貴公の言葉、肝に銘じておくとしよう。ミッセルも参謀に復帰させる」

「ありがとうございます。ヒューゲンス將軍も安堵なさるでしょう」「過剰なお節介焼きにして帝国史上最高の参謀よ、我らの捲土重来を待つがよい。次は貴公を決して侮らぬぞ」

不敵な言葉だが、あなたは賠償金の支払い義務があるんだから末永く元気でいてもらわないと困る。

俺は笑った。

「はい。そのときは『あんな助言などしなければ良かった』と後悔いたしますので、小官の泣き顔でも想像なさってください」

「そんなつもりもない癖によく言う。さすがに死神と呼ばれるだけのことはある」

ブルージュ公は書記官の差し出した速記録に目を通し、了承のサインを走らせる。この速記録を基にして、これから正式な調印が行われるだろう。

最後にブルージュ公はアルツァー准将に視線を向けた。

「この男がこちらにいれば、今頃は帝国全土を我が物とできていたのだがな」

買いかぶりも大概にしるよ。

しかしアルツァー准将は当然のような顔をしてうなずく。

「その通りだ。だがそうはならなかったのだ。残念だったな」

「ふん。……そうだな、残念だ」

心底忌々しそうな顔を見ると、ブルージュ公は部屋を出て行った。

* * *

とりあえず話し合うべきことは話し合ったので、後は面倒臭い終戦処理が始まるだけだ。そちらは事務方に任せることにする。

殺人的な多忙さだというのに、准将閣下は御機嫌だ。

「御苦労だったな、ユイナー。良い交渉だった。お前は外交官になっても食っていけそうだな」

「御冗談を。小官のような愚鈍な正直者には務まりません。それに小官は善良すぎます」

「そういうことをスラスラ言えるから悪党なのだ、お前は」
なんでふくれっ面なんだ。

拗ねた顔のアルツァー准将は薬指の指輪を撫でる。

「ところでお前、この指輪を私の手に嵌めるときにやけに動揺していなかったか？」

「そうでしょうか」

いや、思いつきり動揺したよ。だって左手の薬指だぞ？

准将が例によって「なあユイナー、ちょっと嵌めてくれ」などと言うから渋々承諾したものの、心臓が口から飛び出しそうだった。

そして俺の下手な嘘などお見通しのアルツァー准将は、ニヤニヤ笑いを浮かべながら俺ににじり寄ってくる。

「お前、何か隠しているな？」

「いえ何も」

「白状しろ。左手の薬指に指輪を嵌めるといふのは、お前の前世ではどんな意味があったのだ？」

「言えるか。」

しかし准将が俺の胸に顔を埋めそうな勢いで詰めてきたので、俺は壁際まで後退する羽目になった。まずい、この准将閣下は本気だ。

「教える」

「教えません」

「ほう、やはり何か隠しているな？」

ああん、俺のバカ。これじゃ外交官どころか参謀だって務まらないぞ。

「あー……その、ですね」

俺はしどろもどろになりつつ、諦めて白状してしまうことにした。やっぱりこの人に隠し事なんてできない。

「左手の薬指に指輪を嵌めるのは、婚姻の誓いをするときです」

その瞬間、アルツァー准将の顔がみるみるうちに真っ赤になった。

「じつ!？」

「婚姻です」

「こんいん!？」

「はい」

なんだこの会話。

アルツァー准将は俺の顔と自分の薬指を交互に見ていたが、そのうち頬を押さえてうすぐまってしまった。

「婚姻……婚姻か……」

「あの、閣下？」

「お前は黙っている」

教えると言ったり黙れと言ったり、忙しい人だな。

そして准将は急に立ち上がると、晴れ晴れとした顔で笑った。

「勝ったぞ」

「え？ ええ……。勝ちましたね」

「ああ、私の勝ちだ」

「まあ、はい」

どうも戦争の話ではない気がするのだが……。

第116話「別れの「ロービー」」

【第116話】

* * *

帝都ロツツメルには立派な帝立病院がある。貴族専用の高等医療機関だ。といつても普通の屋敷と大差はないので、見た目の印象は前世の保養所に近い。

中世の絵画が飾られた廊下を歩いていると、フォービエン外科部長が立っていた。

俺は反射的に敬礼し、フォービエン外科部長は宮廷作法で一礼する。互いの立場の違いを実感する瞬間だ。

「フォービエン外科部長、回診のお帰りですか？」

「ええ、大クロムベルツ中尉殿の診察をしたところです。快復は順調ですよ。御説明したくしてお待ちしております」

多忙な身だろうに、わざわざ悪いな。……ただ、少し引つかかるものは感じる。

「中尉殿の銃創はかなり深いものでしたが、銃弾は斜めに擦るように抜けていきましたので内臓に損傷はありませんでした。おそらく、撃たれる瞬間に半身になって避けたのでしょう。人間業とは思えませんが」

あの爺さん、白兵戦の達人だからな。

「感染症の方はどうですか？」

「さすがにお詳しいですね。戦場慣れしておいでだ。御心配なく、今のところ良好です。手指を強い酒で清め、器具を清潔な水で煮沸すると、統計的に傷の治りが良いのです」

さすがなのはフォービエン外科部長の方だ。この時代にそんな先進的な治療をしてくれる医師は珍しい。

俺は安堵して微笑む。

「傷口を煮え油で焼く軍医たちとは大違いですね。瀉血もなさらないと聞きました」

「おかげで伝統医療を好む患者たちからは不評ですが……。それにしても、なぜそれらに効果が無いとご存じなのですか？」

おっと、適当にごまかしておくか。

「統計ですよ。我々軍人も統計を重視します」

「ああ、なるほど」

帝国最高峰の外科医は軽くうなずいた後、俺をじっと見る。

「実はクロムベルツ中佐にお聞きしたいことがあります」

「やはりそうでしたか」

わざわざ時間を取ってくれたのも、それが目的だろう。皇帝のことを聞かれるんだろうな。

そう思っていたのだが、全く違うことを聞かれた。

「以前、リトレイユ公ミンシアナ様の検死を担当いたしました。その件で少し」

「初めてお会いしたときですね」

もしかして、皇帝のことはどうでもいいのかな……？

「私は外科医ですので、内科の処方薬は専門外です。ただ、内科の長である侍医長も知らない薬が存在するという噂を聞きました。ご存じありませんか？」

もちろん俺はご存じなのでドキドキしてしまう。

リトレイユ公は服毒自殺を強要されたが、そのときに用いられたのが帝室に伝わる毒酒の小瓶らしい。何の痕跡も残さず、苦痛もなく死ぬるといふ薬だ。

その秘薬は存在自体が極秘とされていて、詳細は俺も知らない。製法も原料も、誰が作っているのかも国家機密だ。

ただ、アルツァー准将が皇帝から渡され、それでリトレイユ公を自害させたというのは知っている。

皇帝は死んだが帝室はまだ存続しているし、機密指定は解除されていない。フォービエンには悪いが、口外はできない。

そして俺は誘導尋問を仕掛けられていることにも気づいた。

フォービエンは薬品の話と検死の話と混同することで、暗に「リ

トレイユ公が毒殺されたのではないか」と俺に問いかけている。だが直接問いかけている訳ではないので、迂闊な返答をすると尻尾をつかまれてしまう。

だから俺は首を傾げてみせる。

「おや、検死の話ではなかったのですか？」

「……ええ、検死の話です」

誘導尋問が空振りに終わったので、フォービエンは悔しそうだ。

頭の良さなら彼の方が上だろうが、外科医と参謀将校で尋問対決をしても勝負は見えている。

だがフォービエンは執拗に食い下がってくる。

「内科の検死報告書を何度も読みましたが、不自然な点が何も見当たらないのが逆に不自然でした。しかし私には具体的な指摘ができません。忸怩たる思いです」

いや、俺は凄いと思う。さすがは帝室直属の名医だ。まともな検査機器もない時代に、毒殺の兆候を読み取った。

しかもこの人は近世の外科医だから、内科の教育はほとんど受けていない。ただ者じゃないな。

俺は少し探りを入れる。

「侍医長殿はどのように？」

「はい。亡くなった方のことを思い悩むよりも、生きている人を救いなさい、と」

内科の長でもある侍医長も、たぶん同じ結論に達しているだろう。だが老獪な彼は何も言わないことにしたらしい。貴人の秘密を守るのも侍医の務めだ。

フォービエンは小さく溜息をつく。

「私はミンシアナ様とは面識がありませんでしたし、政治は専門外です。揉め事を起こす気はありません。秘密は必ず守ります。私はただ、真実を知りたいだけなのです」

彼の言葉に嘘はなさそうだ。

だがそれでも俺は何も言えない。医師の倫理と軍人の倫理は違う。俺も参謀将校である以上、機密の取り扱いには職業的な倫理がある。私情で漏らすことはできなかった。

ふと俺は、自分が陰謀の黒幕側になっていることに気づく。

真相を突き止めようとする正義の医師の前に立ちはだから、死神のような参謀将校。今の俺は完全に悪役だな。

俺は罪悪感を覚え、顔を隠すために制帽を深く被る。

「恩人のあなたに迷惑はかけられません。だからこの話は終わりにしましょう」

「それはつまり……」

そう。俺の言葉は陰謀の存在を暗に認めている。本当に遠回りで

はあるが、これが俺にできる精一杯の返答だ。
絶句している外科医に、俺はこう続ける。

「死者を蘇らせることは死神でもできません。しかし生者を救うことはできます。現にあなたは小官の『祖父』を救ってくださった。命を奪うだけの小官には、あなたが眩しい」

「クロムベルツ殿……」

俺は敬礼すると、彼の横を通り過ぎて廊下を歩き出した。
この仕事、やっぱり辛いな……。

* * *

特別病室に飾られた軍馬のブロンズ像を撫で回しながら、負傷兵がぼやいている。

「あのままくたばってりゃ、綺麗に幕引きできたのによ」
「俺もそう思っけど、じゃあなんで生きてるんだよ」

大クロムベルツの爺さんは、俺の予想を遥かに超えてしぶとかった。執刀医のフォービエン外科部長も「こんなに頑丈な患者ばかりなら楽なのですが」と言っていたらしい。
とはいえ、かなり危なかったのも事実ではある。

「帝室侍医団の誇る最高の名医が治療してくれなかったら、あなたの希望通りになってたんだがな」

「皇帝の御典医様かよ、すげえのに治してもらったんだな」

フォービエン外科部長、この老人が皇帝殺しの下手人だと知つたらどんな顔するんだろうな。もちろん絶対に秘密だけど。あの人は隠し事だらけで申し訳ない。

「銃弾が内臓や太い血管を傷つけてなかったのも幸運だった。輸血はできないからな」

「難しい話すんなって。そういうのも士官学校で習つたのか？」

「そんなところだ」

嘘です。この世界ではおそらく、輸血なんかまだ誰も研究すらされていないだろう。今の技術で輸血なんかしたら百%死ぬからな。

老人はサイドテーブルの生け花に触れつつ、しみじみと呟く。

「いろいろと時代は変わったんだな。もう俺みたいなのが戦場を駆け回る時代じゃねえってことだ。一度は見逃してやった敵の兵隊に撃たれるしな」

「恩知らずもいたもんだ」

「そう言つてやるな。たぶん敵前逃亡扱いにされて、懲罰任務で戻されたんだろうよ。ブルージュ軍は昔からその辺が厳しくてな。懲罰部隊に入れられてメチャクチャな任務をやらされるのさ」

「そういやゼツフェル砦の防衛のときも、無謀な威力偵察をしてきた歩兵たちがいたな。」

老人は苦笑してみせたが、ふと真顔になる。

「俺は命乞いしてきた敵兵を殺せなかった。そのせいで俺も死にかけたし、結局そいつは殺すことになっちまった。情けのかけ損だよ。兵隊が敵を殺せなくなっちゃおしまいさ」

長年の付き合いで、俺は老人の口調からある種の決意のようなものを感ずる。これは愚痴や冗談じゃない。本気だ。

俺は真顔で問いかける。

「フォービエン外科部長は、あんたがとっさに避けて致命傷を回避したんだろうと言った。だが本当のところは、避け損ねたんだろ？」
「はは、その通りだ。昔の俺なら当たるようなへまはしねえ。銃なんてもんは、銃口の前に立たなきゃ当たらんのだからな」

マスケット銃は長大なので、銃口がどちらを向いているかはシルエツトでわかりやすい。銃弾は避けられないが、銃口を避けることはできるそうだ。本当か？

俺にはとても真似できない。予知能力を使うのが精一杯だ。

「そこまで鈍ったのなら引退だな。俺とコーヒー屋でも始めてみるか？」

「なんでお前までついてくる話になってんだよ。お前の立場を考えると、もう元の生活にや戻れねえだろ。覚悟を決めて、あのお姫様と添い遂げやがれ」

まあそれはそうなんだけど。

「それはそうと、お前のコーヒーがまた飲みたいな。あれは癖になる味だ」

「じゃあ淹れてやるよ」

俺はこの爺さんに無性に何かしてやりたい気分になっていたの、いそいそと立ち上がる。

湯を沸かすのにも手間と金がかかる世界だが、ここは貴族用の特別病室だ。暖炉も薪も水もある。

俺は持参した荷物から豆の袋とミルを取り出し、準備を始める。

「なあユイナー、お前そんなもんいつも持ち歩いてるのか？」

「准将閣下があのコーヒー好きだからな。俺の淹れたコーヒーが一番合うそうだ」

「怪我人に惚気話かよ」

「そういう訳じゃないんだが」

暖炉の直火で豆を焙煎し、ミルで挽く。愛用の焙煎機とミルだから、音や手応えで頃合いがわかる。

「後は抽出してと……。まあ、これぐらいか」

「お前、コーヒー屋になりたいってのは本気みたいだな。手つきが素人じゃねえ」

「まだ本職の足下にも及ばないよ。さあ飲んでくれ。准将閣下のコーヒーだ。砂糖は控えめにしてある」

准将は砂糖を飽和させるからな。あれはやり過ぎだ。

ふわりと漂う甘いモカの香り。二度目の人生で授かったこの体は、嗅覚だけは前世に劣る。そのせいか、感じる香りはやはり弱い。これだけはどうにもならないのが残念だ。

腹に包帯を巻かれた爺さんは、ゆっくりと上体を起こすとマグカップを受け取った。

そして老人はコーヒーを飲み、流れる湯気をじっと見つめる。

「ああ、この味だ。こいつはクソ苦いが、妙に美味しいな。なるほど、貴族様が高値で買い求める訳だ」

「高いのには理由があるんだ。遠方から船で運んでくるからな」

「遙か南方の灼熱の大陸、だっけか」

お、興味が出てきた？

「そうだよ。中でもこのモカコーヒーは、エチピアルという王国でしか入手できないらしい」

「そんな場所があるのか。世界は広いつてことだな」

老人は何か考えていた様子だったが、やがてコーヒーを飲み干す。ありがとよ。おかげで頭が冴えてきた」

この口調からすると、カフェインの覚醒作用の話ではなさそうだな。わずかな口調の変化から、俺は彼が何かを決意したのだと悟った。

一応、釘を刺しておくか。

「だからって勝手に退院するなよ？」

「ははは、この傷で動けると思うか？」

あ、これ勝手に退院する気だ。困った爺さんだな。新設する陸軍歩兵学校の初代校長に推挙しようと思ってたのに。

だが相棒の決断は尊重するのが俺たちコンビの流儀だ。

「ずっと元気でいてくれよ、おじいちゃん」

「……お前もな、ユイナー」

次に俺が見舞いに訪れたとき、彼の姿は病室になかった。ベッドには俺宛の手紙が一通だけ残されていたという。意外と流麗な筆致で、たった一行。

ちよいとコーヒーを飲みに出かけてくる。

どこまで出かけたのやら。

第116話「別れのコーヒー」(後書き)

作中に誤りがありましたので、御指摘を受けて修正しました(4月14日18時)。ありがとうございます。

第117話「孤独な転生者」

【第117話】

* * *

【虜囚公】

「祖国への帰還が、このようなものになるとはな」

次第に遠ざかるゴドー要塞を横目に眺めながら、馬上のブルージユ公はつぶやいた。

「悲願成就まであと一歩だったというのに、これでは帝国を割って独立した先祖に申し訳が立たぬ」

前後には武装解除されたブルージュ兵たちが力なく行進している。虜囚生活は快適だったようだが、それだけに国力の差を見せつけられたらしい。

隣で馬を進める軍事顧問のヒューゲンス将軍が苦笑した。

「そうお嘆きになるものでもありません。手痛い敗北こそが名将を鍛えるのです。良い経験をなさいましたな。もちろん、私も良い経験をしました」

「そなたが申すのは、おおかたクロムベルツ参謀のことであろう？」

老将はヒゲを撫でつつ、満足げに笑う。

「御慧眼、誠に恐縮の至りです。私などもはや伸びしろのない老いぼれですが、ミッセルたち後進をあのように鍛え上げたいですな」
「ふむ。であれば、帝都を掌中に収めるといふ当家の宿願も叶うかもしれないな」

ヒューゲンス將軍はふと、不思議そうに問う。

「なぜそこまでして、あの地を求められるのです？ 軍事的にはそこまで優先度の高い地域ではありませんが」

「あそこはファイルニア教転生派にとって隠された聖地なのだ。だがこれはあまり他言できぬ類のものでな。その日が来るまで明かすことはできぬ」

「なるほど。では機密として扱いますよう」
馬上で恭しく一礼したヒューゲンス將軍は、表情を和らげて話題を変えてきた。

「帰国後の舵取りは難しくなりますな」

「ああ。遠征に反対しておった有力諸侯たちの顔が目に浮かぶわ。それみたことか、とな」

「私も反対しておりましたことはお忘れなく」

「わかっておる。今回の遠征は私の早計だった。不可侵条約は五年だが、おそらく五年では再起できまい」

ブルージユ公は溜息をつく。

「軍を時代に合ったものに洗練させ、再建せねばならぬ。それだけで何年かかるかわからんが、その前に賠償金の支払いがある。しば

「らくは身動きが取れん」

「国庫の窮状を考えますと、諸侯の協力を取り付ける必要があります。今度こそ貴族院の設立要求も呑まねばなりませんまい」

さらに溜息をつくブルージュ公。

「議会とかいうヤツか。王も窮屈な時代になったものだ」

「少数の戦士で争っていた時代と違い、戦列歩兵は国力そのもののぶつけ合いです。諸侯にそっぽを向かれては軍が成り立ちません」

「わかっておる。長く厳しい道のりになるが、今後も私を支えて…いや、鍛えてくれ。次は勝ちたい」

「承知いたしました」

この後、当代ブルージュ公は「虜囚公」と呼ばれるようになり、議事に苦慮しながら国内政治の調整に奔走することになる。

* * *

元氣すぎるおじいちゃんがコーヒーを求めて旅立ってしまった後も、俺の仕事はひたすら忙しかった。戦争するのは本当に前後の事務処理が面倒臭い。

俺は自分自身のために、断固として戦争に反対するぞ。戦争やめる。

ブルージュ公国の方も同じ気分になったのか、和平交渉は割とすんなり進んだ。

ただし賠償金の方はだいぶ渋られ、相互不可侵条約が有効な五年間での分割払いになった。踏み倒されないように気をつけよう。

都からようやくブルージュ兵がいなくなったところで、俺はアルツァー准将に呼び出された。公私両面で毎日長い時間を過ごしている間柄だから、わざわざ呼び出すのは珍しい。

呼び出されたのは帝都ロツツメルにある宮殿。……の地下納骨堂だ。

「ここは帝室関係者以外立ち入り禁止だと聞いていましたが」

「警備の名目で許可を取った。ブルージュ兵が荒らしている可能性があるからな」

警備と言われても、ここにいるのは俺と准将だけだぞ。デスクワークの将校二人で何ができるんだ。

「名目ということは、本命は別にある訳ですね」

「そうだ。二人きりということからも、用向きはわかるかな？」

「皇帝失踪の件か、リトレイユ公ミンシアナの件か、そうでなければ俺の転生のことでしょうか」

クソデカ溜息を吐かれた。

「お前なんか嫌いだ」

「質問に真面目に答えただけでしょう。俺と閣下だけの秘密といえ
ば、その三つです」

「お前がそういふ男だからこそ、こうして肩を並べられるのだと思
うと癪だな」

なんでぷりぷり怒ってるの。でも嬉しそうでもあるな。乙女の心
はわからん。

准将はランタンを掲げながら、カビ臭い地下通路をすたすた歩いていく。

「お前の推察通り、今回はその三つ目の秘密に関するものだ。だから護衛もつけられない。何かあったときは警護を頼む」

「承知しました」

俺には「死神の大鎌」の予知能力があるからな。

納骨堂に続く扉の前に来て、アルツァー准将は俺を振り返った。

「シユワイデル帝国はフィルニア教安息派を国教としている。転生など異端者の戯言、インチキ預言者を作り出す口実に過ぎない。それが国教団の見解だ」

「確かに過去の偉人の転生だと言い張られると、権力者にとっては厄介ですからね。帝国最盛期には皇帝の監視が行き届かないほどに国土が広大でしたから、地方で勢力を築かれると困ります」

准将が苦笑する。

「転生者であるお前がそれを言うのは、なんだか面白いな」

「俺が本当に転生者だという証拠はありませんよ。もしかすると閣下は騙されておいでなのかもしれません」

俺はからかってみたが、准将は全く動じない。

「だったら最期まで騙し通してくれ。それなら許そう」

「そういうものですか」

「よくわからん心理だ。
いや、でも騙されたままの方が幸せなことってあるよな。」

「どのみち、お前が否定しても私はお前を転生者だとしか思えない。年齢と物腰に開きがありすぎるし、経験も知識も転生者でなければ理屈が合わないからな」

「恐れ入ります」

前世分も入れると、もう結構な歳なんだよなあ。

だからこそ、まだ二十代半ばのアルツァー准将に対して素直な気持ちになれずにいる。

「何か余計なことを考えている顔だな？」

「いえ、それよりも話を続けてください」

勘のいい上司は困るよ。

准将はドアの鍵をガチャリと回しながら、こう言った。

「実はシュワイデル帝国の初代皇帝は転生者だったのではないか、という説がある」

「安息派の皇帝が転生者というのは、ちょっとまずいのでは？」

「そうだ。だからこの方面の研究は禁じられ、関連する書物は全て焼き払われた。だが一部の写本はメディレン家が密かに所蔵している。帝室と対立する日が来れば、良い武器になるからな」

五指とか言いつつ指同士で喧嘩してるから怖い。

「お前が転生者だと知って以来、その辺りが気になってな。皇帝が持っていた『覇者の指輪』に刻まれた文章を、メディレン家お抱え

の歴史家や文筆家たちに調べさせていた」

有力貴族つてのはいろんな分野の専門家たちを抱え込んでいるから、やるうと思えば大抵のことはできるんだよな。

俺は記憶を探って、文章を思い出す。

「刻まれていた言葉は、確か『我は至高なるフィルニアの加護と信託によりて、五指を握る王の中の王なり』でしたな」

「表向きはそうだ。だがそれぞれの単語には、裏の意味がある」

アルツァー准将はドアを開けながら、やや早口で続けた。

「『至高』という言葉は、当時のシュワイデル語では『至高の玉座』という用法が圧倒的に多かった。玉座は宮殿にあるが、神の名を持ち出してから宗教的な要素がある。それと当時の鎮魂歌に頻出する『加護』という単語から、宮殿の地下納骨堂を導き出した訳だが……ん？」

「いえ、閣下が古典や伝承に通じておられることはよくわかりました。俺は日本の古典しか知りませんから」

俺は元の世界の文学は多少知っているが、こっちの文学は全く読んでいない。

この辺りに教養の違いがあつて、俺は貴族の仲間には入れてもらえないのだ。

溜息をついたが、とにかく准将が言いたいことはわかった。

「宮殿の地下納骨堂に転生者の秘密が隠されているかもしれない、という訳ですね」

「そうだ。本来は立ち入れない場所だから、今のうちに確かめておきたい」

納骨堂の中はもちろん真っ暗闇なので、俺たちのランタンの明かりだけが頼りだ。

入ってすぐに、俺は予備のランタンに火を灯した。

「予備をここに置いておきましょう」

「そうだな。宮殿の中で友軍に救助されるような間抜けにはなりたくない」

笑ってみせるアルツァー准将だったが、歩幅がいつもより狭い。

「閣下、亡者を怖がる必要はありませんよ。閣下の隣にいるのは『死神』ですから」

「怖がってなどはないが、まあ……今ので元気にはなった……」

いつも通りの歩幅に戻り、すたすた歩き出す准将。いやいや、暗いんだからもっと慎重に歩こうよ。困った人だな。

俺が追いついたときには、准将は最奥部の石棺にたどり着いていた。

「初代皇帝の棺だ。碑文もある。……なんだこれは、ずいぶんと妙な文字だが」

古今の文学に精通しているアルツァー准将でも読めないととなると、専門の学者が必要になる。

だがもしかして……という期待があり、俺は碑文を覗き込んだ。

「あっ!?!」

そのもしかしてだった。

「閣下……。俺はこの文章が読めます」

「やはりそうか。ニホン語だな？」

「はい。元の世界の共通語である、英語も並記されています」
石碑には和文と英文でこう記されていた。

この碑文を読めた君を、私の同胞として歓迎しよう。もっと早くに会いたかった。

俺はその言葉をシュワイデル語に翻訳し、アルツァー准将に伝える。

「……そうか。孤独だったのだな、彼は」

アルツァー准将は静かにつぶやき、軽く祈りを捧げてから俺に向き直る。

「だがこれで謎は解けた。初代皇帝はお前と同じ、ニホン人だったという訳だ。時代はわかるか？」

「現代語、それも英文並記で書かれていますので、俺と近い時代の人ですね」

帝国の歴史を考えると計算が合わないが、世界を飛び越えてくるのだから時間だって飛び越えるのだろう。

だがこれで、帝国の数学や工学が百年ほど時代を先取りしているのもわかった。初代皇帝のおかげで初期ブーストがかかってたんだ

な。

准将が言う。

「この場所に立ち入れるのは帝室関係者だけだ。子孫や重臣に転生者が現れることを期待していたのだろう。その上で、他の者には気づかれないように配慮した」

「安息派の国の帝室関係者が転生者じゃ困りますからね」

誰にも言えない秘密を抱えた皇帝の、苦肉の策ってところか。

「俺のいた世界には他にもいろいろな国がありましたし、時代も様々です。しかし現代日本からの転生者が二人いるということは……」
「ああ。他にも大勢いるのか、お前の国には特別な何かがあるのか。いずれにせよ、気になる話だ」

もし現代の軍人や技術者が他国に転生していたら、俺の一般知識では太刀打ちできない。

うーん、考えることが増えてしまったな。

「他に手がかりはないか？」

「ありません。石棺を暴けばわかるかもしれませんが……」

「二人で動かすのはちょっと大変そうだな。何よりお前の同胞に非礼はできない。最後の手段にしておこう」

准将はそう言って笑う。

「だがこれで、お前の重要度はますます増した訳だ。生涯、私の側

を離れるなよ」

「元からそのつもりです」

「そっ……そうか！ 良い心がけだ」

声がうわずつてる。

アルツァー准将はコホンと咳払いをして、いつもの威厳を取り戻した。

「では帰るか。このことはまだ二人だけの秘密にしておこう。いずれハーフェン殿にも報告したいが、お前の立場が抜き差しならなくなる」

まだ幼いリトレイク公セリンと、帝室初代当主と同じ日本人転生者の俺。

メデイレン公ハーフェンが五王家のうち三つまでを掌握できる切り札を持つことになる。

彼は温厚な好人物だが、野心家であることに変わりはない。少し危ういな。

「確かにそうですね」

俺は合掌し、前世のやり方で初代皇帝の冥福を祈った。

帝室の没落は避けられないが、あんたの子孫を悪いようにはしない。

ここから先は俺に任せてくれ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<https://ncode.syosetu.com/n2112gv/>

マスケットガールズ！ ～転生参謀と戦列乙女たち～

2023年4月25日11時24分発行